恒川遺跡群

——一般国道153号座光寺バイパス
用地内埋蔵文化財発掘調査報告——

遺構編

1986

飯田市教育委員会

恒川遺跡群

——一般国道153号座光寺バイパス
用地内埋蔵文化財発掘調査報告——

遺構編

1986

飯田市教育委員会

恒川遺跡群全景

序

飯田市座光寺の国道153号は、飯田市街地への北の玄関口のひとつとして朝夕の交通渋滞は並のものではなく、10数年来の懸案としてバイパスの建設があり、建設省・県教育委員会などと協議を進める中で、建設工事着工以前に、発掘調査し、記録保存を計ることとなり飯田市教育委員会により実施した。

飯田市座光寺地区は古くから古墳をはじめとする文化遺産、特に埋蔵文化財包蔵地の密集する地域として注目されていた。中でも、先覚の業績により、古代における伊那郡の中心〈伊那郡衙址〉の推定地のひとつに比定され、定額寺院の寂光寺存在の有無も合わせ、周辺の埋文調査にかける期待は一通りのものではなかった。

今回の調査は国道バイパス建設にかかわるもので、遺跡群の重要性にかんがみれば、学術的・総合的に目的を持った調査をなされるのが本来の姿といえるが、交通網整備という今日的課題の中で必要不可欠な開発であり、やむをえずの調査となった。

原因はともかく、遺跡そのものの重要性は変ることなく、その調査実施にあたっては、慎重を期したわけであり、その結果として、当初の予想どおり、弥生時代から現代に至るまで連続する集落として当地方における各時代の中心的な位置づけがなされ、特に奈良時代を中心とする律令制度の中で地方官衙の存在はほぼ断定でき得る資料が提供され、伊那谷はもとより、長野県、更には日本的な視点で考究すべき新事実のいくつかが明らかとなった。

また、調査進行に伴い、遺跡保存運動もおこり、遺跡そのものの重要性は内外ともに認められるに至った。バイパス用地内調査終了後に文化庁・県教育委員会の指導と協力により周辺の範囲確認調査を数年次で計画実施中であり、その保護策を検討する段階となっており、この間の関係各位のご協力・ご努力に対し、深く感謝する次第である。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査及びその後の整理作業に深いご理解をいただいた建設省中部地方建設局・同飯田国道工事々務所、惜しみないご協力をいただいた元地権者をはじめとする地元の各位、長期間にわたり言葉につくせないご努力をいただいた調査団各位に対し心より感謝申し上げる次第であります。

昭和60年３月

飯田市教育委員会教育長

福島　稔

例　　言

1　本報告書は一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う恒川遺跡群他の発掘調査報告書であり、遺構編・遺物編１・同２・図版編の４冊と付図からなり、本書はその第１分冊である。

2　発掘調査は飯田市教育委員会が建設省中部地方建設局飯田国道工事々務所より委託を受け行なったものである。

3　発掘調査は昭和52年１月から昭和57年３月までの６年度にわたり、整理報告書の作成は昭和57年度から59年度まで３箇年をかけ飯田市考古資料館において行なった。

4　本報告書にかかわる調査実施遺跡は下記のとおりで、調査・整理作業等併記の略号によって実施し、本報告書内の記述も原則として略号によった。

流田遺跡――ＮＡＲ　　欠野遺跡――ＫＡＫ　　恒川遺跡田中地籍――ＴＡＮ　　恒川遺跡倉垣外地籍――ＫＵＲ　　恒川遺跡恒川Ａ地籍――ＧＯＡ　　恒川遺跡恒川Ｂ地籍――ＧＯＢ　　阿弥陀垣外遺跡――ＡＭＤ　　新屋敷遺跡――ＡＲＹ　　新井原遺跡――ＡＲＢ　　新井原11号～14号古墳――ＡＲＢＫ11～14　　高森町新井原遺跡――ＴＡＲＢ

5　本報告書は多くの学識経験者・市民・関係諸機関諸氏の協力によったもので、特に下記の諸氏からはそれぞれの立場でご指導・ご助言をいただいた。

奈良国立文化財研究所　　工楽善通、山中敏史、沢田正昭、秋山隆保

地質・岩石　　松島信幸、伊里道彦　　植物種子　　粉川昭平

6　遺構毎の記載順については、原則として時代順とした。時期の異なる遺構の重複する図は、主体となる遺構に含めた。

7　整理作業は佐々木嘉和・山下誠一・宮下秀広・佐合英治・桜井弘人・小林正春を主体に、本文中記載の整理協力者が復元から図版組まで行なった。

8　本報告書は佐々木・山下・佐合・桜井・小林が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。

9　本報告書の編集は執筆者の協議により行ない、小林が総括した。

10　本報告書関連の遺物・図面類等は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館で保管している。

本 文 目 次

序

例 言

I 経過……1

1 調査に至るまで……1

2 調査組織……2

1） 一般国道153号座光寺バイパス埋蔵文化財発掘調査会 ……2

2） 調査団……2

3 調査の経過……4

4 調査指導・見学者……4

5 調査の実施と方法……6

1） 流田遺跡 NAR……7

2） 欠野遺跡 KAK……7

3） 恒川遺跡田中地籍 TAN 同倉垣外地籍 KUR……7

4） 恒川遺跡恒川A地籍 GOA……7

5） 恒川遺跡恒川B地籍 GOB……13

6） 阿弥陀垣外遺跡 AMD……13

7） 新屋敷遺跡 ARY……13

8） 新井原遺跡 ARB 新井原11号古墳 ARBK11 新井原12号古墳 ARBK12 ……13

9） 高森町新井原遺跡 TARB……14

II 遺跡群の立地と環境……15

1 座光寺地区の概要……15

2 流田・欠野遺跡……19

3 恒川遺跡田中・倉垣外地籍……20

4 恒川遺跡恒川A・恒川B地籍、阿弥陀垣外・新屋敷遺跡……20

5 新井原遺跡・新井原古墳群……21

6 高森町新井原遺跡……21

7 各遺跡の土層……21

1） NAR・KAK……21

2） TAN・KUR……23

3） GOA……23
4） GOB、AMD……23
5） ARY……24
6） ARB……24
7） TARB……24
Ⅲ 遺構……25
1 流田遺跡、欠野遺跡……25
1） 溝址……25
2 恒川遺跡 田中・倉垣外地籍……26
1） 住居址……26
① 弥生時代中期……26
1号住居址 9号住居址 13号住居址 19号住居址 20号住居址
33号住居址 59号住居址 77号住居址 88号住居址 96号住居址
② 弥生時代後期から古墳時代前期……33
5号住居址 7号住居址 8号住居址 12号住居址 17号住居址
16号住居址 23号住居址 75号住居址 90号住居址 101号住居址
③ 古墳時代後期……47
4号住居址 6号住居址 21号住居址 22号住居址 26号住居址
30号住居址 31号住居址 32号住居址 35号住居址 37号住居址
45号住居址 47号住居址 50号住居址 52号住居址 53号住居址
57号住居址 58号住居址 61号住居址 62号住居址 63号住居址
67号住居址 68号住居址 69号住居址 70号住居址 74号住居址
79号住居址 80号住居址 82号住居址 84号住居址 85号住居址
89号住居址 91号住居址 93号住居址 94号住居址 98号住居址
99号住居址 102号住居址 103号住居址 104号住居址
④ 奈良時代……80
25号住居址 34号住居址 44号住居址 54号住居址 55号住居址
64号住居址 72号住居址 76号住居址 87号住居址
⑤ 平安時代……89
2号住居址 3号住居址 10号住居址 11号住居址 15号住居址
24号住居址 29号住居址 36号住居址 38号住居址 39号住居址
40号住居址 41号住居址 43号住居址 48号住居址 49号住居址
51号住居址 56号住居址 60号住居址 65号住居址 71号住居址

83号住居址　86号住居址　92号住居址　100号住居址
⑥ 中世 ……109
42号住居址　105号住居址
⑦ 時期不明 ……112
14号住居址　18号住居址　27号住居址　28号住居址　46号住居址
66号住居址　73号住居址　78号住居址　81号住居址　95号住居址
97号住居址　106号住居址
2） 建物址・工房址 ……116
3） 溝址・溝状遺構・囲溝址 ……128
4） 方形周溝墓 ……141
5） 土坑・小竪穴・火葬墓 ……144
6） 祭祀址 ……149
7） 道路址 ……151
8） 柵址 ……151
9） 集石・石列 ……153
10） Ｐｉｔ群 ……158
3 恒川遺跡 恒川Ａ地籍 ……159
1） 住居址 ……159
① 弥生時代後期から古墳時代前期 ……159
1号住居址　2号住居址　3号住居址　4号住居址　5号住居址
6号住居址　7号住居址　8号住居址　9号住居址
② 時期不明 ……169
10号住居址
2） 建物址 ……169
3） 溝　址 ……172
4） 土坑・小竪穴 ……177
5） 集石・石列・暗渠 ……179
6） 杭列・土器包含層 ……182
4 恒川遺跡 恒川Ｂ地籍 ……185
1） 住居址 ……185
① 弥生時代中期 ……185
8号住居址　9号住居址　17号住居址　25号住居址　28号住居址
34号住居址　35号住居址　45号住居址　46号住居址　47号住居址

50号住居址
② 弥生時代後期から古墳時代前期……195
2号住居址　4号住居址　5号住居址　7号住居址　10号住居址
12号住居址　14号住居址　15号住居址　16号住居址　18号住居址
19号住居址　20号住居址　21号住居址　24号住居址　27号住居址
29号住居址
③ 古墳時代後期……209
1号住居址　6号住居址　22号住居址　26号住居址　30号住居址
36号住居址　40号住居址　41号住居址　42号住居址　43号住居址
44号住居址　48号住居址　49号住居址　52号住居址　54号住居址
55号住居址　56号住居址　57号住居址　58号住居址　59号住居址
60号住居址　62号住居址
④ 奈良時代……231
3号住居址　11号住居址　31号住居址　32号住居址　51号住居址
⑤ 平安時代……237
38号住居址　39号住居址
⑥ 時期不明……239
13号住居址　23号住居址　33号住居址　37号住居址　61号住居址
2） 建物址……240
3） 工房址……260
4） 溝　址……261
5） 方形周溝墓……277
6） 土坑・小竪穴……277
5 阿弥陀垣外遺跡……283
1） 住居址……283
① 弥生時代中期……283
17号住居址　18号住居址
② 弥生時代後期……285
4号住居址
③ 古墳時代後期……286
1号住居址　2号住居址　3号住居址　6号住居址　7号住居址
8号住居址　9号住居址　10号住居址　11号住居址　12号住居址
13号住居址　14号住居址　15号住居址　16号住居址　20号住居址

21号住居址　22号住居址　23号住居址　25号住居址　26号住居址
27号住居址　28号住居址　30号住居址　32号住居址
ＧＯＢ53号住居址
④ 奈良時代 ……309
5号住居址
⑤ 平安時代 ……311
24号住居址
⑥ 時期不明 ……312
19号住居址　29号住居址　31号住居址
2） 建物址 ……314
3） 溝址・方形周溝墓 ……317
4） 小竪穴・集石・火葬墓 ……321
6 新屋敷遺跡 ……323
1） 縄文時代早期 ……323
① 小竪穴 ……323
② ユニット ……326
2） 住居址 ……330
① 弥生時代中期 ……330
5号住居址　9号住居址　10号住居址　11号住居址　15号住居址
22号住居址　23号住居址　24号住居址　29号住居址　51号住居址
54号住居址　55号住居址
② 弥生時代後期 ……337
56号住居址
③ 古墳時代後期 ……338
2号住居址　3号住居址　4号住居址　6号住居址　7号住居址
12号住居址　13号住居址　14号住居址　16号住居址　17号住居址
18号住居址　19号住居址　20号住居址　21号住居址　25号住居址
26号住居址　28号住居址　30号住居址　31号住居址　32号住居址
33号住居址　34号住居址　35号住居址　36号住居址　37号住居址
39号住居址　40号住居址　41号住居址　42号住居址　43号住居址
45号住居址　47号住居址　50号住居址　52号住居址　58号住居址
59号住居址
④ 奈良時代 ……385

44号住居址　46号住居址
⑤ 時期不明 ……387
8号住居址　27号住居址　38号住居址　48号住居址　49号住居址
53号住居址　57号住居址
3） 建物址 ……390
4） 溝址・溝状遺構 ……407
5） 方形周溝墓 ……424
6） 土坑 ……426
7） 集石 ……426
8） Pit群 ……427
7 新井原遺跡 ……429
1） 住居址 ……429
① 縄文時代 ……429
2号住居址　3号住居址　4号住居址　5号住居址　6号住居址
8号住居址　9号住居址　10号住居址　11号住居址　12号住居址
13号住居址
② 平安時代 ……441
1号住居址　7号住居址
2） 溝址 ……442
3） 方形周溝墓 ……445
4） 土坑・火葬墓・馬の墓 ……446
5） 集石 ……452
Ⅳ 小結 ……457
1 縄文時代 ……457
1） 早期 ……457
2） 中期 ……457
3） 後期・晩期 ……457
2 弥生時代 ……458
1） 中期 ……458
2） 後期 ……459
3 古墳時代 ……460
1） 前期 ……460
2） 後期 ……460

4　奈良時代 ……461
5　平安時代 ……461
6　中世 ……461
7　まとめ ……462

挿　図　目　次

第1図　NAR　KAK　遺跡調査区域図及びグリット図……8
第2図　TAN・KUR　GOA　GOB　調査区域図及びグリット図……9・10
第3図　AMD　ARY　ARB　調査区域図及びグリット図……11・12
第4図　TARB　調査区域図及びグリット図……14
第5図　恒川遺跡群位置図及び周辺主要遺跡図……16
第6図　恒川遺跡群位置図及び周辺図……17・18
第7図　恒川遺跡群基本土層柱状図……22
第8図　NAR　溝址1……25
第9図　TAN・KUR　1号・3号住居址……26
第10図　TAN・KUR　9号住居址、建物址5……27
第11図　TAN・KUR　13号住居址……28
第12図　TAN・KUR　19号住居址……29
第13図　TAN・KUR　20号住居址……30
第14図　TAN・KUR　33号住居址、土坑11……31
第15図　TAN・KUR　59号住居址……32
第16図　TAN・KUR　5号住居址……34
第17図　TAN・KUR　7号住居址……35
第18図　TAN・KUR　8号住居址……36
第19図　TAN・KUR　12号住居址……37
第20図　TAN・KUR　17号住居址……38
第21図　TAN・KUR　16号住居址……39
第22図　TAN・KUR　23号住居址……41
第23図　TAN・KUR　23号住居址遺物出土状態……42
第24図　TAN・KUR　75号・82号住居址……43
第25図　TAN・KUR　75号住居址編物石出土状態……44
第26図　TAN・KUR　90号住居址……45
第27図　TAN・KUR　49号・92号・101号・102号・103号住居址
集石25、土坑21・22・23、Pit群……46
第28図　TAN・KUR　4号住居址……47

第29図　TAN・KUR　6号住居址……48
第30図　TAN・KUR　21号住居址……49
第31図　TAN・KUR　22号・77号住居址……50
第32図　TAN・KUR　26号・95号住居址……51
第33図　TAN・KUR　30号住居址……52
第34図　TAN・KUR　30号住居址カマド……53
第35図　TAN・KUR　31号住居址……54
第36図　TAN・KUR　31号住居址カマド……55
第37図　TAN・KUR　32号住居址……56
第38図　TAN・KUR　34号・35号住居址……56
第39図　TAN・KUR　36号・37号住居址……57
第40図　TAN・KUR　45号住居址、土坑14……58
第41図　TAN・KUR　47号住居址、工房址1……59
第42図　TAN・KUR　50号住居址……60
第43図　TAN・KUR　52号・53号住居址……61
第44図　TAN・KUR　57号・73号住居址……62
第45図　TAN・KUR　58号・98号住居址……64
第46図　TAN・KUR　61号住居址……65
第47図　TAN・KUR　67号・68号住居址……67
第48図　TAN・KUR　69号住居址……68
第49図　TAN・KUR　62号・63号・64号・66号・70号住居址……69
第50図　TAN・KUR　79号住居址……70
第51図　TAN・KUR　80号・85号・86号・88号・97号住居址……71
第52図　TAN・KUR　81号・84号住居址……73
第53図　TAN・KUR　89号住居址……75
第54図　TAN・KUR　91号住居址……76
第55図　TAN・KUR　93号住居址……77
第56図　TAN・KUR　94号住居址……78
第57図　TAN・KUR　99号住居址……79
第58図　TAN・KUR　24号・25号住居址……81
第59図　TAN・KUR　44号住居址……82
第60図　TAN・KUR　44号住居址カマド……83
第61図　TAN・KUR　54号住居址……84

第62図　TAN・KUR　55号住居址……85
第63図　TAN・KUR　76号住居址……87
第64図　TAN・KUR　87号住居址……88
第65図　TAN・KUR　87号住居址カマド……89
第66図　TAN・KUR　2号住居址……90
第67図　TAN・KUR　10号住居址……92
第68図　TAN・KUR　15号・40号・41号住居址……93
第69図　TAN・KUR　15号・40号・41号住居址カマド……94
第70図　TAN・KUR　24号住居址カマド……95
第71図　TAN・KUR　29号住居址……96
第72図　TAN・KUR　38号・39号住居址……98
第73図　TAN・KUR　48号・74号住居址……100
第74図　TAN・KUR　51号住居址……101
第75図　TAN・KUR　51号住居址カマド……102
第76図　TAN・KUR　56号住居址……102
第77図　TAN・KUR　60号住居址……103
第78図　TAN・KUR　65号住居址……104
第79図　TAN・KUR　65号住居址カマド……105
第80図　TAN・KUR　71号住居址……105
第81図　TAN・KUR　71号住居址カマド……106
第82図　TAN・KUR　83号住居址……107
第83図　TAN・KUR　92号住居址……108
第84図　TAN・KUR　100号・104号住居址……108
第85図　TAN・KUR　42号・43号住居址……110
第86図　TAN・KUR　96号・105号・106号住居址、土坑9・10・13、溝址21……111
第87図　TAN・KUR　14号住居址……112
第88図　TAN・KUR　27号住居址……112
第89図　TAN・KUR　28号住居址……113
第90図　TAN・KUR　46号住居址……114
第91図　TAN・KUR　78号住居址……115
第92図　TAN・KUR　建物址1・8、溝址16……117
第93図　TAN・KUR　建物址2……118
第94図　TAN・KUR　建物址3……119

第95図　TAN・KUR　建物址４……120
第96図　TAN・KUR　建物址７……122
第97図　TAN・KUR　72号住居址、建物址９、Pit群……123
第98図　TAN・KUR　建物址10……124
第99図　TAN・KUR　建物址11……125
第100図　TAN・KUR　建物址12、柵址１、Pit群……126
第101図　TAN・KUR　建物址13……127
第102図　TAN・KUR　溝址１・２……128
第103図　TAN・KUR　11号住居址、建物址６、溝址３・５・17、土坑２……129
第104図　TAN・KUR　溝址４・７、溝状遺構１……130
第105図　TAN・KUR　溝址６……131
第106図　TAN・KUR　溝址８……132
第107図　TAN・KUR　溝址９・10・13・14・15……133
第108図　TAN・KUR　18号住居址、溝址12……135
第109図　TAN・KUR　溝址18……137
第110図　TAN・KUR　溝址19……138
第111図　TAN・KUR　溝址20、Pit、礫……139
第112図　TAN・KUR　囲溝址１……140
第113図　TAN・KUR　囲溝址２、土坑５……141
第114図　TAN・KUR　方形周溝墓１……141
第115図　TAN・KUR　方形周溝墓２……142
第116図　TAN・KUR　方形周溝墓３、土坑19、小竪穴２……143
第117図　TAN・KUR　土坑１・12……144
第118図　TAN・KUR　土坑２・３・４、Pit群……145
第119図　TAN・KUR　土坑６・７・８……145
第120図　TAN・KUR　土坑15・16・17・18、Pit群……146
第121図　TAN・KUR　土坑20……147
第122図　TAN・KUR　小竪穴１……147
第123図　TAN・KUR　小竪穴３……148
第124図　TAN・KUR　火葬墓１……149
第125図　TAN・KUR　祭祀址１……149
第126図　TAN・KUR　７号住居址東Pit群……150
第127図　TAN・KUR　祭祀址２……150

第128図 TAN・KUR 道路址1 ……152
第129図 TAN・KUR 集石6 ……153
第130図 TAN・KUR 集石7・8・9・11・12・13・14・15 ……154
第131図 TAN・KUR 集石16・17・18 ……154
第132図 TAN・KUR 集石19・20・21・22・23 ……155
第133図 TAN・KUR 集石24 ……155
第134図 TAN・KUR 石列2・3、集石1・2・3・4・5・10 ……156
第135図 TAN・KUR Pit群……158
第136図 GOA 1号住居址、溝址3、小竪穴1・2、土坑7 ……160
第137図 GOA 2号住居址、小溝 ……161
第138図 GOA 3号住居址 ……162
第139図 GOA 4号住居址、建物址2・3 ……163
第140図 GOA 4号住居址遺物出土状態 ……164
第141図 GOA 5号・8号住居址、土坑15 ……165
第142図 GOA 6号住居址 ……166
第143図 GOA 7号住居址 ……167
第144図 GOA 9号住居址 ……168
第145図 GOA 10号住居址 ……169
第146図 GOA 建物址1、溝址5 ……170
第147図 GOA 溝址1、土坑1・2 ……172
第148図 GOA 溝址2、土坑3 ……175・176
第149図 GOA 土坑4・5・6・8・9・10 ……178
第150図 GOA 土坑12・13・14・16・17・18・19・20 ……179
第151図 GOA 集石1・2 ……180
第152図 GOA 石列1 ……181
第153図 GOA 暗渠1・2 ……182
第154図 GOA 湿地帯杭列 ……183
第155図 GOA A区土器包含層出土状態 ……184
第156図 GOB 8号住居址 ……186
第157図 GOB 17号住居址 ……187
第158図 GOB 23号・24号・25号住居址 ……188
第159図 GOB 28号住居址、土坑2 ……189
第160図 GOB 34号・37号住居址、建物址19、土坑7・8・9・10・11 ……190

第161図 ＧＯＢ　35号・50号住居址、土坑13 ……191
第162図 ＧＯＢ　45号住居址、溝址19 ……192
第163図 ＧＯＢ　46号住居址 ……193
第164図 ＧＯＢ　47号住居址 ……194
第165図 ＧＯＢ　２号・３号住居址 ……196
第166図 ＧＯＢ　４号住居址 ……197
第167図 ＧＯＢ　10号住居址 ……199
第168図 ＧＯＢ　10号住居址遺物出土状態 ……200
第169図 ＧＯＢ　13号・14号住居址 ……201
第170図 ＧＯＢ　９号・15号住居址 ……201
第171図 ＧＯＢ　15号住居址遺物出土状態 ……202
第172図 ＧＯＢ　16号住居址 ……203
第173図 ＧＯＢ　16号住居址遺物出土状態 ……204
第174図 ＧＯＢ　18号・19号住居址 ……205
第175図 ＧＯＢ　20号・29号住居址 ……206
第176図 ＧＯＢ　27号住居址、建物址23、溝址12 ……208
第177図 ＧＯＢ　１号・７号住居址 ……210
第178図 ＧＯＢ　５号・６号・12号住居址 ……211
第179図 ＧＯＢ　６号住居址カマド ……212
第180図 ＧＯＢ　22号住居址 ……213
第181図 ＧＯＢ　26号住居址 ……213
第182図 ＧＯＢ　30号・31号・33号住居址 ……214
第183図 ＧＯＢ　40号住居址 ……215
第184図 ＧＯＢ　41号・42号住居址 ……216
第185図 ＧＯＢ　43号住居址 ……217
第186図 ＧＯＢ　44号住居址、溝址４ ……218
第187図 ＧＯＢ　39号・48号住居址 ……219
第188図 ＧＯＢ　48号住居址カマド ……220
第189図 ＧＯＢ　49号住居址 ……221
第190図 ＧＯＢ　52号住居址 ……222
第191図 ＧＯＢ　54号住居址、建物址11 ……223
第192図 ＧＯＢ　55号住居址 ……224
第193図 ＧＯＢ　56号住居址 ……225

第194図 ＧＯＢ　57号住居址 ……225
第195図 ＧＯＢ　58号住居址 ……226
第196図 ＧＯＢ　58号住居址カマド ……227
第197図 ＧＯＢ　59号住居址 ……228
第198図 ＧＯＢ　60号・61号住居址、土坑23 ……229
第199図 ＧＯＢ　62号住居址、Pit群……230
第200図 ＧＯＢ　62号住居址カマド ……231
第201図 ＧＯＢ　3号住居址カマド ……232
第202図 ＧＯＢ　11号住居址 ……233
第203図 ＧＯＢ　31号住居址カマド ……233
第204図 ＧＯＢ　32号住居址 ……234
第205図 ＧＯＢ　32号住居址カマド ……235
第206図 ＧＯＢ　51号住居址 ……236
第207図 ＧＯＢ　38号住居址 ……237
第208図 ＧＯＢ　38号住居址石組 ……238
第209図 ＧＯＢ　建物址1 ……241
第210図 ＧＯＢ　建物址2 ……242
第211図 ＧＯＢ　建物址3 ……243
第212図 ＧＯＢ　建物址4 ……244
第213図 ＧＯＢ　建物址5 ……245
第214図 ＧＯＢ　21号住居址、建物址6・9 ……246
第215図 ＧＯＢ　建物址7 ……247
第216図 ＧＯＢ　建物址8 ……248
第217図 ＧＯＢ　建物址10 ……249
第218図 ＧＯＢ　建物址12 ……250
第219図 ＧＯＢ　建物址13 ……251
第220図 ＧＯＢ　建物址14 ……251
第221図 ＧＯＢ　建物址15 ……252
第222図 ＧＯＢ　建物址17・18、溝址14、小竪穴1、土坑17 ……254
第223図 ＧＯＢ　建物址16・24……255・256
第224図 ＧＯＢ　建物址20・21、小竪穴2、土坑14 ……258
第225図 ＧＯＢ　建物址22、小竪穴3 ……259
第226図 ＧＯＢ　工房址1遺物分布図 ……261

第227図 ＧＯＢ　溝址１・２・３ ……263
第228図 ＧＯＢ　溝址５、暗渠 ……264
第229図 ＧＯＢ　溝址６、土坑５・24 ……265
第230図 ＧＯＢ　溝址７ ……266
第231図 ＧＯＢ　36号住居址、溝址４・８・９ ……267
第232図 ＧＯＢ　溝址11・18 ……269
第233図 ＧＯＢ　溝址13、Pit群 ……270
第234図 ＧＯＢ　溝址15、土坑21 ……273・274
第235図 ＧＯＢ　溝址10・16・17 ……275
第236図 ＧＯＢ　方形周溝墓１、土杭16 ……278
第237図 ＧＯＢ　土坑１・３・４、Pit ……279
第238図 ＧＯＢ　土坑12・19・20・22 ……280
第239図 ＧＯＢ　土坑15・16・18 ……281
第240図 ＡＭＤ　14号・15号・16号・17号住居址 ……284
第241図 ＡＭＤ　４号住居址 ……285
第242図 ＡＭＤ　１号住居址、溝址１ ……286
第243図 ＡＭＤ　２号住居址、溝址１ ……287
第244図 ＡＭＤ　２号住居址カマド ……288
第245図 ＡＭＤ　３号住居址 ……289
第246図 ＡＭＤ　６号住居址 ……290
第247図 ＡＭＤ　７号住居址 ……290
第248図 ＡＭＤ　８号住居址 ……291
第249図 ＡＭＤ　８号住居址カマド ……292
第250図 ＡＭＤ　９号住居址 ……293
第251図 ＡＭＤ　10号住居址 ……294
第252図 ＡＭＤ　12号住居址、建物址４ ……296
第253図 ＡＭＤ　13号住居址 ……297
第254図 ＡＭＤ　21号住居址 ……299
第255図 ＡＭＤ　22号住居址、Pit群 ……301
第256図 ＡＭＤ　23号住居址 ……302
第257図 ＡＭＤ　25号住居址 ……303
第258図 ＡＭＤ　26号住居址 ……304
第259図 ＡＭＤ　26号住居址カマド ……305

第260図 AMD 27号・30号住居址、GOB 53号住居址 ……306
第261図 AMD 28号住居址、 Pit群 ……307
第262図 AMD 32号住居址 ……308
第263図 AMD 5号・18号住居址、建物址2、小竪穴1 ……309
第264図 AMD 5号住居址硯・礫出土状態、 5号・11号・12号・18号住居址、小竪穴1 ……310
第265図 AMD 24号住居址 ……311
第266図 AMD 24号住居址カマド ……312
第267図 AMD 19号住居址、 Pit群 ……313
第268図 AMD 31号住居址、建物址1・3 ……314
第269図 AMD 建物址5、 Pit群 ……316
第270図 AMD 方形周溝墓1、溝址2 ……318
第271図 AMD 溝址3・4、小竪穴2 ……319
第272図 AMD 29号住居址、溝址5、集石1 ……320
第273図 AMD 火葬墓1 ……322
第274図 ARY 小竪穴1・2・3・4・5・6・7 ……324
第275図 ARY ユニット……327・328
第276図 ARY 9号住居址 ……331
第277図 ARY 11号住居址 ……333
第278図 ARY 22号住居址 ……334
第279図 ARY 23号住居址 ……335
第280図 ARY 24号住居址 ……335
第281図 ARY 55号住居址 ……337
第282図 ARY 56号住居址 ……338
第283図 ARY 2号住居址 ……339
第284図 ARY 3号住居址 ……340
第285図 ARY 4号住居址 ……341
第286図 ARY 4号住居址カマド ……342
第287図 ARY 6号・51号・53号住居址、溝址25 ……343
第288図 ARY 7号住居址 ……344
第289図 ARY 7号住居址カマド ……345
第290図 ARY 12号住居址 ……345
第291図 ARY 12号住居址カマド ……346
第292図 ARY 13号住居址 ……347

第293図 ＡＲＹ　14号住居址 ……348
第294図 ＡＲＹ　15号・16号住居址 ……349
第295図 ＡＲＹ　17号住居址 ……350
第296図 ＡＲＹ　18号住居址 ……351
第297図 ＡＲＹ　19号住居址 ……352
第298図 ＡＲＹ　20号住居址 ……353
第299図 ＡＲＹ　20号住居址カマド ……354
第300図 ＡＲＹ　21号住居址 ……355
第301図 ＡＲＹ　25号住居址、土坑10 ……356
第302図 ＡＲＹ　26号住居址 ……358
第303図 ＡＲＹ　26号住居址カマド ……359
第304図 ＡＲＹ　28号住居址 ……359
第305図 ＡＲＹ　29号・30号住居址 ……360
第306図 ＡＲＹ　30号住居址カマド ……361
第307図 ＡＲＹ　31号住居址 ……362
第308図 ＡＲＹ　32号・34号住居址 ……363
第309図 ＡＲＹ　35号住居址 ……365
第310図 ＡＲＹ　35号住居址カマド ……366
第311図 ＡＲＹ　36号・41号住居址 ……367
第312図 ＡＲＹ　36号住居址カマド ……368
第313図 ＡＲＹ　37号・40号住居址 ……369
第314図 ＡＲＹ　37号住居址カマド ……370
第315図 ＡＲＹ　39号住居址 ……370
第316図 ＡＲＹ　39号住居址カマド ……371
第317図 ＡＲＹ　40号住居址カマド ……371
第318図 ＡＲＹ　42号住居址 ……373
第319図 ＡＲＹ　43号住居址 ……374
第320図 ＡＲＹ　43号住居址カマド ……375
第321図 ＡＲＹ　44号・45号住居址 ……376
第322図 ＡＲＹ　45号住居址カマド ……377
第323図 ＡＲＹ　47号・48号住居址、建物址12、 Pit群 ……378
第324図 ＡＲＹ　50号・59号住居址 ……379
第325図 ＡＲＹ　50号住居址礫出土状態 ……380

第326図 ＡＲＹ　50号住居址カマド ……381
第327図 ＡＲＹ　52号住居址、溝址23 ……382
第328図 ＡＲＹ　52号住居址カマド ……383
第329図 ＡＲＹ　57号・58号住居址、溝状遺構１ ……384
第330図 ＡＲＹ　44号住居址カマド ……385
第331図 ＡＲＹ　46号住居址 ……386
第332図 ＡＲＹ　８号住居址 ……387
第333図 ＡＲＹ　38号住居址、建物址２ ……388
第334図 ＡＲＹ　49号住居址、 Pit群 ……389
第335図 ＡＲＹ　27号住居址、建物址１ ……391
第336図 ＡＲＹ　建物址３・４・11 ……392
第337図 ＡＲＹ　建物址６・９、土坑５・７・８・９ ……394
第338図 ＡＲＹ　54号住居址、建物址５・７、土坑１・２・３・４ ……395・396
第339図 ＡＲＹ　建物址８ ……398
第340図 ＡＲＹ　建物址10 ……400
第341図 ＡＲＹ　建物址13、溝址21、 Pit群 ……402
第342図 ＡＲＹ　建物址14 ……403
第343図 ＡＲＹ　建物址15、土杭13・14・15 ……404
第344図 ＡＲＹ　建物址16 ……404
第345図 ＡＲＹ　建物址17、 Pit群 ……405
第346図 ＡＲＹ　建物址18 ……406
第347図 ＡＲＹ　溝址１・２ ……408
第348図 ＡＲＹ　溝址３ ……409
第349図 ＡＲＹ　溝址４ ……409
第350図 ＡＲＹ　溝址５ ……410
第351図 ＡＲＹ　溝址６・７ ……411
第352図 ＡＲＹ　33号住居址、溝址８・９ ……413
第353図 ＡＲＹ　溝址10・11・12・13・14・22 ……415
第354図 ＡＲＹ　溝址15・16・17 ……417
第355図 ＡＲＹ　建物址19、溝址18 ……419・420
第356図 ＡＲＹ　溝址19、小竪穴５ ……421
第357図 ＡＲＹ　溝址20 ……422
第358図 ＡＲＹ　溝址24、 Pit ……423

第359図 ＡＲＹ　方形周溝墓 ……425
第360図 ＡＲＹ　集石１・２ ……426
第361図 ＡＲＹ　集石３ ……427
第362図 ＡＲＹ　Ｂ・Ｃ区 Pit 群 ……428
第363図 ＡＲＢ　２号住居址、馬の墓１ ……430
第364図 ＡＲＢ　３号住居址、集石13 ……431
第365図 ＡＲＢ　４号住居址、土坑６・７・８・９・10・11 ……432
第366図 ＡＲＢ　５号住居址 ……433
第367図 ＡＲＢ　６号住居址 ……434
第368図 ＡＲＢ　８号住居址 ……435
第369図 ＡＲＢ　９号住居址 ……437
第370図 ＡＲＢ　11号住居址 ……438
第371図 ＡＲＢ　12号住居址、土坑21・22 ……438
第372図 ＡＲＢ　12号住居址炉址 ……439
第373図 ＡＲＢ　13号住居址、土坑17・23 ……440
第374図 ＡＲＢ　１号住居址 ……441
第375図 ＡＲＢ　７号住居址 ……441
第376図 ＡＲＢ　溝址２ ……443
第377図 ＡＲＢ　溝址３、集石19 ……444
第378図 ＡＲＢ　方形周溝墓１ ……445
第379図 ＡＲＢ　土坑１・２・３・４・５・12・13、集石20 ……447
第380図 ＡＲＢ　土坑14・15・16・18・19・20、Pit 群 ……448
第381図 ＡＲＢ　土坑18土層図 ……449
第382図 ＡＲＢ　火葬墓２・３・４・５ ……450
第383図 ＡＲＢ　馬の墓２ ……452
第384図 ＡＲＢ　集石１・２・３・４・５・６ ……454
第385図 ＡＲＢ　集石７・８・９・10・11・12・13 ……455
第386図 ＡＲＢ　集石14・15・16・17・18・21・22 ……456

表　目　次

第１表　ＧＯＡ　建物址１柱根計測表 ……171
第２表　ＴＡＮ・ＫＵＲ　住居址一覧表 ……463
第３表　ＧＯＡ　住居址一覧表……466
第４表　ＧＯＢ　住居址一覧表……467
第５表　ＡＭＤ　住居址一覧表……469
第６表　ＡＲＹ　住居址一覧表……470
第７表　ＡＲＢ　住居址一覧表……472
第８表　ＴＡＮ・ＫＵＲ　建物址一覧表……473
第９表　ＧＯＡ　建物址一覧表……473
第10表　ＧＯＢ　建物址一覧表……473
第11表　ＡＭＤ　建物址一覧表……474
第12表　ＡＲＹ　建物址一覧表……474
第13表　ＴＡＮ・ＫＵＲ　土坑一覧表……475
第14表　ＧＯＡ　土坑一覧表……475
第15表　ＧＯＢ　土坑一覧表……476
第16表　ＡＲＹ　土坑一覧表……476
第17表　ＡＲＢ　土坑一覧表……477
第18表　ＴＡＮ・ＫＵＲ　小竪穴一覧表……477
第19表　ＧＯＡ　小竪穴一覧表……478
第20表　ＧＯＢ　小竪穴一覧表……478
第21表　ＡＭＤ　小竪穴一覧表……478
第22表　ＡＲＹ　小竪穴一覧表……478
第23表　ＴＡＮ・ＫＵＲ　集石一覧表……478
第24表　ＧＯＡ　集石一覧表……479
第25表　ＡＭＤ　集石一覧表……479
第26表　ＡＲＹ　集石一覧表……479
第27表　ＡＲＢ　集石一覧表……479

I 経　過

1　調査に至るまで

飯田市座光寺地区は、飯田市街地の北方約5kmにあり、北の玄関口にあたる。

近年の自動車社会の急激な発達と周辺地域の道路整備が進む中で、座光寺地区を通過する国道153号は旧来の道路状態が続き、朝夕の交通渋滞は大きな問題であり、その解消のためバイパスの建設が各方面から要望されていた。

それに対し、国・県・市等により建設に関する協議を進める中で、具体的な計画の第1段階として、昭和46年10月予定路線の発表がなされた。

同年12月建設省中部地方建設局飯田国道工事々務所から長野県教育委員会へ、関連遺跡の保護協議依頼があり、それに対して県教委から関連遺跡の状況を示す資料が国道工事々務所宛に送付された。

一方、建設計画が進む中で、同年12月下伊那考古学会・下伊那遺跡を守る会により、予定路線内の既出遺物等に基づき遺跡の重要性を再認識し、路線変更を訴える保存運動が展開された。当初、県教委においても、遺跡の状況から路線変更が望ましい旨の判断であったが、国道工事事務所と検討の結果、計画変更は不可能の結論が示され、相方の協議により、完全なる発掘調査の実施と、調査の状況により再協議を行なって対応する旨の方向づけがなされた。

昭和47年5月に、上記協議を受け県教委宛分布調査の依頼が国道工事々務所からあり、同年6月に県教委が分布調査を実施した。その調査結果に基づき路線内遺跡の取扱いにつき具体的な協議を行なった。

その後、国道工事々務所による事務的な作業として、昭和51年3月までに用地の約8割を買収し、同年7月に発掘調査の具体的な検討がなされた。国道工事々務所・県教委・市教委による協議により、飯田市教育委員会が発掘調査を実施することとなり、細部にわたる協議を経て、昭和51年12月4日建設省中部地方建設局長と飯田市長との間で、初年度の発掘調査にかかわる業務委託の契約が締結された。

それに基づき、飯田市教育委員会では直接発掘調査を実施する体制の確保が困難のため、一般国道153号座光寺バイパス埋蔵文化財発掘調査会及び同調査団を組織し、実際の業務に当ることとした。

2　調査組織

1）一般国道153号座光寺バイパス埋蔵文化財発掘調査会

会　長　大沢　和夫（市文化財審議委員会委員長、県考古学会会長）

副会長　橋本　玄進（市教育委員長）51・52　　森本　信也（市教育長）51・52
平田　英夫（　〃　）53　　林　研二（　〃　）53～59
勝野　好一（　〃　）54～58　　福島　稔（　〃　）59
松島　勝郎（　〃　）59

委　員　平田　英夫（市教育委員）　51・52　　林　龍雄（市教育次長）58・59
勝野　好一（　〃　）　51～53　　相津　実（市社会教育課長）51～53
沢柳　俊夫（　〃　）　51～59　　山下　舜平（　〃　）54～56
大田中一郎（　〃　）　53～59　　竹村　宗丘（　〃　）57・58
松島　勝郎（　〃　）　53～59　　塩沢　正司（　〃　）59
福井　実（市教育次長）　57

事務局・事務局長
相津　実（社会教育課長）51～53　　竹村　宗丘（社会教育課長）57・58
山下　舜平（　〃　）54～56　　塩沢　正司（　〃　）59

事務局員
山下　舜平（社会教育課長補佐）51～53　　竹村　宗丘（社会教育文化係長）54・55
牛木　繁（　〃　）54～59　　塩沢　正司（　〃　）56
池田　明人（社会教育課文化係長）57～59　　林　貞子（市教委庶務課）　51
代田　一行（社会教育課文化係）54・55　　熊谷理恵子（　〃　）　52～55
小林　正春（　〃　）55～59　　家田　昌子（　〃　）　56・57
吉川　豊（　〃　）59　　新井　智子（　〃　）　58・59

2）　調査団

団　長　　大沢　和夫　51～59

調査員　　佐藤　甦信　51・52　　宮沢　恒之　51・52　　今村　正次　51・52　　塩沢　仁治　51～55　　佐々木嘉和　51～59　　市沢　英利　51・52　　郷道　哲章　51・52　　山下　誠一　53～59　　佐合　英治　54～59　　宮下　秀広　54～59　　北原　昇　56　　桜井　弘人　59　　小林　正春　51～59

調査補助員　　山下　誠一　51・52　　清水セツ子　51　　佐合　英治　52・53　　宮下　秀広

53　北原　昇　55

発掘作業協力者　中平　兼茂　51～53　福島　明夫　51～54・56　北村　重実　51～53・56　今村　式部　51～56　吉川　正実　51～56　吉沢　徳男　51～53・55・56　原　正　51～53　松村　定蔵　51～54　今村　忠治　51～56　竹中　寿夫　51～56　柘植　勝次　51・52・54～56　内山　順一　51・52　藤本　徳男　51・52　柳沢　君恵　51～53　佐々木育子　51～56　池田　幸子　51～56　佐々木八代　51～55　棚田恵美子　51・52　棚田ミチ子　51～53　西尾　節子　51・52　正木　睦子　51～56　木下恵美子　51　塩沢　美代　51・52　今村　倶栄　51～56　宮沢　福子　51・52　北原　喜代　51・52　氏井　信子　51・52　市瀬ひさ子　51・52　小林　茂人　51　今村　善紀　51～53　小林　茂　51・52　村松寿美子　51　代田　利子　51　伊藤よし子　51　久保田文子　51　鈴木　道子　51　加藤　里子　51　中崎美代子　51　牧野内　泉　51・52　鈴木　敬三　51・52　島岡　俊文　51・52　関島　斉　51・52　宮沢　正夫　51・52　矢沢　節子　51・52　木下久美子　51～54　牧内　浩道　51・52　秦　卓幸　51・52　小林　佳弘　51・52　飯島　洋一　51　松沢　吉朗　51　吉川　正一　51　塚原　和子　51　今井　和利　51　今村　尚美　51～54　飯島　佳代　51・52　田村　正幸　51　片山　寛子　51・52　林　三郎　52　井崎美代司　52　佐々木　清　52　今村　春一　52～56　木下　辰雄　52～56　大山　徹郎　52　原田　富子　52　林　兼十　52～54　霞　正一　52　今村　勝子　52～56　池田　頼正　52　仲村　茂樹　52　林　裕二　52　宮沢　豊　52　渡辺　健司　52　原田　秀文　52　片桐　武夫　53　内山　芳美　53　池田　知優　53～55　棚田　智子　54～56　佐々木啓　54～56　熊谷　義人　54　知野　聡　54　中平　英樹　54　安野　賢二　54　杉浦　英樹　54　宮沢　英明　54　吉村　崇　54　棚田　俊雄　54　松枝永利子　54　北原　昇　54　山田　治郎　54・55　中島　鉄也　54・55　北原　昇一　54　北原　透　54　今村　和貴　54　畠山　和男　54・55　福沢　弘子　55　北原　礼子　55・56　村松　宣彦　55　平岩　陽一　55　市村　恭一　55　桐山　亨大　55　岩崎　克幸　55　笹岡　基志　55　林　敏昭　55　小林　祐治　55　長谷部金治　55　木下　秀樹　55　伊野　浩樹　55　片桐　義文　55　河野　勝　55　塩沢　秀人　55　宮脇　文彦　55　小林　健治　55　今井　邦乃　55　原田喜美子　55・56　赤羽目友子　56　赤羽目はる子　56　湯沢美和子　56　北原　陽子　56　半坂　義雄　56　大島　利男　56　伊藤　浩　56　北原　清　56　松下　徹　56　今村　梨香　56　正木　直子　56　前田　理恵　56　片桐かほる　56　赤羽ふみ子　56　戸崎　耐子　56　向田　一雄

52～56　細井　光代　52～56　森　章　52～56　正木実重子　52～56　和田彦九郎　52･53　寺沢　二郎　52･53　古田八重子　52～54　園原　あき　52･53　平沢　博　52･53　知久　倭夫　52･53　宮沢　和広　52　堀木　誠　52　桜井　敬子　52　今井寿美子　52　後藤　聡　52　筒井　弘　52　下平　正利　52　椎谷　裕子　52　福沢　秀志　52　林　大二　52　林　登美人　52　松村　全二　52　小林昭治　52　市瀬　洋吉　52　古村　仁士　52　松沢　英男　52　梅村金彦　52　浅井　舎人　52　林　三男　52　松永　淳　52　久保田正男　52　櫛原　洋治　52　北原　千歳　52

整理作業協力者　吉川紀美子　57～59　池田　幸子　57～59　宮沢　智子　57～59　宮沢ナナ子　57～59　橋本　博子　57～59　木下　恒子　57～59　小平不二子　57～59　山田富美子　57～59　山口やす子　57～59　代田　幸子　57～59　北原　重子　57～59　兼子　暢子　57～59　岡田　紀子　57・58　小林　千枝　57・58　櫛原　勝子　57　柳沢　君恵　58・59　斉藤　徳子　58・59　宮下　明子　58　小池　貴子　58　山本　桂子　58　高島　亜矢子　58・59　米山　綾子　58　村松　宣彦　58　佐々木いさ子　59

3　調査の経過

昭和51年12月4日の委託契約締結を受け、現地での作業着手の準備作業を行い、52年1月20日欠野遺跡において鍬入式を行い実際の作業開始となった。

その後、流田・欠野遺跡の調査は若干の資料を検出したのみで終えたが、田中・倉垣外地籍の調査進行にともない当初の予想をはかるに上回る遺構・遺物が続出し、内容的にも極めて重要度の高いものが多く、当初計画は大きく変更せざるをえず、年度途中での契約変更を何回か行ない、なお、年度毎の契約前に再三にわたり協議を行なったため、年度当初からの作業開始ができないことも単年度にとどまらなかった。そのため、実質的には調査期間の中で約1年分の空白が生じ、同一遺跡の調査が半年あるいは1年以上の間を置いて行なわざるをえないこともあった。

また、整理作業は現地調査終了後、3ヶ年で作業実施の協定書を取り交し、57年度から59年度までの3年度にわたり実施した。

4　調査指導・見学者

文化庁　小林　達雄　河原　純之

奈良国立文化財研究所　坪井　清足　田中　琢　工楽　善通　山中　敏史　沢田　正昭　秋山　隆保　木下　正史　金子　裕之

年度別調査面積

遺跡名記号	用地内面積 ㎡	調査実施総面積 ㎡	年度別調査面積 51年	52年	53年	54年	55年	56年
流田 NAR	4,200	235	235					
欠野 KAK	1,710	220	220					
田中 TAN	1,700	1,612	1,612					
倉垣外 KUR	2,080	2,914	984	1,390	360		180	
恒川A GOA	1,800	3,208		1,728	780			700
恒川B GOB	2,100	2,910					2,910	
阿弥陀垣外 AMD	1,440	1,857		1,157				700
新屋敷 ARY	3,900	3,564		1,050	1,014	1,500		
新井原 ARB	900	870			450	420		
新井原11号墳 ARBK11	400	400			200	200		
新井原12号墳 ARBK12	600	600			50	550		
高森新井原 TARB	1,320	440				440		
	22,150	18,830	3,051	5,325	2,854	3,110	3,090	1,400

年度別契約期間と契約金額

年度	契約期間	契約金額	調査対象遺跡	備考
51	51.12. 4～52. 3.26	10,000,000	NAR.KAK.TAN.KUR	
52	52. 4.27～53. 3.20	20,000,000	KUR.GOA.AMD.ARY	
53	53. 5.13～54. 3.20	14.880.000	KUR.GOA.ARY.ARB.ARBK11･12.TARB	＊1
54	54. 6.27～55. 3.20	17,220,000	ARY.ARB.ARBK11･12.TARB.	
55	55. 6. 5～56. 3.20	18,540,000	KUR.GOB	
56	56. 8. 1～57. 2.20	13,958,000	GOA.AMD.	
57	57.10. 1～18. 3.31	15,030,000		＊2
58	58. 4. 1～59. 3.31	20,380,000		＊2
59	59. 4. 1～60. 3.20	9,590,000		＊2
		139,598,000		

＊1　当初契約　¥13,020,000　3月6日変更契約

＊2　整理作業

県教委文化課　樋口　昇一　今村　善興　丸山　敞一郎　関　孝一　臼田　武正
小林　孚　郷道　哲章

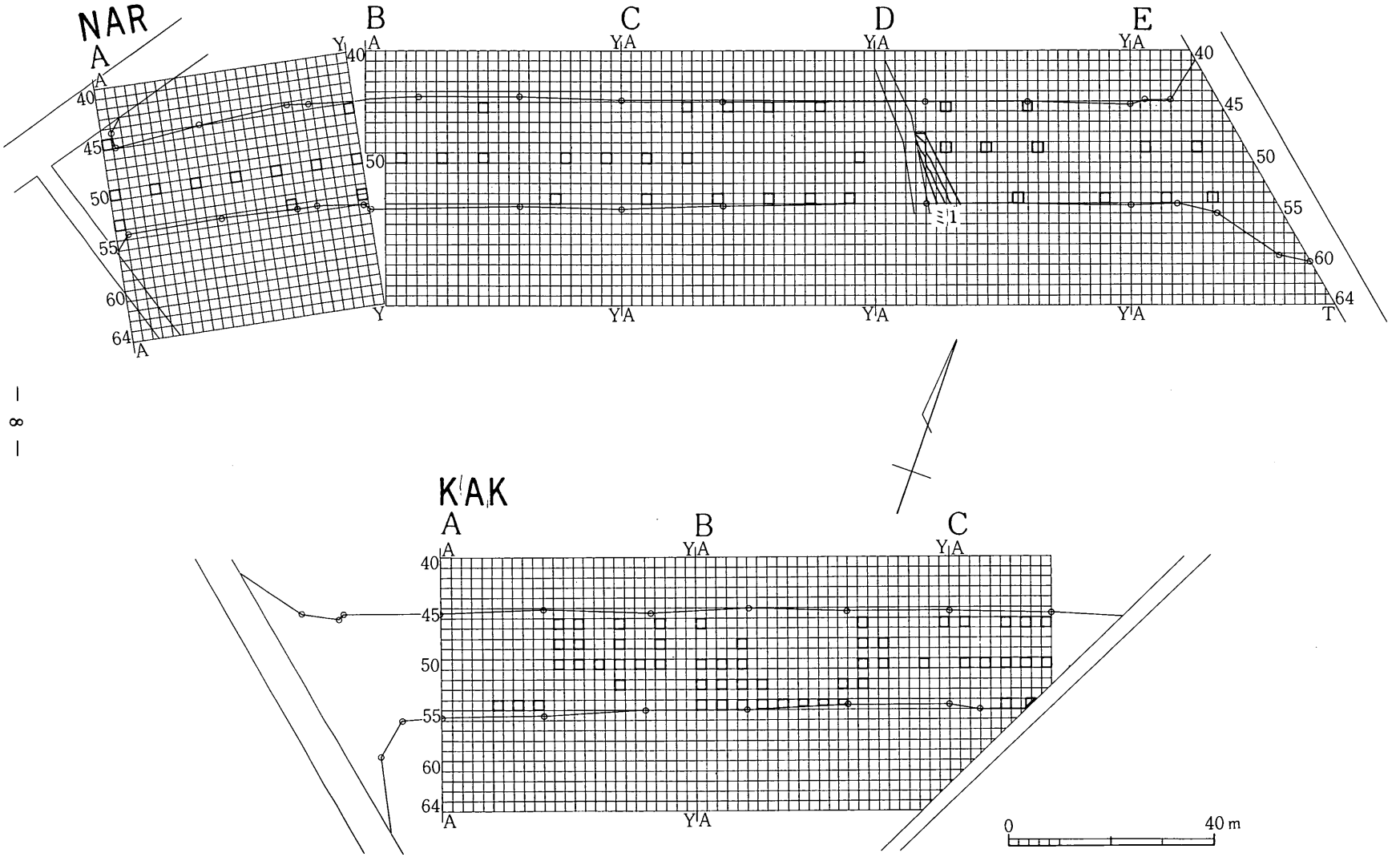
研究者　会田　進　青沼　博之　赤羽　義洋　赤羽　一郎　浅輪　俊行　飯塚
政美　池田　啓三　石岡　憲雄　石川日出志　石黒　立人　石部　正志
一志　茂樹　井上喜久男　岩崎　孝治　岩崎　卓也　岩野　見司　江崎
武　遠藤　令仁　小穴　喜一　大橋　康二　岡田　正彦　小口　妙子
加納　俊介　片山　徹　神村　透　川江　秀孝　北村　亮　木下平八郎
木下　政利　桐原　健　窪寺　勝則　黒坂　周平　気賀沢　進　小池　孝
粉川　昭平　小平　和夫　小林　秀夫　小林　公明　小林　康男　小
林　深志　小松原義人　五味　一郎　斎藤　孝正　酒井　幸則　笹岡　秀
郎　笹沢　浩　佐藤　信之　佐藤　明人　柴田　稔　下條　信行
遮那藤麻呂　白石太一郎　鋤柄　俊雄　鈴木　敏則　高桑　俊雄　高根
信和　高見　俊樹　田口　昭二　竹内　稔　竹内　一徳　竹田　輝雄
竹村　庄平　千村喜万男　土屋　積　友野　良一　直井　雅尚　長崎
元広　楢崎　彰一　西口　徹　西野　秀和　花岡　弘　林　茂樹　林
幸彦　林　麻里子　原田秀文　伴　信夫　坂野　和信　樋口　昇一
福沢　幸一　藤沢　良裕　藤下　典之　藤本　正行　藤森　美枝　堀　知
哉　前角　和夫　前田　潮　松井　一明　松浦宥一郎　松島　信幸
松永　満夫　丸茂　武重　丸山　弥生　御堂島　正　宮坂　直子　宮
坂　光昭　宮下　健司　宮下　操　百瀬　新治　百瀬　長秀　森嶋
稔　森田　稔　森田　健一　八木　光則　矢口　忠良　矢島　宏雄
山下　泰男　山田　瑞穂　山田　鉱一　吉永　陽三　米沢　義光　米山
一政　若尾　正成　和田　博秋　渡辺　重義

団体等　橋北老人学級　下伊那教育会考古学委員会　座光寺小学校３年生・６年生
下久堅婦人会　竜江成人学級　市会総務文教委員会　飯島小学校６年生
飯田あるこう会　岡谷考古学友の会　座光寺史学会　伊那史学会

報道関係　信濃毎日　中日　南信州　信州日報　サンケイ　毎日　朝日　読売
ＳＢＣ　ＮＨＫ　ＮＢＳ

5　調査の実施と方法

調査実施にあたり、既出遺物等からみていくつかの遺跡群の持つ重要性を指摘されていたが、つきつめるとばく然としたもので、かなり重要な何かが出るだろう程度のもので、具体的な問題点解明に向けての調査はできにくいものがあった。



第1図　NAR　KAK 遺跡調査区域図及びグリット図

しかし、発掘調査自体が、基本的には遺跡の破壊そのものであることを常に認識し、できる限りの記録をし、後世に残すことに努めたが、一方では期間等の制約もあり、調査範囲内で極力効率的な作業を心がけて実施した。

なお、遺跡及び地籍毎に略号を与え、遺物注記等についてはすべて略号とした。

1）流田遺跡　NAR（第1図）

事前の表面採集でも、わずかの遺物があっただけで、遺跡の実態は全く不明であり、かつ、路線内の延長が200mを越えるため、2m四方のグリッドを設定し、6～8m間隔に試掘を行ない、全体の状況把握に努め、その結果一部の拡張をしたにとどまった。

路線計画上の中心杭No.5を基準に路線中心線の右（南）側を50ラインとし、左右を2ケタの数字で現わし、基準杭を基点に西から東へA～Yまでの50m・25グリッドを一区とし、順次A～E区とした。

なお、A区とB区の境で路線が曲るため、B区以降はグリッドの方向を移動して設定した。

2）欠野遺跡　KAK（第1図）

NARと同様に中心杭No.18を基準にA～C区Jグリッドまでを設定した。

調査前の表面採集により、若干の遺物が採集され、NARより試掘坑の密度を高め調査した。結果はNAR同様に遺構等の検出はなく、試掘調査のみで終了した。

3）恒川遺跡田中地籍　TAN　同倉垣外地籍　KUR（第2図）

路線中心杭No.24を基準にNo.29までをTANA・B区とし、No.29～36までをKURA～C区とした。本来同一遺跡であるが、調査前の区分及び契約等の関連で、グリッドの呼称は別々にしたが、遺構名等については一連番号を付した。

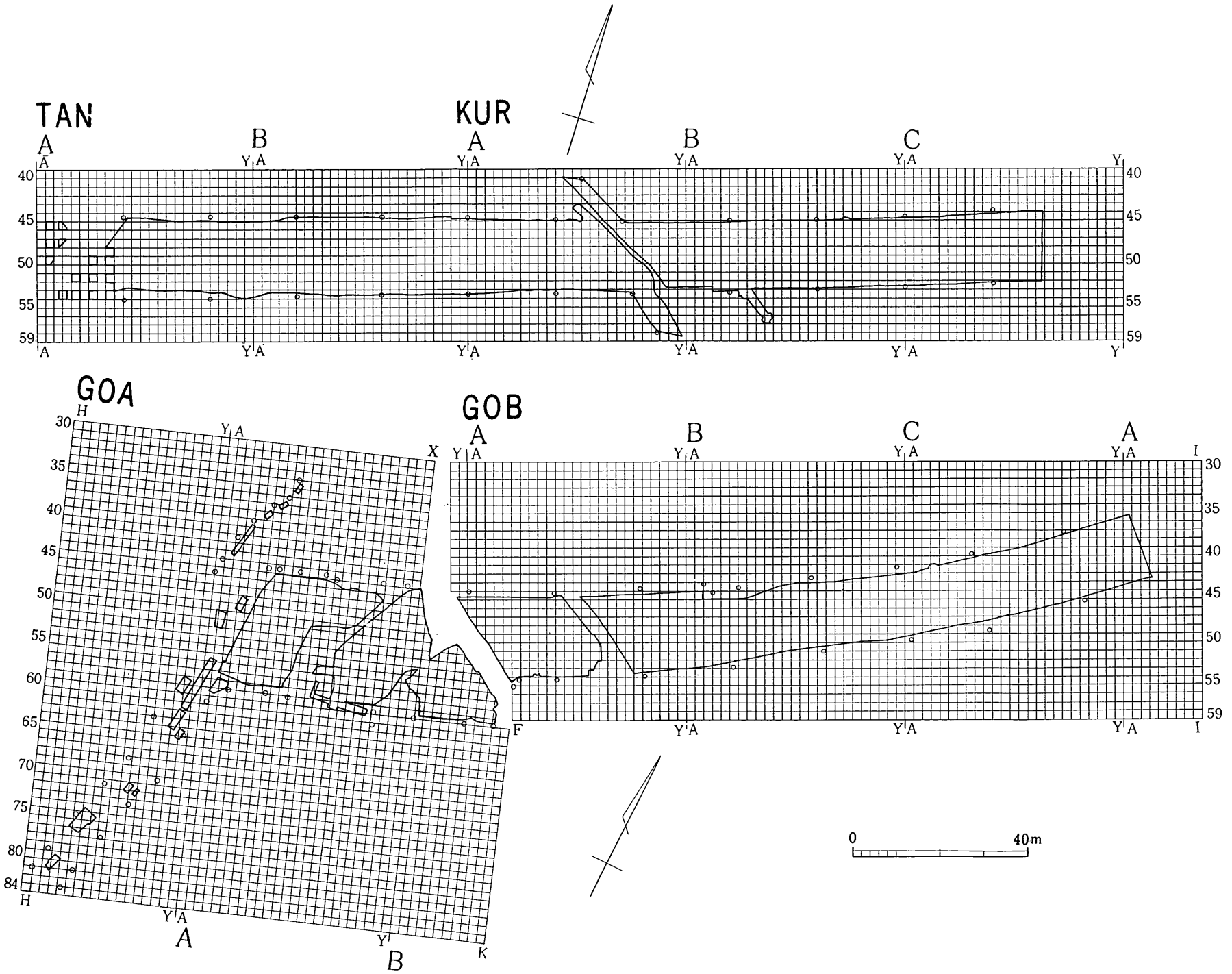
TANAIまでは試掘を行ったのみであるが、TANAJからKURCPまで道路敷部を除き路線内全面を調査した。

なお、C区の後半と北接するGOAは既存道路の付け替えのため、路線形が不規則となり、グリッド設定上重複地点が生じ、図上ではGOAのA区に調査地点を記載し、GOAAB44からAI34の調査坑は、小段丘上にあり、KURに属する。

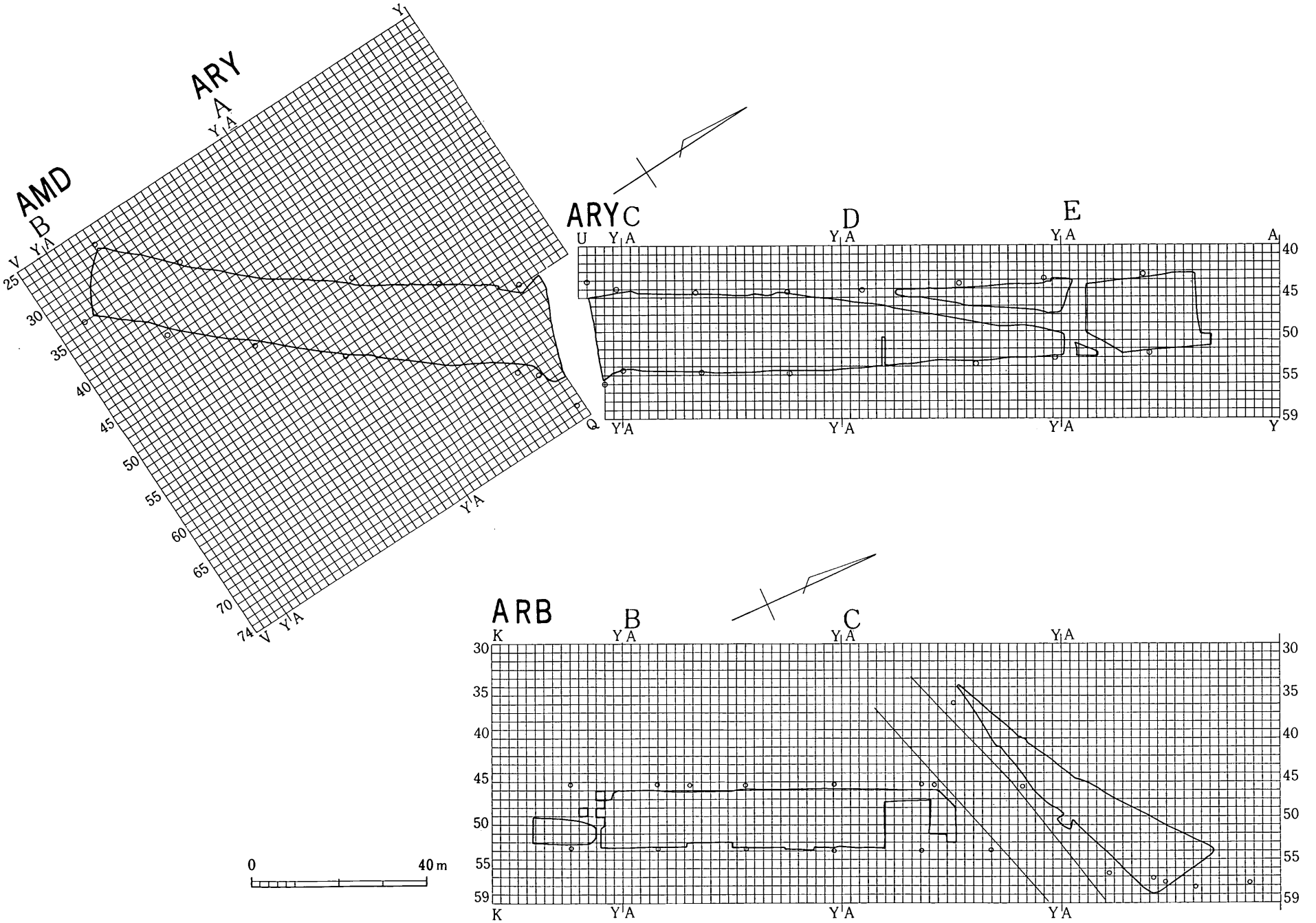
4）恒川遺跡恒川A地籍　GOA（第2図）

中心杭No.36をAAとし、BKまで設定した。また、AAのKUR側をY区としたが、実質的には、現道下がほとんどであり、一部道路を付け替えてYJ82～YY57までの間を断続的に調査したにとどまった。

GOBとは一連の遺跡であるが、便宜的に道路により地籍を分け、遺構番号もGOAのみで付し



第2図　TAN・KUR　GOA　GOB　調査区域図及びグリット図



第3図　AMD　ARY　ARB　調査区域図及びグリット図

た。調査はできなかったが、両地籍境の道路下はグリッド設定上重複する部分がある。

KUR寄りのA区前半は、湿地帯であり、遺構としての把握が難しく、各グリッド毎での記録、遺物取り上げを行った。

用水路・道路が用地内にあり、極力全面調査するよう努めたが、面積の割に排土量が多く、狭い範囲で土を移動しながらの調査となり、結果として不規則な調査範囲となり、GOB境の道路敷下の他にも未調査部が生じてしまった。

5）恒川遺跡恒川B地籍　GOB（第2図）

路線は本地籍内で大きく曲がるが、中心杭No.39とNo.40を結んだ線を基準方向とし、No.39を基点としてC区までグリッド設定し、道路及び水路部分を除いて全面調査した。先述のとおり、A区の一部がGOAと重複するとともに、反対側の本来本地籍D区にあたる部分もAMDと重複する。AMDとGOB相方の位置関係が不明確であり、AMDA区として調査したが、最終整理段階の遺構番号は、GOBで統一した。

6）阿弥陀垣外遺跡　AMD（第3図）

過去に建物の礎石が出たと伝えられ、地名からもある程度の規模を持つ建物址の存在が指摘されていたため、他遺跡の調査区設定に路線方向を基準としたのと異なり、南北にA～Yのアルファベットを、東西に50を基準とする2ケタの数字を用いグリッドを設定した。

南接のGOB、北接のARYとは本来同一遺跡であり、調査前に本遺跡の範囲を明確にはできず、南側GOBとは道路によって区切り、北側ARYとは中心杭No.50を基準として、北側をARYA区、南側をAMDB区とした。AMD、ARYの区画設定が便宜的であるため、両遺跡にかかっての遺構検出という状況が当然生じ、調査進行に合わせいずれかの遺跡に該当させた。

路線内のほぼ全域を調査し、前述の礎石関連の遺構把握に努めたが、中世以降の南大島川氾濫による礫石の堆積である可能性が強く、上下層2回にわたる調査となった。

7）新屋敷遺跡　ARY（第3図）

AMDとの接点をA区の基準とし、A区のみAMDと同一方向でグリッド設定した。市道をはさみ、中心杭No.53を基準として路線方向に合わせ、北側へC～E区を設け、南側をB区とした。そのため、B区の範囲はごくわずかとなった。

道路・水路部を除き、全面を複数年度にわたり調査した。

8）新井原遺跡　ARB　新井原11号古墳　ARBK11　新井原12号古墳　ARBK12（第3図）

中心杭№62を基準とし、路線方向に合わせグリッドを設定した。グリッド設定は、ARBK11・12の範囲も遺跡に合わせ一連のものとした。

ARBK11の範囲はBA～BNの東半部が路線内で、主体は用地外にあたる。ARBK12はC・D区のほぼ全域にわたる。

A区は、南大島川旧河道部の凹地にあたるため、ARBK11の前庭部の可能性のあったAO50～AV53にかけて拡張調査を行ったが、他の部分については6～8m置きに試掘調査を実施したにとどめた。

B区は、全面を調査し、ARBK11が中・近世の経塚として再利用されていたため、古墳の調査と下層縄文期を含め3回にわたった。

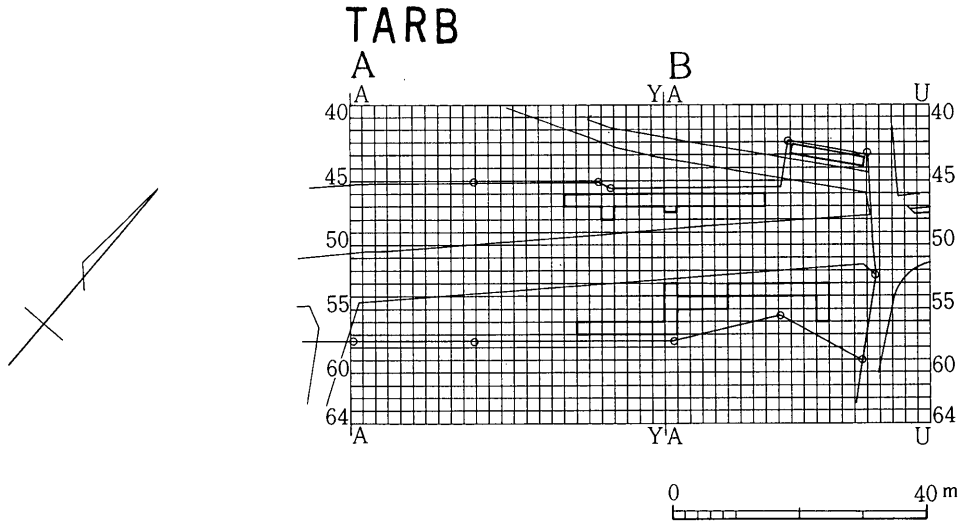
C・D区は国鉄飯田線敷地部及び現国道153号敷地部の調査は不可能であり、道路そのものが高架のため橋脚部以外の破壊されない箇所を調査対象外としたため全面にわたる調査とはならなかった。

なお、DRまでが段丘面上に連続し、その先は南大島川による氾濫原となり、10m～8m間隔で現道両側を試掘調査したが、遺構遺物が出土せず拡張しての調査は行なわれなかった。

9) 高森町新井原遺跡 TARB（第4図）

現国道153号とバイパスの接続部にあたり、現道の両側が調査対象であった。調査可能範囲が狭いため、中心杭№76を基準としてグリッド設定後、路線方向に合わせトレンチにより調査した。トレンチ調査の状況により拡張等の検討をすることとしたが、拡張しての調査は不要と判断して調査を終えた。

（小林正春）



第4図　TARB　調査区域図及びグリット図

II　遺跡群の立地と環境

1　座光寺地区の概要

飯田市座光寺は、市街地の中心から約5㎞北方にあり、南を下伊那郡上郷町、北を同高森町にはさまれ、行政区画上は飛地となっている。

座光寺地区は、東は天竜川・西は中央アルプス・南は土曽川・北は南大島川により区切られた、旧座光寺村である。

天竜川河成段丘を基本に数段の階段状に遺跡が立地する。微地形は、南大島川・土曽川を始めとする小沢川により、浸食や扇状地の形成等により一様ではない。

最上段の山裾部から高位段丘上段は、弥生時代後期の小規模な集落がある他は、縄文時代の遺跡が主体となる。縄文時代中期の大集落と予想される大門原遺跡は古くから知られ、高位段丘上の代表的な遺跡である。

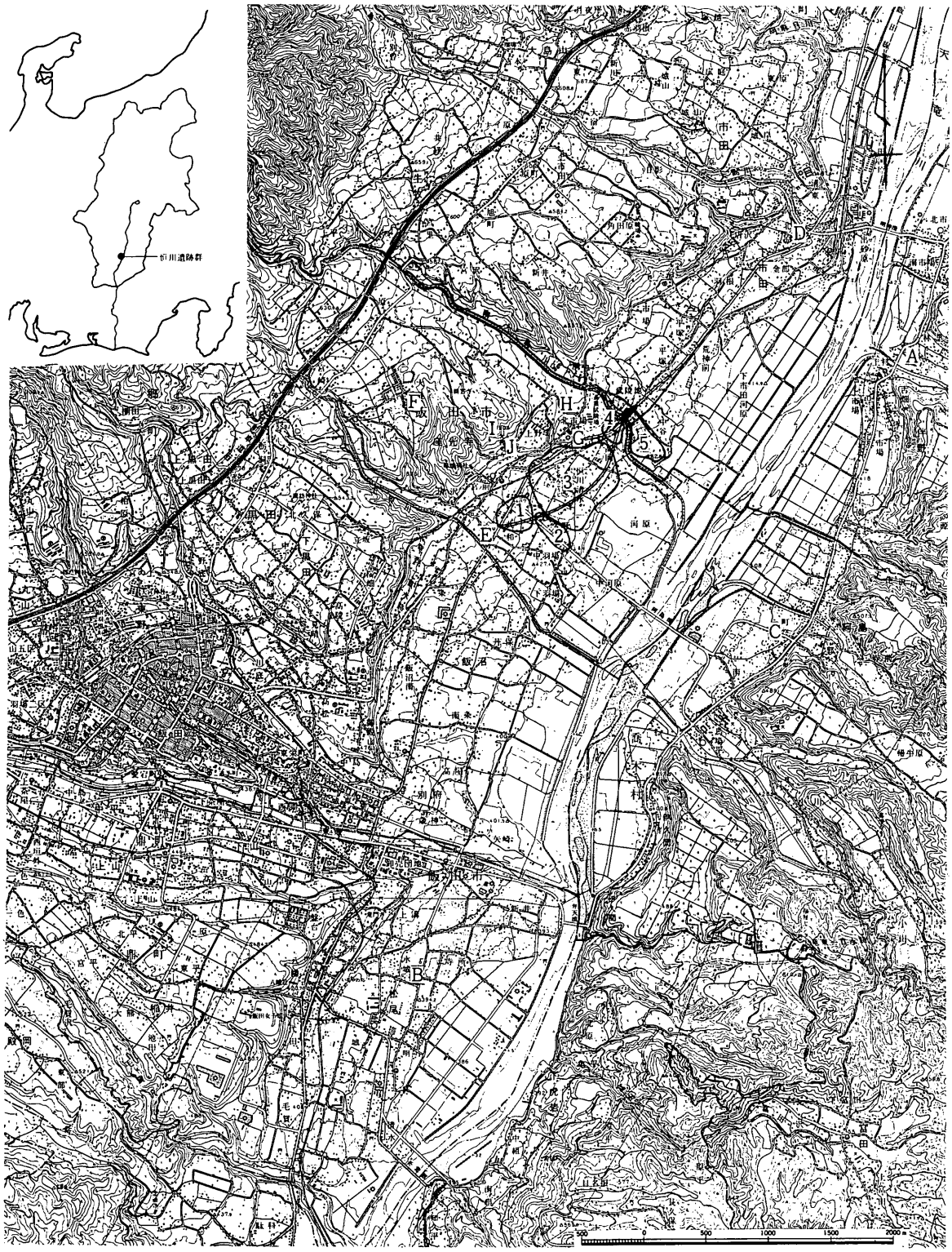
高位段丘下段は微地形の変化が著しく、上段寄りおよび段丘中央部付近は、小沢の開析が始まり、一部に湧水もみられる。縄文時代の遺跡は上段に比べ減少傾向にあり、湧水を基調として中規模な弥生時代後期の集落が形成され、座光寺原・中島の両遺跡は当地方の土器編年上の標式遺跡となっている。段丘先端部は、比高差50m前後で急傾斜で下位段丘に至り、中世末期の山城が造営されている。

中位段丘は、小規模なもので段丘面上における遺跡の実態はほとんど不明であるが、南端部に下位段丘からの斜面を利用した奈良時代の金井原瓦窯址、名刹元善光寺などがある。北側南大島川寄りの段丘端部に畦地古墳群が形成されている。

低位段丘は、今次調査の対象となった恒川遺跡群の立地する面で、南大島川による扇状地や、段丘面がそのまま残存する部分など微地形は各所で変化がみられる。段丘面中央付近に確認できる比高差2～5mの小段丘があり、北半の南大島川寄りは、扇状地となり現形は連続する面となっている。

中位段丘崖下及び中央部小段丘崖下に湧水帯が連続してあり、各時代を通じて安定した給水地に活用されていたと考えられる。特に小段丘と扇状地の接点に「恒川清水」があり、今回の道路建設により枯渇問題も生じてはいるが、つい最近まで周辺住民の生活水として活用されていたもので、恒川遺跡群における生活拠点のひとつともいえる湧水である。

恒川遺跡群の範囲は地形等によりほぼ四囲を区切ることができ、本段丘面の北半部を占める。東西は段丘崖により区切られ、北は南大島川旧河道の凹地があり、明瞭に画することができる。南側は、現地形では連続する面であるが、今回の調査等により、西側段丘崖下から湿地帯がほぼ



第５図　恒川遺跡群位置図及び周辺主要遺跡図

（１．流田遺跡　２．欠野遺跡　３．恒川遺跡群　４．新井原遺跡　５．高森町新井原遺跡
Ａ．林里遺跡　Ｂ．寺所遺跡　Ｃ．阿島遺跡　Ｄ．北原遺跡　Ｅ．正泉寺遺跡　Ｆ．座光寺原・中島遺跡
Ｇ．高岡１号古墳　Ｈ．畦地１号古墳　Ｉ．北本城古墳　Ｊ．金井原瓦窯址）

第6図　恒川遺跡群調査位置図及び周辺図

東西方向に存在することが確認され、旧地形における南端部を示す。

恒川遺跡群内にある遺跡名を列挙すると、恒川遺跡（恒川A地籍、恒川B地籍、田中・倉垣外地籍、池田地籍）、阿弥陀恒外遺跡、薬師垣外遺跡、新屋敷遺跡、古瀬平遺跡がある。

一応の遺跡群範囲は前述のとおりであるが周辺遺跡も当然本遺跡群と深い関連があるわけで、特に西及び北方に分布する高岡･新井原の古墳群は密接なつながりのあることはいうまでもない。

高岡１号古墳（高岡の森）の北に分布する新井原古墳群及び新井原遺跡は、南大島川の浸食、堆積により尾根状の微地形を成し、縄文時代中期後半の集落を構成する。また、古墳の他にも火葬墓等もあり、弥生時代から中世に至る墓域として位置づけられる。

今回の調査において、流田・欠野の両遺跡は、わずかの遺構・遺物を検出したのみであるが、流田遺跡の西方に位置する正泉寺遺跡は、弥生時代中期末の好資料が出土している。

本段丘の下段は基本的には天竜川の氾濫原であるが、一部に中間小段丘があり、弥生時代から平安時代の遺跡が立地する。段丘直下は、湧水が連続的にあり、湿地帯を形成しており、恒川遺跡群の主たる生産基盤と思われる。

恒川遺跡群周辺の状況としては、北接する高森町下市田の同一段丘面上に、中谷遺跡をはじめとする弥生時代中期から中世に至る遺跡群があり、南接する座光寺中羽場地区、更に土曽川をはさむ上郷町飯沼地区の遺跡群も弥生時代中期以降連続する状況を示し、広範囲にわたり弥生時代中期以降における当地方の中心的な地帯であり、中でも恒川遺跡群がその中核を成していることは明らかである。

2　流田・欠野遺跡

流田遺跡は南接する上郷町境の土曽川から約300m北の、現国道153号とバイパスが接続する付近に位置し、元善光寺から南へ約400m隔てた所である。

西隣りに弥生時代中期末の好資料を出土した正泉寺遺跡が、北は同じくバイパス用地内となる欠野遺跡の北西端に連続する。

微地形をみると、西側現国道付近をピークとして東方向にゆるく傾斜し、土曽川による扇状地の一画を成している。

欠野遺跡は、流田遺跡に連続してあり、中心となる範囲はバイパス路線より南東側の段丘先端寄りであり、調査地点は遺跡の北端部にあたる。

土曽川による扇状地の終る付近から、段丘面にかけての遺跡で、南東側は段丘端まで至り天竜川氾濫原を臨む。また、東側は欠野沢という小河川により地形を区切られ、恒川遺跡群へと続く。

3　恒川遺跡田中・倉垣外地籍

恒川遺跡群として把えた範囲のうち南西部にあたる。

低位段丘面上の小段丘先端部に位置し、東及び南側はその段丘崖によって一旦区切られ、恒川A地籍へと続いている。現地形でみると西側は、わずかの凹地があるが欠野遺跡からほぼ連続する。しかし、今回の調査により、約20m幅の凹地部分に、古い流路が認められ遺跡群の西端を示している。現在その付近を欠野沢という井水が流れており、本来自然の小河川であったものを、中世もしくは近世において改修したものと判断される。

北及び西側は中位段丘崖下まで連続する面を成し、恒川遺跡池田地籍・薬師垣外遺跡・古瀬平遺跡へと遺跡そのものも連続している。

結局、田中・倉垣外地籍は、西方の凹地及び東方段丘崖下に湧水による湿地帯を控えた、小段丘尖端の舌状台地上に立地する遺跡である。

4　恒川遺跡恒川A・恒川B地籍、阿弥陀垣外・新屋敷遺跡

恒川遺跡群の北東部分のかなり広範囲にわたる地帯で、恒川清水を範囲内に含み、恒川Aから北東方向へ恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷へと連続している。

先述の倉垣外地籍東端の小段丘崖が、遺跡群ほぼ中央辺の恒川清水で終り、その北方一帯は連続する面となる。本来、小段丘面が北方まで連続していたと考えられるが、南大島川による氾濫が段丘面を覆い、扇状地を成している。恒川清水付近が扇端部に、阿弥陀垣外・新屋敷遺跡が扇央部にあたる。恒川清水が、小段丘と扇端部の接点にあり、一連の湧水の北端を成している。

恒川清水から南に続く湧水帯の南東側に恒川A地籍が位置し、基本的には低位段丘の下段小段丘面上に立地し、湧水ぎわの湿地帯利用の生産地と、それに立脚した集落址の存在が考えられる。

恒川A地籍の北側に連続して、恒川B地籍・阿弥陀垣外遺跡があり、南面した緩傾斜の扇状地の扇央から扇端部にあたり、比較的乾燥した地域である。

扇央部の阿弥陀垣外遺跡の西側は薬師垣外遺跡に連続し、微地形でみると尾根状に高まりをみせる所である。

恒川遺跡群の北端部は新屋敷遺跡で、北側は南大島川の旧河道と考えられる凹地があり、地形的に北側の新井原遺跡と区切られる。阿弥陀垣外遺跡等と同様に乾燥した範囲であり、北西方向には高岡1号墳を中心とする古墳群が分布する。

なお、恒川A地籍から新屋敷遺跡にかけての東側は段丘端まで至り、段丘崖下は天竜川氾濫原となっている。新屋敷遺跡の北半部の段丘崖下は、氾濫原との中間に小段丘面があり、弥生時代中期から中世にかけての遺跡がある。

5　新井原遺跡・新井原古墳群

新屋敷遺跡の北側に位置し、調査地点は南大島川の現河道と旧河道にはさまれた舌状台地先端部である。

西側は、段丘面が西方に広がり、石行遺跡に連続しているが、南大島川の氾濫土砂に覆われ、東面する緩傾斜を成している。

高岡１号古墳の北側一帯は、現存・湮滅を含め30数基の古墳があり、今回の調査範囲内に新井原11号及び12号の２古墳がある。なお、かつて平安時代の火葬墓が発見され、今次調査においても弥生時代末もしくは古墳時代前期の方形周溝墓などが検出され、かなり長期にわたって、南方に分布する恒川遺跡群の墓域的性格の強い遺跡である。

6　高森町新井原遺跡

新井原遺跡の北側南大島川をはさんだ地区は、行政区画上は下伊那郡高森町下市田にあたる。

南大島川をはさみ両側の小字名が新井原であり、いずれも新井原遺跡である。

地形的にはいずれも、同標高の天竜川河成段丘上にあり、共通する点が多いが、微地形では若干の差がある。いずれも南大島川の影響を受けているが、高森側によりその傾向が強く、段丘面を南大島川の氾濫による土砂が覆い、東面した連続する傾斜地となっている。

バイパスと現国道が接続する付近は、南大島川の氾濫によるかなり厚い堆積があるが、その東方の段丘端部付近は、弥生時代中期から平安時代にかけての大規模な集落の存在が予想される。

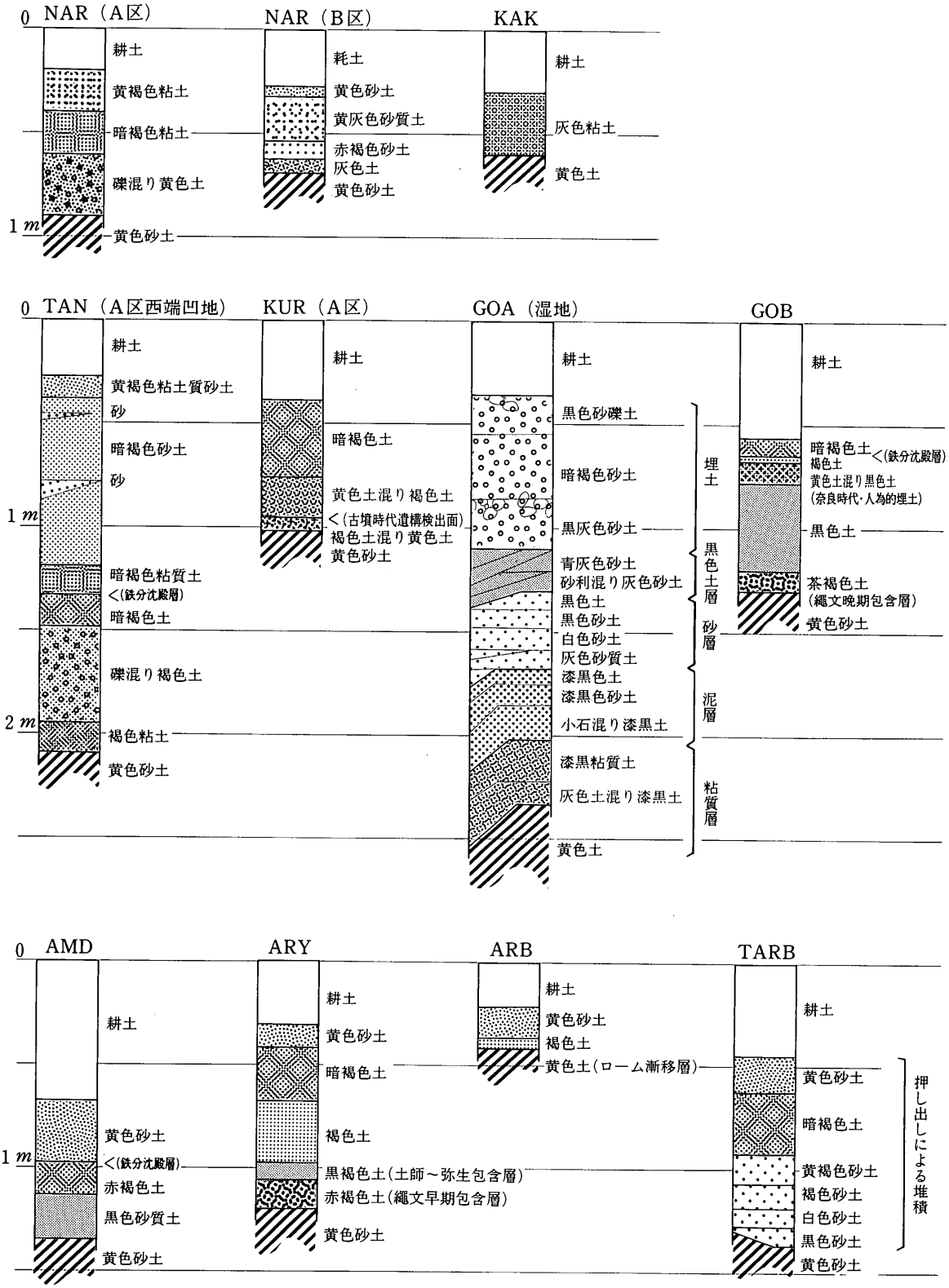
なお、この北東に続く中谷遺跡は、南大島川による氾濫等の被害のあまりない所で、縄文時代中期・弥生時代中期・古墳時代後期・平安時代などの集落が重複した地帯である。

7　各遺跡の土層（第７図）

調査対象の路線延長が約1500mあり、同一段丘面上にすべての遺跡が立地し、基本的な土層状態は共通する点が多い。しかし、前述のとおり各遺跡毎の微地形同様に、土層状態も変化がある。

１）NAR・KAK

NARは全体として黄色砂礫土を基盤に順次４～５層の堆積があり、いずれも砂及び礫を内包する土質で、土曽川あるいは上位の段丘崖からの氾濫による堆積が考えられ、A区にその傾向が強く、基盤から地表面までの堆積はかなり厚い。D･E区については砂層の堆積が少なく、全体的に粘質土の割合が高くなる。



第7図　恒川遺跡群基本土層柱状図

KAKは黄色土が基盤となり、NARE区と共通し、全体に粘質傾向が強い。基盤上の堆積はあまり厚くなく、灰色粘質土の上がすぐ耕土となる。

NARE区、KAKの粘質の強い灰色土は近世から近代において、瓦用土として用いられたこともあった。

なお、黄色土の下部は、青灰色の粘質砂礫土で、天竜川による堆積である。

2）TAN・KUR

TAN西端部は、凹地部分で土層変化が著しく、自然凹地が埋没しており、自然か人為的かの判断は難しい。凹地の最深部は天竜川堆積面まで至っている。

TANからKURにかけての基盤は黄色砂土で、その上に4～5層の堆積が観察された。遺構のほとんどは基盤の黄色砂土面で検出し、上層の面での検出は困難であった。

KURC区は東方段丘崖に向って傾斜し、A・B区等の基盤であった黄色砂土はほとんど認められず、段丘を形成する天竜川の堆積による砂礫層が基盤となり、遺構もこの面で検出した。

3）GOA

KURの段丘崖下に湿地帯があり、この部分の土層は複雑な様相を示す。段丘崖下は急激に落ち込み、基盤は段丘を形成する天竜川による堆積の砂礫層で、南大島川による扇状地を成す黄色砂土がそれを覆い、東方GOB寄りに徐々にその堆積が厚くなる。

湿地部は、段丘崖下から20数mの幅であり、基盤からは15～20cmの砂・泥・砂礫が互層となり堆積している。地表下1m余で、黒色土及び青灰色砂土の水平を成す面があり、古い耕作面と考えられる。それより下部は、各層において自然水流痕があり、上層が下層をえぐり込んだりして、複雑な土層状況となっている。

旧耕作面から上は、礫を相当量含み、礫間に空白部もあり、人為的に埋めた土と判断され、伴出する遺物からみて中世以降に造成されたと考えられる。

GOB寄りの箇所は、扇状地を成す黄色砂土を基盤として、その上層に1m程の砂質土が5層程堆積している。周囲に比べ若干低くなった箇所への自然堆積がかなりあったと考えられる。

この付近における遺構検出面は、黄色砂土上面である。

4）GOB、AMD

基盤となる層は黄色砂土であり、その下層の調査は行わなかったが、掘り込みの深い遺構底部にも天竜川による砂礫の面は確認できず、2mを越す堆積があったと考えられる。全体的にはほとんど単純な砂土であるが、同層内に花崗岩礫が帯状に入る箇所があり、基盤上面での微地形は単純な平面とはならず、凹凸がみられる。

GOB、AMDともに部分的であるが、基盤上に茶褐色土の層があり、縄文時代晩期包含層である。

遺構検出面は、茶褐色土上面か黄色砂土上面である。

AMDを中心としてほぼ全域の耕土直下に、基盤黄色砂土に類似し、若干粒の粗い黄色砂土があり、江戸時代に大水害のあったことを物語る可能性が強い。なお、黄色砂土下層の上面は、畑うね状の凹凸が認められる箇所があり、旧耕作面を示している。

基盤と上層の黄色砂土の間に、2～4層の堆積があり、縄文時代中期から平安時代の遺物を包含している。

5）ARY

黄色砂土を基盤とし、この上面が遺構検出面である。

AMD同様耕土直下に黄色砂土があるが、その厚さは半分以下である。その下層の基盤までは4～5層の堆積が確認された。地表面から基盤までの深さは1m前後と、GOAから続く一連の面としては最も浅い。

C・D区の一部の基盤上面に、ローム状の赤褐色土が分布し、縄文時代早期の包含層である。

GOB・AMD同様に花崗岩礫が帯状に基盤黄色砂土中に認められ、微地形に変化がみられる。

6）ARB

尾根中央付近で、耕土下にAMD同様新しい黄色砂土の堆積があり、その下層に褐色土をはさみ、基盤の黄色砂土となる。

地表から基盤までは、深い部分でも50cmと全体に浅く、特にARY寄りの斜面は直接基盤の黄色土となる。

なお、ARBK12盛土下部に、厚さ10～15cmの黒色土層があり、本来尾根上全体に黒色土が覆っていたと考えられる。

7）TARB

基盤は、対岸座光寺地区と同様の黄色砂土で、この上部に1.5m前後の堆積があり、いずれも南大島川の氾濫によるものと考えられる。耕土も含め、すべて砂、砂礫土であり、各層がいずれも一気に堆積したものである。

（小林正春）

III 遺　構

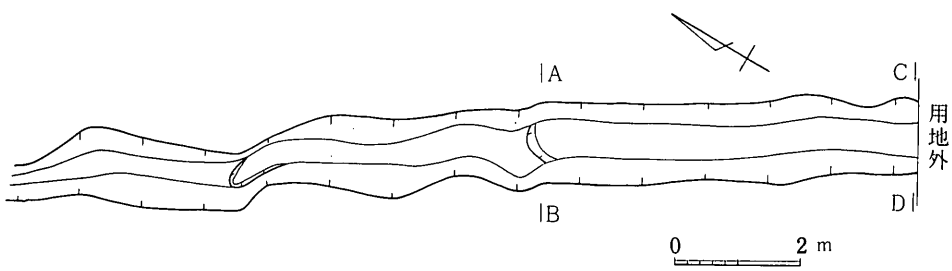
1　流田遺跡・欠野遺跡

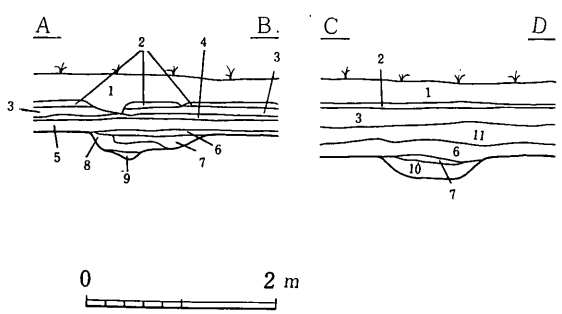
1）溝　址

溝址1（第8図）

NAR、KAK両遺跡を通じて唯一の遺構である。NARの東端寄りDE48～DH54にかけて検出された。バイパス路線方向とほぼ直交し、溝の方向はN30°Wを示す。確認延長は14mで、幅は1～0.5m・深さ20～10cmを測る。調査範囲内では、西側から東側に徐々に深くなり、2箇所で段を持って落ち込み、基盤の黄色砂土に掘り込まれる。覆土中に砂利層が認められ、壁・底面に砂が入り込んで乱れた箇所もあり、かなりの水流があったと考えられる。覆土中から古墳時代後期の土師器高坏片が出土しており、該期遺構の可能性もあるが、用地を横断する道路ぎわに検出され、それに沿って現在使用中の井水があり、それと関連する近世の新しい施設とも考えられ、時期の決定はできない。

（佐々木嘉和）





1．耕土
2．黄色土(粘質土混り)
3．黄灰色土(粘質土混り)
4．黄灰色土(3より黄味が強い粘質)
5．暗褐色土
6．灰色土
7．灰色砂土(こまかい砂・小礫を含)
8．灰褐色土(粘質土)
9．灰色砂土(7より細かい砂)
10．黒褐色土(粘質土)
11．赤褐色砂土

第8図　NAR　溝址

2　恒川遺跡　田中・倉垣外地籍

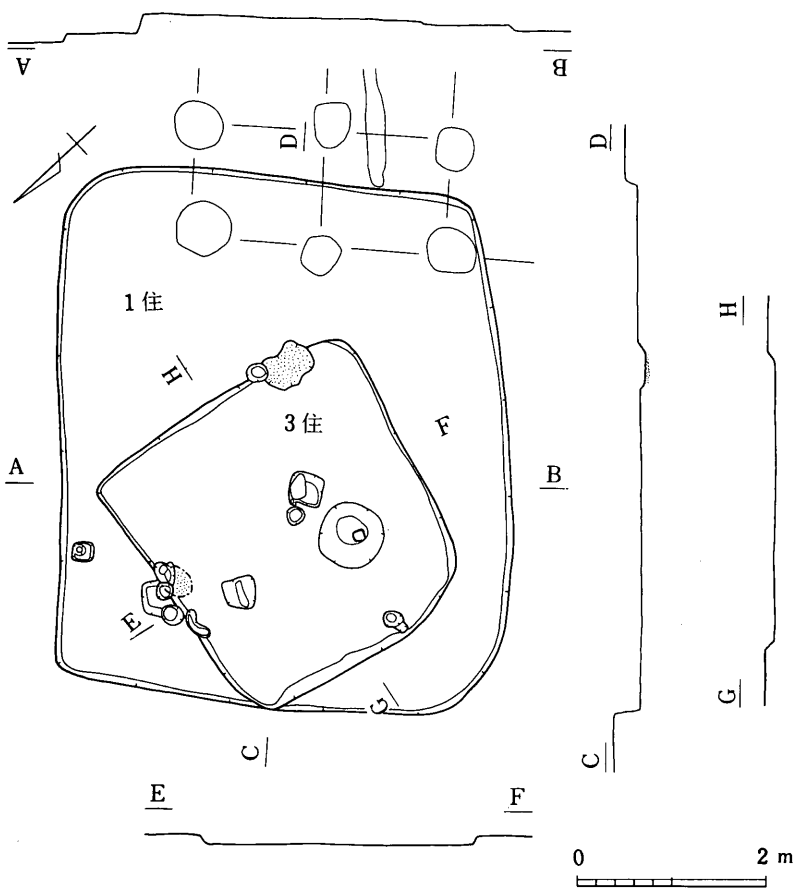
1）住居址

①　弥生時代中期

本時期の住居址は、田中地籍から倉垣外地籍にかけて10軒が散在する。調査範囲内での傾向としては、田中地籍の西側に集中するといえる。

1号住居址（第9図）

遺構　ＴＡＮのほぼ中央にあり、平安時代の3号住居址、建物址2に切られる。5.8×4.7mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N133°Eを示す。壁高は20～10cmを測る。床面はたたき状の堅い良好なもので、中央部に向かい全体が凹地状になり、床面上に若干の炭化物がみられた。床面上に小規模な穴が認められたが主柱穴と確定されるものはなかった。炉址は、南東壁寄りのほぼ中央に地床炉がある。30×25cmの不整形に浅い凹地内に焼土が検出されたが3号住居址に切られるため、原形等は不明である。

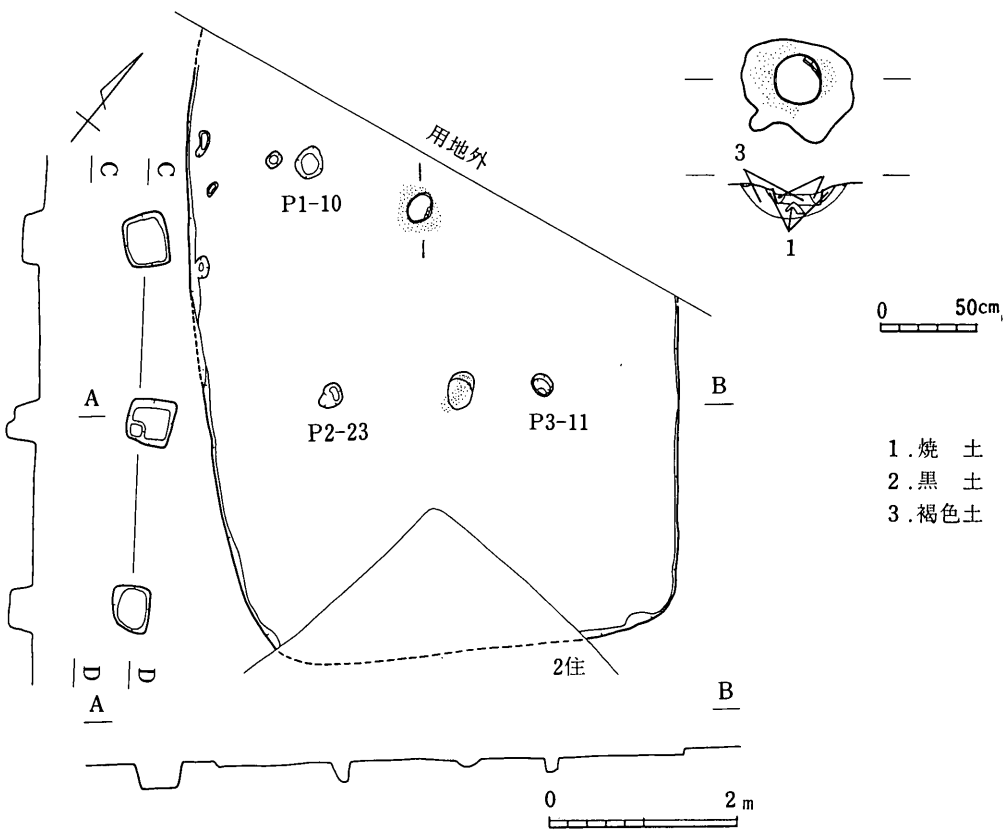


第9図　TAN・KUR　1号・3号住居址

遺物　遺物は相当量出土している。3号住居址に切られるため、かなりの攪乱があり、本来の遺物内容を示さないが、切り合い部以外の床面上からは、ほぼ完形の壺・台付甕など3個体が出土している。攪乱部も含め、弥生時代中期壺・甕、打製石斧・磨製石斧・磨製石鏃・同未成品がある。遺物から弥生時代中期恒川II期の代表的な住居址である。　（小林正春）

9号住居址（第10図）

遺構　TANBU46を中心に検出された。南東壁を2号住居址に切られ、北西側は用地外となる。調査範囲は最長6.6×4.4m、主柱穴等による想定規模は8×4.4mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN48.5°Wを示す。確認部における壁高は10～5cmで垂直に近い立ち上り状態である。床面は平坦で比較的堅い。主柱穴はP1～P3の3本を確認し、未調査部の1本を含め4本主柱穴と考えられる。炉址は2箇所に確認された。1つは北西側の主柱穴間のやや住居址中央部寄りにあり、壺胴部を用いた土器埋設炉である。焼土は土器内部より外側に多くみられ、炉址の掘り方は15cmを測る。他の1つは東南側主柱穴P2・P3のほぼ中央にあり、深さ8cmの地床炉と考



第10図　TAN・KUR　9号住居址、建物址5

えられるが、炉址覆土中全体に塊状の焼土が認められ、人為的に埋められている可能性もある。

遺物　出土量は少ないが覆土下層と床面から壺・甕・鉢の破片が出土し、他に打製石斧・磨製石斧・横刃型石庖丁・磨製石鏃未成品・砥石・台石がある。

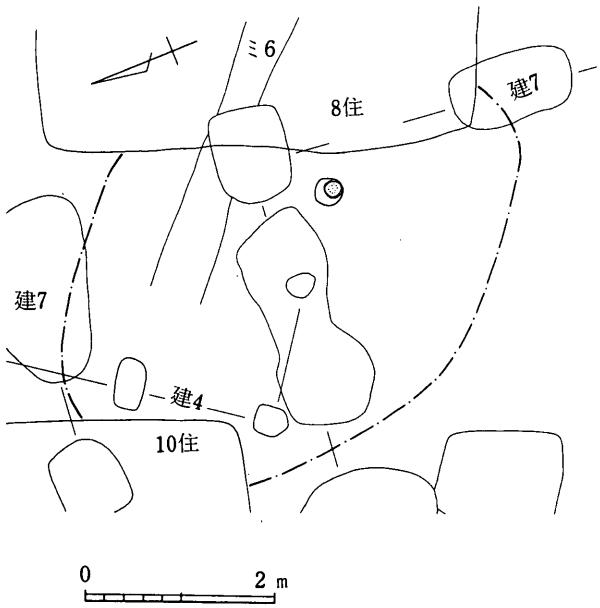
遺物等から弥生時代中期恒川II期の住居址である。　（佐合英治）

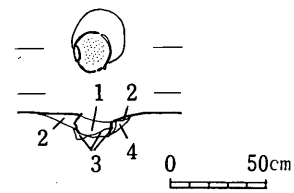
13号住居址（第11図）

遺構　建物址4・7を調査中、弥生時代中期遺物が集中して出土し、TANBJ52に土器埋設炉を検出した。8号・10号住居址、建物址4・7、溝址6に切られ、残存部はわずかの範囲で、炉址が確認されなければ、住居址としての把握も不可能であったといえる。該期他住居址と同じく竪穴住居址と思われる。壁の確認ができず、規模主軸方向など不明である。床面は明確に把握できなかったが、炉址の北側に甕・壺片がつぶれた状態で出土し、床面上にはり付いていたものと推定できる。甕の上半分を埋めた土器埋設炉は、甕の外側の土が焼けており、かなり使用されたと推測される。

遺物　第11図の一点鎖線が遺物出土範囲であるが、出土量は少ない。壺・甕、打製石斧・磨製石鏃未成品等がある。

遺物から弥生時代中期恒川II期である。　（佐々木嘉和）





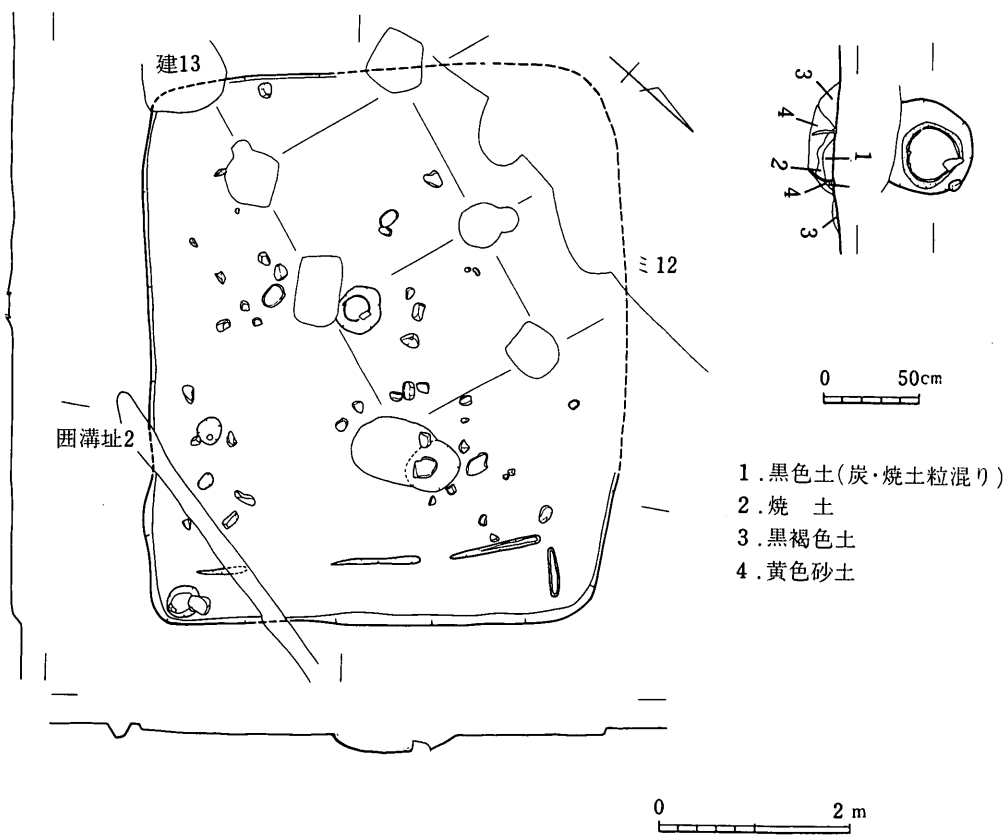
1.黒色土(焼土・炭・灰混り)
2.黒色土
3.黒褐色土(焼土混り)
4.焼土(地山の焼け)

第11図　TAN・KUR　13号住居址

19号住居址（第12図）

遺構　TANBF52を中心にして検出された。囲溝址２・溝址12・建物址13に切られる。他遺構との重複により一部確認できない箇所もあるが、5.8×5.1mを測る隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN130°Wを示す。検出面からの壁高は、最高でも10cm弱とあまり深くない。北東壁の約80cmの内側に幅・深さともに10cm程の小溝が断続的に認められ、壁ぎわを長方形に区切っており、間仕切りあるいは棚的な施設の存在が考えられる。主柱穴は検出に極力努めたが、把握できなかった。床面はほぼ平坦で、住居址中央部を中心に堅く良好であり、周辺部は部分的に良好な他は比較的軟かい。覆土は、壁ぎわの一部が褐色で、他は全体に黒褐色を呈し、ほぼ単一で、全体にわずかであるが炭粒を含む。覆土全体に礫が散在し、一部は床面に密着しているが、住居廃絶後の投棄が考えられる。住居址ほぼ中央部に甕胴部を用いた土器埋設炉を検出した。土器外周及び土器内部に相当量の焼土が認められ、かなり使用したものと推測される。床面上に穴及び浅い掘り込みがあるが性格等は不明である。

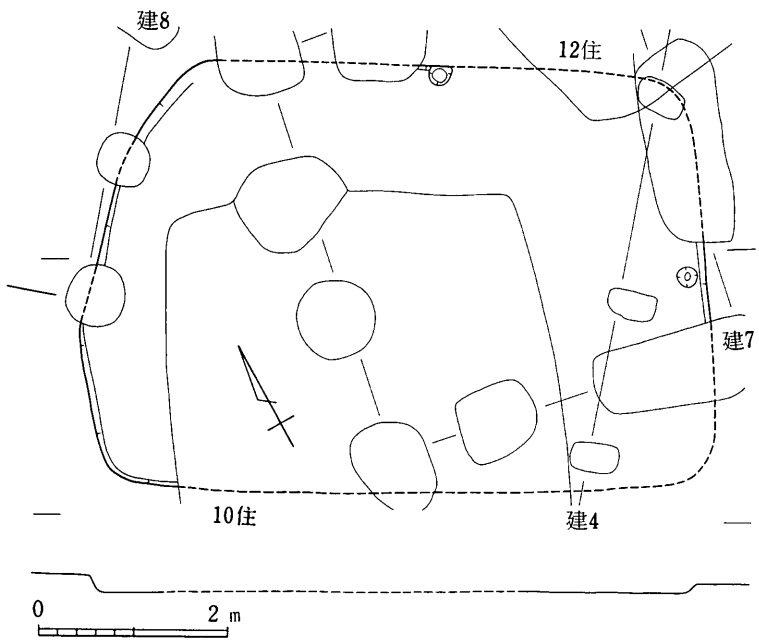
遺物　炉址の甕の他に壺・甕の破片、打製石斧・横刃型石庖丁・磨製石鏃・同未成品・砥石があり、炉甕をはじめとする出土遺物から弥生時代中期恒川II期に位置づけられる。　（小林正春）



第12図　TAN・KUR　19号住居址

20号住居址（第13図）

遺構　TANBI・BJの48・49から、弥生時代中期土器片が出土し、周辺遺構の調査後検出作業を行なった。10号住居址、建物址４・７・８に切られ、調査範囲はごくわずかである。壁は断続的に残りほぼ全体プランを推定した。規模は6.7×4.5mの不整長方形の竪穴住居址で、長軸方向はN62°Wを示す。残存部の壁高は検出面から20cm弱あり、弥生時代中期の住居址としては、比較的明確なものといえる。床面は軟かく、土器片がはりついた状態の面を床面ととらえた。炉址・柱穴等床面施設は他遺構に切られていたため、把握できなかった。



第13図　TAN・KUR　20号住居址

遺物　出土量はわずかで、壺・甕の底部片、磨製石鏃未成品などである。

時期を確定できる遺物の出土はないが、遺構の位置・形態等から恒川II～III期と思われる。

（佐々木嘉和）

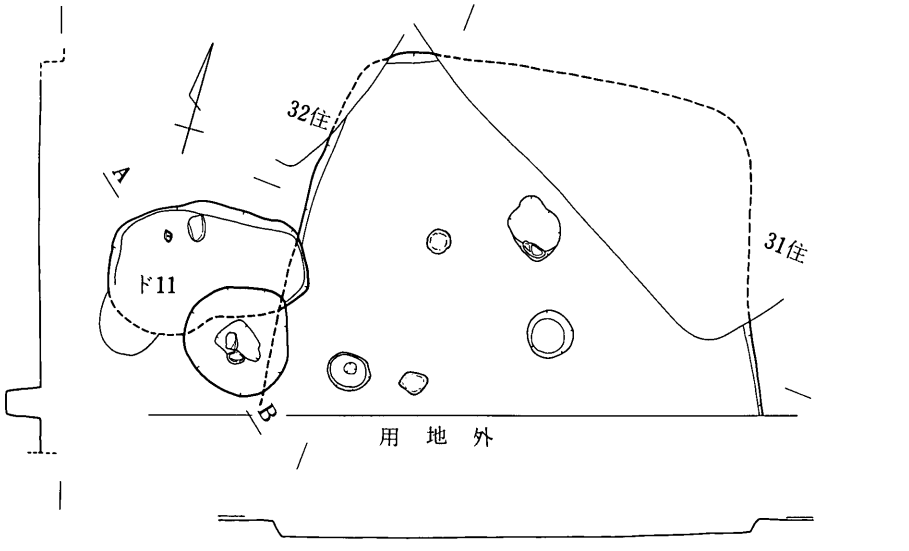
33号住居址（第14図）

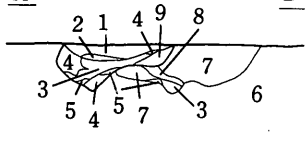
遺構　TANとKURの境で両地籍にかかり、KURAA53が中心の住居址で、南側が用地外に延びている。31号・32号住居址、土坑11に切られ、調査範囲はあまり広くないが、不整長方形の竪穴住居址と思われる。なお、床面上の２箇の穴も本址を切るものである。調査面積は5×3.8mで全体の半分程と推定される。主軸方向は残存壁と炉址の位置からN７°Eである。壁の残っている部分はわずかであるが、高さは検出面から20cmである。床面は軟かく、黄色砂質土の上面を床とした。炉址は調査範囲内のほぼ中央に位置する。炉縁石を持つ地床炉であり、焼土・炭の入る範囲は60×50cmで、深さは５cmである。底部が少し焼けており炭が少量混入していた。

遺物　床に密着した状態で壺の口頸部が出ている。他に、土器片と打製石斧・横刃型石器・敲打器がある。床面に直径30～20cmの石が２個あり、台石と思われる。

遺物から恒川III期である。

（佐々木嘉和）





1.黒褐色土(やゝ砂質)
2.黒色砂土(こまかな砂)
3.茶褐色粘質土
4.黒褐色土(黄色砂土混り)
5.黄色砂土(黒褐色土混り)
6.黄色砂土
7.黒色土(黄色土混り)
8.黒色土(鉄分沈澱有り)
9.黒色砂土

第14図　TAN・KUR　33号住居址、土坑11

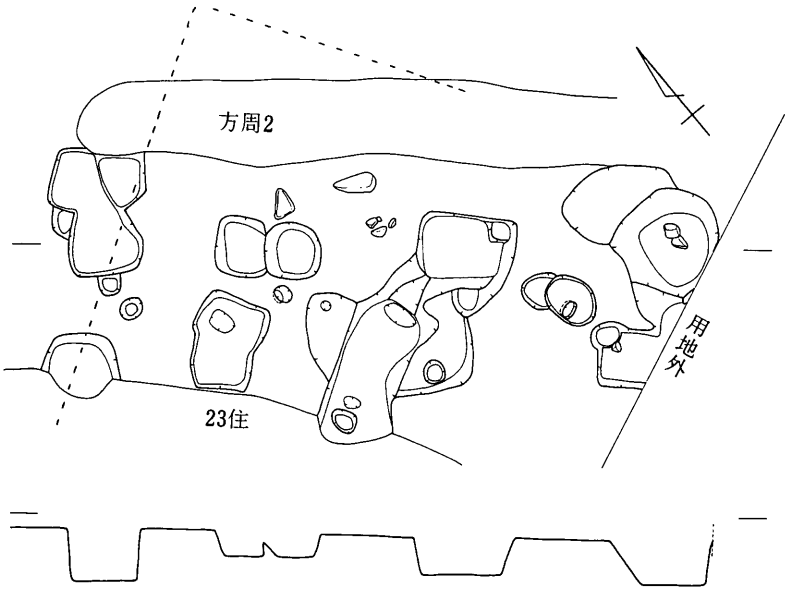
59号住居址（第15図）

遺構　KURAX51を中心に弥生時代中期土器底部等が出土し、住居址とした。23号・56号住居址、方形周溝墓2、時期不明の穴に切られる。床面は、黄色砂質土上面で比較的堅く床と確認できたが、プラン・規模・主軸方向など把握できず、図中の穴は、本住居址に付くものもあると思われるが確定はできなかった。

遺物　ほとんどが床面からの出土で、量はわずかであり、土器底部、打製石斧・砥石がある。遺物から弥生時代中期恒川II～III期であろう。　（佐々木嘉和）

77号住居址（第31図）

遺構　22号住居址の壁上、KURBG51に検出された。西側を22号住居址・東側を60号住居址・南側を76号住居址に切られ、近世攪乱もあり、プランの推定はできない。壁・床・柱穴等炉址以外の施設は一切不明である。炉址は床面を30cm程の円形に掘り凹め、壺の胴部片2個体分を埋めて



第15図　TAN・KUR　59号住居址　0　2m

いる。北西側⅓くらいを22号住居址に切られている。

遺物　残存部分がほとんどなく、出土遺物はごく少量である。壺・甕、打製石斧等がある。遺物から弥生時代中期恒川II期に比定できる。　（山下誠一）

88号住居址（第51図）

遺構　KURBP47を中心に検出された。80号･86号住居址、近世集石７、近世の墓に切られ、残存部分が2.0×1.2m程の範囲であるため、プラン・住居址諸施設等は一切不明である。床面は部分的に把握したのみであるが、やや堅い状態で検出された。

遺物　打製石斧・磨製石鏃がある。遺物等から弥生時代中期恒川II～III期に位置づくと思われるが、決め手となる遺物に欠け断定できない。　（山下誠一）

96号住居址（第86図）

遺構　TAN・KURのほぼ中央を横断する道路を移動しての調査部分で、42号・105号住居址の間に炉址のみを確認した。溝址21に中央部分を切られている。溝址21は確認した深さ５cm程で、その両壁に甕がはり付いた状態で出土し、焼土を伴っている。本住居址の床面・壁は全く不明で、

柱穴も周辺に数多くの穴があり確認できなかった。

弥生時代中期恒川Ⅲ期の甕を使った土器埋設炉である。（佐合英治）

② 弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期の遺構は、ほとんど後半のもので、前半に位置づけられるものは、KURC区の方形周溝墓が1基のみである。遺物もほとんどが後半のもので、前半に位置づけられる遺物は遺構外にもほとんどみられない。遺構の内容としては、住居址が主体で、溝址・溝状遺構・方形周溝墓の他に、囲溝址も該期に位置づけられる可能性が強い。遺構のほとんどはTANに分布しKURには溝址等わずかの遺構があるのみで、遺物も遺構同様に、ほとんどがTANからの出土である。

古墳時代前期は、調査範囲内全域に分布するが、主体はKURである。TANには溝址があるのみで、弥生時代後期の様相とは対称的である。なお、時期的には前期後半が主体である。

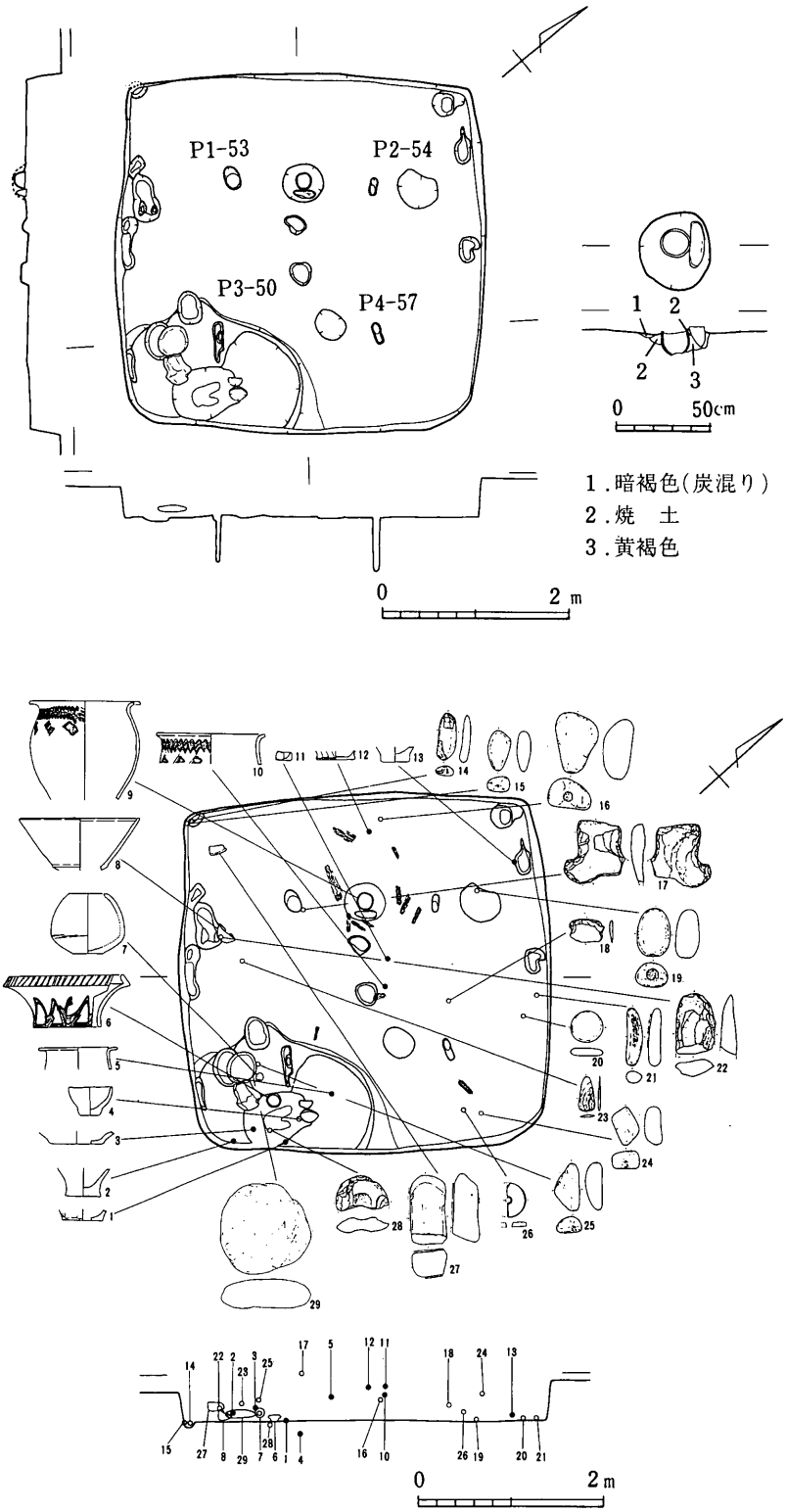
（小林正春）

5号住居址（第16図）

遺構 TANBO48を中心に検出された。6号住居址に上部を切られるが、ほぼ全体の調査ができた。4×3.8mを測る方形の竪穴住居址で、主軸方向はN47.5°Wを示す。壁高は40cm前後を測り、ほぼ垂直の壁面を成す。主柱穴P1～P4を確認し、P1が楕円形、P2～P4は細長い長方形を成し、割り材使用の柱が考えられる。炉址はP1・P2の間にあり、底部を欠く甕を用い炉縁石を持つ土器埋設炉である。径40cmのほぼ円形に掘り凹められた中央部に甕を埋め、その住居址中央部寄りに半裁した自然礫の割った面を上にして置く。甕内に焼土は少なく、甕外側に焼土が多く認められた。床面は全体に良好で、各柱穴間の住居址中央部が特に堅く良好であった。炉址から南東壁側に2本の浅い穴が直列し、間仕切りあるいは支柱の存在が考えられる。

北隅から北東壁東半と西隅から南西半の壁下にも浅い穴がみられいずれも支柱穴の可能性がある。西隅の穴は壁内にあり、内部から石器が出土し、道具を置く簡易施設であったとも考えられる。南端は全体に浅い凹みとなり、その北端部には若干の土手状縁部も認められ、主柱P3以外にも何箇所かの穴があり、入口部施設の可能性が強い。また、P3の南側には赤色顔料の付着した偏平の石と壺転用の器台、ひさご壺の口縁部を欠くものが出土している。床面上に炭化材・焼土が分布し火事の住居址と考えられ、総体として弥生時代後期の典型的住居址である。

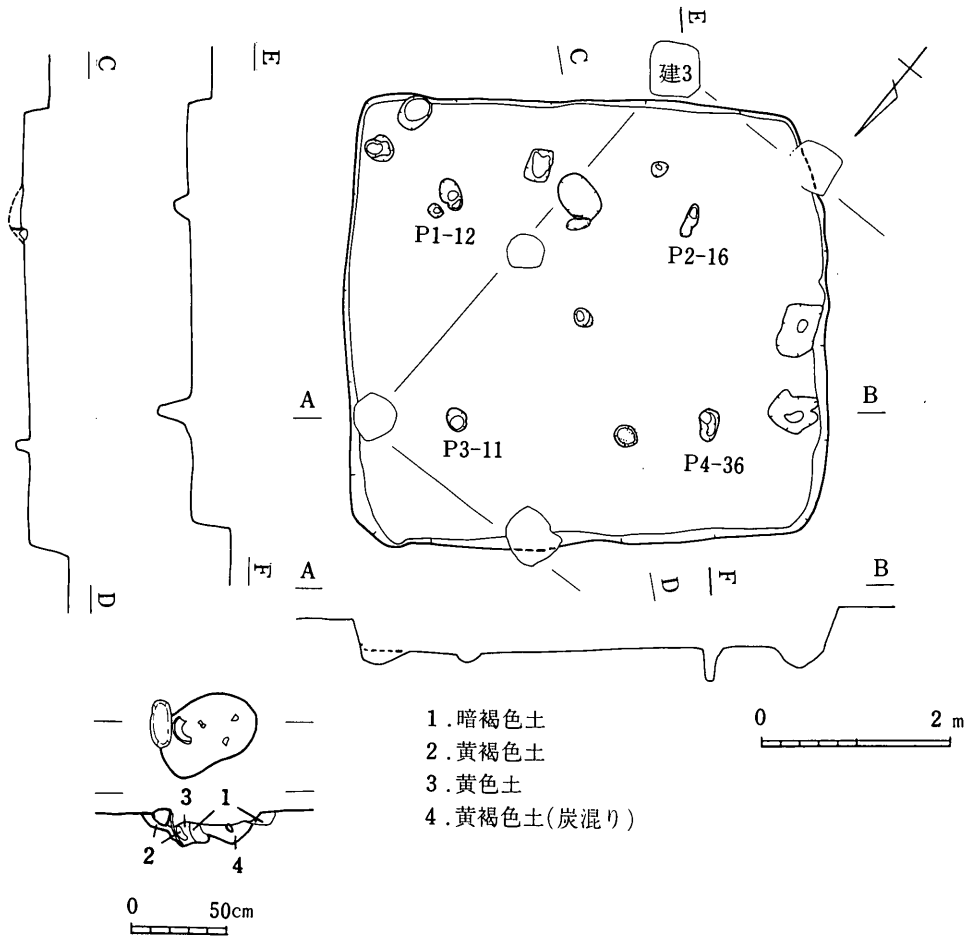
遺物 出土遺物の量は多くないが、住居址形態同様後期の典型を成している。ほとんどが覆土下層及び床面直上の出土で、一括性が高い。土器は炉甕の他に壺・甕・ひさご壺・高坏・手づくね、打製石斧・有肩扇状形石器・抉入打製石庖丁・敲打器・砥石・台石などがあり、弥生時代後期恒川Ⅴ期に比定される。（小林正春）



第16図　TAN・KUR　5号住居址

7号住居址（第17図）

遺構　TANBV51を中心に検出した。2号住居址の南に接し、建物址3、溝址3・5に切られるがほぼ完掘できた。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は4.7×5m、主軸に直交する方向がやや長い。主軸方向はN140°Eを示す。壁高は検出面から30cm前後で、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は堅く該期の他住居址と同様である。主柱穴は4本で、平面は楕円形で小さく、割り材使用の柱が考えられる。主柱穴4本の中央に深さ14cmの穴があり、間仕切りもしくは上屋をささえる施設の存在も推測される。南西壁下に不整形の穴が2個あり、入口部施設と思われる。床面上に石が散在し、P4の周囲に7個あり、その内の1個が5号住居址の炉縁石と接合した。炉址は南東主柱穴間中央にあり、炉縁石を持つ土器埋設炉で甕を埋めている。甕は炉縁石側が約半分残るが、他は壊れて炉址内に散在した。焼土はごく少量確認されたのみである。P3とP4の間でP4寄りに、25cmの円形で深さが10cmの穴があり、底に炭があり壁が少し焼けていて、副炉址的なものと考えられる。



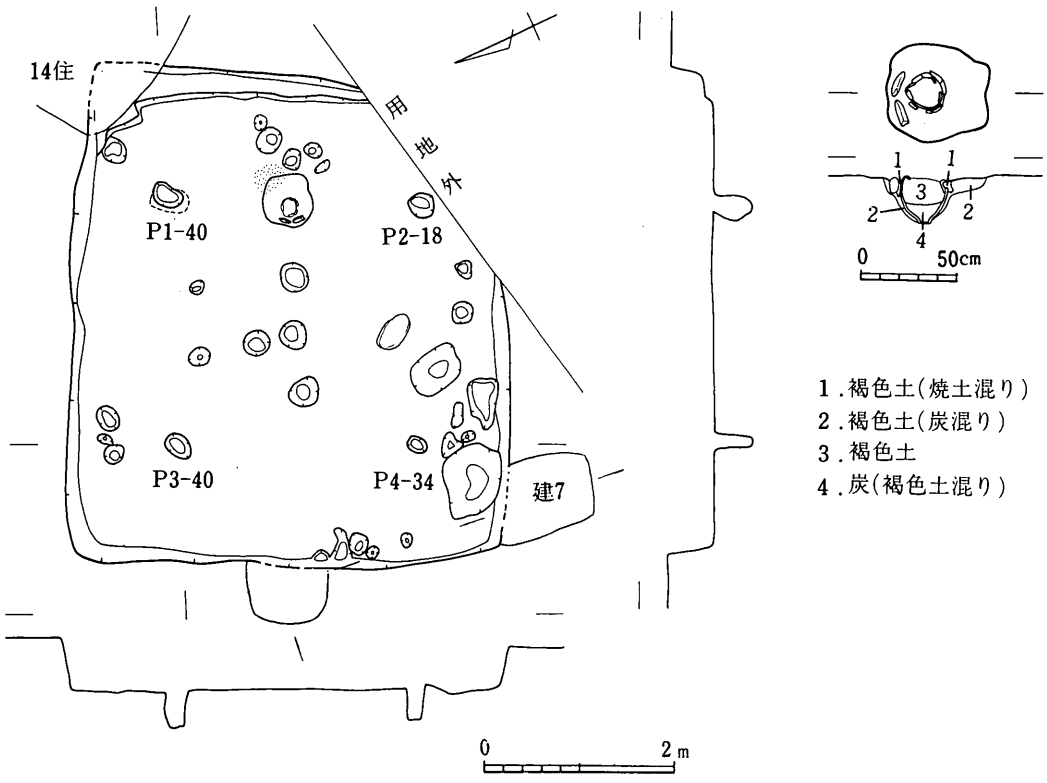
第17図　TAN・KUR　7号住居址

遺物　出土量は比較的多いが覆土中がほとんどで、床面上の出土はわずかであった。床面上に散在していた石のうち3個が接合し、これらの石は住居廃絶後の投棄というよりは使用時の用途を考える必要があると思われる。壺・甕・高坏、抉入打製・抉入磨製横刃型石庖丁・磨製石鏃・同未成品・環状石器未成品などが出ている。

遺物から弥生時代後期恒川Ⅴ期であろう。　（佐々木嘉和）

8号住居址（第18図）

遺構　TANBL53を中心に位置し、上層の溝址6・土坑1の調査終了後、黄色土層面で落ち込みを確認し、比較的明瞭に検出された。東北隅を14号住居址、南・西壁の一部を建物址7に切られる。西壁上には13号住居址の炉址があり、同址を切る。東南隅は用地外のため、調査できなかった。5.2×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN113°Eを示す。壁高は55～35cmを測り、壁面は垂直を成す。東壁ぎわに床面から10cm前後高い30～8cm幅の平坦面を有する。床面は全面たたき状のきわめて堅いもので、新・旧2回の床面が認められた。主柱穴はP1～P4で、いずれも北東方向に細長い平面形で、割り材使用の柱が考えられる。南西隅壁直下に床面から20cmの深さの穴があり、入口部施設と思われる。P2・P4の中間やや内側の床面上に台石がある。



第18図　TAN・KUR　8号住居址

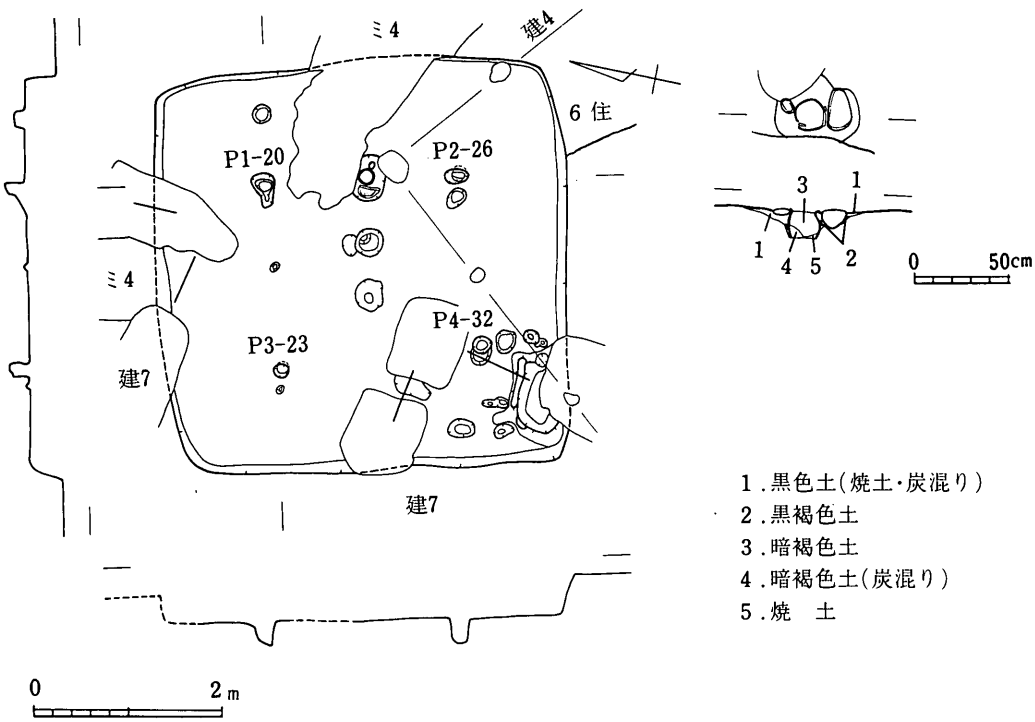
主軸線上に深さ10cm前後の穴があり、間仕切り施設が考えられる。炉址は東側主柱穴間中央に位置し内側に2個の炉縁石を持つ土器埋設炉で、床面を径50cm程の円形に掘り込み、ほぼ完形の甕を埋めている。床面の状況・東壁などから1回の増築が考えられる。

遺物　遺物の出土は比較的多く、覆土上層から下層にかけてまんべんなくあるが、大きな破片は下層・床面の出土となる。土器は壺・甕が主体で、わずかに外来系の壺・高坏が出土している。石器は打製石斧・有肩扇状型石器・抉入打製石庖丁・横刃型石器・磨製石鏃未成品・環状石器があり、環状石器は12号住居址のものと接合した。

上・下層で明確な時期差は認められず、一部弥生時代中期のまぎれこみを除き、弥生時代後期恒川Ⅴ期に比定できる。　（山下誠一）

12号住居址（第19図）

遺構　TANBL48を中心に位置し、溝址4調査中に検出した。6号住居址、建物址4・7、溝址4に切られるがほぼ完掘できた。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は4.3×4.4m、主軸方向はN68.5°Eを示す。検出面でわずかに黒土の落ち込みがわかる程度で、溝址4調査中に壁と床面を確認して住居址と判明した。壁高は検出面から約40cmである。床面は堅く極めて良好であった。主柱穴は4本で、平面は楕円形で小さく割り材使用の柱が考えられる。P1・P3線上に浅い穴が3箇



第19図　TAN・KUR　12号住居址

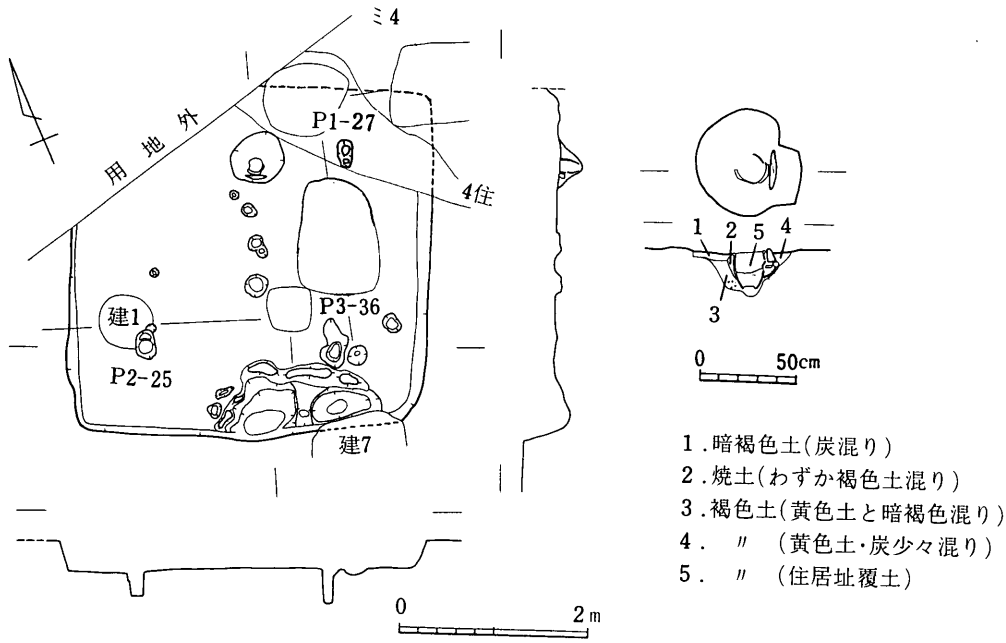
(13～3cm) あり、間仕切り施設が考えられる。床面中央の穴は深さ17cmと14cmで、上屋をささえる施設の可能性もある。南西隅に穴が集中し、入口部と思われる。炉址は主柱穴P1・P2の中間に位置し、土器埋設炉で底部を欠く甕を埋めている。甕を挟んで2個の炉縁石を有する。

遺物　出土量は少ない。甕1個体が床面上につぶれて出土した。環状石器があり、8号住居址出土のものと接合した。

遺物から弥生時代後期恒川V期であろう。　　(佐々木嘉和)

17号住居址 (第20図)

遺構　建物址7調査時に確認され、TANBK46が中心の住居址である。4号住居址、建物址1・7、溝址4に切られる。北西隅は用地外のため、完掘できなかった。3.8×3.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN29°Eを示す。壁高は検出面から30cmあり、ほぼ垂直である。床面は堅くたたき状になっており、ほぼ平坦である。主柱穴は未調査部の1本を除き3本確認した。いずれも掘り方平面は楕円形で小さく割り材使用の柱が考えられる。主軸線上に小穴が3個並び間仕切りの施設と考えられる。南壁下に浅い穴が2個あり、縁部が土手状にわずか高くなり、入口部施設と思われる。炉址は北壁側の主柱穴中間にあり、土器埋設炉である。底部を欠く甕を埋め、中央側に炉縁石を有する。焼土は甕の外側に多く認められた。炉址掘り方覆土中に、土器片・炭・焼土など混入しており、炉址を造り直している可能性がある。炉址・柱穴・入口施設等の状況か



第20図　TAN・KUR　17号住居址

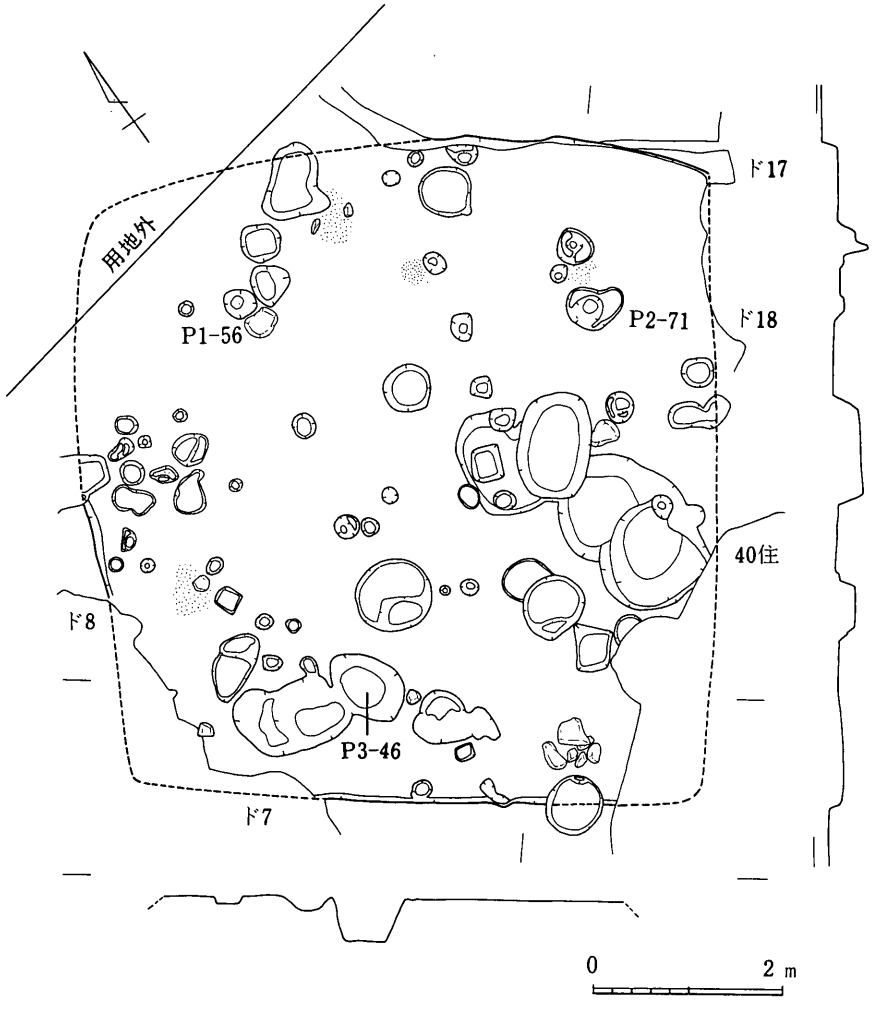
ら建て替えも考えられる。

遺物　出土量は少ない。覆土中層より床面にかけて出土し、特筆する出土状態はない。壺・甕、有肩扇状形石器が出ている。

遺物から弥生時代後期恒川Ⅴ期であろう。　（佐々木嘉和）

16号住居址（第21図）

遺構　KURAI48を中心に検出された。掘り込みが比較的浅い上、北東壁を40号住居址及び土坑17・18に、西隅を土坑7・8に切られ、北隅が未調査のため、部分的に残る北西・南西壁をたよりに、全体形を把握した。また、方形周溝墓1の溝上面に床面があり、これを切っている。6.7×



第21図　TAN・KUR　16号住居址

7mの隅丸方形の竪穴住居址である。壁は残存部分で20～10cmを測る。床面はたたき状の堅い良好なものである。床面直上には、焼土・炭化物が散乱していた。主柱穴は北東側のP1・P2を確認した。4本主柱穴と考えられるが、南側の2本は他遺構との切り合いのため把握できなかった。床面上には大小の穴があり、住居址を切っているものが多く、本住居址付属として把握できたものはほとんどない。そのうちP3は本址の施設で高坏など遺物が多出し、貯蔵穴的な性格が考えられる。時期的に炉址の存在が考えられるが、炉址ないしカマドの確認はできなかった。炭・焼土から火事の住居址である。

遺物　土器・石器・石製模造品がある。ほとんど床面ないしその直上からの出土である。特に、西南壁寄りの住居址中央部に高坏の完形品を中心に遺物が集中していた。土師器壺・甕・高坏、打製石斧・磨製石斧・加工された礫、臼玉がある。この中で、磨製石斧などは先行する時代の遺物がまぎれ込んだと考えられる。

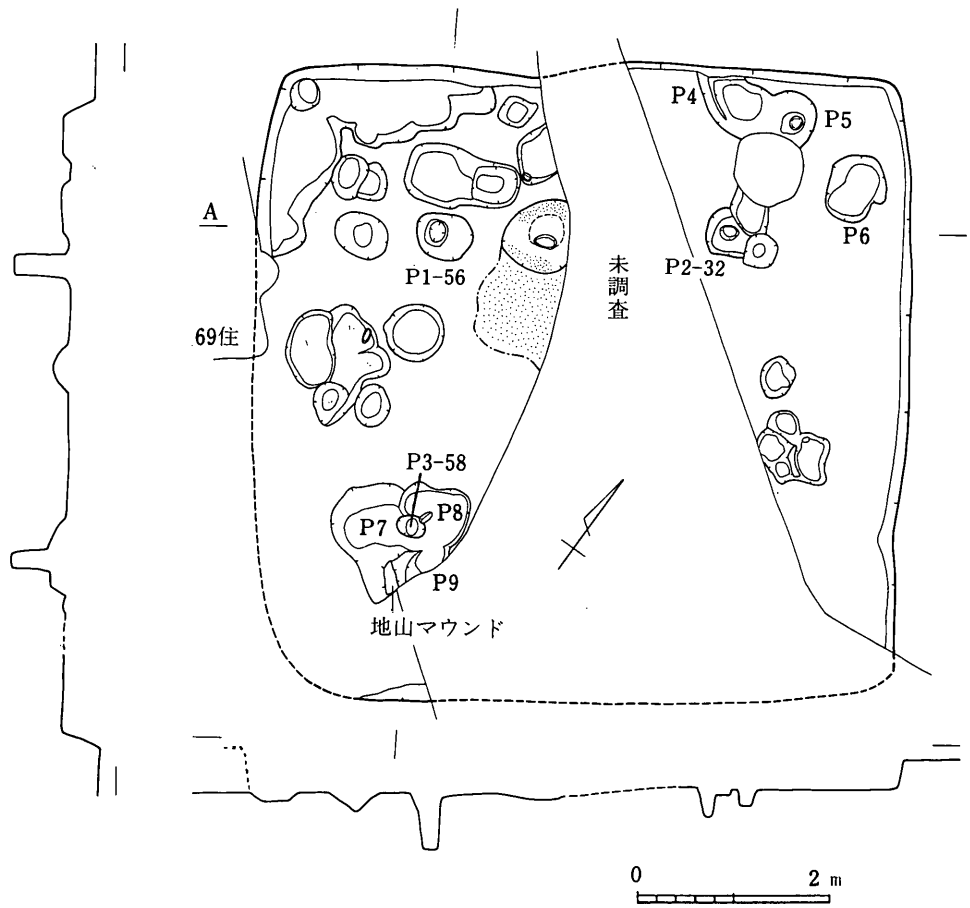
遺物から古墳時代前期恒川X期に比定できる。　（山下誠一）

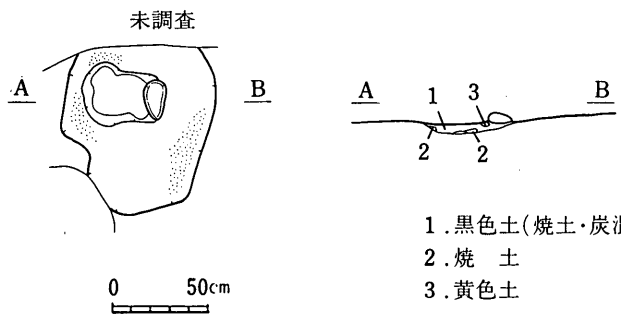
23号住居址（第22・23図）

遺構　KURAV53を中心に検出された。住居址中央部が用地内を横断する幅4mの道路下にあたり、南西側と北東側部分が時期を置いての調査となった。南隅は北東側と同時期の調査であったが、65号・69号住居址に切られており、南西壁のほとんどは確認できなかった。しかし、65号住居址調査中に確認した炭は本住居址のものであり、南側の範囲はほぼ把握できた。道路を移動しての調査であったため中央部に未調査部が生じて全容を把握できなかったが、規模は6.7×6.9m、主軸方向はN35°Wを示す、ほぼ正方形の竪穴住居址である。火事の住居址で床面全体に焼土・炭が確認された。炭化材は床面よりわずか浮いているものがほとんどで、南東側に比べ北西壁に近いものほど残存状態が良好である。長さは不明であるが幅5cm前後のものが多くみられた。炉址の南側には0.5×1mの範囲に簿板状の炭化物が床面に密着して出土した。また、炭化材と同層に径20～10cmの礫が10数個点在し、出土状態から考えて、焼失時またはその直後に入り込んだものであろう。壁高は北西側で30cm、南東側の確認部分で16cmを測り、いずれもほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で壁ぎわまできわめて堅いたたき状のものである。主柱穴は3本確認し、4本主柱穴と考えられる。P1・P2は掘り方の途中に段を持ち、P3はP7・P8を掘り上げた後検出された。P7・P8はそれぞれ深さ7cmと19cmで粘質黄色土混りの覆土を持ち、P3も同様であり、同時期に埋められた可能性が強い。また、これら穴の南側に床面より地山が約10cm高く掘り残された箇所と、径30～20cmの礫を4個上部に置いた深さ15cmのP9があるが、未調査部分にかかるため、範囲・性格等は不明である。P4・P5・P6はそれぞれ深さ34・40・31cmで、出土遺物から本住居址に伴い、他の穴は本住居址より新しいものと思われる。また、西隅部分に深さ9～3cmの凹部があり、上面にははり床が確認された。炉址はP1・P2を結ぶ線上のP

1寄りに検出された。深さ10cmの浅い地床炉で炉縁石を南東側に持っている。火事のため周辺一帯の床面上に焼土が広がり、炉址関連と焼失時焼土との区別は不可能であった。

遺物　出土量は比較的多く、ほとんどが床面密着で、炉址周辺と北壁ぎわに集中している。特に、高坏は脚部・坏部のみのものも合わせると30個体を越え、一般住居址に比べかなり多い。他に、土師器壺・甕・鉢がある。また、臼玉・管玉・ガラス玉等が北東側床面及び覆土水洗により150個出土



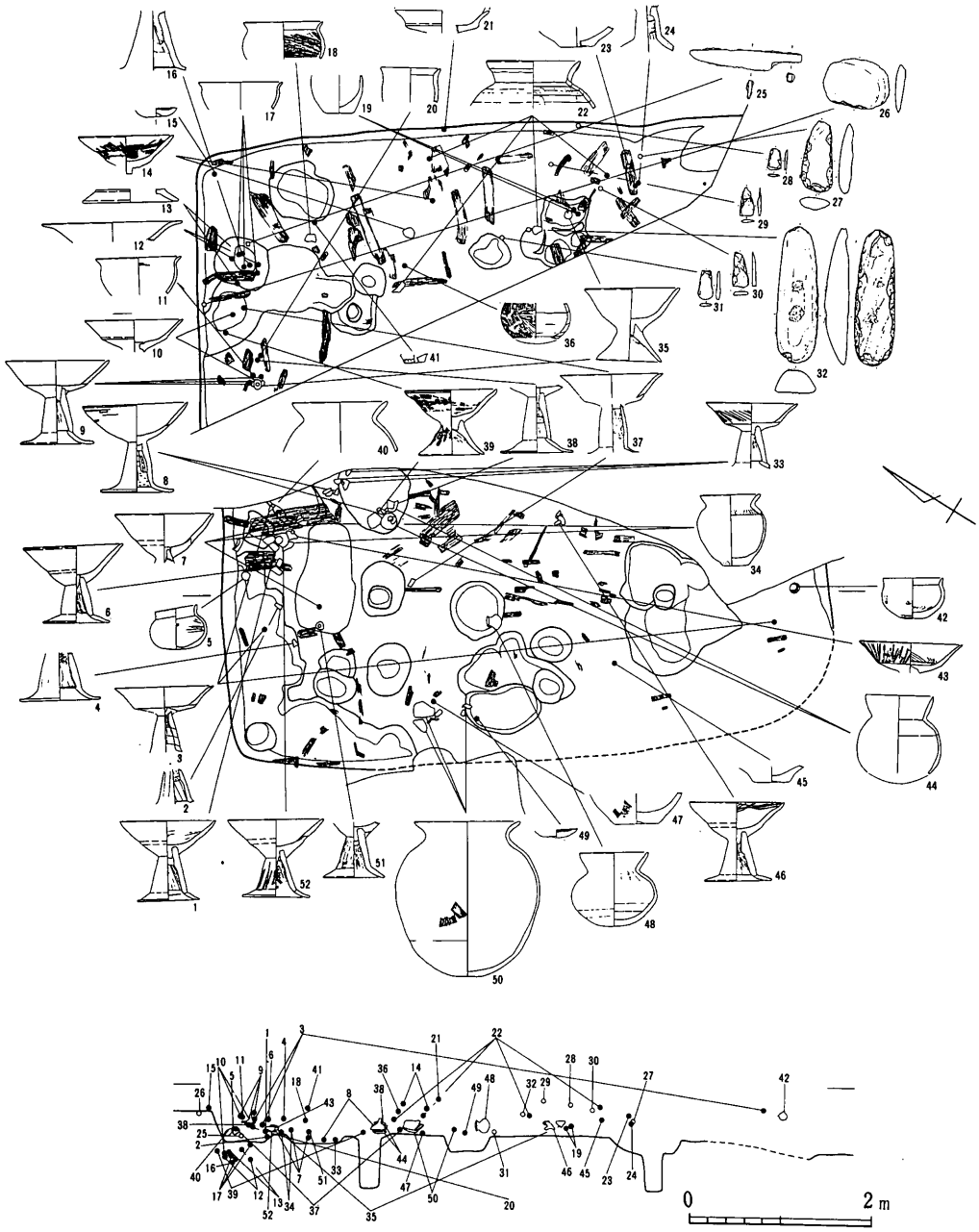


1.黒色土(焼土・炭混り)
2.焼　土
3.黄色土

第22図　TAN・KUR　23号住居址

している。他に、打製石斧・磨製石鏃未成品・横刃型石器、刀子・銅釘・飾り金具がある。

遺物等から古墳時代前期恒川X期の住居址と考えられる。　（佐合英治）

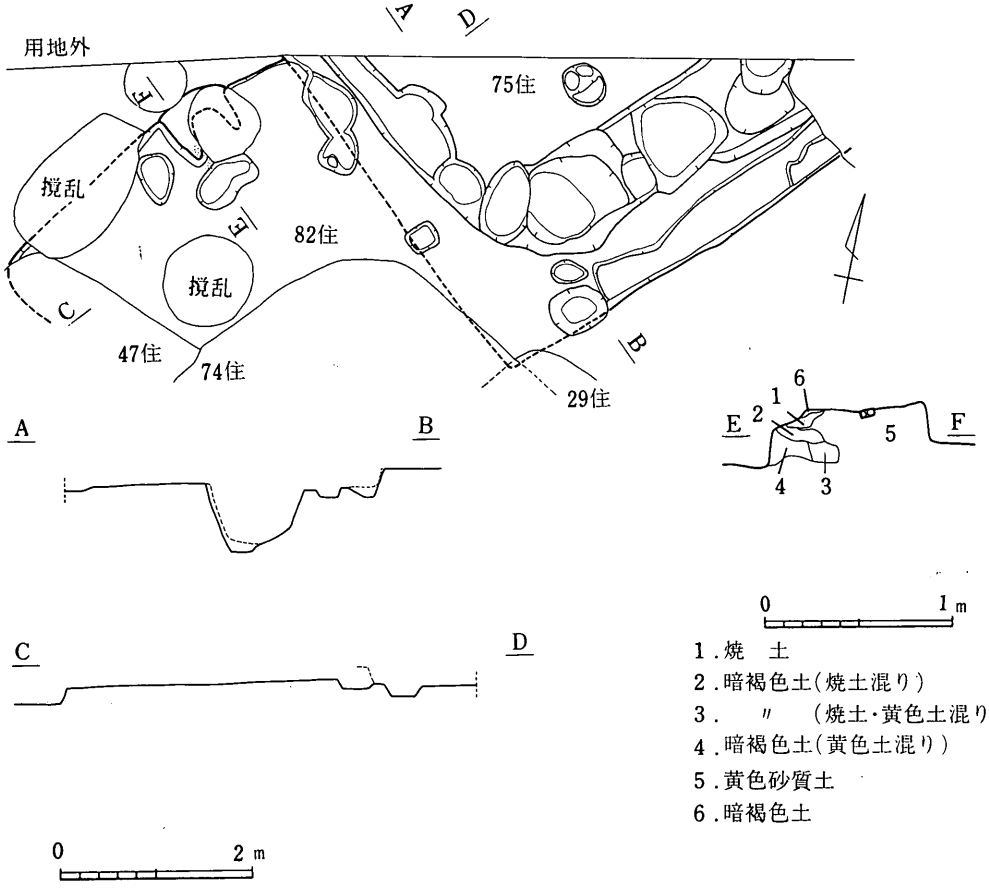


第23図　TAN・KUR　23号住居址遺物出土状態

75号住居址（第24・25図）

遺構　KURBM46を中心に検出された。切り合い関係が著しく、29号・74号・82号住居址、近世集石に切られる。北側半分は用地外にあり、調査面積は約8㎡である。方形の竪穴住居址と考えられるが、規模・主軸方向は不明である。壁高は検出面からはり床面まで20cmある。壁下から50cm位内側に幅1m前後の溝状（一部穴状）に掘り凹めた上にはり床がなされ、中央付近及び壁下は、掘り下げ時のままの床面であり、全体にやや軟かであった。主柱穴は、エレベーションＡＢの通る大きな穴と思われるが、はり床との関連把握が不十分で明確に判断できなかった。はり床下に連続する溝状の掘り込みは住居址壁と方向が一致し、住居址そのもの、あるいは住居建設時に関連する施設と思われる。穴の深さは50～30cmであり、溝になる部分は約20cmである。覆土には遺物が混っており、意図的に埋めもどした上面をはり床としていた。

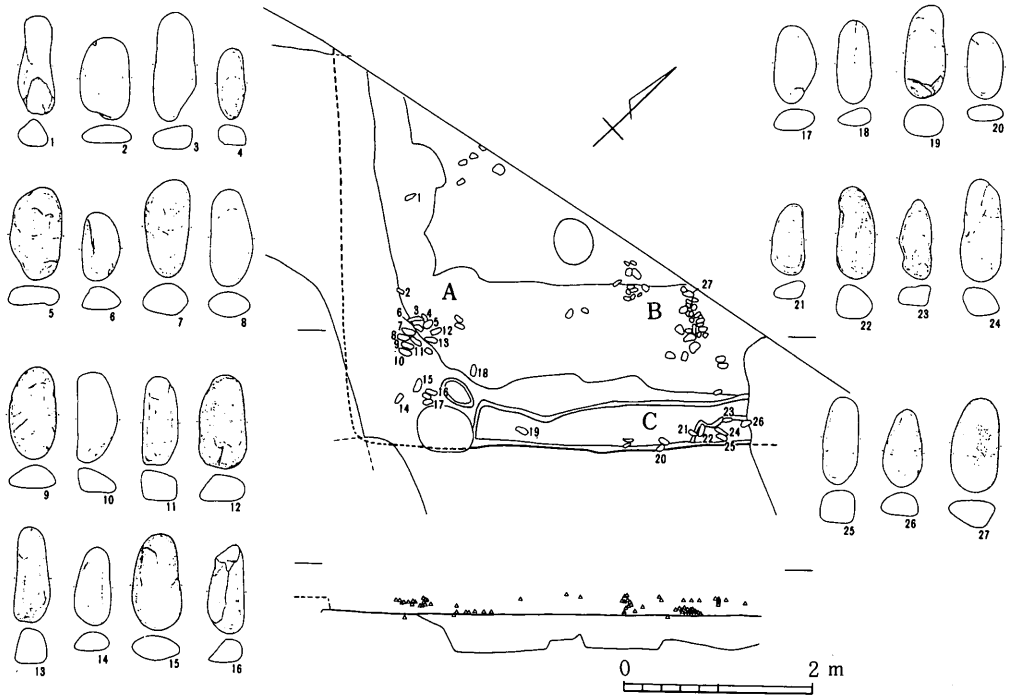
遺物　出土量は調査面積の割に多い。検出面から床まで浅いので、ほとんどが床面と床直上の出土である。編物石が20個余出土したが、はり床上のほぼ3箇所に集中していた。硬砂岩及び花崗岩の礫である。Cの集中部分には2個ずつまとまっているものがあり、使用形態を示していると



第24図　TAN・KUR　75号・82号住居址

思われる。他に、土師器壺・甕・高坏、刀子、ガラス玉・管玉・土玉・臼玉などが出ている。

遺物から古墳時代前期恒川X期であろう。　（佐々木嘉和）



第25図　TAN・KUR　75号住居址編物石出土状態

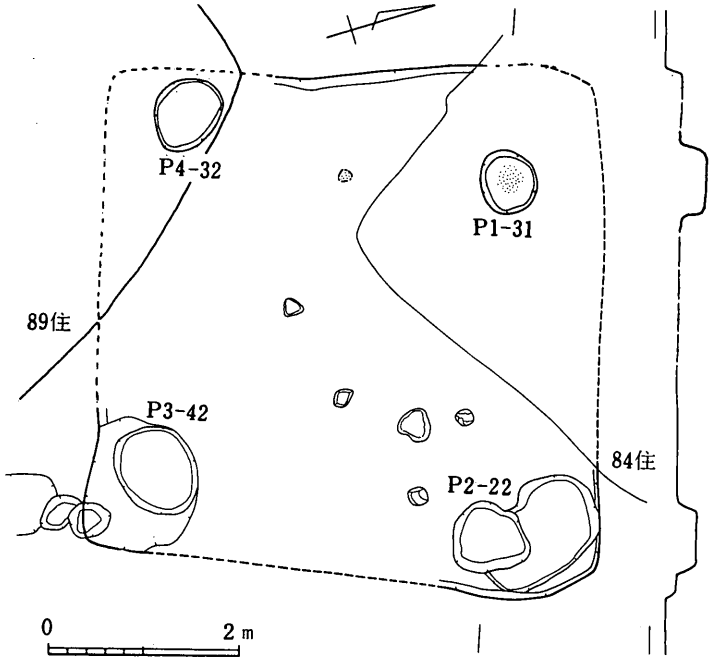
90号住居址（第26図）

遺構　KURBV49を中心に検出された。84号・89号住居址および多数の穴に切られ、かつ、耕作の攪乱もあり、壁を把握した箇所はわずかである。確認した部分から想定して5.2×5.2mの隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向は炉址等が所在不明のため判断不可能であり、東西軸N76°Wを示す。壁高は確認部で18～12cmを測る。床面は切り合いが著しく、軟かで凹凸があり、中央部分に比べ壁ぎわでは7cm前後低くなる。主柱穴はP1～P4の4本を確認した。いずれも各隅寄りにあるが、若干ゆがみのある配置を成す。P1は当初84号住居址に付属すると考えたものであるが、出土した土師器甕1個体から本址の主柱穴となった。また覆土中には焼土が混入していた。いずれの壁にもカマドのあった痕跡は認められず、P1・P4の中間に焼土がわずか確認され炉

址の残骸の可能性がある。

遺物　出土量は少なく、土師器壺・甕・高坏・手づくね、磨製石斧・打製石斧、臼玉・土玉がある。

遺物から古墳時代前期恒川X期の住居址に比定される。　（佐合英治）



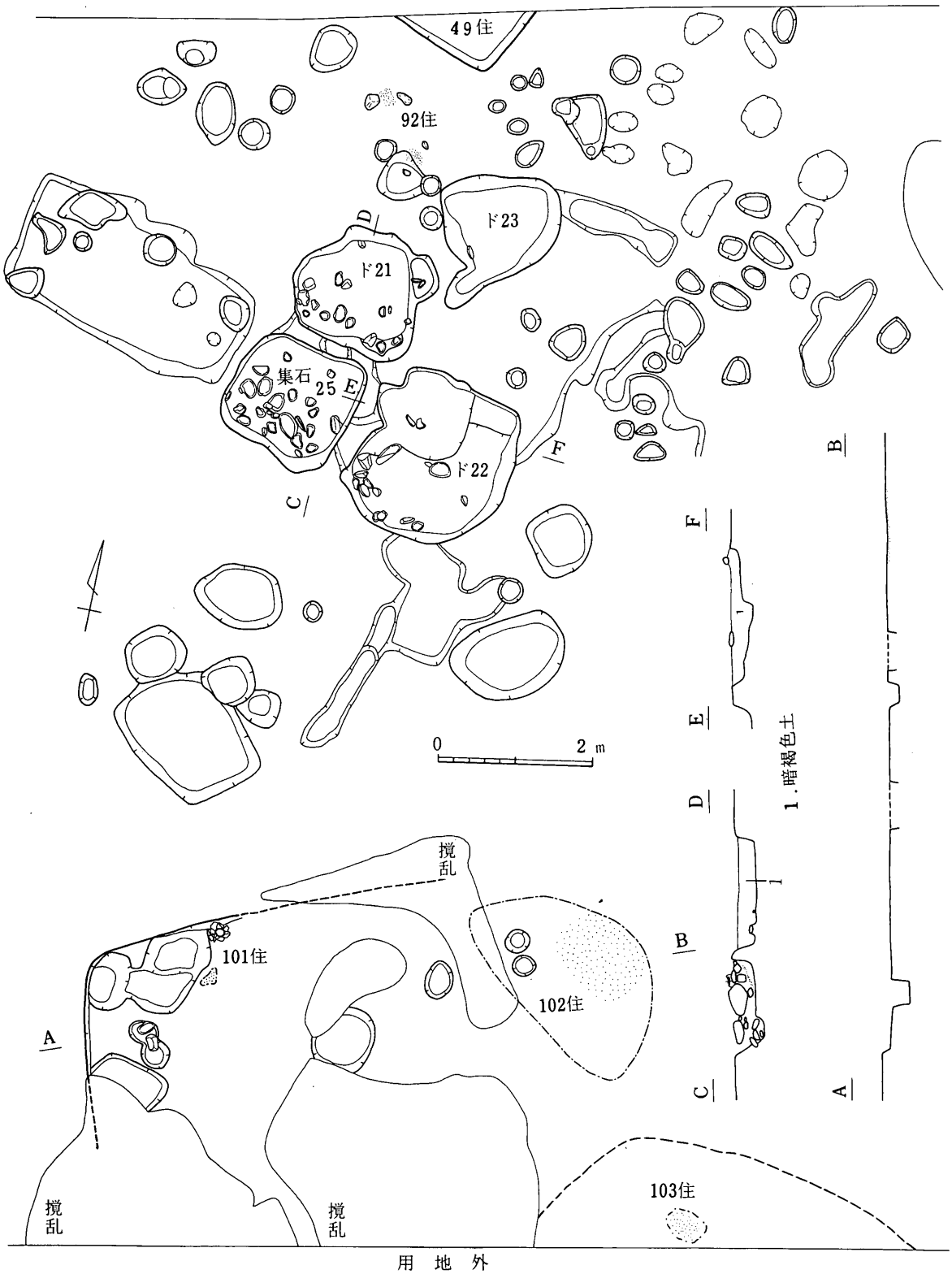
第26図　TAN・KUR　90号住居址

101号住居址（第27図）

遺構　KURCK52を中心に検出された。検出時に壺が半個体出土し、その落込みを当住居址にした。段丘崖に近く地表から地山の黄色砂礫土まで30cm前後で、耕作による攪乱が著しい。隅丸方形の竪穴住居址と考えられるが、規模・主軸方向は不明である。床面直上まで耕土であった。壁は北西隅で地山に約10cmの段差を確認した。床面は一部に堅い面が残っており、焼土（30×30cm）があった。床に検出した穴はすべて20cm前後と浅い。

遺物　床面上の土師器壺約半個体と、他に図化できない破片1点である。

遺物から古墳時代前期恒川X期であろう。　（佐々木嘉和）



第27図　TAN・KUR　49号・92号・101号・102号・103号住居址、集石25、土坑21・22・23、Pit群

③ 古墳時代後期

本時期の遺構分布概要は、前時期までが、比較的その分布範囲が限定された状況を示すのと異なり、台地上ほぼ全域に分布する。時期把握の時間的な幅が他時期より若干あり、細部における利用形態の変化はあるが、総体として台地上全体が同様の利用空間として位置づけられる。

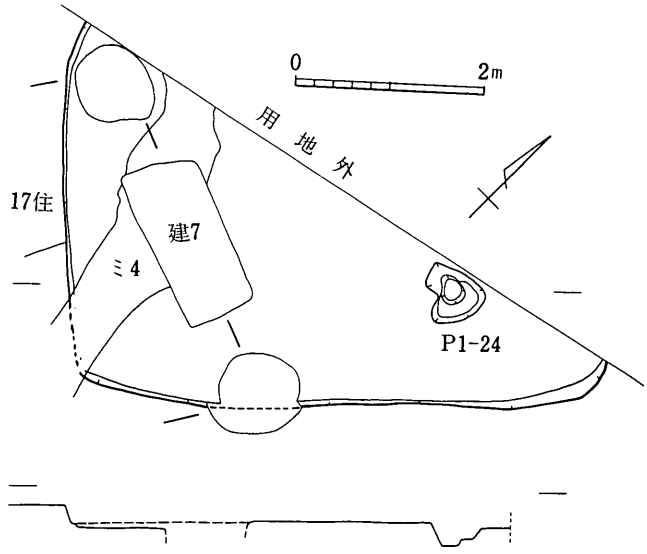
西端部の自然凹地寄りに遺構分布は少なく、TAN・KURの境付近に住居址・祭祀址等を認めその東方一帯に住居址群が広がり、東端はGOA境の段丘崖上端部まで住居址が検出された。

調査範囲内のみの傾向であるが、該期全体を通じ、台地上のほぼ全体が居住空間にあたるが、TANの西端部のみが別用途の空間と考えられる。なお、細分しての時期把握が不十分で、各小期における遺構分布状態は不明確であるが、総体の傾向に近い分布状況と考えられる。

（小林正春）

4号住居址（第28図）

遺構　TANBM45が中心の住居址である。17号住居址を切り、建物址7・溝址4に切られる。北側は用地外にかかり6.6×3mの約半分を調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われるが、規模・主軸方向は確認できない。壁高は検出面から20cmを測り、壁面はほぼ垂直に近い。床面は中央部がやや堅く、周辺部は軟かい。特に、建物址7に切られるあたりから床面が確認できず、一部掘り過ぎた箇所もある。主柱穴は1本のみ確認し、掘り方は浅く途中に段が付く。



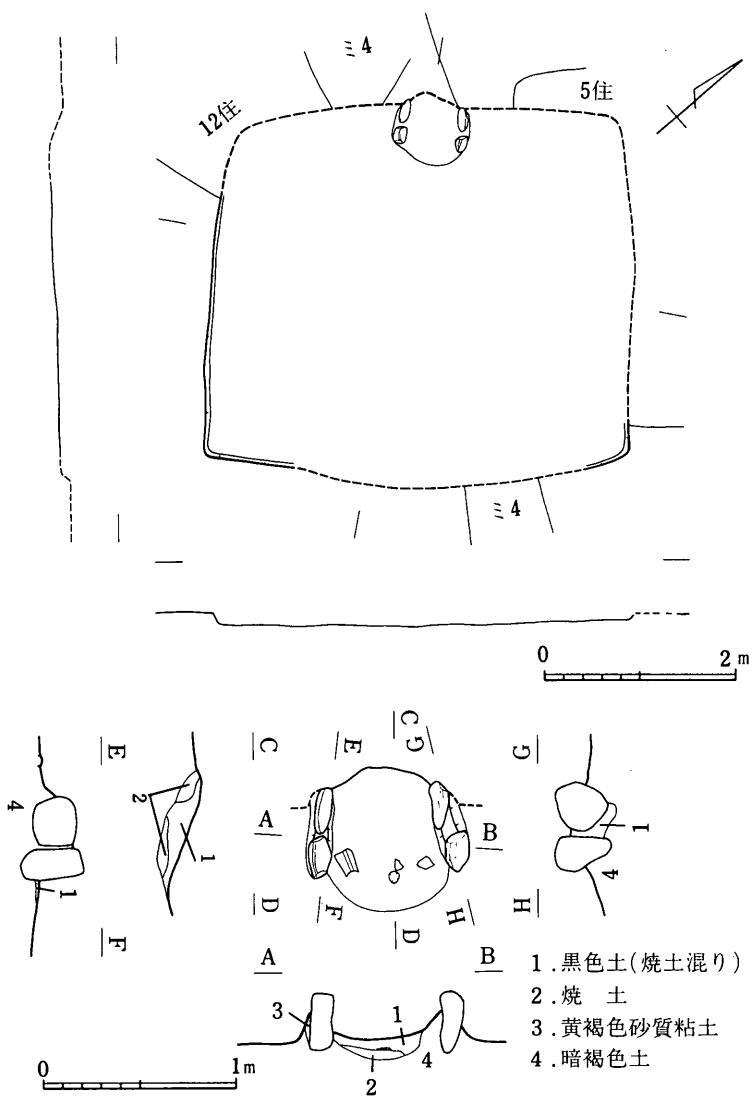
第28図　TAN・KUR　4号住居址

遺物　覆土中からの出土がほとんどであり、量は少ない。土師器甕・坏・高坏の破片である。

遺物は古墳時代後期であるが、時期決定材料として少なく即断はできない。　（佐々木嘉和）

6号住居址（第29図）

遺構　TANBN50を中心に検出された。5号・12号住居址、溝址4を切る。褐色土中に掘り込み



第29図　TAN・KUR　6号住居址

居址である可能性も若干ある。

面があり、床面も重複する他遺構の覆土中にあるため、南西壁・南隅・東隅及びカマドによりその範囲を把握した。4×4.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N49°Wを示す。壁高も10cm以下とわずかである。床面はほとんどが黒色土であるが、部分的に堅く、良好な箇所があり、一部に焼土も認められた。柱穴等の床面上施設は不明である。カマドは北西壁ほぼ中央にあり、石芯粘土カマドである。左右両袖に2個ずつの石を用いているが、支脚は不明である。たき口部にはかなりの焼土を認めた。

遺物　土師器甕・高坏・坏等が出土している。

遺物から古墳時代後期と考えられるが、住居址形態など新しい時期の住

（小林正春）

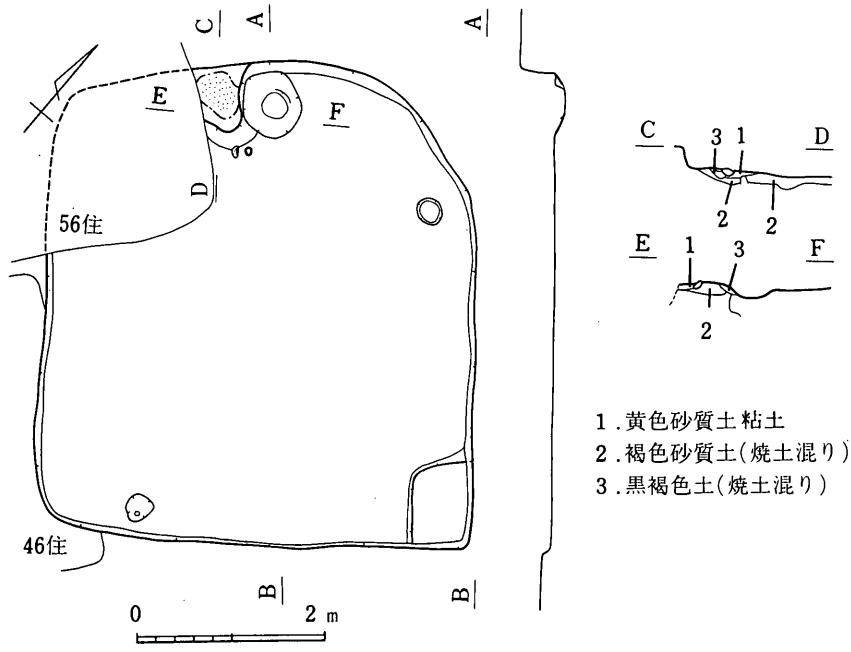
21号住居址（第30図）

遺構　56号住居址の東側KURBC51を中心に検出された。上面に中世以降の攪乱が多く、南・西側のプラン確認は容易ではなかった。西隅を56号住居址に切られ、南隅は46号住居址と重複し、一応当住居址が切っていると判断したが、確定はできなかった。5×4.3mの隅丸方形の竪穴居址で、主軸方向はN47.5°Wを示す。壁は56号住居址に切られる西隅以外は確認され、北西壁は

30cm前後を測り比較的良好であるが、他は20～10cmで状態は悪い。床面は全面黄色砂土まで掘られるが軟かい。東隅には、床から7～5cm立ち上がる90×60cmの方形のテラス状施設がある。主柱穴は不明である。カマド東側に70×60cm楕円形で深さ10cmの穴があり、灰だめ的な性格のものと思われる。カマドは北西壁中央やや西寄りに位置し、一部を56号住居址に切られる。かなり破壊が進み、焼土がわずかに残るだけで、構造等の把握はできなかった。

遺物　土器・石製模造品が出土している。出土量は少なく、完形またはそれに近いものは床面ないしその直上からの出土である。土師器甕・坏、須恵器壺（堤瓶？）・埦、臼玉がある。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）



第30図　TAN・KUR　21号住居址

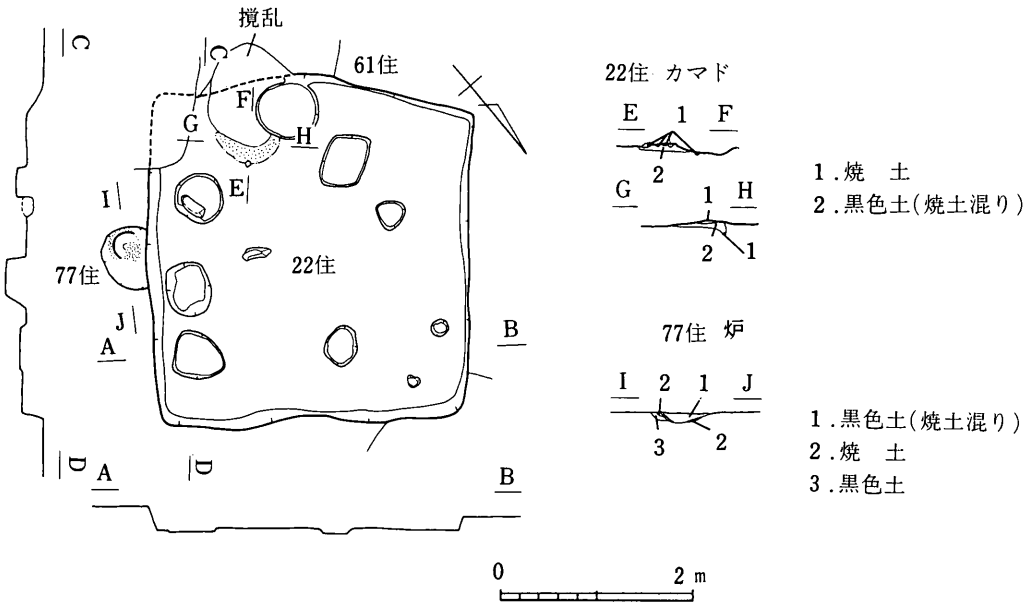
22号住居址（第31図）

遺構　KURBF51を中心に検出された。北東・南東壁は比較的容易に把握できたが、南隅は近世の攪乱により確認できなかった。北西壁は61号住居址のはり床下に落ち込みがあり、範囲を把握した。61号住居址に西側上面を切られ、南隅は穴に切られる。また、南東壁外に77号住居址の炉址があり、この住居址を切っている。3.6×3.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN153°Wを示す。壁は南隅の一部以外は確認でき、60～15cmを測る。床面は黄色砂土まで掘られるが軟かい。主柱穴は不明であり、床面上にいくつかの穴があるが、いずれも性格等不明である。南東壁東寄

りに焼土が残り、カマドの残骸と考えられる。近世の攪乱等により破壊された結果であり、構造等は不明である。

遺物　土師器甕・坏・高坏・鉢、臼玉が出土している。しかし、その量は少ない。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）



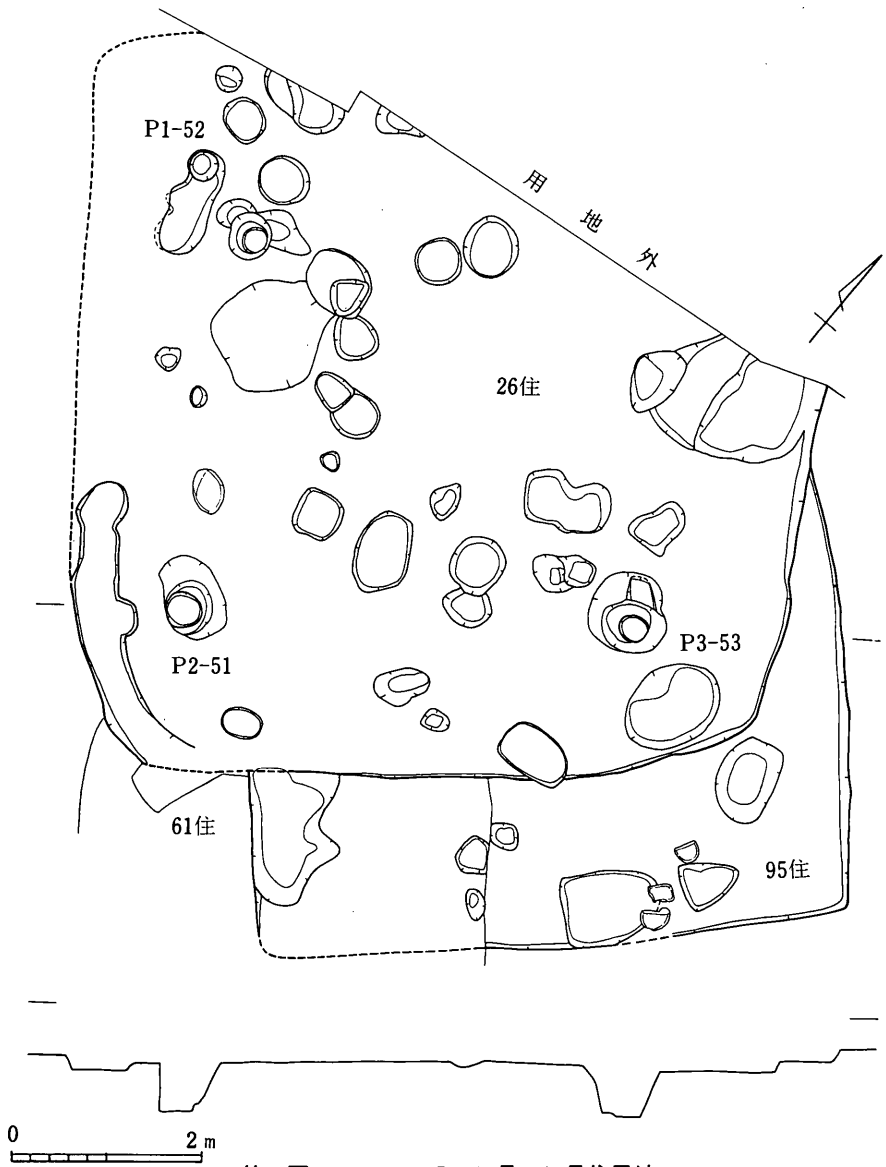
第31図　TAN・KUR　22号・77号住居址

26号住居址（第32図）

遺構　KURBE47を中心に検出された。61号・95号住居址を切り、24号・25号住居址に切られ、98号住居址と重複する。住居址の重複が著しい地区で相互の新旧関係について明らかに時代差のあるものは問題ないが、ほぼ同時期のものは調査時点及び最終整理段階において再三検討したが、前後関係不明のものもある。北西側は用地外にかかり、北壁と東壁及び主柱穴の位置から規模を想定した。7.8×7.7mを測り、西壁にカマドの存在が予想され、主軸方向N48°Wを示す。確認できた壁も重複のため壁高は10cm未満と低い。南東隅部に幅40cm・深さ10cm位の浅い溝状部があり、周溝的な施設の一部と考えられる。主柱穴はＰ１～Ｐ３を確認し、未調査部の北西端に１本あると推測される。Ｐ１～Ｐ３いずれも掘り方が不整形で、柱を抜き取った可能性もある。床面は比較的良好であるが新しい時期の穴が床面下まで達しており、不鮮明部が多い。

遺物　重複が著しいため、本址に伴う遺物は少ない。土師器甕・坏・高坏・甑、須恵器高坏・高坏蓋・瑞・甕・蓋坏、不明鉄器などがある。

出土遺物及び住居址形態などから古墳時代後期に位置づけられる。　（小林正春）

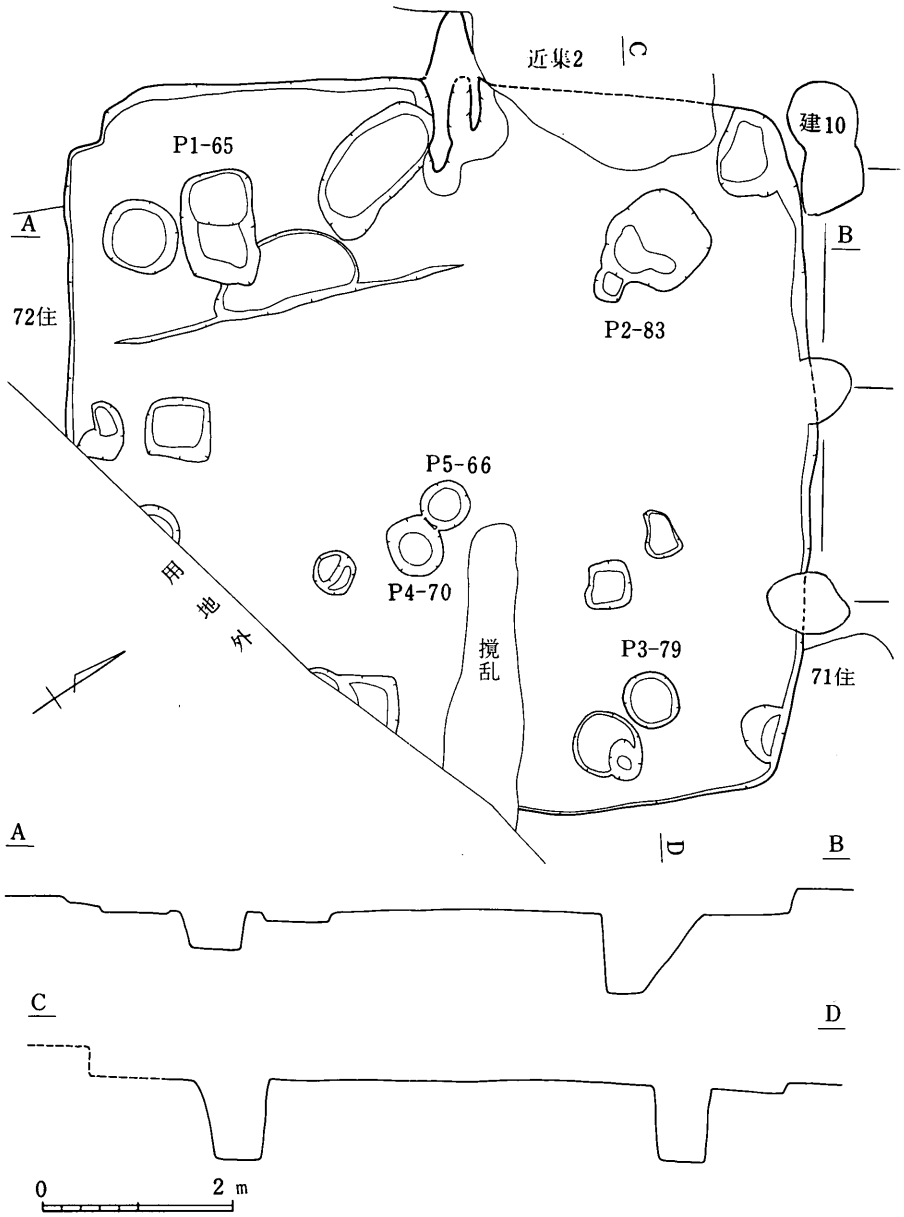


第32図　TAN・KUR　26号・95号住居址

30号住居址（第33・34図）

遺構　KURBO52を中心に検出された。東隅が71号住居址に、南西壁は72号住居址、北西壁は72号住居址により上部が切られ、北西壁の一部が近世集石に、北東壁の一部が建物址10に切られる。また、床面の一部は耕作による攪乱を受けている。南隅は用地外のため調査できなかった。7.5×7.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN53.5°Wを示す。壁高は30～20cmを測り、他住居址と

切り合う部分では若干浅くなる。床面は黄色砂土まで掘られ、東隅のＰ３より外側を除き堅いものである。西隅に2.3～２m幅で他の床面より10cm前後低くなる部分がある。主柱穴はＰ１～Ｐ３で、南隅柱穴が未調査範囲に位置する4本の主柱穴と考えられる。Ｐ１・Ｐ２は柱穴の重複がみられる。Ｐ４・Ｐ５はいずれも深く、上屋構造に関連もしくは間仕切り的な性格が考えられる。カマド南脇には160×60cmの楕円形を呈し深さ45cmの穴があり、貯蔵穴的な性格が考えられる。カマドは北西壁ほぼ中央に位置する粘土カマドである。粘土で構築された壁が焼け固まり、天井部を

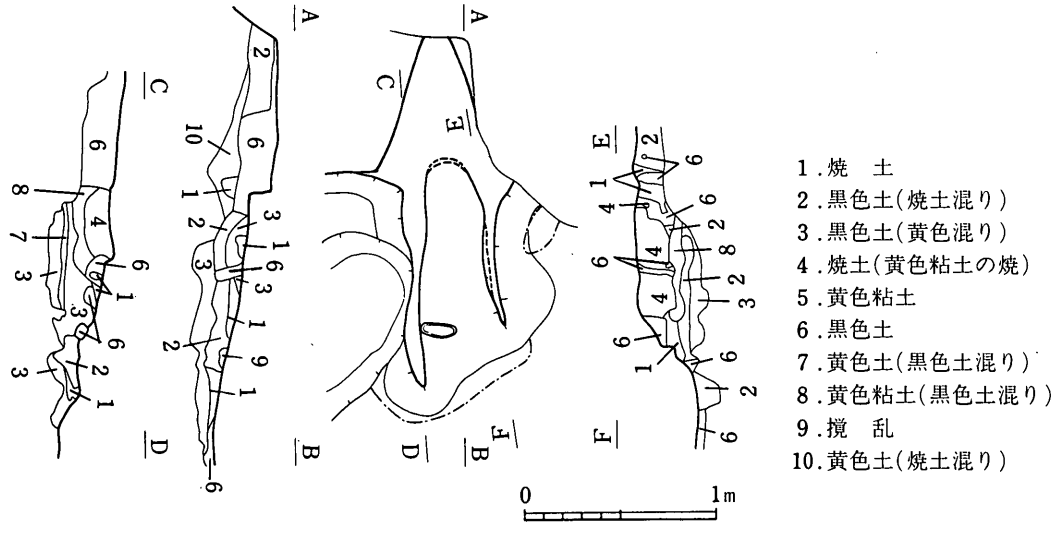


第33図　TAN・KUR　30号住居址

除いて良好な残存状態であった。両壁はやや内傾し、最大幅は40cmを測る。壁の焼け具合に比したき口部の焼土は少ない。煙道は長く壁外80cmまで確認したが、その先は近世集石２に切られて、完全には把握できなかった。主柱穴のＰ１・Ｐ２、西・北隅の状態から建て替えが考えられる。新旧規模の把握はきわめて難しいが、当初７m四方程度のものが若干北側に移動して7.5m四方程度にしたもの、あるいは北側部分のみ拡張して、先記7.5×7.8mのものが考えられる。南から北への移動（拡張）はＰ４からＰ５への移動も推定材料の１つといえる。

遺物　出土量は比較的多い。床面や覆土下層からの出土がほとんどである。主柱穴のＰ２から完形の土師器の甕が出土した。土師器・須恵器・玉類・砥石等が出土している。土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器蓋坏・瑯、臼玉・管玉が出土している。他に、かすがい状の鉄器が上層から出土しているが、本住居址に属するものか断定しがたい。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）

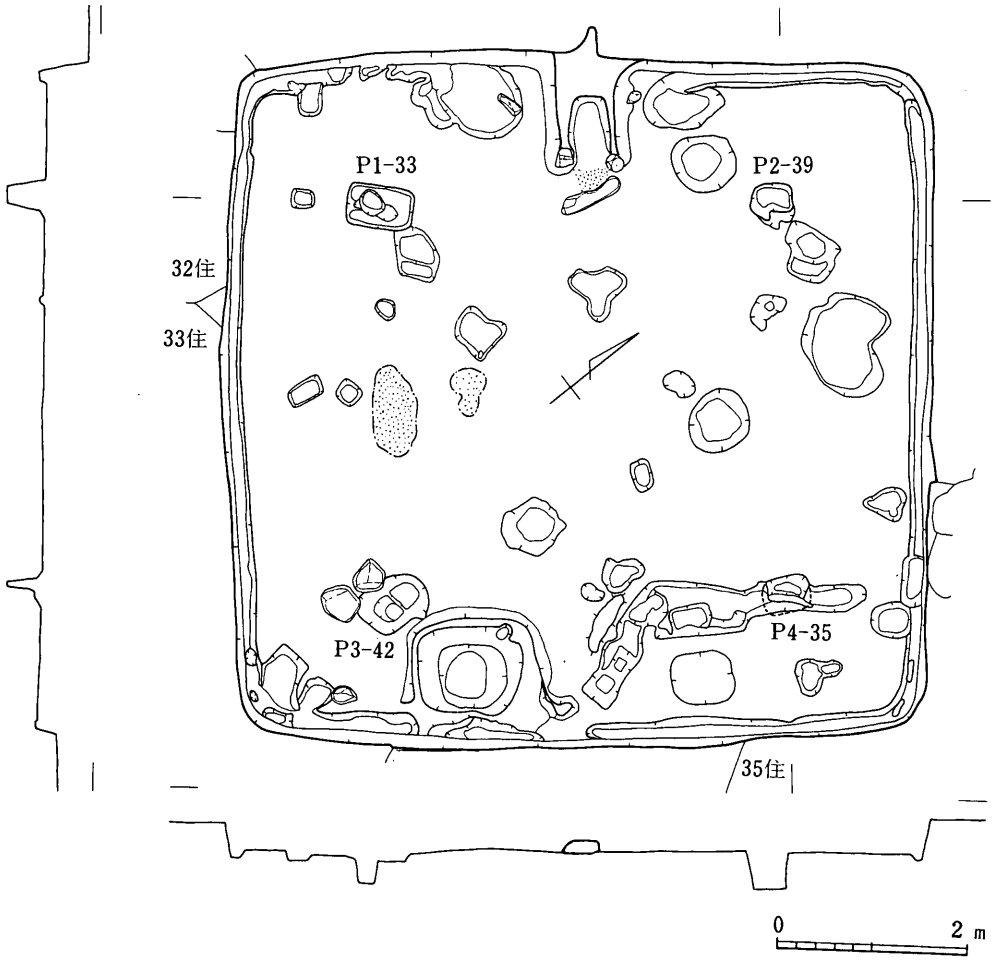


第34図　TAN・KUR　30号住居址カマド

31号住居址（第35・36図）

遺構　TANとKURにかかって検出し、KURAB51が中心の住居址である。33号住居址を切り、32号・35号住居址、道路址１、溝址17に切られる。隅丸方形の竪穴住居址であり、規模は7.2×7.4mの大形の住居址で、主軸方向はN53°Wを示す。覆土はほぼ３層に分かれ中心部に向ってレンズ状堆積が認められた。壁高は検出面から40～30cmで、壁面はほぼ垂直である。壁下に周溝があり、幅15cm・深さ10cmでカマド部とその反対側の一部を除きほぼ全周している。床面は大きな凹凸が

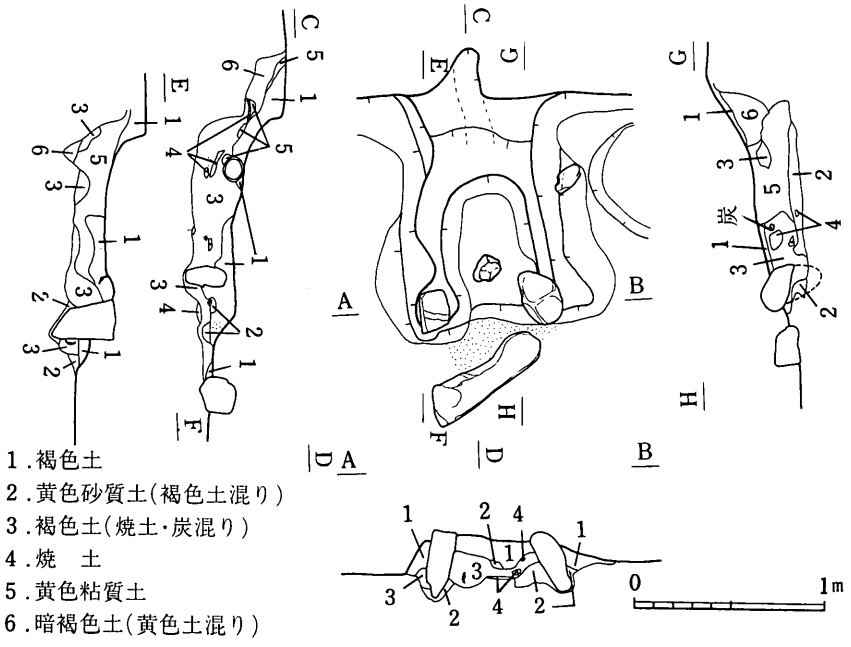
あるが、堅く良好であった。主柱穴は4本確認し、掘り方平面は不整方形で、深さは40～30cmである。床面には大小の穴があり、ほとんどの穴ははり床されていた。カマドとＰ2の間の穴は深さが40cmあり、土師器の甕片が多数入り、貯蔵穴に壊れた土器を意図的に入れたと思われる。南東壁下Ｐ3横の穴は縁部を土手状にわずか盛り上げ、掘り方は方形で深さは50cmあり、覆土中から若干の遺物が出土しており、貯蔵穴もしくは入口部施設と考えられる。東隅近くの穴2個は、深さ10cmであるが、Ｐ4を通ってくの字状に曲がる溝とともに入口部施設もしくは間仕切り施設と考えられる。Ｐ1・Ｐ3間の床面上に焼土があり、何らかの火使用施設の存在が推測され、住居空間利用検討材料となる。カマドは北西壁中央にあり、両袖先端にのみ石を入れた石芯粘土カマドである。たき口部前床上に長さ70cmの焼けた石があり、天井石の転落と考えられる。燃焼部中央に長さ20cmの石を直立して支脚としている。



第35図　TAN・KUR　31号住居址

遺物　床面直上を主体に出土量は多く、完形になるものもある。カマド右袖横に、土師器甑片が積重なり、左袖横には土師器鉢が、北隅から土師器高坏２個が出土した。支脚の奥に土師器坏が２個重なっており、カマド上に置かれたものが落ち込んだと思われる。Ｐ３の横に偏平な石が２個あり、その西北１ｍの所に粘土塊（10×10×７㎝）が確認され、この石が土器製作の台の可能性もある。北東壁中央下の床面から、石製模造品の有孔円板２個・勾玉１個・丹が集中して出土し、屋内祭祀も推測される。なお、臼玉・土玉の集中出土地点の確認はできなかったが、床面上10～５㎝の覆土を水洗して110個を得た。南壁下から錆化の進んだ鉄塊が出土し、馬具と思われる。この他、土師器坩、須恵器蓋・坏、管玉・ガラス玉などもある。

遺物から古墳時代後期前半の馬飼育等に関連した人の住居と推測される。　（佐々木嘉和）

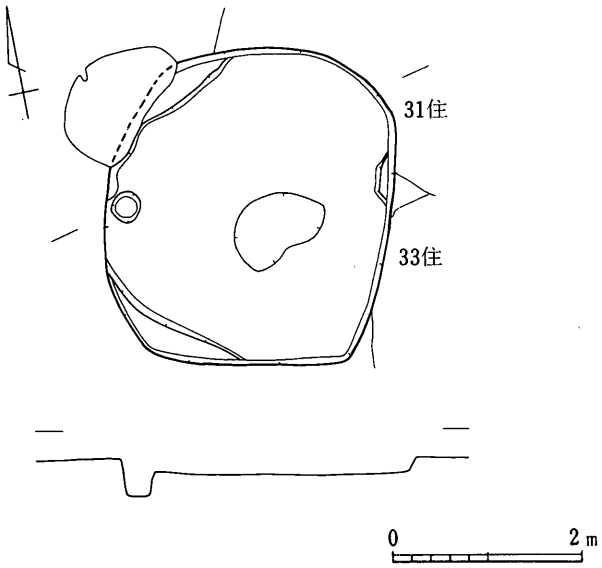


第36図　TAN・KUR　31号住居址カマド

32号住居址（第37図）

遺構　TANBY52にある。31号・33号住居址を切り、穴に切られる。3.2×３ｍの隅丸方形の竪穴住居址で、壁は検出面から20～５㎝と浅い。床面は軟かく中央付近がやや凹んでいる。主柱穴・焼土など確認できず、規模も小さいことから普通の住居址とは異なった性格が推測できる。

遺物　検出時覆土上部から須恵器瑞、西壁ぎわの穴から須恵器壺の口縁が出土している。他に、土師器甕・坏などの破片が出ているが、実測不可能である。



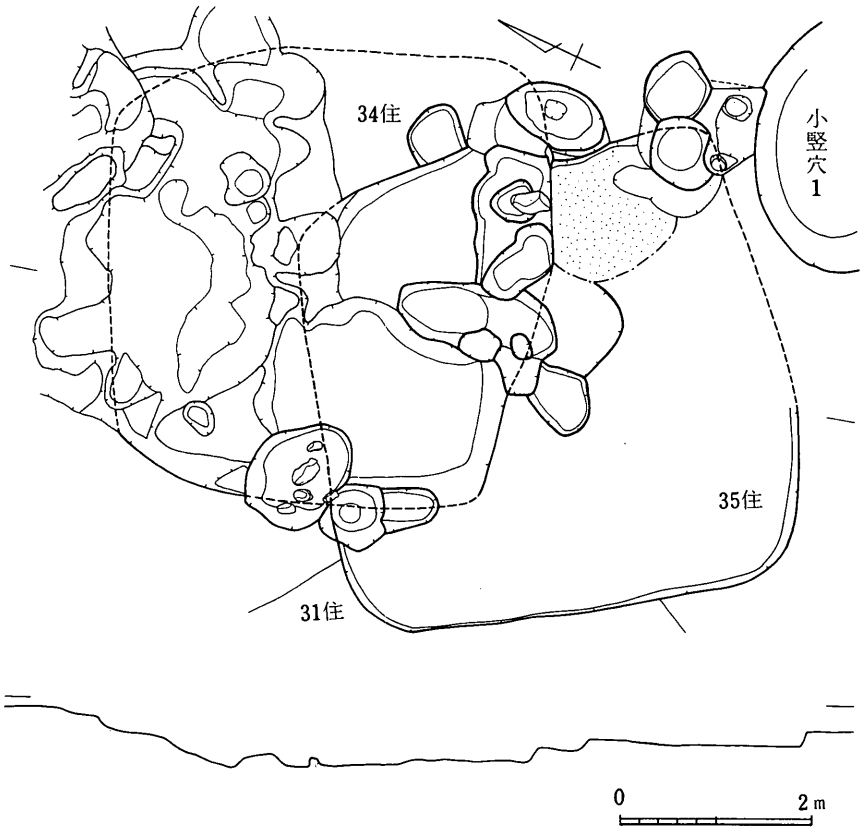
第37図　TAN・KUR　32号住居址

遺物から古墳時代後期の住居址と推定した。

（佐々木嘉和）

35号住居址（第38図）

遺構　KURAE52を中心に検出された。遺構重複の多い場所であり、31号住居址を切り、34号住居址・道路址１・複数の穴に切られる。切り合い部分が多いため、調査範囲は住居址全体の半分程である。



第38図　TAN・KUR　34号・35号住居址

4.8×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、その主軸方向はN57.5°Eを示す。壁高は検出面から20cm弱であり、確認部分は少ない。床は堅く良好である。カマドは残存状態が悪く断定はできないが、東壁下に焼土が集中した火床状の箇所があり、位置判断はできるが構造等不明である。

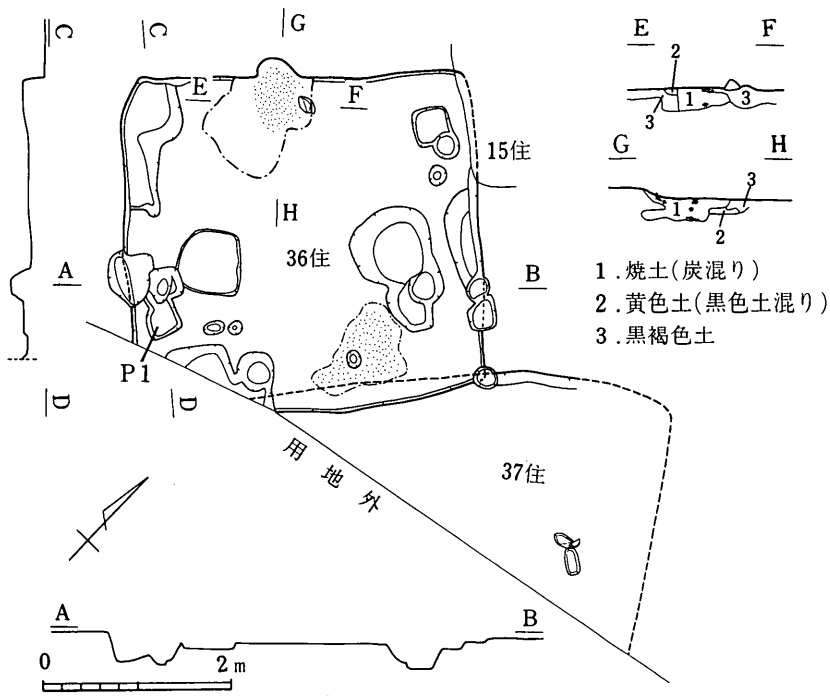
遺物　出土量は比較的少なく、かつ破片のみである。土師器甕が焼土右側の浅い穴にほぼ1個体入っていた。他に、土師器坏、須恵器坏・蓋がある。

遺物から古墳時代後期後半と思われる。　（佐々木嘉和）

37号住居址（第39図）

遺構　36号住居址の南側KURAJ53を中心とした暗褐色土層に床面があり、遺物の出土状況によって遺構の存在を確認した。壁は他遺構との重複のためほとんど不明であり、高さ8cmの北西壁を約1m確認したのみである。南側のほとんどが用地外となり、規模等は不明である。床面は遺物が出土しなければ見落すほど軟かなものであり、北側は床面も認められず遺物の出土状況によって範囲を想定した。

遺物　出土量は極めて少なく破片のみである。土師器甕・坏、須恵器蓋などである。

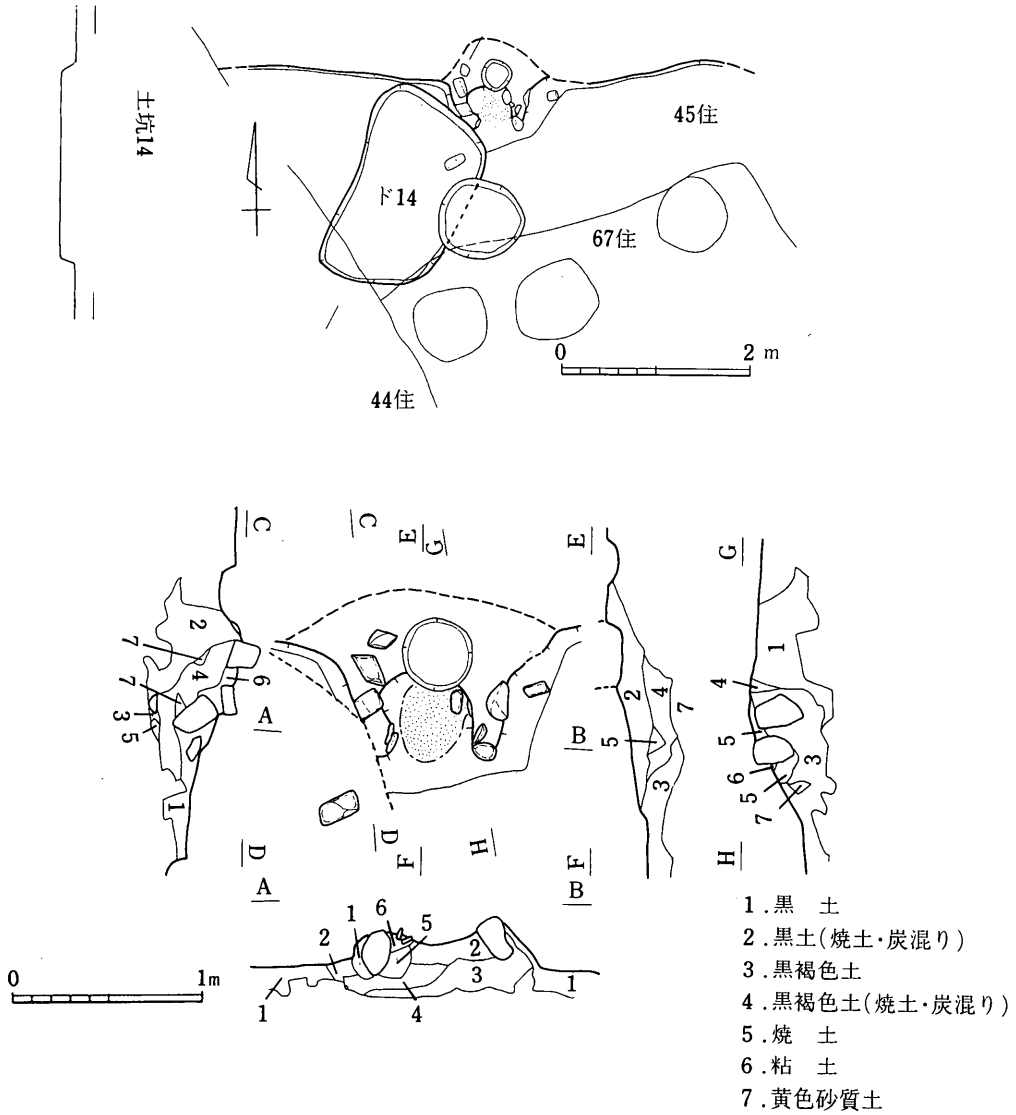


第39図　TAN・KUR　36号・37号住居址

遺物から古墳時代後期最終末の竪穴住居址と考えられるが、床面の状態などから住居址とは異なる遺構の可能性もある。（佐合英治）

45号住居址（第40図）

遺構　KURAO49にカマドを検出した。和同開珎銀銭の出土した44号住居址の北に位置する。44号・67号住居址、土坑14、穴に切られ、溝址18を切る。重複が著しく、調査範囲は1.5×5mでカマド周辺に限られる。方形の竪穴住居址と思われるが、規模等は不明である。カマドの方位はほ



第40図　TAN・KUR　45号住居址、土坑14

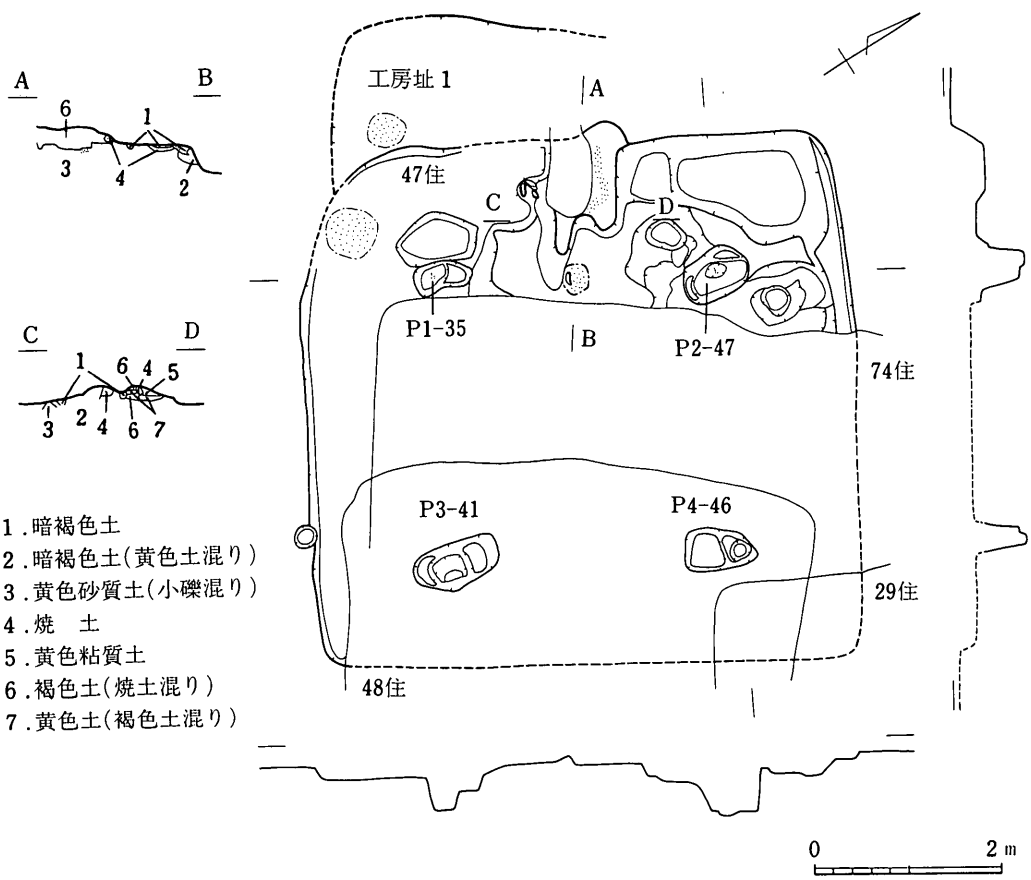
ぼ北で住居址主軸方向もこれに準ずると考えられる。壁高は検出面からほぼ20cmを測るが、カマドの左右２mずつ確認したのみである。調査範囲における床面の状態は軟かい。カマドは北壁に位置し、石芯粘土カマドである。左袖石の下まで焼土の混入がみられ、カマドの造り直しが考えられる。

遺物　カマド周辺から土師器甕が２個体出土している。

遺物から古墳時代後期終末であろう。　（佐々木嘉和）

47号住居址（第41図）

遺構　KURBI48を中心に検出された。重複の著しい場所であり、74号住居址を切り、48号住居址・工房址１に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は主柱穴の位置などから5.5×5.7mである。主軸方向はN61.5°Wを示す。壁高は検出面から20～10cmを測る。床面は軟かく、平面での把握ができなかったが、土層調査により、74号住居址の床面上５cmの高さにはり床の面が確認され



第41図　TAN・KUR　47号住居址、工房址１

た。主柱穴は4本確認し、平面は不整長方形であり、P3・P4は48号住居址の主柱穴と重複している。カマドは工房址1にほとんど破壊されていたが、西壁中央に火床を確認し位置と規模の把握はできた。構造等詳細は不明である。

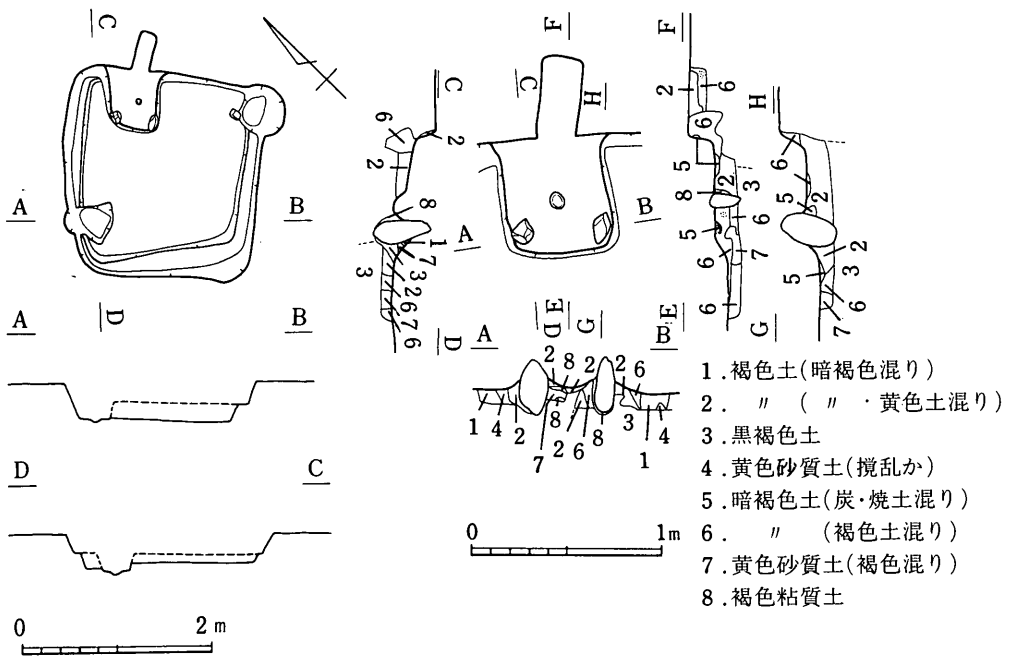
遺物　出土量は比較的多いが他遺構の遺物が混在するとみられる。47号住居址遺物と確認できるものは、カマド中及び他遺構と切り合いのない部分からの出土遺物で、土師器甕・内面黒色坏、須恵器坏、臼玉などである。

遺物から古墳時代後期後半と思われる。　（佐々木嘉和）

50号住居址（第42図）

遺構　KURAW48を中心に検出された。検出時には住居址以外の施設と考えたが、カマドが確認され住居址とした。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は2×2mのごく小さな住居址である。主軸方向はN51.5°Eを示す。壁高は検出面から20cmあり、ほぼ垂直の壁面を成す。床面ははり床で堅く良好であった。壁から30～10cmの内側を、さらに掘り込んだ後20～10cmの厚さではり床している。東・西隅に穴があるが、住居址周辺に時期不明の多数の穴が認められ、本住居址に付属する施設か否かは不明である。カマドは住居址の規模同様小形のもので北東壁の北隅寄りに位置し、両袖先端のみを石芯としている。支脚は長さ18cmの石をカマド中央部に直立させている。煙道は壁外40cmまで確認できた。火床と確認できる程の焼土はなく、使用度は少なかったと思われる。

遺物　出土量は少なく、土師器甕・高坏脚の破片、臼玉がある。



第42図　TAN・KUR　50号住居址

遺物から古墳時代後期の住居址と思われるが、非常に小規模なことから、特殊な機能を持った一般住居址とは性格の異なる遺構といえる。（佐々木嘉和）

52号住居址（第43図）

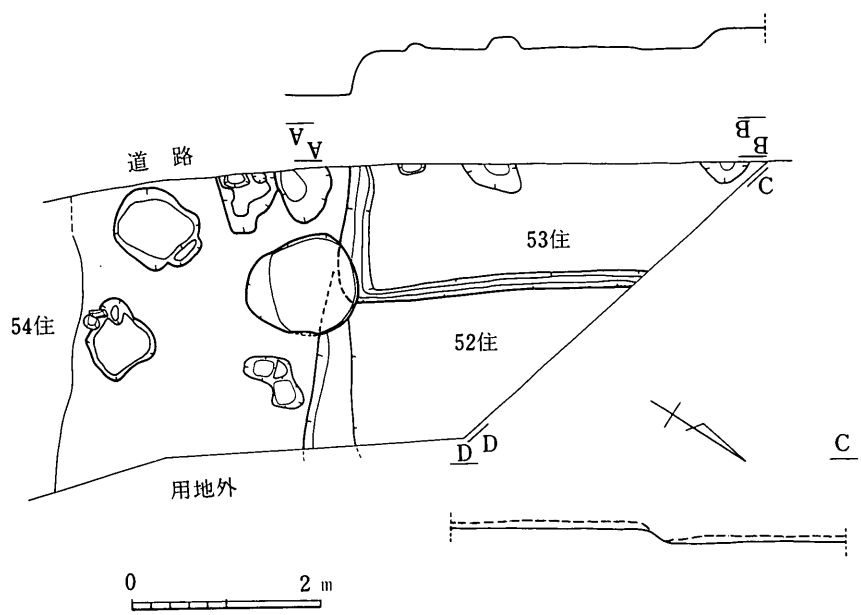
遺構　KURAM41を中心にバイパスを横断する地下歩道の用地に検出された。53号住居址・穴に切られる。用地が限定され、3×2mを調査したのみで、竪穴住居址ではあるが規模・主軸方向等不明である。壁は1.2m確認し、壁高30cmを測る。床面は調査範囲において、壁下40～20cm内側を10cm前後掘り込みはり床しており、堅く良好である。本住居址床面上10cmの高さにはり床状の堅い面があり、上面に炭・焼土が認められ、別住居址存在の可能性もある。

遺物　調査面積のわりに出土量は多く、ほとんどが覆土中からで、土師器甕・坏、須恵器甕・蓋坏、フイゴ羽口などの破片が出ている。

遺物から古墳時代後期が考えられるが、覆土中のはり床状部分の存在から混在も検討する必要がある。（佐々木嘉和）

53号住居址（第43図）

遺構　KURAL41を中心に検出され、52号住居址を切り、穴に切られる。調査面積は4×1.5m



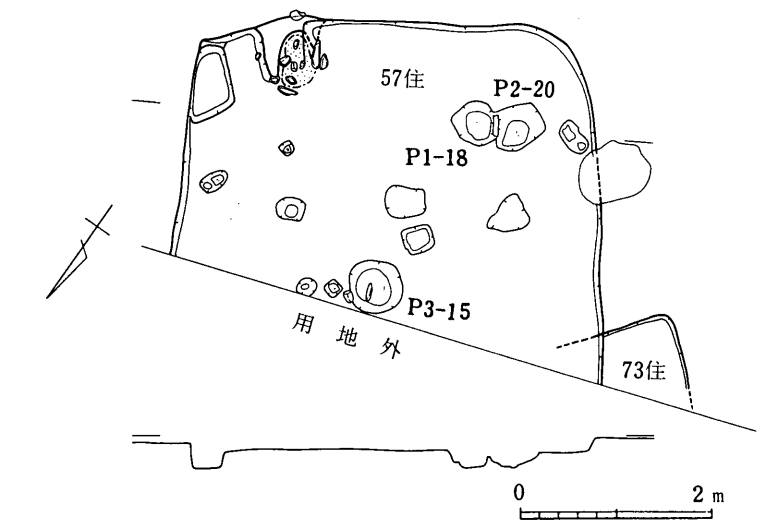
第43図　TAN・KUR　52号・53号住居址

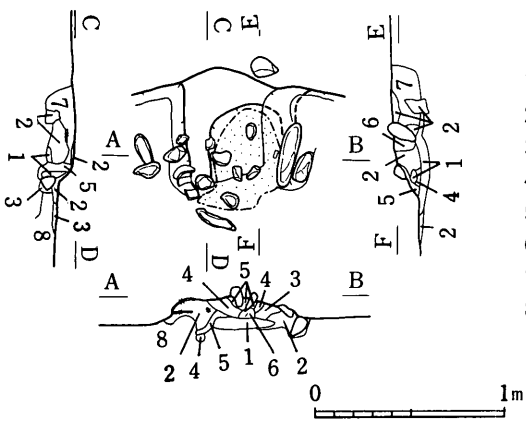
と狭く、隅丸方形の竪穴住居址と推測されるが、規模主軸方向など不明である。壁は南東隅をL字状に確認し、検出面からの壁高は40cmを測る。壁下に幅20cm・深さ7～2cmの周溝が確認された。壁下から70～40cmの範囲は一旦掘り込んだ後にはり床している。壁下はり床部分は軟かで他の部分は比較的堅い状態であった。なお、周溝底部ははり床前の掘り込み面より浅い状態であった。主柱穴は市道下の未調査部にかかる2本が若干浅いが該当すると思われる。

遺物　調査面積の狭いわりに出土量が多かったが、ほとんど覆土中から出土し、破片である。土師器甕・坏、須恵器壺・坏など出ている。

遺物から古墳時代後期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

57号住居址（第44図）





1．焼　土
2．褐色土(焼土混り)
3．褐色土
4．黄色砂質土(焼土混り)
5．暗褐色土
6．黄色砂質土
7．　〃　(褐色土混り)
8．褐色土(暗褐色土混り)

第44図　TAN・KUR　57号・73号住居址

遺構　KURAX46を中心に検出され、73号住居に切られる。北側が用地外にかかり約$\frac{2}{3}$を調査した。隅丸方形の竪穴住居址で、調査規模は3.5×4.2mである。主軸方向はN145°Eを示す。黄色砂土（地山）上層の褐色土から掘り込まれており、覆土も暗褐色土で壁内外の判断が難しく、平面形把握のため何回も削らざるを得ず、確認できた壁高は20～10cmである。床面は壁ぎわの1.5mの範囲を一旦掘り込んだ上にはり床し、その部分は軟かである。はり床部より内側の中心部付近は堅く良好であっ

た。主柱穴は確認できなかったが、P1・P2のどちらかが位置的にその可能性がある。カマドは東隅に位置する。石芯粘土カマドであるが残存状態が悪く、周囲にカマド用材と思われる石が散乱する。たき口部の焼土は良く残っていた。中央部やや壁寄りに長さ約16cmの石を直立させ支脚としている。P3の中には炭と焼けた石が入っており、住居址内におけるカマド以外の火使用施設の存在も考えられる。

遺物　出土量は比較的少ない。ほとんどが床面直上の出土であり、土師器甕・坏、須恵器甕・壺などの破片が出ている。なお、覆土上層で灰釉陶器、フイゴ羽口、鉄滓が出土したが、平安時代の生活面からの混入であろう。

出土遺物から古墳時代後期終末と思われる。　（佐々木嘉和）

58号住居址（第45図）

遺構　KURBB48を中心に検出された。遺構の多数重複する地点の1つで、98号住居址を切り、24号・26号・56号住居址、いくつかの穴に切られる。そのため遺構範囲と考えられる全体を精査したが壁・床面等把握できた所は少ない。方形の竪穴住居址で、規模は5×5mと判断される。主軸方向はN45°Wを示す。切り合いが著しく、東南壁と、西隅そばのわずかに残存する壁高は、検出面から10cmである。床面は他時期の穴による攪乱が多く、黄色砂質土の混じる面を一応それとし、土層断面による検討の結果、黄色土の入る堅い面が3層確認でき、はり床とした。中央から東南壁にかけては床（地山）が一段高く、この面が下から2層目のはり床と同レベルである。また、この高い部分にも5cm上にはり床が確められた。地山面に沢山の穴を検出したが、切り合い関係の判断ができず、主柱穴の把握もできなかった。カマドは北西壁中央にあるが、残存状態が悪く、火床と袖の粘土のみを確認した。石を使わない形態と思われる。はり床・複数の柱穴などから建て替えも考えられる住居址である。

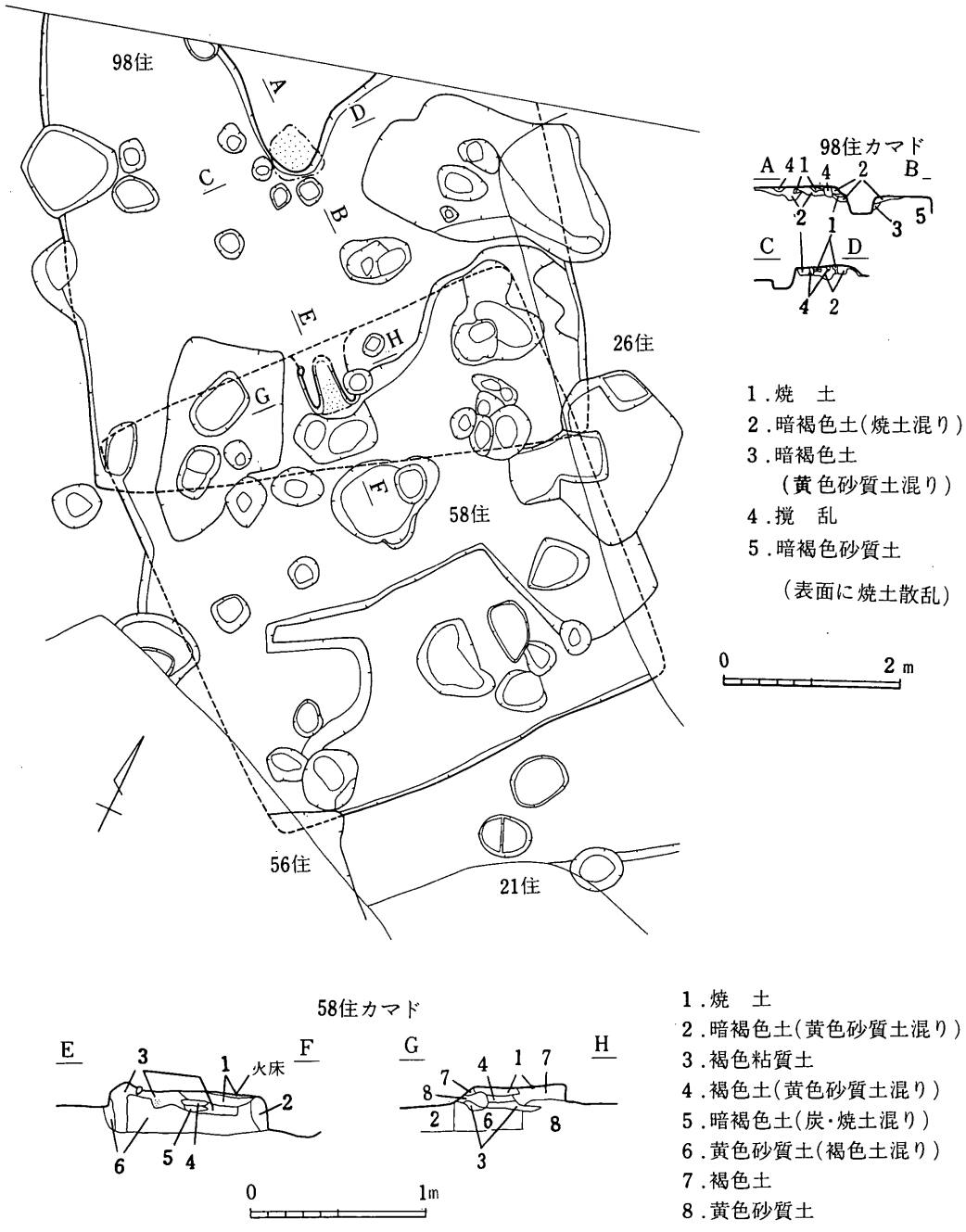
遺物　出土量は多い。カマド左側の穴ははり床され、そこに土師器甕3個体がつぶれていた。そのうちの1個体の底部が土師器坏に入っており、甕を立てるのに坏を使っていた可能性がある。完形の土師器甕が南隅の穴の上から直立して出土したが、床面から20cm上であり、何らかの施設があったと思われる。他に、土師器甑・坏・高坏、須恵器坏・高坏、土製紡錘車、臼玉・土玉、鉄器片、鉄滓、炭化米が出ている。

遺物から古墳時代後期中頃の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

61号住居址（第46図）

遺構　KURBE49を中心に検出された。検出面からの掘り込みが浅く、他遺構との重複も著しいため、新旧関係の把握は容易でなかったが、22号・95号住居址を切り、26号住居址に切られる。

(4.3)×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、推定主軸方向はN41°Wを示す。壁は他住居址との重複や耕作の攪乱等により把握できない箇所があるが、確認部での壁高は18～10cmを測る。床面は黄色砂土まで掘られ、22号住居址覆土中も含めはり床されるが、状態はあまり良くない。主柱穴

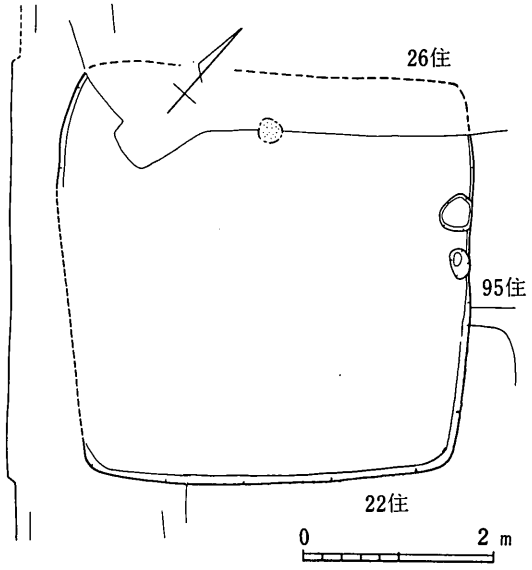


第45図　TAN・KUR　58号・98号住居址

等は確認できなかった。カマドは北西壁ほぼ中央部床面に焼土が残存し、位置のみ確認したが、全体が26号住居址に切られ破壊されており、構造等の把握はできなかった。

遺物　出土量は少ない。ほぼ完形の土師器甕の他に、土師器甕・鉢・内面黒色坏、鉄釘等がある。

遺物から古墳時代後期中頃に位置づけられる。　（小林正春）



第46図　TAN・KUR　61号住居址

62号住居址（第49図）

遺構　TAN・KURのほぼ中央を横断する道路の南側地下歩道用地の調査で幅が3.8mと狭い範囲に住居址の北西壁の一部のみを検出した。壁の東側は用地外へ延びており、西側は63号住居址に切られている。当初住居址2軒の単純な切り合いと考えたが、調査の進行に伴って南側に3軒の切り合いが確認され、規模・主軸方向等は不明である。確認した壁高は20～15cmで、比較的緩やかな壁面を成す。床面は南へ傾斜しており、66号・70号住居址の上部を切って両住居址覆土上を床面とし、64号住居址に西側を切られている。床面状態はきわめて軟かく南側用地境付近では床が確認できず、本住居址の範囲はこの部分まで達していないことも考えられる。

遺物　切り合い関係が多く、本住居址に伴うか若干疑問はあるが、土師器壺・甕・高坏、須恵器坏がある。

これら遺物から古墳時代後期後半の住居址と考えられる。　（佐合英治）

63号住居址（第49図）

遺構　TAN・KURのほぼ中央を横切る地下歩道用地部分に検出された。西側のほとんどが用地外になり、62号住居址、溝址19との重複のため、規模・主軸方向は不明である。方位N44°Wの北東壁3.4mと床面を部分的に確認したのみである。残存部壁高は北西壁14cm・北東壁25cmを測り、ほぼ垂直な壁面を成す。南東壁は62号住居址を切って覆土中に造られていたことを用地境土層観察時に確認したが、調査部分は溝址19にほとんど切られていた。床面も溝址19と後世の比較的大きな穴に切られ、南西用地境にわずか確認したがきわめて軟かなものであった。床と同レベルで焼

土を認めたが本住居址に伴うものかは不明である。

遺物　床面密着遺物はなく、東壁と溝址19の壁とが重複していたため、溝址19プラン確認が住居址掘り下げ後になり、溝址19の遺物が含まれていると考えられる。出土した遺物は土師器壺・甕・坏、内面黒色高坏・坏、須恵器壺・甕、山茶碗系の鉢がある。

溝址19の時期を奈良時代以降とすれば、古墳時代後期後半の住居址と考えられる。

（佐合英治）

67号住居址（第47図）

遺構　KURAO52を中心に検出された。38号・39号・44号・45号住居址に切られ、68号住居址と重複する。重複により西壁は不明であるが、ほぼ⅔を調査した。主軸方向は不明であるが南北7mを測り、東壁の方向はN16°Wを示す隅丸方形の竪穴住居址である。壁は褐色土層中にあり、その把握が不明確で小さな歪みを生じた。壁高は南東隅の一部が20cmで緩やかな傾斜を持ち、他は15～8cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は北半部のみはり床され、全体にほぼ平坦で堅いたたき状である。はり床下、住居址ほぼ中央の1.4m程の範囲に臼玉が集中して出土した。この部分から北壁方向に1.8m幅の広い範囲と北東隅の部分に焼土が検出された。はり床除去後は床面から10cm前後の凹地となり、別遺構のあった可能性もあるが断定できない。主柱穴はP1・P2の2本を確認し、P2はやや浅いが両方とも内側に傾斜する掘り方である。はり床面で検出し覆土等から本住居址に伴なうと考えた。P3・P4は方形の掘り方で深さはそれぞれ37・46cmを測り、P4から骨片と打製石斧が出土した。他の穴はほとんどのものが住居址プラン検出面で確認されており本住居址より、後世のものである。

遺物　出土量は比較的多いが、はり床面密着遺物はほとんどなく、覆土上層及びはり床中のもので、上層のほとんどは本住居址に伴なわない平安時代の遺物であり、上面に別の遺構があったと考えられる。はり床中には高坏が多く、全体としては、土師器甕・高坏・坏・内面黒色の坏、須恵器平瓶・蓋・坏・高台付坏・蓋坏、灰釉陶器埦、鉄釘、臼玉・管玉・ガラス玉などがある。

確実に本住居址に伴うと考えられる出土層位の遺物から古墳時代後期前半の住居址と考えられる。

（佐合英治）

68号住居址（第47図）

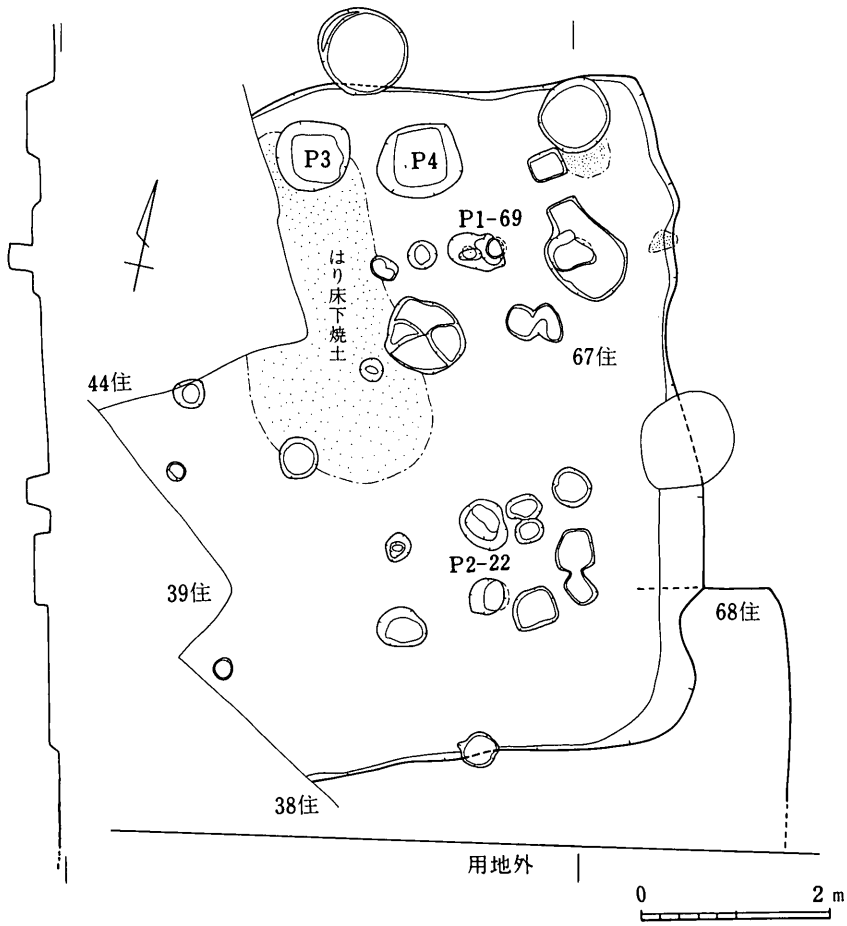
遺構　KURAP53を中心に検出した。褐色土層を掘り下げた住居址で他遺構検出のさいにほとんど壊してしまい、38号・39号住居址に切られ、67号住居址と重複し、南側は用地外で北東隅に数cmの壁ときわめて軟かな床面を部分的に確認したのみである。プラン・規模等は不明であるが、用地境土層の観察により褐色土層を20cm前後掘り下げた竪穴住居址である。

遺物　出土遺物には、土師器甕・小形甕・壺・高坏・坏、須恵器甕・蓋坏がある。他に、羽口

の破片が出土している。ほとんど住居址把握以前に出土したもので、混入品があると思われる。

遺物から古墳時代後期前半の住居址と考えられる。

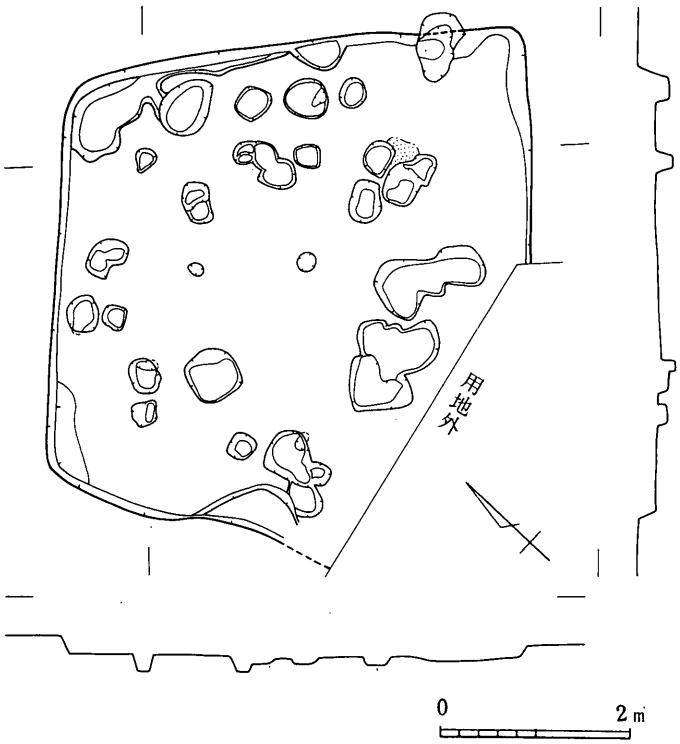
（佐合英治）



第47図　TAN・KUR　67号・68号住居址

69号住居址（第48図）

遺構　KURAS53を中心に検出された。南隅は用地外となり、東側⅓は65号住居址に切られているが床面までは達しておらず、全体をほぼ確認した。南側は褐色土層中にあるため、壁と床の把握が困難であり、プラン全体に若干の問題がある。規模は5×4.8mで、長軸方向N50°Wの隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は65号住居址に切られた北東壁が12cmで、それ以外は25～20cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成すが西と東の隅は少し緩やかなものである。周溝は北東壁下の一部に2m程検出し、幅10cm・深さ12cmを測る。床面は凹凸はあるがきわめて堅い。床面上に多数の穴を検出したが、どの穴も20～10cm程の浅いもので、主柱穴と考えられる穴は確認できなかった。また中心部より東へ1.7mの所に焼土を認めたが性格は不明である。南西壁用地境付近に住居址の内側へ10



第48図　TAN・KUR　69号住居址

cmのマウンド状に張り出す部分があるが、これも性格等は不明である。

遺物　出土量は少なく、一部65号住居址はり床中のものも含まれている。土師器甕・高坏・手づくね・内面黒色の坏、須恵器甕・瓶・蓋などがある。

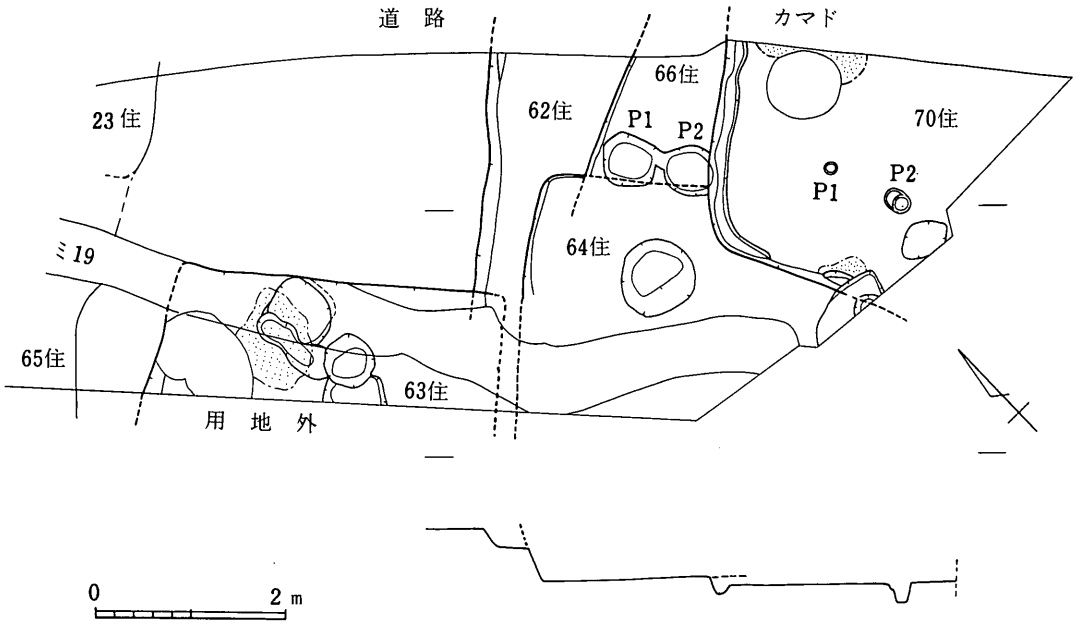
本住居址にはカマドの存在した痕跡がなく、出土した遺物中に古墳時代前期のものも含まれているが、一応古墳時代後期前半の住居址と把握した。　（佐合英治）

70号住居址（第49図）

遺構　KURを横断する道路の南側地下歩道用地の南端AW57・58に住居址の北西隅を検出した。66号住居址を切り、62号・64号住居址に上部を切られているが、掘り込みが深く確認した部分は良好な状態で残っている。大半が用地外であるが、規模・プランはカマドが壁のほぼ中央部にあると仮定して一辺５m程の隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向は調査範囲が狭く断定はできないがN37°Wを示す。北壁は66号住居址床面より16cm、西壁は64号住居址床面より13cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は西壁の一部で途切れているが、壁直下に巡っており、幅15cm・深さ11～４cmを測る。床面は平坦できわめて堅いたたき状である。主柱穴は確認できなかったが、P１・P２は本住居址に伴うと考えた。性格は不明であるが、それぞれの深さは39・21cmを測る。カマドは東壁用地外土層の調査中に、左袖の先端に使われている石の一部と粘土を確認した。焼土は後世の穴に切られているが、カマド左袖周辺の床面上に認めた。全容は不明であるが、袖先端のみに石を持つ石芯粘土カマドと考えられる。また、西壁下床面上に焼土があるが、後世の穴に切られ性格等は不明である。

遺物　土師器の大形壺がP２南側の床面が５cm程凹んだ所から出土した。他に、土師器甕・高坏・須恵器高坏、臼玉がある。出土量は少ないが須恵器高坏を除いて床面密着遺物である。

遺物から古墳時代後期前半の住居址と考えられる。　（佐合英治）



第49図　TAN・KUR　62号・63号・64号・66号・70号住居址

74号住居址（第73図）

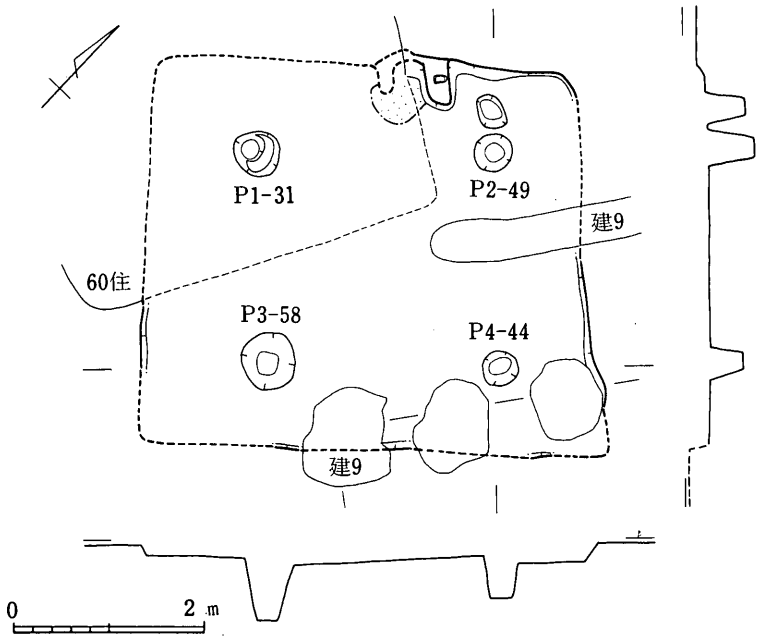
遺構　KURBL49を中心に検出された。切り合い関係が著しく、29号・47号・48号・78号住居址に切られる。確認できた範囲はわずかである。隅丸方形の竪穴住居址で、7.2×7.4mの規模を推定できる。主軸方向はN53.5°Wを示す。壁高は北隅で20cmある。床面は約半分残り、堅く良好であった。主柱穴は4本で、平面は不整楕円形を成し、P1は段が付いている。P3は48号住居址主柱穴と切り合う。P2と西壁の間に、貯蔵穴と思われる平面がほぼ方形で深さ50cmの穴がある。縁部が約10cm高く土手状になっており、内側全面に青灰色の粘土が塗られていた。カマドは西壁中央下に焼土が広がっていたが、47号住居址に破壊されており、構造等不明である。なお、この部分は軟かく、床面から約20cm掘り下げられており、カマド構築作業に関連する可能性がある。

遺物　切り合い関係のため、74号住居址と確認できる遺物は少ない。北隅の壁下から、須恵器を模倣した透しのある土師器高坏脚と、石製模造品の臼玉4個が出土した。P2の覆土中から、管玉1個と土師器高坏脚が出ている。

遺物から古墳時代後期の住居址である。　（佐々木嘉和）

79号住居址（第50図）

遺構　KURBI53を中心に検出された。60号住居址と重複しその調査時にも本住居址の存在が予想され、その後建物址９の調査時にわずかに残る壁を確認し、住居址とした。60号住居址・建物址９に切られている。4.1×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN50.5°Wを示す。壁は切られる部分が多く、残存部分で高さ30～10cmを測る。黄色砂土を床面ととらえたが軟かく、その上に生活面があった可能性もある。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。カマドは北西壁やや北寄りに設けられる。右袖に粘土の痕跡がわずかに認められた。左袖は60号住居址に切られる。



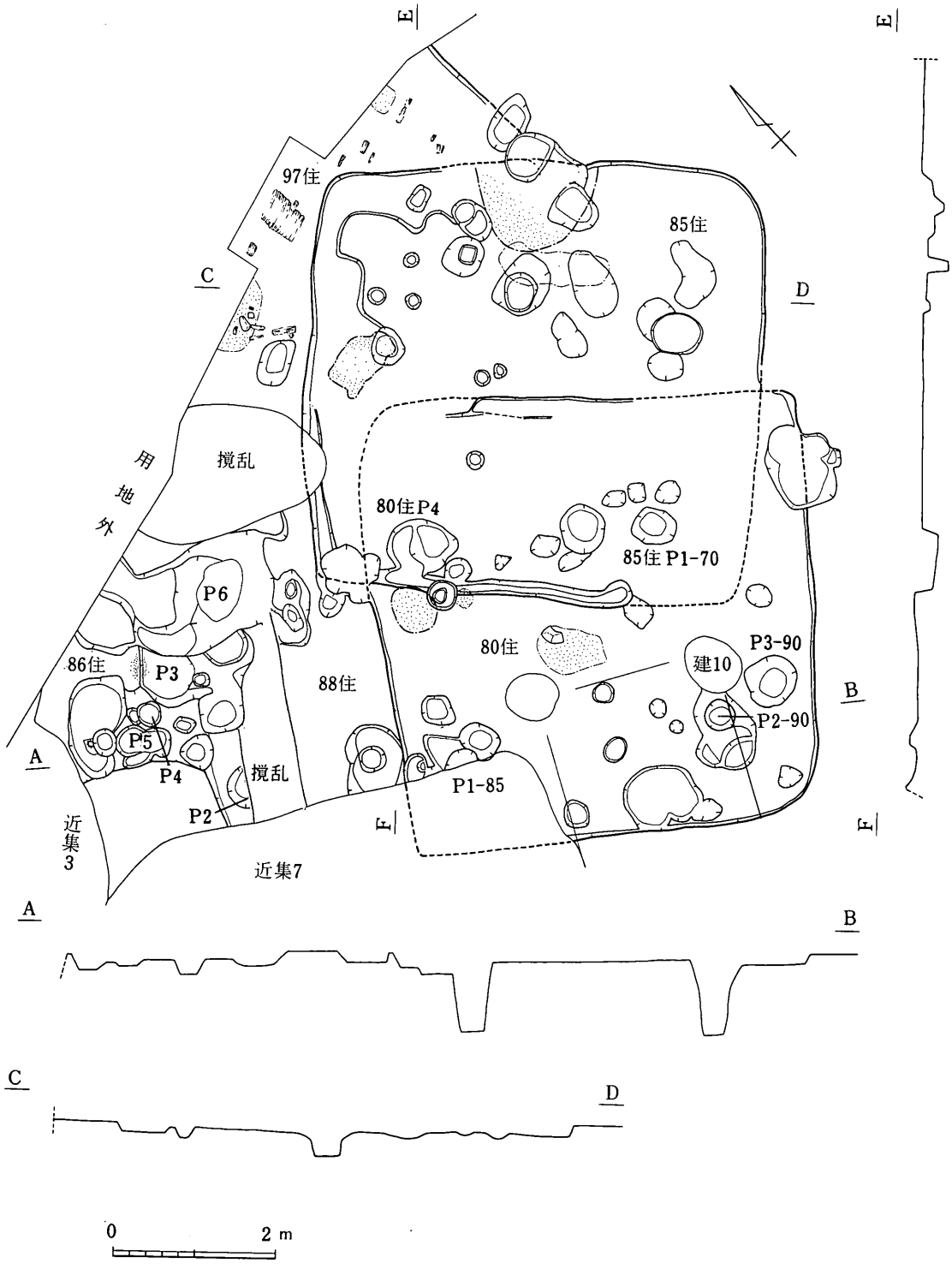
第50図　TAN・KUR　79号住居址

ほとんど遺物の出土がなく、具体的な時期決定ができず、奈良時代以前で古墳時代後期の可能性が強い。

（山下誠一）

80号住居址（第51図）

遺構　KURBQ48を中心に検出された。85号･88号住居址と重複関係にあるため、プラン把握は容易でなかった。最終的にはすべての住居址を床面まで掘り下げ、その残存状態により新旧を判断した。本住居址は85号住居址に切られ、88号住居址を切っている。他に、建物址10に切られている。5.4×5.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN44°Wと考えられる。壁は近世集石７･85号住居址に切られる部分を除いてほぼ全面確かめられ、85号住居址と切り合う北東壁も、同址のはり床下に一部認められた。確認壁高は15～10cmを測る。床面は85号住居址に切られる北側半分以外は、黄色土の堅いはり床が検出された。床面上には細かい炭と焼土の散布がみられた。主柱穴は南側のＰ１･Ｐ２があり、４本主柱穴と思われるが、北側の２本は意図的に精査したにもかかわらず、確認できなかった。Ｐ１の埋土には焼土がかなり混っていた。Ｐ３は底近くから土師器甕の口縁部と高坏の脚部が出土し、高坏はＰ３北側床面上の坏部と接合する。貯蔵穴的な性格を



第51図　TAN・KUR　80号・85号・86号・88号・97号住居址

持つものと思われる。P4は90×60cmの楕円形を呈し、20cmの所に段を持ち、深さ37cmを測る。85号住居址のはり床下に検出され、焼土に黄褐色土が混じる覆土で、貯蔵穴ないし灰だめの用途が考えられる。北西壁中央やや北寄りに焼土が多く、カマドの残骸と考えられる。なお、床面上や穴にみられる焼土・炭の様子から火事の住居址である。

遺物　土師器・須恵器・玉類がある。床面ないし覆土下層からの出土である。そのうち、P3の遺物のあり方は注目される。土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器蓋坏、臼玉・管玉がある。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）

82号住居址（第24図）

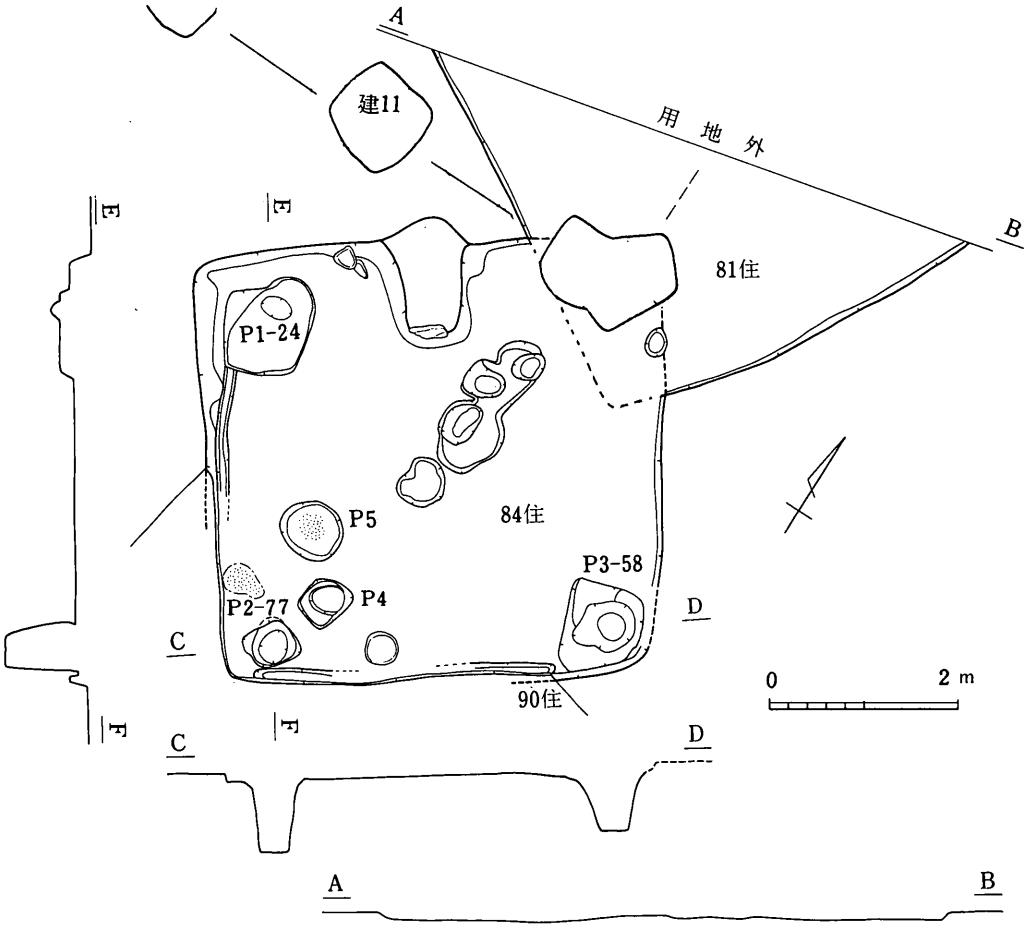
遺構　KURBK46にカマドのかかる住居址である。75号住居址を切り、47号・74号住居址に切られる。切り合い部分が多く調査範囲は3×2mである。方形の竪穴住居址と思われるが、規模等は不明である。主軸方向はN48°Wを示す。壁の残存する所はわずかであり、検出面から20cmを測る。床面は堅く良好であった。カマドは北西壁にあるが、耕作による攪乱のため、$\frac{1}{3}$残っていた。地山掘り残しか粘土カマドと推測され、残存した左袖は良く焼けていた。

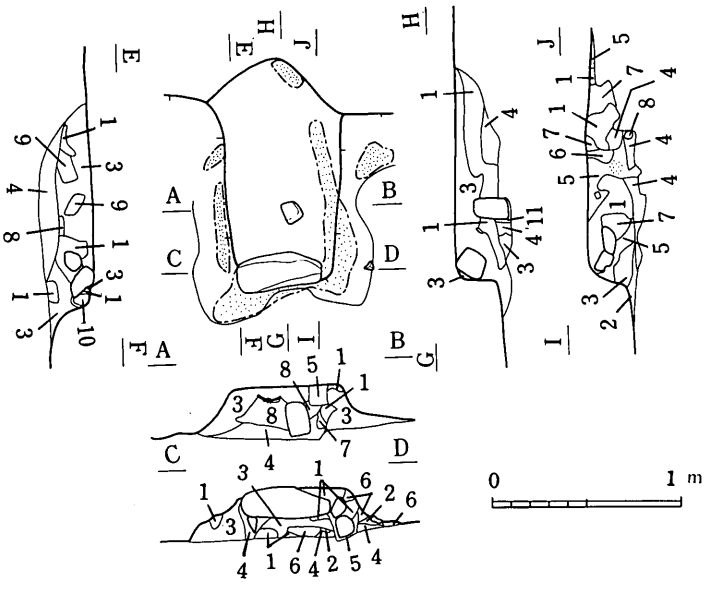
遺物　出土量はごくわずかである。床面とカマドを切る攪乱の穴からの出土がほとんどで、土師器甕、臼玉・土玉等である。

遺物から古墳時代後期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

84号住居址（第52図）

遺構　KURBV47を中心に検出した。北東隅は81号住居址と重複し、建物址11の柱掘り方に切られている。住居址の中心部から西南隅の部分は90号住居址を切っている。北東隅を除いて全体が調査でき、5×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN38°Wを示す。壁高は30～20cmを測るが、90号住居址を切る部分は6cm程しか確認できなかった。壁は西隅がやや傾斜をもつが、他はほぼ垂直である。周溝は北西壁と南東壁の直下に、幅15cm・深さ10～8cmのものが検出されたが、90号住居址を切っているため把握できない所もある。床面は平坦できわめて堅く、90号住居址を切っている部分はたたき状のはり床がなされている。主柱穴は3本確認し、P1～P3はそれぞれの隅寄りにあり、本来4本主柱穴と考えられ、他の1本は建物址11の柱掘り方に切られ把握できなかった。P4は出土遺物から本住居址に伴う穴であるが、性格等は不明である。P2の北側の焼土は、住居址プラン検出面から長径20cm程の輝緑凝灰岩を含む石4個とともに確認され床面に達していたもので、集石等別遺構の可能性が強い。本住居址は火を受けたと考えられ、カマド前に炭化材を確認した。すべて床面より数cm浮いており、良く燃えたものらしく残存状態は極めて悪く、住居址南側では原形をとどめるものはほとんどない。





1.焼　土
2.炭
3.褐色土(黄色土混り)
4.黄色土(褐色土混り)
5.褐色土
6.黄色土
7.焼土(褐色土)
8. 〃 (黄褐色土混り)
9.黄色粘土(褐色土混り)
10.撹乱(黒色土)
11.黒色土

第52図　TAN・KUR　81号・84号住居址

カマドは北西壁の中央部にあり、両袖の先端に自然石を使った石芯粘土カマドで、石を直立させた支脚と天井石をもつ。焼土は内部だけでなく外側にも認められ、火事のためと考えられるが、袖右を被っている土の中にもブロック状の焼土があり、同じ位置でカマドを造り直している可能性もある。また、P5からは古墳時代前期の甕が出土し、後に90号住居址の主柱穴となった。

遺物　全体の出土量は少ないが、土師器の小形甕と甑が完形でカマド右側から出土した。同じくカマド右側床面に臼玉・土玉、剣形石製品が集中して出土した。また、南東壁のほぼ中央から台石が出土した。他に、土師器甕・高坏・坏などがある。

これら遺物から古墳時代後期後半の住居址と考えられる。　（佐合英治）

85号住居址（第51図）

遺構　KURBS48を中心に検出された。80号・88号・97号住居址と重複し、近世の墓による破壊や耕作による攪乱を受けているため、プランの把握は容易でなかった。最終的にはすべての住居址を床面まで掘り下げ、その残存状態により新旧を判断した。本住居址は80号・88号・97号住居址を切っている。5.6×5.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN39°Wを示す。覆土中には、30～10cmの石が多く入っていた。壁は80号住居址との重複部分以外はほぼ全面確かめられ、壁高は15～10cmを測る。周溝は北西壁と南西壁の一部に認められた。幅20cm前後・深さ17～10cmを測る。北隅は幅50～40cm・深さ10cm前後の落ち込みであり、やや幅が広いが周溝としてとらえられるものと思われる。床面は黄色土によるはり床となり、その直上には細かな炭化物の散布がみられた。床面は2～3回はり変えた様子がみられた。他に、北東壁ぎわのはり床下に敷物らしき炭化物がみられた。北東・北西壁の中央部に、それぞれ焼土が集中する箇所があり、カマドと想定した。いずれも以降の攪乱が著しく構造等不明で断定は困難であるが、北西壁のものからは粘土も若干認められ、カマドとして問題ないと思われる。また、はり床の状態等からカマドの移動も推測可能で、北東壁の焼土も否定はできない。炭化物等のあり方から火事の住居址と思われる。

遺物　出土量は少ないが、土師器・須恵器・石製模造品がある。土師器甕・坏・鉢、須恵器甕・蓋坏・盤、臼玉・勾玉がある。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

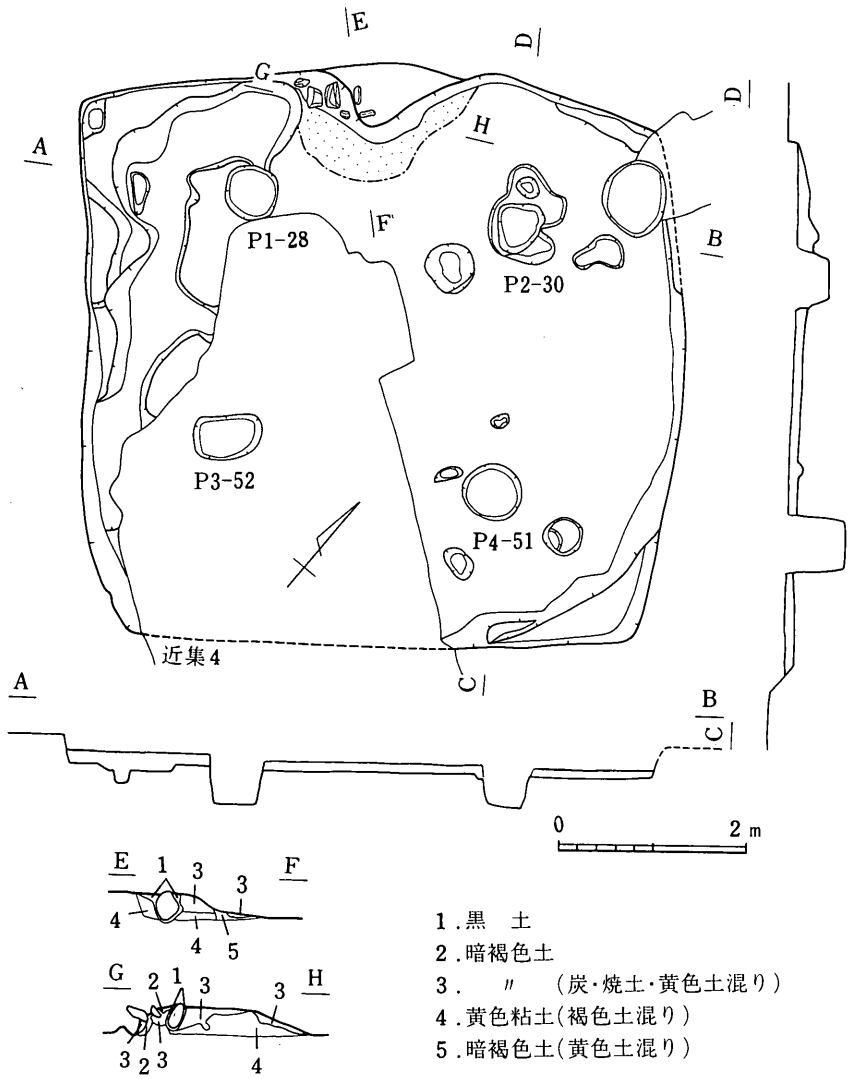
89号住居址（第53図）

遺構　KURBT51を中心に検出された。90号住居址を切り、近世集石4に切られる。6×6.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN42.5°Wを示す。壁は近世集石4に切られる南西壁半分ほどを除いてはほぼ全面確かめられ、壁高は20～10cmを測る。床面はほぼ全面黄色砂土まで掘り下げ、その上に25～10cm程土を埋め戻し、黄色土をはっている。凹凸はあるが堅く良好なものである。

東隅には床から14cmの部分にテラス状の遺構がみられた。主柱穴はＰ１～Ｐ４で円形の掘り方である。カマドは北西壁ほぼ中央に設けられた石芯粘土カマドである。残存状態は悪く、左袖石が２個残るが、右袖石は抜かれて残っていなかった。

遺物　カマド付近の床面上からの出土が多い。土師器壺・甕・坏・甑・内面黒色の坏・高坏、須恵器瑞がある。出土状態から一括性は高いと思われる。

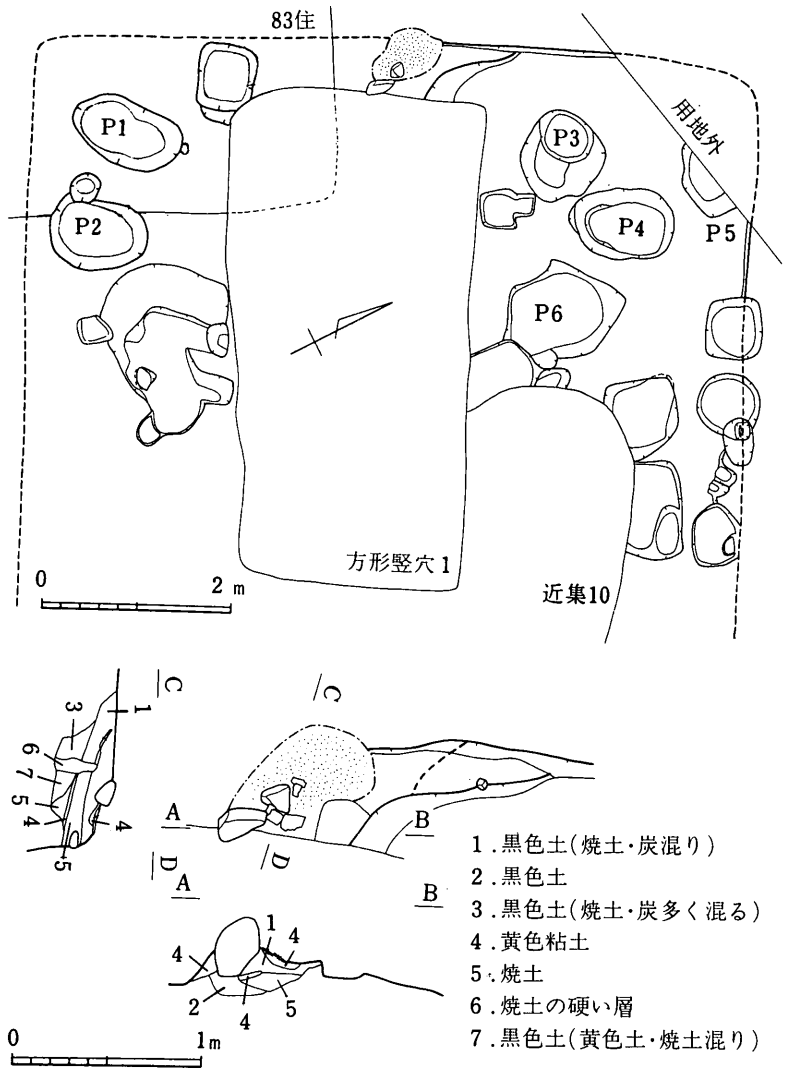
遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）



第53図　TAN・KUR　89号住居址

91号住居址（第54図）

遺構　KURCB46にカマドを検出した。地表から地山までが浅く東・南側はほとんど削平され、北隅は用地外で、西隅は83号住居址に、中央部分は方形竪穴・近世集石に切られる。南北はカマドの位置から想定し7.5mを測るが、東西は不明である。主軸方向N62.5°Wを示す竪穴住居址で、確認した壁高は19～15cmを測る。床面は北隅から集石までの範囲に軟かいはり床を確認し、カマド北側では重複していた。主柱穴はＰ２・Ｐ４で、深さ52・26cmを測る。また、Ｐ１・Ｐ３は深さ75・48cmで対となり、主柱穴となる可能性がある。Ｐ５・Ｐ６は出土遺物から本址に伴う



第54図　TAN・KUR　91号住居址

穴で、深さ11・26cmを測る。はり床が重複し、複数の主柱穴の存在が考えられ、建て替えまたは増築の可能性がある。

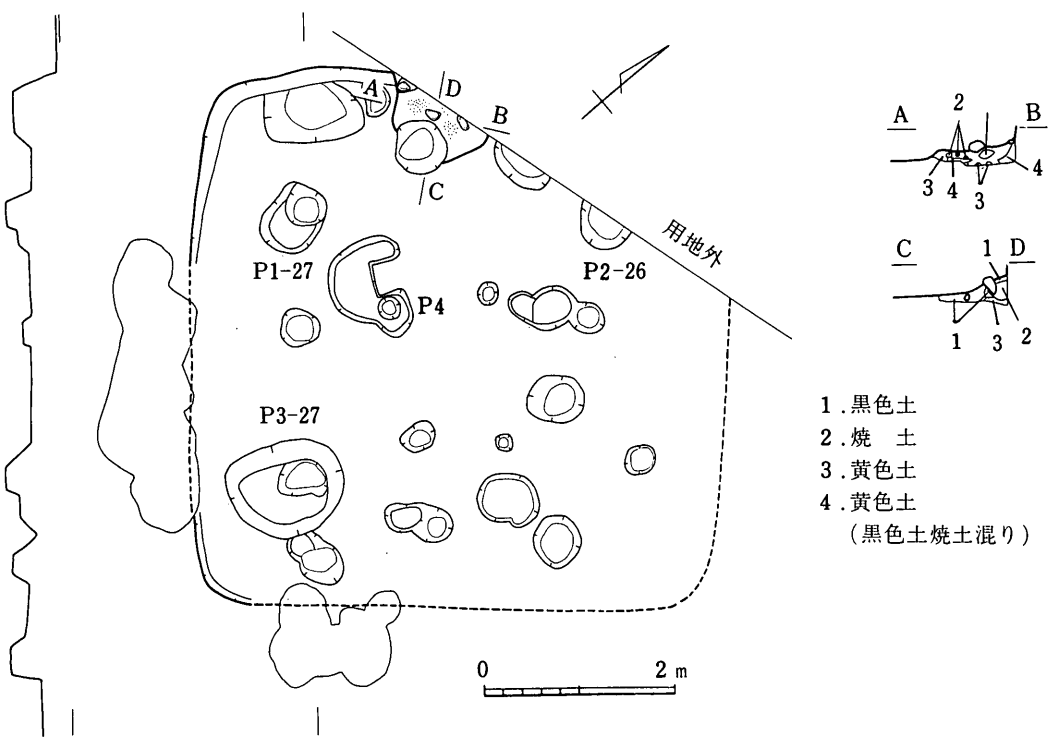
遺物　土師器甕・小形甕・高坏・坏、臼玉、土玉などがあり、ほとんど床面上と穴からの出土である。これら遺物から古墳時代後期後半と考えられる。　（佐合英治）

93号住居址（第55図）

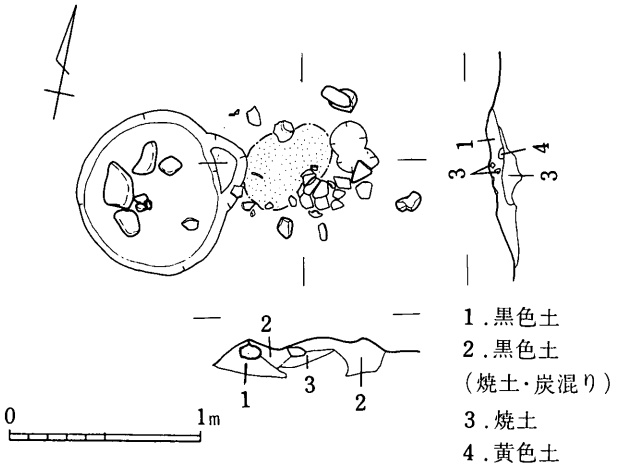
遺構　KURCG46を中心に検出した。傾斜地に構築され、東側は削平されている。北隅は用地外にかかり、南壁は穴に連続して切られるため、確認部は少ない。東西5.4m、南北は想定で5.7mを測り、壁面はほぼ垂直を成す。床面は西から東へ10cm傾斜し、凹凸があり、西隅は堅いが東側は軟かい。主柱穴は3本確認した。P2は完掘できず、形態は不明であるが、P1・P3は二段構造になる。他の穴は深さ20～5cmと浅く、本址に伴うかは不明である。カマドは西壁に位置し、用地外にかかっており、全体を調査できなかったが、自然石を使った石芯粘土カマドである。

遺物　土師器甕・高坏・鉢・坏、須恵器高台付坏・坏、臼玉などがある。

プラン検出状態から本址に伴う遺物は少ないが、甕の一部はカマド内から、臼玉は床面密着の焼土中から出土しており、古墳時代後期後半と考えられる。　（佐合英治）



第55図　TAN・KUR　93号住居址



第56図　TAN・KUR　94号住居址

94号住居址（第56図）

遺構　KURCI48に焼土を検出した。焼土は黄色砂礫土（地山）の上面にあり、これ以外の遺構は確認できなかった。焼土はカマドの火床と思われ、範囲は40×30cmで、厚さは10～4cmである。西側がたき口部と推測される。

遺物　焼土周囲に、土師器甕片がわずか出土している。

遺物から古墳時代後期の住居址と思われる。　（佐々木嘉和）

98号住居址（第45図）

遺構　KURBA47を中心に検出された。切り合い関係が著しく、24号・25号・58号住居址、穴に切られ、一部が用地外にかかり確認部分は少ない。方形の竪穴住居址で、規模は5.6×5.6m、主軸方向はN32°Wを示す。覆土は58号住居址とほとんど同様であったが、2層に分かれ、58号住居址と明瞭に区別された。壁高は切り合いのため、すべて他住居址の床面からであり、わずかの高さを把握したのみである。床面は軟かく、黄色砂土（地山）面である。複数の穴にも切られており本住居址の柱穴は確認できなかった。カマドは北壁中央に位置し、24号住居址に壊されており、焼土を確認しただけである。

遺物　平面的にほぼ重複し、本住居址を切っている24号住居址（平安時代）の遺物中に、古墳時代後期の土師器があり、古墳時代後期の58号住居址と重複しない位置から出土したものを、本住居址の遺物とした。出土量は少なく、土師器甕・甑・坏である。

遺物から古墳時代後期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

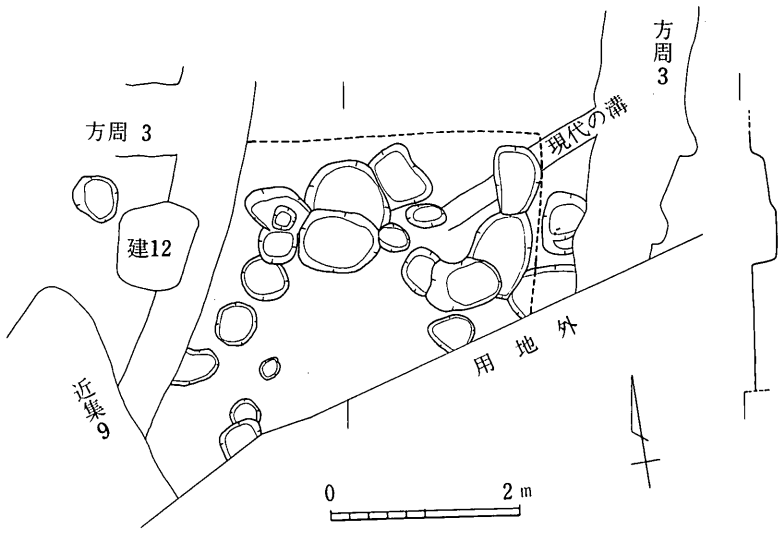
99号住居址（第57図）

遺構　KURCB53を中心に検出された。段丘崖に近く地表から30cm前後で、地山の黄色砂礫土になり、耕作による攪乱の著しい場所である。調査範囲は4×2mで床面の一部と穴を確認したが、床面直上まで耕土である。床面は凹凸があるが堅く良好であった。穴は床に多数検出したが、主柱穴と判断できるものはない。

遺物　土師器甕片などわずかである。

遺物から古墳時代後期の住居址であろう。

（佐々木嘉和）



第57図　TAN・KUR　99号住居址

102号住居址（第27図）

遺構　KURCM51付近に位置すると考えられる住居址である。段丘崖に近く地表から地山の黄色砂礫土まで20cm前後である。地山面に焼土１×0.5mを検出し、焼土の周辺に床面状の堅い面があった。他の施設は一切確認できなかった。

遺物　床面から土師器甕片が出ている。

遺物から古墳時代後期の住居址と思われる。　（佐々木嘉和）

103号住居址（第27図）

遺構　KURCN53の用地外境からわずか内側に焼土を検出し、103号住居址にする。段丘崖に近く、地表から地山の黄色砂礫土までわずかで、耕作による攪乱が著しい。地山面に黒土の落ち込みがわずかに認められ、約4.5×1.5mを覆土範囲と把握した。焼土は地山面にあり、床面等は確認できなかった。

遺物　土師器甕片がわずかに焼土部分から出土した。

遺物から古墳時代後期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

104号住居址（第84図）

遺構　KURCG52を中心に検出した。100号住居址に切られ、用地外にかかっている。調査範囲

は5×3m。隅丸方形の竪穴住居址と思われるが、規模・主軸方向は不明である。壁は100号住居址と重複する西壁のみ確認でき、残存壁高は12～2cmを測る。床面の状態は軟かい。地表から床面まで20cmと浅いため、耕作の攪乱が多く、柱穴等は不明である。

遺物　床面から、土師器小形甕・坏・高坏などの破片が少量出土した。

遺物から古墳時代後期の住居址と思われる。　（佐々木嘉和）

④ 奈良時代

本時代の遺構分布は、台地上ほぼ全域にあり、前時代と同様相を示すが、遺構数そのものは減少する。

検出遺構のうち掘立柱建物址が分布範囲の西端と東端にあり、いずれも台地縁部まで20m前後の位置にある。

竪穴住居址のほとんどが、台地中央部付近にあり、本時代住居址間での切り合いもあり小期毎の住居数は、あまり多くなかったと推測される。　（小林正春）

25号住居址（第58図）

遺構　ＫＵＲＢＤ47の褐色土中にカマドを検出し、住居址の存在は早くから把握できたが、壁の確認はできなかった。26号住居址を切り、24号住居址に切られる。カマド右側に平盤の台石があり、遺物分布範囲と合わせ、この付近までを住居址範囲と把えた。カマド前面の一部には、はり床状の部分が認められ、わずかではあるが、焼土も散在した。カマドは石芯粘土カマドで、残存状態は比較的良好であった。両袖が残り、いずれも3個の石を芯とし、小礫により補強したものである。たき口部を中心に焼土も多い。

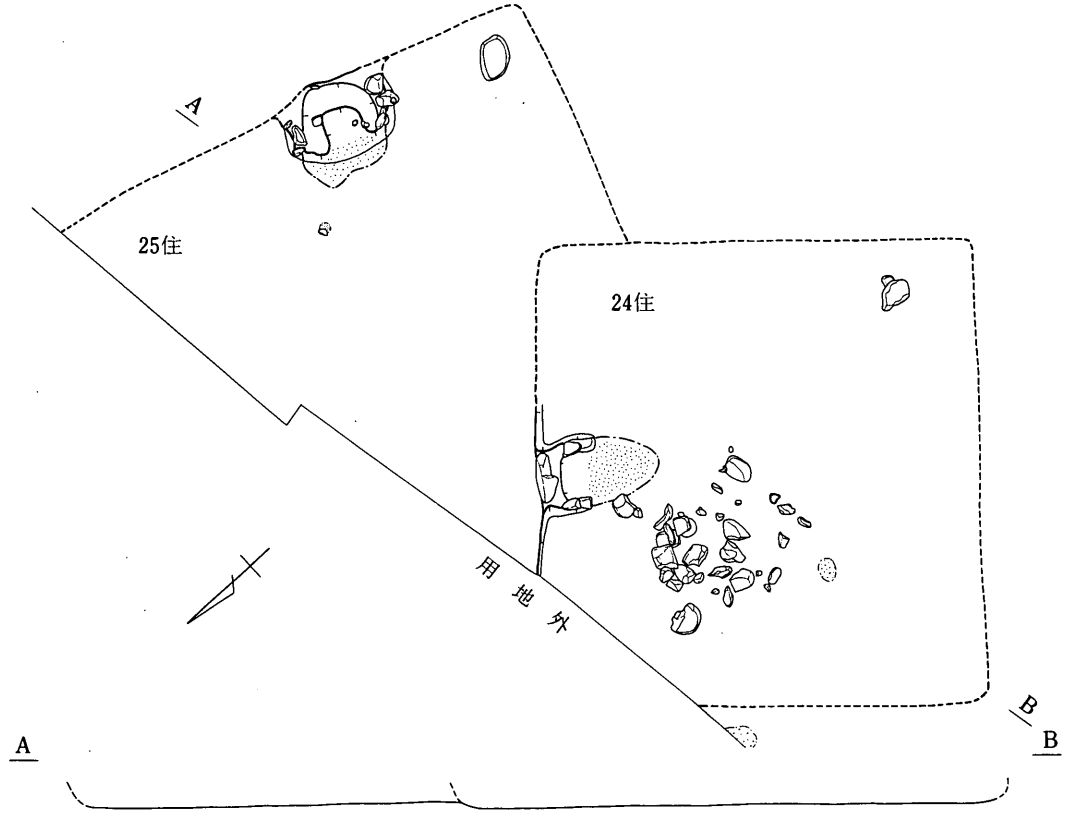
遺物　土師器甕、須恵器坏・盤・蓋、不明鉄製品などがあり、奈良時代に位置づけられる。

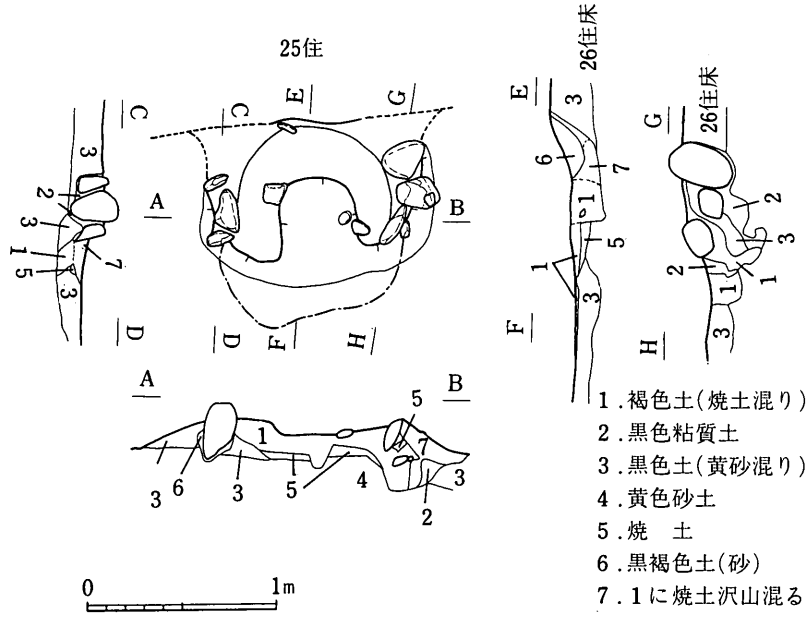
（小林正春）

34号住居址（第38図）

遺構　ＫＵＲＡＦ50を中心に検出した。性格不明の穴が重複して検出され、本住居址も大小の穴に切られている。35号住居址を切り、道路址1に切られる。不整方形の竪穴住居址で、推定規模は4.8×4.7mを測る。壁は南西隅の一部を確認したのみである。床面は軟かく明確に把握できず黄色砂土（地山）まで掘り下げた。地山表面も複数の穴があるためかなりの凹凸がある。

遺物　覆土上部から地山面まで比較的多量の遺物が出土している。穴の覆土とほとんど差がな



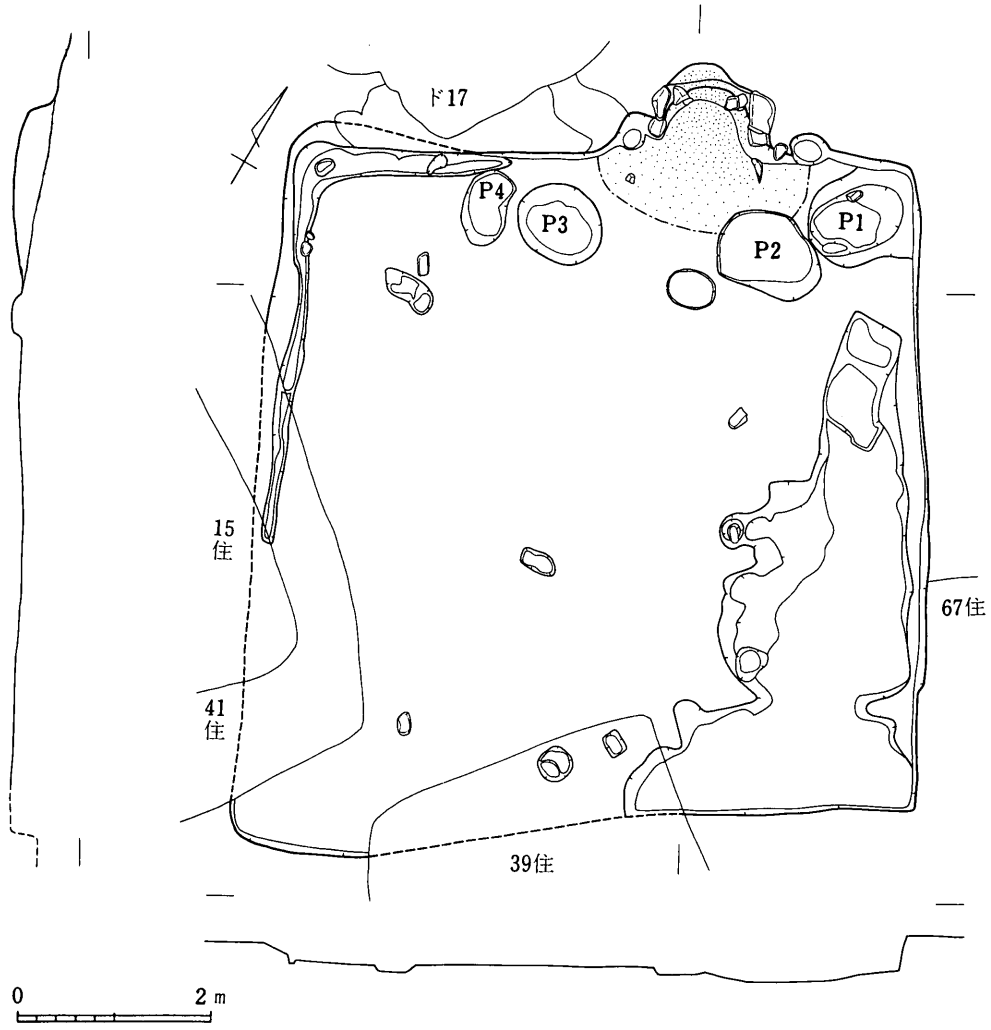


第58図　TAN・KUR　24号・25号住居址

く、遺物も一緒に取り上げざるを得ず、土師器甕・坏・須恵器甕・坏・蓋などがあるが、穴に所属する遺物も含まれる可能性もある。奈良時代のものが比較的多く、本住居址の時期も一応奈良時代と推測される。（佐々木嘉和）

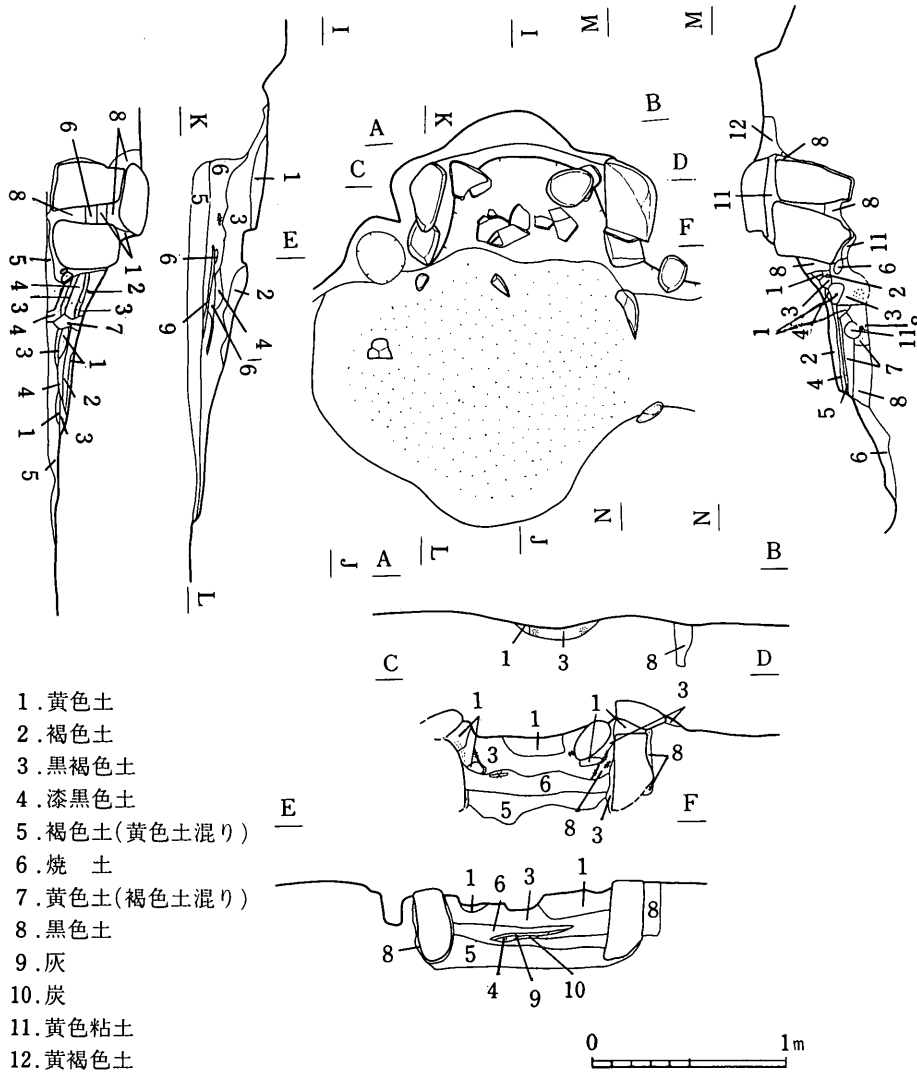
44号住居址（第59・60図）

遺構　ＫＵＲＡＬ50を中心に検出された。67号住居址を切り、39号・41号・15号住居址、土坑17に切られる。15号・41号住居址は床面がほぼ同レベルであり、部分的に壁の不明箇所はあるが、他の住居址よりは掘り込みがは深く、ほぼ全体を調査することができた。南隅がやや突出し若干の歪みはあるが、7.6×7.2mのほぼ方形で大形の竪穴住居址である。主軸方向はN30°Wを示す。壁高は北半が44～34cm、南半が存在部分で27～19cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は幅



第59図　TAN・KUR　44号住居址

20～15cm・深さ19～6cmで西隅のみに検出した。東壁ぎわには10～5cmの黄色粘土を上面にはり床した深さ20cmを測る大きな凹みがあり、周溝の有無は判断できなかった。床面は、このはり床部分も含め平坦できわめて堅い。住居址の規模から、主柱穴は住居址内部にあると考え検出に努めたが、確認できなかった。床面上の穴のうち小形のものは本住居址を切る後世のものである。P1～P3の覆土中には焼土と灰が多量に混入し、遺物も多数出土している。カマドに関連する施設と考えられるが、P3の上面ははり床と思われる粘質黄色土を認め、同時使用でなく、それぞれに時間差があったと考えられる。カマドは北西壁のやや北寄りに造られ、主体は完全に壁外に出ている特殊な形態で、袖の内径が80cm、袖先端から奥壁まで70cmを測り、厳選した自然石と割り石を組み合わせた石芯粘土カマドである。また、袖石内側に接して土師器甕片を直立させ壁



第60図　TAN・KUR　44号住居址カマド

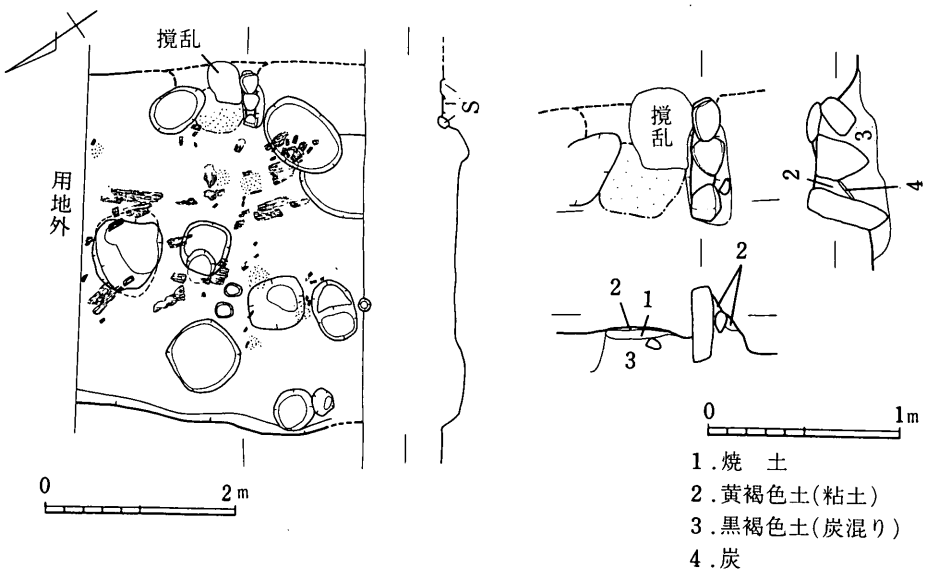
面の一部を成している。煙道は不明であるが、奥壁上部に半円形に近い6cm程の掘り込みがあり、煙道の基部と考えられる。たき口部に焼土が厚く堆積し、カマド手前にも広範囲に焼土が認められ、いずれも焼土と灰が互層となり長期間の使用が考えられる。

遺物　出土遺物は壁ぎわに多く、完形もしくは完形に近いものはカマド周辺と北東壁ぎわに集中する。特記される遺物としては、和同開珎銀銭が南壁寄りの床面より、P1内焼土中より鉄鈴が出土している。土器には、土師器甕・小形壺・坏、須恵器甕・長頸瓶・蓋・坏・高台坏などがある。このうち、カマド内とP3、P3とP1・カマド内とP2との間で接合するものもある。

これら遺物から奈良時代の住居址に位置づけられる。　（佐合英治）

54号住居址（第61図）

遺構　KURAP44の地下歩道用地に検出された。道路下及び用地外のため、住居址のほぼ中央部約8割を調査した。55号住居址を切り、一部新しい穴に切られ、壁高約20cmの北西壁を確認したが、南東壁は55号住居址覆土中のため把握できなかった。カマド位置により一辺4m四方の竪穴住居址と考えられ、主軸方向はN123°Eを示す。中央部の床面上を主体に炭・焼土・骨片があり、火事の住居址である。炭化材のうち原形を示すものはなく、かなりしっかりと焼けたと考えられる。床面ははり床で中心付近が堅く良好であった。床面上にいくつかの穴を検出したが、カマド右の穴が遺物出土状態から本址の貯蔵穴と考えられ、主柱穴は不明である。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、石芯粘土カマドである。左袖は穴によって切られ、たき口部と右袖のみ残る。右袖はしっかりと石を組み残存状態も良い。たき口部を中心にかなりの焼土を認め、相当量の使用が推測される。

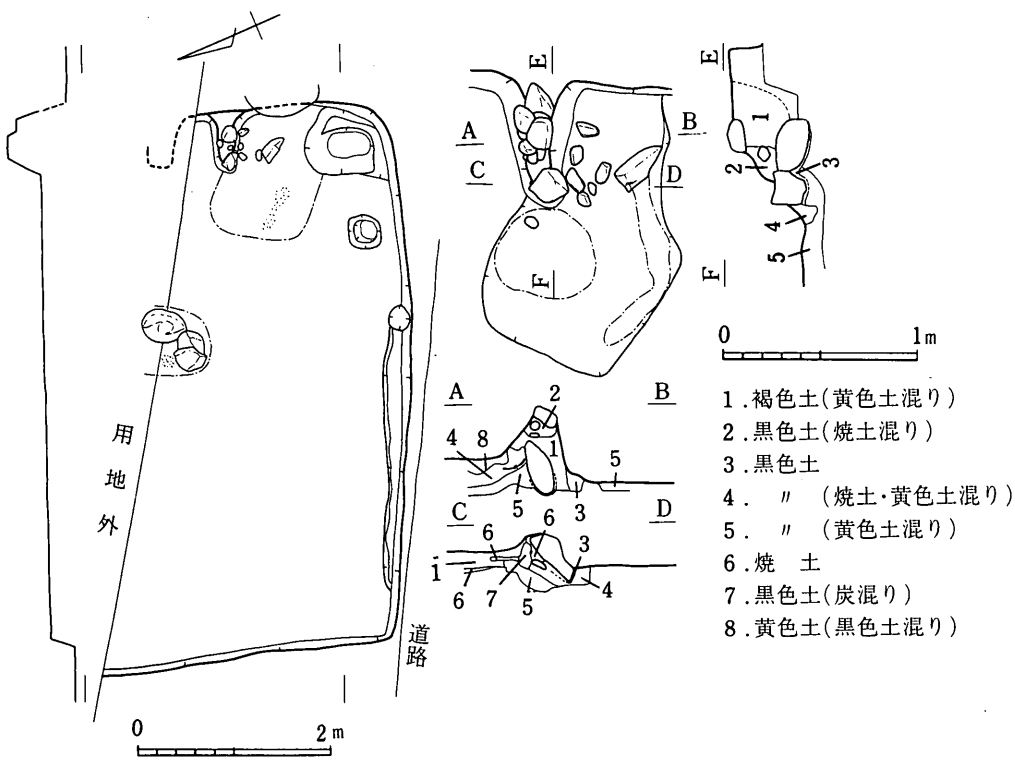


第61図　TAN・KUR　54号住居址

遺物　カマド右の貯蔵穴内より須恵器坏２個が出土した他に土師器甕、須恵器坏等がある。出土遺物から奈良時代に位置づけられる。　（小林正春）

55号住居址（第62図）

遺構　ＫＵＲＡＱ45を中心に検出された。28号住居址を切り、54号住居址・穴に切られる。北半は用地外のため約半分を調査し、東西方向の長さ5.6mを測る方形の竪穴住居址と考えられ、主軸方向はＮ110°Ｅを示す。壁は調査範囲内でほぼ全体を確認し、壁高は30～20cmを測る。床面はたたき状で比較的堅く良好であり、その直上から数cmに炭層も認められた。南壁下に幅10cm前後・深さ10～５cmの溝があり、周溝と考えられる。南東隅に径80cm・深さ40cm程の穴があり、焼土・炭・焼骨・須恵器が出土し貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴と周溝端部の中央に穴があり、主柱穴の可能性もあるが、他の穴が不明のため断定はできない。東壁にカマドがあり、東西壁の長さから中央より南隅に寄っていると考えられる。石芯粘土カマドであるが、右袖のみを調査した。複数の石により比較的しっかりと造られている。なお、カマド右側の床面は、はり床状になり、きわめて良好で焼土面を成す所もあり、その付近に石も散在した。



第62図　TAN・KUR　55号住居址

住居址中央部床面の10～5㎝上に径30～20㎝の石を竪穴状の穴底に置き、覆土中に多量の炭を含む施設があり、本址とは別の遺構で、性格等は不明である。

遺物　土師器甕、須恵器坏・蓋等があり、奈良時代前半に位置づけられる。　（小林正春）

64号住居址（第49図）

遺構　62号･63号住居址などと同様にＫＵＲＡ区の南側地下歩道用地部分に検出した。62号住居址床面検出中に北隅を確認した。62号・66号・70号住居址を切り、溝址19に切られる。重複が著しく、規模･主軸方向は不明の竪穴住居址である。北隅の壁高は62号住居址床面まで36㎝を測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床面はきわめて軟かく、地山の黄色土により把握せざるを得なかった。70号住居址を切る部分ははり床されていたがこの部分も軟かく、面としての把握はできなかった。床面上に深さ32㎝の穴を確認し、柱穴と考えたが住居址の全体が不明であり断定できない。

遺物　土師器甑、須恵器蓋が床面に密着して出土したがほとんどが覆土中からで、溝址19に属する遺物の混入した可能性もある。出土した遺物はみな破片で、土師器甕・坏・高坏、須恵器蓋・高台坏・高台坏の他、灰釉陶器の埦がある。

これら遺物の出土位置も考え合わせると本住居址は奈良時代と考えられる。　（佐合英治）

72号住居址（第97図）

遺構　ＫＵＲＢＬ53で北東壁と床面の一部を検出し住居址とした。北側は30号住居址と重複し、同址の覆土中にもわずかにはり床がみられ、同址を切っていた。しかし、同址の覆土中のプランは確定できず、南側は用地外にかかるため2.3×1.6mの範囲を調査したのみで、プラン・規模・主軸等は把握できなかった。他に、建物址９と重複するがその新旧関係は把握できなかった。壁高は確認部分で12㎝前後を測る。床面ははり床されるが軟かい。

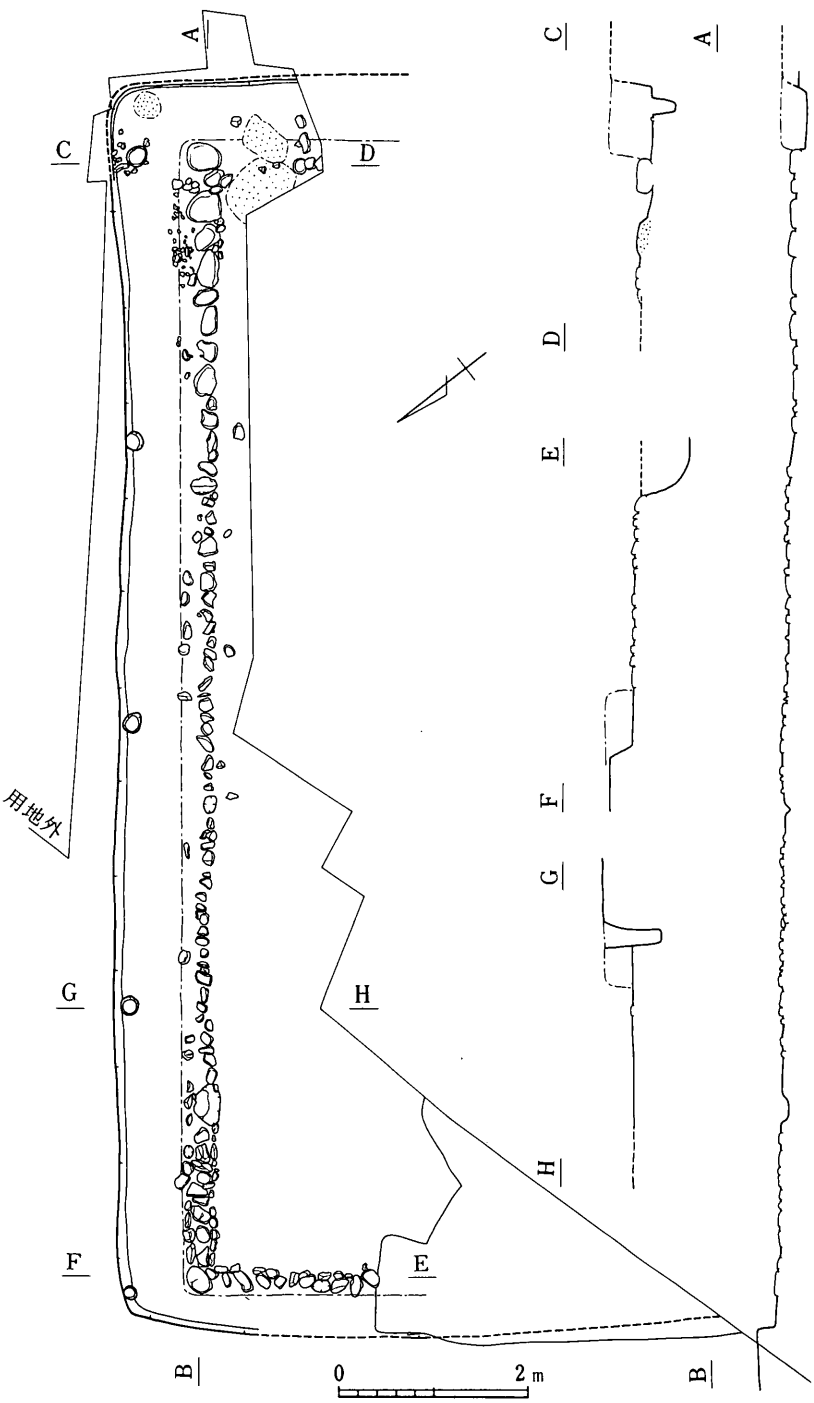
遺物　出土量は少なく、須恵器の蓋・ヘラ切り坏がある。

遺物から奈良時代と考えられるが、量が少なく確定はできない。　（山下誠一）

76号住居址（第63図）

遺構　ＫＵＲＢＧ54から南東方向に大半が用地外にかかって検出された。用地内において竪穴の北隅のみを確認し、特異な形態を示し、全体把握は不可能としても、ある程度の様相把握のため、用地外にも調査範囲を広げ、北東壁の全体を検出した。北西壁は近代の攪乱を受け、調査範囲内において１m程が残存したのみである。北東壁の長さは13mを測り、方向はＮ110°Ｗを示す、きわめて大きな竪穴である。壁高は検出面自体に凹凸があるため40～25㎝と場所によりかなりの

差がある。北西壁下から32cm、北東及び南東壁から56cm内側の床面上に石列を検出し、北東部の石列の長さは12mを測る。北隅部に偏平な石を置き、北西壁側の1.6m位の間は小礫を3列に並べ、石列反対側にあたる東隅部の約3.5mは径30cm前後の大きな石を置き、他の部分も竪穴中心寄りの面を直線にそろえ、いずれも平坦な面を上にしており、石列上部の高さはほぼ一定である。石列の内側はたたき状の堅い床面で、石列と壁の間も比較的堅い面を成す。石列と壁間は黄色土と黒色土が互層になる部分も認められ、床の状態と考え合わせ、地山の黄色砂土まで一般の竪穴住居址同様に掘り下げた後に、壁の高さまで埋められたものと判断される。北東壁ぎわには径15cm前後で壁上部からの深さ70～60cmを測る穴を3m間隔で5本検出したが、竪穴規模等から主柱穴とは考えにくいものである。



第63図　TAN・KUR　76号住居址

石列につき若干の考

察を試みると、それだけで機能したというよりは、土台材的なものをこの上に置き、更にその上に柱を建てるための基礎的な性格が考えられる。また、壁ぎわの柱穴列も屋根の支え、もしくは壁面構成の一要素とすれば、主な柱の位置を本石列上に求めても無理はないといえる。

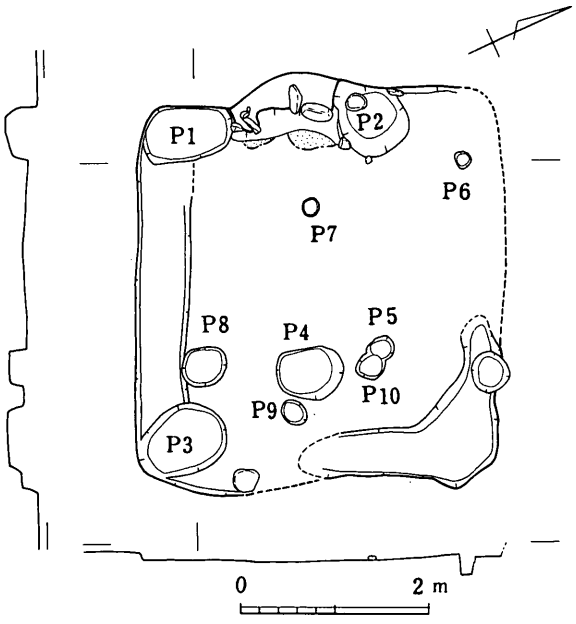
竪穴の一辺を確認したのみで、全体の様相は不明であるが、規模・石列・柱穴列等いずれも規格性が高く、かつ特異な構造も予測され、一般の竪穴住居址とは区別して考えるべきと思われる。なお、東隅部に焼土が認められるが、古墳時代住居址と重複する部分であり、本址内で火の使用を示すか否かの断定はできない。

遺物　用地内の石列内側床面上より土師器甕、須恵器坏・蓋が出土しており、奈良時代の遺構である。

（小林正春）

87号住居址　（第64・65図）

遺構　ＫＵＲＢＹ50を中心に検出された。方形周溝墓３を切り、複数の穴と重複する。地表から検出面が浅く、北壁は削平され検出できなかった。確認部の壁高は20～数cmである。4.4×3.9mの歪みのある方形の竪穴住居址である。床面は、中央部が良好なはり床で周辺部は不明瞭で、南西壁及び東壁下に幅50cm・深さ数cmの浅い溝状を呈する所もある。カマド修築の状況と合わせ、住居址の増築が考えられ、この壁下の凹地部分が増築範囲を示す可能性が強い。床面上にいくつかの穴を検出し、Ｐ１～Ｐ５が本址に伴い、Ｐ６～Ｐ10はいずれも漆黒色土が入り本址より新しい。Ｐ１は底部に焼土を認め、Ｐ２～Ｐ５は黒色土にわずかなローム粒を含み、住居址覆土と共通する。これらから主柱穴の特定はできず、本来掘立柱の主柱穴はなかったと考えられる。カマドは、北西壁ほぼ中央部にあり、石芯粘土カマドである。全体にかなり壊されているが、袖の一部が残る。また、天井石の断片もしくは袖石の動いたものが、上面に認められた。全体の状況からカマドの修築が考えられ、古いカマドの左袖と新しいカマドの右袖が接する位置まで、つまりカマド全体分が西方に移動している。



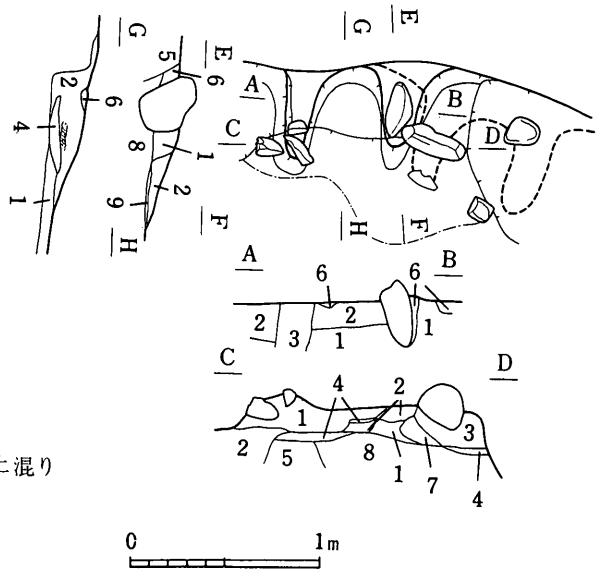
第64図　TAN・KUR　87号住居址

遺物　出土量はあまり多くない。

土師器甕、須恵器坏・盤・蓋、鉄器片がある。

遺物から奈良時代に位置づけられる。

（小林正春）



1.黒色土(わずかに焼土混り)
2. 〃 (焼土・炭混り)
3. 〃 (〃・黄色砂土少し混る)
4.焼 土
5.黄色土(基盤)
6. 〃 (粘土わずかに黒色土混り)
7.黒色土(黄色土 こまかな砂状炭・焼土混り
8.方周3覆土(黒色土)
9.炭・焼土

第65図 TAN・KUR 87号住居址カマド

⑤ 平安時代

台地上全域に分布する。しかし、該期前半期の遺構は少なく、ほとんどが後半期のものである。

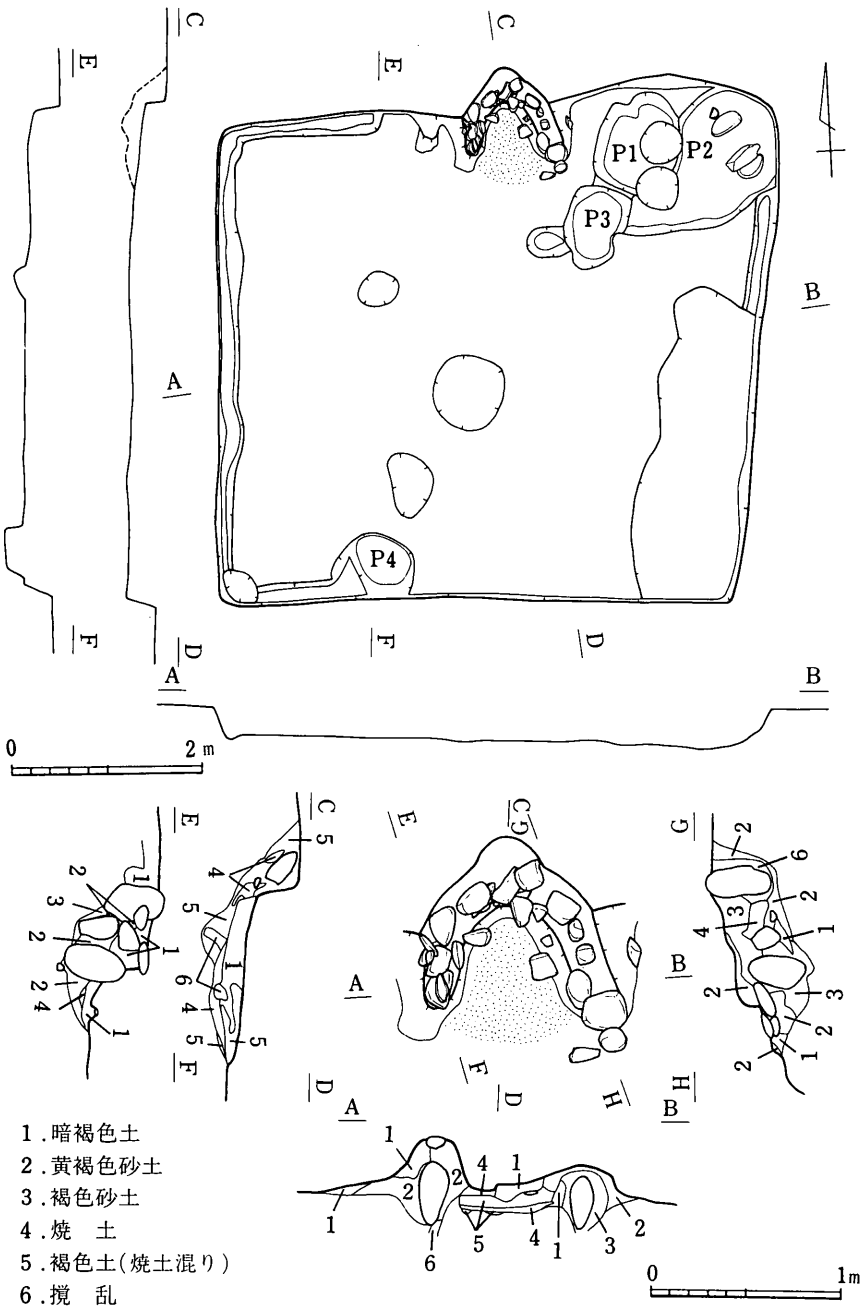
主体は竪穴住居址で、いずれも小規模なものである。また、時期不明の掘立柱建物址のうちには本時代に属すると考えられるものもある。

（小林正春）

2号住居址（第66図）

遺構 ＴＡＮＢＶ48を中心に検出された。北西隅が9号住居址を切る。溝址3・5・17とも重複し、いずれの溝址も本住居址を切っているものと考えられるが、ほぼ全体を調査できた。北西隅がやや張り出す隅丸方形の竪穴住居址で、5.5×６ｍを測り、主軸方向はN5.5°Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり北壁が40cm南壁が30cmを測る。周溝は住居址の西側半分と東の一部分のいずれも壁直下に確認され、幅30～17cm・深さ約５cmを測る。床面はほぼ平坦で全体に堅いが、南東隅から東壁に沿って幅1.2m程・深さ10cmの凹みがあり、この部分は上面をはり床しているため他の所より若干軟かい。主柱穴は確認できなかったが、床面上に検出した穴のうちＰ１～Ｐ４は位置・覆土・出土遺物から本住居址に伴うものと考えられる。それぞれ床面から深さ19・14・31・18cmを測り、Ｐ２には径30cm前後の石が底部に３個密着していた。Ｐ１の覆土中には焼土・灰が

混入していた。南壁中央部から80cm程中心寄りに径40cm程の床面が焼けた部分があり、検出状態等から住居址内における火使用のなんらかの施設と考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に位置し、奥壁は住居址壁より外側へ張り出している。石芯粘土カマドで、上面には奥壁部も含めて石を並べ補強している。カマド中央のたき口部に焼土が5cm程堆積しており、かなりの使用が考え



第66図　TAN・KUR　2号住居址

られる。煙道は確認できなかったが奥壁の外側に焼土が半円形に認められた。

遺物　Ｐ１の底部から富寿神宝・灰釉浄瓶注口部・焼骨片などが出土した。Ｐ２礫下から土師器の高台皿が、Ｐ４と周辺から土師器甕、須恵器高坏・坏が出土した。全体としても覆土上層から下層まで比較的多く出土し、土師器に比べ須恵器が多く、壺・甕・坏・蓋・高台坏等があり、灰釉陶器の皿もある。他に、プラン検出面付近から濃淡二色の釉を用いて花弁を表現した特殊な緑釉陶器埦が出土しているが、出土位置が高く本住居址に直接結び付かない可能性もある。

これら遺物等から平安時代前半と考えられる住居址である。　（佐合英治）

３号住居址（第９図）

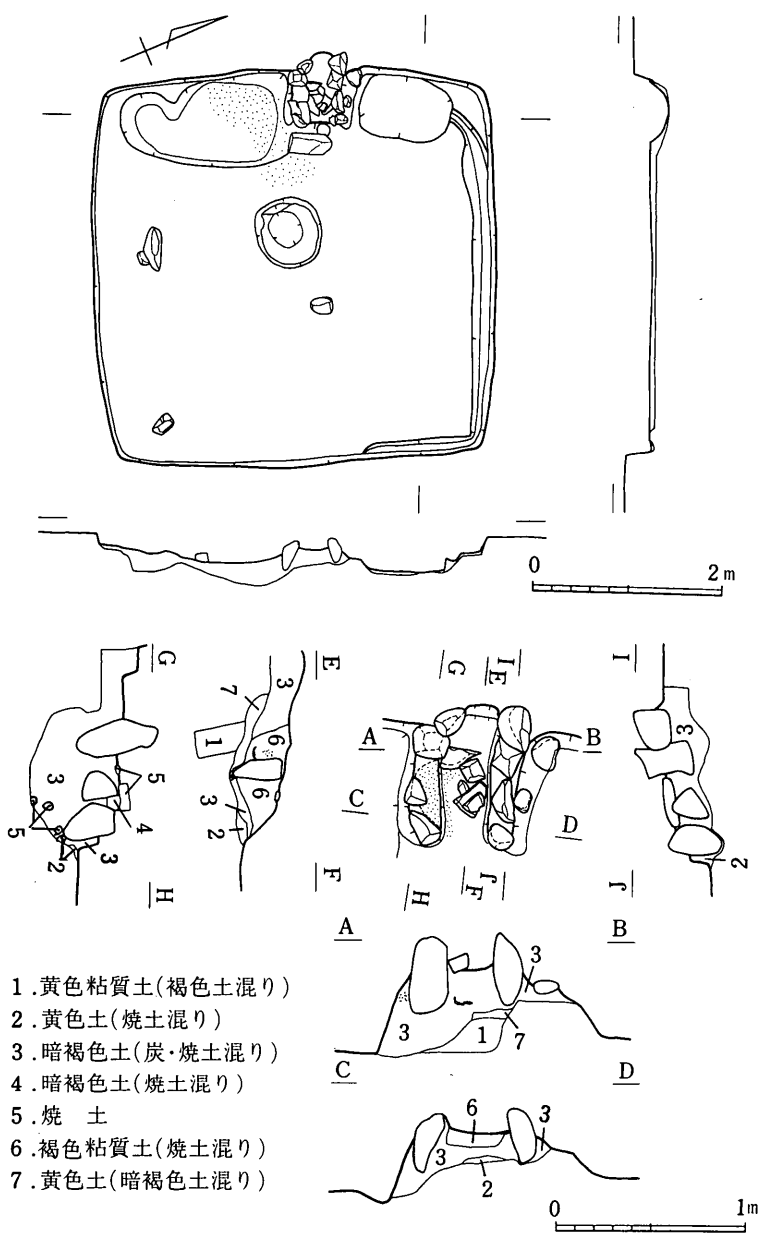
遺構　ＴＡＮＢＲ47を中心に検出された。１号住居址を切り、全体が同址の範囲内にある。３×3.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ10°Ｅを示す。壁は全面確かめられ、壁高は13～３cmを測るが、１号住居址床面からの数値であり、当初はかなり深かったと考えられる。黄色砂土まで掘り、その上に黒色土に黄色砂土が混じる土を埋めもどし、床面としている。全体に軟かく、凹凸がある。主柱穴・その他の穴は不明である。カマドは北壁中央やや東寄りに焼土が認められたが後世の攪乱を受け、原形の把握はできなかった。

遺物　出土量は多く、床面およびその直上を主体に、土師器甕・坏、須恵器甕・長頸壺・坏がある。内面黒色の坏には太田と字体不明の墨書がみられる。

遺物から平安時代中頃に位置づけられる。　（山下誠一）

10号住居址（第67図）

遺構　ＴＡＮＢＪ50を中心に検出した。20号住居址・建物址７を切っており、完掘した。方形の竪穴住居址で、規模は４×4.2m、主軸方向はＮ63.5°Ｗを示す。検出時に、石・遺物の集中して出土する所があり、そこが当住居址の範囲内で、覆土上層に石が入っていた。石・遺物の入る覆土の厚さは約40cmを測る。壁高は検出面から20cmありほぼ垂直である。周溝は北東壁下に検出した。幅20～10cmで、深さは数cm以下と浅い。床面はほぼ全体を厚さ13～９cmではり床し、堅く良好であった。主柱穴ははり床を除去し精査したが検出できなかった。カマド左右にそれぞれ深さ26cm・14cmの穴があり、貯蔵穴的性格が考えられる。他に、住居址中央部に深さ10cmの穴があるが性格等不明である。カマドは、西壁中央のやや北寄りにある。左袖下部に焼土の混じる層があり、最初壁中央にあったカマドの造り直しが考えられる。石芯粘土カマドで、石の他に土師器片・須恵器片も壁材として利用している。長さ約40cmの石がカマド前床面上にあり袖先端に天井石をのせていたと思われる。長さ26cmの石を直立して支脚とし、支脚の上部周辺に20cm前後の焼けた砂岩が数個あり、カマドに器をかける釜穴部分の素材として用いられていたと推測される。



第67図　TAN・KUR　10号住居址

遺物　覆土上層からはり床中まで、多量に出土している。覆土上層の石と混じて出土した遺物は、住居址廃棄後に投棄されたものであろう。カマド左側の穴から、土師器耳皿片が出土した。本住居址覆土中と周辺から、置カマド(へっつい)の破片が出土し、覆土中のものは上部破片であった。一応全体の破片があり、復元実測が可能であった。他に、土師器甕・坏、須恵器甕・坏・灰釉陶器埦・皿など出ている。

遺物から平安時代後半であろう。

(佐々木嘉和)

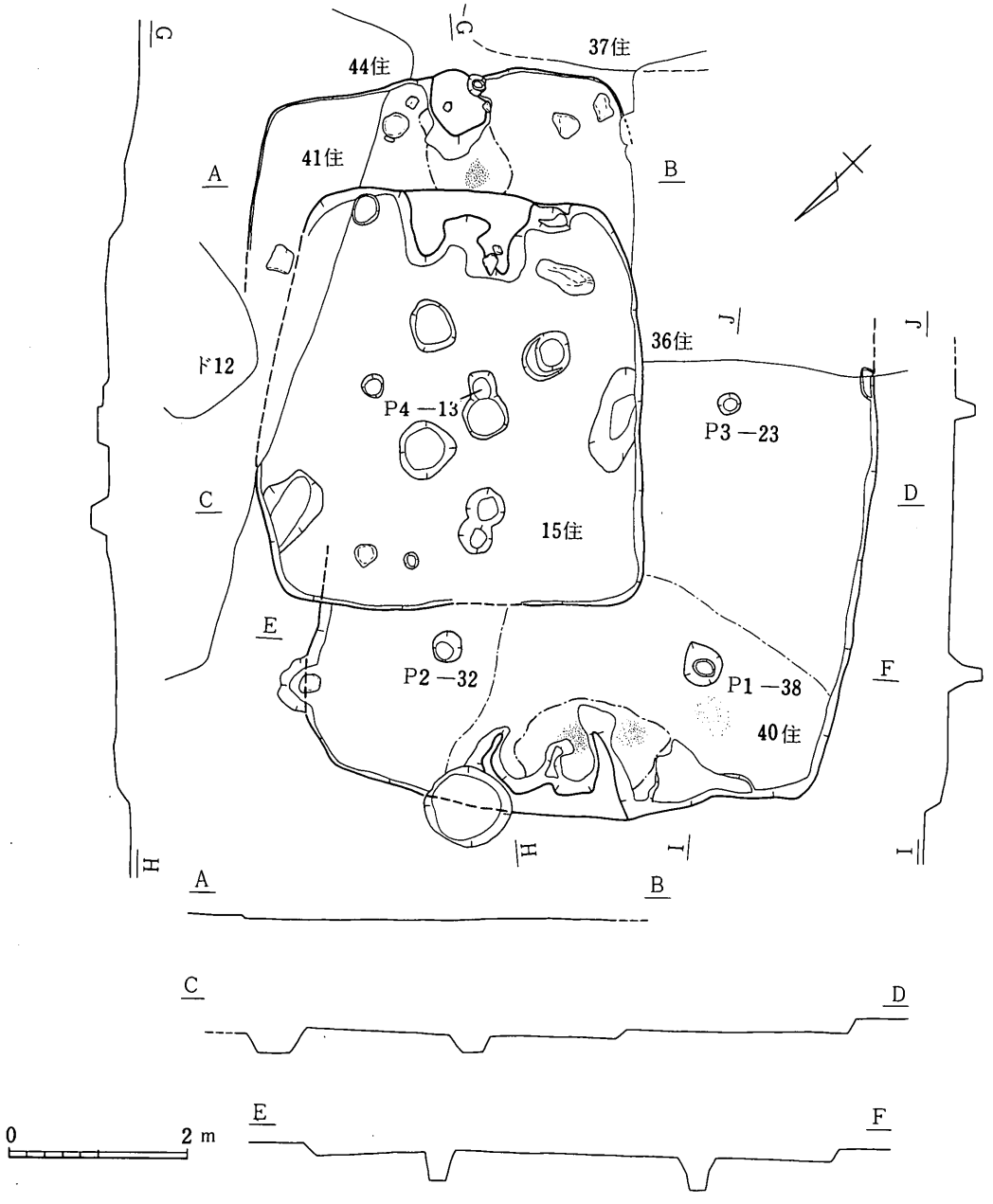
11号住居址（第103図）

遺物　9号住居址の東側ＴＡＮＢＶ・ＢＷ45の北側用地境に住居址の南壁2.5mのみを確認した。壁高は19cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。この壁の方向はＮ52°Ｅを示した。床面は壁より

30cmの幅で確認したのみであるが、軟かなものである。

遺物　壁ぎわのためか床面密着遺物はなく、検出面より5cm程の覆土中からほとんどのものが出土している。図化できる遺物は土師器内面黒色の坏、灰釉陶器埦などがある。

出土遺物から平安時代後半の住居址と考えられる。　（佐々木嘉和）



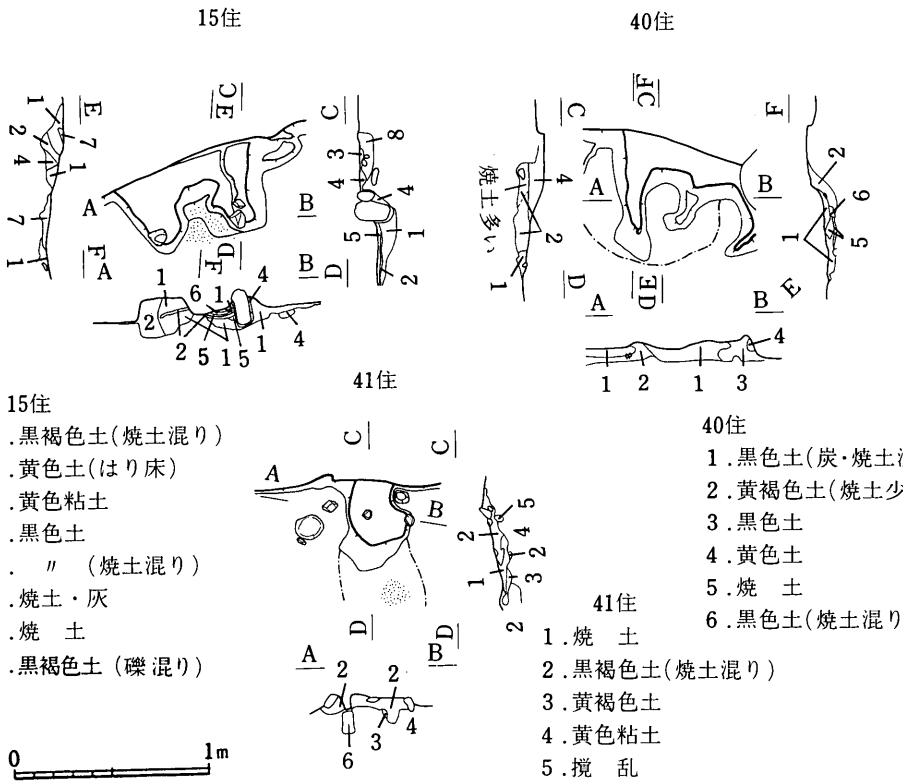
第68図　TAN・KUR　15号・40号・41号住居址

15号住居址（第68・69図）

遺構　ＫＵＲＡＪ51付近の石が入る黒色土の落ち込みが認められ、住居址とした。36号・40号・41号・44号住居址と重複関係にあるため検出は困難をきわめた。最終的にはすべての住居址を掘り下げ、床面の残存状態や壁などにより新旧関係を把握した。本址はすべての住居址を切っていて最も新しい。4.4×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ138.5°Ｅを示す。覆土には30cm前後の石が多く入っていた。壁は北側を除いてほぼ全面確かめられ、壁高は10cm前後を測るが、当初の検出面から考えれば最低30cmは考えられる。床面は全面黄色土まで掘られ堅く良好なものである。主柱穴その他の穴は検出できなかった。カマドは南東壁ほぼ中央に設けられる。右袖の壁際はこの部分にみられる礫混りの地山を掘り残し、先端には大・小２個の袖石を使って地山を掘り込んでいる。左袖は地山を残さず、袖石１個と粘土を使用して構築している。カマド南側には天井石に使用したと推測される石が落ち込んでいた。

遺物　遺物は多い。その出土状態は覆土中に石とともに入っていた。住居址廃棄後に投棄された遺物と思われ、時期差がみられる。土師器甕・内面黒色の高台坏・糸切り坏、灰釉陶器長頸壺・埦・緑釉陶器の埦、鎌・鉄鏃がある。

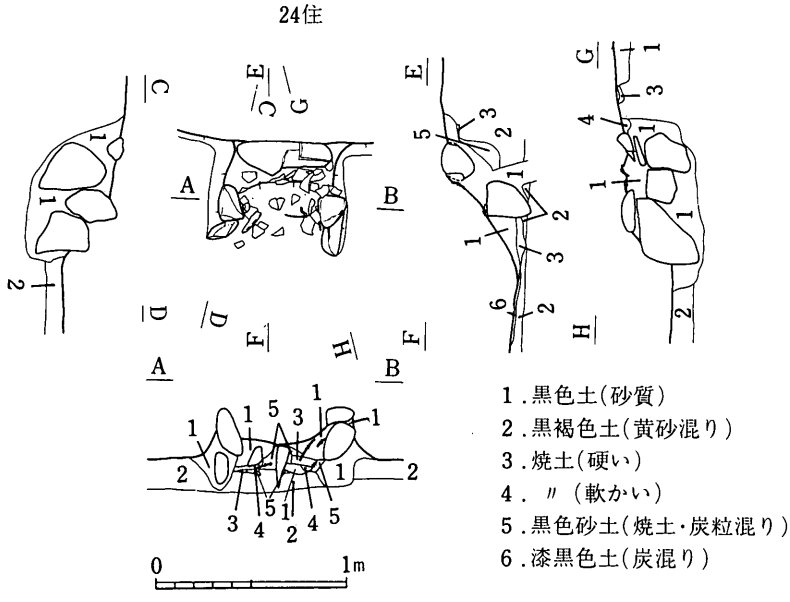
最も新しい遺物から平安時代後半に比定できる。　（山下誠一）



第69図　TAN・KUR　15号・40号・41号住居址カマド

24号住居址　（第58・70図）

遺構　ＫＵＲＢＢ46にカマドを検出し住居址の存在を確認した。25号・58号・98号住居址を切り、重複する住居址の中では一番新しい。住居址全体が他住居址の覆土中にあり、全体形把握に努めたが、結局カマド付近のみを確実に把えたにとどまった。カマド底部と同位置よりやや浮いた高さに石が散在しており、その下部にはり床状の箇所や焼土などを認め、石及び遺物の分布範囲を考慮して住居址範囲を考えた。南隅は床面と同レベルに台石を確認し、これを含んで住居址範囲とした。柱穴等については、床面全体が安定したものではなく把握できなかった。カマドは比較的良く残っており、石芯粘土カマドである。両袖石・天井石・支脚があり、また、カマド内部に熱により破損したとみられる角礫が散乱し、たき口部付近にもう１つの天井石があったとも考えられる。両袖の石はしっかり組まれ、部分的に小礫で補強された箇所もあり、全体形はあまり大形のカマドではないが、しっかりと造られている。焼土もたき口部を中心にかなりの量を認め、カマド全体を覆うかのようで、カマド前面にも広範囲にその分布が認められた。



第70図　TAN・KUR　24号住居址カマド

遺物　土師器甕・坏、内面黒色坏、須恵器甕・坏、灰釉陶器埦・長頸壺、鉄滓等があり平安時代後半に位置づけられる。

（小林正春）

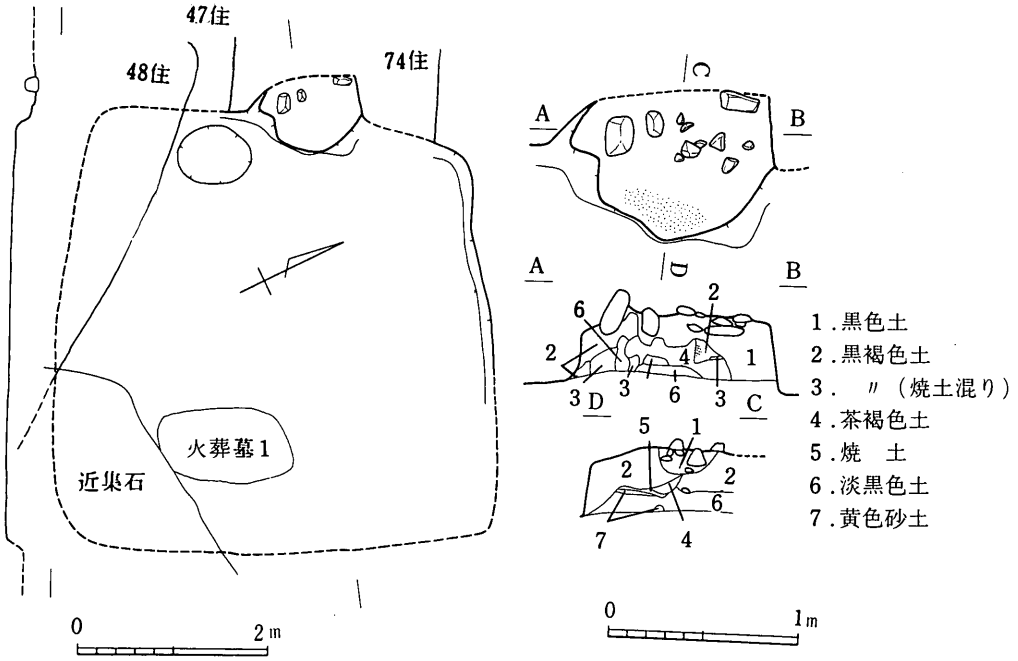
29号住居址　（第71図）

遺構　ＫＵＲＢＬ48を中心に検出された。切り合い関係が著しく、47号・74号・78号住居址を切り、48号住居址・火葬墓１・近世集石に切られる。検出時に覆土中より石と焼土を確認し、隅丸方形の竪穴住居址と思われるが全体の把握はできなかった。想定規模4.6×4.2mで、主軸方向はN73°Wを示す。切り合い関係のため、壁の把握できた所はわずかで、壁高は検出面から10cmを測る。

床面は軟かく、はり床等の確認はできなかった。カマドは西壁中央に位置し、上部に焼土と石があり、石芯の形態と思われるがほとんど破壊されていた。芯の石と思われる直立した石の下部10cmにたき口部の焼土らしい部分を認めた。

遺物　出土量は少ない。須恵器坏の完形１個体が、カマド左側の浅い穴から出土し、他に土師器甕・坏、須恵器壺・甕、灰釉陶器埦、フイゴ羽口、鉄製品などがある。

遺物から平安時代前半であろう。　（佐々木嘉和）



第71図　TAN・KUR　29号住居址

36号住居址（第39図）

遺構　KURAI 53を中心に検出された。北隅が15号・14号住居址と重複するが、新旧関係の把握はできなかった。南隅が用地外となり、上面を後世の耕作等により削平され一部プランの不明箇所もあるが、ほぼ全体を調査した。3.4×3.7mを測るほぼ方形の竪穴住居址で、主軸方向はN46°Wを示す。壁高は、南東壁が４cm、それ以外が12～15cmを測り、当初から掘り込みはあまり深くなかったと思われる。北西壁の中央と西隅に、深さ11～12cmの周溝状の掘り込みを検出したが、いわゆる周溝とは若干様相が異なり、性格等は不明である。床面は南側半分が高く北側半分が５cm程低くなり全体に軟かい。住居址内に大小様々の穴を検出したが、深さ20～３cmで規則制は認められず、主柱穴と考えられるものはない。この中で、Ｐ１は床面より５cmと浅い穴であるが土師器甕が出土し、本住居址に伴うものであろう。カマドは北西壁の中央からやや西隅寄りにあるが、後

世の穴に大きく壊されており、形態等を知ることはできなかった。また、南東壁下の床面上に焼土が認められたが、性格等は不明である。

遺物　出土量は少ないが検出面からの掘り込みが浅いため、ほとんどが床面上の遺物である。土師器甕・坏、須恵器高台坏・蓋、灰釉陶器埦などがある。

出土遺物から平安時代の住居址と考えられる。（佐合英治）

38号住居址（第72図）

遺構　ＫＵＲＡＭ54をほぼ中心に検出された。67号・68号住居址を切り、39号住居址に大きく切られている。かなり上部から掘り込まれていた可能性があり、耕作等により上部をほとんど削平され、わずか凹む西壁の一部と軟かな床面を部分的に確認したのみである。床面は用地境土層の観察により67号・68号住居址よりわずか上部にあったものと考えられるが、ほとんどの部分を確認できなかった。そのため、規模・主軸・床面施設等は不明である。

遺物　他遺構との切り合いのため混入遺物もあると思われるが、須恵器がほとんどで壺・甕・高台坏・盤・蓋・坏、灰釉陶器埦などが部分的に確認した床面と同レベルで出土している。他に、骨片が出土しているが、本住居址に伴うものであるかは不明である。

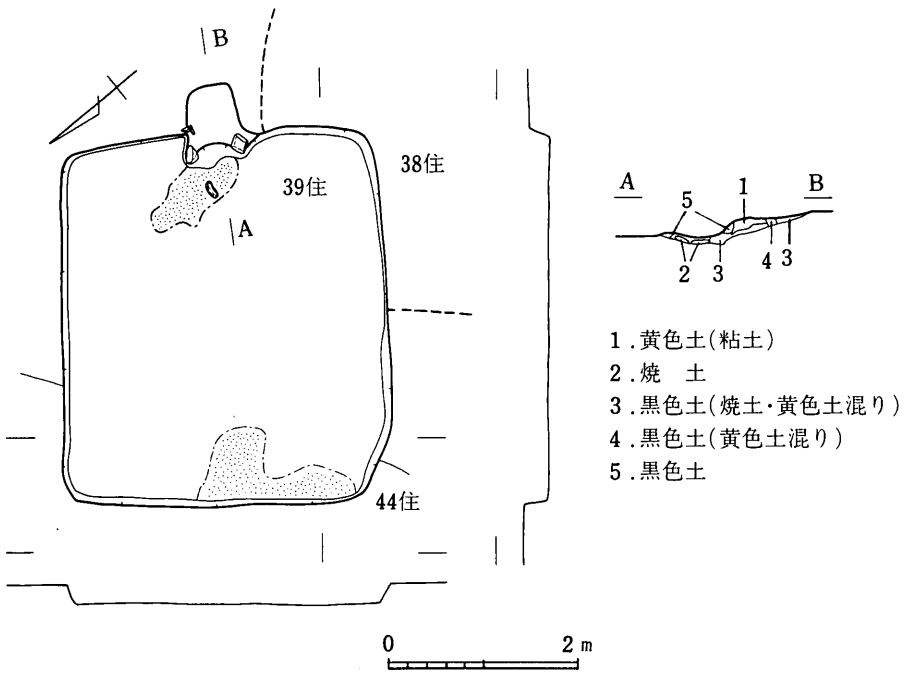
出土遺物から平安時代前半の住居址と考えられる。（佐合英治）

39号住居址（第72図）

遺構　ＫＵＲＡＭ52を中心に検出され、44号・38号住居址を切る。また、67号・68号住居址の壁がはっきりしていないが、本住居址がそれぞれ切っている可能性が強い。3.9×3.4mと小形の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ129°Ｅを示す。褐色土層から掘り込まれた住居址で、検出面の把握が場所により異なり、壁高は25～19cmと差があるが壁面はいずれもほぼ垂直である。床面はほぼ平坦で比較的堅い。また、カマド左手前の径40cm程の範囲にはり床状の薄い面を３層確認したが、住居址全体には認められず、性格等は不明である。カマドは南東壁の中央部に位置する。カマド手前の焼土中に粘土と石が確認され、原形をとどめていないが残存状態からカマド主体は壁外にあり、袖の一部に自然石を使った石芯粘土カマドと考えられる。北西壁ぎわの床面上に焼土と灰が認められたが性格は不明である。周溝・主柱穴等床面施設は確認できなかった。

遺物　出土量は比較的多いが破片のみである。ほとんどが覆土上層からで、特に須恵器坏が多い。他に、土師器甕・小形甕、須恵器壺・坏・蓋、灰釉陶器埦がある。

出土遺物から平安時代の住居址と考えられる。（佐合英治）



第72図　TAN・KUR　38号・39号住居址

40号住居址　(第68図)

遺構　ＫＵＲＡＨ50を中心に検出された。15号・16号・36号・41号住居址と重複関係にある。16号住居址を切り、15号・36号住居址に切られる。41号住居址との新旧関係は不明である。6×6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN40°Wを示す。主軸の長さは主柱穴と壁との距離で推定した。壁は他住居址に切られる東・北壁以外はほぼ全面確かめられ、壁高は25～15cmを測る。床面は全面地山まで掘りその上に10cm程土を入れ、黄色土のはり床としている。多少の凹凸がみられ、ほぼ全面に焼土が残る。特に一点破線で示したカマド周辺に多くみられた。主柱穴は床面調査後、はり床をはずし地山まで掘り下げ、Ｐ１～Ｐ４を確認した。カマドは北西壁中央南寄りに設けられ、左袖にわずかに粘土が残る。石が使ってあったかは不明である。右袖は中世以降の穴に切られている。たき口部の焼土はかなり厚く認められた。床面の焼土からみて、カマドを原因とする火事で廃棄された住居址であろう。ほとんど炭化物がみられず、かなりしっかり焼けたと考えられる。

遺物　遺物は床面ないしその直上で出土した。出土状態からみて一括性は高いものと思われる。土師器甕・内面黒色坏、須恵器短頸壺・蓋・高台坏・糸切り坏がある。また、床面の焼土中より、種類は特定できないが骨片もみられた。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。　(山下誠一)

41号住居址（第68図）

遺構　15号住居址カマドの南側、ＫＵＲＡＫ52付近にカマドの焼土らしい部分が認められ、南西・南東の隅が確かめられ、住居址とした。15号・36号住居址に切られ、44号住居址覆土上にわずかにはり床がみられ、同址を切っている。主軸に直交する方向の長さは4.2mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。　主軸方向は壁の方向とカマドから推定して、N139°Ｅを示す。壁は南壁と東壁の一部が確かめられた。壁高は10cm前後を測り、状態は余り良くない。床面は軟かく、カマド西側は黄色砂土まで掘られる。44号住居址覆土上にはわずかに黄色土のはり床がみられた。主柱穴等住居址付属の穴は確かめることができなかった。カマドは南東壁中央に設けられ、たき口部の焼土がかなり厚く残っていたが、その他の構造は把握できず、一部に粘土が残存していた。

遺物　残存部分が少なく、掘り込みも浅いためか出土量は少ない。内面黒色坏、須恵器高台坏・糸切り坏、灰釉陶器埦がある。

遺物から平安時代中頃に位置づけられる。　（山下誠一）

43号住居址（第85図）

遺構　ＫＵＲＡＰ49にカマドを確認した。西側を42号住居址に大きく切られ、当初カマドの一部と北壁側が発掘用地内を横断する道路下であり、道路移動後に再調査を行なった。褐色土層を掘り下げて構築されており、他遺構との重複もあり壁のほとんどが把握できなかった。そのため、主軸方向はほぼN126°Ｅを示すが、断定はできない。確認部の壁高は11cmを測り、床面は壁下とカマド左前方に部分的に確認した。カマドは東壁に造られているが、全体での位置は不明である。両袖先端のみ割り石を、他の部分には自然石を用いた石芯粘土カマドである。焼土はたき口部のみに認められ、それ以外はほとんど認められない。

遺物　調査範囲は少ないが出土遺物は比較的多い。カマド中央に落ち込んだ状態で須恵器の坏が２点出土し、他に土師器甕・内面黒色の坏、須恵器坏、灰釉陶器埦・皿などがある。

遺物から平安時代中頃の住居址と考えられる。　（佐合英治）

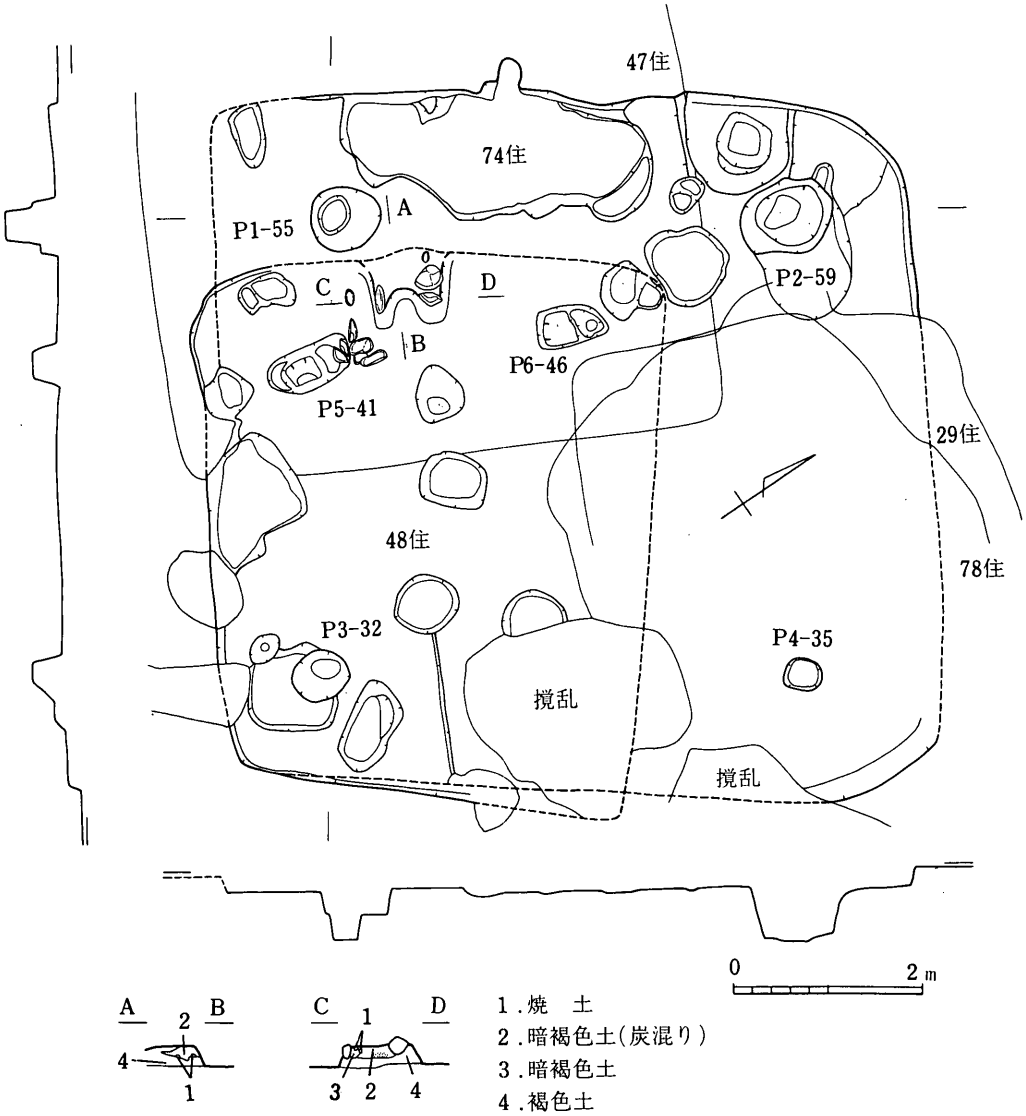
48号住居址（第73図）

遺構　ＫＵＲＢＫ49を中心に検出した。住居址等の重複が著しく、29号・47号・74号・78号住居址を切り、穴・近世集石に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は5.5×５m、主軸方向はN58°Wを示す。壁の確認できた部分はわずかで、壁高は検出面から10cm前後である。床面は、カマド手前が堅い他は比較的軟かく、セクションベルトで74号住居址覆土中にはり床を確認した。

主柱穴は３本確認でき、Ｐ５・Ｐ６は47号住居址の主柱穴とそれぞれ重複している。カマドは北西壁やや西南寄りに位置し、石芯粘土カマドである。カマド左前方に焼けた石が７個あり、カマドの芯石をはずした用材の可能性もある。

遺物　出土量はわずかで、須恵器坏、灰釉陶器埦・瓶子などの破片がある。

遺物から平安時代の住居址である。　（佐々木嘉和）



第73図　TAN・KUR　48号・74号住居址

49号住居址（第27図）

遺構　ＫＵＲＣＭ45に南隅のみを検出した。ほとんどが用地外にかかり、調査範囲は1.2×１ｍとわずかであるが、方形の竪穴住居址と思われる。黄色砂礫土（地山）に約20cm掘り込まれている。地山の礫が壁・床面にあり全体に凹凸がみられる。

遺物　山茶碗系と思われるおろし鉢片が一個床面から出土しているのみで時代決定の材料に乏しいが、平安時代終末と推定した。　（佐々木嘉和）

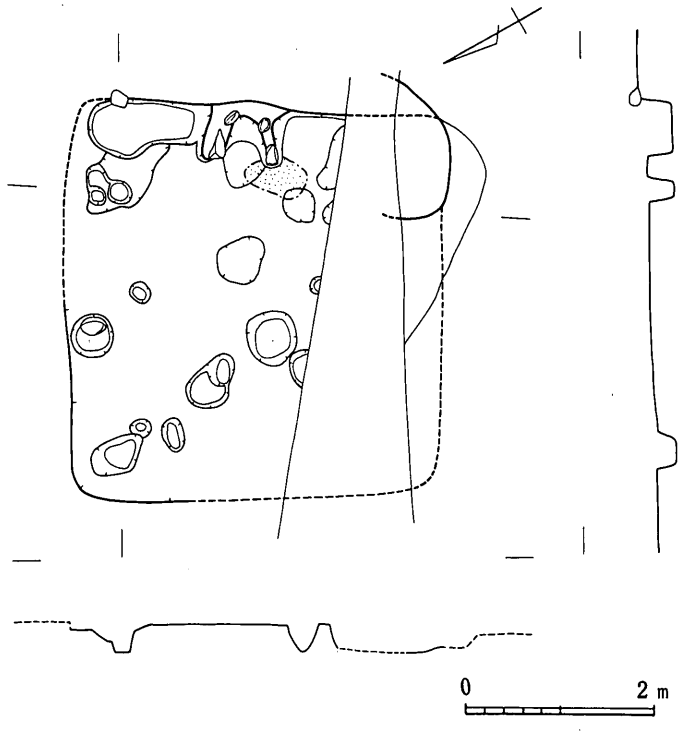
51号住居址（第74・75図）

遺構　ＫＵＲＡＵ50を中心に検出された。時代不明の穴と重複して遺構の確認はできなかったが、周辺から弥生中期遺物が出土しており、該期住居址を切っている可能性もある。一部道路敷下のため調査できない箇所もあるが、全体に掘り込みが浅く、壁はカマド付近の一部を確認したのみである。床面及び覆土の状況により、一辺がほぼ４ｍを測る隅丸方形の竪穴住居址が想定され、主軸方向はＮ119.5°Ｅを示す。床面はカマド周辺が良好で、それ以外は軟かく全体に凹凸がある。床面上に複数の穴を認めたが、主柱穴の確定はできず、ほとんどが本址との関連不明で、カマド左側の穴を本址貯蔵穴と認めたのみである。カマドは、南東壁ほぼ中央に位置し、石芯粘土カマドである。両袖ともしっかりと石を組んで、全体にかなりの焼土を認めた。

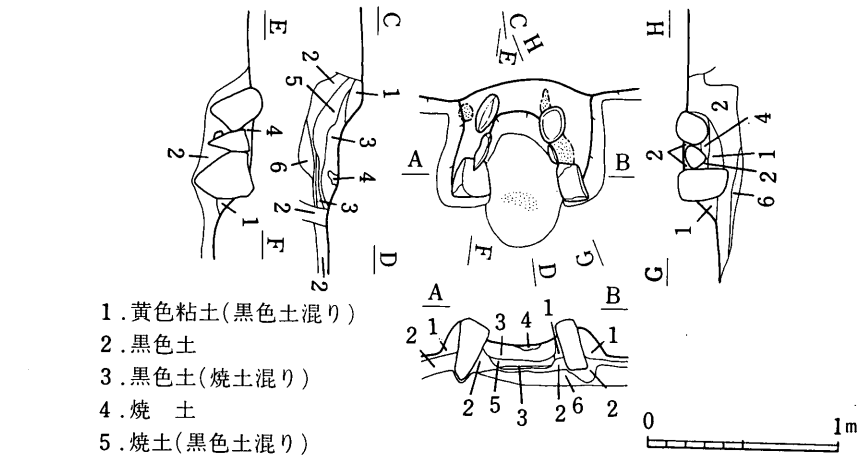
遺物　土師器甕・坏、須恵器坏・蓋・甕・長頸瓶、灰釉陶器埦・皿、緑釉陶器段皿、刀子などがあり、灰釉陶器の中にはヘラ描き雲花文を施したものもある。

遺物から平安時代後半に位置づけられる。

（小林正春）



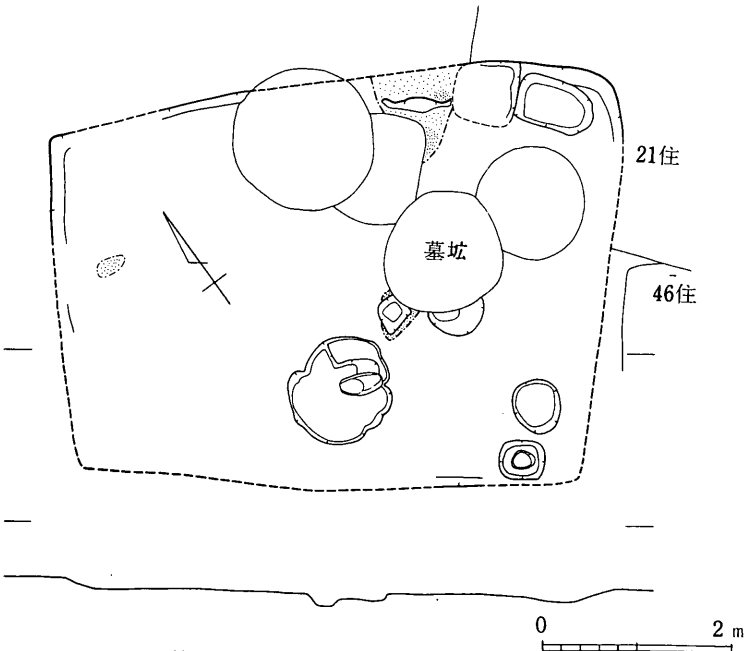
第74図　TAN・KUR　51号住居址



第75図　TAN・KUR　51号住居址カマド

56号住居址　(第76図)

遺構　ＫＵＲＢＡ51を中心に検出された。今回移転した墓地のあった箇所のため墓壙による攪乱が住居址中央部にみられる。21号・59号住居址、方形周溝墓２を切る。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は4.5×６ｍ、主軸方向Ｎ36°Ｅを示す。黄色砂質土まで掘り込まれていたが、壁の確認できた所は少なく、確認部分の壁面もゆるい傾斜で床面に至り、壁高は残りの良い所で約30cmである。床面は部分的に堅い所もあるが、総体としては軟かであった。床面中央やや東寄りに、墓壙に一部壊されているが、30×30cmで深さ20cmの壁・底が焼け焼土の入った穴があり、炉址的性格が考えられる。壁面に粘土をはり、粘土が良く焼け、灰青色に変色し軽石状に硬くなっていた。この周囲から鉄滓が多く出土し、鍛治関連の施設と考えられる。また、炉状施設の南西側に、長さ40cmの焼石の入った径１ｍの浅い穴があ



第76図　TAN・KUR　56号住居址

り、これも鍛治関連の施設と考えられる。カマドは墓壙にほとんど壊されていたが、北東壁中央やや東よりに焼土があり、位置のみは確認できた。

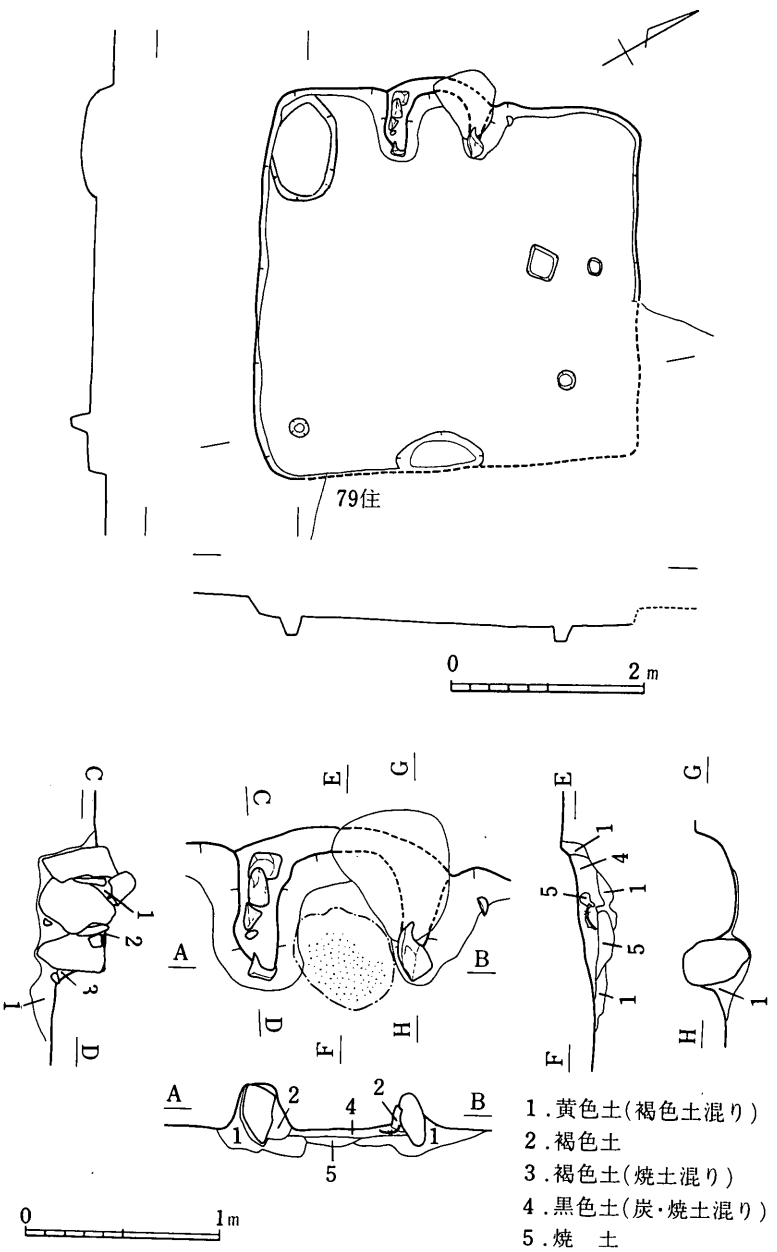
遺物　出土量は多い。カマド右の穴からは、ほぼ完形品10個を含む土師器糸切り坏が多数出土し、積み重ねて保管していた可能性がある。他に、須恵器坏、灰釉陶器埦・皿・耳皿、緑釉陶器埦・皿、鉄製品（轡か）、鉄滓がある。この住居址は、全体形や床面施設等の遺構面及び出土遺物の質・量など一般住居址とは異なる状態であり、特殊な性格を持った住居址といえる。

遺物から平安時代後半の住居址であろう。

（佐々木嘉和）

60号住居址（第77図）

遺構　ＫＵＲＢＨ52を中心に検出された。79号住居址を切る。４×４ｍの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ62°Ｗを示す。壁は79号住居址と重複する部分以外は確かめられ、壁高は20cm前後を測る。主柱穴は不明である。西隅直下に110×70cmの楕円形で深さ18cmの穴があり、中には焼土・灰などが入り、灰だめ的な性格が考えられる。カマドは北西壁中央やや南寄りにあり、石芯粘土カマドである。左袖は40cm



第77図　TAN・KUR　60号住居址

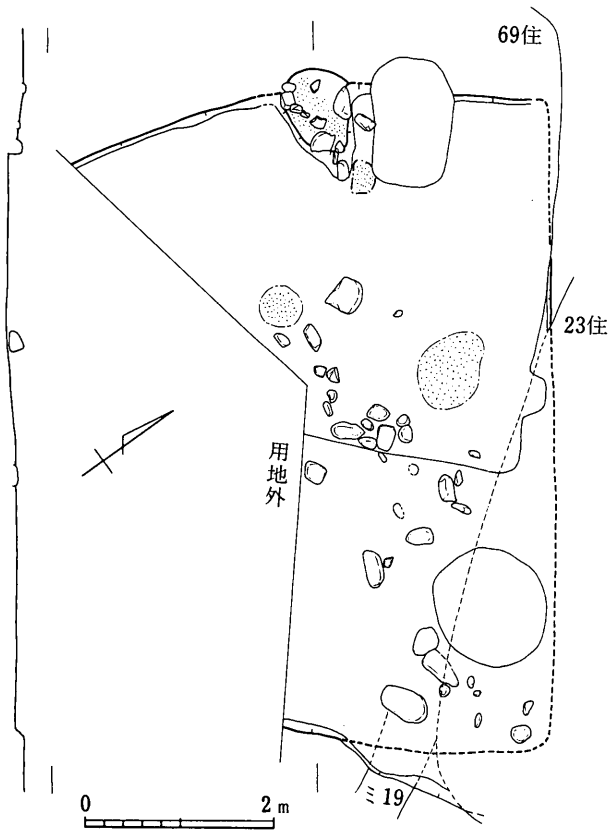
前後の石が3個使われ、補強に小礫がつめられていた。右袖は現代の穴で破壊され、先端の袖石1個が残っていた。たき口部の焼土は厚く、相当期間の使用が考えられる。この付近に甕の破片を多く認めた。

遺物　出土量は多く、ほとんどが床面ないしその直上からである。カマド北側の床面上には須恵器四耳壺が出土し、他の個体もカマド周辺からが多かった。土師器甕・坏、須恵器長頸壺・四耳壺・高台坏・ヘラ切り坏・糸切り坏・高台皿、鉄器刀子、鉄滓があり、出土状態からほぼ単一時期に属する。

遺物から平安時代中頃に位置づけられる。　（山下誠一）

65号住居址（第78・79図）

遺構　KURAT54を中心に検出された。69号住居址の上面と23号住居址の西壁を切っている。東西の長さは用地外にかかるため不明であるが、南北6.8mの竪穴住居址で、主軸方向はN58°Wを示す。覆土中には長径50～20cmの大きな自然石が多数混入しており、一部は床面に密着したものもある。遺物が石の間からも出土しており、住居址放棄後時期を置かないで、なんらかの人為的要素が加わって混入したと考えられる。壁高は確認部で14～5cmを測り、緩やかな壁面を成す所もある。床面は69号住居址を切る西半部がはり床され、東半部に比べ8～4cm低く凹凸はあるが、全体に堅く良好である。石散在範囲内の床面上に2箇所に焼土を認めたが、性格は不明である。カマドは北西壁やや北寄りに位置すると思われる。自然石を使った石芯粘土カマドであるが、両袖の壁ぎわの石以外は動いており、ほとんど原形をとどめていない。耕作時の攪乱や後世遺構との切り合い等による破壊痕跡は認められず、住居址放棄時に人為的に壊しているのではないかと考えられる。焼土はブロック状にカマド内とその周辺に認められた。



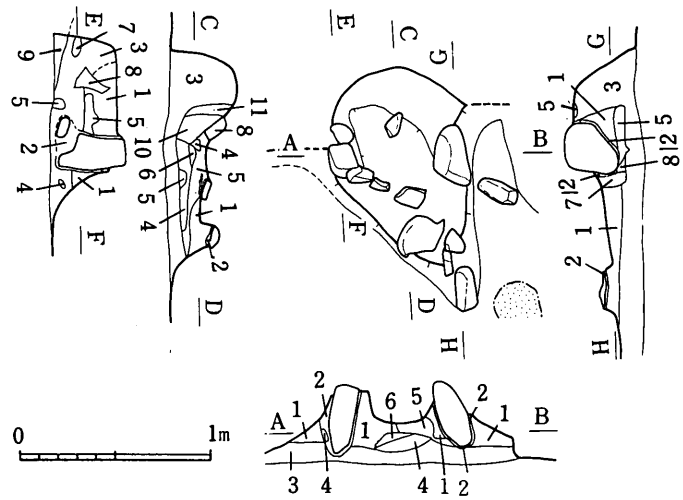
第78図　TAN・KUR　65号住居址

遺物　出土量は多く、土師器甕・小形

甕・甑・坏・鉢・須恵器高坏・坏・高台坏・蓋・鉢、灰釉陶器耳皿・埦・瓶子、鎌・刀子・釘、炭化種子がある。

検出面から床面まで覆土中全体から出土し、切り合い関係からみて、69号住居址遺物が混入している可能性が強い。

本住居址は平安時代後半と考えられる。　（佐合英治）

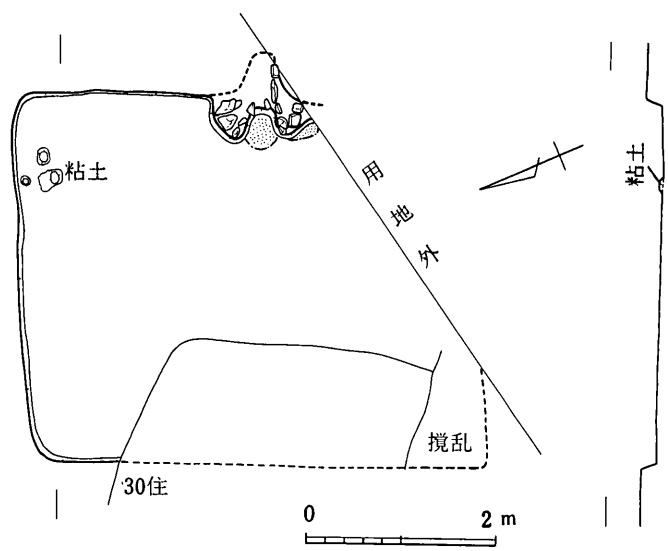


1．黄褐色土
2．黒色土
3．黒色土(黄色土混り)
4．焼　土
5．黄褐色土(焼土混り)
6．焼土(黄褐色土混り)
7．黄色土
8．黄褐色土(黄色土混り)
9．黒色土(黄色土・砂土混り)
10．褐色土(焼土混り)
11．黒褐色土(焼土混り)

第79図　TAN・KUR　65号住居址カマド

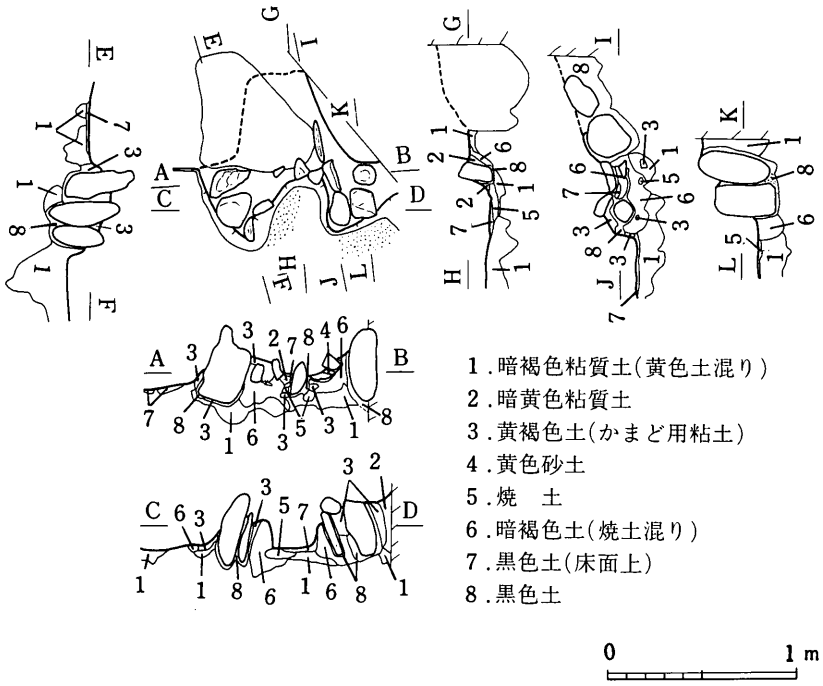
71号住居址（第80・81図）

遺構　ＫＵＲＢＱ52を中心に検出された。30号住居址を切る。南壁と東壁のカマドより南側は用地外となり調査できなかった。主軸方向の長さは3.9mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸はＮ112°Ｅを示す。壁は北壁と東壁一部が確かめられ、壁高は15cm前後を測り、30号住居址と切り合う部分は不明である。床は黄色土ではり床され、全体に軟かい。30号住居址覆土中にもわずかにはり床が認められ、切り合いを確認する上でのきめ手となった。カマドは東壁に造られ、石芯粘土カマドである。両袖共に外側に40cm前後の大きな石を使い、その内側に30cmくらいの細長い石を内側に傾けて組むという二重構造になっている。壁外に50cm程突出することが確かめられたが、



第80図　TAN・KUR　71号住居址

左袖の壁外・煙道は近世の攪乱を受けて破壊され、右袖も用地外にかかり、全体の把握はできなかった。



遺物　かなりまとまった遺物が得られ大部分が床面遺物である。内面黒色糸切り坏・高台坏、土師器糸切り坏・高台坏・鉢、須恵器糸切り坏・四耳壺、灰釉陶器埦、刀子がある。

出土遺物から平安時代後半に位置づけられる。

（山下誠一）

第81図　TAN・KUR　71号住居址カマド

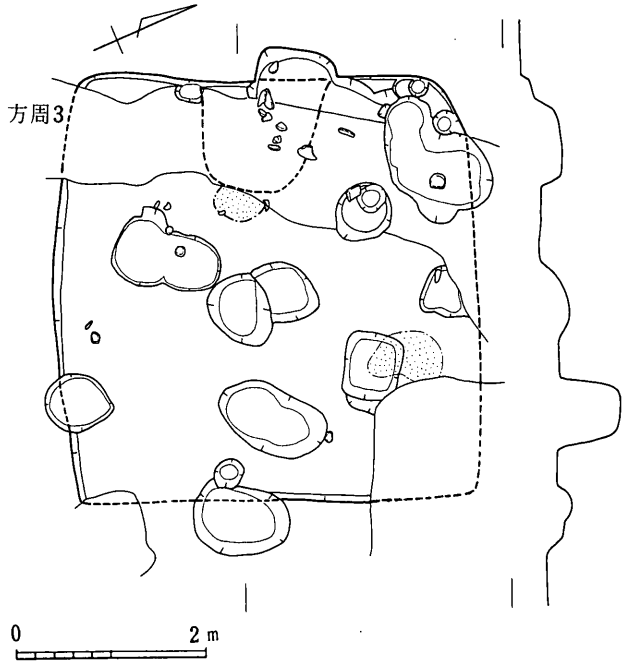
83号住居址　（第82図）

遺構　KURCA47を中心に検出された。方形周溝墓3・91号住居址・穴を切り、後世の穴・方形竪穴に切られる。重複する遺構の中では新しい時期にあたるが、地表から検出面までが浅く、新旧の土層把握が適格に行えず、住居址平面は北東壁を除く断片的に検出した壁により推測した。4.4×4.5mを測り、主軸方向はN30.5°Eを示す隅丸方形の竪穴住居址である。壁高はわずかで、明瞭に把握できた箇所でも10cm以下である。床面は、全体を黄色砂土まで掘り込んだ後に、10cm前後黒色土及び黄色土を埋めはり床としていた。はり床は部分的に堅く、焼土の認められる所もあるが攪乱による凹凸が著しく、その面で床面上施設の把握はできなかった。はり床を除去して複数の穴を検出したが、主柱穴の把握はできなかった。ほとんどが本址に先行する時期のもので、本址に付属するものはP1のみで、本址より確実に新しいものはP2である。カマドは、北西壁中央付近に石・焼土が認められ、位置のみ把握したが、破壊が著しく形態等全く不明である。

遺物　ほとんど小破片であるが、遺物量は多い。はり床上面及びはり床内から出土し、いずれも

時間差は認められない。土師器甕・坏・皿、須恵器甕・短頸壺、緑釉陶器皿、ふいご羽口、鉄滓等がある。

出土遺物から平安時代後半に位置づく。　（小林正春）



第82図　TAN・KUR　83号住居址

86号住居址（第51図）

遺構　KURBP46を中心に検出された。88号住居址を切り、近世集石３・７、近世墓壙に切られ、北側は用地外のため全容はつかめなかった。規模・主軸等は不明であり、調査範囲は3.4×2.7m程である。壁は南壁が確かめられ、壁高は13cmを測る。南東隅付近と思われる部分で張り出し部を持ち単純な方形とはならないが、重複が多く断定はできない。覆土は黒土にかなりの焼土が混じっていた。床面には大小様々の穴がみられる。そのうち、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５はそれぞれ10・16・18・25・10cmを測り、焼土・炭が層を成して入っていた。Ｐ６は直径1.20cm・深さ55cmを測り、黒色土が入り、焼土はみられない。それぞれの具体的性格等不明である。床面上の小穴や焼土のあり方・出土遺物の特殊性から住居址と考えるより、小鍛冶の工作址的な性格が指適できる。

遺物　調査面積に比較してかなり良好な資料が得られた。焼土を持つ小穴からの出土が多く、特にＰ３が多かった。土師器甕・坏・耳皿・内面黒色の糸切り坏・高台皿・糸切り皿・鉢、須恵器四耳壺・高台坏・糸切り坏、灰釉陶器埦・皿・長頸瓶、刀子・釘・鍵状鉄製品・不明鉄器、鉄滓・鈿、ふいごの羽口がある。

遺物から平安時代後半に位置づけられる。　（山下誠一）

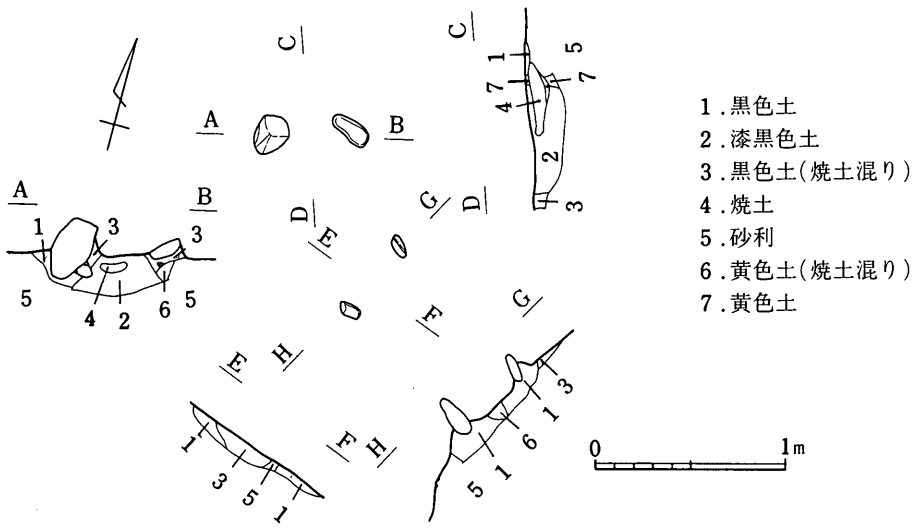
92号住居址（第27・83図）

遺構　KURCL45･46にカマド芯石と思われる直立した石と、石の間に焼土を検出した。方向が異なる石が１m程離れて２箇所にあり、住居址が切り合っていた可能性もある。

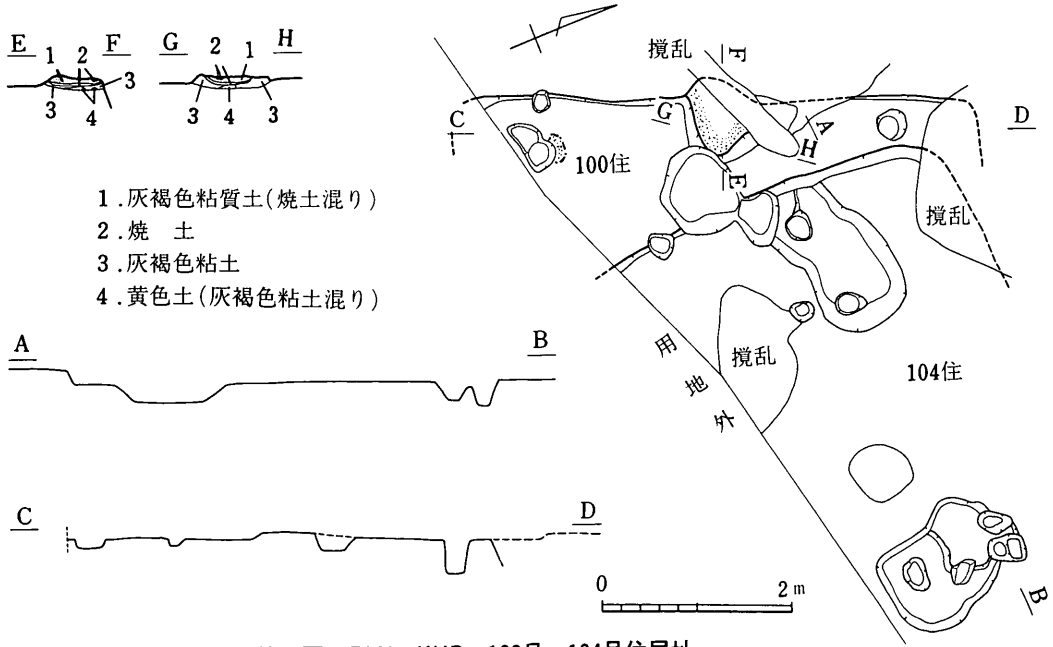
遺物　断面ＡＢの東側石の下から、灰釉陶器片が出土し、平安時代住居址が１軒はあったと思わ

れる。石の周囲から出土した灰釉陶器等を一応92号住居址遺物と推定し、土師器甕・坏、須恵器蓋、灰釉陶器皿・埦等があるが、確証はない。灰釉陶器は平安時代後半の特徴がある。

（佐々木嘉和）



第83図　TAN・KUR　92号住居址



第84図　TAN・KUR　100号・104号住居址

100号住居址（第84図）

遺構　ＫＵＲＣＦ52を中心に検出された。用地外にかかり調査できた範囲は少なく、かつ104号住居址を切っている。方形の竪穴住居址と思われ、主軸方向はＮ66°Ｗを示す。地表面から床まで約20cmと浅く、耕作の攪乱が床面まで達していた。壁高は検出面から10cm以下である。床面の確認できた範囲は少ないが、確認部分の床面は堅く良好であった。用地外壁ぎわの穴に接して床面の良く焼けた所があり、何らかの施設が考えれる。カマドは西壁ほぼ中央にあった。地表面から浅いため、たき口部の焼土を確認するにとどまったが、良く焼けて厚さ５～３cmでこげ茶色になっていた。

遺物　調査面積が少ないので出土量は少ないが、ほぼ完形品もある。土師器坏、灰釉陶器埦などがある。

遺物から平安時代後期後半の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

⑥ 中　世

遺構として把握できたものはごくわずかである。調査範囲内全域に小規模な穴が連続し、土層等から本時代の可能性の強いものが多く個々の性格等不明であるが、何らかの意味を持つと考えられる。

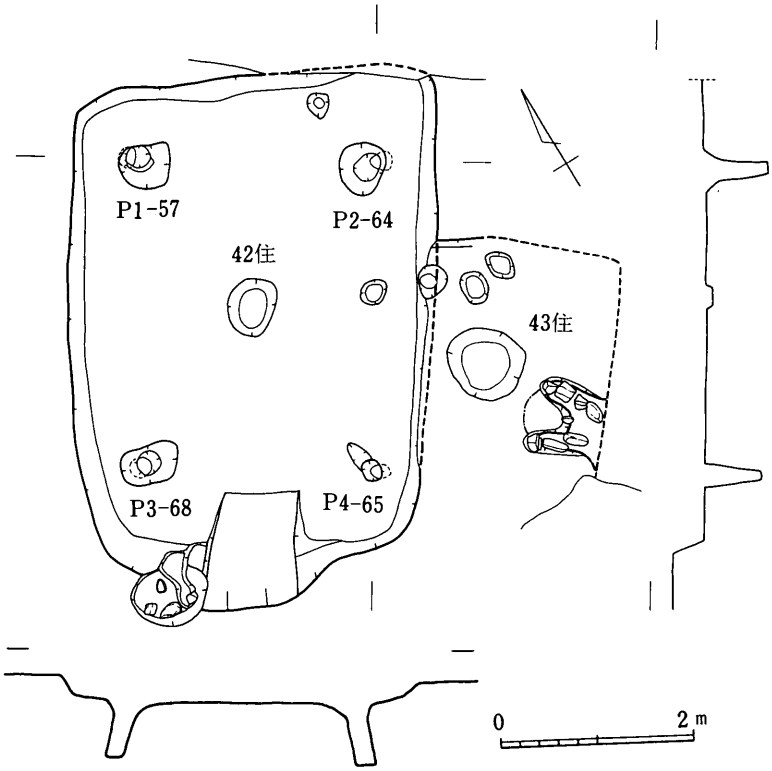
確実に把握された遺構は少ないが、遺物出土状況などから、近隣のいずれかに居住空間の中心があったと思われる。　（小林正春）

42号住居址（第85図）

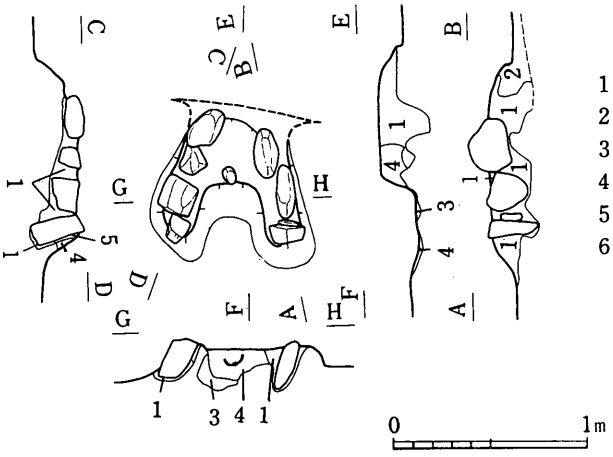
遺構　ＫＵＲＡＯ47を中心に検出された。52年に南側を約２m幅で調査し、それより北は市道下のため、56年度に道路を移動してほぼ全面を調査した。しかし、北壁の一部は付け替え道路下となり調査できなかった。43号･105号住居址を切っている。5.5×3.9mの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸を主軸方向と考えるとＮ31°Ｅを示す。壁はほぼ全面確認し、壁高は35～15cmを測り、緩やかな立ち上がりを成す。南壁ほぼ中央部は幅30cmのわずかな張り出し部を持ち、壁外と床面をゆるいスロープでつなぎ、入口部施設と考えられる。床面は全面黄色土まで掘られ、比較的軟かい。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。いずれも穴は短軸方向の外側に傾けて掘られ、立ち上がった柱はいずれも中心に向い傾斜する。穴の壁には20～10cmの礫が補強用にはりつけてあった。住居址中央部には、60×50mの楕円形で深さ10cmを測る炭が充満した穴を検出した。焼土は全く認められず、一般的な地床炉とは用途の異なるものと考えられるが、火の使用の施設であることは間違いないと思われる。土層をみると黒色土に黄色土が混じる単一の土で、人為的に埋めたと考えられる。同一の土層に覆われた中世の生活面が住居址東側にあり、関連を考える必要がある。

遺物　出土量は少ない。白磁・鉄釘・用途不明鉄製品がある。

遺物から中世13世紀以降の住居址である。　（山下誠一）



43住カマド



第85図　TAN・KUR　42号・43号住居址

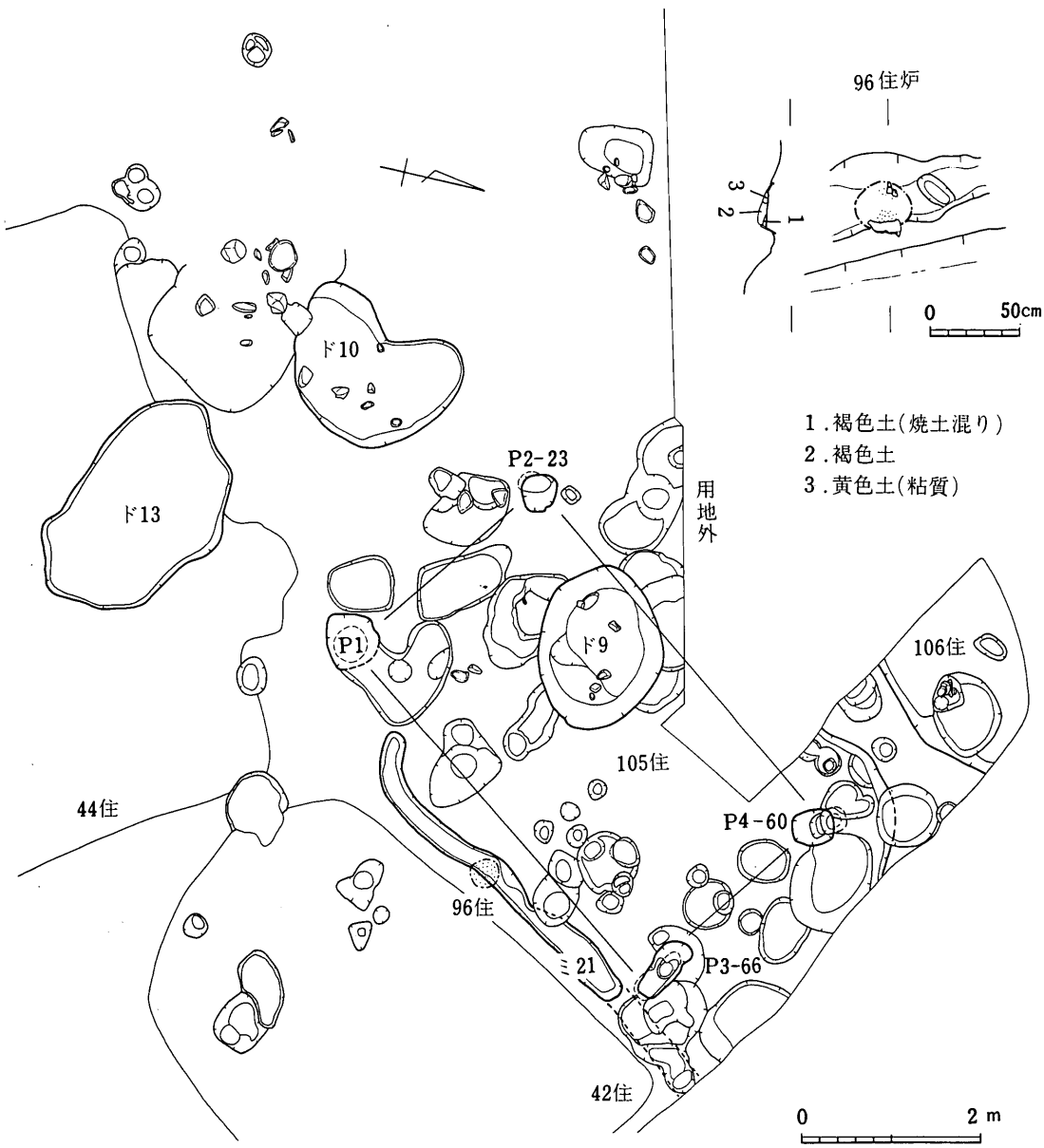
105号住居址

（第86図）

遺構　KURAM 46を中心に検出された。52年度に南側のほぼ半分を、市道下の北側は56年度に調査した。当初住居址として把えられなかったが、56年度調査で北東隅と2本の斜めに掘られる柱穴と床面がみられ、柱穴が42号住居址のあり方と共通するため住居址とした。南側は実測図面により主柱穴を判断したが、斜めに掘られた状況が把握できず、掘り足らない結果となった。42号住居址、土坑9に切られる。また、床面の小穴も切られているものが多

い。付け替え道路下・用地外などを除き、ほぼ全体を調査した。隅丸長方形の竪穴住居址である。柱穴による長軸から主軸方向はN37.5°Eを想定できる。壁は北東隅部分のみ確認し、壁高は15～10cmを測る。床面は黄色土のはり床で、堅く良好である。床面上にわずかに焼土・炭の散布がみられた。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、Ｐ２～Ｐ４は短軸方向の外側に傾けて穴が掘られる。Ｐ１も同様と考えられるが掘り足りなかったと思われる。他の穴で住居址に付属すると断定できるものはない。カマド等の施設もない。

遺物　遺物はほとんど出土しなかった。住居址の構造等に、42号住居址と共通する部分が多く、あまり時期差のないものと推定でき、13世紀以降の中世の住居址である。　（山下誠一）

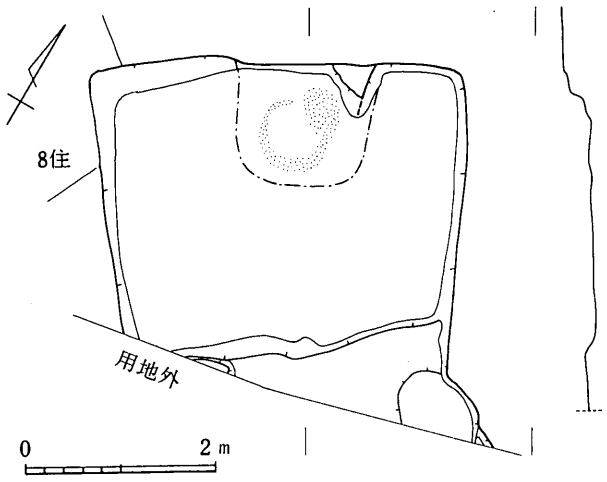


第86図　TAN・KUR　96号・105号・106号住居址、土坑９・10・13、溝址21

⑦ 時期不明

14号住居址（第87図）

遺構　ＴＡＮＢＮ53を中心に検出した。８号住居址を切り、用地外に一部かかるが、ほぼ完掘した。隅丸方形の竪穴住居址であり、規模は３×3.6m、主軸方向はＮ32°Ｗを示す。壁高は検出面から約30cmあり、やや傾斜のある壁面である。床面は軟かく、穴など不明である。北西壁中央部に炭・焼土が１×１ｍの範囲に広がっており、カマドの残骸と考えられる。



第87図　TAN・KUR　14号住居址

遺物　出土量は少ない。覆土中から土師器甕・坏・高坏などの破片が出ており、古墳時代の可能性が強いが、決定できる程の出土量ではない。

（佐々木嘉和）

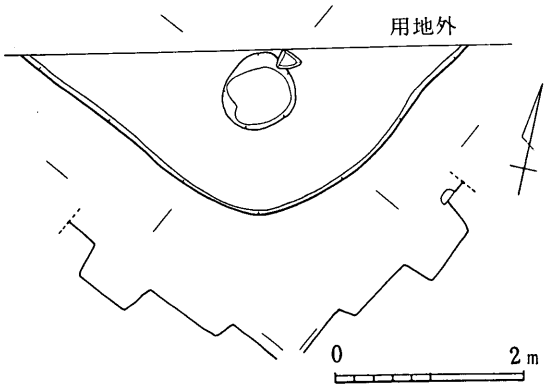
18号住居址（第108図）

遺構　ＴＡＮＢＥ45に隅の一部を確認したのみで、遺構のほとんどが用地外になるが、方形の竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から約20cmあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は軟かく、浅い穴があった。

遺物　土師器片が数点出土したのみで、時代の決め手になるものはない。　（佐々木嘉和）

27号住居址（第88図）

遺構　ＫＵＲＢＨ・ＢＩ46の北側用地境に南隅のみを確認した。隅丸方形の竪穴住居址と思われるが規模、主軸方向等は不明である。壁高は20cm程で、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は軟かく、周溝・カマド等の施設は確認できなかった。床面上に径80cm・深さ30cmの穴があるが、性格等は不明である。



第88図　TAN・KUR　27号住居址

遺物　出土した遺物は極めて少なく、覆土中から土師器甕片、穴の覆土から須恵器

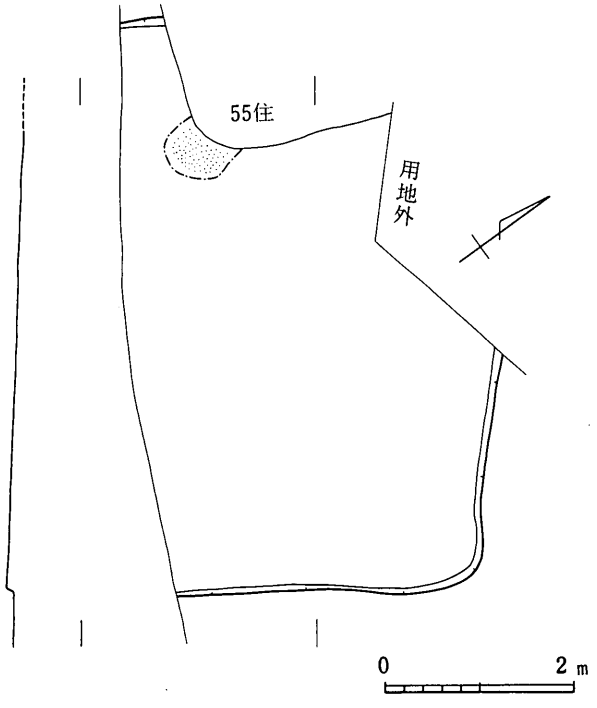
蓋の紐部と土師器甕細片が出土したのみである。

時期は古墳時代後期の可能性があるが断定はできない。　（佐合英治）

28号住居址（第89図）

遺構　ＫＵＲＡＲ47を中心に検出された。55号住居址及び穴に切られる。北隅が用地外、南西壁は道路下のため、東隅と北西壁の一部を確認したのみで、壁高はいずれも10cm弱で浅い。一辺６ｍ程の竪穴住居址で主軸方向はＮ57°Ｗを示す。床面は黄色砂土の面をほぼ平坦に確認したが、全体的に軟弱である。55号住居址に切られる部分に径60cm程の楕円形で厚さ５cm位の堅い焼土の面があり、地床炉と判断した。主柱穴をはじめ床面上の施設は不明である。

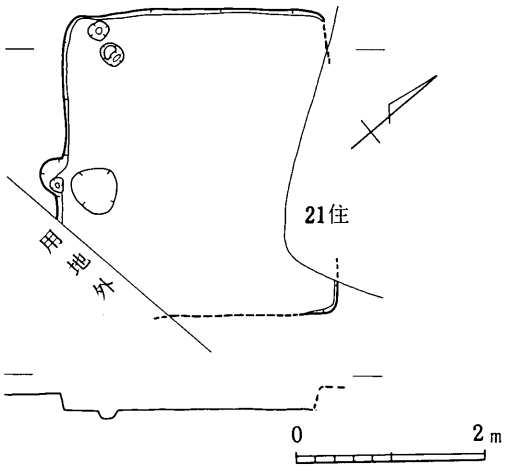
遺物　覆土及び床面上からの遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したのみで、時期決定可能なものはない。住居址・炉址の形態から弥生時代中期に位置づくとも考えられる住居址であるが、確実な所は、55号住居址に切られることより、奈良時代より古いものといえるだけである。　（小林正春）



第89図　TAN・KUR　28号住居址

46号住居址（第90図）

遺構　21号住居址の南側ＫＵＲＢＢ53を中心に検出された。中世以降の攪乱等が多く、プランの確定に苦労し、西・東の隅と西側部の壁を把握し、住居址とした。21号住居址と北東側が重複し、一応本住居址が切られると判断したが、断定はできない。南隅は用地外となり調査できなかった。3.2×2.8mの隅丸方形の竪穴住居址である。確認部分の壁高は20～15cmを測るが、良好な状態ではなかった。床面は黄色砂土まで掘られ軟かい。主柱穴・カマド等の諸施設は確認できなかった。全体の状況から一般の住居址とは異なることも考えられる。



第90図　TAN・KUR　46号住居址

遺物　わずかに土師器片が出土した。

切り合い関係から古墳時代後期後半より以前の可能性が強い。　（山下誠一）

66号住居址（第49図）

遺構　ＫＵＲＡ区を横断する道路の南側地下歩道用地の調査で、62号住居址のはり床を除去時に北壁の一部を確認した。62号・64号・70号住居址に切られ、東側は用地外にあるため、調査範囲はごくわずかで、規模等不明の竪穴住居址である。壁高は62号住居址床面までの７cmを把握したのみである。床面は62号住居址はり床下部の状況がはっきりせず、地山の黄色砂土の面で把握した。Ｐ１・Ｐ２はそれぞれ深さ26・30cmを測り、64号住居址に掘り方の一部を切られるが、覆土・62号住居址はり床の状況から、Ｐ１は本住居址に伴う可能性が強い穴である。

遺物　出土遺物は少なく、ほとんどが62号住居址はり床中のもので、本住居址に属さない可能性がある。土師器甕・小形甕、須恵器坏の細片などがある。

切り合い関係から古墳時代後期前半以前の住居址で、Ｐ１から出土した土師器小形壺からみて古墳時代前期と考えられるが、断定はできない。　（佐合英治）

73号住居址（第44図）

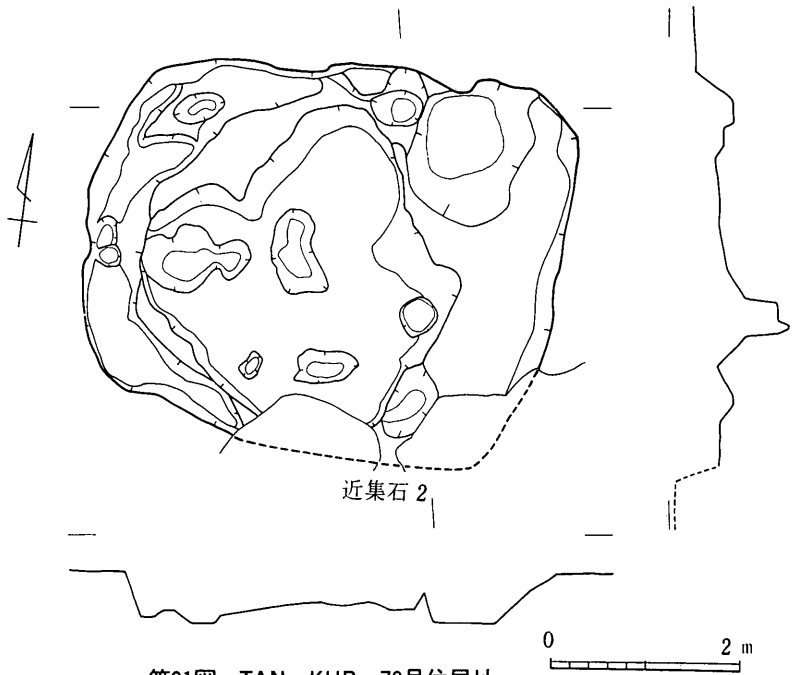
遺構　ＫＵＲＡＶ46に57号住居址に切られて南隅の一部を検出した。遺構のほとんどが用外地にあり、調査面積は１×１mと小範囲であるが、方形の竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から10cmと浅い。

遺物　わずか出土しているが、時代を決定できるものはない。　（佐々木嘉和）

78号住居址（第91図）

遺構　ＫＵＲＢＭ48を中心に検出した。74号住居址を切り、29号・48号住居址、火葬墓１、近世集石（攪乱）に切られる。不整隅丸方形の竪穴住居址で、規模は５×４m、長軸方向Ｎ90°Ｅを示す。壁高は検出面から50～40cmあるが、壁面はかなり凹凸がある。西壁下に幅50cm前後の周溝状掘り込みがあり、床面は軟かくかなり凹凸がある。西壁の中央から50cm位内側に、焼土・炭があ

り、下部は20×20cmの方形に焼けていた。当住居址は不整形で、覆土も自然堆積でなく人為的な埋め戻しが考えられ、一般住居址と異なると思われる。



第91図　TAN・KUR　78号住居址

遺物　出土量は少ない。土師器甕、須恵器坏、鉄滓など出ている。緑釉陶器片も１点出ているが、土色の異なる部分からであり、上からの混入であろう。時期の決定はできないが、切り合い関係から平安時代の遺構の可能性が強い。　（佐々木嘉和）

81号住居址　（第52図）

遺構　ＫＵＲＢＷ46を中心とし発掘用地北側用地境に南隅部分を検出した。南隅は84号住居址と重複し、同じ場所を建物址11の柱掘り方が切っており、新旧関係は確認できなかった。規模・主軸方向は不明の竪穴住居址である。壁は褐色土層から掘り込んでおり、壁高は７～４cmと浅い、そのため緩やかなものである。床面はきわめて軟かなもので、主柱穴・周溝等の施設は確認できなかった。

遺物　土師器甕・小形甕、須恵器蓋坏・坏などが出土したが、床面密着遺物は少なく、すべて細片である。他に、臼玉が出土しているが84号住居址との重複部付近からの出土で、84号住居址の石製品の出土状態を考えると、本住居址には伴わない可能性が強い。

遺物から古墳時代後期と考えられるが時期決定の根拠に乏しい住居址である。　（佐合英治）

95号住居址　（第32図）

遺構　ＫＵＲＢＧ48にかかっている。26号・61号住居址に切られる。（６）×６ｍの方形竪穴住居址と推測されるが、確認できた所は少ない。壁高は検出面から15～10cmである。床面はほぼ確認できる堅さであった。数個の穴を検出したが深いもので18cmである。

遺物　ごくわずかである。土師器片が数片あるが重複が著しいので、確実なものは使用痕の残る凝灰岩1個である。東隅近くの3個の内の中央の石であり、台石と推定される。

時期決定には材料が乏しい。　（佐々木嘉和）

97号住居址　（第51図）

遺構　ＫＵＲＢＳ46を中心に東壁と床面の一部が検出され住居址とした。南側を85号住居址に、西側は近世の墓に切られ、北側は用地外になるため、4.8×1.3mの範囲を調査したのみであり、プラン・規模・主軸方向などは把握できなかった。壁高は残存部分で8cmを測る。床面は堅い良好なもので、その直上には木材・敷物の炭化物がみられ、火事の住居址である。

遺物　出土量は少なく、土師器高坏、須恵器蓋坏・糸切りの坏がある。

遺物は複数の時期のものがあり、時期の確定材料とできない。切り合い関係から古墳時代後期後半以前が考えられる。　（山下誠一）

106号住居址　（第86図）

遺構　105号住居址の西側、ＫＵＲＡＭ44に東壁と床面の一部が検出され住居址とした。大部分が用地外となるため、1.7×1.6mの範囲を調査したのみで、平面形・規模・主軸方向などは把握できなかった。壁高は確認部分で15cm前後を測る。床面は黄色土のはり床で軟かい。

遺物　土師器の破片がわずかに出土したのみで、時期は決定できない。　（山下誠一）

2）建物址・工房址

ＴＡＮ・ＫＵＲの台地上ほぼ全域に分布する。地域・時代・規模など、それぞれが互いに関連を持ちながらいくつかに大別できる。地域的にはＴＡＮとＫＵＲＣ区の2箇所に集中する傾向がみられる。時代的には、個々の建物址を出土遺物のみにより確定できず、すべてを細分できないが、他遺構との切り合い関係等により、古墳時代から中世にかけてのものであり、そのうち大型で規格性の高いものは奈良時代に位置づき、官衙的な施設と考えられる。

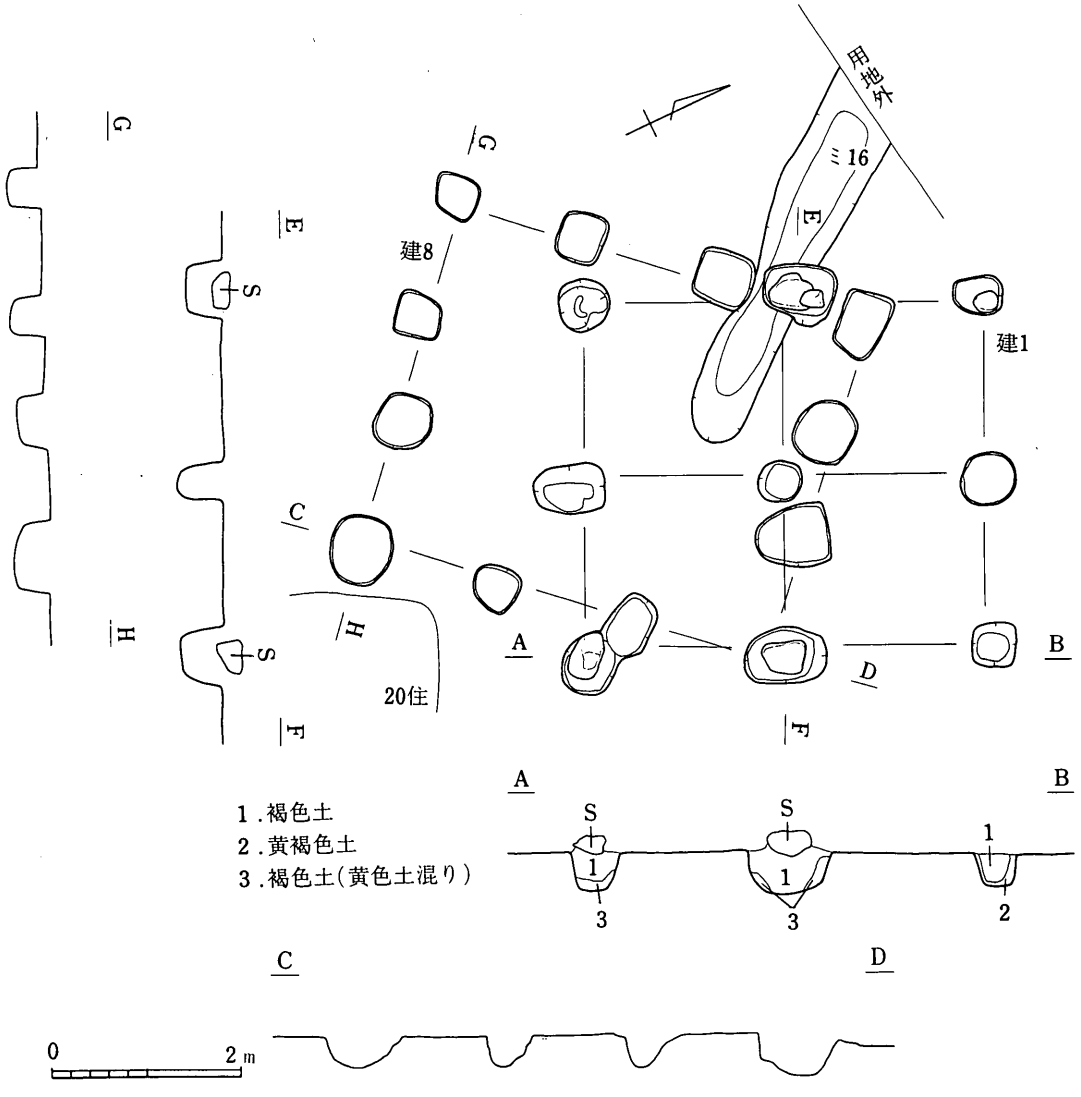
ＴＡＮの建物址群は、3棟が直列配置を成す建物址7が奈良時代に位置づけられる。他の建物址は、やや掘り方規模が小さく、形態差もあり、奈良時代を前後する時期で、性格も様々であると考えられる。ＫＵＲＣ区の建物址群は、全体を把握したものがなく、具体的な様相は不明であるが、かなり規模の大きなものもあり、奈良時代に位置づけられる。両者はかなりの距離を置くが、空白部にも特殊な竪穴や蹄脚硯の出土があり、全体が官衙的性格の強い遺跡といえる。

（小林正春）

建物址1　（第92図）

遺構　ＴＡＮＢＪ47を中心に検出した。17号住居址、建物址８、溝址12･16を切る。２×２間で、4.22m×3.61mを測る総柱建物址で、礎石４個を確認した。礎石は自然石で一部表面に調整痕の認められるものもあり径40cm前後である。柱間寸法は桁行2.11m･梁行1.8mを測る。桁行方向はＮ20°Ｅを示す。礎石の下に柱掘り方があり、平面は不整方形で統一性はないが、深さは検出面から40cmでほぼそろっている。柱掘り方中に柱痕は検出できなかった。掘立柱建物を礎石建物に同一位置で建て替えた可能性が強い。

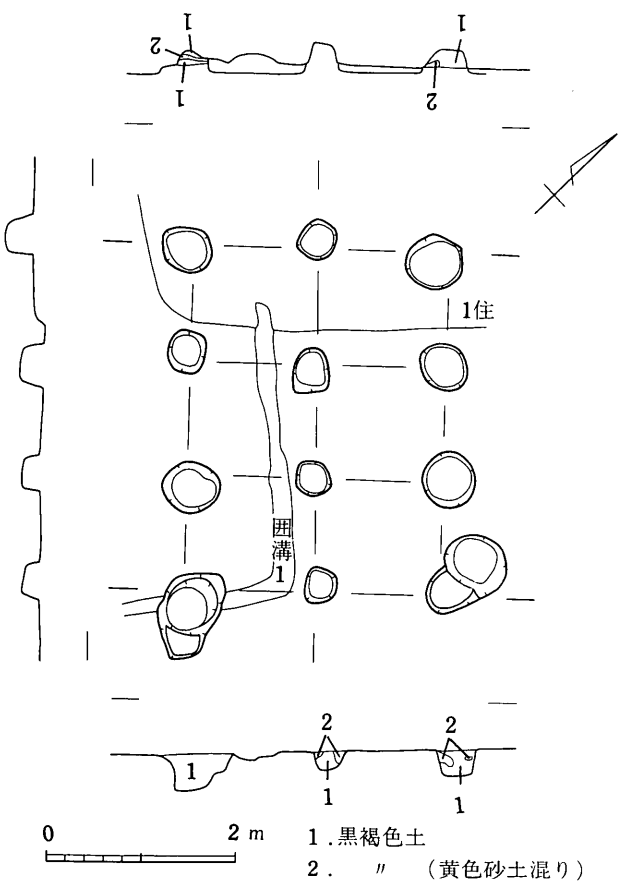
遺物　柱掘り方覆土中から、弥生時代中期土器、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・瓶子・坏・高台付坏・蓋、灰釉陶器蓋・瓶子など出土しているが、いずれも小破片である。土師器片で同一個



第92図　TAN・KUR　建物址１・８、溝址16

体と思われるものが、別々の柱穴から出ている。

時期は切り合い関係から平安時代と思われる。　（佐々木嘉和）



第93図　TAN・KUR　建物址2

建物址2　（第93図）

遺構　ＴＡＮＢＳ49を中心に検出された。1号住居址・囲溝址1を切り、建物址3に切られる。3×2間で総柱の掘立柱建物址で、桁行方向はN44°Eを示す。桁行3.6m・梁行2.72mを測り、柱間はそれぞれ1.2m・1.36mである。柱掘り方は円形を呈し、径は65～34cm・深さ40～20cmを測り、四隅の穴が深く、側柱・束柱が浅い。

出土遺物がほとんどなく、遺物による時期決定はできず、他遺構との切り合い関係からも弥生時代後期以降に位置づけられるのみである。　（小林正春）

建物址3　（第94図）

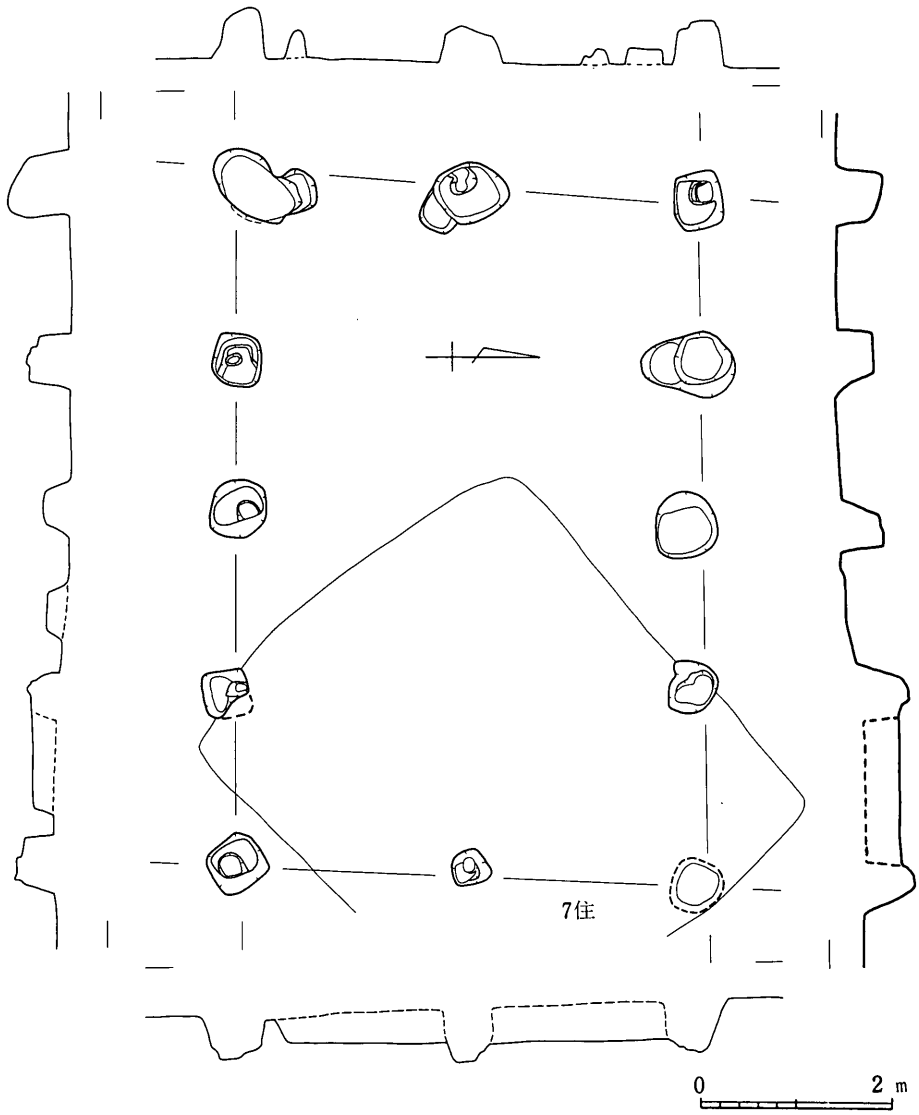
遺構　ＴＡＮＢＵ51を中心に検出した。7号住居址・建物址2・祭祀址1を切る。4×2間の掘立柱建物址で柱間寸法は桁行1.8m・梁行2.5m、全体規模7.28m×5.02mを測る。桁行方向はN89.5°Eを示し、ほぼ東西方向である。柱穴平面形は不整方形で、深さは検出面からほぼ50cmである。柱穴の底部に、青灰色粘土が楕円形に認められるものがあり、柱痕跡を示すと考えられる。

遺物　他遺構と重複するため出土遺物は比較的多い。弥生時代後期土器、土師器甕・坏、須恵器

坏・蓋・円面硯などの破片が出土している。円面硯は、西側中央の柱穴から出ており、透しがある。

出土遺物から奈良時代から平安時代初頭の時期が考えられる。

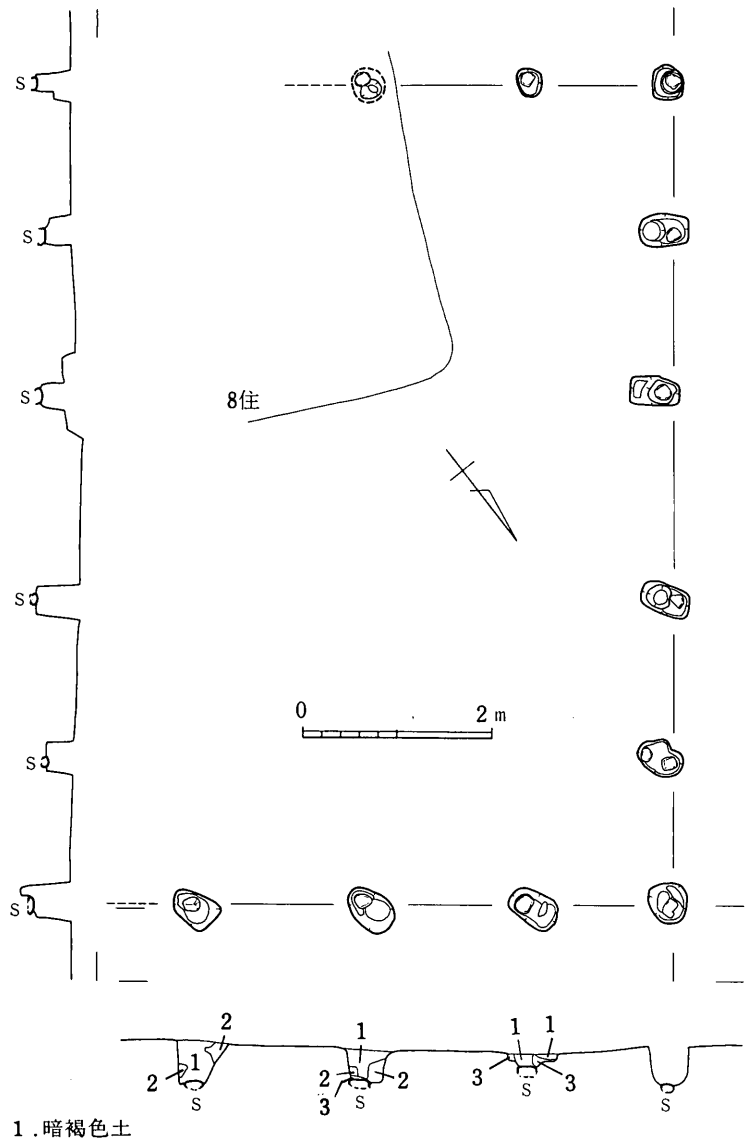
（佐々木嘉和）



第94図　TAN・KUR　建物址 3

建物址 4　（第95図）

遺構　ＴＡＮＢＬ50を中心に検出した。６号・８号・12号・13号・20号住居址、建物址７、溝址４・６・７を切っている。東側柱穴は検出に努めたが確認できなかった。確認規模8.55×5.10mの掘立柱建物址で、柱間５×３を確認した。柱間寸法は異なっており、桁行５間の中央2.25m・次の両側1.65m・両端部1.54mで、確認した梁行３間は、端1.54m・次の２間1.75・1.80mを測る。桁行方向はＮ37.5°Ｅを示すが、梁行とした３間の方が長くなる可能性もある。柱掘り方は、いずれも２回の重複が認められ、平面は不整長方形で小さいが、深さは検出面から50～30cm



1．暗褐色土
2．黄色粘質土(褐色混り)
3．黄褐色土

第95図　TAN・KUR　建物4

と比較的深い。確認したいずれの柱穴も底部に直径20cm前後の偏平な河原石を置き礎盤としており、周辺を打ち欠いたもの、割れているものがあった。礎盤石上面のレベルは一定でない。柱掘り方底部はつき堅められている。柱掘り方及び底部の状況から同一位置での建て替えがあり、後のものが底部に礎盤を有する建物であろう。全体が把握できず、不明な点も多いが、柱間の状況からみて一般的な建物とは異なる性格が考えられる。

遺物　切り合いが多いので、出土量は比較的多い。弥生時代中・後期土器、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・坏・蓋、灰釉陶器埦・瓶子、鉄滓などの破片である。

出土遺物から平安時代と思われる。

（佐々木嘉和）

建物址5　（第10図）

遺構　ＴＡＮＢＴ47の９号住居址西側壁上に３本の柱掘り方を確認し、規模等は不明であるが、柱掘立柱建物址とした。掘り方列の方向はＮ40°Ｗを示し、３本間の長さは3.9m、柱間は1.95mを測る。

柱掘り方内からの出土遺物はなく、時期不明である。　（小林正春）

建物址6 （第103図）

遺構 ＴＡＮＢＷ46を中心に、9号住居址を切って、小規模な柱掘り方とみられる穴がＬ字形に並び建物址とした。西方は用地外となり全体は不明であるが、柱の大きさから見て小規模な掘立柱建物址である。調査範囲内で3.8×1.72mの２×１間を確認し、仮の桁行1.94m・梁行1.72mを測り、桁行方向Ｎ75°Ｗを示す。柱掘り方は径20cm前後の円ないし不整円形で、深さ7～15cmを測る。

時代を決める遺物出土がなく、住居址との切り合い関係から弥生時代中期より新しいことを把握したのみである。

（小林正春）

建物址7 （第96図）

遺構 ＴＡＮＢＨ～ＢＭの45～54で用地内を斜めに横切り桁行方向の同一建物址3棟を検出し、建物址７－１・７－２・７－３とし、いずれも側柱のみの建物址である。４号・８号・12号・17号住居址、溝址４・６を切り、10号住居址、建物址４に切られる。

７－１は全体規模が5.20×3.86mを測り、柱間３×３で３棟のうち南端に位置する。柱間寸法は桁行1.73m・梁行1.28mを測り、桁行方向はＮ10°Ｅを示す。

７－２は全体規模が4.58×3.90mを測り、柱間３×３で３棟のうち中央に位置する。柱間寸法は桁行1.52m・梁行1.30mを測り、７－1よりは若干小規模であるが方向は一致している。

７－３は全体規模が3.88×3.74mを測り、柱間２×３で３棟のうち北端に位置する。柱間寸法は桁行1.94m・梁行1.24mと小規模であり、方向もＮ12.5°Ｅと若干ズレがある。

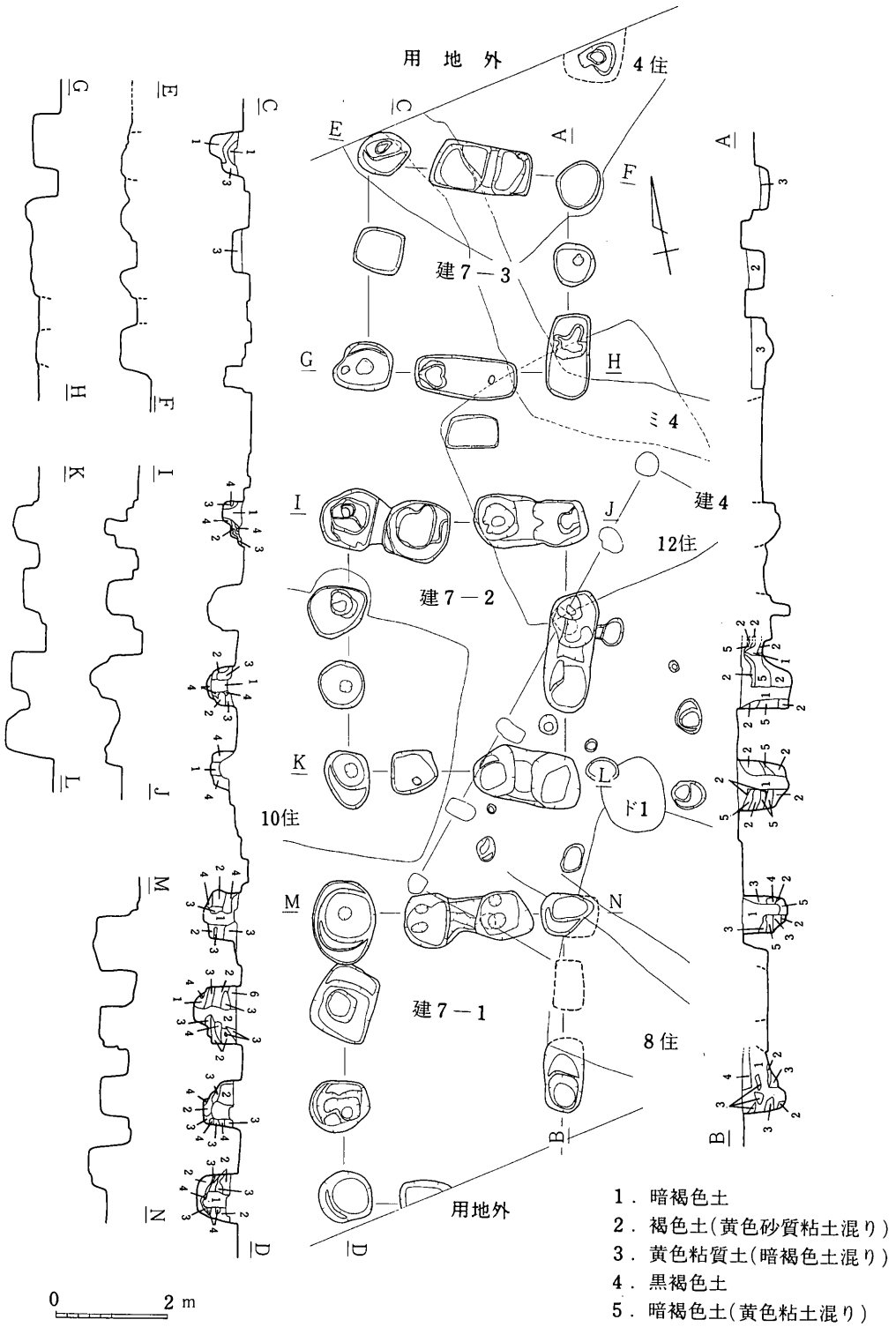
柱掘り方はほとんどが不整形であるが、一部方形のものもあり、ほとんどが径１m前後で、何箇所かは２本を一緒に掘ったものもある。深さは検出面から最高90cmあり、底部レベルの最大差は50cmと個々による差もかなりある。また、いくつかの柱掘り方からは柱痕の確認されたものもあるが、柱抜き取り痕は確認できなかった。

それぞれの建物址間は、1.2mの間隔を置いており、７－３北側にも同間隔で１本の柱掘り方があり、更に建物址の延長する可能性が強い。南側については、全く不明であるが３棟以上の建物が直列配置され、柱掘り方の規模も大きく、規格性の高い一連の建物群の存在が考えられる。

遺物 柱穴数も多く、他遺構との重複も各所にみられるため出土量・器種も多い。弥生時代後期土器片、土師器、須恵器片があるが、時期決定材料はない。

遺構の切り合い関係から奈良時代の建物址と考えられるが、詳細な時期は不明である。

（小林正春）



第96図　TAN・KUR　建物址7

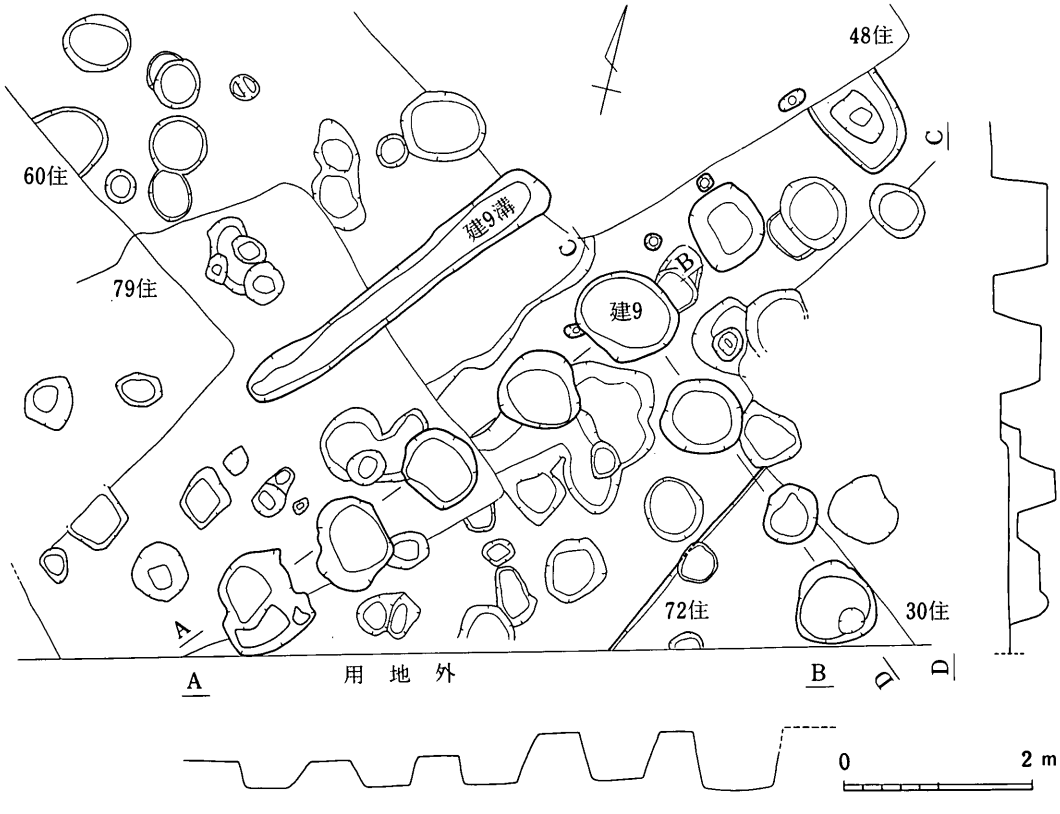
建物址８（第92図）

遺構　ＴＡＮＢＩ47を中心に検出された。建物址１に切られる。３×３間で側柱だけの掘立柱建物址である。桁行4.48m・梁行3.62mを測り、桁行方向はＮ36.8°Ｅを示す。柱間寸法は桁行1.5m・梁行約1.2mである。柱穴平面形はそろっていないがほぼ隅丸方形を呈し、径78～41cmで深さは40～30cm前後である。

遺物　出土量はわずかで、時期の決め手になるものはない。東隅の柱穴が建物址１に切られており、本建物址は建物址１より古い事は確実で、平安時代以前である。（佐々木嘉和）

建物址９（第97図）

遺構　ＫＵＲＢＪ53に79号住居址と重複して３本の柱掘り方が検出され、それを目やすとして30号住居址との間に計８本の柱掘り方が確認でき、掘立柱建物址とした。79号住居址を切っていたが、72号住居址との関係は不明である。南側が用地外のため、全体の規模は把握できないが、４×３間の建物址と推測される。推定規模は、桁行5.1m・梁行3.8mで、桁行方向はＮ40°Ｅを示



第97図　TAN・KUR　72号住居址、建物址９、Pit群

す。柱間は桁行1.27m・梁行1.32mを測る。柱掘り方径は隅のものが大きく1.08×0.9m、他は0.9～0.54mで、円ないし楕円形を呈する。柱掘り方平面及び断面の観察により柱痕の確認に努めたが、いずれもの穴からも検出することはできなかった。北西側には掘り方から1.7m離れ、柱穴方向と平行に幅20cm・深さ40～26cm・長さ3.8mの溝があり、本建物址の雨落ちの溝と考えられる。

時期を決定づける遺物の出土はないが、遺構の状態から奈良時代と考えられる。（山下誠一）

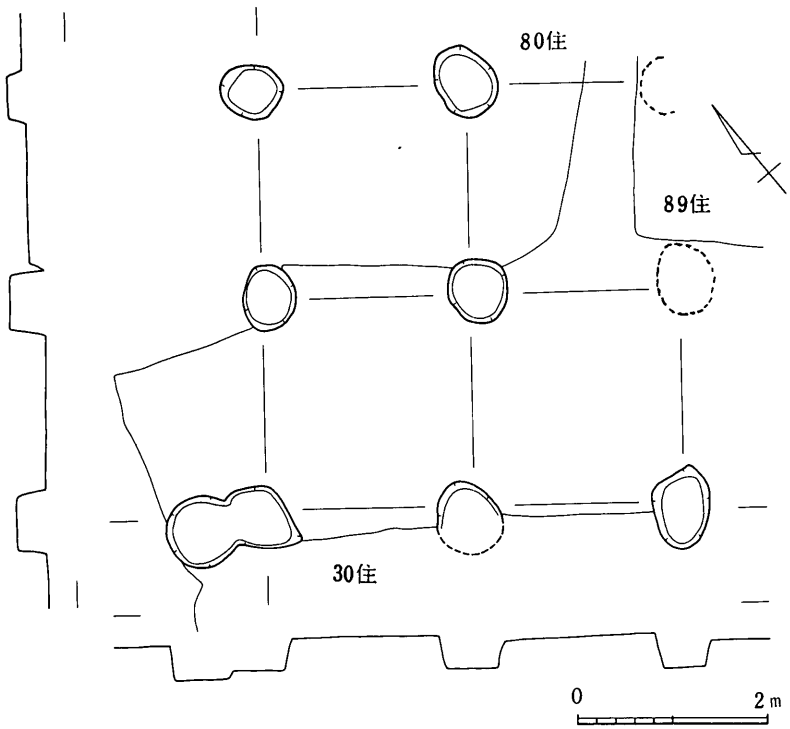
建物址10（第98図）

遺構　KURBQ50を中心に検出した。30号・80号住居址を切っている。柱間2×2の総柱建物址で、4.42×4.42mの正方形を呈する。桁行・梁行共に2.2mを測り、桁行方向は確認できない。柱穴掘り方平面は不整形で、ほぼそろっている。検出面から底部までの深さは様々であるが、底部レベル差は5cm前後でほぼ水平である。

遺物　出土量はわずかで、土師器甕・坏、須恵器甕・坏、石鏃などがある。

出土遺物による時期判断はできないが、切り合い関係から古墳時代以降に属する。

（佐々木嘉和）



第98図　TAN・KUR　建物址10

建物址11（第99図）

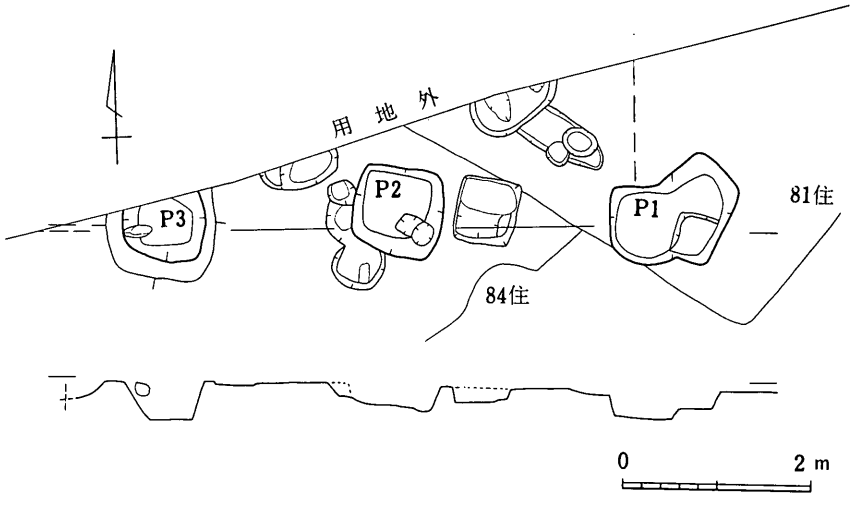
遺構　KURBU46を中心に東西に3本の柱掘り方を検出し、P1は81号・84号住居址を切っている。南側に関連する柱掘り方の有無確認に努めたが、その痕跡はなく、北側の用地外へ延びている掘立柱建物址と考えられる。調査できたのは3本の柱掘り方のみで、柱間2.5mを測る。3本

の柱列方向はほぼ東西を示す。柱掘り方は95～82cm前後のほぼ方形である。検出面からの深さは26～38cmと浅いが、地形的に上部が削平された可能性の強い地区であり、底部に近い部分の壁が残存しているものと考えられる。底部はいずれも平坦であるが、P2の南東隅には7～3cm凹む箇所が認められ、柱の圧痕の可能性があり、プラン検出面で確認した柱痕位置と一致する。P1・P2にも柱痕が認められ、炭または焼土が混入していた。柱痕は直径22cmを測り、P3は円形、P1・P2は方形の痕跡を観察したが、掘り方底部付近のわずかな埋土によるため、柱形状を判断する確証とは成しえない。

遺物　P1から臼玉が出土したが84号住居址に伴うものと考えられる。他に遺物は出土しなかった。

出土遺物から時期は確定できないが、住居址との切り合い関係から古墳時代後期以降である。

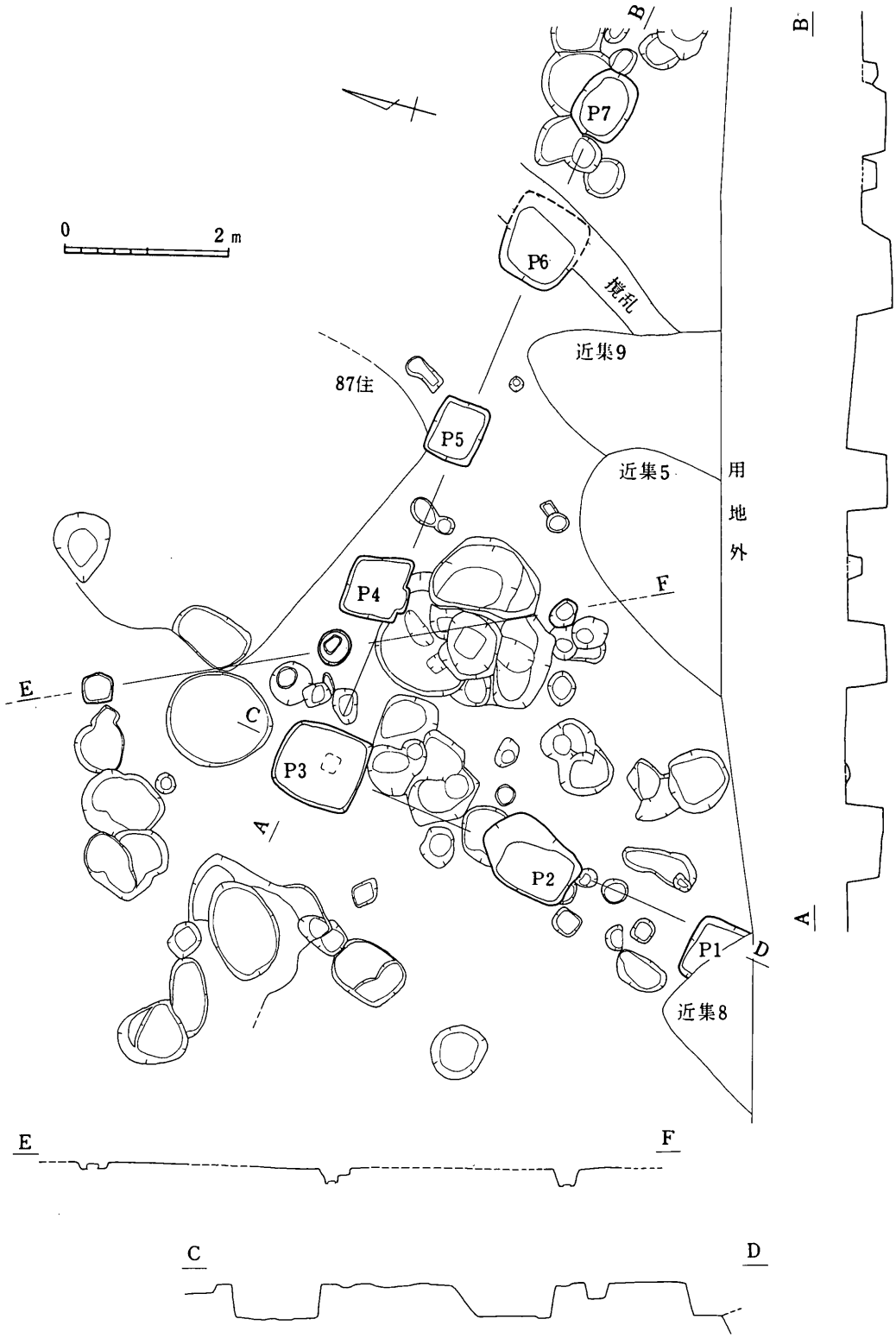
（佐合英治）



第99図　TAN・KUR　建物址11

建物址12（第100図）

遺構　KURBW51を角に西と南へ検出された。87号住居址と接するが新旧は不明である。調査できたのは東西4間・南北2間で、8.62×5.7mを測り、柱間はそれぞれ2.24m・2.73mである。桁行方向は不明であるが、東西方向軸はN82°Wを示す。南側が用地外のため、全体の把握ができないが、P7の東側に本址に関連する柱掘り方は検出できなかった。掘立柱建物址で、掘り方は方形ないし長方形で7個確認した。最大径を持つ柱掘り方はP3で1.08×1m、最小はP5で0.75×0.62mである。深さは個々に差があり、49～27cmを測り、柱掘り方壁はほぼ垂直で底部は平坦である。このうちP7のみ平面が楕円形で、P6との間隔も狭く、本建物址の掘り方でない可能性もある。柱痕をP3・P4で確認した。P3は覆土上層に黄色土があり、この面に直径20cmの四角な黒色土の部分を認めた。P4は柱掘り方の南側の一辺に10cm程の張り出し部分があり、当初柱抜き取りのための穴と把えたが、左右の掘り方の関係からこの位置に柱が立っていたと考えられる。想定される柱の直径は25cm前後である。



第100図　TAN・KUR　建物址12、柵址1、Pit群

遺物　土器類はそれぞれの柱掘り方より磨滅した土師器細片がわずかずつ出土した。他に、Ｐ３覆土上層から鉄滓の細片、Ｐ２の底部から鋤先が出土した。

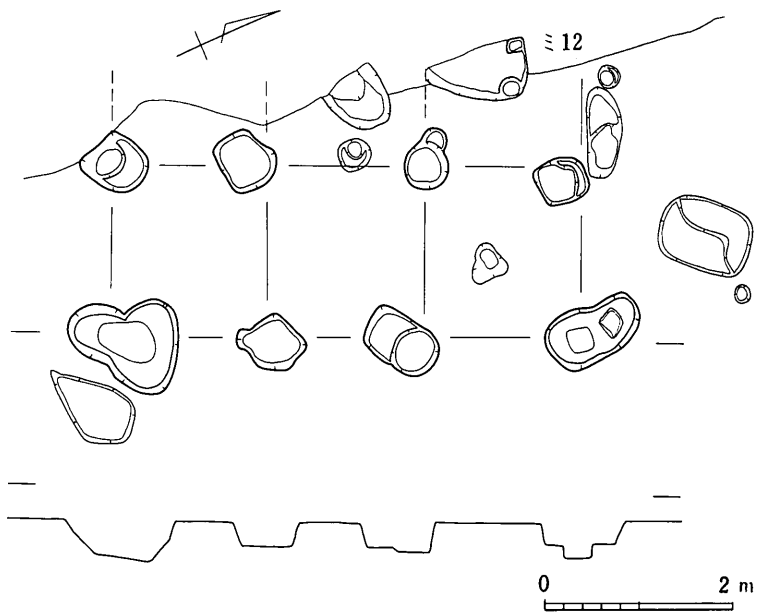
出土遺物のみで時期を判断することは困難であるが、周辺の穴との切り合い関係等総合的にみると、奈良時代を中心とする時期が考えられる。　（佐合英治）

建物址13　（第101図）

遺構　ＴＡＮＢＦ52を中心に検出された。19号住居址を切り、溝址12と重複する。溝址12との新旧関係不明で、掘り方そのものも把握できず、全体形等は不明で（１）×３間を確認し、総柱の掘立柱建物址と考えられ、桁行方向はＮ22.5°Ｅを示す。桁行4.94ｍを測り、柱間は桁行1.68ｍ・梁行1.8ｍである。掘り方は他の穴との重複があり、不整形で規模も明確に把握できないが、径104～46cm・深さ35cm前後を測る。　柱掘り方内の土層による柱痕の観察はできないが、底面に柱位置を示すような凹部の認められるものもある。柱掘り方が不整形のものが多く、柱が抜き取られている可能性もあるが、土層等による観察はできなかった。

遺物の出土がほとんどなく、時期決定はできず、遺構との切り合い関係でも弥生時代中期以降と把えられるのみである。

（小林正春）



第101図　TAN・KUR　建物址13

工房址１　（第41図）

遺構　ＫＵＲＢＨ48を中心に検出した。住居址との重複が著しく確認部分はわずかである。47号・74号住居址を切っている。検出時にフイゴの羽口が出土し、付近に焼土と落ち込みがあり、工房址とした。検出した竪穴状の掘り込みも47号住居址覆土にかかり、全体規模は把握できなかった。焼土は散在する程度で特に集中した箇所はない。

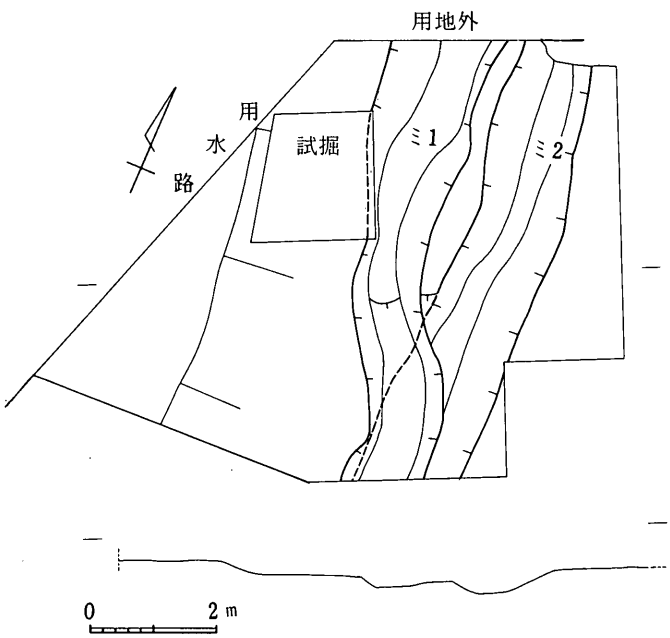
遺物　フイゴ羽口は大形である。土師器甕・坏、須恵器甕・坏、鉄製品、鉄滓などが出ているが、ほとんど細片である。

切り合い関係から古墳時代よりは新しいが、時期の決定はできない。　（佐々木嘉和）

3）溝址・溝状遺構・囲構址

溝址１・２　（第102図）

遺構　ＴＡＮＡＫ～ＡＭに検出した溝址である。ＴＡＮの南西端に試掘グリットをあけ、黄色砂礫土（地山）上面に確認した。自然地形が南東に向かって傾斜しており、ＢＣ～ＢＩの溝址12までの間が大きく凹み自然の大きな流路が考えられる。溝址１・２は凹みの南西端に位置し、確認部分は共に７ｍ・幅1.5ｍ・深さ50～30㎝である。方向は溝址１がほぼ南北で、溝址２がＮ12°Ｅを示す。自然の水路と思われる。



第102図　TAN・KUR　溝址１・２

遺物　弥生時代土器・石器、土師器、須恵器、灰釉陶器などの破片が出ている。

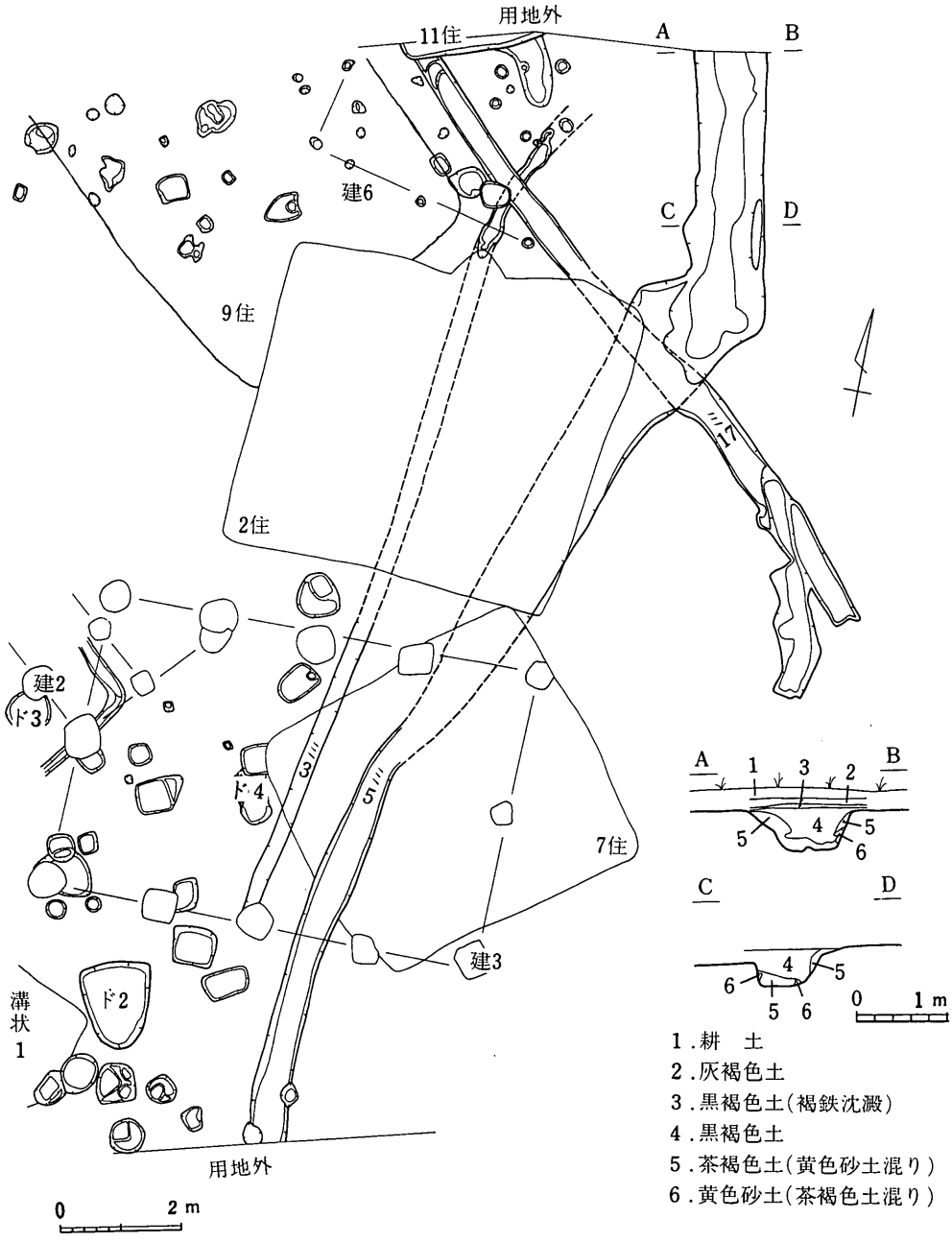
出土遺物から平安時代以後と思われる。　（佐々木嘉和）

溝址３　（第103図）

遺構　ＴＡＮＢＪ～ＢＷで用地を斜めに横断する溝址である。７号住居址を切り、２号住居址に切られる。確認した規模は中間で切られるが長さ14ｍ・幅約30㎝・深さ10㎝前後で、小規模の溝である。方向はＮ17°Ｅを示す。自然の溝址と思われ、地形に沿って南へ傾斜している。

遺物　弥生時代土器・石器、土師器、須恵器など出土しているがいづれも小破片である。

切り合い関係から古墳時代後期から奈良時代の溝と思われる。　（佐合英治）



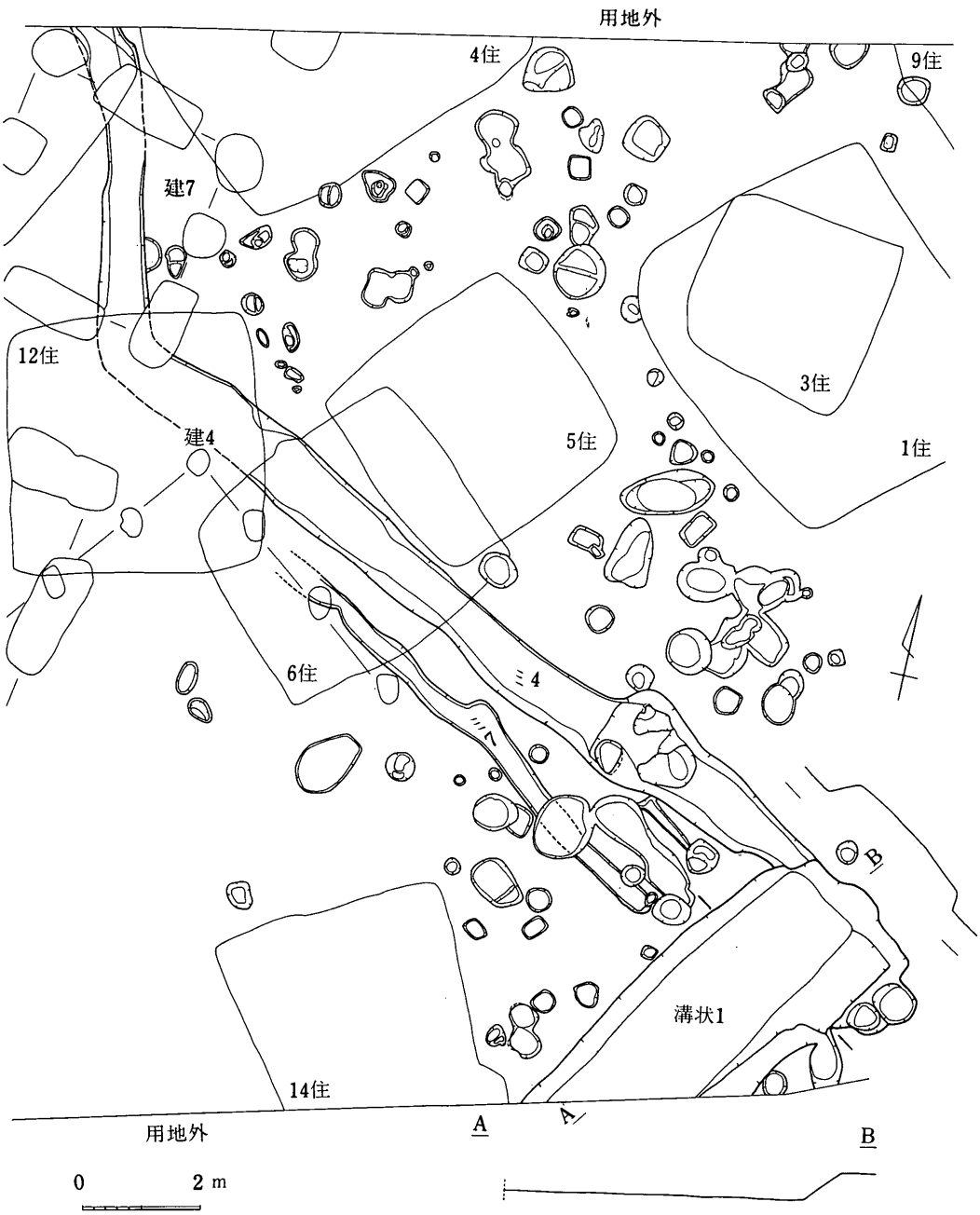
第103図　TAN・KUR　11号住居址、建物址６、溝址３・５・17、土坑２

溝址４　（第104図）

遺構　ＴＡＮＢＬ～ＢＱで用地内を東西に横断する溝址である。12号住居址を切り、６号住居址、建物址４・７に切られる。確認した規模は長さ17m・幅1.2m～0.7m・深さ検出面から50～30

cmである。方向はN63°Wを示す。東端は溝状遺構1と重複する。壁は比較的急に掘り込まれている。覆土は褐色土が主体で、砂をわずか確認した。

遺物　弥生時代中・後期土器・石器、土師器、須恵器、灰釉陶器などの破片がある。弥生時代後期の土器が多いのは住居址を切っているためであろう。灰釉陶器片は新しい穴に切られその混入品



第104図　TAN・KUR　溝4・7、溝状遺構1

と思われる。

切り合い関係から弥生時代後期より新しく、古墳時代終末の6号住居址よりは古い。

（佐々木嘉和）

溝址5　（第103図）

遺構　ＴＡＮＢＴ～ＢＹで用地内を、ほぼ南北に横断する溝址である。7号住居址を切り、2号住居址、溝址17と重複する。確認した規模は長さ20m・幅1.5m～0.5m・深さ40～20cmである。主たる方向はN16°Eを示す。覆土中に砂が混入しており、用水路と思われる。

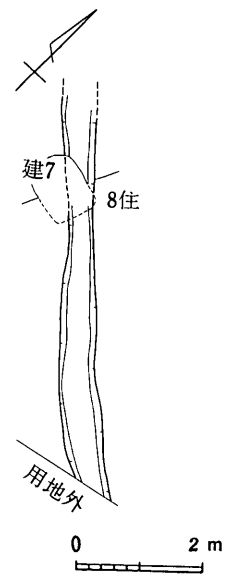
遺物　出土量は少ない。弥生時代土器片、土師器甕、須恵器坏・蓋である。遺構の切り合い関係・遺物から古墳時代後期の遺構と思われる。

（佐々木嘉和）

溝址6　（第105図）

遺構　ＴＡＮＢＪ 52 ～ ＢＬ54にかけて、長さ7.9ｍ程検出された。検出面は他の遺構検出面の黄褐色土より上の暗褐色土下部である。8号・13号住居址、建物址7を切っている。ＢＪ52以西は検出できず。ＢＬ54以東は用地外のため調査できなかった。幅60～40cm・深さ20cm前後を測り、断面形はＵ字型を呈する。覆土は黒色土の一層である。水の流れた痕跡はみられず、遺物の出土もほとんどなく、溝の性格は把握できなかった。時期は建物址7を切っていることから奈良時代より新しいものであるが、確定した時期は不明である。

（山下誠一）



第105図　TAN・KUR　溝址6

溝址7　（第104図）

遺構　ＴＡＮＢＮ50～ＢＱ52に検出した。6号住居址　・建物卦4・穴に切られる。確認した規模は長さ約8ｍ・幅50～20cm・深さ10cm以下である。方向はＮ58°Ｗを示す。

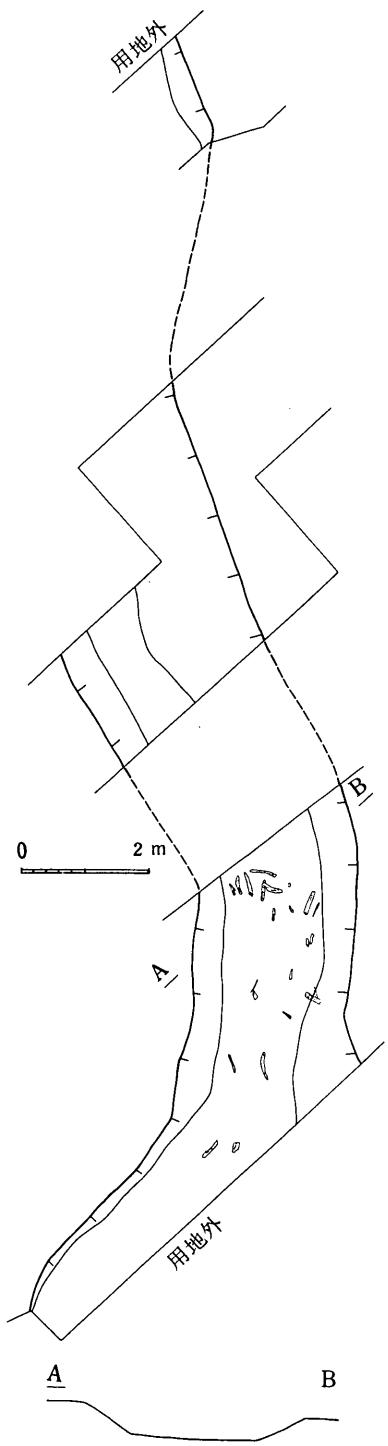
遺物　ごくわずか出ている。弥生時代中期土器・石器、土師器、須恵器などの小破片で図化可能なものはない。

時期は古墳時代と推定したが、決定はできない。

（佐々木嘉和）

溝址8　（第106図）

遺構　ＴＡＮＡＮ54 ～ ＡＲ46に検出された。確認部の長さは約19m、幅は3ｍ前後を測り、両



第106図　TAN・KUR　溝址8

端は更に用地外へと延長する。全体に大きく蛇行するが、ほぼN17°Eを示す。TANの西端部で自然地形が大きく凹むそのほぼ中央付近に位置し、存在時期において相当量の水量のあった溝址である。北半部においては比較的傾斜があり、かなりの水流痕を認め砂・砂利の堆積が目立つ。南半は平坦に近い底面を成し、泥と小砂のみの堆積で湛水状況を示す。最下層において堰と思われる木杭列があり、灌概施設のあったことが判断される。本来地形上の最深部を流れていた自然流路と考えられるが、それを一定の幅を保つよう、また、一部には下流耕地に利用すべき堰を設け、かなりしっかりと管理されていた溝といえる。

遺物　堰の木杭のみが本址に直接関連する遺物である。木杭は径10cm以下の表皮を残した丸太材の先端を尖らして打ち込んだものである。木杭以外にも流木があるが特に加工痕の認められるものはない。弥生時代中期土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、白磁片などが少量出土しているが、それらから本址の時期を断定できない。最終段階の遺物及び土層状況から、本址の埋没時期は中世以降と推測される。

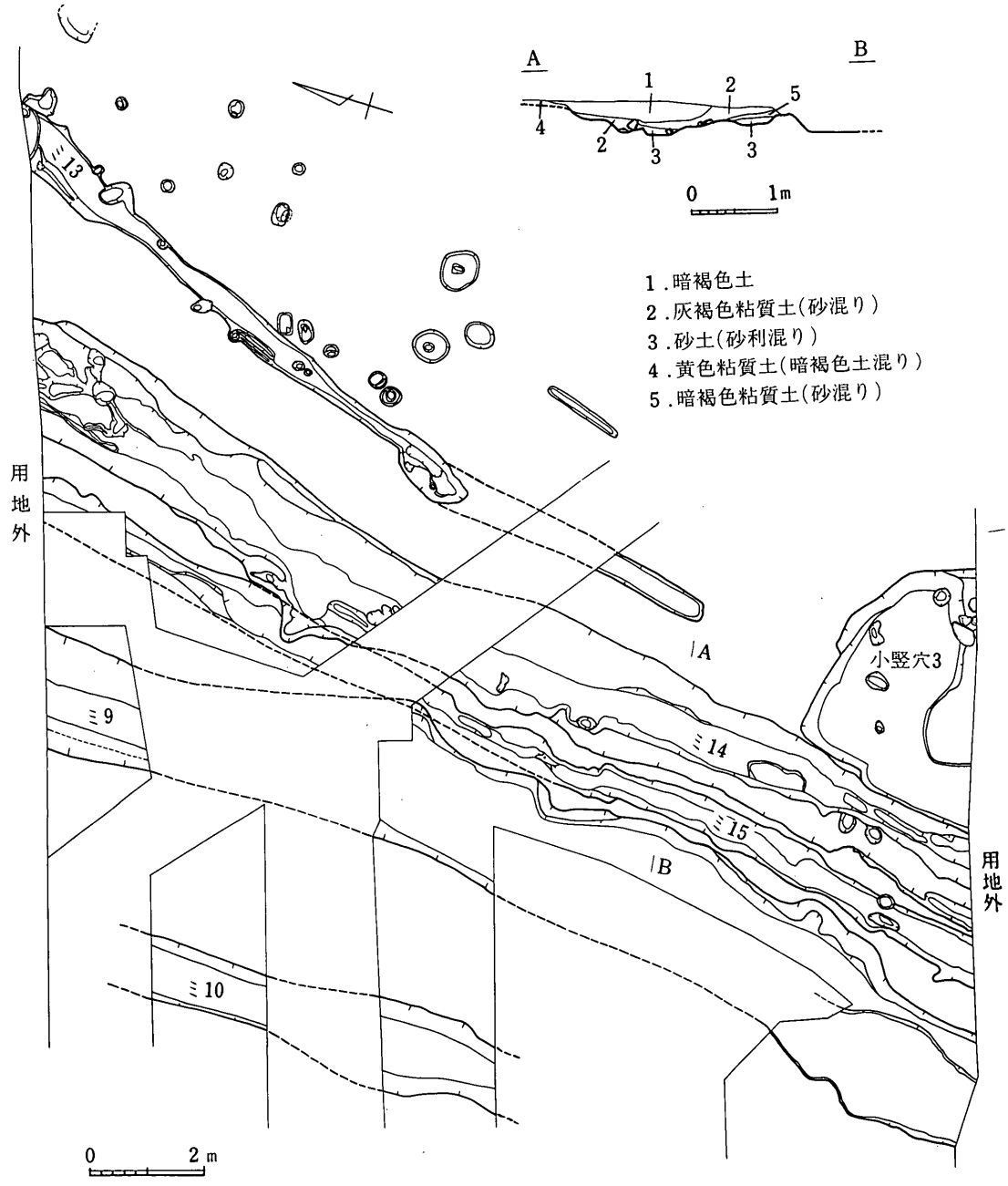
（小林正春）

溝址9　（第107図）

遺構　TANAS～AVで用地内をほぼ南北に横断する。トレンチ調査と全面発掘の境目で、用地内のほぼ⅔を調査をした。長さ約20m・幅2～1m・深さ検出面からほぼ30～20cmである。方向はN5°Wを測る。南西方向へ傾斜する自然地形を横切っており、人工的に掘られた溝址である。覆土中に石の混入があった。

遺物　覆土中から少量出土している。弥生時代土器・石器、土師器甕・坏・須恵器甕・坏、灰釉陶器埦などの細片である。

遺物から平安時代以後の溝址と思われるが、確定はできない。　（佐々木嘉和）



第107図　TAN・KUR　溝址9・10・13・14・15

溝址10 （第107図）

遺構 ＴＡＮＡＳ･ＡＴに検出した。トレンチ調査の部分であり、幅２ｍのトレンチ２箇所にかかって調査した。幅1.5～１ｍで、深さは検出面から20～10cmである。青黄色粘土層を掘り込んであり、覆土には礫が混入していた。（佐々木嘉和）

溝址11 （付図１）

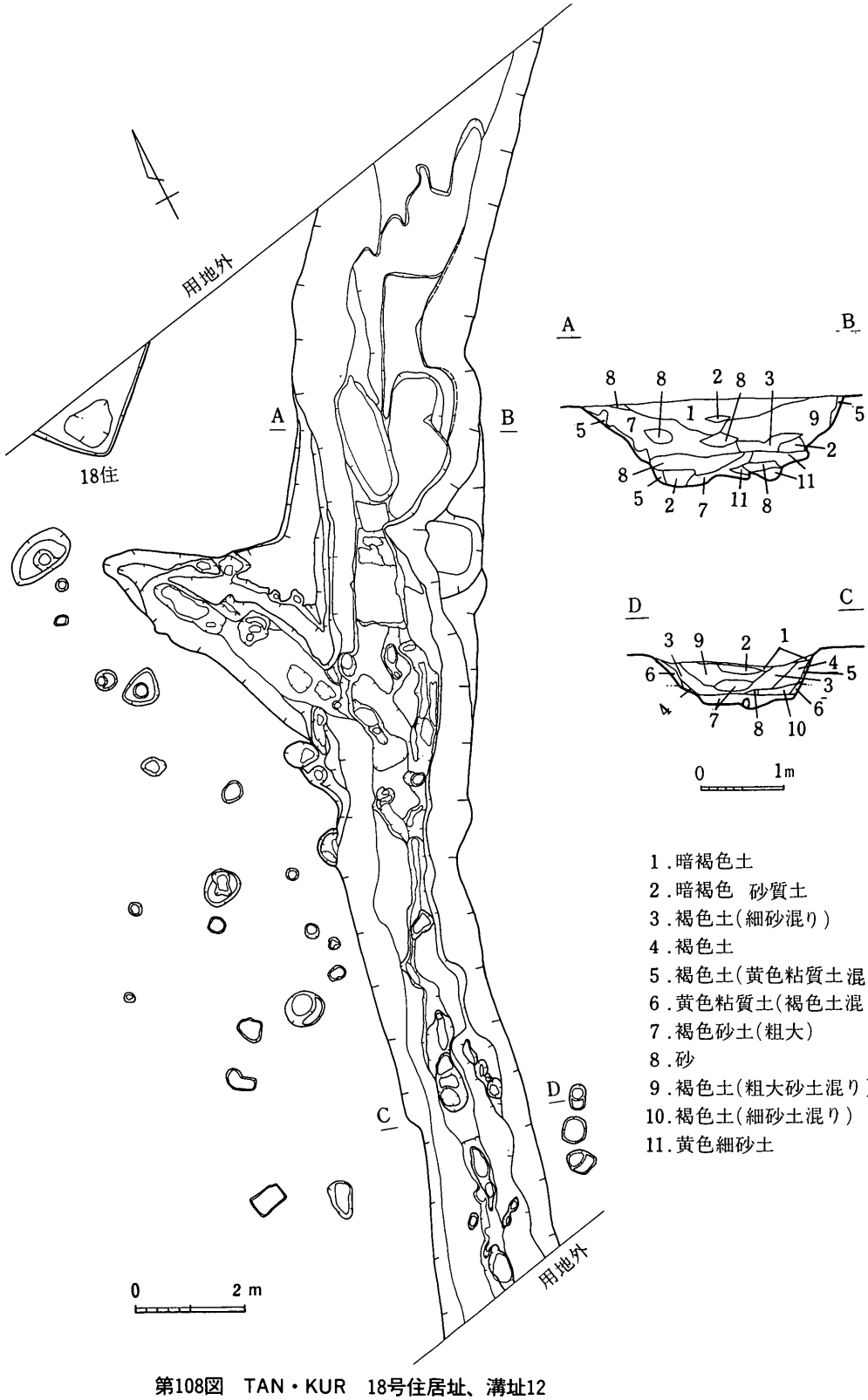
遺構 ＴＡＮ･ＫＵＲ用地内で最も西に位置する、自然地形の凹地を溝址11とした。凹地は台地を縦断しており、ＫＡＫとの境に近い。溝址１・２・８・９・10・13・14・15が溝址11内に位置する。溝址14・15は弥生時代、溝址１・２は平安時代、溝址８は中世、溝址９・10は確定できないが平安時代以後と推定される。本址は、全体地形を構成するもので溝址と把えるに若干の疑問はあるが、全体が溝的な意味を持つことも否定できず、溝址８が最も新しい時期を示すことより、本址、つまり大きな凹地部の埋没時期も中世以降である。現在、溝址11とは方向が異なるが用水路が通っており、関連性が推測できる。（小林正春）

溝址12 （第108図）

遺構 ＴＡＮＢＣ～ＢＪで用地内を南北に横断する溝址である。19号住居址を切り、建物址１・８、溝址16に切られる。確認した規模は長さ23m・幅3.5～２ｍ・深さ検出面から底部まで1.5～１ｍと大きな溝址であり、方向はほぼＮ 20°Ｅ を示す。底部は水流に削られて凹凸が著しく、覆土はどの層にも砂が混入していた。壁の掘り込みは急であり、断面は逆台形を呈する。調査範囲内ほぼ中央付近に西方からＹ字形に枝溝があったが、意図的に掘られたものではなく、雨水などによる自然流路の跡と考えられる。規模の大きさ・深さなどから単なる用水路ではなく、集落を区画する環溝的性格を持つものと思われる。

遺物 出土量は非常に多い。下部の砂層から、弥生時代後期の壺・甕片・石器が多く出土した。中層から古墳時代前期の甕と台付甕のほぼ完形品と鉄鏃片が１個出土した。相当長期間にわたって溝の機能を保っていたと思われる。弥生時代後期に掘削され、古墳時代前期に埋没した溝址であろう。

検出時に、溝址12の覆土最上部で同方向の幅の狭い石列を検出した。石の間に土師器・須恵器片が混入していたが、下部に掘り込み等の確認はできず、石列のみ把握した。遺物整理の際、石列中遺物に置カマド（へっつい）の破片が発見された。石列から北東へ10～５ｍ離れた、10号住居址中にも同一個体があり、平安時代の住居址である事からこの石列も平安時代の遺構と思われる。（佐々木嘉和）



第108図 TAN・KUR 18号住居址、溝址12

溝址13 （第107図）

遺構　ＴＡＮＡＸ～ＢＣ で用地内を南北に横断する溝址である。確認した規模は長さ14m・幅50～30㎝・深さ検出面から20～10㎝である。方向はほぼＮ30°Ｅを示す。小形の溝址であり、傾斜地に位置するため、掘り込みは整っていないが、人為的に造られたものと考えられる。

遺物　出土量は比較的多く、主体は弥生時代中・後期土器片である。他に、石器・土師器・須恵器などの破片がある。

遺物から平安時代以降の溝址と思われる。　（佐々木嘉和）

溝址14 （第107図）

遺構　ＴＡＮＡＵ～ＢＡ で用地内を南北に横断する溝址である。確認した規模は長さ20m・幅２～１m・深さ40～20㎝で、方向はＮ16°Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、水流のために段の付いた所がある。覆土に砂・礫が混じっており、検出面からはあまり深くないが、掘った当初は相当の水量を流していたと推測される。

遺物　弥生時代中・後期遺物がほとんどで、検出面から土師器・須恵器片が出土したが、覆土中にはなかった。弥生時代中期の土器片が多く、石器も多数入っており打製石斧・横刃型石器・敲打器・砥石などがあった。弥生時代後期の土器片も混じていることから、弥生時代中期から後期にかけて使われていたと思われる。　（佐々木嘉和）

溝址15 （第107図）

遺構　溝址14の西側に近接して、用地内を南北に横断する。確認した規模は長さ20m・幅70～50㎝・深さ20㎝以下で、浅い小形の溝址である。方向は溝址14と同じＮ16°Ｅを示す。

遺物　弥生時代中期土器片・石器など小さな溝址の割には多く出土している。石器は打製石斧・有肩扇状形石器である。土層図を見ると溝址14に切られており、遺物にもその傾向が見られ、溝址14より古く、弥生時代中期の溝址であろう。　（佐々木嘉和）

溝址16 （第92図）

遺構　溝址12の北端に接して建物址１・８と同時に検出された。建物址に一部切られており、溝址12を切っている。北西から南東に４m確認したが、北西側は用地外へ延びており深さ12cmを測る。南東側は除々に浅くなり、不明となる。確認した壁は、きわめて緩やかで底部との境を明確に把握できない。

遺物は少なく細片で時期を決定できるものはないが、切り合い関係から古墳時代前期後半から奈良時代の間に属すると考えられる。（佐合英治）

溝址17 （第103図）

遺構　11号住居址南西隅部分ＴＡＮＢＶ45からＢＹ50まで、北西から南東に検出した。南東側の端で２本に分れている。溝址３・５と交差し溝址３を切っているが、溝址５との新旧関係は確認できなかった。確認した規模は長さ11.6m・幅50～40cmを測る。深さは枝分れし南へやや向きを変えた箇所が20cmで、他の部分は10～７cmを測る。壁はほぼ垂直で、底部は北西から南東へ傾斜しており、高低差は28cmである。

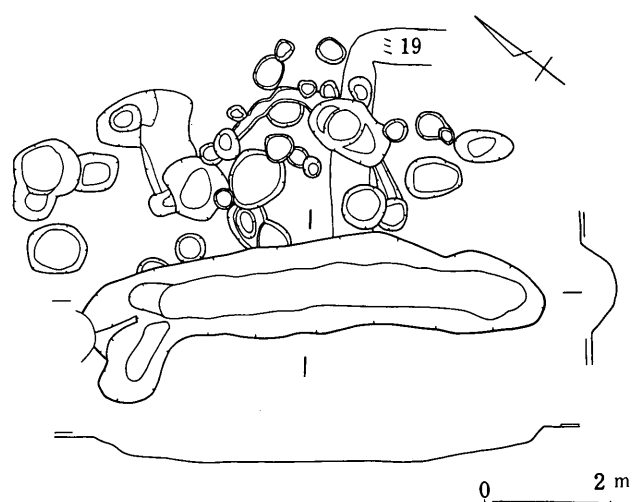
時期を決定できる遺物の出土はなく、性格等も不明である。（佐合英治）

溝址18 （第109図）

遺構　ＴＡＮ・ＫＵＲのほぼ中央で、用地内を横断する道路にかかっており、全体を確認できなかったが、道路を移動させた後の調査で完掘した。当初は単純な溝址と考えたが、全長7.2m・最大幅1.4mの溝状遺構である。壁はほぼ垂直であるが、北端部はほかの部分に比べ緩い傾斜面を成している。検出面よりの深さは50～37cmを測り、底部はゆるやかな弧を描く舟底状である。形態から周辺に関連施設の存在を考え注意したが、確認できなかった。

遺物　弥生時代土器甕の完形品が南東隅の底部に密着して出土した。他に、打製石斧・有肩扇状形石器がある。

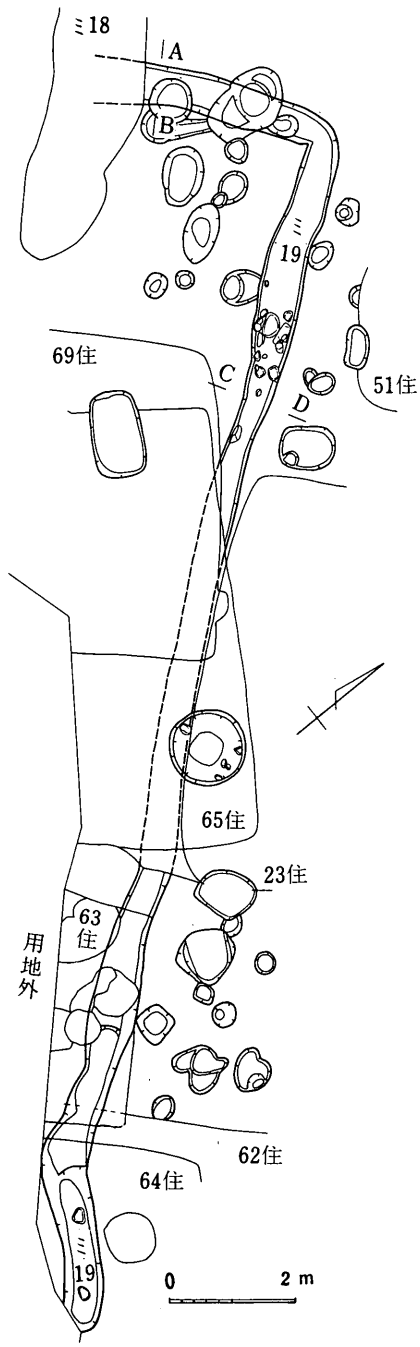
出土遺物から弥生時代後期恒川Ⅴ期に比定される。（佐合英治）



第109図　TAN・KUR　溝址18

溝址19（第110図）

遺構　52年度に65号住居址の南側を調査し、56年度調査でＫＵＲＡＳ50を中心に西側が検出された。整理段階で実測図面を検討し、同一の溝址と判断した。幅60～50cm・深さ20～15cmで、断面Ｕ字形を呈する。ＢＶ59からほぼ31.5°Ｗの方向へ約7.4m続き、65号住居址に切られる約５ｍは確認できず、さらに同一方向へ５ｍ程延びたＡＳ50でほぼ直角に曲がり、その先を約３ｍを確認した。それより南西側は確認できなかった。ＡＳ50付近では溝の中に40～10cmの石が入り、遺物の出土もあり、人為的投棄が考えられる。64号住居址との関係に若干疑問があるが、65号住居址に切られ、62号・63号・64号住居址を切っている。

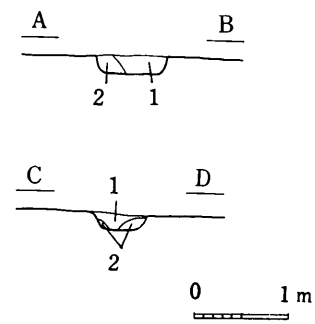


遺物　出土量は少なく、土師器甕、須恵器横瓶等が出土した。

遺物から奈良時代に位置づけられる。

直角に曲がる形態などから、自然の溝・単純な水路とは考えられず、何らかの範囲を画する施設と考えられる。

（山下誠一）



1．黒土
2．黒土(黄色土混り)

第110図　TAN・KUR　溝址19

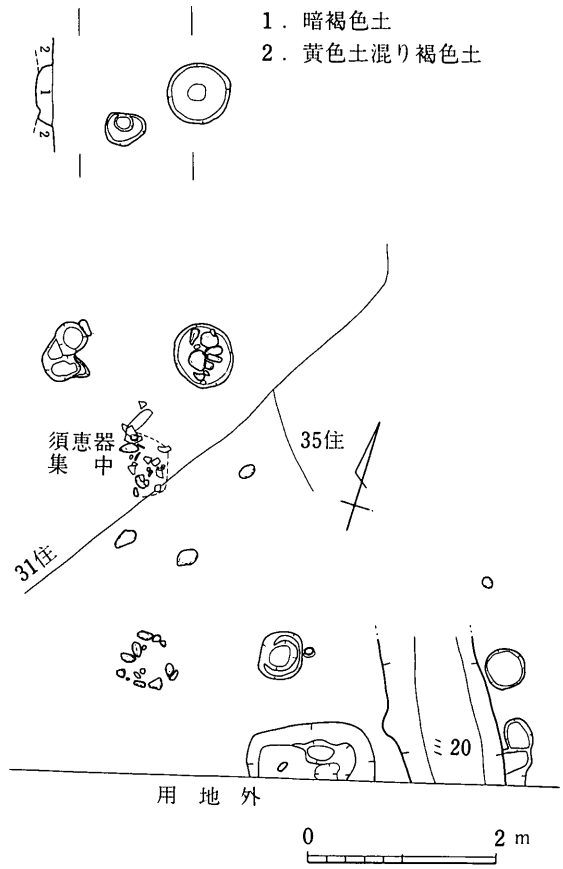
溝址20 （第111図）

遺構　ＫＵＲＡＥ53に検出した溝址である。道路址１に切られ、35号住居址と重複する。確認した規模は長さ1.5m・幅約１ｍ・深さ検出面から40cmで、長軸方向はＮ22°Ｗを示す。35号住居址との切り合い関係は確認できず、用地外に延びていると思われる。

遺物　出土量はわずかで、土師器甕・坏・高坏・須恵器甕・坏の破片である。

遺物から古墳後期の溝址と思われる。

（佐々木嘉和）



第111図　TAN・KUR　溝址20、Pit、礫

溝址21 （第86図）

遺構　ＫＵＲＡＮ46を中心に検出した。96号住居址を切り、穴に切られる。長さ約４ｍを確認したが、北東と西に延びる可能性がある。幅は30cm前後で、深さは10cm以下で浅い。長軸方向はＮ29.5°Ｅを示す。96号住居址の炉址を切っているが、本溝址の掘り方が浅いため、底部に焼土・土器片が残存していた。42号・105号住居址と長軸方向がほぼそろっており、どちらかの付属施設の可能性もある。遺物はごく少量出土したが、時期の決め手にはならない。

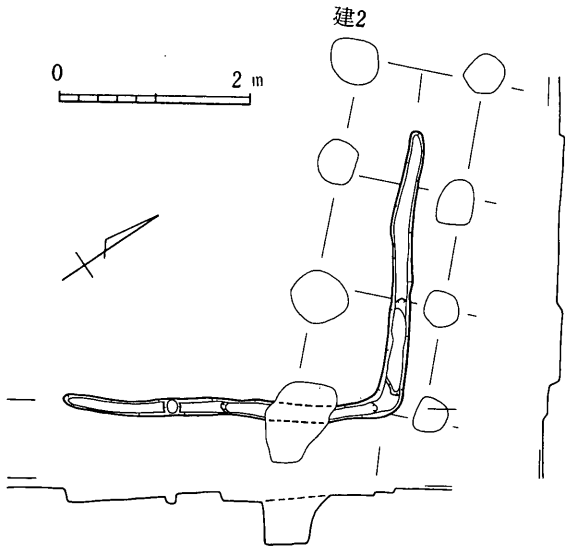
切り合い関係から弥生時代中期以降の遺構であろう。　（佐々木嘉和）

溝状遺構１　（第104図）

遺構　ＴＡＮＢＰ53～ＢＲ54に検出され、南側は用地外へ延びている遺構である。溝址４に北隅が一部切られている。確認した南北の長さは６ｍ、東西は３ｍで長方形を成すと考えられる。壁はほぼ垂直で、壁高は検出面から45cm程である。底部は北東隅の壁下の張り出た所がきわめて緩やかな傾斜を持っているが、全体としては平坦である。焼土を北壁の１ｍ内側に底部から20cm浮いた

状態で40cm程の範囲に認めたが、本遺構との関連は確認できなかった。

遺物　覆土上層に須恵器蓋・甕・蓋坏・坏などがある。下層の遺物から弥生時代後期恒川Ⅴ期に位置づけられる。　（佐合英治）



第112図　TAN・KUR　囲溝址1

囲溝址1　（第112図）

遺構　ＴＡＮＢＳ50付近に検出した遺構である。１号住居址・建物址２と重複する。幅20cm・深さ20～10cmの小溝をＬ字形に、北東の長さ３ｍ・東南の長さ3.5mを確認した。内側に特別な遺構は検出できず、西側が１号住居址と重複するため未確認であるが、囲溝址２の状況から、方形もしくはコの字形に小溝が存在した可能性もある。性格等は不明である。

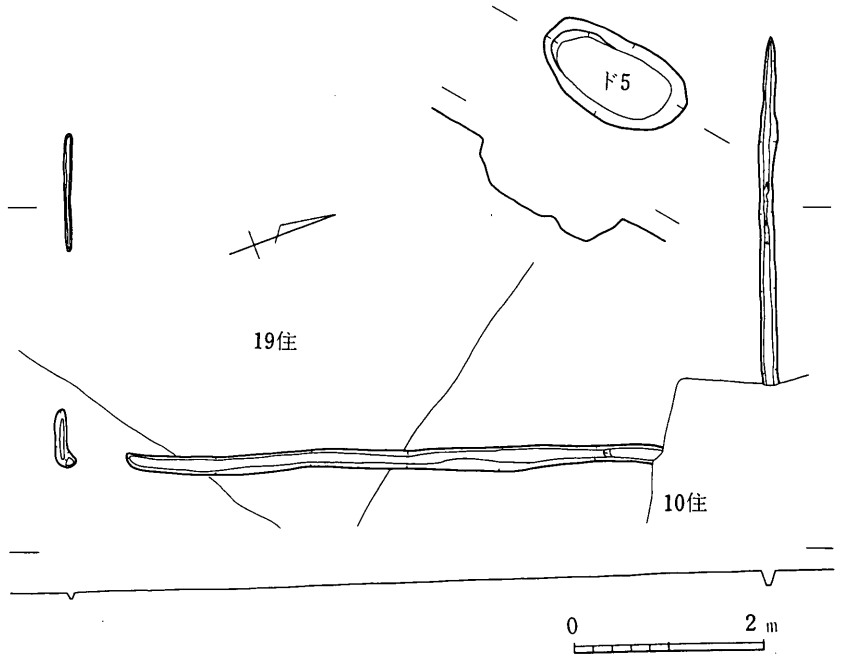
遺物　土師器片・石器がわずか出土しているのみで、時期の決定はできない。

（佐々木嘉和）

囲溝址2　（第113図）

遺構　ＴＡＮＢＧ51付近に検出した遺構である。19号住居址を切り10号住居址に切られる。確認した規模は、北溝で長さ3.6m・東溝約６ｍ・南溝1.8mで、幅30cm前後、深さは検出面から20～10cmを測る。南溝は一旦切れる部分があり入口的な性格も考えられる。また、西側にも同様に溝の存在が考えられるが、溝址12と重複するため不明である。内側に柱穴等の施設は検出できず、性格は不明である。遺構図に入っている土坑５は、灰釉陶器片が出土しており時期が異なる。

遺物　弥生時代中・後期土器片、石器が少量出土している。弥生時代中期の19号住居址を切っており、覆土中の遺物から弥生時代後期の遺構である可能性が強い。　（佐々木嘉和）

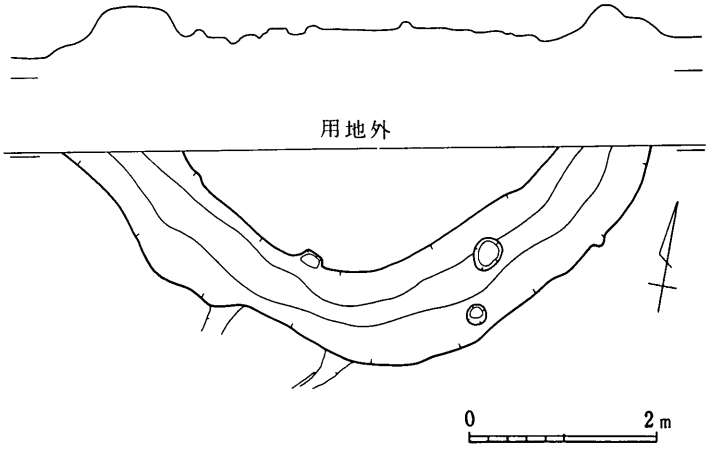


第113図　TAN・KUR　囲溝址２、土坑５

４）方形周溝墓

方形周溝墓１（第114図）

遺構　16号住居址はり床下のＫＵＲＡＨ46付近に検出された。同住居址に上面を切られている。北側大部分が用地外にあり、東・南溝の一部をＬ字形に調査したのみである。周溝は幅1.1～0.9m・深さ40cm前後を測り、断面Ｕ字形を呈する。壁はゆるい傾斜を持つ。東・南溝はＡＨ46でほぼ直角につながり、いずれも約３ｍを確認し、東溝の方位はＮ40°Ｅを示す。形状等から方形周溝墓と考えたが、ごく一部の調査で



第114図　TAN・KUR　方形周溝墓１

あり、性格の異なる遺構の可能性もある。

遺物　溝内からわずかに土師器の小破片が出土したが、時期を決定できるものはない。

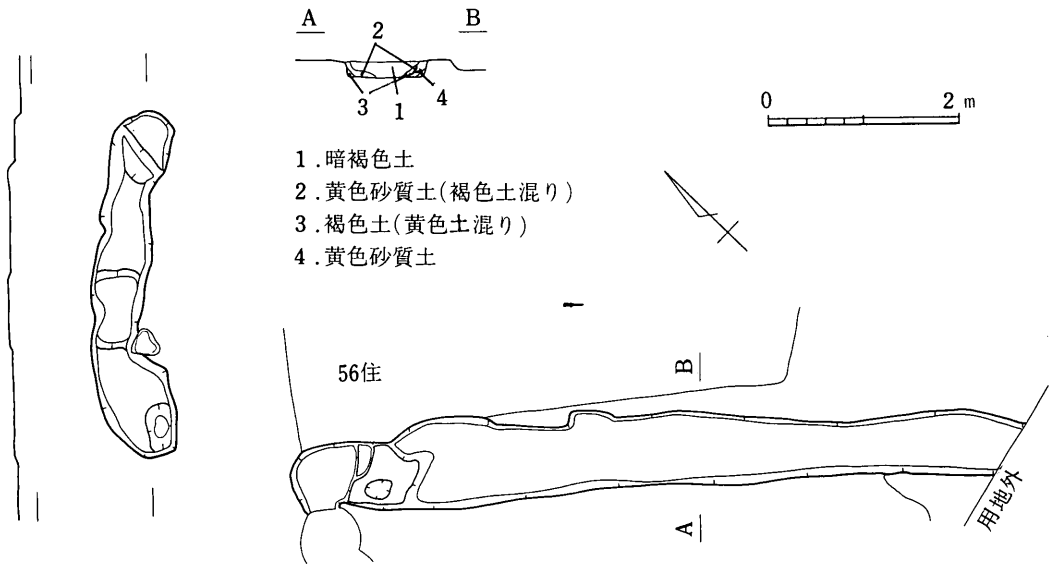
切り合い関係から恒川X期以前に位置づけられる。　（山下誠一）

方形周溝墓2　（第115図）

遺構　KURAX・Y付近にL字形を呈する溝址を検出し、方形周溝墓2とした。59号住居址を切り、56号住居址に切られる。確認した規模は、北西溝が長さ4m・南西溝が7.5mで、幅60～50cm、深さは検出面から20～10cmと浅い。壁・底共に凹凸があり整っていない。L字形に検出したことから方形周溝墓としたが、別遺構の可能性もある。

遺物　いずれも小片がわずか出土している。弥生時代中・後期土器、土師器、須恵器、灰釉陶器などであるが、他遺構との切り合いが多く時期の決定はできない。

（佐々木嘉和）

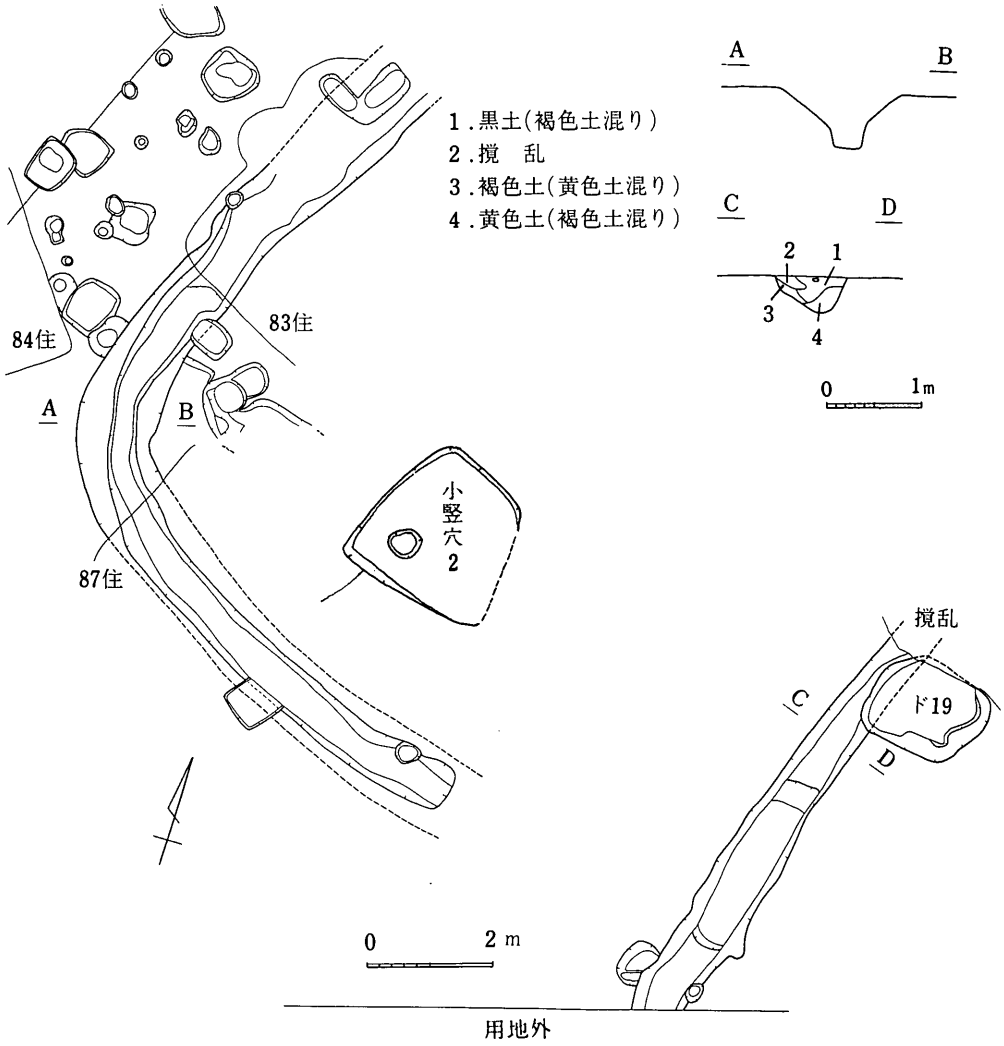


第115図　TAN・KUR　方形周溝墓2

方形周溝墓3　（第116図）

遺構　KURBX～CEに検出した。地表から検出面まで浅く、切り合い関係もあって確認できた所は少ない。規模は15m四方を推定した。南西隅の残存状態が良好で、幅1.3mで、深さは検出面から60cmある。東側溝は用地外にわずか入った所で終わっており、南側溝との間は土橋になるものと推測される。

遺物　出土量は少ない。縄文時代中・後期、弥生時代中・後期土器片があり、最も新しい遺物から、弥生時代後期恒川Ⅳ期に位置づけられる。　（佐々木嘉和）



第116図　TAN・KUR　方形周溝墓3、土坑19、小竪穴2

5）土坑・小竪穴・火葬墓

土坑

TAN・KURで土坑としたものは、1～23まである。規模は大小様々であり、平面形は不整楕円形･不整方形のものが多い。断面形もいくつかの形態に分かれ、次のように分類した。恒川遺跡群の土坑一覧表の断面形はすべてこの分類に従っている。

A・浅い逆台形のもの。底がほぼ平らで壁高が低く皿状を呈するものである。壁面は垂直に近いものから、緩く立ち上がるものまで含めた。

B・深い逆台形のもの。底がほぼ平らでAより壁高のあるもの。

C・半円形のもの。壁・底の区別が付きにくく、底部が円形に凹み鍋底状のもの、凹凸のあるものも含めた。

D・逆三角形のもの。全体的にみて逆三角形のものは、底に狭い平坦部を持つものや壁に段が付いているものも含めた。

E・A～D以外のもの。壁・底に段が付くもの、壁がえぐれるもの、底部に大きな凹凸のあるものなどである。

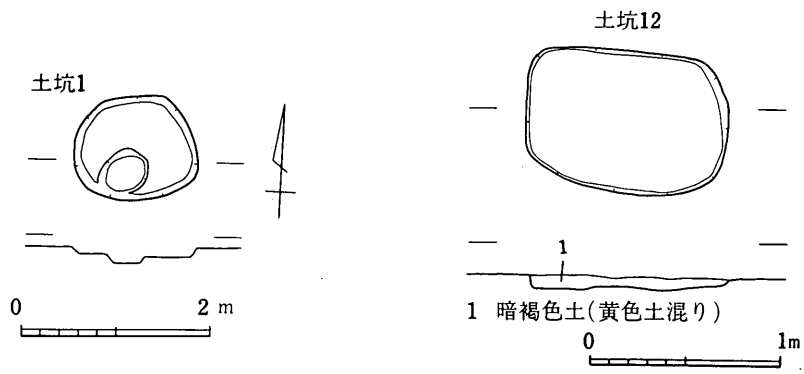
切り合い関係・遺物などから推定した時期も、古墳時代から中世まである。個々の記述は表と重複するので特別なものだけにとどめた。遺構図は、別遺構に含めたもの以外だけまとめた。位置などは土坑の一覧表を参照して頂きたい。

（佐々木嘉和）

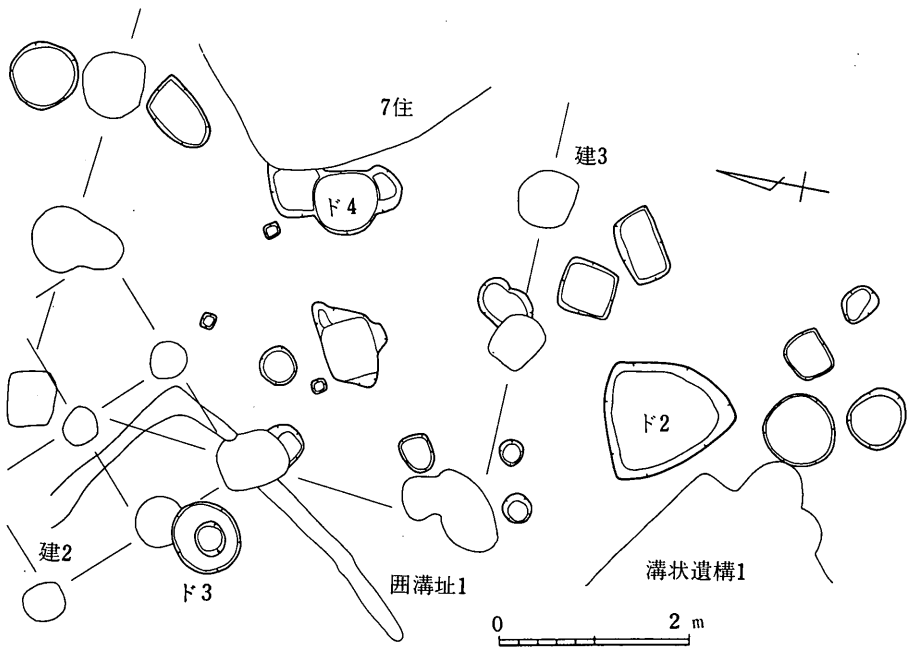
土坑8　（第119図）

遺構　KURAG47にかかって検出した。土坑6に切られる。想定1.8×1.3mを測る長方形の土坑で、壁・底は凹凸があり整っていない。深さは最深部で70cmを測る。覆土中に古墳時代前期恒川X期に比定される土師器高坏・鉢・手づくねが入っていた。

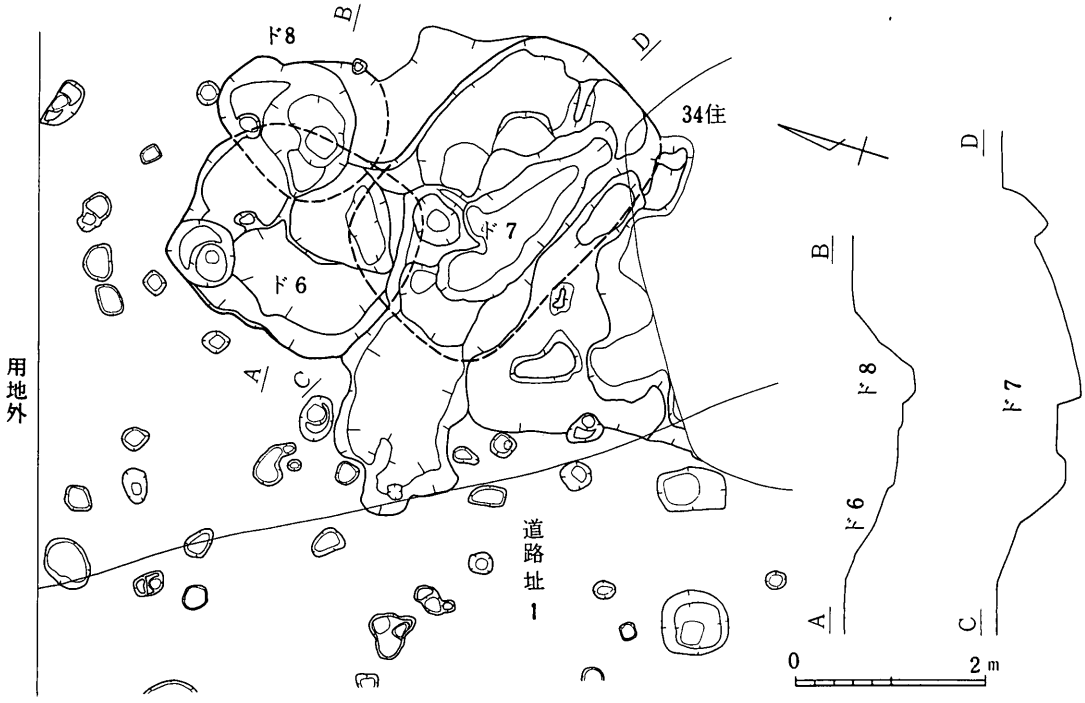
（佐々木嘉和）



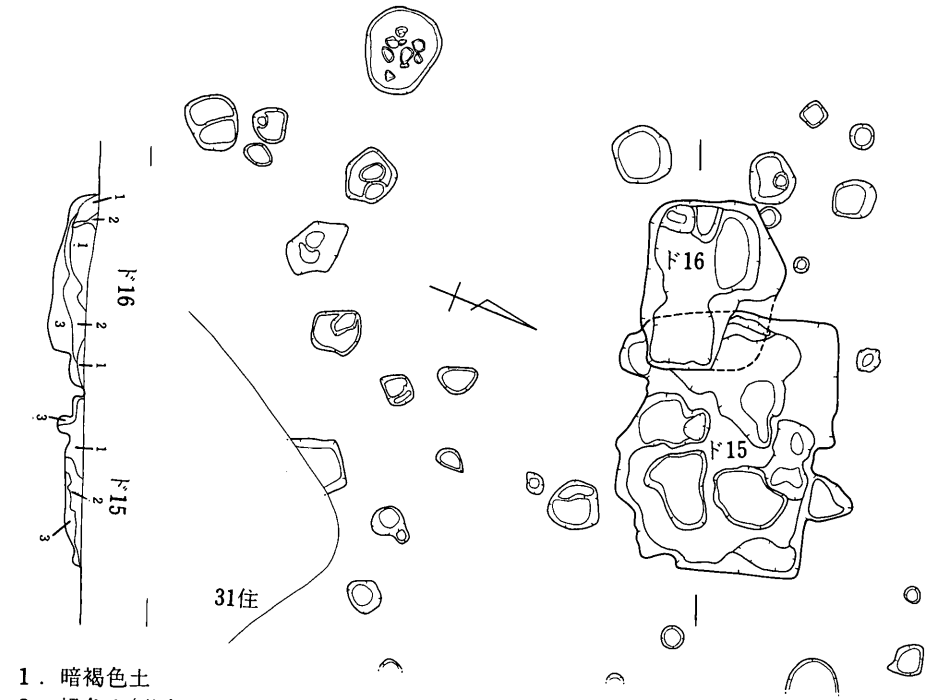
第117図　TAN・KUR　土坑1・12



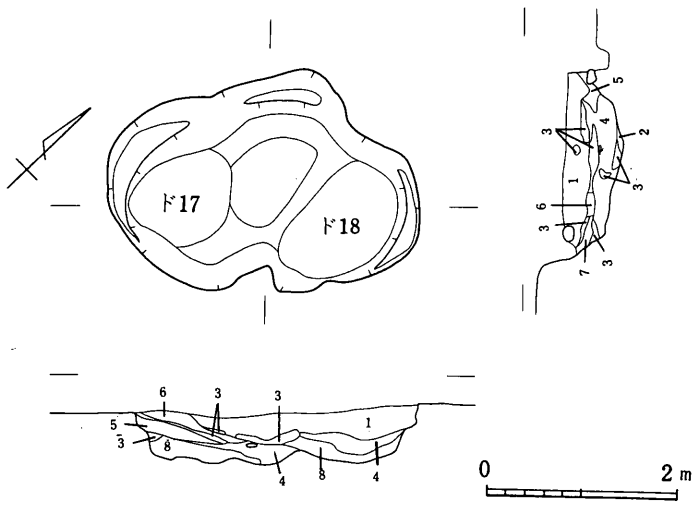
第118図　TAN・KUR　土坑2・3・4、Pit群



第119図　TAN・KUR　土坑6・7・8



1．暗褐色土
2．褐色土(黄色土混り)
3．黄色土(褐色土混り)



1．黒褐色土
2．褐色土(黄色土混り)
3．黄色粘土
4．黒色土
5．黒色土(黄色混り)
6．褐色土
7．暗褐色土
8．黒色土(黄色土混り)

第120図　TAN・KUR　土坑15・16・17・18、Pit群

土坑19　（第116図）

遺構　ＫＵＲＣＥ51にかかって検出した。方形周溝墓３と重複し、耕作の攪乱に切られる。1.8×(1.5)ｍを測る不整長方形の土坑で、深さは検出面から50cm前後を測り、底部は比較的平坦である。底部近くから弥生時代後期恒川Ⅵ期の甕が出土している。方形周溝墓３と関連する可能性もあろう。

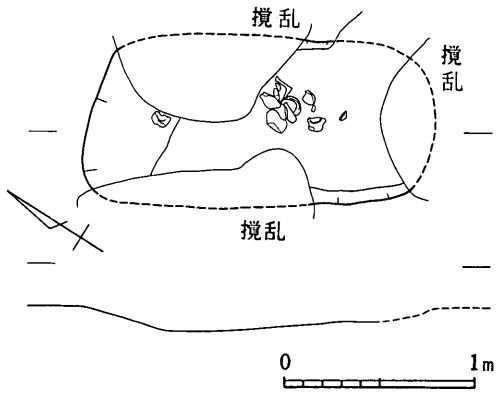
（佐々木嘉和）

土坑20　（第121図）

遺構　ＫＵＲＣＨ52にかかって検出した。耕作の攪乱に切られ、約半分残っていた。想定1.8×0.85ｍを測る長方形の土坑で、深さは検出面から20～10cmを測る。底部はほぼ平坦であるが北西側が約10cm低くなっている。北西壁は緩やかな面を成す。底部から土師器ロクロ使用の甕、須恵器甕・高台坏・糸切り坏が出土した。

平安時代中頃の土坑と推測した。

（佐々木嘉和）



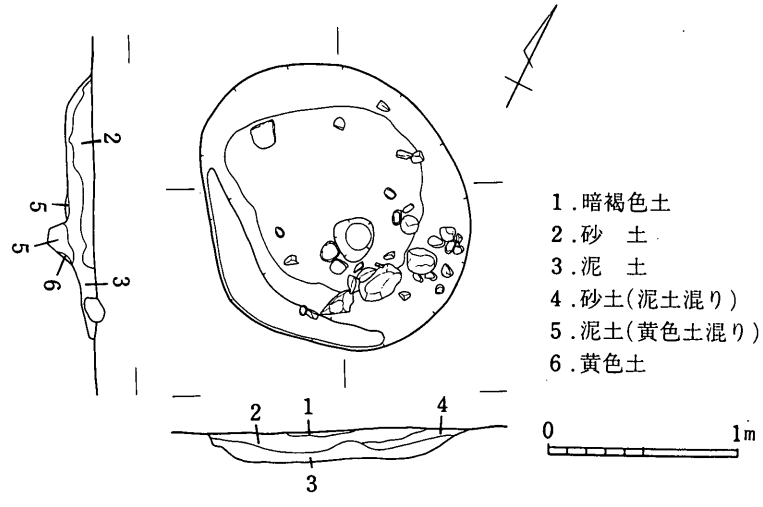
第121図　TAN・KUR　土坑20

小竪穴１　（第122図）

遺構　ＫＵＲＡＧ52･53に検出された。径1.6ｍのほぼ円形を呈し、緩傾斜の壁面を成し、深さ18cmを測り、底部はほぼ平坦である。覆土は大きく２層に分けられる。底部に泥が堆積し、上層は砂である。覆土の状況から見て、何らかの形で水と関連のある遺構と考えられる。中心よりやや東寄りに、径20cm・深さ12cmの穴があり、底部同様に泥が入り、本遺構に伴うものである。この穴の東側の泥層中底部からやや浮いて自然石を検出したが性格等は不明である。

遺物　土師器・須恵器の細片、常滑、青磁・白磁の碗、鉄釘、石器が出土している。

青磁・白磁片が石下



第122図　TAN・KUR　小竪穴１

から出土しており、中世の遺構である。　（佐合英治）

小竪穴2　（第116図）

遺構　KURCA50にかかる竪穴状落ち込みである。不整長方形を呈し、規模は2.6×1.7m、長軸方向はN24.5°Eを示す。検出面から底面まで15～5cmと浅い。底面はたたき状に堅く、住居址に関連する小竪穴と思われる。

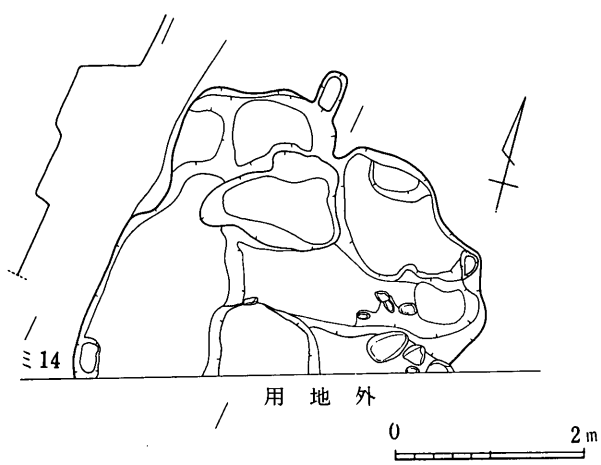
遺物　覆土中から出土したものは、少量ですべて小破片である。土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・坏・蓋、灰釉陶器埦・皿である。　（佐々木嘉和）

小竪穴3　（第123図）

遺構　TANAW54が中心の遺構である。溝址14を切っている。不整形の落ち込みで、南北4mを確認した。用地外にかかったが、ほぼ完掘した。検出面からの最深部は約60cmを測る。壁・床は大きな凹凸があり、底部は地山の粘土である。覆土中に石・炭・焼土があったが、性格は不明である。

遺物　出土量は少ない。土師器甕・坏、須恵器甕・坏・蓋が出ている。須恵器甕の破片は大きく、数個体がある。

遺物から平安時代の遺構と思われる。　（佐々木嘉和）



第123図　TAN・KUR　小竪穴3

火葬墓1　（第124図）

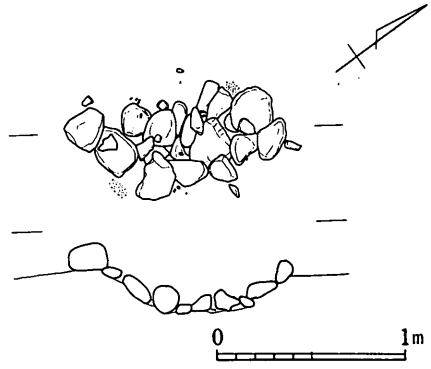
遺構　KURBM49にあり、29号住居址を切っている。石を並べて焼骨・炭を入れた様子である。1.1×0.3mの範囲を掘り凹め、直径25×15cmの石を舟底形に組み合わせてある。長軸方向はN30°Eを示す。石の上面は黒く変色している。断面調査で、石の下側にも焼骨・焼土・炭が入っていることを確認し、火葬場所もこの位置と推測される。火葬時に使用した石を用いて底・壁面を造り、

火葬骨を埋納したのであろう。

遺物　出土量は少なく、小片である。土師器、須恵器、灰釉陶器、焼骨、炭などで、焼骨の一部に形をとどめたものがあり、背骨と手か足の指骨である。

遺物から平安時代以後と思われる。

（佐々木嘉和）

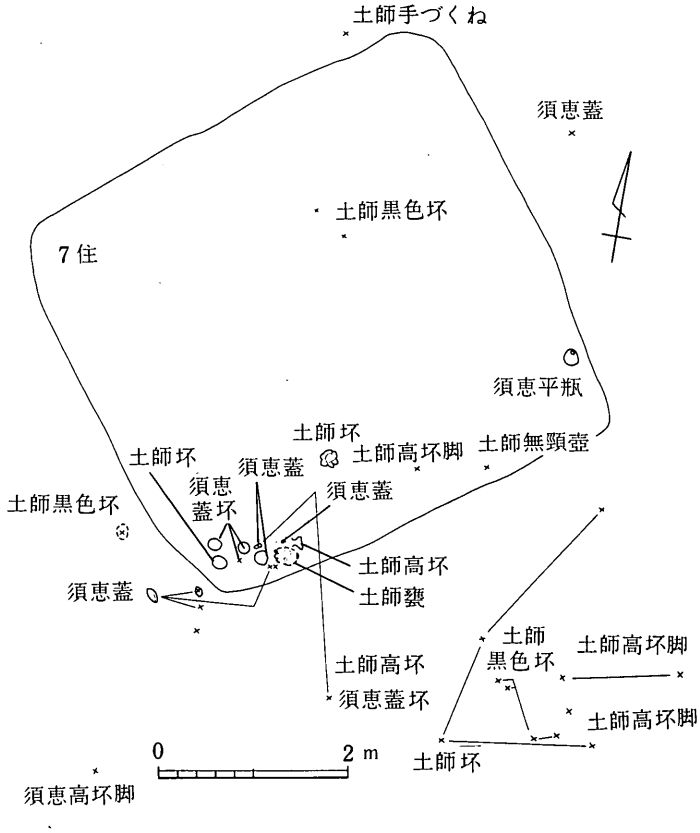


第124図　TAN・KUR　火葬墓1

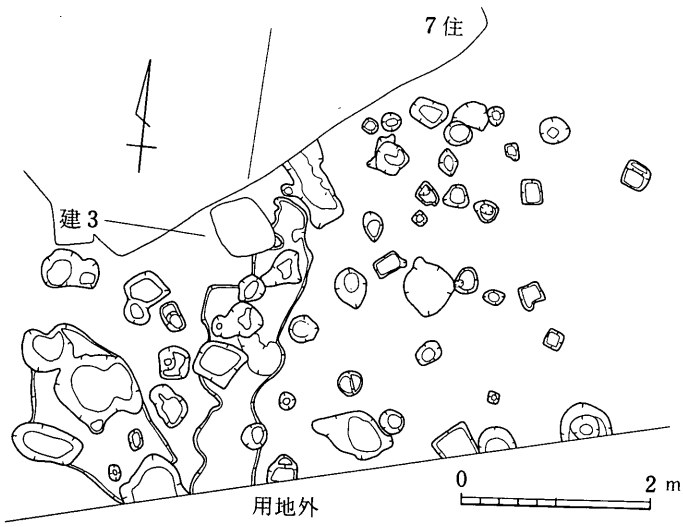
6）祭祀址

祭祀址1　（第125・126図）

遺構　ＴＡＮＢＶ52･53付近に古墳時代遺物が集中して出土し、祭祀址とした。7号住居址を切り、建物址3に切られる。遺物の集中する範囲は南北8ｍ・東西6ｍである。7号住居址の覆土上面でもあり、遺構検出に努めたが何も確認できなかった。7号住居址から南東側は用地境までの間に、多数の穴を検出した（第126図）。祭祀址1に伴う穴もあると思われるが、把握できなかった。遺物はほぼ平面的に出土しており、極端な高低差はない。7号住居址南隅上に集中していた箇所は、並べ



第125図　TAN・KUR　祭祀址1



第126図　TAN・KUR　7号住居址東Pit群

たような状態で出土している。

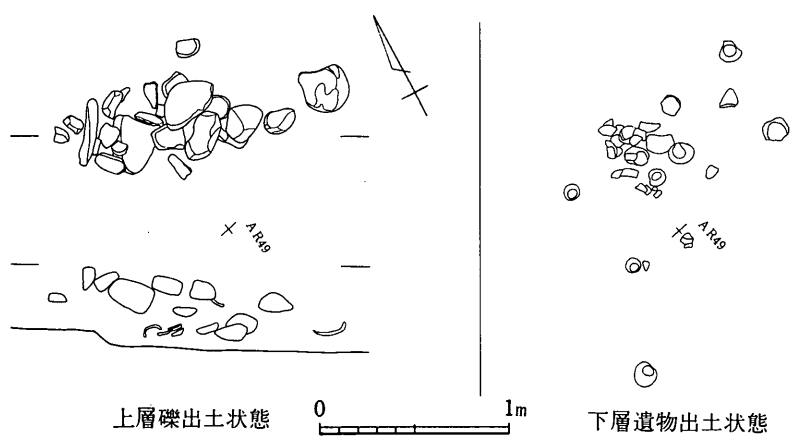
遺物　出土量は多い。土師器壺・甕・坏・高坏・手づくね、須恵器平瓶・蓋坏・高坏などである。

遺物は古手の須恵器蓋坏から、時代の下がる平瓶まであり、集中する部分は古墳時代後期前半の祭祀址と思われる。

（佐々木嘉和）

祭祀址2　（第127図）

遺構　KURAQ・R48の暗褐色土中に、1.5×0.7mの範囲で30～10cmの石による集石を検出した。調査を進めると集石下を中心に2×1mの範囲で特定種類の遺物が集中して出土した。掘り方等の確認はできなかったが、穴を掘って土器を埋め、その上に石を配したと考えられる。遺物の分布状態・石のあり方などから一応祭祀址と考えたが、その具体的な形態は不明であり、祭祀以外の特別な遺構の可能性もある。



第127図　TAN・KUR　祭祀址2

遺物　出土量は多く、器種も特定の供膳形態のものに限られる。土師器ヘラ切り坏が7個体・須恵器のヘラ切り坏11個体と、ヘラ切りのものが大半を占める。他に、内面黒色の高台坏や糸切

り坏、須恵器坏、緑釉陶器などが出土している。

遺物から平安時代中期に比定できる。（山下誠一）

7）道路址

道路址1（第128図）

遺構 ＫＵＲＡＢ～ＡＥにかけて用地内を横断する形で検出された。暗褐色土中に30cm以下の石を使った石列がみられた。31号・35号住居址、溝址20、土坑15の上層にあり、これらを切っている。検出した規模は、幅4.7～3.8mで、N32°Wの方向を示し、両端共用地外に連続している。上面には30～10cmの大きな石が多く、50グリットより北側に大きな石が目立った。これらの石をはずすとほぼ同一面に10cm以下の砂利が敷かれ、踏みしめられたように堅くなっていた。砂利面は全体には平坦であるが、両側部が若干高く、中央部が浅い皿状の凹みを呈する。石の間には、須恵器・灰釉陶器の破片があり、石と同一意識（用途）で入れられたと思われる。全体の形態や石・遺物の検出状況などを総合的に判断して、道路址と考えられる。

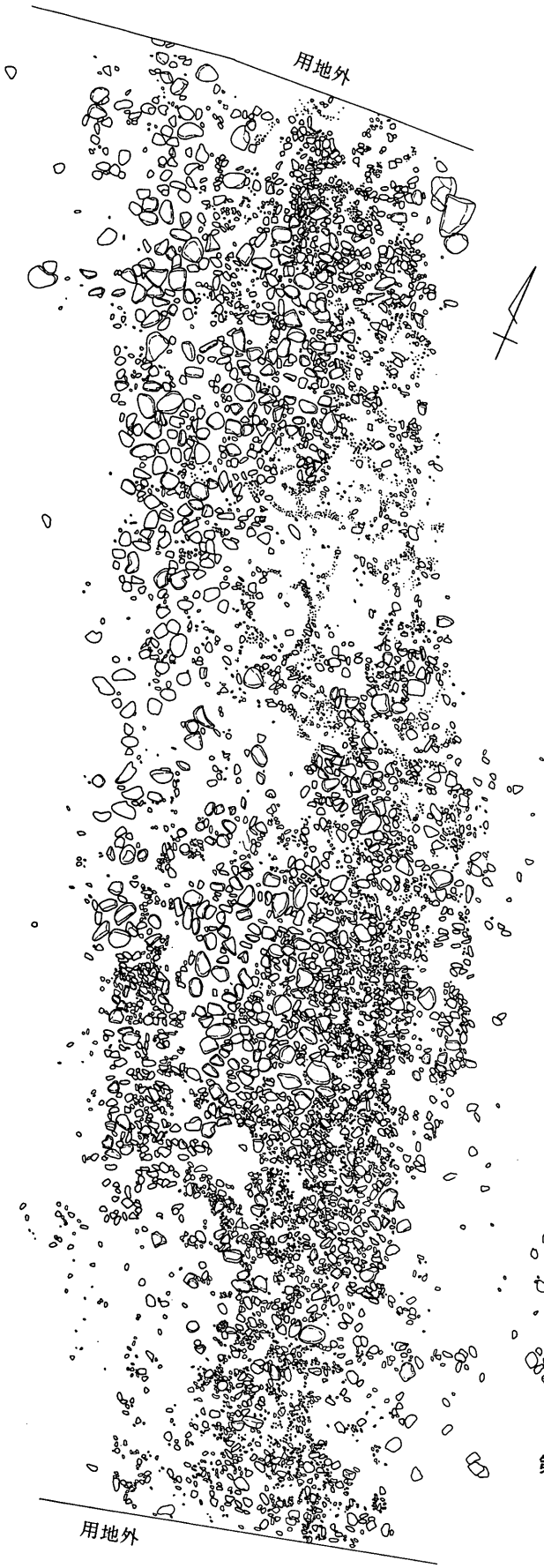
遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器がある。土器はすべて破片であるが、その出土量は多い。土師器坏・高坏、須恵器甕・長頸壺・横瓶・蓋坏・鉢・特殊偏壺、灰釉陶器埦・長頸壺がある。鉄器はほぼ完形の刀子・鋤先・釘などが出土した。

出土遺物は、古墳時代後期から平安時代の間に属するものがあり、かなり長い間の使用が考えられ、最終段階の時期は平安時代後期と思われる。初現期の確定は困難であるが、遺構の切り合いや出土遺物等から考え、古墳時代の末期から奈良時代の前半期位が考えられる。（山下誠一）

8）柵　址

柵址1（第100図・付図1）

遺構 ＫＵＲＢＸ53から北西方向に用地内を2.9m間隔で横断する小形の穴を5本検出した。このうち北側の2本の穴は81号・84号住居址覆土中にあり、正確な掘り方を検出できず、他の穴の底部に認めた石も確認できなかった。掘り方プランは北端と中心の穴が方形で、他の穴は円形である。直径は35cm前後、掘り方壁は南端の穴を除いてほぼ垂直である。深さは北側2本は不明で、残り3本は南からそれぞれ21・18・8cmを測り、底部に径12cm前後の礎盤と考えられる石を認めた。南から2本目の穴は底部が二段構造で掘り凹めた中へ石を埋め込んだものと考えられ



第128図　TAN・KUR　道路址1

る。

本遺構が検出された所は、ＫＵＲの東端段丘崖が30m程に迫っており、地形全体が傾斜し始めている箇所に当ることや検出状況等から、柵址と考えた。時期を決定できる遺物の出土はないが、柵址と考えれば周辺遺構との関係から、奈良時代以降と考えられる。　（佐合英治）

9）集石・石列

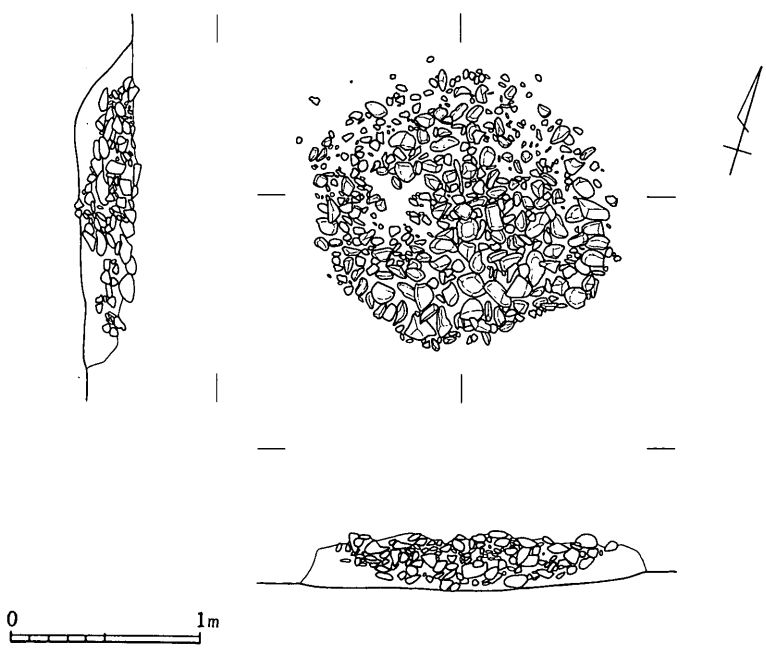
集石

ＴＡＮ・ＫＵＲで、遺構名を集石としたものは、１～25まである。特に記述はせず、以下に概略を記す。

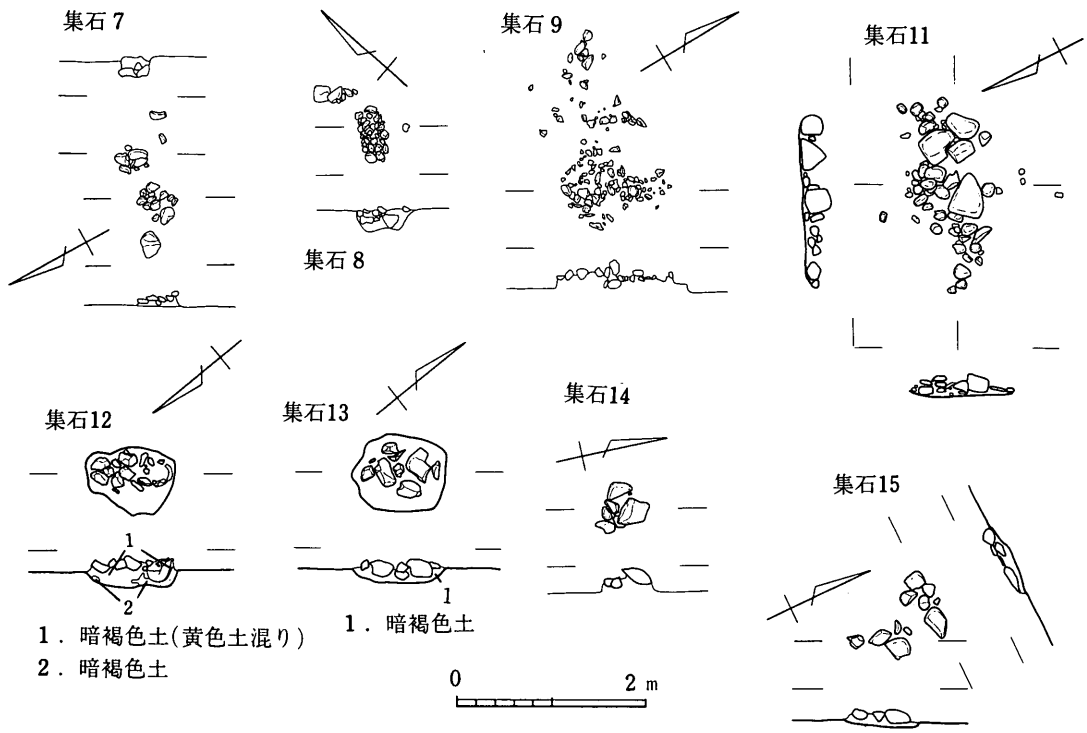
近世集石とした遺構は塵芥を投棄した穴であり、遺構図には近集あるいは撹乱にしてある。比較的大きな掘り方に、石・陶磁器片・ランプのほやなどを廃棄したものであり、地表下１m前後で検出した。

集石１～25の性格は不明で、集石を残して検出面を下げたので、遺構断面図が盛り上がったようになってしまったものがある。個々の記述は割愛したので、位置・規模は一覧表を参照されたい。断面形は土坑の分類に準ずる。

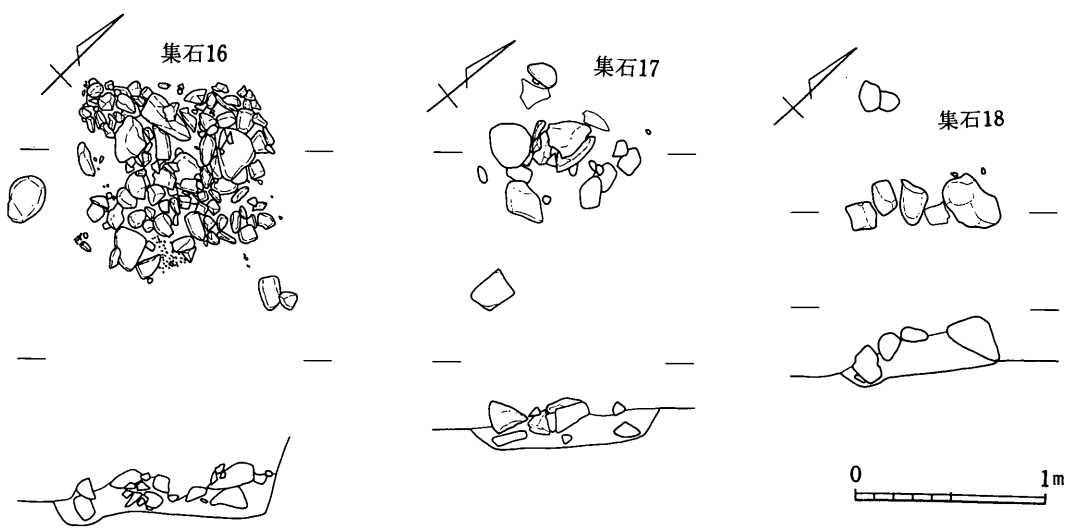
遺構図は以下に記述した番号である。集石１～５・10（第134図）、集石６（第129図）、集石７～９・11～15（第130図）、集石16～18（第131図）、集石19～23（第132図）、集石24（第133図）、集石25（第27図）。



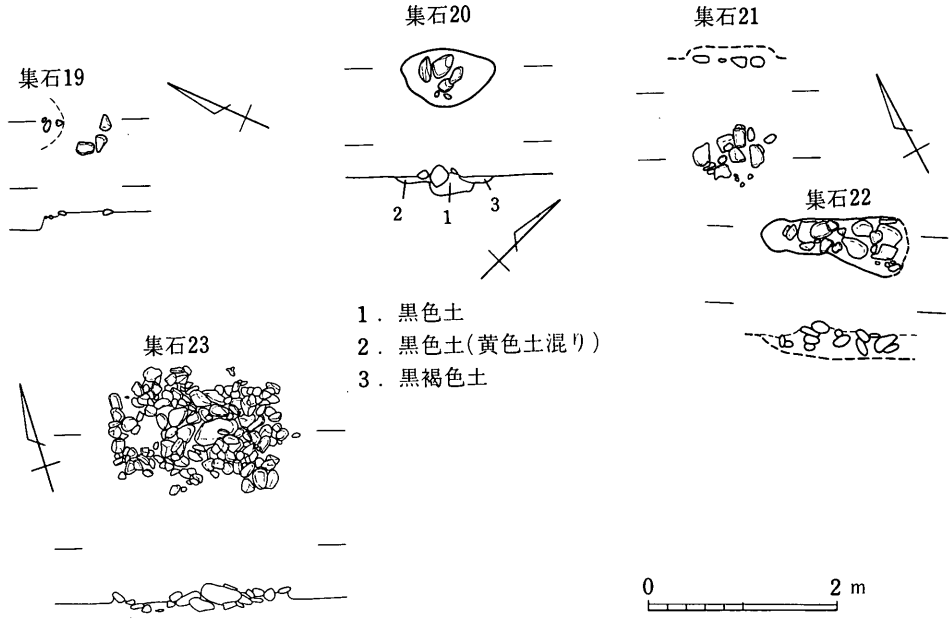
第129図　TAN・KUR　集石６



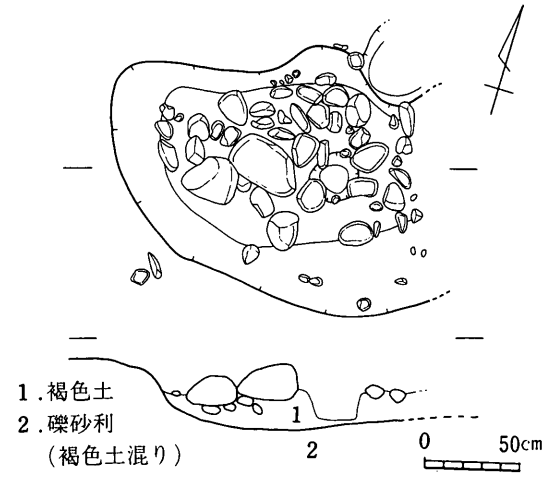
第130図　TAN・KUR　集石 7 ・ 8 ・ 9 ・11・12・13・14・15



第131図　TAN・KUR　集石16・17・18



第132図　TAN・KUR　集石19・20・21・22・23

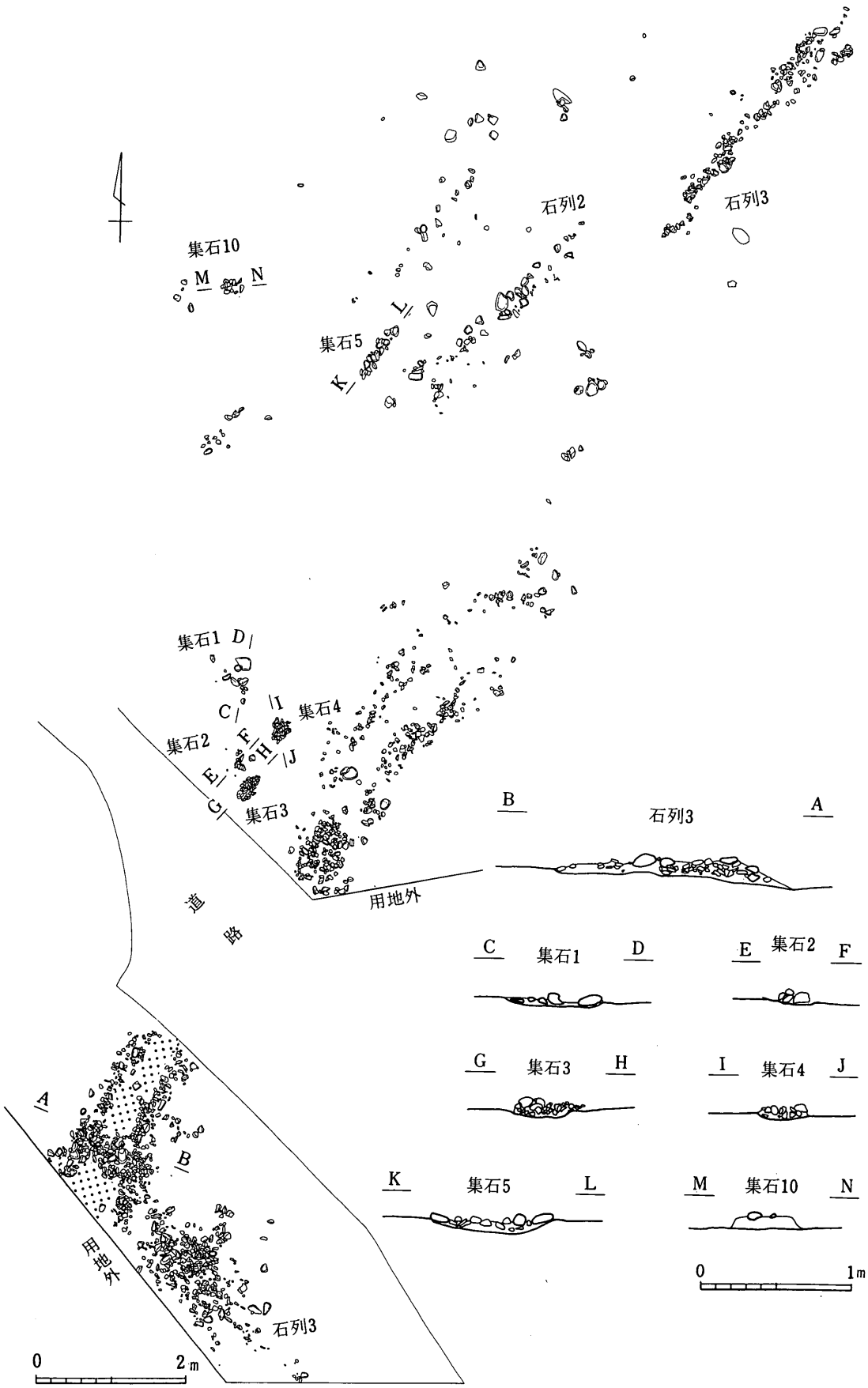


第133図　TAN・KUR　集石24

石列Ⅰ　(別図１)

ＴＡＮ溝址12の最上部にあった石列で、確実に把握できずに溝址12の調査に入ってしまい、結果的に未記録で破壊してしまった。ＴＡＮ溝址12の項でわずか記述してある。

平安時代の石列と思われる。　(佐々木嘉和)



第134図　TAN・KUR　石列2・3、集石1・2・3・4・5・10

石列2　（第134図）

遺構　ＫＵＲＢＡ48に検出した。石列３と同方向を示し、1.1m程北西側に、幅40cm前後・長さ3.5m程を確認した。石はみな自然石で径23～５cmを測るものである。

遺物は出土せず、時期・性格は正確に把握できないが、耕土下の暗褐色土上層に検出されたことから中世以降と考えられる。（佐合英治）

石列3　（第134図）

遺構　ＫＵＲＡＵ56～ＢＥ46まで用地内を北東方向に横断し、調査範囲南端で南西方向に曲がって検出された。耕作土排除後、暗褐色土層上部に検出され、人為的に石を集めたものと考えられるが、規則的に並べられたものではなく、南西側の幅の広い部分については外側の石のみを図化した。南西側は用地境で南東へほぼ直角に向きを変えているものと判断したが、この部分は別の集石となる可能性もある。確認した長さは19mで、両端部は用地外へさらに延びていると考えられる。幅は南西端で1.5mを測り、内側と外側の石の高さはほぼ同じである。北東端は幅0.7mで、中間部はまばらに石が認められる程度で、耕作等によりかなり攪乱を受けていると考えられる。全体としては北東側から南西側へ約30cm傾斜している。石は花崗岩の自然石で直径30～５cmを測り10cm前後のものが多い。本石列址が本来地表面より高く築かれていたものか、同じであったかは確認できなかった。本址の用途・性格は不明であるが、石の配列状態などから土地を区切る意味を持つ道路的な性格も推測できる。

遺物　土師器片と石器とがあるが、遺構を検出したのは中世以降と把えた層である。

また、石列３の西側には石列２、集石１～５・10が同層位で検出されている。これら遺構と直接結び付く遺物は出土せず、時期・性格等を把握できるものはなく、本址との関連も不明である。（佐合英治）

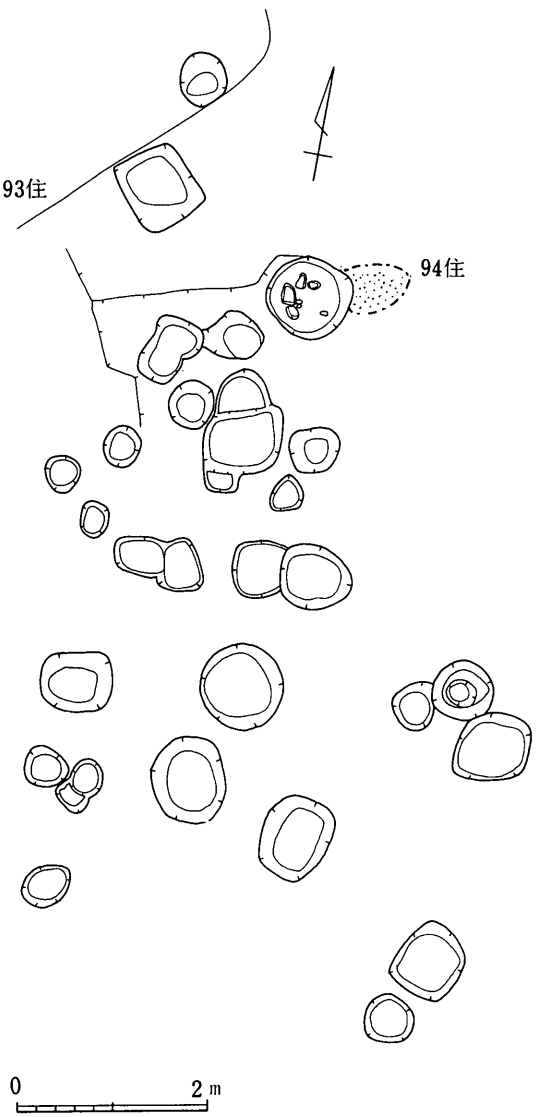
10) Pit群

遺構　ＴＡＮ･ＫＵＲに検出された、大小様々な穴である。建物址等具体的な遺構として把握できなかったもので調査範囲内全体に分布し、現地では全て図化したが、本書に収録したものは、他遺構周辺に分布するもの、特に集中する範囲に限った。

時期的には土層状況などから弥生時代～中世にかけてのものが主体となるが、個々の穴についての時期・性格等は不明である。

第135図のPit群はＫＵＲＣＨ～ＣＪに検出された穴である。

（佐々木嘉和）



用　地　外

第135図　TAN・KUR　Pit群

3　恒川遺跡　恒川A地籍

本地籍には弥生時代後期末から中世にかけての遺構がある。また、遺構として把握が困難ではあるが、本地籍を最も特徴づけるものは南西半にある湿地帯であり、層位により把えられたのは、古墳時代後期・奈良時代・平安時代・中世であるが、遺物は弥生時代中期以降のものを多出する。

湿地ぎわからＧＯＢにかけ、弥生時代後期から古墳時代前期の住居址及び溝址がかなり密集して検出された。溝址２は、古墳もしくはそれに類する墳墓的な性格が考えられるもので、本時期の最終段階の遺構である。弥生時代後期終末から連続して３時期の集落を営み、集落内に墳墓を築成し、居住地域を移動したと考えられる。

古墳時代後期の遺構はほとんどなく、奈良時代まで継続していたとみられるＧＯＢから続くＧＯＢ溝址１の延長部が検出されたのみで、居住区域の外帯、水利用のための共有地的性格が示される。

奈良時代の遺構は、湿地ぎわに柱根の残る掘立柱建物址があり、また、東接するＧＯＢに連続して、その境付近にも掘立柱建物址がある。ＧＯＢＡ区とは一連のもので、ＧＯＢから本地籍の湿地ぎわにかけ、官衙域の一画を成していたと考えられ、中でも湧水に依拠した性格の強い地点として把えられる。

中世は遺構として的確な把握ができなかったが、土坑群が北東側に分布し、かなりの陶磁器類が出土しており、本来は居館址もしくは住宅址などが考えられる。　（小林正春）

1）住居址

①　弥生時代後期から古墳時代前期

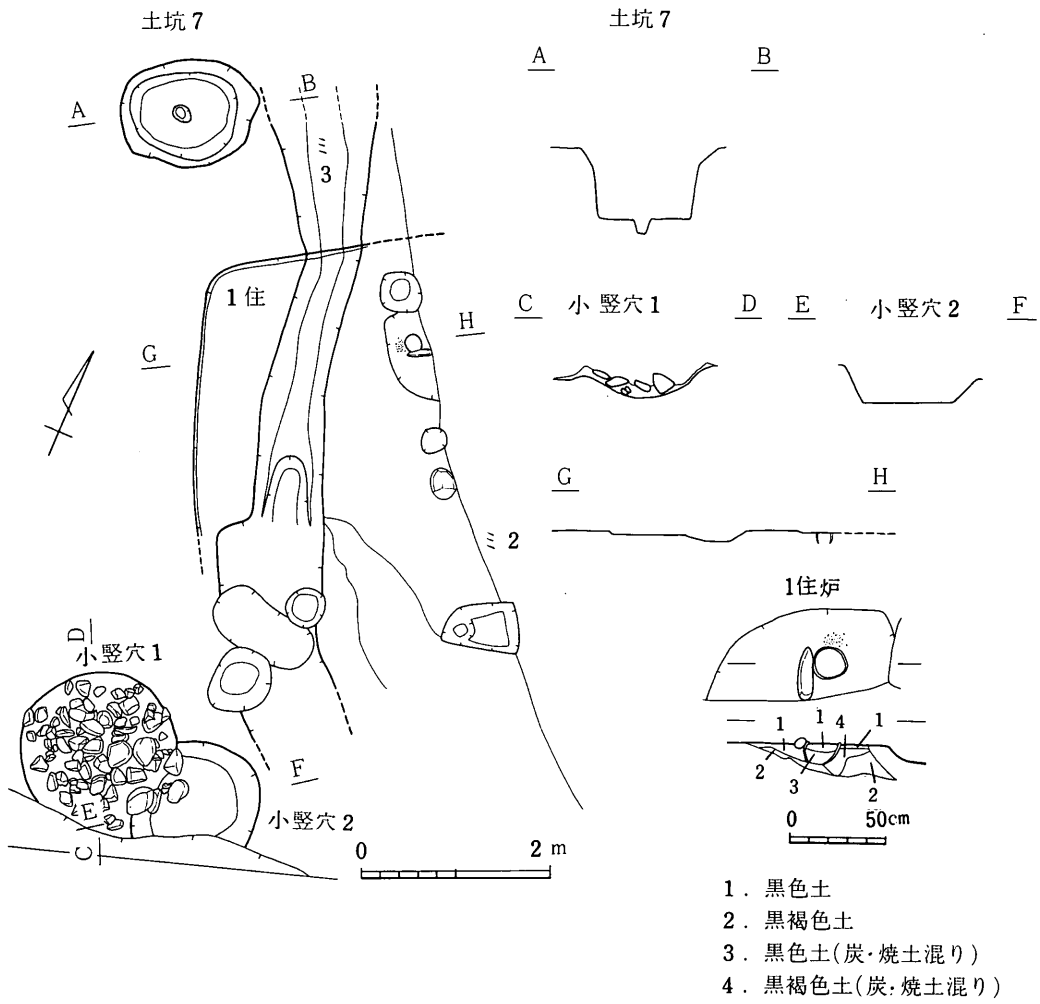
1号住居址（第136図）

遺構　ＧＯＡＡＴ56を中心に検出された。溝址２・３、穴に切られ、南端部は地形が傾斜し上部が削平されているため、北西隅を中心とした箇所のみ壁を検出し、１辺が４ｍ前後の隅丸方形の竪穴住居址と考えられ、主軸方向はＮ14°Ｗを示す。確認部の壁高は10cm以下とわずかである。床面はかなり削平され、壁同様に残存部は少ないが、良好な部分も一部認められた。炉址は北壁ぎわの溝址２に切られる箇所にあり、炉縁石を持つ土器埋設炉である。床面を径約１ｍ掘り凹めた中心部に底部を欠く甕を埋め、南側に細長い自然石を用いた炉縁石を置いている。焼土は比較的

少なく、土器内に散乱し、ほとんどが周囲の黒色土と混じた状態である。主柱穴は確認できなかったが、炉址南側に浅い穴があり、間仕切り的な性格が考えられ、それに南接して台石とみられる偏平な石がある。炉址の反対側壁下付近と考えられる位置に80×55cmの穴があり、入口部施設と考えられる。

遺物　炉址に使われた甕以外には、甕・壺の破片が出土したのみである。

遺物から弥生時代後期恒川Ⅵ期に位置づけられる。　（小林正春）



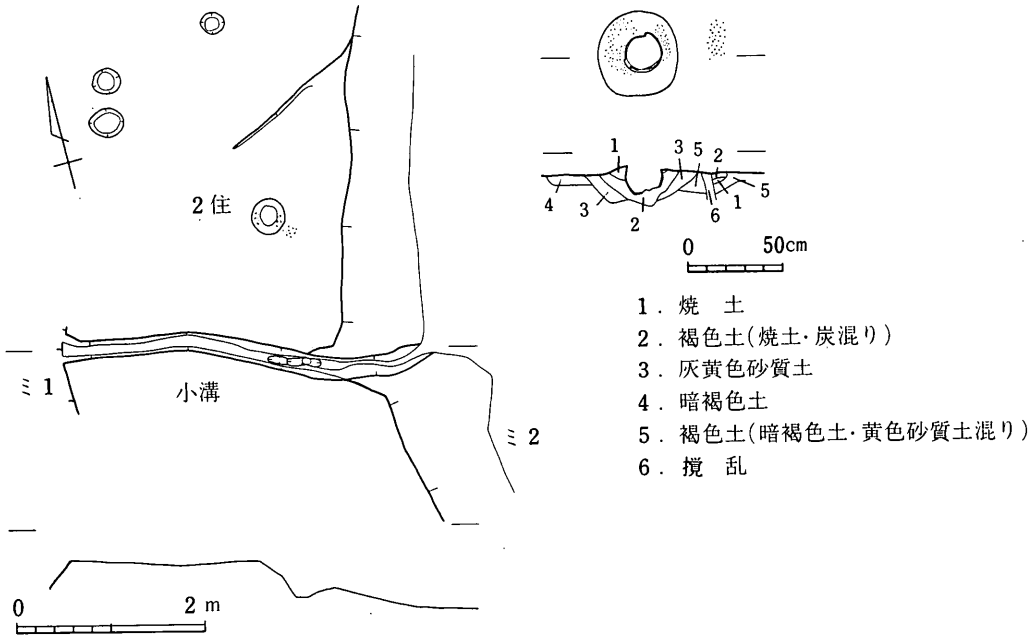
第136図　GOA　1号住居址、溝址3、小竪穴1・2、土坑7

2号住居址（第137図）

遺構　GOAAT51に土器埋設炉を検出した。溝址2・小溝に切られる。竪穴住居址と思われるが、規模などは確認できなかった。炉址の北東側に黄色砂土（地山）の下がる所があり、壁の可能

性もあるが、床面も把握できず断定はできない。土器埋設炉には底を欠いた甕を使用している。埋設した甕の外側の掘り方中に焼土・炭など混入しており、造り替えた可能性がある。

遺物　炉址に使われた甕の他、壺がある。甕は弥生時代後期の中島式であり、恒川Ⅵ期の住居址である。　（佐々木嘉和）

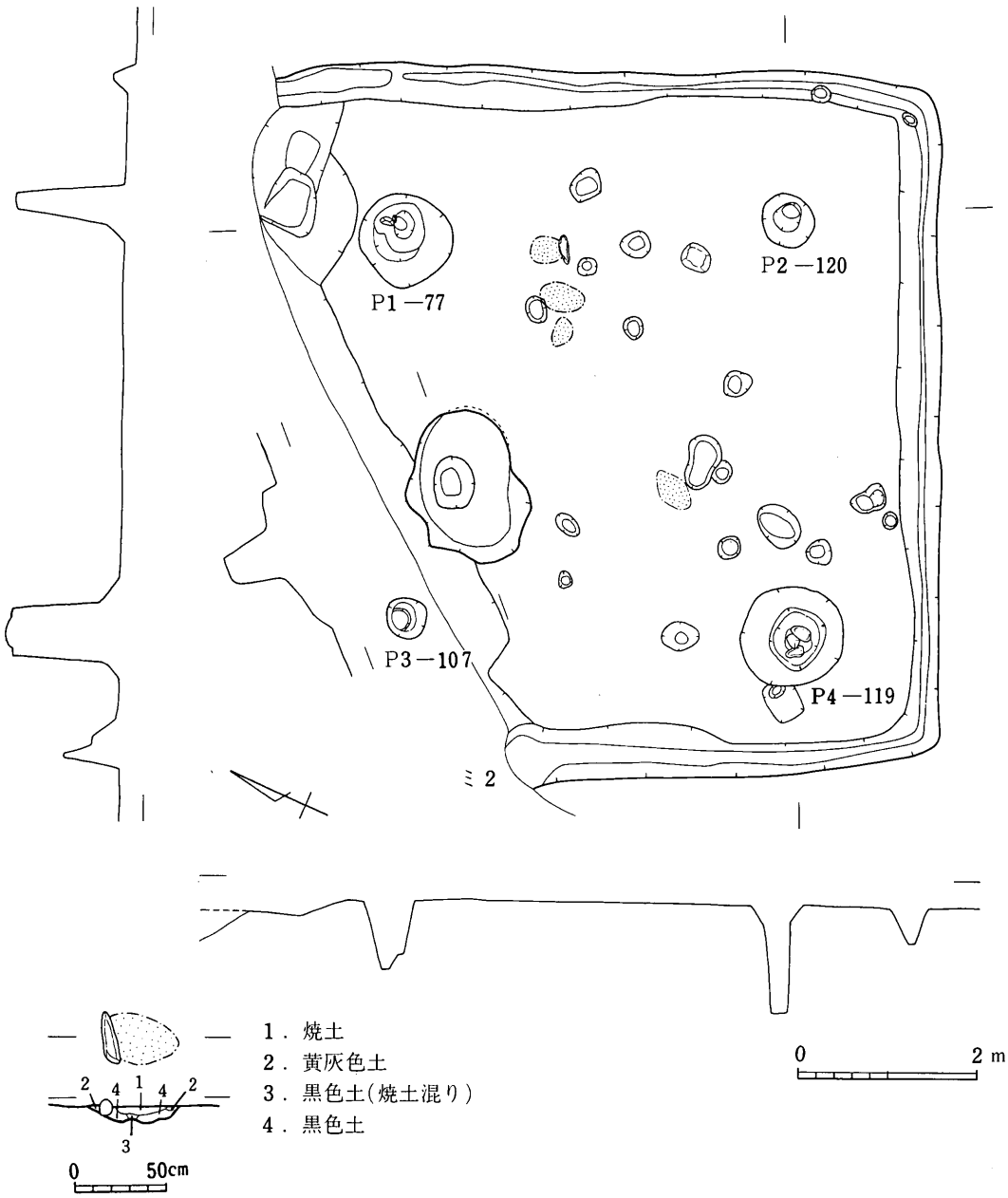


第137図　GOA　2号住居址、小溝

3号住居址（第138図）

遺構　ＧＯＡＡＹ51･52を中心に検出された。当初は検出面に黒色土の溝状に落ち込みが方形にみられ、方形周溝墓として考えた。しかし、溝の内側の調査で、柱穴・炉址等の住居址付随施設が検出されて、住居址であることが判明した。北西側は溝址２に、中央部西側の床面は1.8×1.2ｍの不整形のプランを呈する大穴にも切られている。7.8×(7.6)ｍを測る隅丸方形の住居址で、主軸方向はＮ58.5°Ｅを示す。溝址２号に切られる北西側を除く三方に、幅80～50cm・深さ60～30cmの溝がめぐっている。床面は黄色砂土までほぼ水平に掘り黄色土を10cm程度埋め、はり床とした堅く良好なもので、その直上には焼土が散乱していた。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、床面では70～60cmの円形プランを呈し、途中から細くなり、Ｐ２～Ｐ４は床から100cm以上にもなり、通常の住居址より深くまで掘られる。Ｐ３は上面を溝址２に切られている。Ｐ４は床から約30cm下に20cm前後の石を検出し、柱を抜いた後に石を埋めた可能性がある。炉址は東側主柱穴間中央北寄りにあり、

炉縁石を持つ地床炉である。炉縁石は通常住居址の中心側に位置するが、本址では通常の位置から90°方向を変え、つまりＰ２の方向に持つなど、やや形態を異にする。一般の竪穴住居址にみられる壁は認められず、周囲の状況からも後世の削平により消失したことも考えられず、規模の大きな柱穴・深い周溝を持つことなどから平地式の住居址と考えられる。深い周溝は、壁となる板材などを直接埋め込んだ可能性が強い。当地方では他に類例のない形態といえる。焼土の状況か

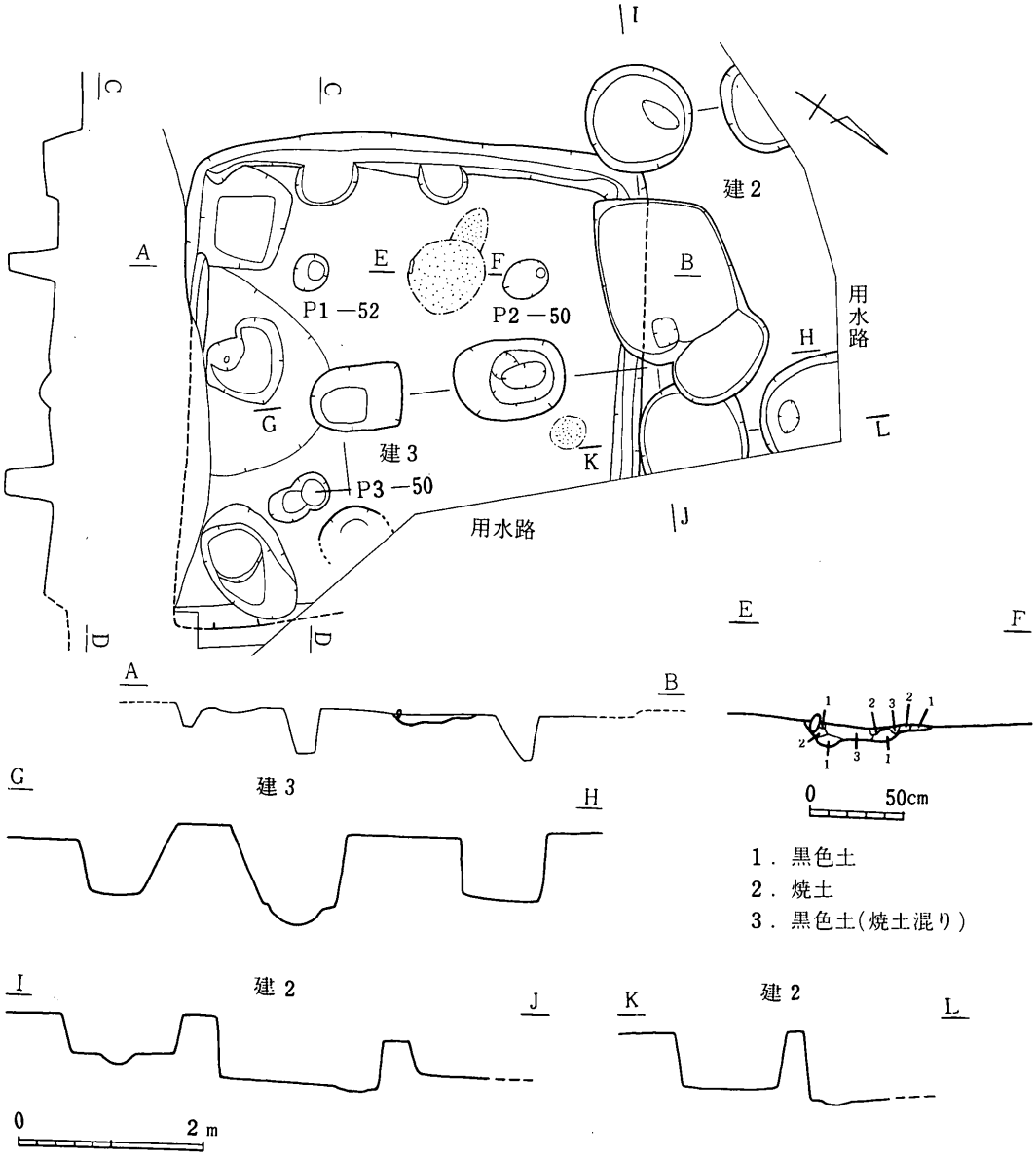


第138図　GOA　3号住居址

ら火事の住居址の可能性が高い。

遺物　土器・石器があり、ほとんどが床面上の遺物で、量も多い。土師器壺・甕・高坏・鉢・小型丸底・小型壺、打製石斧・抉入打製石庖丁・有柄石器・砥石・磨製石鏃未成品がある。遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期に比定できる。　（山下誠一）

4号住居址（第139・140図）

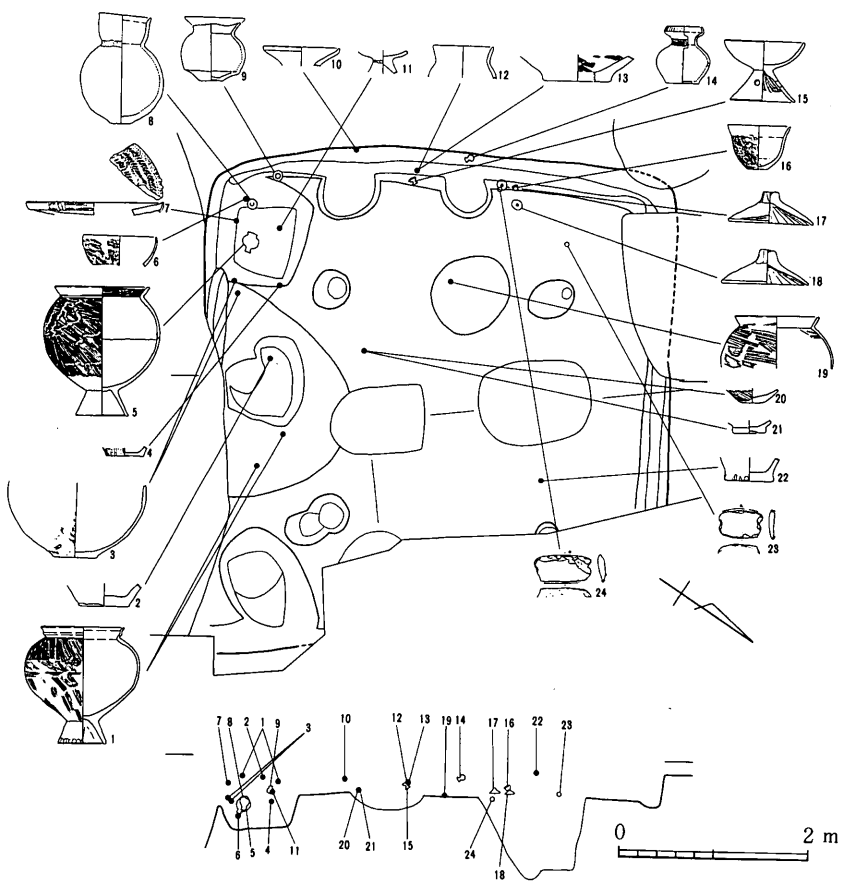


第139図　GOA　4号住居址、建物址2・3

遺構　ＧＯＡＡＹ47を中心に検出された。溝址２、建物址２・３に切られ、北側は道路下のため一部調査できない箇所があった。５×5.3mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ122.5°Ｗを示す。確認部の壁はほぼ垂直で、壁高は30～20cmを測る。床面は全体的に堅く良好である。東隅部を除き、確認したほぼ全体の壁下に幅20cm前後・深さ10cm前後の周溝を確認した。主柱穴はＰ１～Ｐ３を確認し、いずれもしっかりとした穴である。南東壁下に、いずれも径１m前後の穴が並んでおり、この付近及び内部からの遺物出土が多く、特定はできないがいずれかが入口部施設で、それ以外は貯蔵穴と考えられる。炉址は地床炉でＰ１とＰ２の中央部床面が径80cm程の範囲でわずかに凹み、Ｐ１側に炉縁石を持つ。焼土は全体に認められ、一部西壁側に張り出すように認められたが、焼土が面あるいは層を成すというほどのものでもない。また、北西壁下の床面上に径35cm程の焼土の面が認められ、炉址とは別に火使用の施設があったと考えられる。覆土中及び床面直上に炭・焼土が認められ、火事の住居址である。

遺物　遺物量は多く、炉址周辺床面上、南東壁下穴内及びその周辺からの出土が主体で一括性の高い良好な資料である。土師器壺・甕・蓋・高坏・鉢・器台・小型壺、打製石庖丁などがあり、これら出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期に位置づけられる。

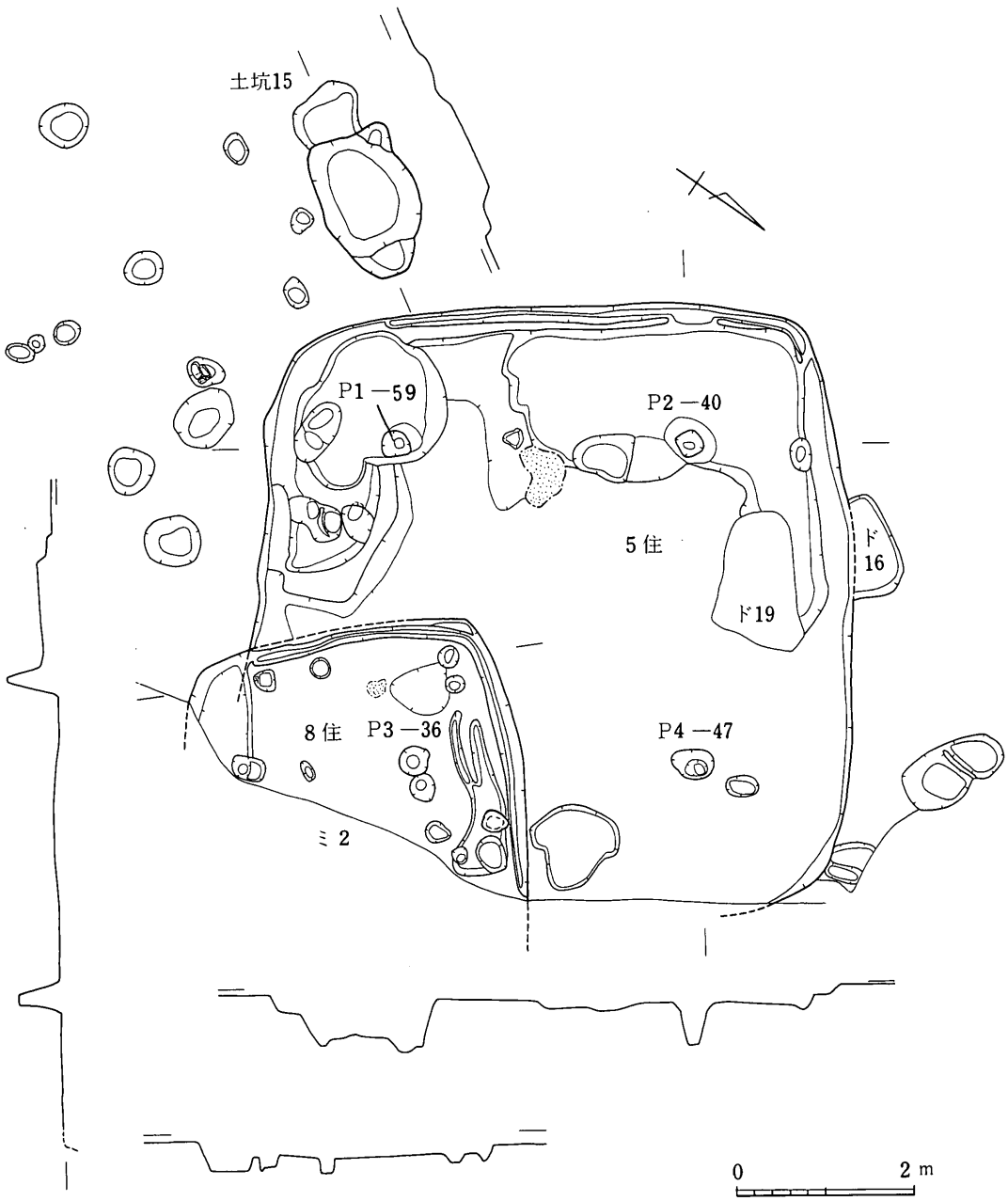
（小林正春）



第140図　GOA　４号住居址遺物出土状態

5号住居址（第141図）

遺構　ＧＯＡＢＦ55を中心に検出した。8号住居址、溝址2、土坑16･19、穴に切られるが、ほぼ完掘した。（7）×6.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ128°Ｗを示す。壁高は検出面から20～10cmを測る。西壁下のみに深さ10cmの周溝があり、床面側が土手状にわずか高い。床面



第141図　GOA　5号・8号住居址、土坑15

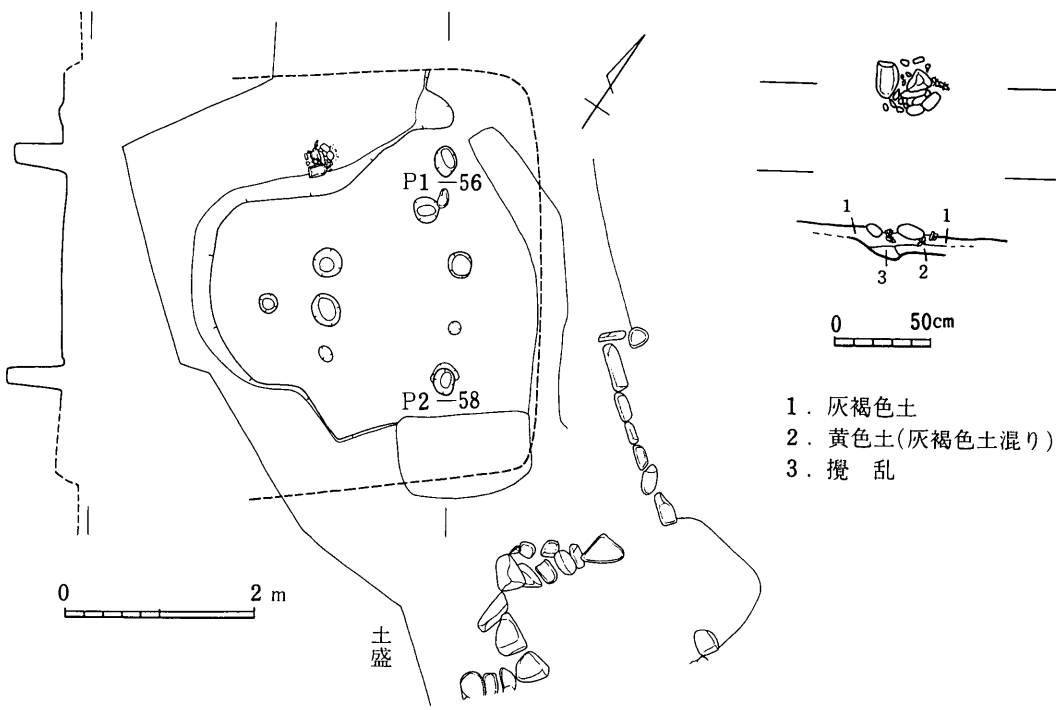
はＰ２周囲のわずか低くなった箇所を除いて、はり床になっており、堅く良好であった。Ｐ２周辺は10～5cm低くなっている。Ｐ１の含まれている穴は新しく、住居址を切っている。主柱穴は４本で、平面は不整楕円形で小さく、割り材使用の可能性がある。炉址は地床炉でＰ１・Ｐ２の中間でやや中央寄りにある。わずか掘り凹め、地山が鍋底状に焼けていた。

遺物　規模に比べて出土量は少ない、土師器壺・Ｓ字口縁甕・台付甕・小型台付甕・高坏・器台・鉢、抉入打製石庖丁などがある。

出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期の住居址である。　（佐々木嘉和）

６号住居址（第142図）

遺構　ＧＯＡＡＹ56を中心に検出された。現代の池に切られ、住宅下にあった壁は完全に消失している。主柱穴と炉址の関係から主軸方向はＮ43°Ｗを示し、プランおよび規模は一辺4.2m程の隅丸方形の竪穴住居址が想定できる。残存する床面は北から南へ若干傾斜するが、きわめて堅いはり床である。はり床自体は住居址中心部が薄く東側は厚くなり、最も厚い所では18cmを測った。主柱穴は東側の２本を確認し、Ｐ２には北側の縁部に厚さ２cm幅６cm程の黄色土を盛り上げ土手状にしている。炉址は北西壁側にある。西側主柱穴が確認されていないので確証はないが、主柱穴を結ぶ線上に位置しているものと考えられる。炉址も池により壊され、甕が押しつぶされた状



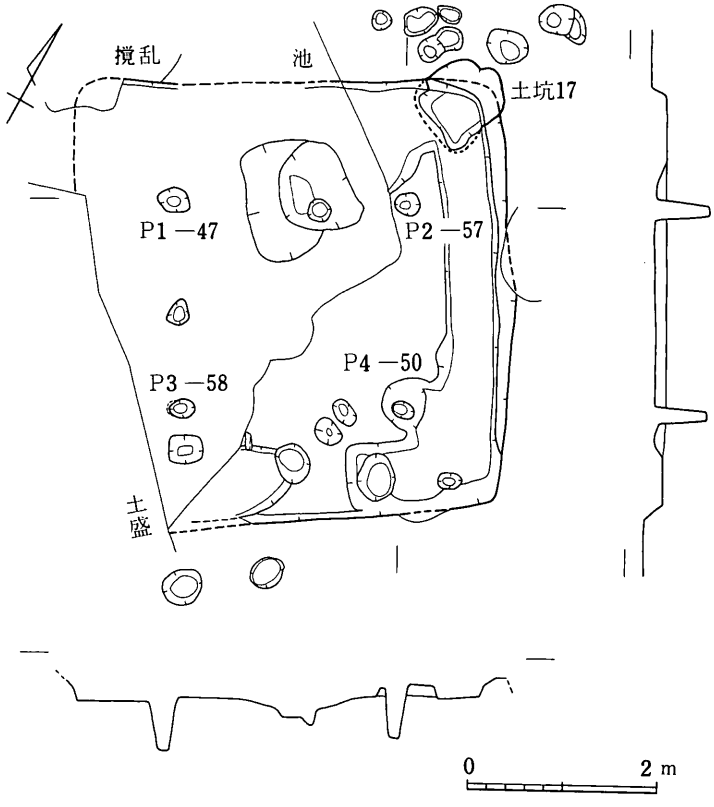
第142図　GOA　６号住居址

態で、炉縁石に使われていたと思われる石が中心部まで移動している。本来、炉縁石を持つ土器埋設炉で、破壊のため焼土はあまり認められなかった。

遺物　床直上まで池により切られているため遺物は少なく、壺・甕・高坏がある。出土遺物か弥生時代後期恒川Ⅵ期に比定される。（佐合英治）

7号住居址（第143図）

遺構　GOABB58を中心に検出された。北壁の一部と住居址北西側は現代の池に、北東隅上面を土坑17に切られている。西壁は調査の土盛り部分になり、未調査に終った。4.5×(4.5)mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN27.5°Wを示す。壁高は残存部分で15～10cmを測る。床面は黄色砂土までほぼ水平に掘り、20cm前後黄色土混りの黒色土を埋めて、はり床としている。半分程池に切られ、残存部分では主柱穴の内側部分がきわめて堅く良好である。東側壁ぎわは60～50cm幅ではり床がみられず、黄色土が混じる黒色土面があり、南壁も同様であった。ただ南壁の中央部は堅いはり床が壁ぎわまで続いていた。壁ぎわの黒土面については、当初周溝と考えて掘り上げたが、周溝にしては幅が広すぎ、住居址内の利用形態の差により床面に硬軟の差が生じたと考えられる。一応、実測図には落ち込みとして表現したが、今後住居址空間利用等を考える上での検討課題の一つである。なお、南壁中央の堅い床面部分は、入口部と考えられる。主柱穴はP1～P4で、P3・P4は東西方向に長く割り材を用いた柱が考えられる。炉址は確認できなかったが、池に切られる北側部分に位置すると考えられる。



第143図　GOA　7号住居址

遺物　出土量は少ないが、ほとんどが残存する床面からの出土である。土師

器壺・甕・高坏・器台などがみられる。

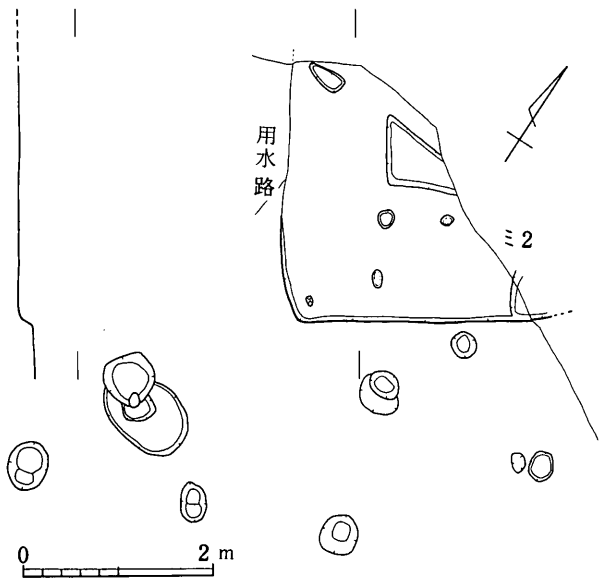
遺物から古墳時代の前期恒川Ⅶ期に比定できる。　（山下誠一）

8号住居址（第141図）

遺物　ＧＯＡＢＧ56を中心に検出した。5号住居址を切り、溝址2に切られ約半分残っていた。(3.5)×3.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ133°Ｗを示す。当初5号住居址との切り合い関係をつかめず、同時に調査に入ったため、確認壁高は5号住居址床面から10cmを測る。周溝は北西・南西壁下にあり、幅15cm・深さ10～4cmである。南隅は床面が軟かく40cm幅の落ち込みになり、周溝の確認はできなかった。床面ははり床になっており、壁下50cm幅で軟かいが、それより内側は堅く良好である。はり床をはずすと地山上面は凹凸があり、5号住居址の主柱穴・穴・溝状の落ち込みを検出したが、本住居址の主柱穴は確認できなかった。壁下に深さ20cm前後の穴があり、主柱穴の可能性もある。炉址は地床炉で、南西壁下60cm内側にありやや西隅に寄っている。はり床面が良く焼けていた。

遺物　出土量は少なく、土師器壺・甕・高坏などで、はり床中から鉄器片が出ている。

出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期の住居址である。　（佐々木嘉和）



第144図　GOA　9号住居址

9号住居址（第144図）

遺構　ＧＯＡＢＤ50にかかる住居址である。溝址2に切られ、用水路・道路にかかるため、調査した範囲は2.5×2.5mである。方形の竪穴住居址と思われ、検出面から床まで10cm前後である。床面は堅く良好であった。

遺物　床面から土器片と石製紡錘車が出土している。遺物から弥生時代後期恒川Ⅵ期の住居址であろう。

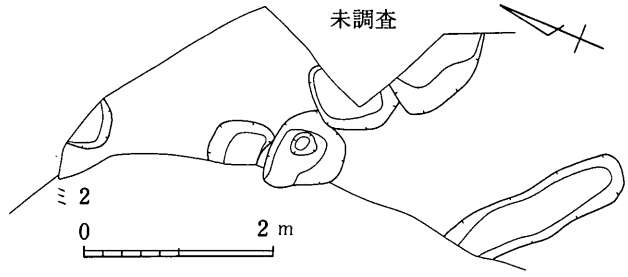
（佐々木嘉和）

② 時期不明

10号住居址（第145図）

遺構　溝址２の東側、三角形に残った用地を調査中に、きわめて堅い床面を確認し、住居址とした。北側は道路、東と南側は宅地下であったため荒れており、西は溝址２と切り合うため、規模・主軸・炉址等の施設は確認できなかった。床面上の穴は床面を確認する前に把えられ、本住居址より後世のものである。溝址２との切り合い関係は新しい攪乱等もあり断定はできないが、溝址２の覆土中に床が確認できず、本住居址が溝址２に切られている可能性が強い。

遺物　土師器甕の細片が出土しているが本住居址に伴うものか不明で、時期を決定することはできなかった。（佐合英治）



第145図　GOA　10号住居址

2）建物址

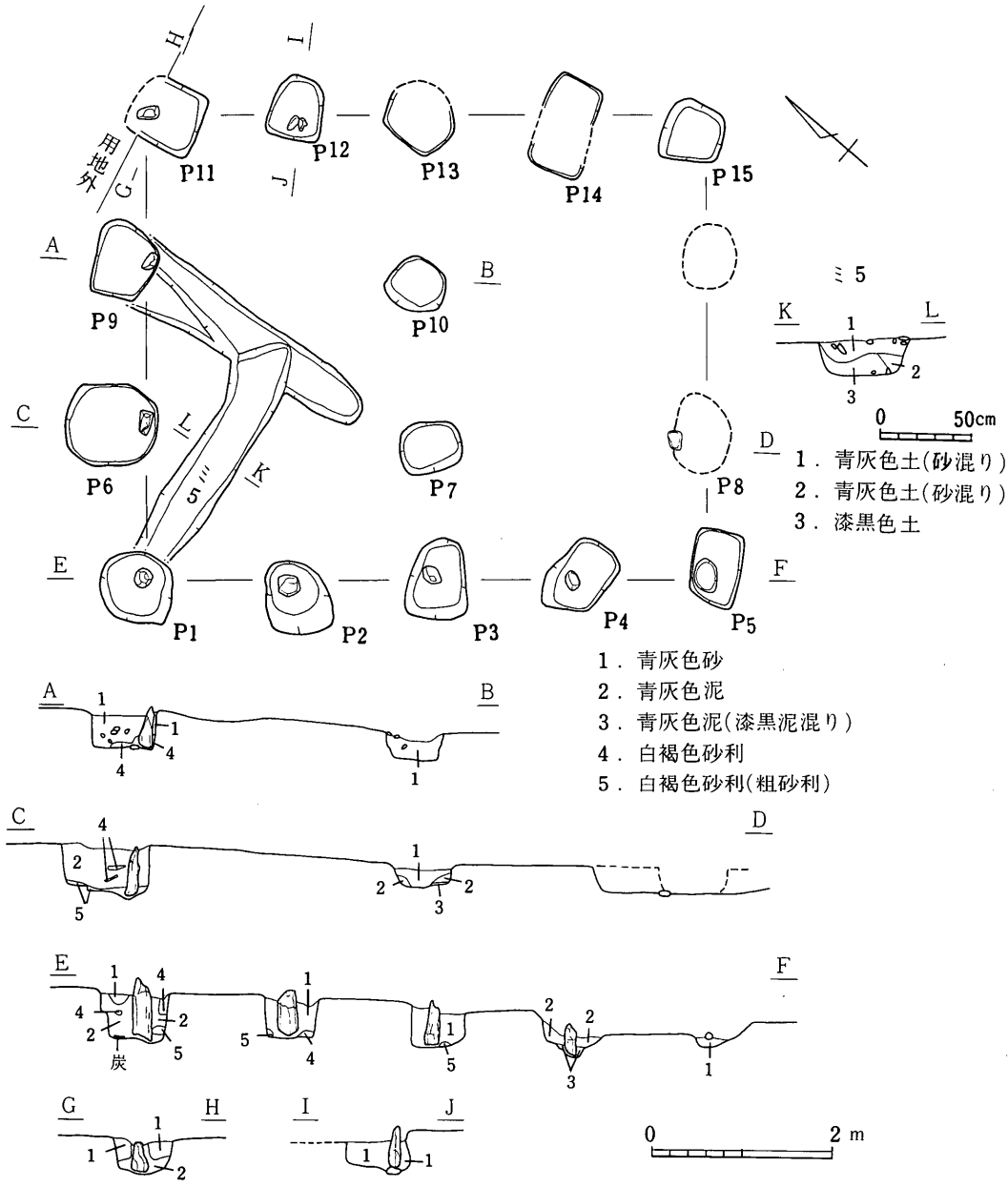
建物址１（第146図）

遺構　ＧＯＡＡＯ47を中心に検出した。溝址５を切る。用地外にＰ11の柱掘り方がわずかにかかったが、全体を把握した。柱間４×３の掘立柱建物址で、桁行6.2m・梁行5.1mを測る。柱間寸法は桁行1.54m・梁行1.7m、桁行方向はＮ40°Ｗで、ほぼ南東に向いている。段丘後背湿地の泥混り礫層中に、柱の先端を検出し、徐々に掘り下げて柱掘り方14個とその中に残る柱根８本を確認した。柱の掘り方平面は不整方形であり、検出面から底面まで60～25cmの深さである。東柱の掘り方が浅い他は底面レベルはほぼ一定であり、つき固められて堅くなっていた。Ｐ12の柱根下に石を置き礎盤としていたが、他の柱下部には特別の施設は認められなかった。柱は割り材で、掘り方の上部は腐食が進みグシャグシャしているが、下部は建てられた時のままであった。太さに均一性はなく形も様々である。Ｐ12は柱根の節から判断すると元末を逆に立てられている。柱根の表面を炭化させており、炭化後に手斧削りをしたと認められるものもある。柱の底部は斧で斜めに切断されており、切込角度はほぼ60度である。Ｐ１の柱は丸太の¼を使っており、外側の年輪径か

ら、直径50cm以上の丸太と推定できる。材質は針葉樹であるが樹種は確認していない。

柱掘り方内等から時期を決定できる遺物の出土はないが、土層から推定して奈良時代と思われる。

（佐々木嘉和）



第146図　GOA　建物址1、溝址5

柱穴No.	P1	P2	P3	P4	P6	P9	P11	P12
現存長	74	50	59	38	58	57	38	50
断面形	不整楕円形	不整楕円形	不整楕円形	不整長方形	不整長方形	不整長方形	不整楕円形	全体腐植しているが不整長方形と思われる。
断面長径×短径	24×20	22×18	20×15	24×15	26×13	22×15	23×17	断面現存長15×10
底部切断角度	60°外側より芯へ	クサビ状に両側から切断大きい面67°小さい面60°	60°	60°	60°	60°	65°	腐植しているが60°に近い
表面の状態	炭化後手斧削り	炭化後手斧削り	炭化	炭化後手斧削り	炭化後手斧削り	炭化	炭化	不明

第1表　GOA建物址1、柱根計測表（単位cm）

建物址2（第139図）

遺構　GOAAX45周辺に検出した掘立柱建物址である。4号住居址を切る。用地外と用水路にかかり、当初それぞれの掘り方を単独に土坑と考えたもので、確認した柱間は(1)×3である。桁行は1間確認し、柱間寸法は1.22m、梁行柱間寸法は1.2mを測る。梁行の中間2本の柱穴は一つの掘り方であり、平面は不整長方形である。他の柱穴の平面は不整円形で、検出面からの深さは70～40cmである。すべての底部に浅い落ち込みか石があり、柱位置を示すと推定される。

時期は決め手になるものがなく、4号住居址（古墳時代前期）よりは新しいことを把握したのみである。

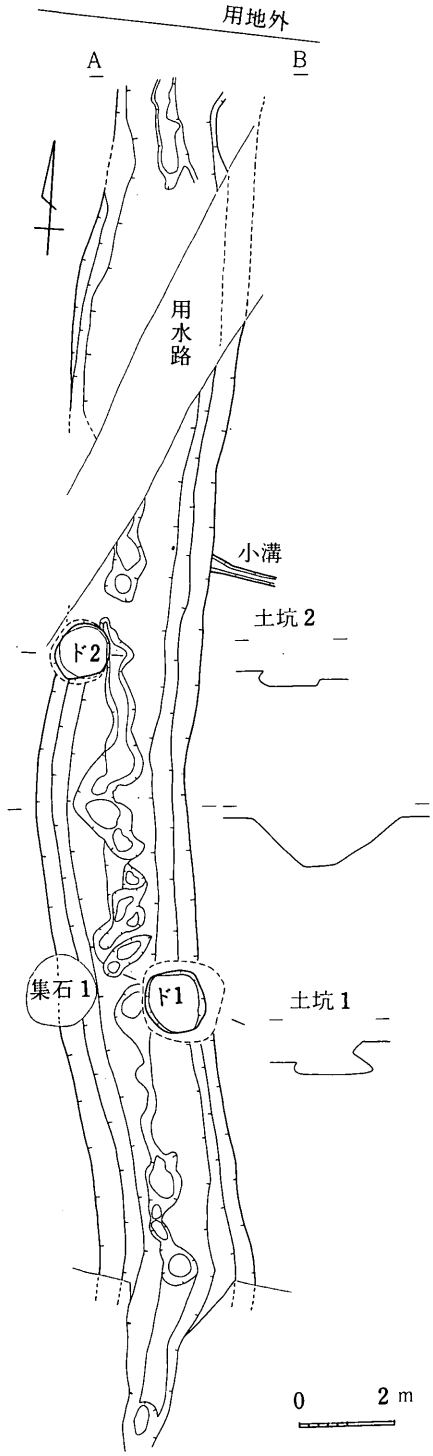
（佐々木嘉和）

建物址3（第139図）

遺構　GOAAY46に検出した掘立柱建物址である。4号住居址を切り、建物址2と重複する。建物址2と同様当初土坑と考えたもので、用地外・用水路にかかり、柱間(2)×(1)を確認したのみである。桁行2間の柱間寸法は2.04mで、梁行の柱穴は完掘できないので寸法は確認できなかった。柱穴平面は不整長楕円形で、検出面からの深さは1～0.5mを測る。建物址2と重複しており、ほぼ直角に重なっている。切り合い関係は確認できなかったが、関連のある建物址と推定される。

出土遺物等による時期決定はできないが、4号住居址を切ることから、古墳時代前期よりは新しい。

（佐々木嘉和）

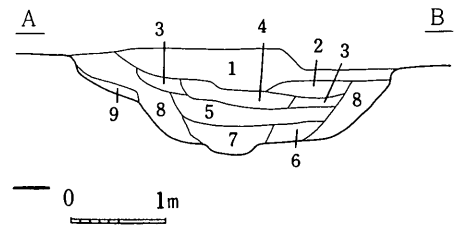


3） 溝 址

溝址1（第147図）

遺構 GOA用地内をほぼ南北に横断する溝址で、土坑1・2、集石1に切られる。一部用水路が通り、両端は用地外に延びる。全体の規模等は不明である。確認した規模は長さ29m・幅約3m・深さは検出面から1m前後であった。方向はN4°Wを示す。覆土のほとんどに砂が混入しており、北方約20mの所にある湧水から水を流したものと推測される。掘り方は、開いたV字形で、意図的に壁面に段を付け掘られた可能性がある。水流によるえぐり込みのため、凹凸が著しい。底部から少し上に石が入っていたが、上流（北）により多く認められた。

本溝址の水を溝址2に入れたと思われる小溝が溝址1・2の間に検出され、溝址2との時間差は少ないと推定できる。



1．茶褐色土
2．砂土(黒色土混り)
3．黒色砂質土
4．茶褐色砂質土(砂利混り)
5．茶褐色砂質土
6．灰黒色砂質土
7．灰褐色砂質土(礫砂利混り)
8．灰褐色砂質土
9．黒色砂質土(漆黒土混り)

第147図 GOA 溝1、土坑1・2

遺物　出土量は多い。土師器壺・甕・高坏・器台・鉢・石器等が出土した。布留式甕・播磨系甕の出土は注目される。

遺物から本溝址の終焉は古墳時代前期前半と思われる。（佐々木嘉和）

溝址２（第148図）

遺構　ＧＯＡ北半部に溝址２を検出した。円形になる溝址である。１号・２号・３号・４号・５号・８号・９号・10号住居址を切り、土坑３・４に切られる。用地外・市道・用水路にかかり約半分調査した。規模は溝外側の径は30m内側は22m前後を測る。溝の幅3.2～2.4m、検出面から底部まで1.2～0.8mを測る。断面形は逆台形で、掘り方の外壁は急傾斜で底部に至るが、内壁は緩傾斜である。東側の溝には内壁に段が付けられ、内壁全体に粘質の黄色土が、20～15cmの厚さではり付けてあり、一旦掘った面を覆う意味が考えられる。底部に石があったが、西側は小さく東側は人頭～拳大であり、量は少ない。土層を見ると、砂・泥が比較的きれいに入り水の流れで荒れた状態の所がなく、水を湛えていた様子である。

遺物　東側溝の石の間から鉢・高坏の脚部片、西側溝は漆黒泥土層から高坏片が出ている。出土量はわずかであった。

切り合い関係と遺物から、古墳時代前期の遺構である。溝址内側の平坦部では、古墳時代前期以前と中世以降の遺物が出土するのみで古墳時代後期から平安時代の遺物は一切出土しておらず、また内部において関連すると考えられる施設も確認できず、一定の盛り土があった可能性も強く、本址の性格として、古墳もしくは円形周溝墓と考えられる。（小林正春）

溝址３（第136図）

遺構　ＧＯＡＡＴ56を中心に１号住居址を切る付近のみに検出された。遺構検出面よりはかなり上から掘り込みがあったと考えられ、検出したのは長さ約５m・幅１～0.7m・深さ10cm前後で、底部ぎわのみである。また、北側は検出面まで底部が達しておらず、１号住居址の南側は全体が削平されているため検出できなかった。ほぼ地形の傾斜に沿っており、覆土中にかなりの砂利が入り、幅・方向等規格性がなく、自然の流路と考えられる。

遺物　覆土中に弥生時代後期土器片、古墳時代土師器・須恵器片などが出土し、古墳時代以降に位置づけられるが、詳細時期は不明である。（小林正春）

溝址4（付図1）

遺構　GOAAH50～55に検出した。長さ約10m・幅90～50cm・深さは検出面から20～10cmを確認した。検出面は砂で、人工的な溝址ならば何らかの施設が必要と思われ、後背湿地の自然溝址と推定した。この検出面では木器など植物遺体が出土している。検出面の土層から古墳時代～奈良時代に位置づけられる。（佐々木嘉和）

溝址5（第146図）

遺構　GOAAO46にかかって検出した。建物址1に切られ、建物址1のP1から東へ2.5mと、P9から南へ3mを確認した。幅60～40cm・深さは40～20cmを測る。溝状に凹むが、水が流れた痕跡はなく、覆土中に砂利が入っており、砂利を混入して埋めもどしたと推定される。

遺物　土師器・須恵器片がわずかに出土している。

出土遺物による時期決定はできないが、土層及び切り合い関係から建物址1と同時代の奈良時代か古墳時代後期の遺構と思われる。（佐々木嘉和）

溝址6（付図1）

遺構　GOAの後背湿地中央に位置する自然溝址である。砂層面に植物遺体が多量に混入する部分があり、掘り上げて凹んだ部分を溝址6にした。規模など推定の域を出ず、長期間にわたる湿地の水路である。

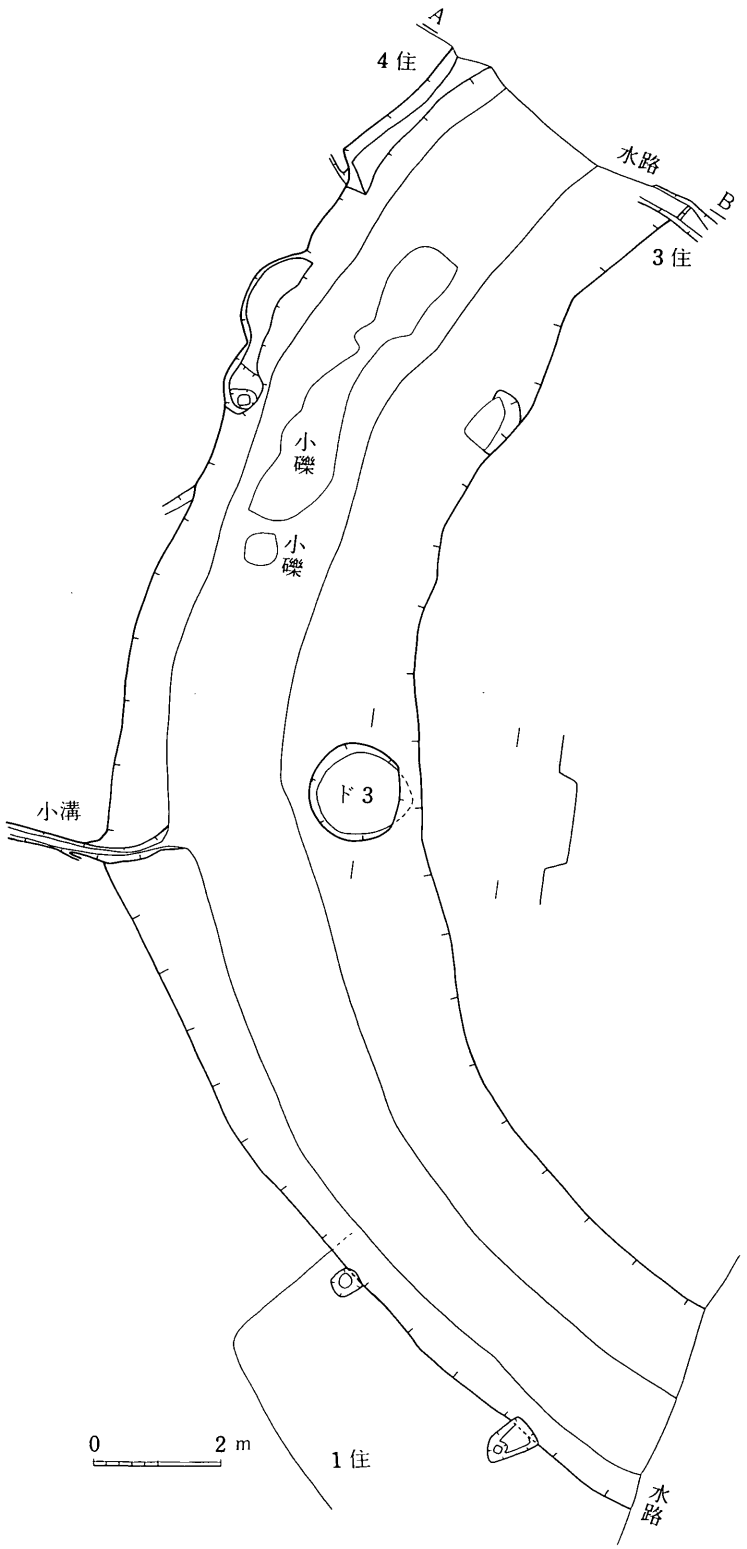
遺物　湿地土層で5層前後の各グリットで取り上げた遺物は、本址に混入していたものが多い。遺物出土量はきわめて多く、土師器甕・坏・高坏、須恵甕・蓋坏・高坏・器台などである。

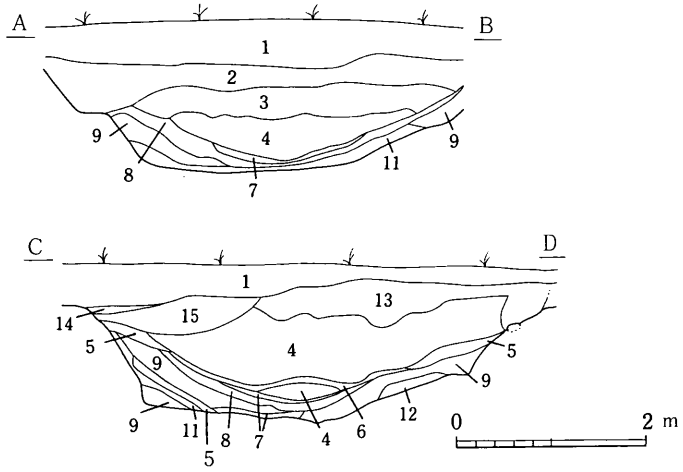
主体となる時期は古墳時代後期である。（佐々木嘉和）

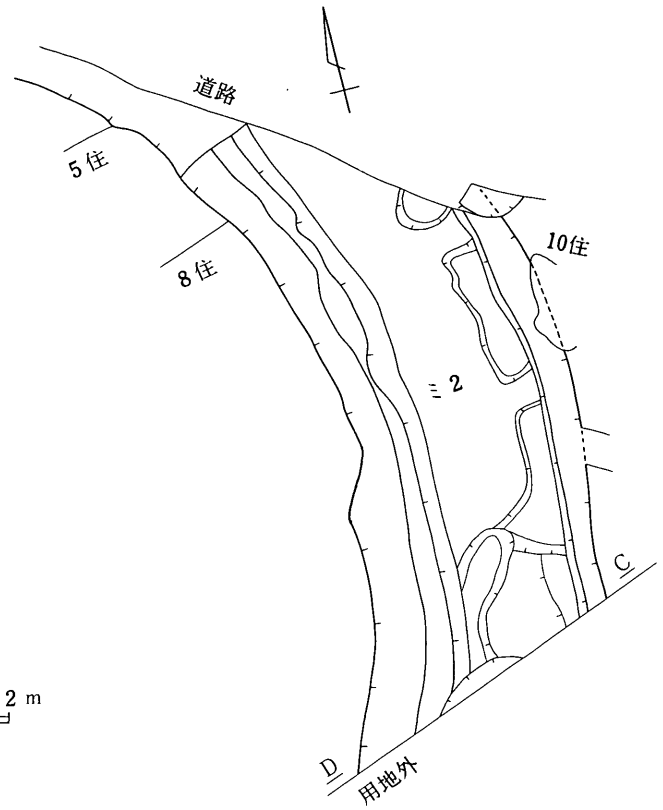
小溝址（第137・148図）

遺構　GOAAS・T51に検出した。2号住居址を切り、溝址1と溝址2をつないでいる。長さ約3m・幅30cm・深さ検出面から20～10cmを測る。水の流れた痕跡があり、溝址2の壁上で急に50cmも下がっている。溝址1から溝址2へ水を流したことは歴然であり、溝址1・2が同時存在であることを証明している。

遺物　打製石斧が1個出ているが、2号住居址の遺物と思われる。（佐々木嘉和）







1．耕土
2．暗褐色土
3．暗褐色砂質土
4．砂土
5．褐色土
6．褐色泥土
7．灰褐色泥土
8．漆黒泥土
9．褐色土(黄色土混り)
10．暗褐色粘質土
11．黄色土(褐色土混り)
12．褐色土(黄色砂土混り)
13．撹　乱(褐色土)
14．近世タタキ
15．近世溝

第148図　GOA 溝址 2、土坑 3

4） 土坑・小竪穴

ＧＯＡには土坑１～21まである。規模など大小様々あり、位置・規模は一覧表にし、記述は特徴的なものだけにとどめた。（佐々木嘉和）

土坑２（第147図）

溝址１を切る。覆土中に石・焼土・炭が比較的多く入っていた。遺物は天目茶垸・染付磁器皿片がある。皿は明朝の魚紋染付磁器で、出土例の少ないものである。

遺物から中世の土坑であろう。

土坑４（第149図）

溝址２を切る。覆土中に焼けた石・炭化米・鉄片が入っていた。炭化米は固まり、ブロック状になっている。形態等は他の中世と推定した土坑と似ている。

土坑５（第149図）

不整長方形で、整った土坑である。壁は垂直に近く、底は平らに掘られている。遺物の出土量も比較的多く、ほとんどが金属製品で永楽通宝・鉄釘・飾り金具(円・方形板)・鉄鏃の他に、焼骨・炭化物が出土しており、中世の墓壙と推測される。

土坑11（付図１）

湿地にあり、黒色土面に灰白色砂利が入っていた。深さが検出面から６cmとわずかであるが土層を２層確認した。下は漆黒土の混じる砂利である。この層から植物遺体（木・竹片）・炭化米・土師器片が出土している。湿地全体の土層から平安時代の遺構と推測されるが、断定はできない。

土坑13（第150図）

５号住居址を切る。覆土中に陶磁器片が混入しており、近世のゴミを廃棄した土坑と思われる。

小竪穴１（第136図）

遺構　ＧＯＡＡＲ58にある。小竪穴２と切り合い畦畔にかかって完掘はできなかった。1.6×1.2mの不整楕円形で、底部は鍋底状になり、検出面から30cmの深さを測る。覆土中には礫が多く入り集石状を呈している。遺物は覆土中から灰釉陶器片の出土をみたが、出土量はわずかである。遺物から平安時代～中世の遺構であろう。

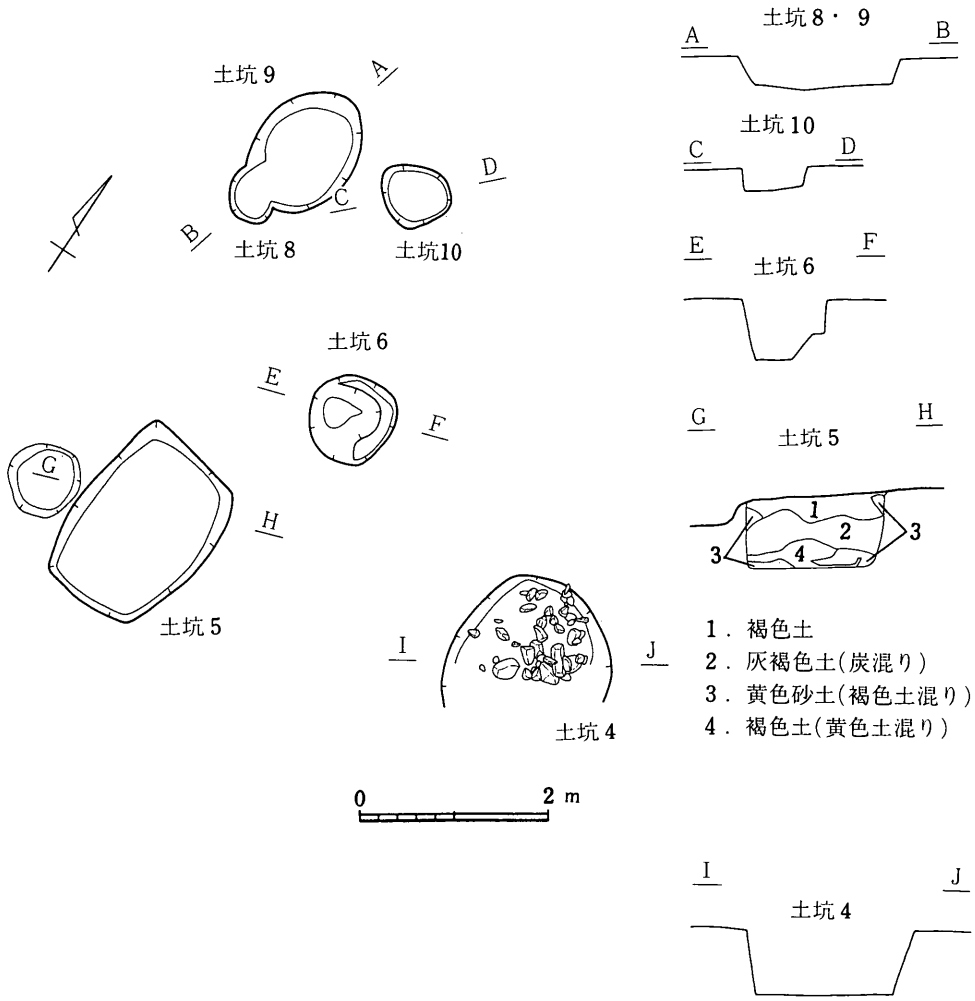
小竪穴２（第136図）

遺構　ＧＯＡＡＳ58にある。小竪穴１と切り合い、畦畔にかかる。直径1.4mのほぼ円形で底部は鍋底状を呈する。検出面から20cmの深さを測り、覆土は暗褐色土である。

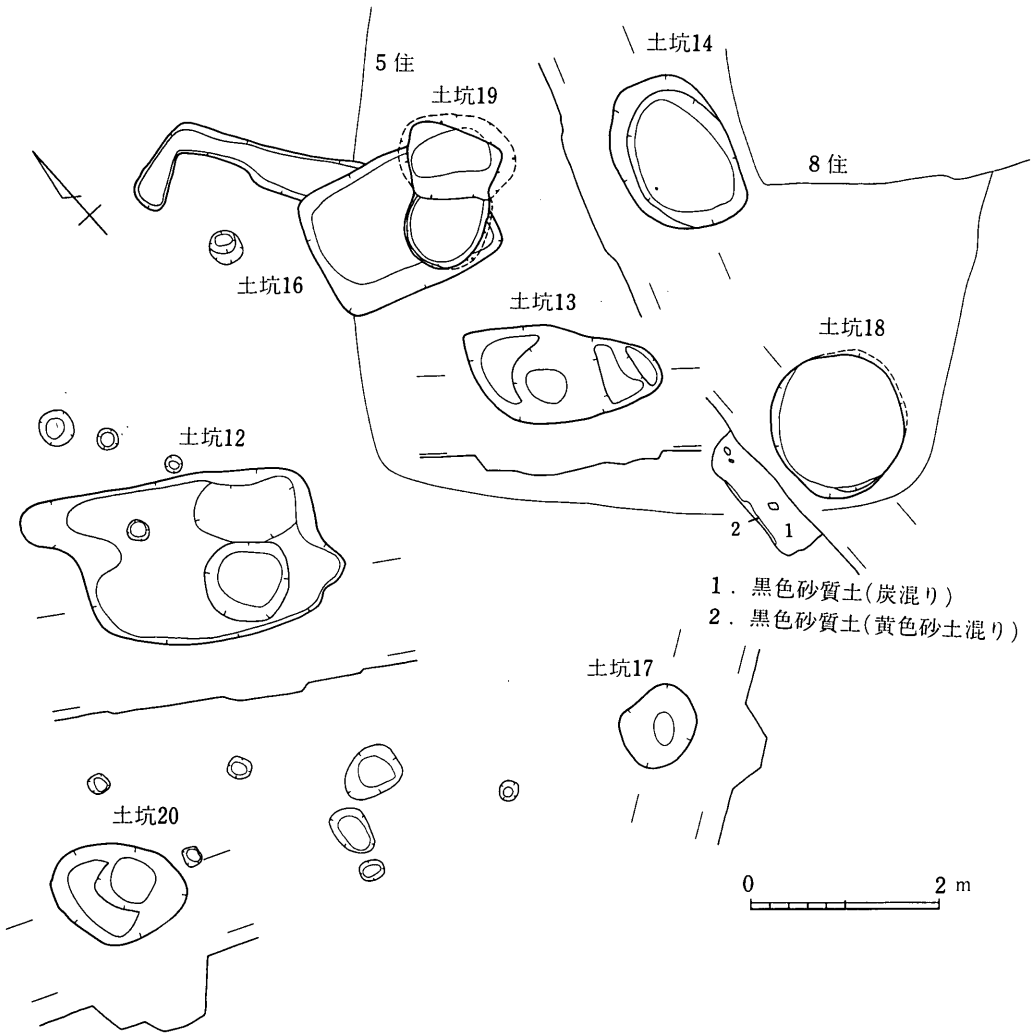
遺物　土師器の小片が出土したのみである。

小竪穴１とほぼ同時期と推測され平安時代～中世であろう。

（佐々木嘉和）



第149図　GOA　土坑４・５・６・８・９・10



第150図　GOA　土坑12・13・14・16・17・18・19・20

5）集石・石列・暗渠

集石 1（第151図）

遺構　ＧＯＡＡＰ54にある。溝址１を切る直径1.4mのほぼ円形で、検出面から10cmと浅い。石の量は比較的少なく、覆土は炭混じりの漆黒色土である。底部は焼けていた。

遺物　土師器小片がわずかに出土している。

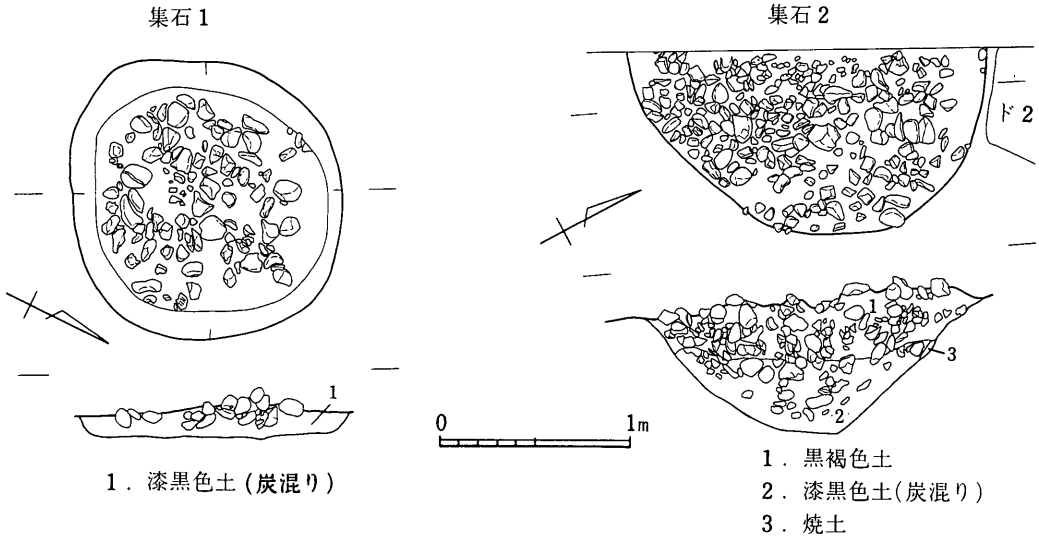
時期は決定材料がなく、推定できない。

集石２（第151図）

遺構　ＧＯＡＡＱ51にある。用水路にかかり半分調査した。直径1.8mのほぼ円形である。断面は逆三角形で、検出面から70cmの深さを測る。石は底部近くまで入っており、中央部の石は破砕された細かなものが多い。覆土には炭が混入し、壁面に焼けた所があった。掘り方が深くなるが集石１と似ており、同じ性格を持つものと推測される。

遺物　土師器片がわずか出土している。

集石１同様に時期は不明である。



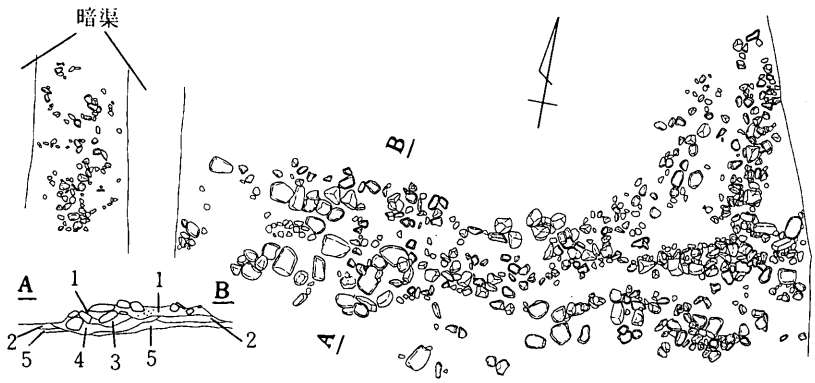
第151図　GOA　集石１・２

石列１（第152図）

遺構　ＧＯＡＡＥ～ＡＪ54～56に検出した遺構であり、湿地褐色砂土上面に人頭大から拳大の石が入っていた。暗渠２本に切られる。確認した規模は、長さ南側12.5m・東側４m・幅３～1.5mを測る。石の混入する厚さは約50cmである。湿地帯を横断する方向に並んでおり、自然の堆積ではない。当初水田址の畦畔と推定したが、石列の両側は砂ばかりで水田址とは断定できない。石列をはずすと木器などの自然遺物の出土する砂層で、その砂層に木杭列を検出した。石列は木杭列とほぼ同方向で関連性が考えられる。

遺物の出土がないので時期の確定はできないが、砂層からみて中世以後である。

（佐々木嘉和）



1.砂土(褐色砂利混り)
2.褐色砂土
3.青灰色砂土
4.白色砂利
5.泥

第152図　GOA　石列1

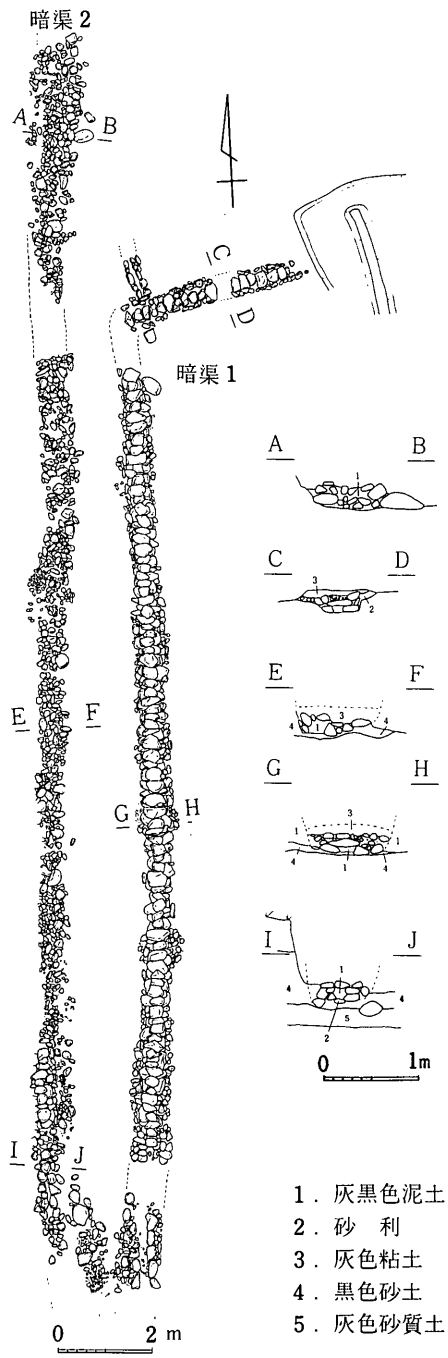
暗渠1（第153図）

遺構　GOAAH48を基点にほぼ東西へ4.2m・南北へ19mのL字状に検出した。曲折部分と北端は後世の攪乱により、南東端は水田の境のために壊されている。確認延長の長い側の方位はほぼ南北を示し、北東へ延びる側はN76°Eを示す。長さ40～15cmの自然石と一部に割石を用い、全体の幅を90～60cmとし、2列の石はていねいに並べられ、溝状を成し、その内径は20cm程である。その上に透き間なく径50～20cmの石を置き天井としその上を粘土で被い、さらに5cm前後の砂利で全体が補強されている。確認した部分の底部は北側から南側へ53cm傾斜していた。南端には長さ60cmの竹が残存しており、三重に覆われた上部は水の浸透を防ぐものとも考えられ、排水のための暗渠ではなく、水を引くためのものと考えられる。

本址に直接伴うと考えられる遺物は出土しなかったが、遺構を検出した層位から中世以降と考えられる。（佐合英治）

暗渠2（第153図）

遺構　GOAAC50～AH45の道路境に検出した。暗渠1の確認延長の長い側の石組から1～1.5m西側にほぼ平行して22.5m確認した。幅は西側がすべて道路下となるため正確に把握でき



第153図　GOA　暗渠1・2

第153図　GOA　暗渠1・2

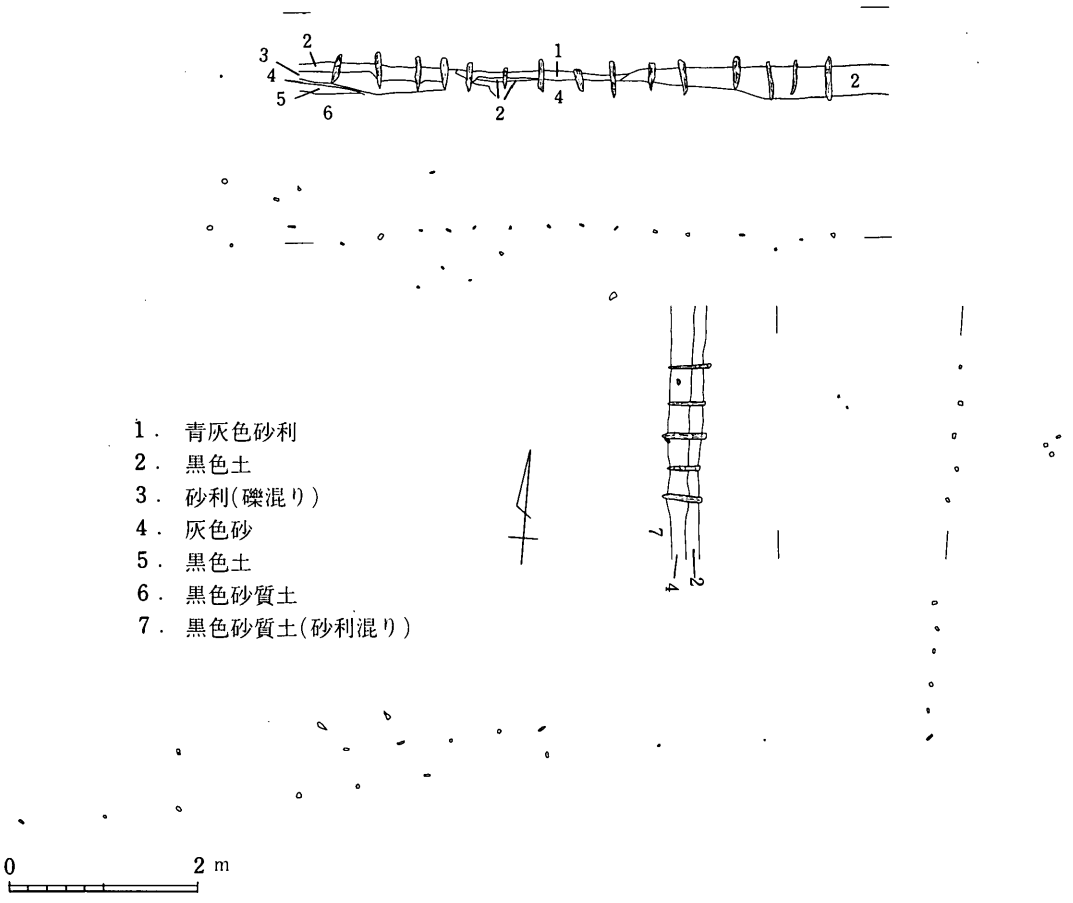
ないが1m程と考えられる。調査できた南端4mが径30cm前後の石を使って溝状に組まれている他は、径40～4cm程の石が雑に集められている。本遺構より西3m程の所に湧水があり、その侵入を防ぐ排水のための暗渠と考えられる。本址に伴うと考えられる遺物は出土しなかったが、暗渠1と同層に検出され、層位から中世以降と考えられる。（佐合英治）

6）杭列・土器包含層

杭列（第154図）

遺構　GOAAF～AIの50～55に検出した杭の並ぶ遺構である。湿地青灰色砂利中にコ字形に出土した。列になる杭とそうでない杭があるが、総本数は62本である。規模は南側1m・北側8m・東側6mを測り、杭が間隔1.3～0.3mで並んでいる。杭の長さは50～20cmで、丸太と割り材の2種類があり、直径は7～4cmで、いずれも端部を尖らしている。割り杭には皮の付いたものと、4面割ったものとがある。材質は針葉樹と広葉樹があり、確認できたのは檜と桜である。水田址の畦畔に打ち込まれた杭の可能性が強いが、水田面の確認はできなかった。

検出した土層は奈良～平安時代であるが、上層から打ち込まれた可能性もあり、奈良時代以降のものとしか判断できない。（佐々木嘉和）

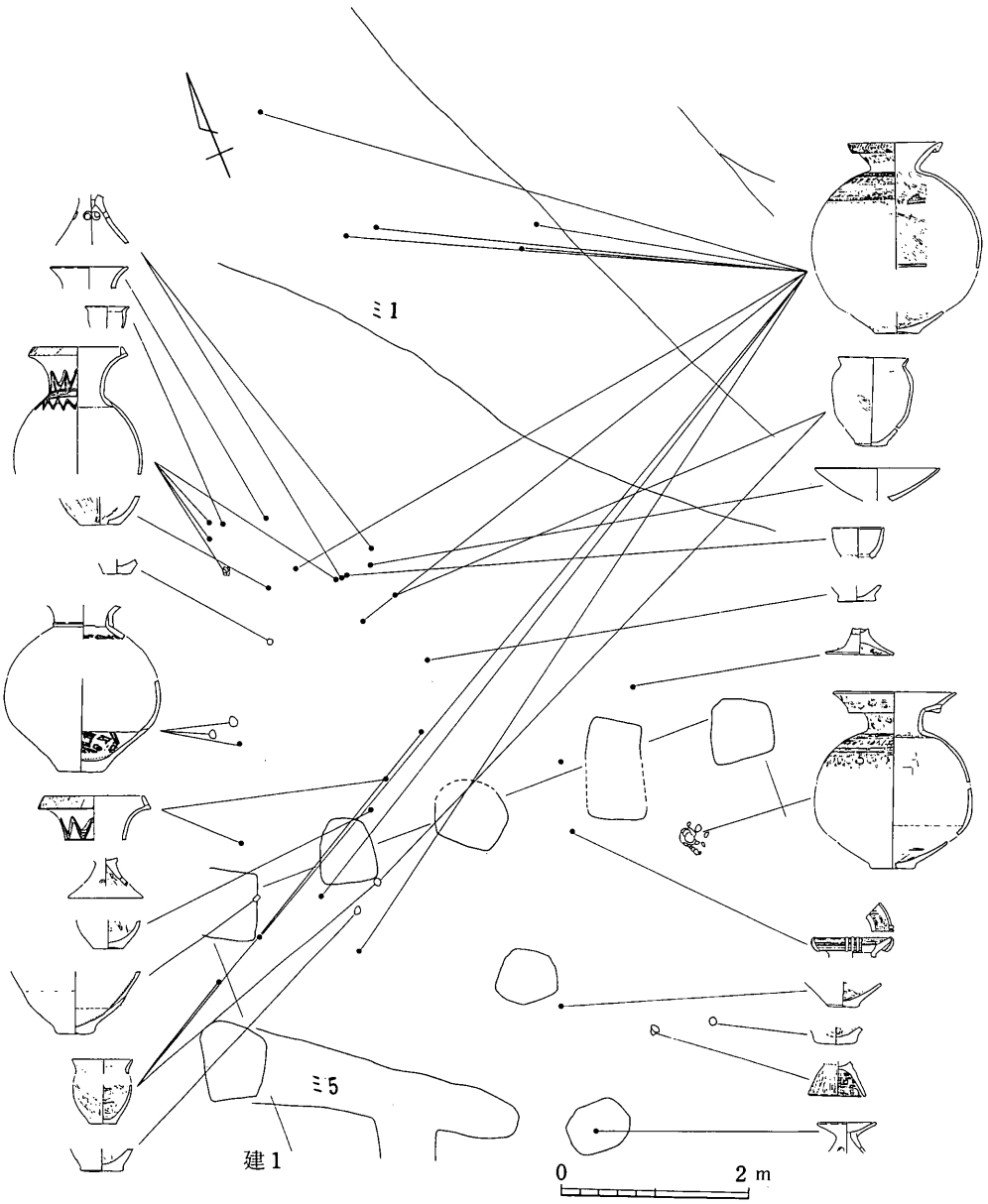


第154図　GOA　湿地帯杭列

A区土器包含層（第155図）

遺構　溝址1と湿地帯の間、GOAAR47付近を中心にして、6×6mくらいの範囲に土器が集中して出土し、当初は遺構に付随する遺物と考えて調査を始めたが、遺構の確認ができず、包含層とした。建物址1・溝址5に切られる。遺物は基盤の黄色砂土上面の黒色砂土中のほぼ同一面に集中し、完形に復元できるものはないが、個体でまとまって出土した。器種は壺が多く、図化したもの27点中15点と50%を越える。中では、パレス壺・文様を持つ有段口縁壺などやや特異なものが多く、層位・出土状態をあわせて考えれば、単なる包含層とは性格を異にするといえる。所在地点が湿地縁辺部であることから、水に対する祭祀による遺物である可能性があるが、断定できない。

遺物　土師器壺・甕・蓋・高坏・鉢・器台があり、出土状態を考えれば一括性は高い。出土遺物は古墳時代前期恒川Ⅶ期のものが多い。　（山下誠一）



第155図　GOA　A区土器包含層出土状態

4　恒川遺跡　恒川B地籍

1）住居址

①　弥生時代中期

A区からC区にかけ本地籍全域にわたり、弥生時代中期後半及び終末期にあたると判断される2時期の遺構が散在して検出された。路線延長約150mの間に2時期の遺構が認められるわけであるが、確認した遺構数は11軒の住居址と溝址が1本あるのみで、時期不明として把えた住居址及び後世の削平等により消滅したと考えられるものを加えたとしても、その分布状況はかなり間隔を置いてのものである。

遺構の分布状況から、その密度は低いが本地籍内全域が居住空間であったと判断される。また、住居址数があまり多くなく、それぞれがある程度の間隔を置いており、住居址外の空白部は、居住空間内における別の利用形態があったと考えられる。

なお、本地籍内全域に住居址が分布するが、西側に接するGOAの湿地隣接部には遺構の確認ができず、広範囲にわたる遺跡内において本時代においても土地利用上の規制がうかがえる。

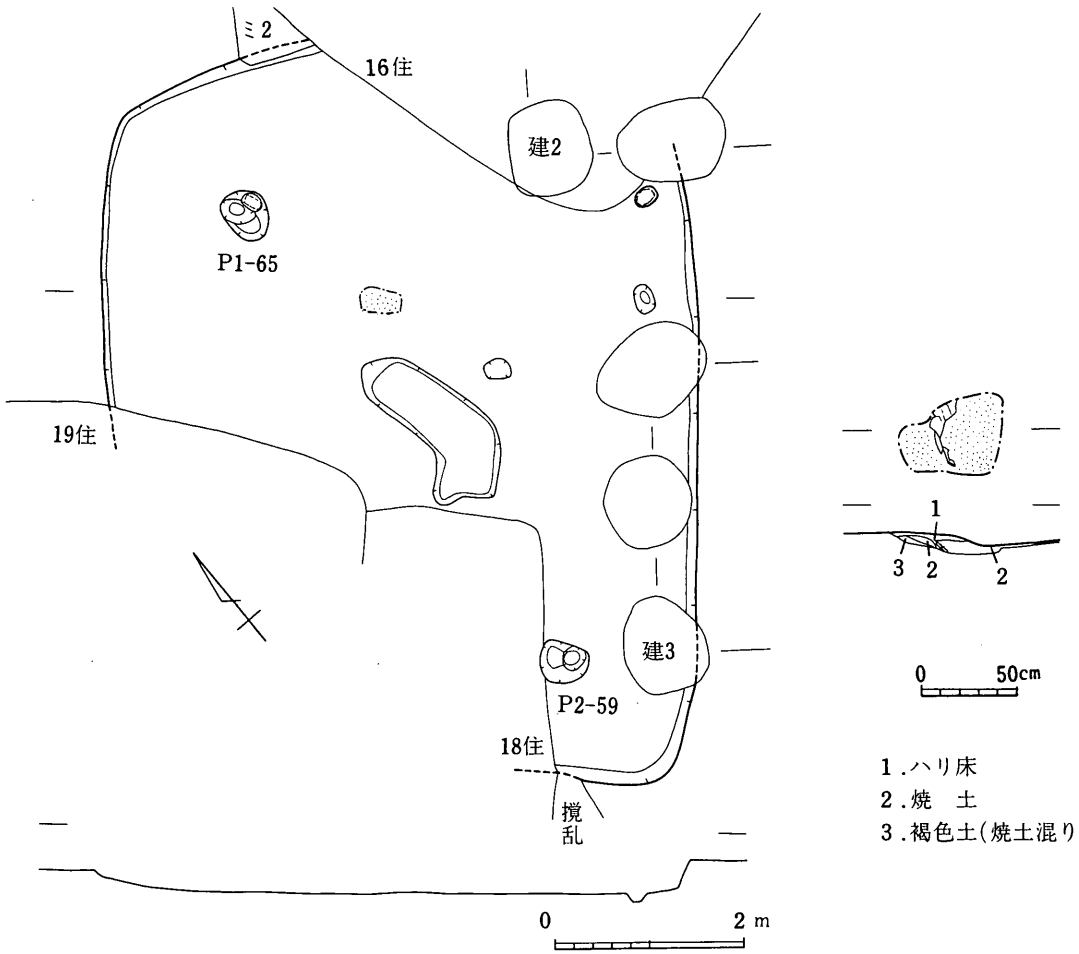
（小林正春）

8号住居址（第156図）

遺構　GOBAF48を中心に検出された。土坑1を切り、16号・19号住居址、建物址3、溝址1・2・3に切られる。7.6×6.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36.5°Eを示す。壁は残存部分で25～10cmを測る。床面は黄色砂土まで掘られ、堅くたたき状になりきわめて良好で、主柱穴より内側の部分が堅く、壁ぎわへゆるく高くなっている。主柱穴はP1・P2の2本が確かめられた。他は、他の住居址に切られる部分に位置し確認できなかった。炉址は住居址中央より1m程北東壁寄りにある地床炉である。最初は50×30cmの楕円形に焼土の範囲がみられた。断面調査において、焼土の下に壺を使った埋設炉と、はり床下に焼土を確認した。最初は土器埋設炉であったものを後に地床炉に造り替えたか、使用時に土器が壊れ地床炉としたと考えられる。焼土はかなり厚くみられた。床面上に本址に関連する施設はほとんどないが、東隅に台石が確認された。

遺物　出土量は少ないが、床面上から良好な資料が得られた。土器は、壺・甕・鉢・手づくねがあり、丹彩されたものが多いことが注目される。他に、打製石斧・横刃型石器・砥石・端部曲面磨石・台石・磨製石鏃・同未成品があり、実測できないが小鉄片が床面上から出土した。

遺物から弥生時代中期恒川III期に比定できる。　（山下誠一）



第156図　GOB　8号住居址

9号住居址（第170図）

遺構　ＧＯＢＡＧ53に、70×70cmの不整方形で、深さ約25cmの穴があり、壺の口縁部～胴部が出土した。土器の他に覆土中に石もあった。土器・石の状態から、貯蔵穴的な性格が考えられるが断定はできない。2号・14号・15号住居址に切られ、規模などは不明である。

遺物　壺の他、15号住居址中に弥生時代中期遺物があり、本址に伴うと考えられるが、量は多くない。

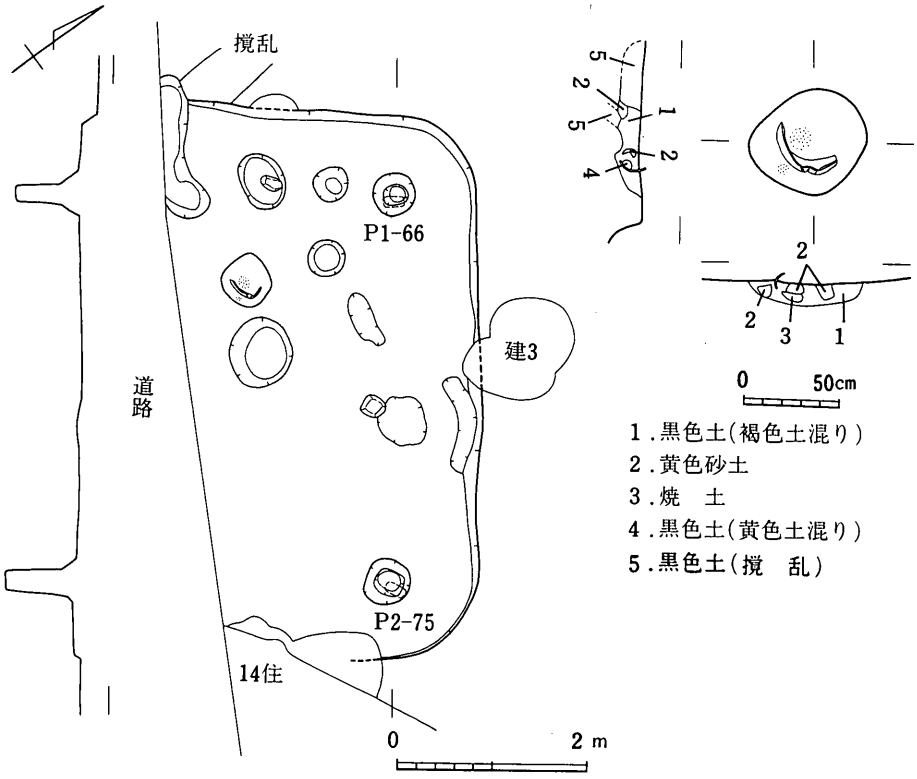
出土遺物から弥生時代中期恒川II期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

17号住居址（第157図）

遺構　ＡＤ52を中心とする住居址で、南側は用地を横断する道路にかかるため半分は未調査である。南東壁は14号住居址と後世の穴に切られ、東隅は工房址に上面を削られわずかに残存した。主軸方向はＮ50°Ｗを示し、長さは5.6mを測る隅丸方形の竪穴住居址と推定される。壁高は北西で13cm・東隅で７cmを測る。周溝は北東壁下の中央部に幅20cm・深さ６cmの浅い溝を約１m確認した。他の壁下には部分的にも確認できず、周溝とするにはやや疑問もある。床面はほぼ平坦で壁ぎわを除き、きわめて堅いたたき状の床である。主柱穴は２本確認した。柱を立てた後に掘り方部分にはり床しており、20×12cmの長方形の柱痕が確認され、割り材使用の柱が考えられる。Ｐ１・Ｐ２両方とも深さ20・17cmの位置で稜をもつものである。炉址は住居址の中心部から北西壁寄りにあり土器埋設炉である。直径50cmの範囲を20cm程掘り凹め、住居址内側寄りに壺の胴部片を半分検出した。炉址の埋土が安定したものでなく、当初は胴部全体が入れられていた可能性もある。焼土は全体に認められるが厚い部分はブロック状になっている。

遺物　出土遺物はきわめて少なく、炉址に使われていた壺、床面密着と覆土中よりの甕がある。他に北東壁中央部から１m程入った所に床面密着で台石が出土している。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅲ期に比定される住居址である。　（佐合英治）



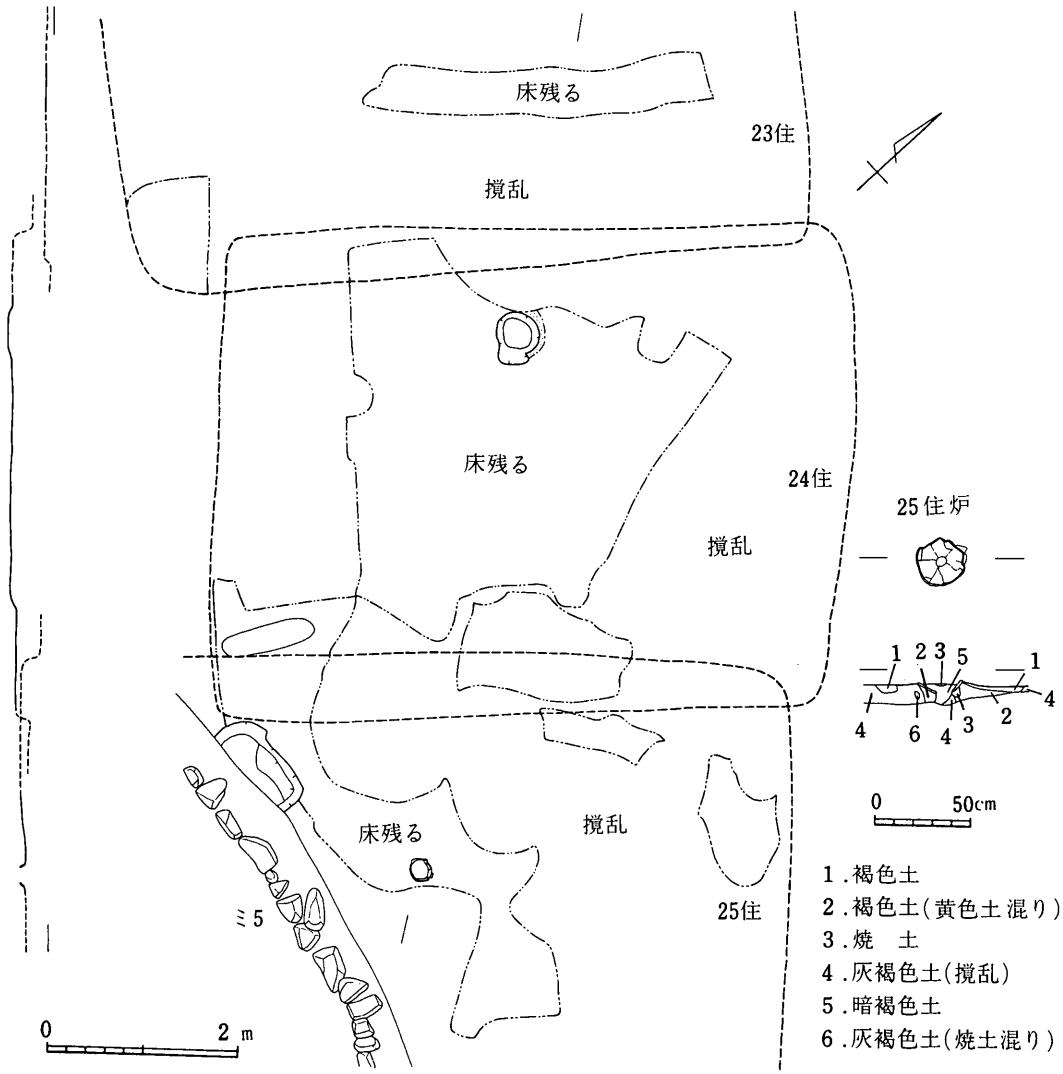
第157図　GOB　17号住居址

25号住居址（第158図）

遺構　ＧＯＢＡＴ50に炉址を確認した住居址で、南側は暗渠に切られ、北西側は24号住居址に切られている。また、耕作による攪乱が著しく、床は部分的に確認したのみである。検出された床面はきわめて堅いものであるが、壁・柱穴等は確認できず、規模・主軸方向等は不明である。炉址は土器埋設炉で壺の胴上部を使ったものである。焼土はブロック状にわずか認められた。

遺物　炉址に使用された壺の他、甕などが出土した。これらの遺物から弥生時代中期恒川III期に比定される住居址である。

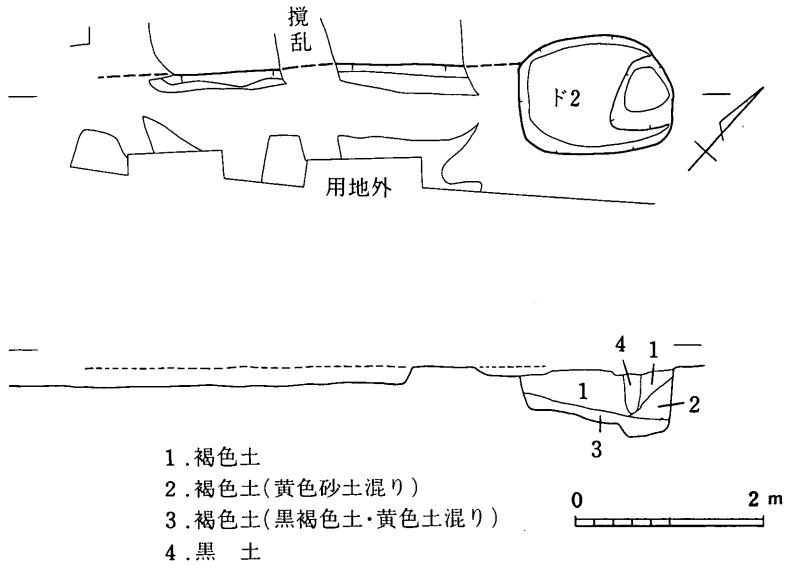
（佐合英治）



第158図　GOB　23号・24号・25号住居址

28号住居址（第159図）

遺構　ＧＯＢＢＧ52に検出された。南東側大部分が用地外にかかるうえ、壁・床が耕作の攪乱を受けているため、4.4×1.2mの範囲を調査したのみで、プラン・規模・主軸方向などは把握できなかった。北西壁の一部を確認し、壁高は15～10cmを測り、緩やかな立ち上りを示す。床面は黄色土まで掘られ、たたき状の堅いものである。しかし、残存部分はわずかしかない。



第159図　GOB　28号住居址、土坑2

遺物　弥生時代中期土器片が出土した。遺物が少ないため時期は決定しがたいが、一応弥生時代中期恒川II～III期と考えられる。

（山下誠一）

34号住居址（第160図）

遺構　ＧＯＢＣＲ46にかかって検出した。土坑11に切られ、用地外部分が大半のため４×１ｍとわずかの調査面積である。方形の竪穴住居址と思われ、覆土は黒色土が入っていた。壁高は検出面から床まで60cmあり、壁面は緩い傾斜を成す。床面はやわらかく大きな凹凸がある。

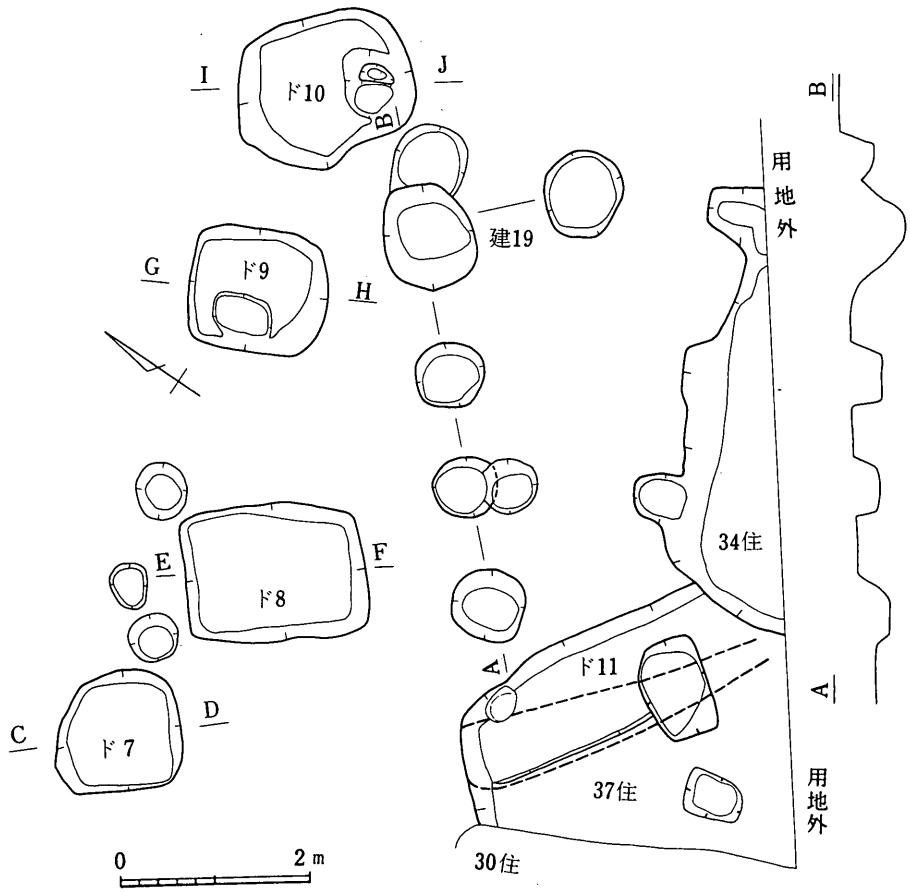
遺物　出土量はわずかである。弥生時代中期土器片、敲打器・磨製石鏃未成品がある。出土遺物から弥生時代中期恒川II～III期の遺構であろう。（佐々木嘉和）

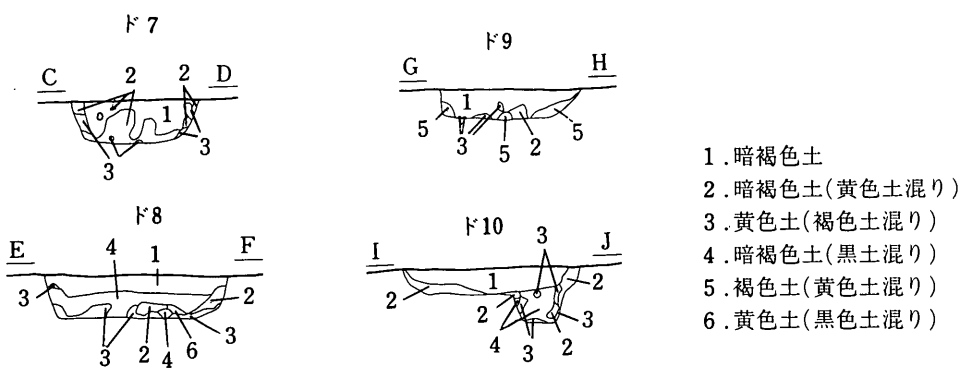
35号住居址（第161図）

遺構　ＧＯＢＣＢ47に土器埋設炉を検出した。39号・50号住居址、土坑13、溝址11に切られる。竪穴住居址と思われるが床面と埋設炉のみを確認しただけである。床面は炉址の周囲に堅い面が広がり、凹凸はあるがたたき状である。炉址は土器埋設炉で、攪乱のため約半分が壊されている。壺の胴部から頸部を逆位に埋めており、内側の覆土下端は焼けて堅くなり火床を成している。

遺物　床面上の所々に、土器片が集中してはり付いていた。他に甕・壺、打製石斧・砥石があり、麦と思われる炭化種子もある。

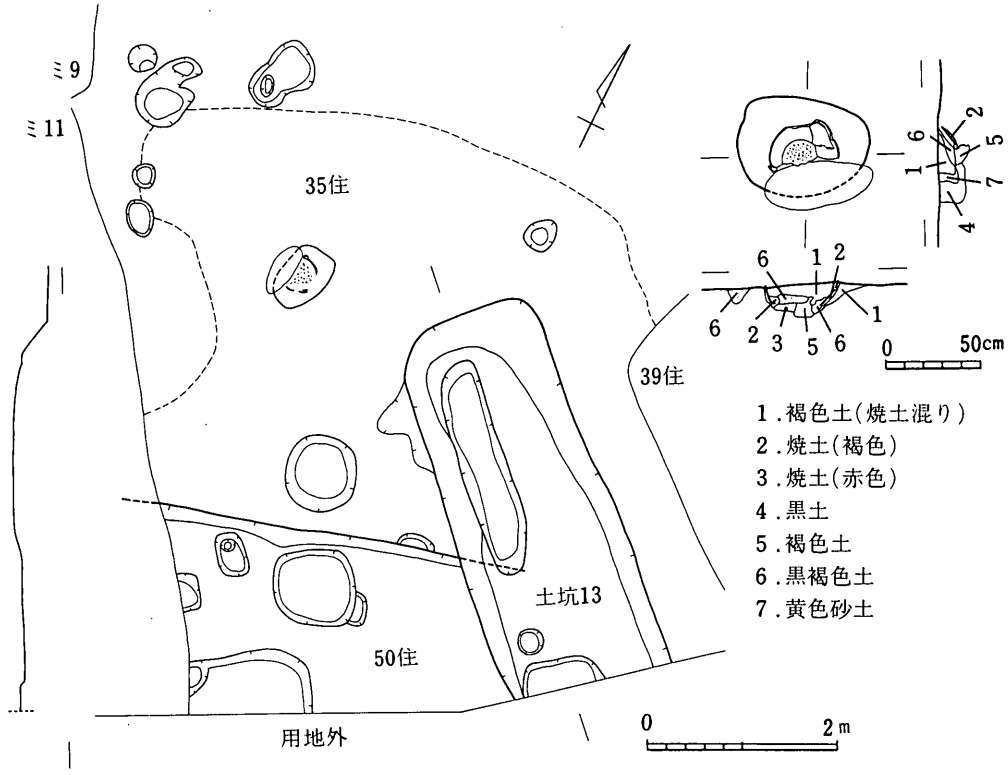
出土遺物から弥生時代中期恒川II期の住居址であろう。（佐々木嘉和）





1．暗褐色土
2．暗褐色土(黄色土混り)
3．黄色土(褐色土混り)
4．暗褐色土(黒土混り)
5．褐色土(黄色土混り)
6．黄色土(黒色土混り)

第160図　GOB　34号・37号住居址、建物址19、土坑７・８・９・10・11



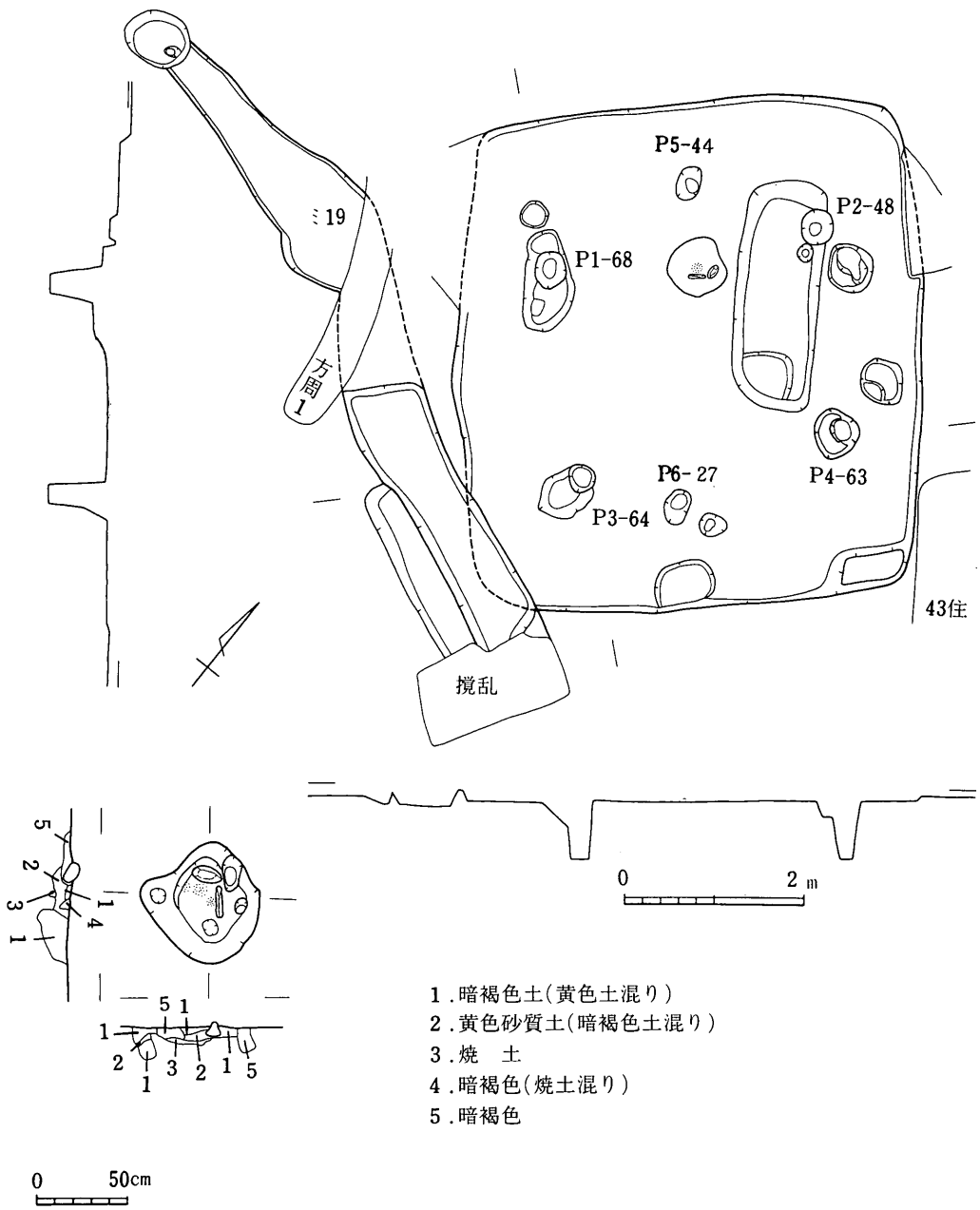
第161図　GOB　35号・50号住居址、土坑13

45号住居址（第162図）

遺構　ＧＯＢＢＲ48を中心に検出した。溝址19と長方形の落ち込みに切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は5.5×5.2m、主軸方向はＮ45°Ｗを示す。壁高は検出面から10cmと浅く、壁面は若干凹凸がある。床面は壁下から１～0.2mの範囲が軟かく、それより内側は堅く良好であった。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本で、平面は不整楕円形で比較的小さいが、深さは68～48cmと深い。Ｐ５・Ｐ６は、支柱穴もしくは間仕切り施設と思われる。東隅の床面が回りより10～２cm高く、入口部施設の可能性がある。Ｐ１の周囲は床面が黒っぽく、掘り下げたところ18～10cmの凹地となった。Ｐ２にかかる長方形の落ち込みは、床面を切っており、住居址より新しい遺構である。炉址は主柱穴Ｐ１・Ｐ２の中間でやや中央寄りにあり、地床炉で炉縁石２個をくの字状に配している。約10cmの掘り方があり、火床面は良く焼けていた。

遺物　出土量は少ない。Ｐ４周囲から東隅に多く、甕の２個体がＰ４を狭む形で出土した。台石が南東壁中央の浅い（７cm）穴から壁に倒れかかる様な形で出土した。他に、磨製石鏃・同未成品・敲打器が出ている。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅲ期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）



第162図　GOB　45号住居址、溝址19

46号住居址（第163図）

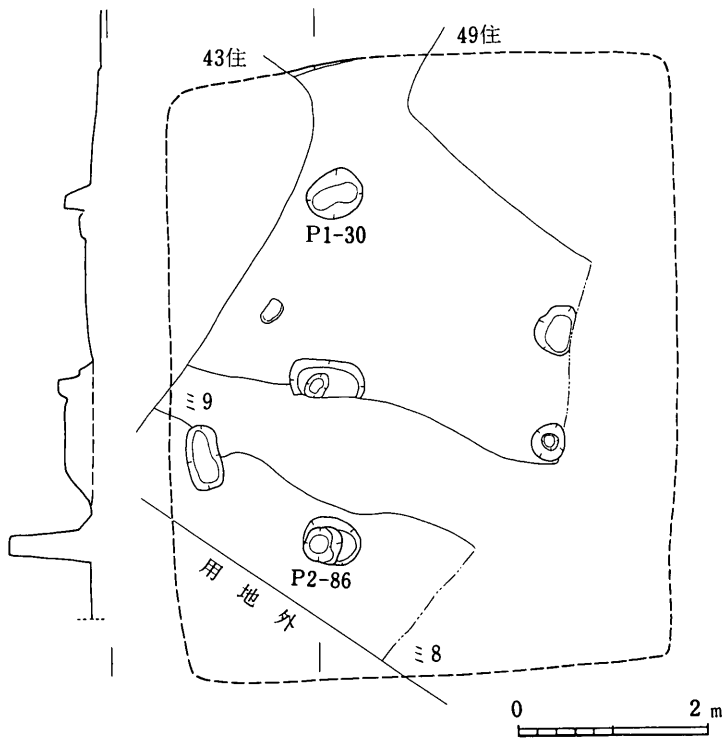
遺構　プラン検出作業中にBW49を中心に床面が確認された住居址である。43号・49号住居址、溝址8・9に切られ、南東隅は用地外になるため、規模・主軸は主柱穴等からの想定であるが、

5.4×6.5mの竪穴住居址で、主軸方向はN21.5°Eを示す。切り合いが多いうえ、もともと住居址の掘り込みも浅かったと思われ、確認できた壁は、43号・49号住居址間の80cm程である。壁高は12cmでほぼ垂直な壁面を成す。溝址9に切られた西側床面は、きわめて堅いが東側は砂質で軟かく、遺構検出中に上面を壊してしまったと考えられる。主柱穴は南側の2本を確認した。P1はP2と比べ50cmも浅いが、掘り方上面は、はり床され柱痕が確認された。P1・P2とも南北に長い掘り方でP2は床面より16cm下で段を持つものである。P3は深さ29cmの穴で溝址8に切られている。溝8の肩の部分に埋り込んだ甕と同時の検出で、焼土は確認できなかったが、この部分が土器埋設炉であった可能性が強い。

遺物　住居址として把握した時には覆土がほとんどなく、出土遺物はきわめて少ない。炉址に使われていたとした甕の他に、P1の南縁部に胴部から口縁部までの甕が床面密着で出土している。

これら遺物から弥生時代中期恒川II期の住居址である。

（佐合英治）



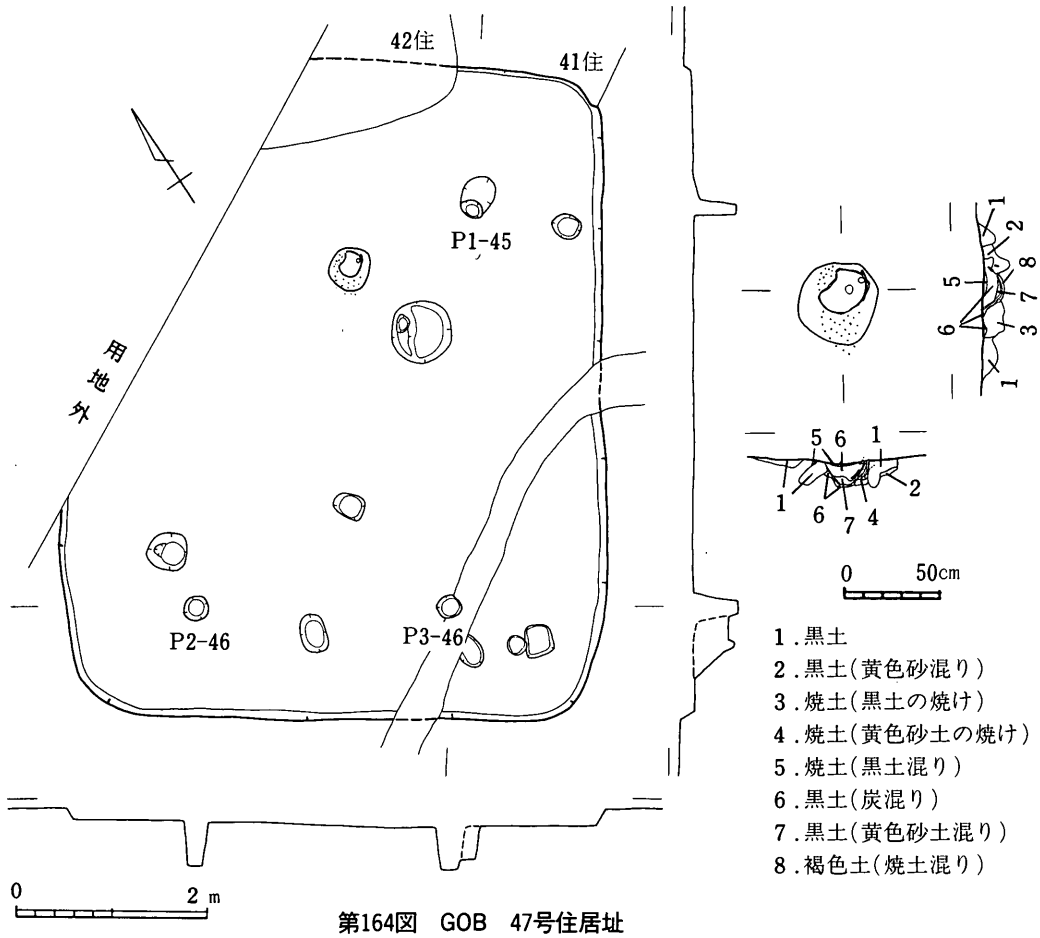
第163図　GOB　46号住居址

47号住居址（第164図）

遺構　GOBBN45を中心に検出された。41号・42号住居址、方形周溝墓1に切られ、北端が用地外にかかる。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は6.8×5.7m、主軸方向はN34°Eを示す。壁高は検出面から20～10cmと浅い。床面は黄色砂土（地山）で凹凸がわずかあるが、堅く良好であった。主柱穴は北隅を除く3本を確認した。いずれも不整円形で小さいが、深さは46cmを測る。炉址は北東側主柱穴間の住居址中央寄りにある土器埋設炉であり、壺の胴部上半分を逆位に埋設している。焼土は壺の内部に少なく外側に多くあり、住居址中央側が特に良く焼けていた。

遺物　土器埋設炉の壺の他に、壺の底部、打製石斧・磨製石鏃・同未成品・敲打器など出ているが、出土量は少ない。

切り合い関係・出土遺物から弥生時代中期恒川III期の住居址であろう。　（佐々木嘉和）



第164図　GOB　47号住居址

50号住居址（第161図）

遺構　ＧＯＢＣＢ49を中心に検出した。竪穴住居址であるが規模など不明である。壁は35号住居址床面から20cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は、黒土と漆黒土の２層であった。覆土との識別がはっきりできず、礫混り黄色土（地山）の上面を床面とした。

遺物　調査範囲が狭く、壺・甕片がわずか出土し、他に、横刃型石庖丁・砥石・敲打器・磨製石鏃未成品が出ている。

出土遺物から弥生中期恒川III期の住居址と思われるが断定はできない。　（佐々木嘉和）

② 弥生時代後期から古墳時代前期

ＧＯＡから連続してＡ区に、弥生時代後期終末から古墳時代前期の遺構が集中して検出された。弥生時代後期前半に位置づく住居址がわずか認められる他は、Ａ区溝址15を境にその東側は土器片すら検出されない状況であった。

後期終末から前期にかけては、ほぼ連続した３時期の遺構があり、その期間においてＧＯＡ溝址１からＧＯＢ溝址15にはさまれた間の限定された範囲が居住空間として把えられる。バイパス用地外の状況は不明であるが、調査範囲内の遺構分布は、土地利用上かなりの規制が認められ、環濠集落的な性格が指摘できる。（小林正春）

２号住居址（第165図）

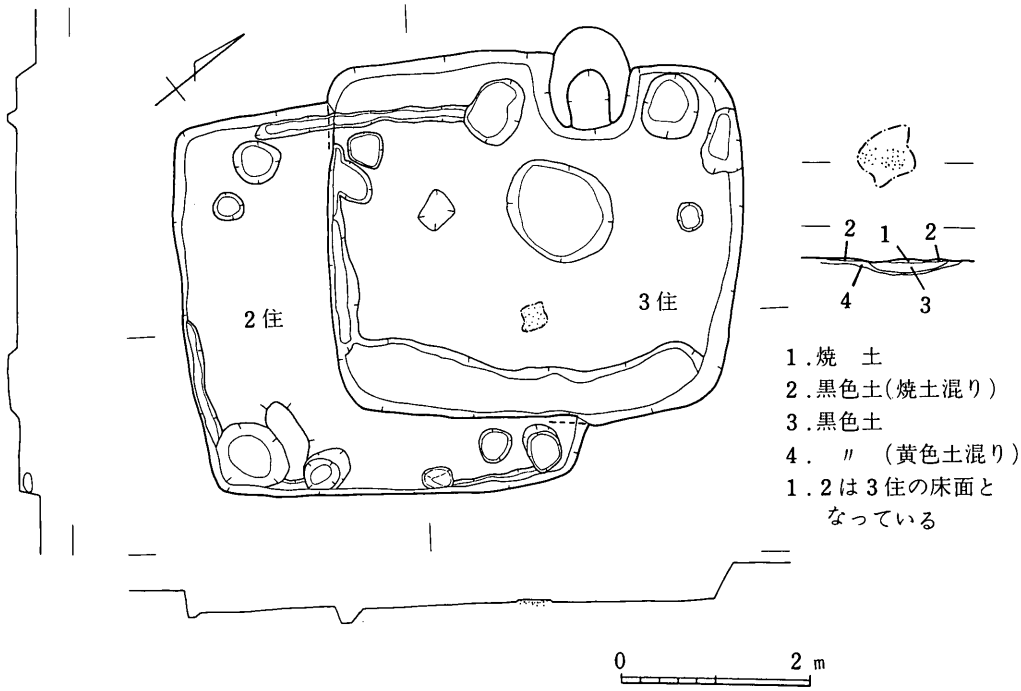
遺構　ＧＯＢＡＩ52を中心に検出した。３号住居址に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は４×４ｍ、主軸方向はＮ33°Ｅを示す。壁高は検出面から約20cmあり、ほぼ垂直である。東・南・西壁下に幅20cm・深さ９～５cmの周溝が部分的に認められた。床面は壁ぎわ50cm位の範囲がやや軟かく、それより内側は堅く良好であり、堅い部分はやや高くなっていた。柱穴は３号住居址と切り合う以外の各隅に２箇所ずつあり、いわゆる住居址の主柱穴とは異なるが主柱穴的な性格が考えられる。南隅の穴の間は床がやや高くなっており、入口部施設の可能性もある。炉址は３号住居址の床面、北東壁想定部ぎわの中央に、わずかに凹んだ状態で焼土が検出された。地床炉の残骸と考えられる。

遺物　３号住居址に切られない部分のみからの出土で量は少ない。土師器壺・甕・小型台付甕・鉢・高杯・器台・手づくねの破片と、抉入打製石庖丁・台石が出ている。

出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期の住居址であろう。（佐々木嘉和）

４号住居址（第166図）

遺構　ＧＯＢＡＩ48を中心に検出された。掘り込みが浅いため、部分的に把握できたのみであり、遺物の分布範囲と床面で規模を推定した。床面を建物址１・２・23の柱掘り方に切られ、西側半分程は16号住居址覆土中にはり床してあり、同住居址を切っていた。推定プラン5.4×5.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ67.5°Ｅを示す。壁は北側のほぼ全面と東側の一部が確かめられ、壁高は10cm前後を測る。床面は黄褐色土まで掘り、黄色土をはり床している。全体に軟かく状態は良くない。Ｐ１は最初に1.34×1.12mの丸味を帯びた方形を呈し、床から15cmの深さに平坦面を持ち、再度74×64cmの不整円形で15cm落ち込んでいる。内側の穴から管玉の未成品２点・メノウ原石・抉入打製石庖丁４点・鉢２点などが出土した。砥石等の出土はないが、玉



第165図　GOB　2号・3号住居址

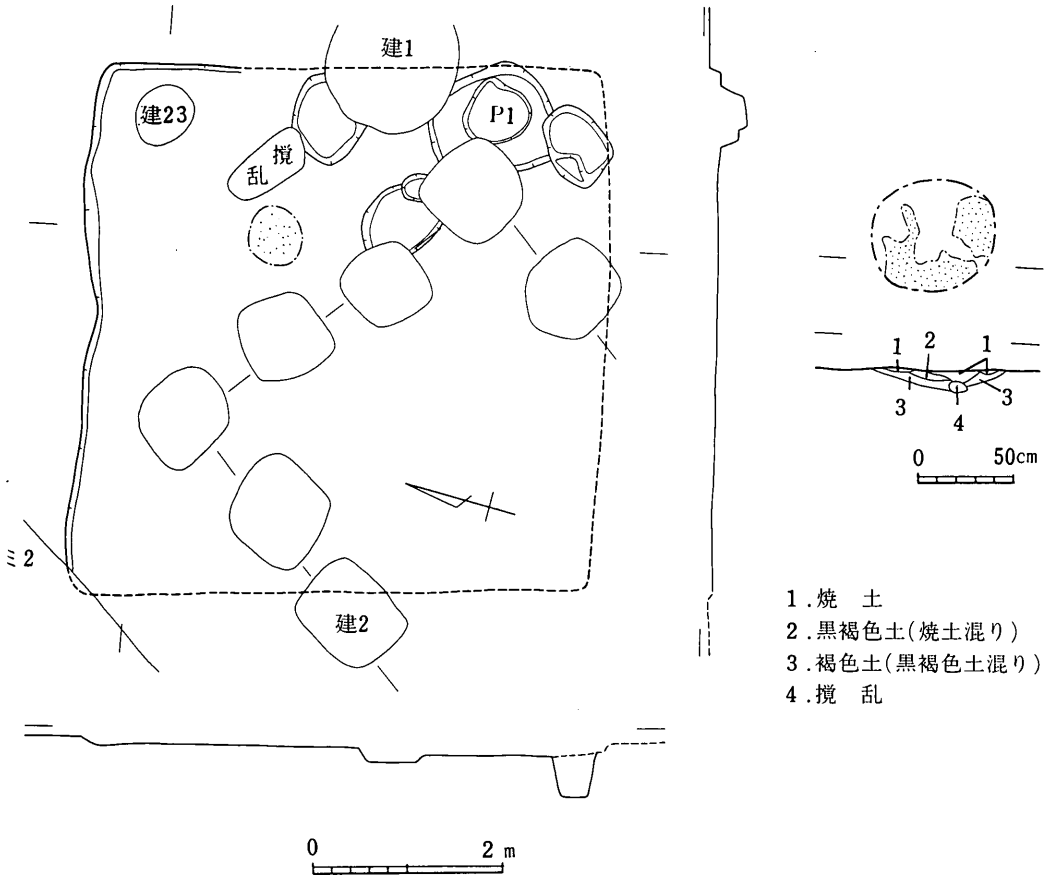
作り工作用の穴とも考えられる。炉址は住居址中央部から1.3m程北東隅に寄った位置にある地床炉である。焼土が60×50cmの範囲にほぼ平らに広がっていた。断面観察によると、径70cmの円形に浅く掘り凹めてあった。なお、整理段階において玉類未成品を確認し、玉作り工房の可能性が強めたが、調査時においては土の水洗等を行なわず、微小遺物が取り上げられなかった可能性もある。

遺物　出土量は多く、ほとんどが床面直上ないし穴内からの出土である。土師器壺・甕・高坏・鉢、抉入打製石庖丁・有肩扇状形石器、管玉の未成品・メノウ原石がある。壺（88—2）は10号住居址出土のものと接合した。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期に比定できる。　（山下誠一）

5号住居址（第178図）

遺構　GOBAO50に西隅を検出した。南側は大きく6号住居址に切られている。北側には用水路による未調査部3.2mが、さらにその先は近世の溝址があり、延長部の確認はできなかった。調査範囲が少なく、主軸・規模は不明であるが、隅丸の竪穴住居址である。西隅の一角を調査し、西壁1.8m・北壁1mを確認した。壁高は20cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は壁よりやや離れた



第166図　GOB　4号住居址

位置に検出された。深さは5～16cm・幅40cmと20cmで、幅の異なる所で切り合いがあり、幅の狭い方が切られている。床面はきわめて堅いたたき状のものである。直径80cm・深さ65cmの大きな穴が検出され主柱穴と考えられる。底部の北側は9cm程高く段があり同じ掘り方内で柱の建て替えが考えられる。この穴の東側床面は5cm程低くなっており焼土が認められたが性格等は不明である。調査範囲が狭く断定できないが、周溝および柱穴の状況などから、住居址の増築が考えられる。

遺物　調査範囲の割に出土量は比較的多い。穴の覆土中と穴の北側床面に密着して出土している。土師器壺・甕・甑・高坏などがある。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期に比定される。　（佐合英治）

7号住居址（第177図）

遺構　ＧＯＢＡＬ54を中心に検出された。1号・12号住居址、建物址4・8に切られ、南側は用地外

となる。規模は東西4.4m、南北は若干長くなる隅丸方形の竪穴住居址と考えられ、想定主軸方向はN130°Wを示す。北・東壁は1号住居址に切られ、確認した壁高は10～5㎝である。西壁は40cmを測り、ほぼ垂直な壁面を成す。確認した各壁下には幅56～30cm・深さ13～7㎝の凹部があり、周溝の可能性もあるが、幅が広く住居址構築時の掘り込みとも考えられる。床面は凹凸が著しく、中心部以外はきわめて軟かである。主柱穴は3本確認した。P2・P3は西側に向かって斜めに掘られている。P3の北にある穴は、上面にはり床が認められ、本住居址より古いものと考えられるが、出土遺物はなかった。住居址中心部からP1寄りに床面密着の焼土を確認した。建物址4の柱掘り方に切られているが、地床炉の端部と考えられる。

遺物　1号住居址に覆土のほとんどを切られるため出土量は少ないが、いずれも床面に密着して出土した。土師器壺・台付甕・甕・高坏・器台が出土している。西隅には台石と思われる石が出土しているが、出土位置がやや高く、上面で穴のプランを確認しており、この穴の礎石の可能性が強い。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期と考えられる。　（佐合英治）

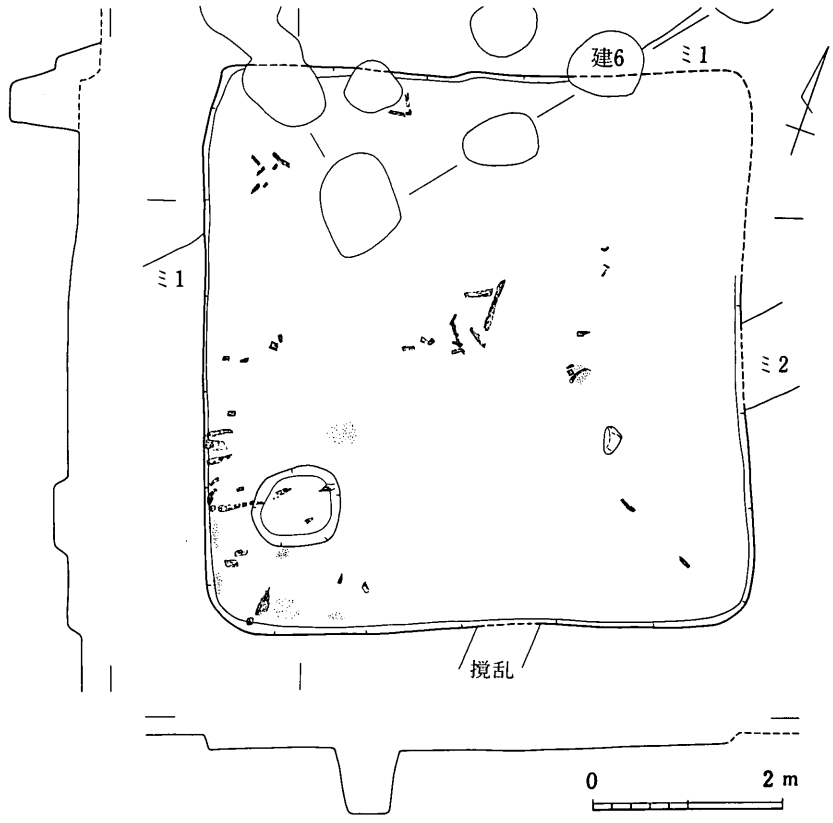
10号住居址（第167・168図）

遺構　GOBAD47を中心にして検出された。溝址1・2の調査終了後、黄褐色土に黒色土と炭が混じるはっきりした落ち込みが確認できた。切り合いが多いため一部にしか黄褐色土はみられないが、他住居址覆土中にもプランは認められ、住居址の中では最も新しい時期のものである。建物址6、溝址1・2に切られ、8号・18号・19号住居址を切っている。5.8×5.8mの隅丸方形の竪穴状遺構である。壁は一部を除きほぼ全面確認し、壁高は30～1㎝を測る。床面は一部に黄色土をはって堅くなっている部分もみられるが、全体に軟かく、炭が混じる黒色土がなくなった所を床面とした。南東隅付近には1.0×0.8mの楕円形の深さ15cmの穴を検出したが、主柱穴・炉址等は不明である。床面上から覆土中の全体に炭と焼土が散乱しており火事の竪穴である。良く焼けたためか小さな炭が多く、原形を示す大きな炭化材は確認できなかった。

遺物　遺物は多量に出土し、土器を主体に石器もある。竪穴の中心付近と北西隅に集中し、床面ないしやや浮いた状態で、焼土・炭と共に出土した。完形品やそれに近いものに関しては一括性が高いと思われる。通常の竪穴住居址の出土量に比べると質・量ともに豊かである。土師器の壺・甕・高坏・器台・鉢・小型丸底など該期にみられるほとんどの器種を含んでいる。石器は、打製石斧・抉入打製石庖丁・有抉石器・磨製石斧・敲打器・磨製石鏃がある。炉址・柱穴が確認できず、遺物の出土状況等からみても通常の竪穴住居址とは思われず、意図的に遺物を集め火をつけて廃棄したと考えられる。古墳の周溝の可能性のあるGOA溝址2と関連する遺構とも考えられる。住居址として調査したので一応住居址の中で記述を行ったが、一般の竪穴住居址とは異なり、竪穴状遺構とするのが妥当と思われる。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期に比定できる。

（山下誠一）



第167図　GOB　10号住居址

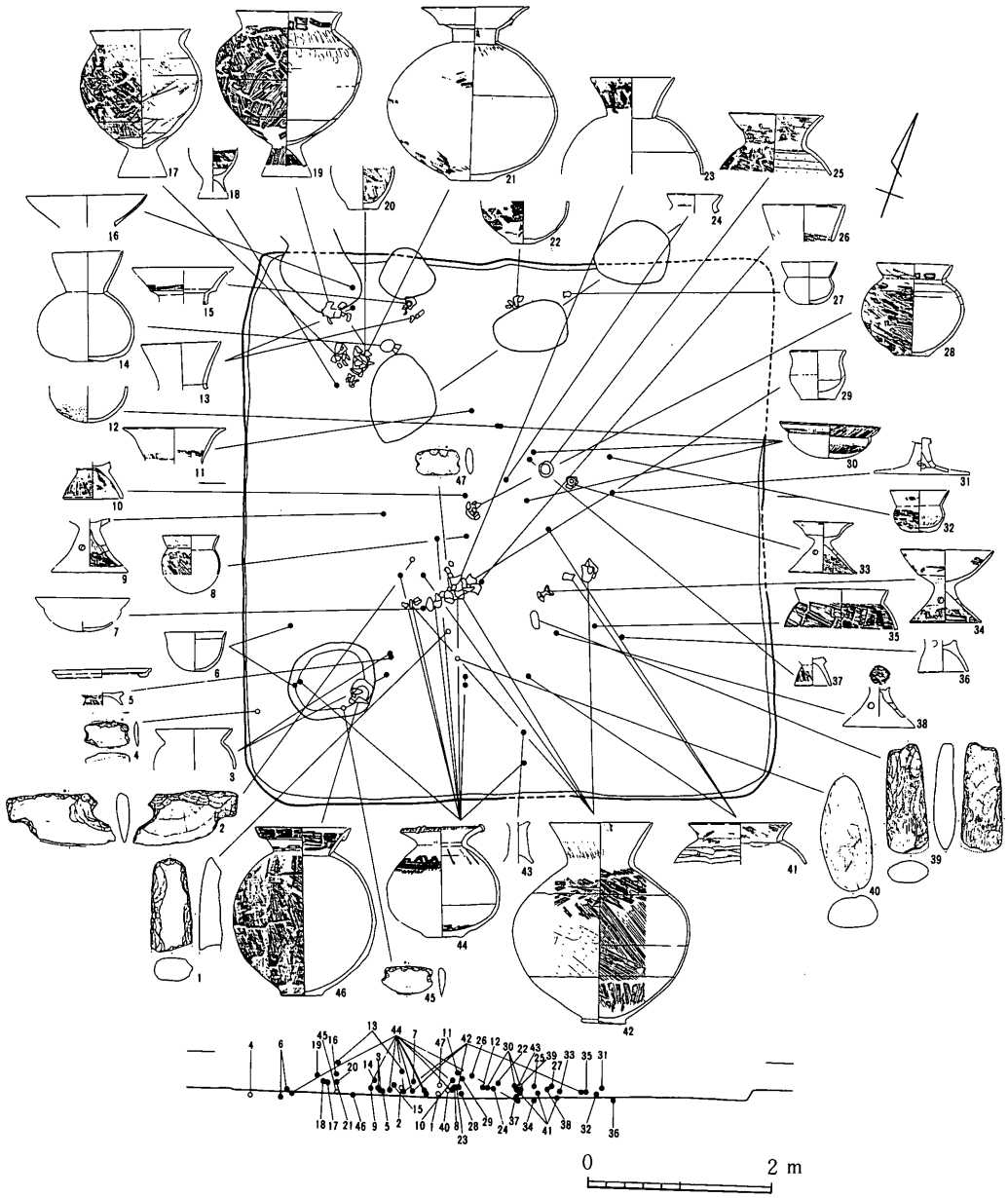
12号住居址（第178図）

遺構　1号・6号住居址の東側に北西壁を2.3m確認した竪穴住居址である。7号住居址と建物址4とに切られ、南東側のほとんどは用地外となる。床面上には炭を含む層が認められ火事にあっている住居址と考えられるが、調査範囲が狭く確証は得られなかった。また、この層は7号住居址調査中には認められず、本住居址が7号住居址に切られている根拠とした。壁高は良好残存部で38cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は建物址4の他にも後世の穴が床まで達しており、部分的に確認したのみで、いずれも軟かいものであった。

遺物　ほぼ完形の甕が出土した。7号住居址に切られていることも考え合せ古墳時代前期恒川Ⅶ期に比定される。（佐合英治）

14号住居址（第169図）

遺構　ＧＯＢＡＦ54を中心に検出された。11号住居址に切られ、市道と用地外にかかり、調査範囲はわずかである。隅丸方形の竪穴住居址と思われるが、規模は不明である。北壁を5.2m確認し

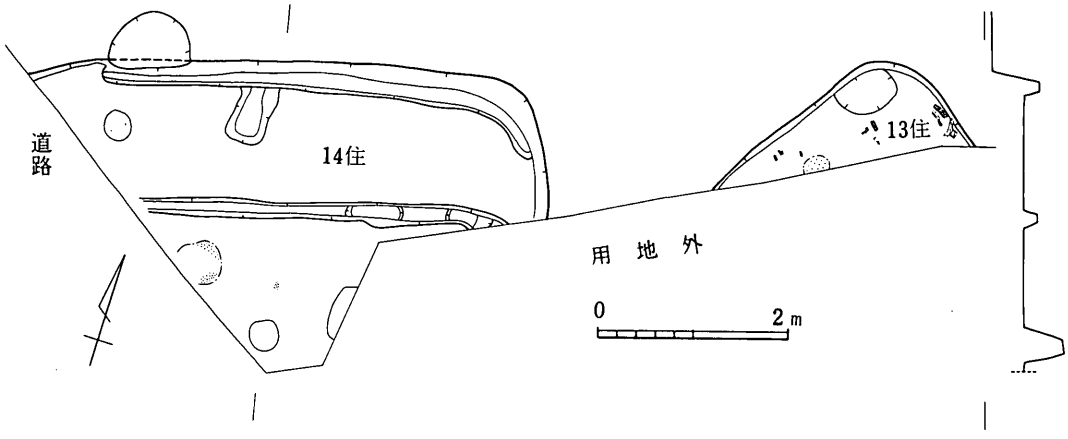


第168図　GOB　10号住居址遺物出土状態

西隅ぎわまで調査できたと思われる。壁高は検出面から60～50ｃｍと深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁下に周溝があり、幅20cm・深さ15～８cmである。また、北壁から1.3m内側に幅20～10cm・深さ約15cmの溝があり、周溝と思われ、住居址の拡張が考えられる。床面は壁ぎわから１～0.6mの範囲が軟かく、それより内側は非常に堅く良好であった。床面中央から西寄りに、厚さ５cmの焼土があり、地床炉と思われる。

遺物　出土量は少ない。土師器壺・甕・台付甕・高坏・器台、磨製石鏃未成品・台石、管玉未成品がある。

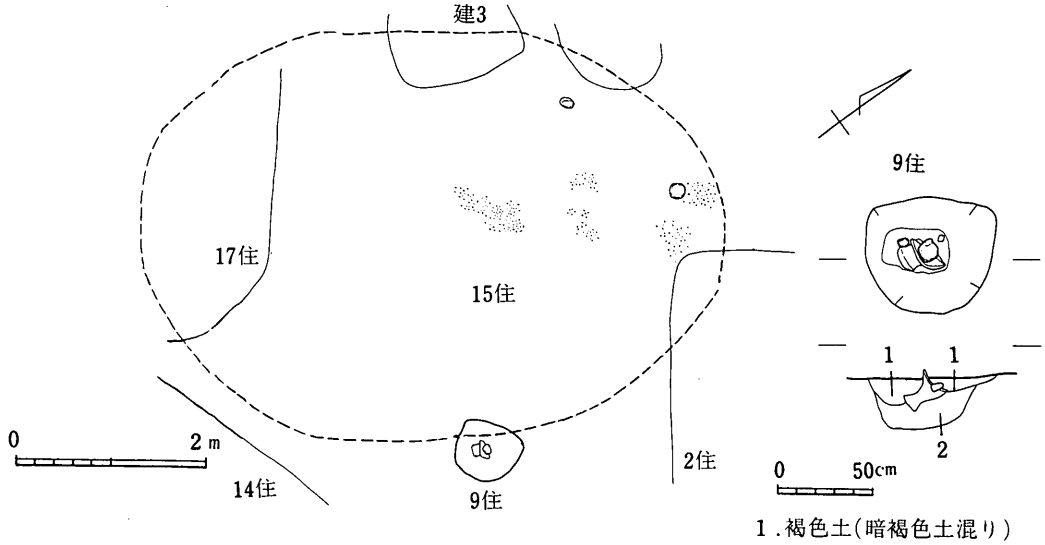
出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期の住居址である。　（佐々木嘉和）



第169図　GOB　13号・14号住居址

15号住居址（第170・171図）

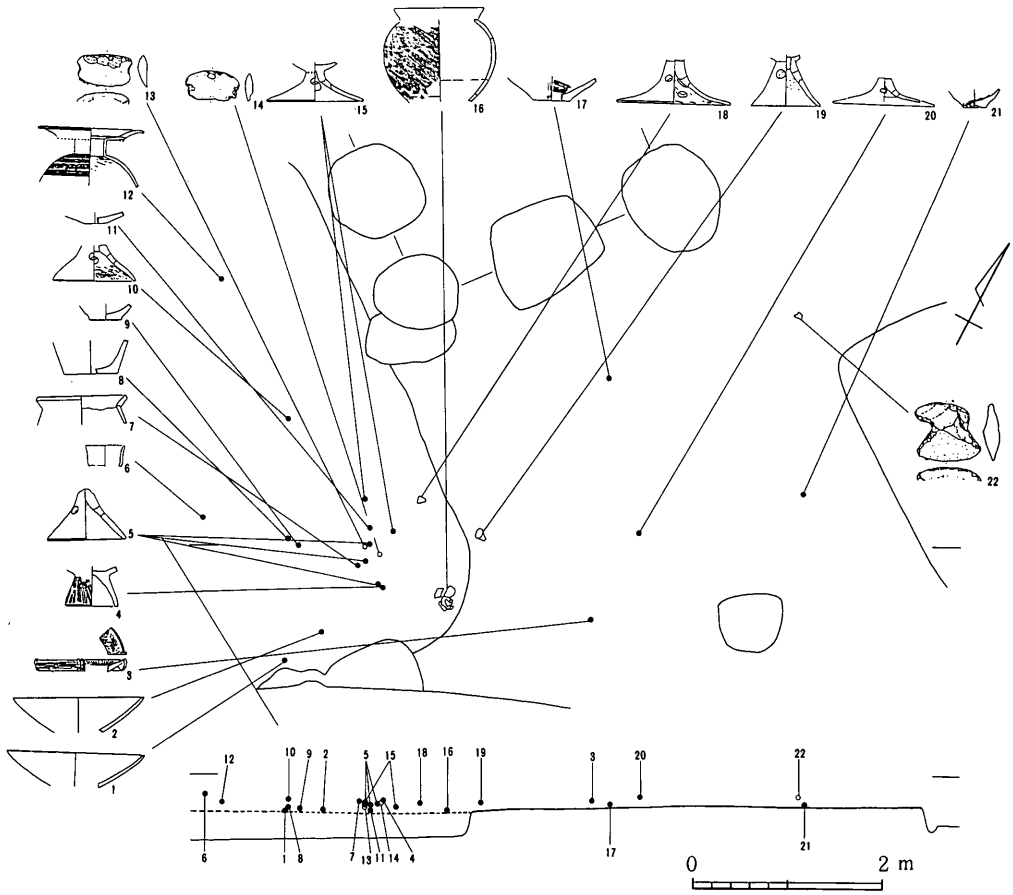
遺構　ＧＯＢＡＥ52を中心に古墳時代前期の遺物と焼土が検出され、15号住居址とした。9号住居址を切り、2号住居址・建物址3に切られる。遺物と焼土の出土範囲を住居址範囲としたが床面等の遺構の確認はできなかった。一応住居址として把えたが、住居址とは異なる遺構の可能性もある。



第170図　GOB　9号・15号住居址

遺物　出土量は少なく、土師器甕・台付甕・壺・高坏・器台、抉入打製石庖丁・有肩扇状形石器が出ている。

出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期の遺構である。　（佐々木嘉和）



第171図　GOB　15号住居址遺物出土状態

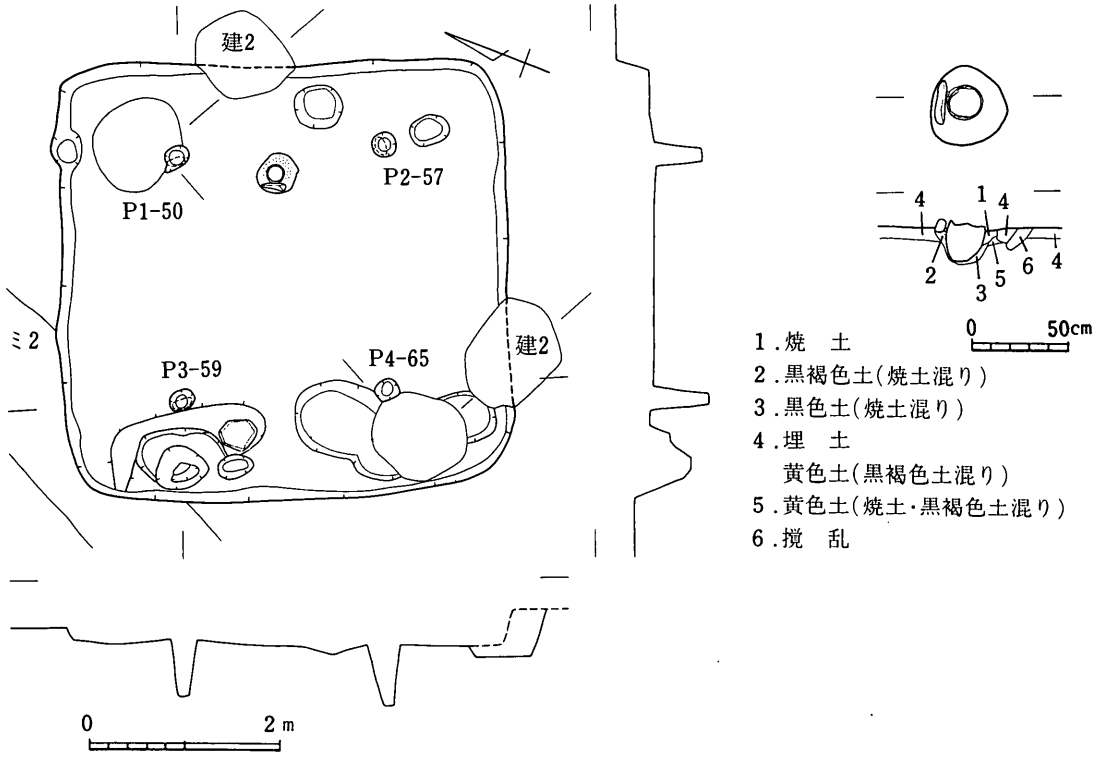
16号住居址（第172・173図）

遺構　ＧＯＢＡＨ48を中心に検出された。８号住居址を切り、４号住居址・溝址２・建物址２に切られる。4.5×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ78.5°Ｅを示す。壁はほぼ全面検出し、壁高は40～30cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は地山の黄色砂土まで掘られ、壁ぎわの30～10cmを残し、その内面をさらに10cm程掘り下げ、黄色土に黒褐色土の混じった土を埋め床面とし、一部はその上に黄色土によるはり床をしている。全体にたたき状の良好な状態で、特に主柱穴内側が堅い。床面は全体に平坦であるが、壁ぎわに向い若干高くなる。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、Ｐ１・Ｐ３は南北方向に、Ｐ２は東西方向に細長く、いずれも20×10cmのプランである。穴の掘り方は円形であるが、柱に割り材を使ったと考えられる。北西隅寄りの西壁直下には100×60cmの

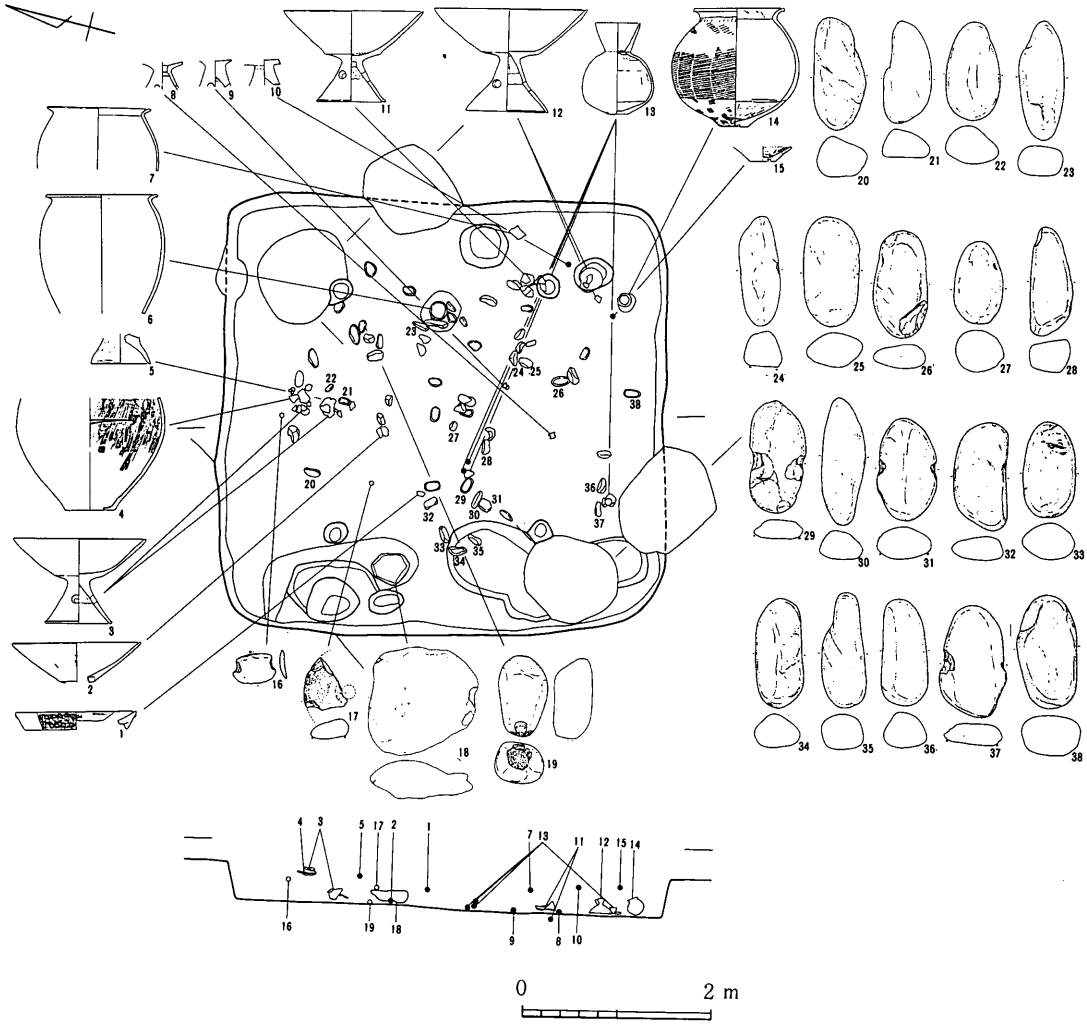
楕円形の穴があり、土手状縁部を持ち、深さ20cmの所で段を持ち、再度58×44cmの不整円形で22cm落ちこむ。その南側には、36×26cmの楕円形で深さ54cmの穴があり、入口部施設と考えられる。なお、土手状縁部の南端に台石がある。炉址はＰ１・Ｐ２の中間やや内側にある土器埋設炉である。はり床をした後、床面を40cmくらいの円形に掘り、底を欠いた甕を埋め、内側に棒状礫を使った炉縁石を置いている。土器の回りには焼土もみられた。

遺物　出土量は多く、該期の良好な資料が得られた。土器・石器・鉄器がある。土器は南東隅と北壁寄り中央部に集中して出土した。前者は床面上の出土が主体で、後者は床面からやや浮いた状態のものが多かった。しかし、両者には明確な型式差はみられず、一括性は高いと思われる。土器壺・甕・高坏・器台、抉入打製石庖丁・敲打器・台石・環状石器がある。鉄器は小破片で図示できず、器種も特定できなかった。他に、床面上に15cm前後の棒状の自然礫が散乱し、計52個を数えたが、その中の21個を選んで取り上げた。側面に糸かけ状のえぐりを持つものもあり、すべてを取り上げ検討する必要があった。編物石として利用されたものと思われる。今後床面上にある礫は注意してみる必要があり、反省の意味を含めて提案したい。

遺物から弥生時代後期恒川Ⅵ期に比定できる。　（山下誠一）



第172図　GOB　16号住居址



第173図　GOB　16号住居址遺物出土状態

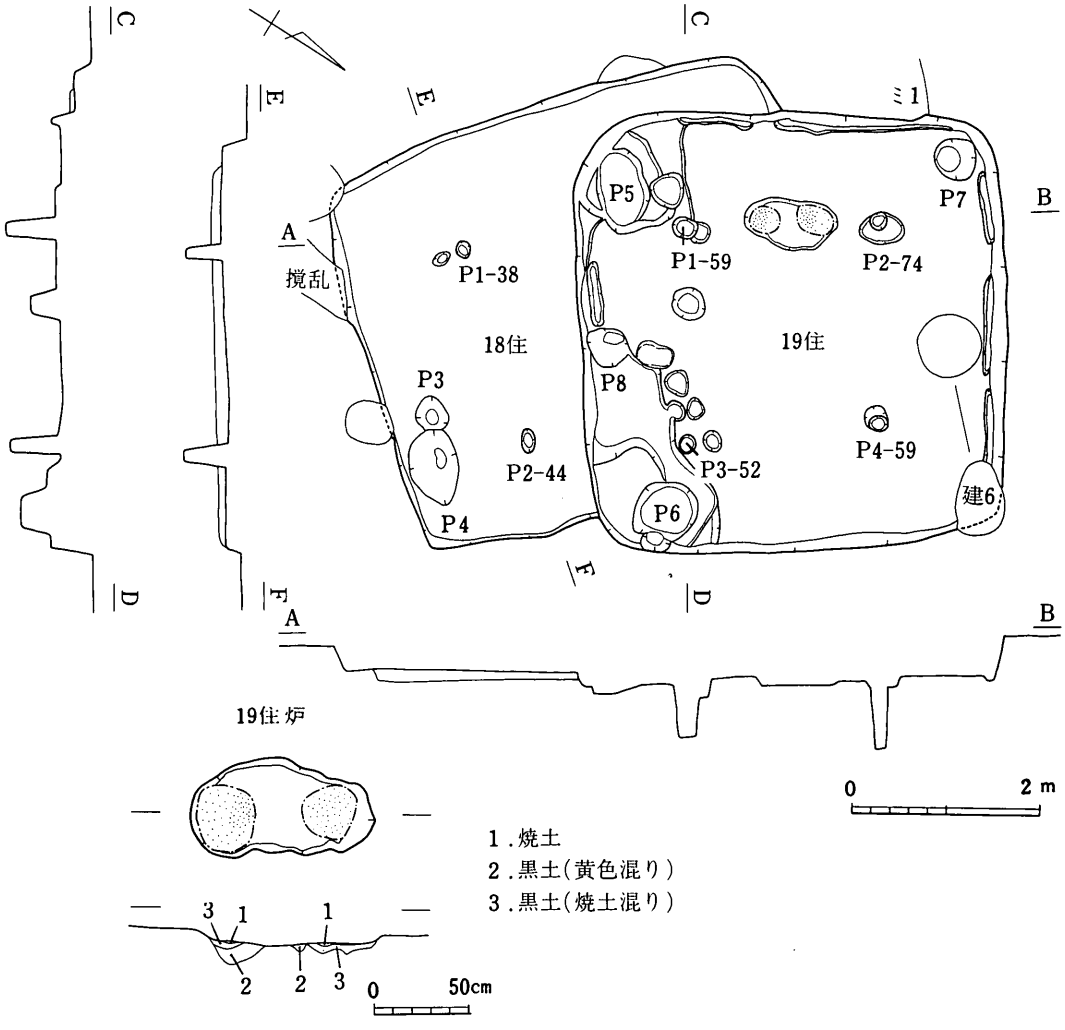
18号住居址（第174図）

遺構　上面にある溝址１・２、10号住居址の調査後、ＧＯＢＡＤ49を中心に検出された。19号住居址と切り合い関係にあり、検出面では新旧関係は把握できなかったので、最終的には床面の残存状態から判断した。10号・19号住居址、溝址１・２に切られ、８号住居址を切る。4.9×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址である。壁は北側の19号住居址に切られる部分以外は確認でき、壁高は30

～15cmを測る。床面は全体を黄色土まで掘り下げ、更に南側の壁下を20cm幅で残して掘り下げその上を10cm程埋めはり床し、堅いたたき状になっている。主柱穴はＰ１・Ｐ２が確かめられ、いずれも南北方向に縦長の掘り方で、割り材を柱に使ったと考えられる。東壁直下の東北隅寄りには、Ｐ３・Ｐ４があり、それぞれ60・45cmを測る。入口部施設ないし貯蔵穴と考えられる。炉址は不明である。東壁を入口部と考えれば、19号住居址に切られる西側主柱穴の中間に設けられた可能性が高い。

遺物　出土量は少ない。土器壺・甕・器台、抉入打製石庖丁が出土している。

遺物から弥生時代後期恒川Ⅵ期に比定できる。　（山下誠一）



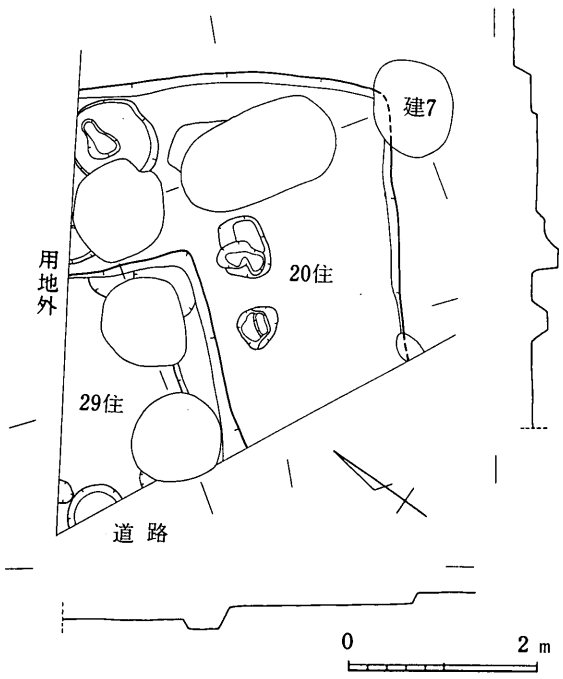
第174図　GOB　18号・19号住居址

19号住居址（第174図）

遺構　ＧＯＢＡＤ47を中心に検出された。８号・19号住居址を切り、溝址１・建物址６に切られる。4.7×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ121°Ｗを示す。壁は建物址６の掘り方に切られる他は、全面確認できた。壁高は40～20cmを測り、18号住居址と重複する南東壁が低いが、土層観察により上面からの掘り込みを確認した。周溝は北東壁と各隅を除く壁下に、幅10～６cm・深さ５cm前後の溝が断続的に検出された。床面は全体に黄色土をはるたたき状できわめて堅いが、東側主柱穴の外側から壁までの部分は軟かい。主柱穴はＰ１～Ｐ４である。北側を除く三方の隅直下にはＰ５～Ｐ７があり、Ｐ５・Ｐ６の深さはそれぞれ30・40cmを測り、貯蔵穴的な性格が考えられる。Ｐ７は内側にほんのわずかな土手状縁部を持ち、深さ16cmで、何かを置くための施設と思われる。南東壁ほぼ中央直下には深さ50cmのＰ８があり、その北側には扁平な石を使った台石が置かれていた。入口部施設と考えられる。炉址はＰ１・Ｐ２の中間ほぼ中央にある地床炉である。１×0.5mの楕円形に掘り凹められ、その両端に焼土がわずかに認められた。

遺物　土器・石器があり、覆土中からの出土が多かった。土器は破片が主体で、完形に復元できるものはなく、壺・甕・高坏・器台・鉢があり、打製石斧・有柄石器・砥石・台石・磨製石鏃未成品がある。他にガラス玉が１個出土した。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期に比定できる。　（山下誠一）



第175図　GOB　20号・29号住居址

20号住居址（第175図）

遺構　建物址７調査後、ＧＯＢＡＡ46を中心に、22号・29号住居址と共に検出された。狭い範囲で重複するため、新旧関係を把握するのに苦心した。22号住居址はカマドを持つ最も新しい住居址で、29号・20号住居址の順で古くなる。29号住居址上面に地床炉らしい焼土と一部はり床も確認され、壁の把握ができず番号を付さなかったが、もう一軒住居址が重複する可能性が高い。北側が用地外、西側が道路にかかるため、北東・南東壁と床面の一部を調査したのみであり、プラン・規模・主軸等は把握できなかった。隅丸の竪穴住居址と思われる。壁高は確認部分

で20～10cmを測る。床面は黄褐色土まで掘られ、一部に黄色土をはる堅い部分もあるが、全体に軟かい。主柱穴・炉址等の住居址諸施設は確認できなかった。

遺物　出土量は少なく、土器の甕・高坏・器台・手づくねがある。

時期を決定できるだけの遺物は出土してないが、切り合い等から弥生時代後期恒川Ⅵ期と思われる。　（山下誠一）

21号住居址（第214図）

遺構　ＧＯＢＡＤ45を中心に検出された。建物址６に切られ、用地外にかかり、調査範囲はわずかである。方形の竪穴住居址と思われ、東隅から南壁を2.5m確認した。壁高は、検出面から10cm余りである。床面は軟かく確認できず、黄色砂土面まで掘り下げたが、用地境の土層により黄色砂土面より上部にあったことが判明した。南西隅の壁下に浅い穴があり土師器壺片が入っていた。

遺物　土師器有段口縁の壺縁の壺などがわずか出土している。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ～Ⅷ期と思われる。　（佐々木嘉和）

24号住居址（第158図）

遺構　ＧＯＢＡＴ48に炉址を検出した住居址である。23号･25号住居址と切り合っているが両住居址と同様に耕作の天地返しにより、著しく攪乱を受けている。そのため西壁50cm、南壁80cmが確認できただけである。壁高はそれぞれ11cmと４cmであった。床面は炉址より南側の住居址中心部付近が残っているものと考えられる。確認した床面は凹凸はあるものの堅いものである。炉址は５cm掘り凹められた地床炉と考えられる。

遺物　本住居址に確実に伴うものが不明であるが、確認した床面上に土師器甕･高坏･器台等が出土している。

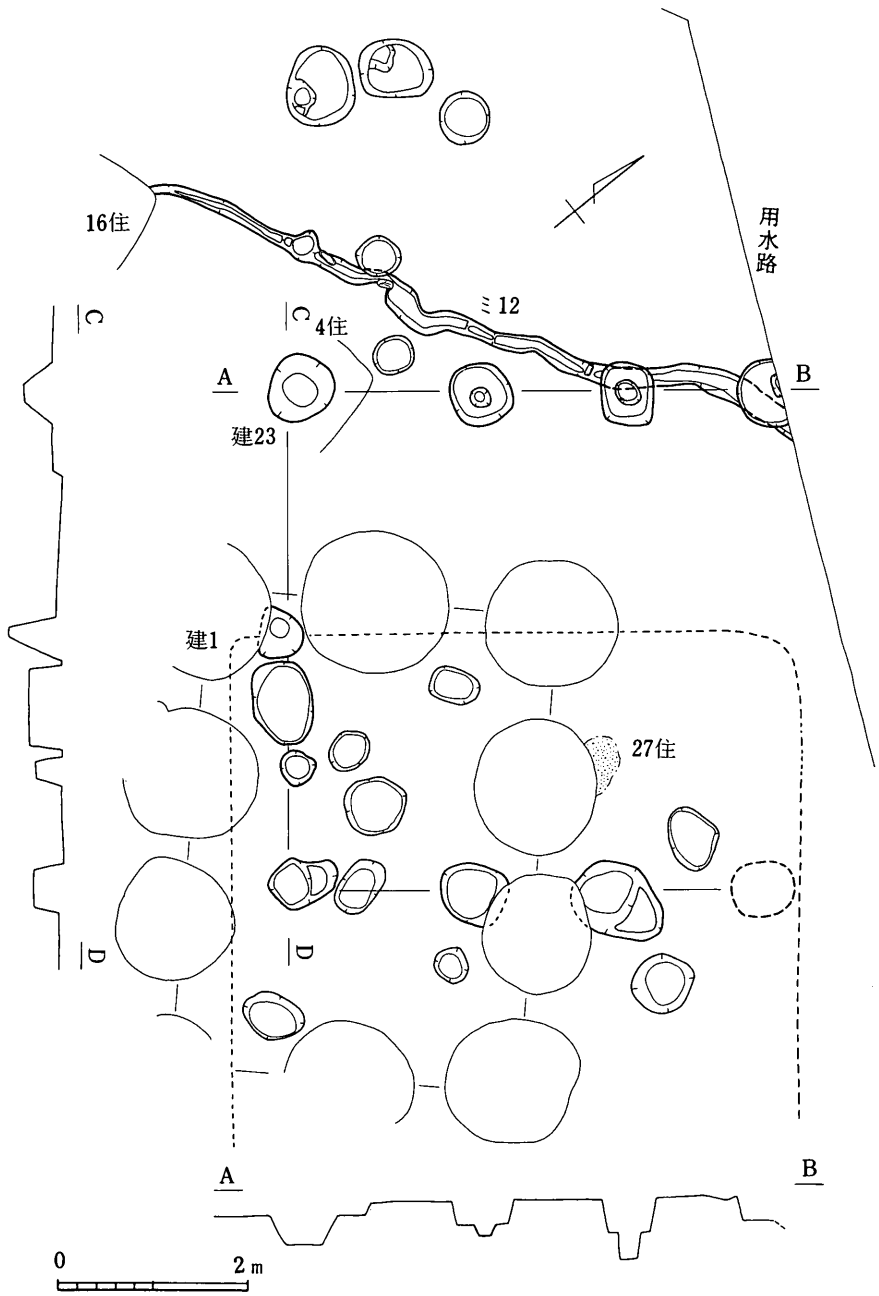
出土遺物から推定して古墳時代前期恒川Ⅵ期の可能性が強い。　（佐合英治）

27号住居址（第176図）

遺構　ＧＯＢＡＬ・ＡＭ49に遺物・焼土を検出し住居址とする。建物址１・23に切られる。建物址の検出面が暗褐色土で遺物が混入しており、その下の褐色土上面に堅い部分があり、床面と思われる。建物址１の柱掘り方に切られた焼土があり、地床炉の一部が残存するものと考えられるが、形態等は不明である。住居址の想定規模は古式土師器の出土範囲で把握した。

遺物　遺構の状態に比べると、出土量は多い。土師器壺・甕・甑・鉢・高坏が出ている。

出土遺物から古墳時代前期恒川Ⅷ期であろう。　（佐々木嘉和）



第176図　GOB　27号住居址、建物址23、溝址12

29号住居址（第175図）

遺構　ＧＯＡＢＹ45に検出された。20号・22号住居址と重複関係にあり、ほぼ同時に調査した。建物址７・22号住居址に切られ、20号住居址を切る。大部分が用地外と道路にかかるため、東隅付近の一部を調査したのみである。隅丸の竪穴住居址と考えられるが、規模・主軸方向共不明である。壁高は確認部分で10cm前後を測る。南東壁下には幅40cm・深さ10cmの周溝がみられる。床面は黄色土まで掘り黒色土を埋め、その上に黄色土をはり、堅いたたき状の良好なものである。

遺物　ほとんどが床面上から出土し、土師器の甕・高坏・鉢がある。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ期に比定できる。　（山下誠一）

③　古墳時代後期

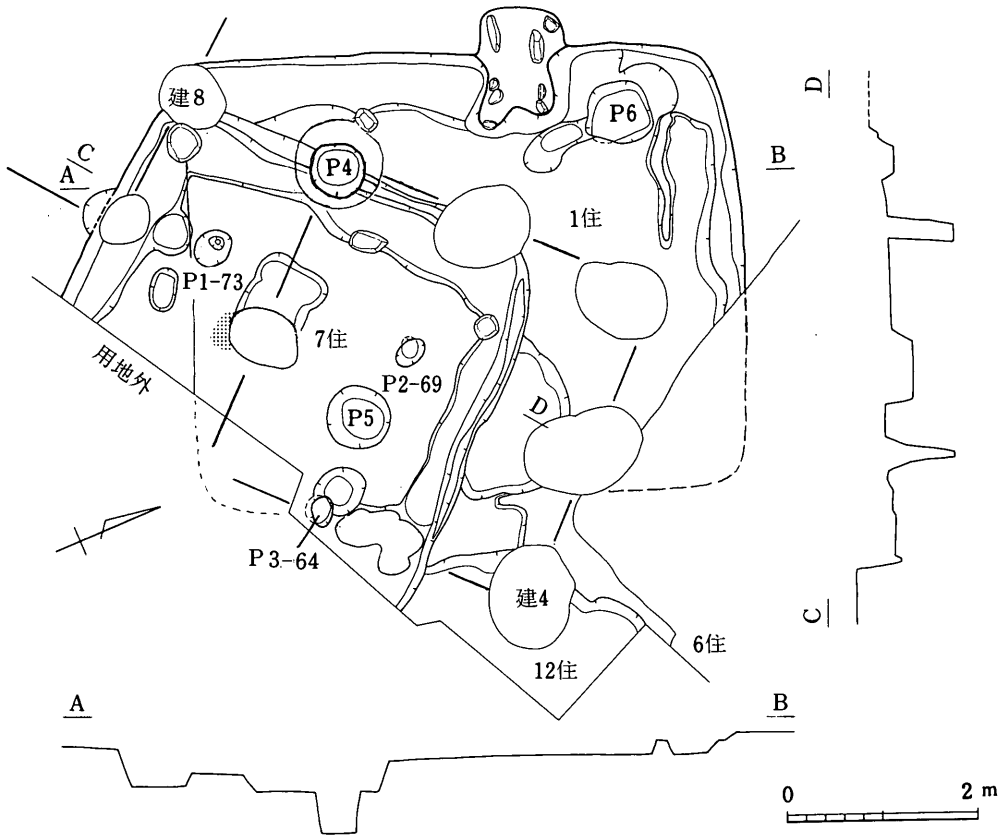
本地籍内全域に住居址が分布し、前時代の弥生時代後期から古墳時代前期のあり方と好対象を成している。３～４時期に細分可能と考えられるが、細部にわたっての検討が十分でなく、一括して把えたために、住居址の把握そのものに問題点を含むが、およその傾向は示される。

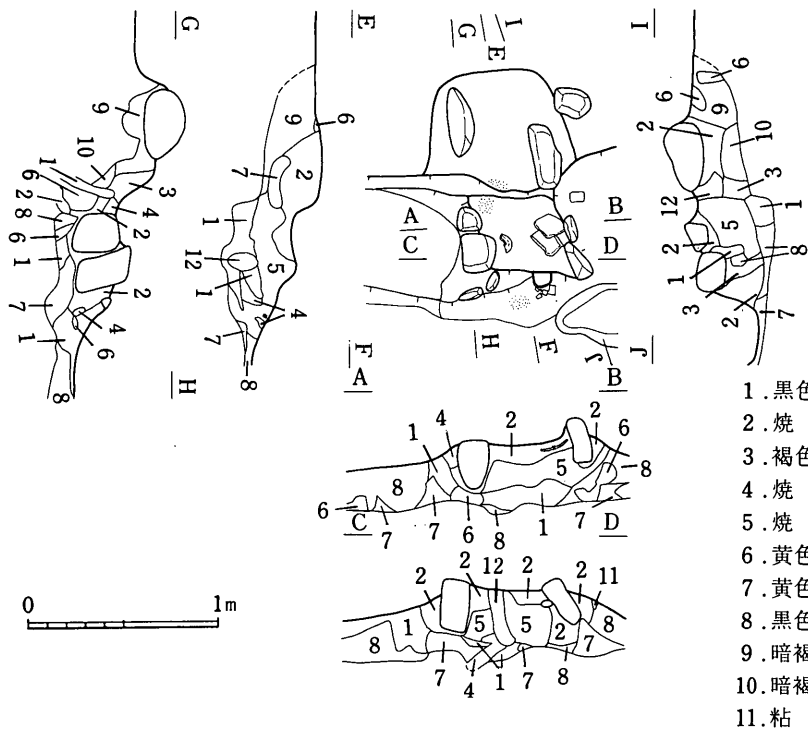
全体での分布状況をみると、前時期の遺構が集中して分布したＡ地区の分布密度がやや低く、Ｂ～Ｃ区にその中心が求められる。そして、その先は更に延びＡＭＤ・ＡＲＹまで連続した大集落を形成している。確認した住居址は22軒を数えるが、Ｂ地区の一部は後世の削平が著しく、検出できなかった住居址や、一部のみの調査で時期不明としたものの中に本時期に位置づけられるものも相当数考えられ、古墳時代後期に台地上全体が居住空間として活用されていたといえる。

（小林正春）

１号住居址（第177図）

遺構　ＧＯＢＡＬ53を中心に検出された。６号・７号・17号住居址と重複し、南隅は用地外となる。北東壁部分から用地境にかけては住居址覆土下層まで達する砂の層があり、壁の確認はできなかった。南西壁は７号住居址を切って覆土中に造られており、覆土の差異がとらえられず、西隅は建物址８の柱掘り方に切られていたこともあって把握できなかった。東隅も６号住居址を切って覆土中に造られ確認できなかったが、床面の状況などから4.6×5.8mの南北にやや長い隅丸長方形の竪穴住居址であることが確認できた。主軸方向はＮ61°Ｗを示す。確認した北東・北西壁は、11・15cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。この壁下に幅50～30cmで高さ14～９cmの段状の施設があり、黒色土の上にはり床状のたたきを施したものである。なお、北東壁下の同施設は北西壁下に比べ幅が狭いが、Ｐ６ぎわから壁に沿って土手状の部分があり、本来は北西壁下より幅が広かったとも考えられる。　床面は凹凸があり、６号・７号住号址を切る部分は、はり床で、





1.黒色土
2.焼　土(褐色土の焼け)
3.褐色土(焼土混り)
4.焼　土
5.焼　土(黒色土混り)
6.黄色土
7.黄色土(黒色土混り)
8.黒色土(黄色土混り)
9.暗褐色土
10.暗褐色土(黄色土混り)
11.粘　土
12.撹　乱

第177図　GOB　1号・7号住居址

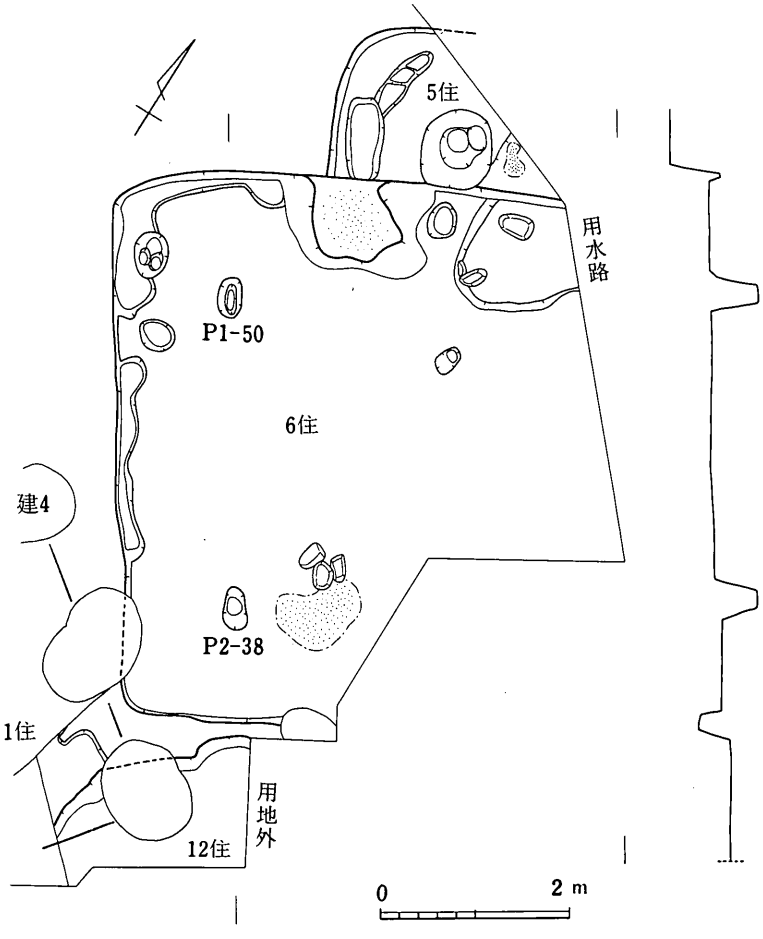
はり床されていない部分も含め総じて軟かい床面である。主柱穴はＰ４・Ｐ５が考えられ、深さはそれぞれ床面より76・80cmを測るが、Ｐ４は建物址４と切り合い、Ｐ５は７号住居址調査中に確認されたものであるうえに北側の主柱穴が確認できず、本住居址の主柱穴として断定はできない。北隅のＰ６は出土遺物・位置等から本住居址に伴うもので、深さは55cmを測る。カマドは西壁中央部から北隅に寄った位置にあり、住居址壁外の煙道と考えられる部分にも比較的大きな自然石を使った石芯粘土カマドである。たき口部の堆積には焼土だけの層はほとんどなく、黒色土と混じっているものである。

遺物　遺物はカマド周辺からの出土が多く、特にＰ６覆土中および、カマド北側の段状施設のたたき面密着で土師器甕が出土している。また、編物石と考えられる棒状礫が、東隅の６号住居址を切っている部分のはり床面密着で出土している。他に、高坏、内面黒色の坏と鉢、須恵器坏・蓋坏、土玉、用途不明の鉄器がある。

遺物から古墳時代後期後半と考えられる。　（佐合英治）

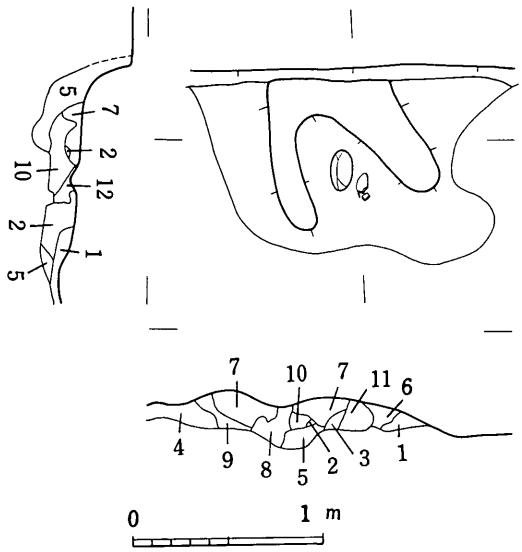
６号住居址（第178・179図）

遺構　ＧＯＢＡＯ52を中心に検出された。５号住居址を切り、南側上部を１号住居址に切られ、東側は用水路のため未調査部がある。北西・南東方向の長さは5.5mを測り、主軸方向はN29°Wを示す隅丸方形の竪穴住居址である。覆土上層は黒色土、下層は暗褐色土に分かれ、西隅部分は壁より１m程の範囲が、上・下層とも非常に堅くしまっていた。壁高は、北西壁42cm、



第178図　GOB　５号・６号・12号住居址

南西壁の１号住居址に切られる部分が６cm、西隅に近い所で40cm、南東壁は耕作による攪乱のため23cmである。いずれも垂直な壁面を成す。幅40～15cm・深さ25～４cmの周溝が、カマド左脇から南西壁にかけて壁直下を巡り、部分的に途切れる箇所がある。床面は平坦できわめて堅いたたき状のものである。主柱穴は西側の２本を確認し、いずれも北西・南東方向に長い掘り方をしており、割り材使用の柱の可能性が大きい。カマド右側には地山の黄色土を掘り残したマウンド状の施設がある。壁より1.2mの範囲が床面より７cm高くなり、周辺の状況から判断して本住居址に伴うものと考えられるが、東側が未調査のため全体の規模や性格は不明である。また、南東壁下の60cm程内側へ入った所に、焼土と径30cm程の自然石が３個検出された。石は床面に密着し、焼土は床面より７cm浮いている。カマドは北西壁中央からやや西寄りにある。中心部の把握ができないほど壊れ、構造等不明であった。焼土は全体に相当量認められたが、ほとんどブロック状であった。



第179図　GOB　６号住居址カマド

遺物　出土遺物は少なく、カマドの左右からほとんどのものが出土している。Ｐ１覆土上層から土師器の高坏が１個体分出土した。他に、甕・高坏・坏がある。

出土遺物から古墳時代後期後半と考えられる。　（佐合英治）

22号住居址（第180図）

遺構　ＧＯＡＢＹ46の20号住居址覆土中に両袖石と天井石が残るカマドがあり、住居址とした。重複が多いため壁の把握はできなかった。建物址７に切られ、20号・29号住居址を切っていた。カマドだけの調査であり、住居址の方向もはっきりしないが、北東側にカマドを持ち、住居址は道路部分の南西方向へ広がると考えられる。カマドは両袖にそれぞれ１個の礫を使った石芯粘土カマドである。天井石は80×45cmの大きな石である。左袖を一部建物址７の掘り方に切られ、カマドそのものも全体の把握はできなかった。

遺物　カマド周辺から出土した。土師器の甕・甑・高坏がある。

遺物から古墳時代後期に位置づけられる。　（山下誠一）

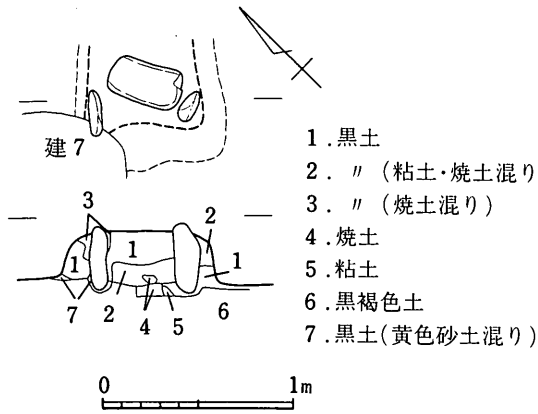
26号住居址（第181図）

遺構　ＧＯＢＢＡ53にカマドを検出した。溝址15を切っている。用地外にかかることと耕作の攪乱により、床面の一部を確認したのみである。カマドの方向はＮ129°Ｅを示す。石芯粘土カマドの形態で比較的大きな石を使っており、石を二段に組んだ所もある。石の中には調整を施したものもあった。火床の焼土は厚く良く焼けていた。

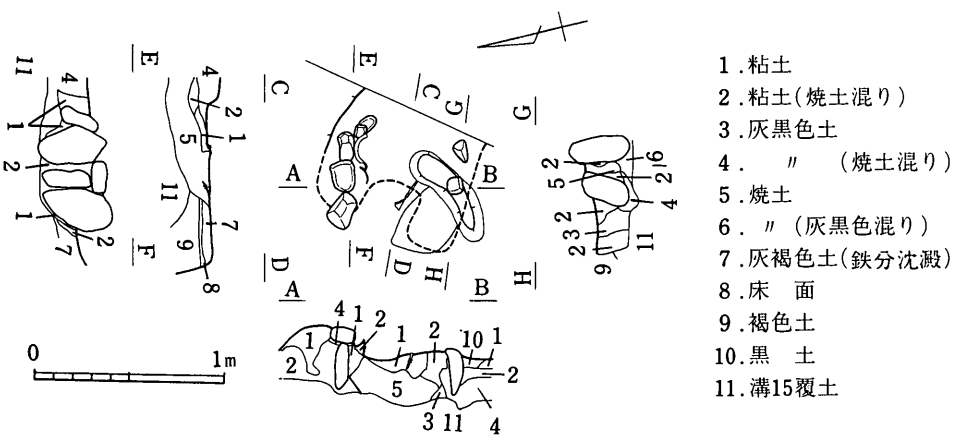
遺物　カマド内部からわずか出土したのみで、土師器甕片である。

切り合い関係と遺物から古墳時代後期であろう。

（佐々木嘉和）



第180図　GOB　22号住居址



第181図　GOB　26号住居址

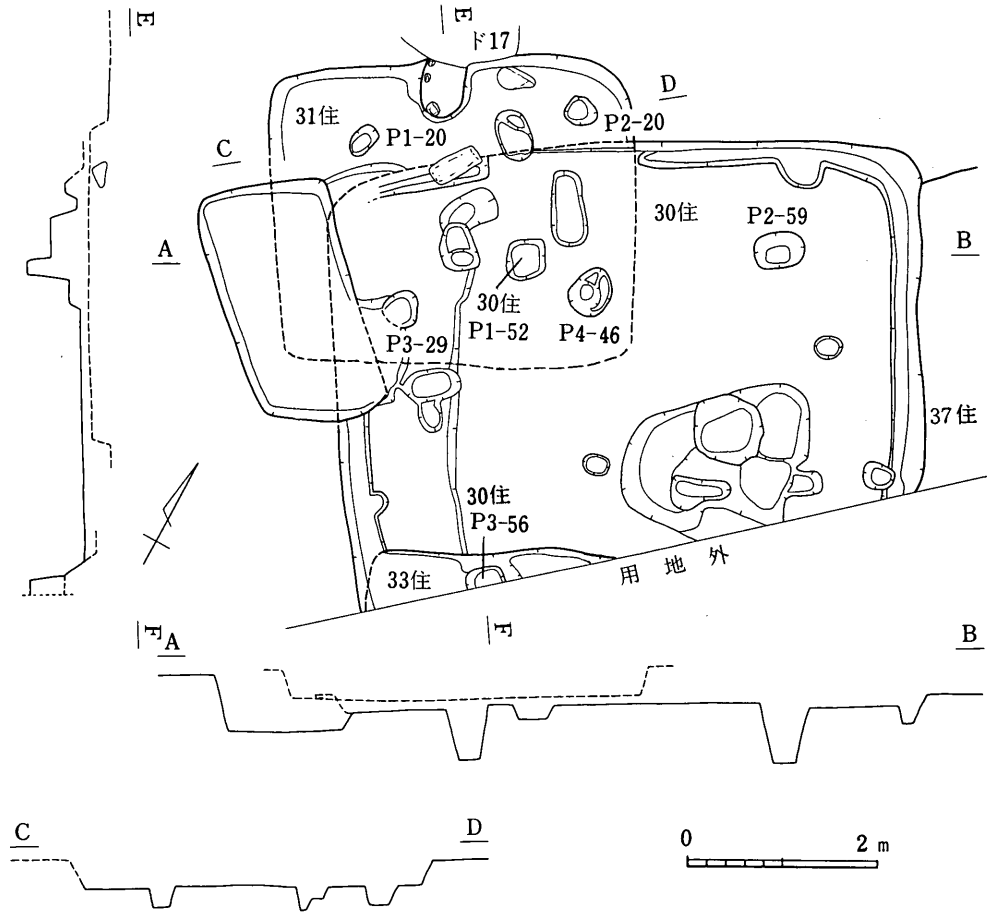
30号住居址（第182図）

遺構　ＧＯＢＣＮ46を中心に検出された。37号住居址を切り、31号・33号住居址に切られ、南東側が用地外にかかり、4.6×６ｍと⅔を調査したのみである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、主軸方向はＮ30.5°Ｗを示す。褐色土上面に暗褐色土の入る他の住居址を確認したが、新旧関係が不明であり、同時に掘り下げた。壁高は検出面から約40cmを測り、壁面はやや緩傾斜の所とほぼ垂直の所がある。周溝は壁下全周にあったと思われ、幅・深さともに20cm弱であった。床面は主柱穴の内側は堅く良好な状態であったが、外側は軟かかった。主柱穴は南東隅を除き３本確認し、いずれも不整方形で、59～52cmの深さがある。床面中央から東にある大きな穴は床面を切っており、

住居址より新しい遺構である。カマドは31号住居址に壊されているが北西壁下中央に焼土が残っており、位置のみ確認した。

遺物　出土量は少ないが、ほとんどが床面か床直上から出ている。土師器甕・小形甕・坏、須恵器蓋坏の身、刀子片、石製紡錘車、有孔磨製石庖丁などである。紡錘車と石庖丁は北隅の床面上から出土している。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）



第182図　GOB　30号・31号・33号住居址

36号住居址（第231図）

遺構　溝址９の東側ＧＯＢＣＡ43に、床面が認められて住居址とした。38号住居址・溝址９に切られ、北側用地外に大部分がかかるため、3.6×2.5mの範囲を調査したのみで、プラン・規模・主軸等は不明である。壁は掘り込みが浅く、立ち上がりは確認できなかった。地山と住居址覆土

の色の違いで、東壁を推定した。床面は黄色土のはり床となるが、軟かく状態は悪い。主柱穴はＰ１のみ確かめられた。その他の住居址施設は不明である。

遺物　土師器の高坏が出土したのみである。

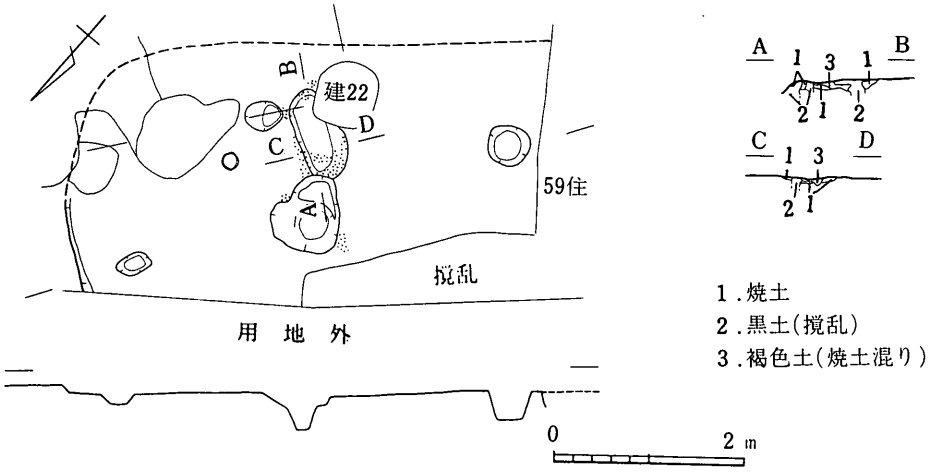
時期を決定できる程遺物の出土はないが、切り合い関係から奈良時代以前で古墳時代後期の可能性が強いといえる。　（山下誠一）

40号住居址（第183図）

遺構　ＧＯＢＣＪ・ＣＫ41に焼土を検出し回りの暗褐色土が落ち込み、住居址とした。59号住居址・建物址22に切られ、大半が用地外にかかり、暗褐色土の範囲５×2.7mを調査した。竪穴住居址と思われるが、新しい攪乱もあり、全体規模等は不明である。確認した壁高は10cmを測り、床面は比較的堅く良好であった。焼土は床面に１×0.5mの範囲であり、断面観察を行なったがカマドの形態は確認できなかった。

遺物　出土量は少ない。土師器片、須恵器蓋、臼玉がある。

出土遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）



第183図　GOB　40号住居址

41号住居址（第184図）

遺構　ＧＯＢＢＱ44を中心に検出した。42号住居址に切られ、北西側約半分が用地外にかかる。隅丸方形の竪穴住居址で、調査範囲は2.8×5.4m、主軸方向はカマド位置を北西壁と想定するとＮ30°Ｗを示す。覆土は黒色土で炭・焼土が混入しており、火事にあっていると思われる。壁高は検出面から40～30cmあり、ほぼ垂直である。壁下に周溝があり、幅20cm・深さ10cm弱を測るが、

部分的に切れる所がある。床面は堅く良好であった。主柱穴は2本確認し、不整楕円形で深い。南隅の壁ぎわに穴が2個あり、入口部施設と思われる。

遺物　南隅の入口部施設と思われる穴の周辺に集中して出土した。土師器甕・小形甕・高坏、須恵器蓋、鉄器などがある。

出土遺物から推定して古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）

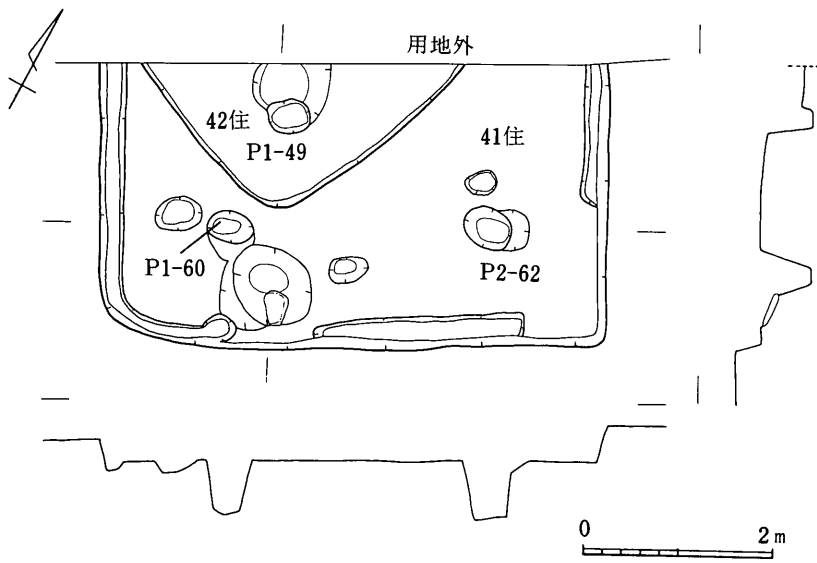
42号住居址（第184図）

遺構　ＧＯＢＢＰ44で41号住居址の床面に南隅を検出した。41号住居址を切る。用地外にかかりわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われるが、規模等は不明である。41号住居址覆土中で壁が把握できず、床面で検出したので、壁高は9～6㎝と浅い。用地境土層により壁高の確認に努めたが、把握できなかった。床面は堅く良好であった。主柱穴は南隅近くのＰ1が該当すると思われる。

遺物　土師器内黒坏片などわずかの出土である。

切り合い関係・遺物から古墳時代後期で41号住居址と時期差はあまりないと思われる。

（佐々木嘉和）

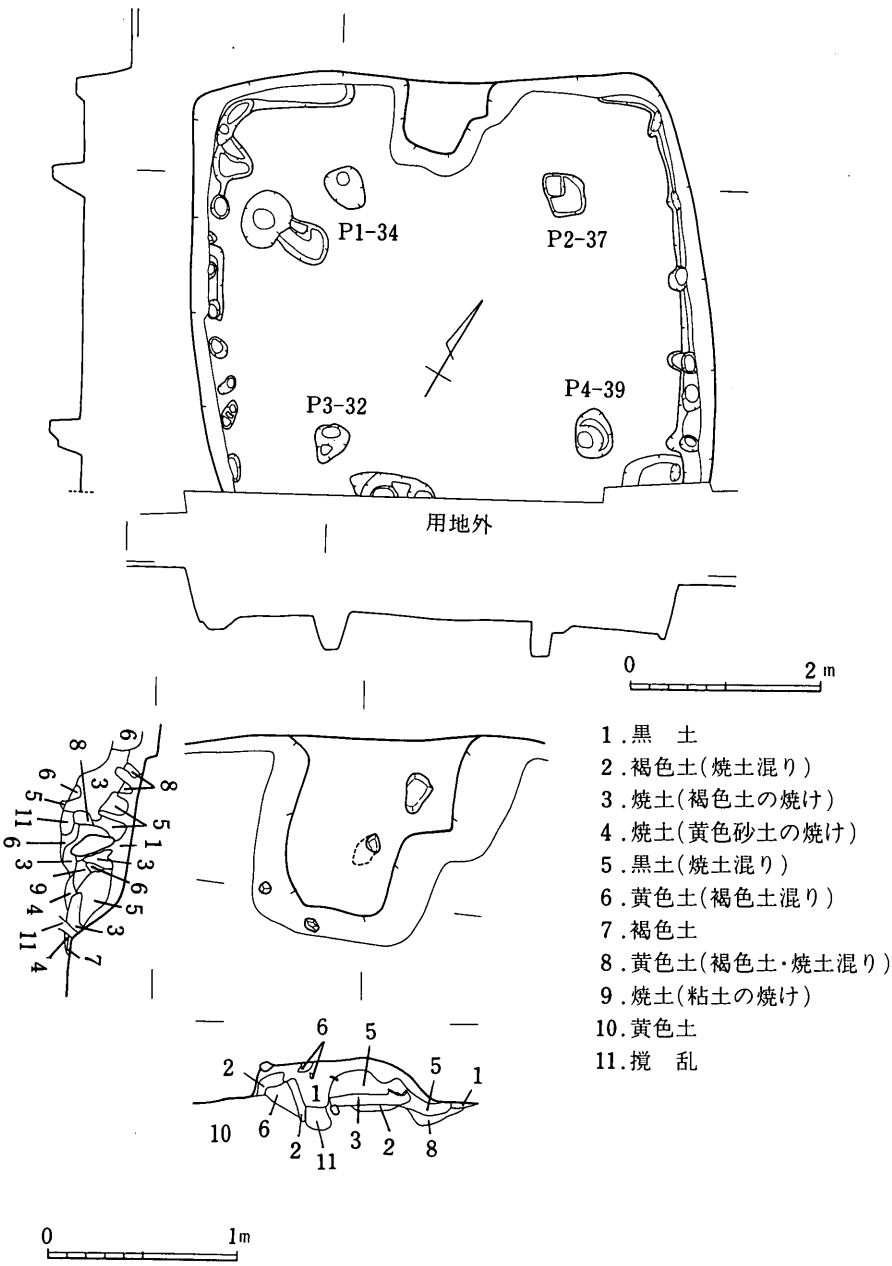


第184図　GOB　41号・42号住居址

43号住居址（第185図）

遺構　ＧＯＢＢＴ49を中心に検出した。用地外に南東壁が全部かかるが、ほぼ完掘できた。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は(5.4)×5.4m、主軸方向はN30.5°Wを示す。壁高は検出面から50～40

cmと深く、比較的緩やかな掘り方であるが、壁が二重になっていた。全体を掘り上げた後、土層観察のため地山まで掘り込んだ際に二重の壁を確認した。周溝は切れる所もあるがほぼ全周し、小穴を伴う。周溝中や壁直下に深さ約20cmの小穴が点在している事から、柱などで土止めの施設を造り埋めもどしたと思われる。床ははり床になっており、主柱穴より内側が堅く壁ぎわは軟かくて床面レベルも若干低くなる。主柱穴は4本で、不整形を成し、掘り方に段を有する。P3の東側



第185図　GOB　43号住居址

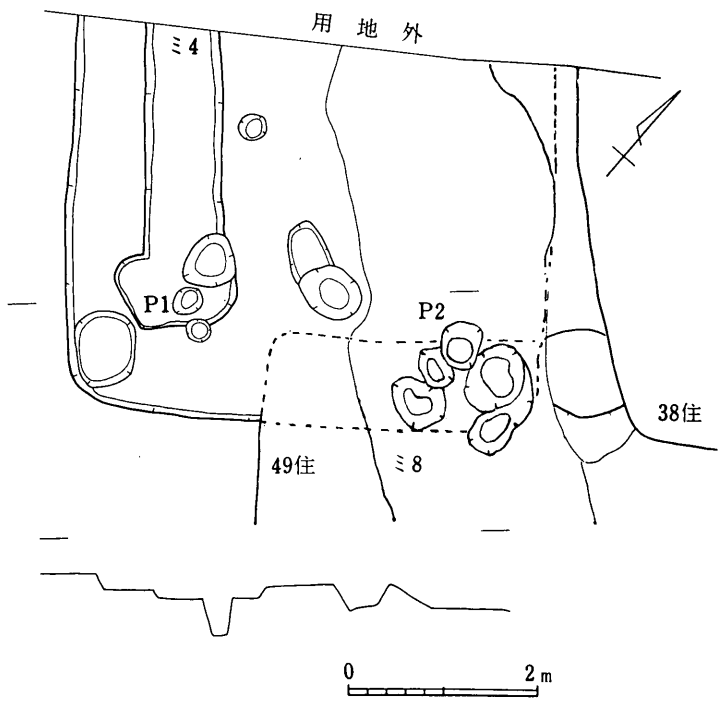
に深い穴があり、入口部施設と思われる。カマドは北西壁中央にあり、残存状態は悪い。両袖の先端部に小穴があり、石を抜いた痕跡であろう。右袖の壁ぎわに風化した花崗岩があり、石芯粘土カマドと思われる。火床は良く焼けており、中央に厚さ20cmの石を直立させ支脚としていた。

遺物　出土量は比較的少なく、土師器甕・小形甕・坏・高坏、須恵器蓋坏、砥石・台石があるが、全部破片である。また、床面上に編物石と考えられる礫が散在していた。

出土遺物から古墳時代後期前半と思われる。　（佐々木嘉和）

44号住居址（第186図）

遺構　ＧＯＢＢＵ44を中心として北側用地境に検出された。38号住居址の南西に並び、49号住居址と重複し、溝址４・８に切られる。正確な規模は不明であるが、一辺５ｍ程の竪穴住居址と考えられる。主軸方向は不明であるが、南北方向軸はＮ39°Ｗを示す。確認部の壁高は17cm前後を測り、東壁は床面や49号住居址カマドの状況から、溝址８と38号住居址の間にあったと考えられる。床面は凹凸があり、地山の礫が露出している部分もあり、きわめて軟かなものである。主柱穴はＰ１・Ｐ２とした穴と考えられ、Ｐ１は溝址４内、Ｐ２は溝址８内にあり、本住居址床面よりそれぞれ50cmと80cmを測る。他に、本住居址に伴うと考えられる施設等の確認はできなかった。



第186図　GOB　44号住居址、溝址４

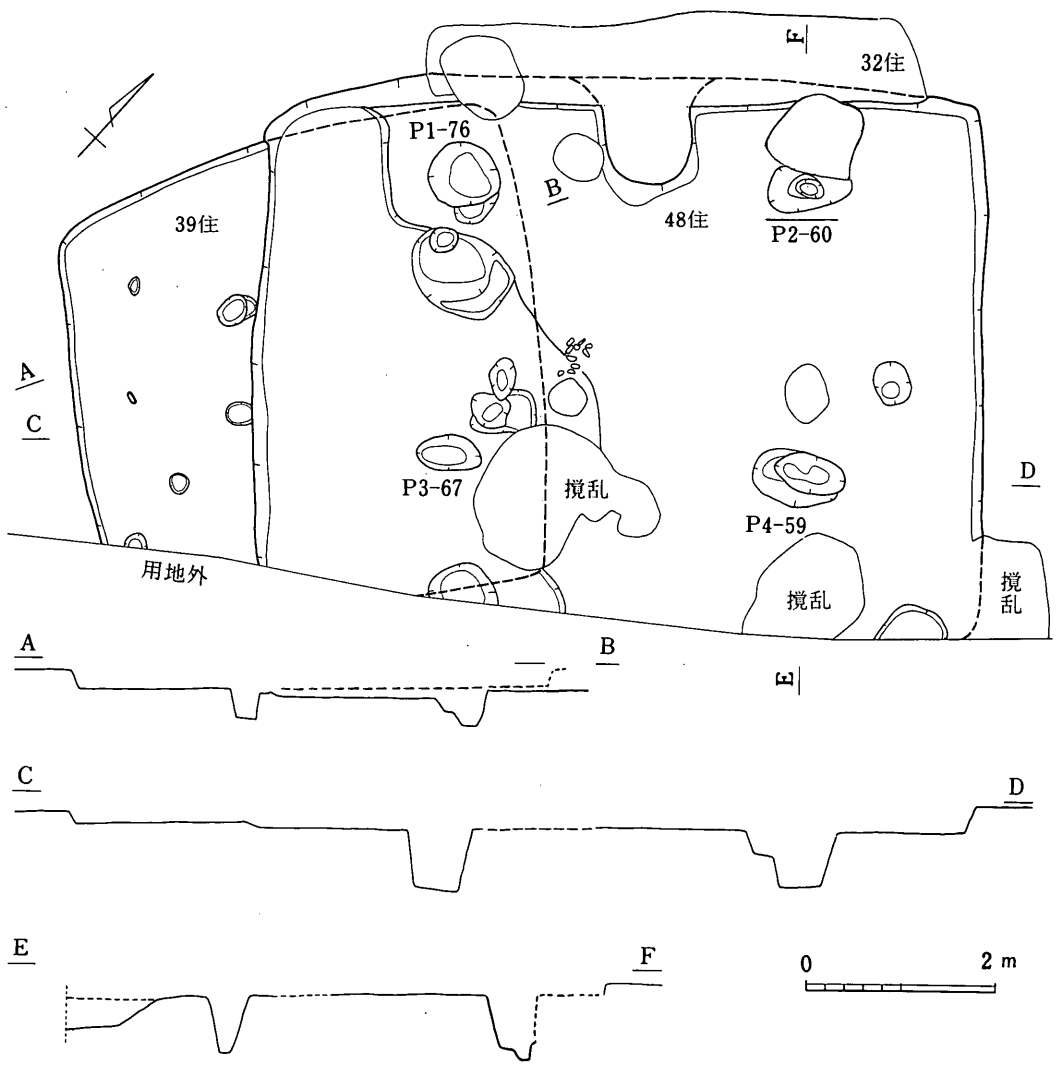
遺物　出土量はきわめて少なく、土師器甕・鉢が床面から、須恵器甕・坏・瑯の細片が上層より出土した。

遺物の出土量が少なく断定できないが、古墳時代後期後半の住居址と考えられる。

（佐合英治）

48号住居址（第187・188図）

遺構　ＧＯＢＣＦ47を中心に検出された。32号・39号住居址と重複し、中では本址が最も古い時期であるが、最初に掘り下げたために、２軒の住居址の48号住居址覆土中にかかる壁・床面を把握せず、結果として破壊してしまった。他に、土坑16を切り、南東側は⅓程用地外にかかり未調査である。主軸に直交する方向の長さは 7.7m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ38°Ｗを示す。主軸方向の長さは用地外にかかるため不明である。壁は調査範囲ではほぼ全面確かめられ、切り合いのない部分では40～30cm、それ以外は15～10cmを測る。床面は黄色土のはり床となり、主柱穴内側の住居址中央部は堅くたたき状で、主柱穴外側から壁までの間は軟かく、特に南西

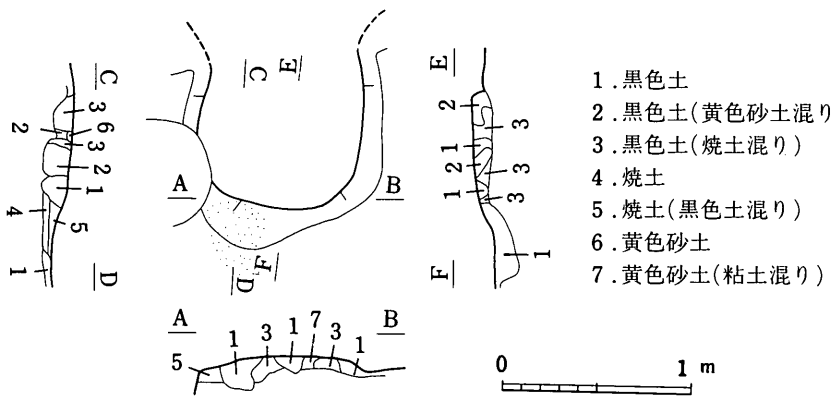


第187図　GOB　39号・48号住居址

側は黄色砂土層まで何ら床らしい部分が認められなかった。当初この面まで全面掘り下げ、その上を10cm程埋めもどし、黄色土のはり床とし、使用頻度の高い主柱穴内側が堅くなったと考えられる。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、Ｐ２～Ｐ４は南西・北東方向に細長い掘り方を確認した。住居址の規模・構造から、用地外にあと２本柱穴を持つ６本主柱穴の住居址の可能性が強い。カマドは西壁ほぼ中央にあるが、32号住居址に上部を削平され、わずかに焼土・粘土が残るだけで、構造等の把握はできなかった。

遺物　土師器甕・甑・内面黒色の坏・高坏、須恵器高坏・瑞があり、すべて破片で完形に復元できるものはない。他に、カマドの南２mの床面上には編物石が10個円形に固まっていた。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）

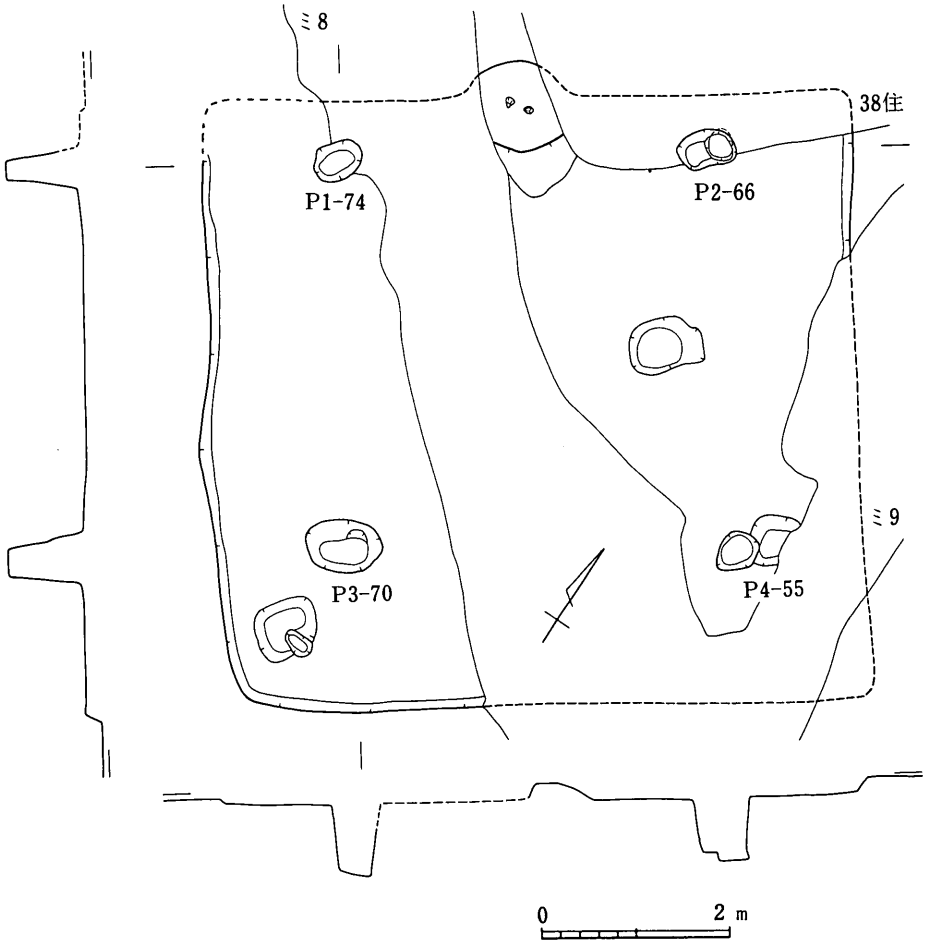


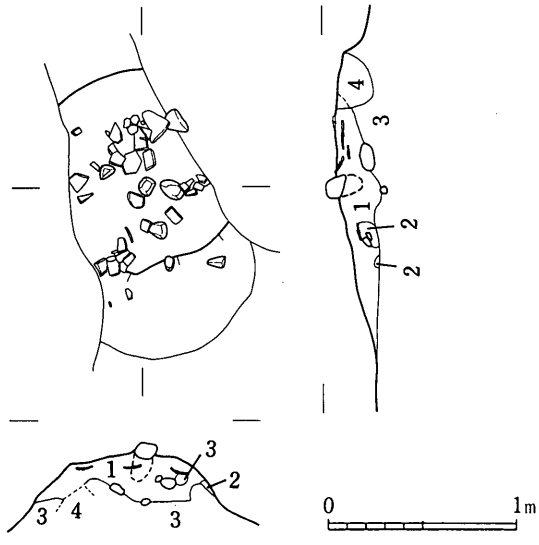
第188図　GOB　48号住居址カマド

49号住居址（第189図）

遺構　GOBBW46を中心に検出された。44号住居址と重複し、38号住居址、溝址８・９に切られる。他遺構との重複が多く確認部は少ないが、6.4×6.8mを測り、主軸方向はN38°Wを示す隅丸方形の竪穴住居址である。確認した壁高は18～４cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦であるが、きわめて軟かく地山の礫が所々で露出する。主柱穴は４本でＰ１～Ｐ３は東西にやや長い掘り方で、Ｐ２は底部に偏平な石を置き、段が付いており、２つの穴の切り合いの可能性が強いが、検出時に切り合いは確認できなかった。Ｐ４の覆土上面には焼土・炭が認められ、他の３本の覆土が黒色土であるのに対し、Ｐ４の覆土は砂質の暗褐色土である。カマドは北西壁のほぼ中央部にあるが、38号住居址・溝址８に切られ、全体の把握はできなかった。焼土が広い範囲にあり、支脚と思われる自然石を確認したが、両袖は不明で、石芯粘土カマドの中央部が残ったと考えられる。また、焼土中から土師器甕の破片が出土したが、カマドの一部として使われていたものか、内部に落ち込んだものかは不明である。

遺物　溝址に大きく切られるため出土遺物は少ない。床面密着および覆土下層から、土師器壺・





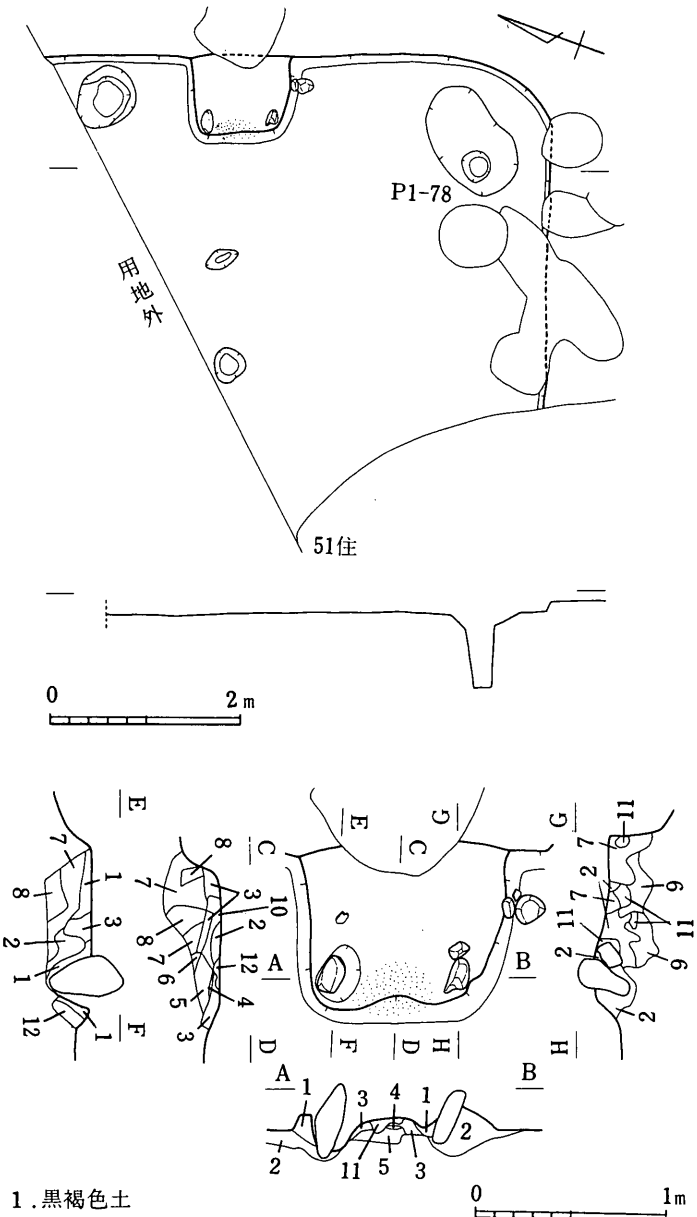
1．黒色土(焼土・黄色土混り)
2．焼　土
3．黄色土(砂質)
4．黒色土撹乱

第189図　GOB　49号住居址

甕・内面黒色の坏、須恵器蓋坏が出土している。

遺物から古墳時代後期前半の住居址と考えられる。

（佐合英治）



1.黒褐色土
2.　〃　（黄色砂土混り）
3.　〃　（焼土混り）
4.黄色粘土
5.焼　土
6.　〃　（黄色砂土混り）
7.黒色土
8.　〃　（黄色砂土混り）
9.黒色土(黄色砂土の混りやや少し)
10.黄色砂土(黒土混り)
11.黒褐色粘質土
12.撹　乱

第190図　GOB　52号住居址

52号住居址（第190図）

遺構　ＧＯＢＣＵ38にカマドを確認し、それを基にプランを把握した。掘り込みが浅いため検出にやや苦労した。西側は51号住居址に切られ、北側は用地外にかかるため、調査範囲は全体の約半分である。南西隅のみの調査で規模は不明であるが、隅丸の竪穴住居址である。主軸方向はカマドと壁の方向で推定すると、N71.5°Eを示す。壁は東壁の⅔と南壁の一部を確認し、壁高は30～10cmを測る。床面は全体が黄色砂土まで掘られ軟かい。しかし、カマド前面の一部分は黄褐色土をはり堅くたたき状になっていた。主柱穴はＰ１を確認したのみで、他は51号住居址に切られる部分及び用地外に位置するため、確認できなかった。カマド北側には、直径62cmの不整円形を呈し、深さ31cmを

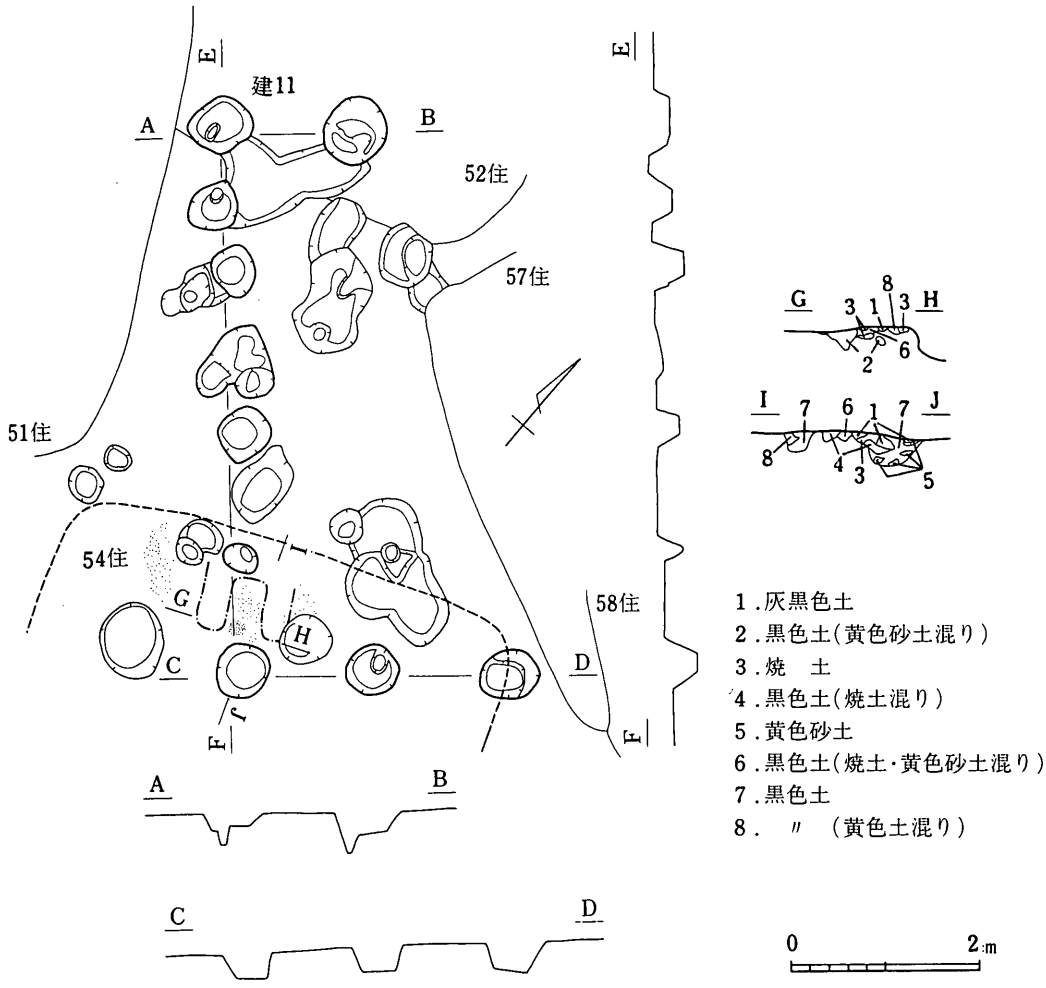
測る貯蔵穴がある。カマドは東壁に設けられ、袖先端部のみに石を用いた石芯粘土カマドである。たき口部の焼土上には、天井部に使われた粘土が落ちていた。

遺物　多くはないが、床面と貯蔵穴から出土し、セットとして良好に把えられる。土師器壺・甕・内面黒色土器の坏、須恵器蓋坏、土玉がある。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）

54号住居址（第191図）

遺構　ＧＯＢＣＴ42の黄色砂質土(地山)面に焼土があり、住居址とした。建物址11・穴に切られ、壁など遺構の確認できた所はわずかである。焼土の南東側が３×1.5mの範囲で堅く、焼土と同レ



第191図　GOB　54号住居址、建物址11

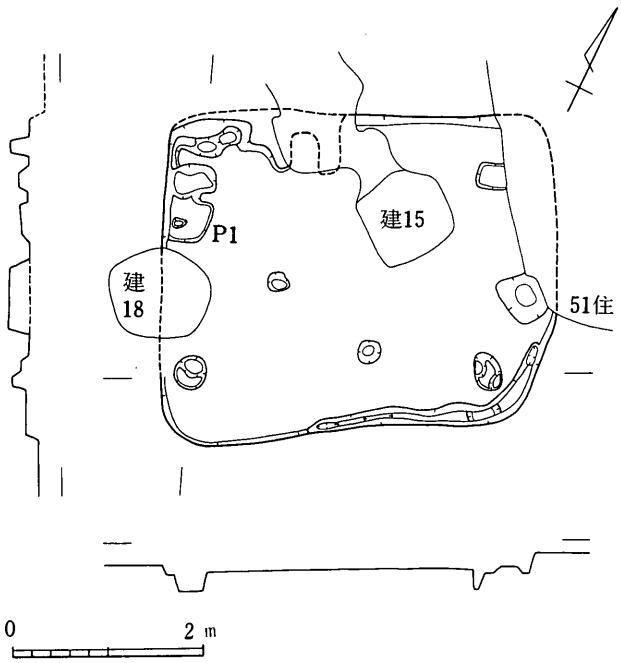
ベルで床面と思われる。カマドはほとんど残存しないが焼土の厚い部分があり、たき口部の火床と考えられ、推定のたき口方向は南東である。

遺物　焼土の周囲から土師器、須恵器片がわずか出土している。

出土遺物から古墳時代後期の住居址と思われる。　（佐々木嘉和）

55号住居址（第192図）

遺構　ＧＯＢＣＯ42を中心に検出された。51号住居址、建物址15･18、穴に切られるがほぼ完掘した。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は3.4×4ｍを測り、主軸方向はＮ24.5°Ｗを示す。本址付近の地形は黄色砂質土（地山）が南東に傾斜しており、褐色土面からの掘り込みで、平面形把握が困難であり、確認の削平をくり返した。壁高は検出面に高低差があり30～10cmを測る。周溝は部分的にあり、幅・深さともに10cm弱である。床面は堅く非常に良好であった。主柱穴は確認できなかったが、各隅ぎわのものがいずれも20cm前後の深さでその可能性が強い。カマドは北西壁西隅寄りにあり、新しい穴に切られ左袖がわずか残るだけであった。地山を掘り残したカマドと思われる。



第192図　GOB　55号住居址

遺物　出土量はあまり多くないが、土師器壺のほぼ完形がＰ１から、金環が南西隅近くの床面直上から出土している。土師器甕・坏、須恵器坏、臼玉などが出ている。

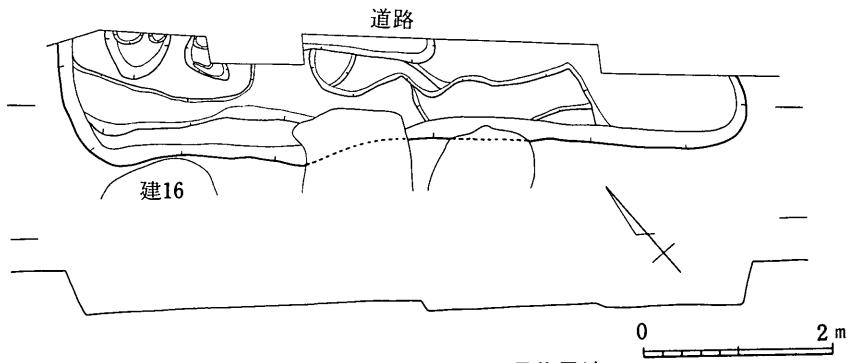
出土遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）

56号住居址（第193図）

遺構　ＧＯＢＤＣ40周辺に検出された。建物址16に切られ市道にかかるため、わずか調査できただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、南西壁7.3ｍを確認した。壁高は検出面から30cmあり、壁面はやや傾斜する。床面は新旧不明の穴と重複し、凹凸が著しい。

遺物　出土量はわずかである。土師器甕、須恵器甕･坏･蓋など出土しているが、時期差のある遺物があり、穴の遺物が混入しているためと思われる。

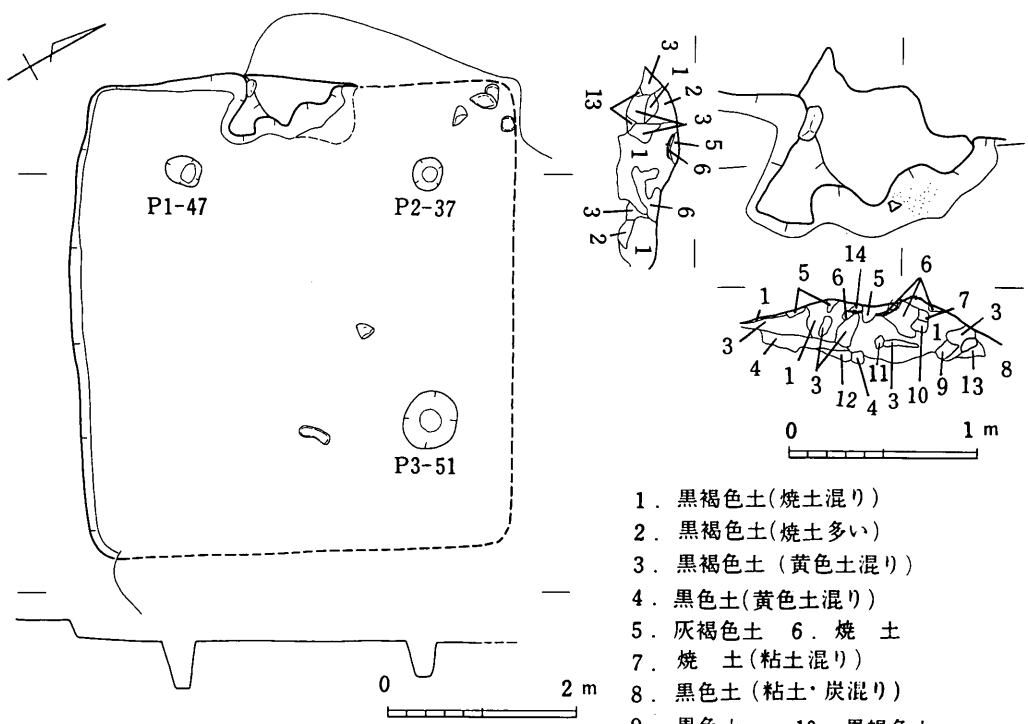
出土遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）



第193図　GOB　56号住居址

57号住居址（第194図）

遺構　ＧＯＢＣＶ41を中心に検出された。58号住居址を切り、建物址16・穴に切られる。ほぼ完掘したが、58号住居址覆土中の壁は確認できなかった。方形の竪穴住居址で、規模は５×（５）



1．黒褐色土(焼土混り)
2．黒褐色土(焼土多い)
3．黒褐色土（黄色土混り）
4．黒色土(黄色土混り)
5．灰褐色土　6．焼　土
7．焼　土(粘土混り)
8．黒色土（粘土・炭混り）
9．黒色土　　10．黒褐色土
11．黒褐色土(焼土ブロックで入る)
12．灰褐色土(黄色土混り)
13．黄色土（黒色土混り）　14．粘　土

第194図　GOB　57号住居址

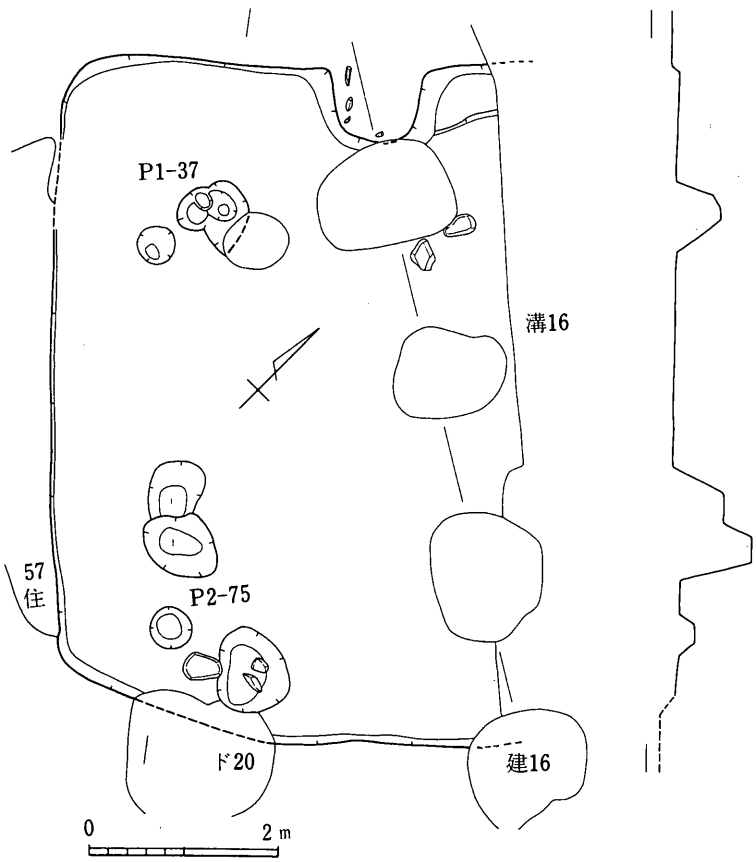
m、主軸方向はN63°Wを示す。壁高は検出面から20cmを測る。床面の状態は北西隅と南隅を結ぶ線を境にして異なる。北半分は建物址16・穴などに切られ58号住居址覆土中でもあり、はっきりと確認できなかった。南半分の床面は、58住に重複する部分がはり床状になり堅く、それ以外の部分は比較的軟かい。主柱穴は3本確認したが、平面形・深さともに差がある。 カマドは北西壁ほぼ中央に位置する。残存状態は悪く粘土が一部に認められたが、地山を掘り残したカマドと思われる。カマド中に遺物が入り込んでいた。

遺物 出土量は少ない。カマド中に土師器甕・甑片が入っていた。他に、土師器坏、須恵器坏・高坏、管玉・臼玉などがある。

遺物から古墳時代後期後半であろう。 （佐々木嘉和）

58号住居址（第195・196図）

遺構 ＧＯＢＣW40を中心に検出された。57号住居址・建物址16・溝址16・土坑20・穴に切られ、7×5mの約⅔調査した。7m四方程度の隅丸方形の竪穴住居址と思われ、主軸方向はN45°Wを示す。壁高は検出面から10cmを測る。床面は不明確で、黄色砂土（地山）上面を床とした。主柱穴2本を確認したが、いずれも不整形で深さにも差があった。東南壁南隅寄りに穴が2個あり、中間に台石があって、入口部施設と思われる。カマドは北西壁中央にあり、比較的状態良く残り、石芯粘土カマドで大きな石を使っている。遺物が比較的多く混入していた。

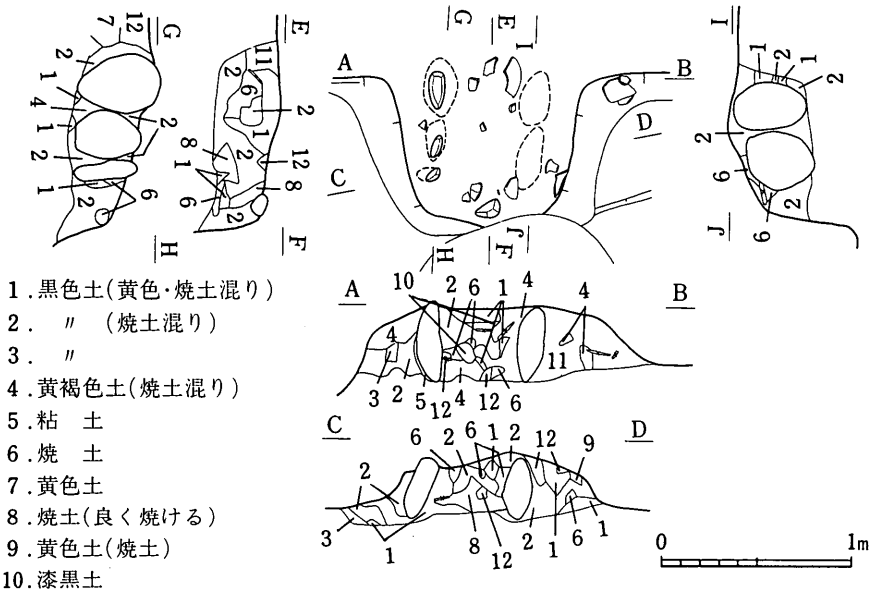


第195図 GOB 58号住居址

遺物 出土量は少ない。土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器蓋坏、ガ

ラス玉、台石などがある。

切り合い関係・遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）



1.黒色土(黄色・焼土混り)
2.　〃　(焼土混り)
3.　〃
4.黄褐色土(焼土混り)
5.粘　土
6.焼　土
7.黄色土
8.焼土(良く焼ける)
9.黄色土(焼土)
10.漆黒土
11.④より焼土少ない
12.撹　乱

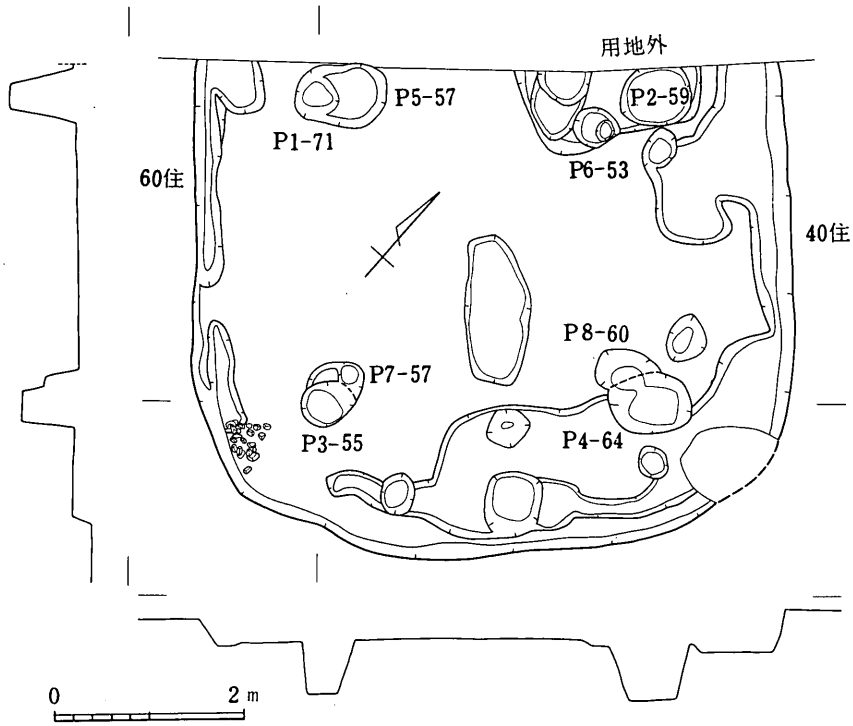
第196図　GOB　58号住居址カマド

59号住居址（第197図）

遺構　ＧＯＢＣＨ42を中心に検出された。40号住居址を切り、60号住居址・建物址12に切られる。北西側は用地外のため¼程調査できなかった。主軸に直交する方向が6.4ｍを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ38°Ｗと測定できる。壁は用地外となる北西壁以外は確認され、壁高は30～20cmを測る。南西壁は60号住居址のはり床下に検出された。周溝は南隅付近で一部切れるが、ほぼ全周確認できた。幅52～12cm・深さ20～７cmを測り、南東側は壁直下から20～６cm内側に設けられる。床は全面黄色砂土まで掘られ、軟かく状態は悪い。しかし、Ｐ５の東側には小砂利に黄褐色土を混ぜた土をはって堅くなった部分が認められた。主柱穴は新旧の８本があり、Ｐ５～Ｐ８が古く、Ｐ１～Ｐ４に建て替えたと考えられる。主柱穴・平面形から東・西・南方向へ住居址が拡張されたと考えられる。用地外の断面に石・粘土が一部認められ、カマドは北西壁に設けられたと思われる。

遺物　出土量は多く、床よりやや浮いた状態のものが主体である。土師器壺・甕・甑・内面黒色の坏・高坏、須恵器高坏、刀子、砥石があり、南隅下の床面上に編物石が21個固まって出土した。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

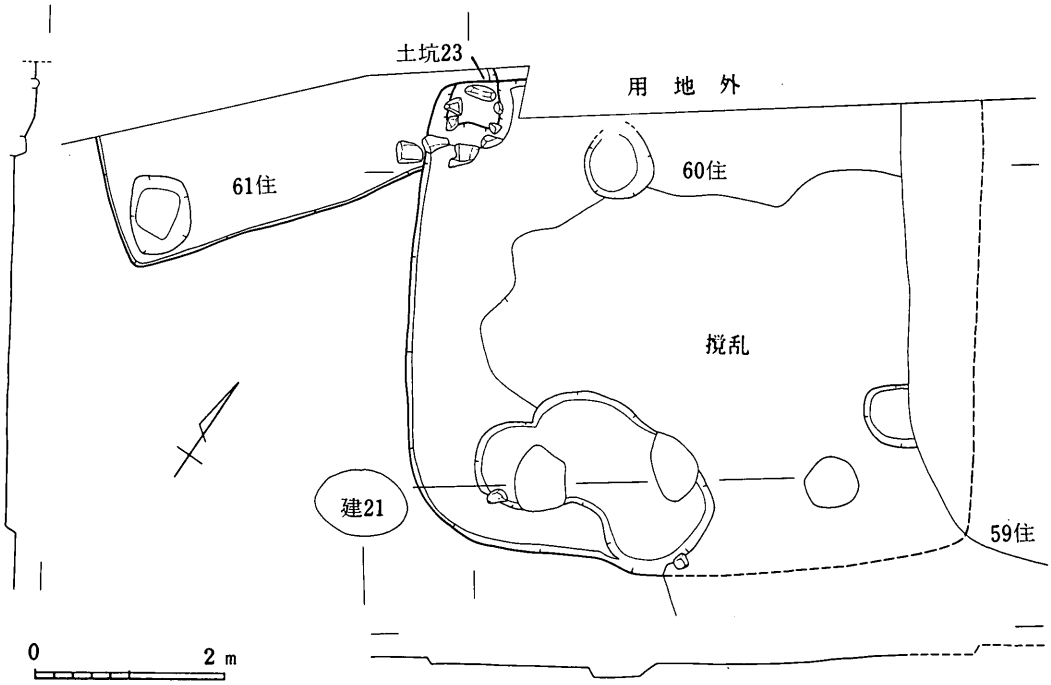


第197図　GOB　59号住居址

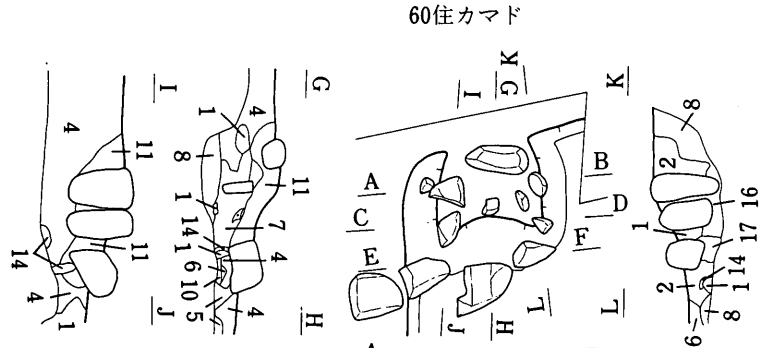
60号住居址（第198図）

遺構　ＧＯＢＣＥ42を中心に検出された。バックホーによる表土剝ぎによって、大部分の床面と南壁の半分程をとばしてしまった。59号・61号住居址、建物址21・土坑23を切る。北東側の一部で59号住居址の覆土上にはり床と、用地外壁の土層断面に壁の立ち上がりを確認した。カマドの部分は用地内ギリギリまで調査したが、北西壁は用地外のため調査できなかった。4.9×６mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ32.5°Ｗを示す。壁は南西壁と南東壁の半分程確認し、壁高は10cm前後を測る。床面は中央部の大部分がバックホーの破壊を受けているが、残存部分の状態は全面黄褐色土層まで掘られ、黄色土をはり堅く良好であった。主柱穴はその検出に努めたが把握できず、掘立柱を竪穴内に持たない住居址と考えられる。カマドは北西壁西隅にあり、両袖にそれぞれ３個の石を使った石芯粘土カマドである。最も手前の石は両袖とも西側に倒れ、他の４個はやや内傾して構築されている。天井石は２個使用され、手前のものは２つに割れてカマド脇に落ち、他の１個はカマド奥壁の原位置にある。左袖は壁との一体構造になっているかとも思われたが、土層からはその判断はできなかった。たき口部には焼土がほとんどみられなかった。

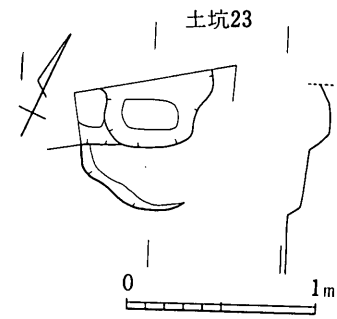
遺物　覆土の大部分をバックホーで削り取ってしまい出土量は少ない。土師器の甕・坏の他、金



60住カマド



土坑23



1.黒褐色土
2. 〃 (黄色砂土混り)
3. 〃 (焼土混り)
4.茶褐色土
5. 〃 (黄色砂土混り)
6. 〃 (黄色砂土・焼土混り)
7.黒褐色土(焼土混り)
8.黄色砂土(茶褐色土混り)
9. 〃、(黒褐色土混り)
10.黒色土(茶褐色土・黄色砂土混り)
11.黒褐色土 (茶褐色土混り)
12.焼土(黄色粘土・黒褐色土混り)
13. 〃 (黒褐色土・茶褐色土混り)
14.黄色砂質土
15. 〃 (黒褐色土・焼土混り)
16.黄色粘土(黒褐色土混り)
17. 〃 (黒褐色土・焼土混り)

第198図 GOB 60号・61号住居址、土坑23

環が出土した。

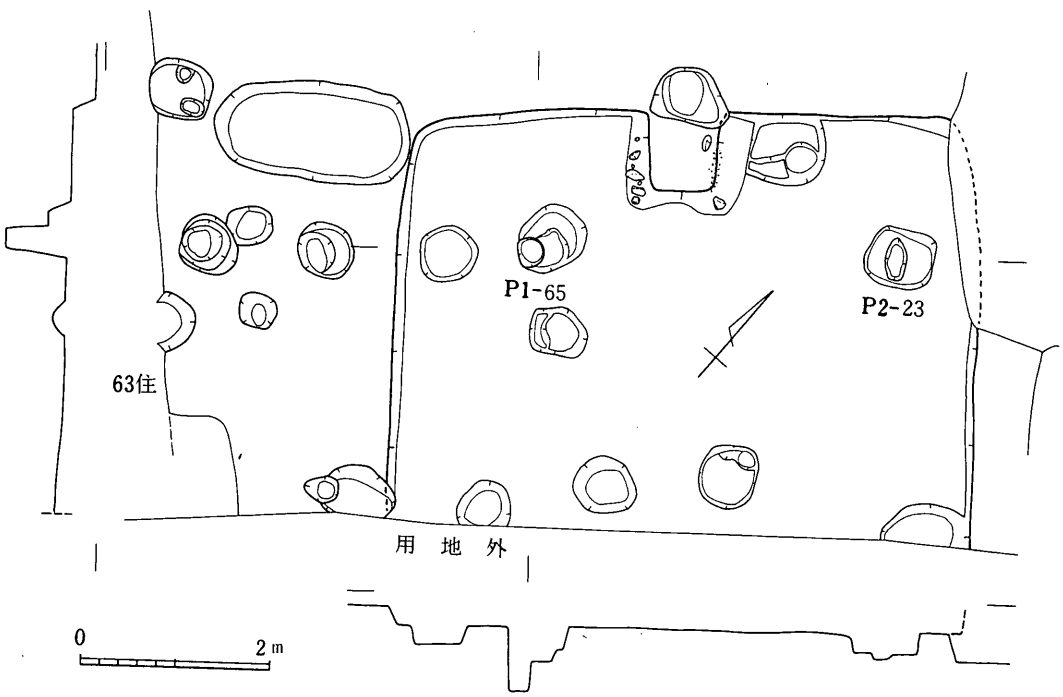
出土遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。（山下誠一）

62号住居址（第199・200図）

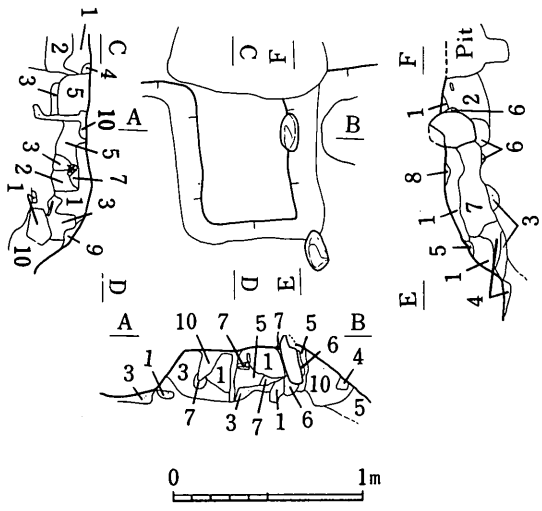
遺構　GOBCK47を中心に検出された。北東壁の北隅近くは切られており、住居址より新しい穴である。用地外にかかり約⅔を調査した。隅丸方形の竪穴住址であり、調査範囲は4.3×6mで、主軸方向はN41°Wを示す。壁高は検出面から30～20cmあり、やや緩い傾斜の壁面である。床面は部分的に軟かい所もあったが、全体的には堅く良好であった。P1・P2が主柱穴と考えられ、P1は切り合いがある様子で、P2はやや浅く若干の疑問もある。用地外に近い4個の穴は床面を切っており、住居址より新しい。並んでいる3個の穴の底部は堅くつき固められている。カマドの残存状態は悪く、全体としては不明の点もあるが、残存する石の周囲だけに焼土があり、石芯粘土カマドと思われる。

遺物　出土量は少なく、土師器甕・坏、須恵器壺・坏・高坏、鉄滓などがある。

出土遺物から古墳時代後期後半であろう。（佐々木嘉和）



第199図　GOB　62号住居址、Pit群



1.黒色土
2.　〃　(黄色土混り)
3.黄色土(黒色土混り)
4.黄色土
5.黄褐色土
6.焼土(赤褐色)
7.2に(焼土混り)
8.黒色土(覆土)
9.暗褐色土(黄色土混り)
10.撹　乱

第200図　GOB　62号住居址カマド

④ 奈良時代

住居址は5軒を確認したのみで、その数は他時期に比べあまり多いとはいえず、むしろ少ない方である。しかし、該期には掘立柱建物址が本地籍内の全域に検出され、これらとの関連が当然考えられる。住居址はA～C区に点在しており、住居址のみで集落を形成したとはいい難く、分布状況からみれば、掘立柱建物址等の他遺構に付属したものと推測される。

なお、本時代に後続する平安時代の遺構としては、若干特異な状況を示す住居址が2軒検出されたのみで皆無に近い状況であり、遺跡群の中で特異な状況を奈良時代から平安時代にかけての間に求められる。　(小林正春)

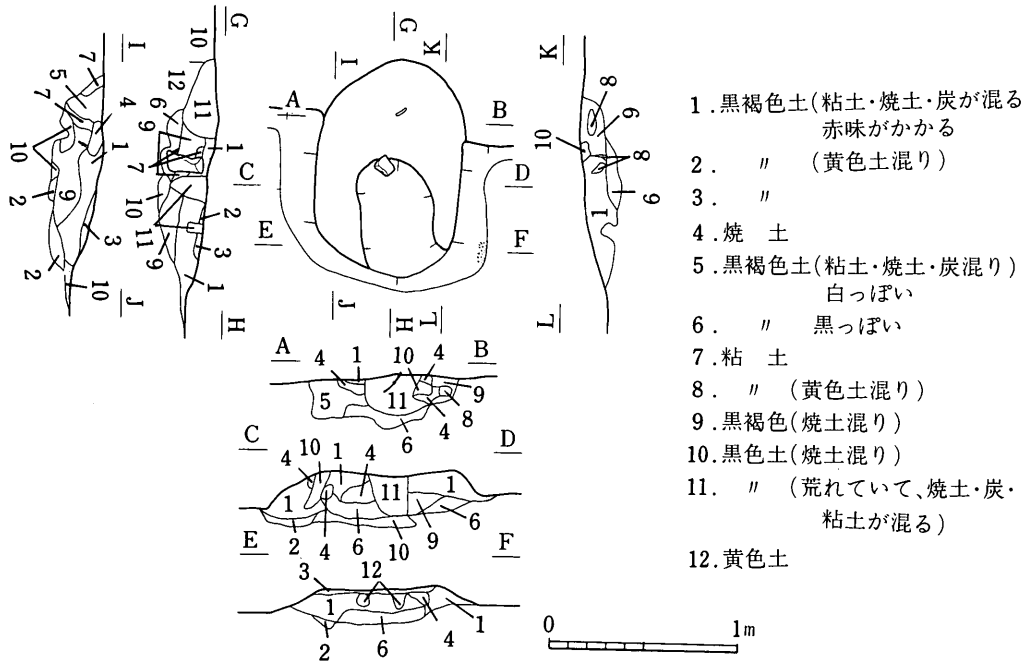
3号住居址(第165・201図)

遺構　GOBAI51を中心に検出した。2号住居址を切っている。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は3.8×4.4m、主軸方向はN52°Wを示す。壁高は検出面から40～20cmあり、やや緩く傾斜する壁面である。周溝は南西壁下に幅20～10cm・深さ14～10cm・長さ2mを確認した。東南壁下には、幅50cm・深さ10cm前後の周溝状落ち込みがある。床面は堅く良好であった。床面ほぼ中央の穴は、20cm弱と浅いが、全面に粘土がはり付けてあり堅くなっていて、覆土には焼土・炭が混入していたが、性格等は不明である。カマドは北西壁中央からやや北隅寄りにあり、残存状態は良かった。粘土カマドで、支脚は長さ20cm弱の花崗岩を直立させたもので良く焼けていた。

遺物　出土量は少ない。カマド右側の穴に遺物が入っており、覆土中間に集中していた。土師器甕、須恵器甕・長頸瓶胴部・平瓶口縁・横瓶・坏・蓋、刀子が出ている。須恵器坏はカマド右の

穴と、北壁ぎわから出土したものが接合しほぼ完形であり、高台内側に墨様の物が付着しており、転用硯の可能性がある。

出土遺物から奈良時代である。　（佐々木嘉和）



第201図　GOB　3号住居址カマド

11号住居址（第202図）

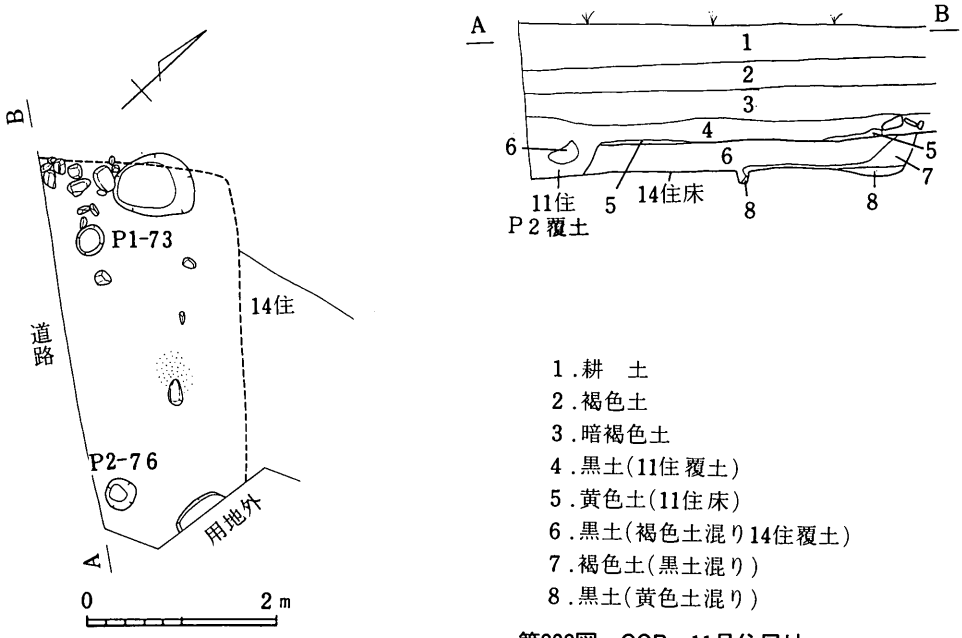
遺構　GOBAE54周辺に古墳時代後期遺物が出土し、住居址とする。恒川A地籍境の市道にかかり、14号住居址の覆土中に掘り込まれ、床面の一部分を把握したのみである。須恵器の出土範囲を住居址の範囲と想定し、1辺が4m強の住居址と考えられる。床面は一部はり床で、市道ぎわが堅く、想定壁のあたりでは軟かく、確認できなかった。主柱穴は14号住居址床面まで達しており、14号住居址調査時に検出した。床面よりわずか上にあった石は焼けて黒くなっており、一部に焼土の散布もみられた。

遺物　調査範囲が狭く量は少ない。土師器甕、須恵器甕・坏の破片と鉄片が出土している。

切り合い関係と出土遺物から古墳時代後期終末から奈良時代の住居址である。　（佐々木嘉和）

31号住居址（第182・203図）

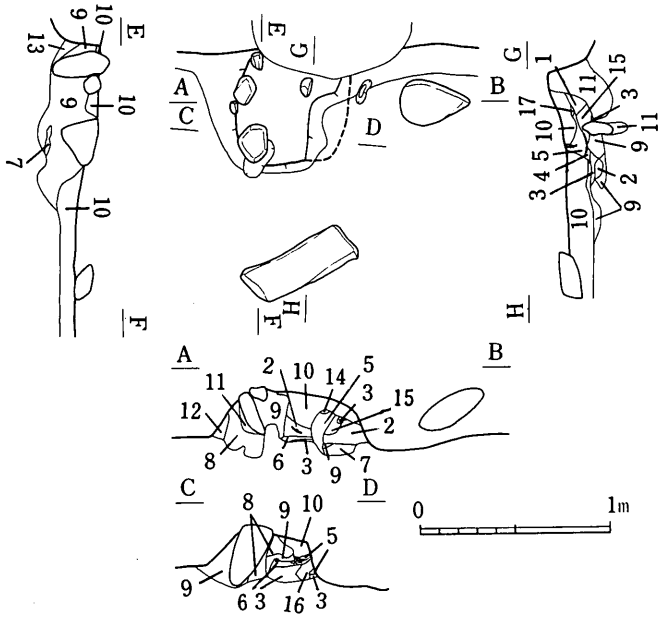
遺構　GOBCM・CN45に検出した。30号住居址を切っているが、検出時に新旧関係が確認できず、同時に掘り下げたため、30号住居址内の壁を把握できず、セクションベルトによって土色差



1.耕　土
2.褐色土
3.暗褐色土
4.黒土(11住覆土)
5.黄色土(11住床)
6.黒土(褐色土混り14住覆土)
7.褐色土(黒土混り)
8.黒土(黄色土混り)

第202図　GOB　11号住居址

を認めた。穴に切られるが、ほぼ完掘した。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は(3.3)×3.8m、主軸方向はN32.5°Wを示す。壁高は検出面から30cmあり、やや緩く傾斜する壁面である。床面は軟かく、30号住居址覆土中の床面は確認できなかった。主柱穴は4本で、いずれも不整形で大きさ・



1.褐色土(焼土混り)
2.黄褐色砂土(焼土混り)
3.焼　土
4.黒褐色土(焼土混り)
5.黒色土(焼土粒混り)
6.　〃　(焼土・褐色土・黄砂土混り)
7.　〃　(焼土混り)
8.黒褐色土
9.黒色土
10.褐色土
11.黄色砂土(黒色混り)
12.褐色砂土(黄褐色砂混り)
13.黒褐色砂土
14.黄色土(粘土)
15.黒色土(粘土粒混り)
16.　〃　(黄色土混り)
17.粘　土

第203図　GOB　31号住居址

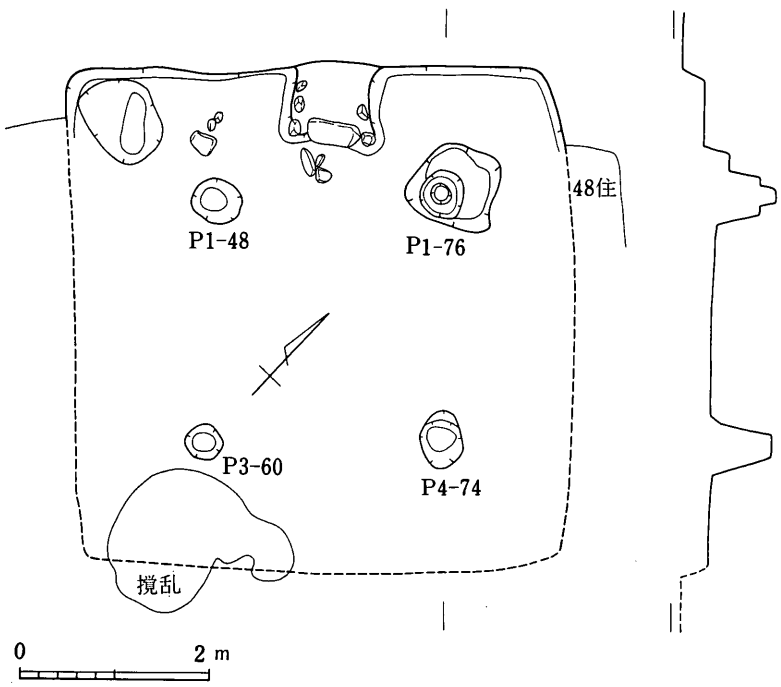
深さも様々である。カマドは北西壁中央にあり、石芯粘土カマドである。右袖は新しい穴に壊され芯石らしい石が穴の中にあった。天井石は長さが60cmあり、カマド前方の床面に転落していた。支脚は長さ17cmの石を直立させている。

遺物　出土量は少ない。土師器甕・小形甕・高坏、須恵器坏・蓋が出ている。

時期は切り合い関係と遺物から奈良時代である。　（佐々木嘉和）

32号住居址（第204・205図）

遺構　48号住居址調査中にＧＯＢＣ Ｆ51に設けられたカマドが発見され、住居址が重複することが判明した。北西壁と北・西隅を検出したが、南東側は大部分が48号住居址の覆土中にあるため、壁は把握できなかった。最終的に床面まで掘り下げ、48号住居址覆土中にはり床が検出され、同住居址を切っていると判断できた。他に、南側が一部39号住居址に切られ、土坑16を切っている。(5.4)×5.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ45.5°Ｗを示す。主軸方向の規模は主柱穴からの距離により推定した。壁は西壁が全面確認でき、壁高は30～15cmを測る。床面は48号住居址と切り合わない部分で、黄色砂土まで掘り込み黄色土をはっている。48号住居址覆土の一部に黄色土のはり床がみられ、Ｐ２を中心にして約１m幅のカマド全面と、Ｐ４の方向へ1.3m範囲は、たたき状に堅くきわめて良好であったが、全体的には軟かく、48号住居址の覆土と区別が困難であった。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、それぞれ丸味を帯びた掘り方で、Ｐ２は二段になり、上部掘り方は他の穴より大きい。西隅下には92×74cmの楕円形を呈し、深さ56cmの穴があり、貯蔵穴と思われる。カマドは北西壁ほぼ中央にある石芯粘土カマドである。左袖には３個、右袖には２個の石が残り、右袖も断面調査時に石を１個抜いた痕があり、いずれも３個の芯石であった。天井石も残るが、右袖の手前の石が外側に倒れたため、カマド内側に



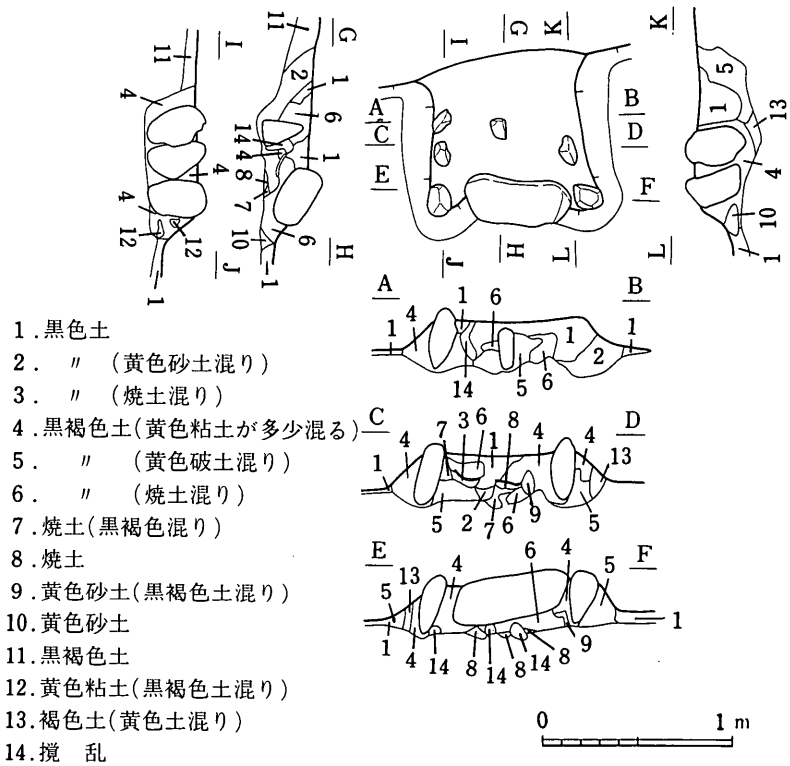
第204図　GOB　32号住居址

落ち込んでいる。たき口部の焼土は比較的少なく、カマド内には土器が落ち込んでいた。

遺物　土師器・須恵器があるが、出土量は多くない。ほとんどが床面からの出土である。土師器甕・高坏、須恵器甕・蓋・盤などがある。

遺物から奈良時代初頭に位置づけられる。

（山下誠一）



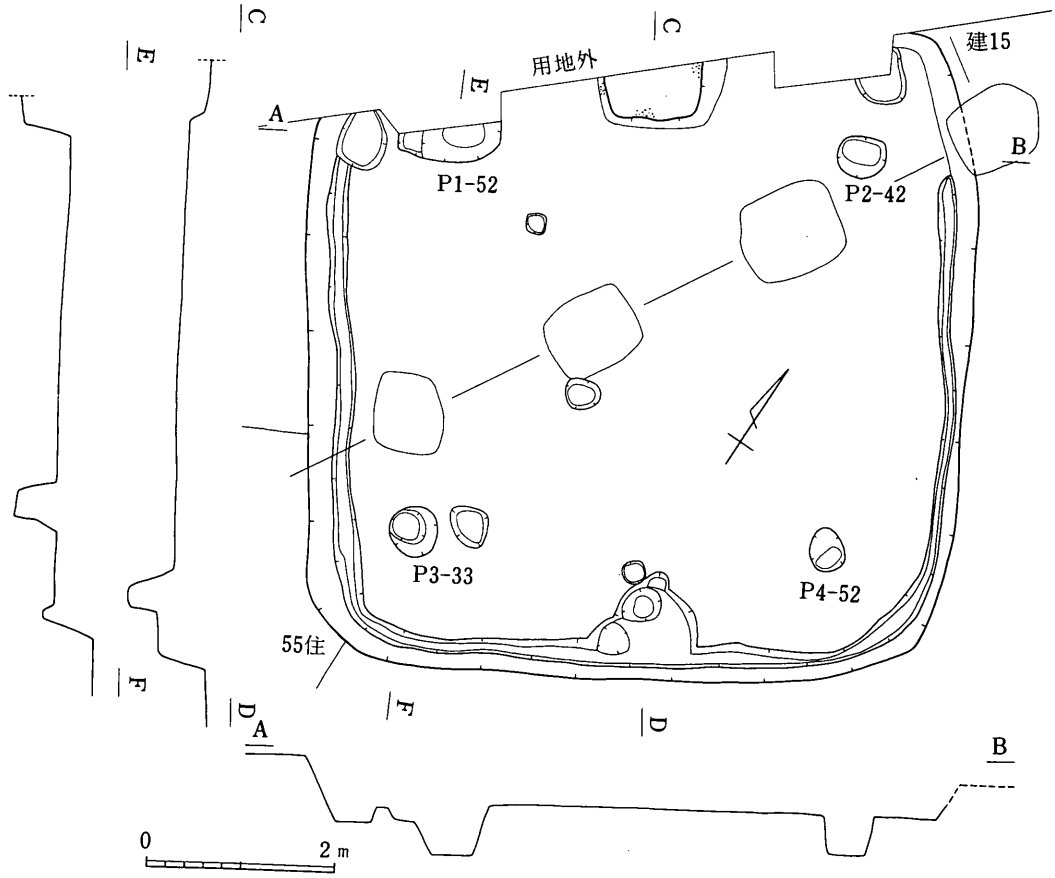
第205図　GOB　32号住居址カマド

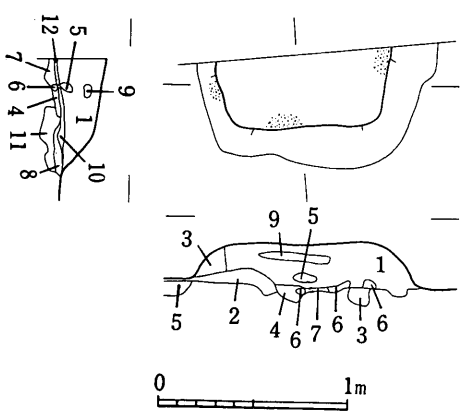
51号住居址（第206図）

遺構　ＧＯＢＣＱ・ＣＲ40を中心に検出された。52号・55号住居址を切り、建物址15に切られる。用地外にわずかかかるが、ほぼ完掘できた。規模は(6.8)×6.8mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ31.5°Ｗを示す。覆土は大きく３層に分かれ、上から黒土・褐色土・褐色土（黄色土混り）の順であった。壁は緩い傾斜があり、壁高は50～40cmあり比較的深い。周溝は調査した壁下にほぼ全周し、幅20～10cm・深さ約10cmを測る。床面は堅く良好であり、南東壁下は50cm幅で、はり床状に埋めもどした痕跡があった。主柱穴は４本で、いずれも不整円形で、レベルは若干の差がある。南東壁下ほぼ中央にある穴は、縁部を若干高め土手状になっており入口部施設と思われる。カマドは壁ぎわが用地外にかかり全体の調査はできなかった。残存状態が悪く、焼土と褐色土がブロック状に混入していた。灰褐色土の堅い層が、床面と同じレベルで検出され、赤化していないが火床と推定した。

遺物　出土量は多く、中・下層からの出土がほとんどである。土師器甕・坏・高坏、須恵器平瓶・瑞・高坏・蓋、鉄鎌・刀子、砥石・編物石がある。鎌は２個あり、いずれも床面より若干上に浮いて出土したが、保存状態は良好である。刀子は東壁中央下からの出土である。上層の黒土中か

ら金環が出たが、混入品の可能性もある。編物石と思われる長楕円形の河原石が床面に散在していた。





1.褐色土(焼土混り)
2. 〃 (焼土・炭・黄色土混り)
3.黒色土
4.黄色土(褐色土混り)
焼土・炭混りで茶褐色
5.黄色土(黒土混り)
6.焼 土
7. 〃 (褐色土混り)
8.黄色土(焼土混り)
9.粘 土(〃)
10.灰褐色土
11.黒褐色土(焼土・炭の混った所は茶色)
12.黒色土(炭混り粘質)

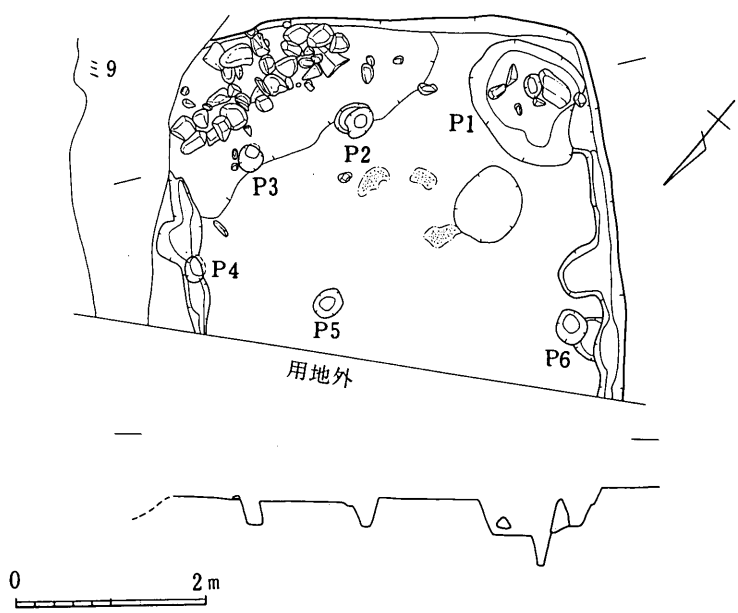
第206図 GOB 51号住居址

出土遺物から奈良時代と思われる。　（佐々木嘉和）

⑤ 平安時代

38号住居址（第207・208図）

遺構　ＧＯＢＢＸ43を中心に検出された。36号・49号住居址を切り、溝址９に切られ、北西側は用地外となり未調査である。南西・北東の長さは4.6mで、この軸方向はＮ39°Ｅを示すが、主軸方向及び北西・南東の長さは不明である。東隅がややふくらむ方形の竪穴住居址と考えられる。確認部の壁高は20cm前後を測る。周溝は、北東と南西の壁直下にあり、幅は25～10cm・深さ21～５cmである。床面は中央部分が壁ぎわに比べ６～２cm高くなっており、全体に堅い。また、中央部分から南隅に向かって約1.3m幅できわめて堅いたたき状を成し、この床面上に密着して焼土を所々に認め、火事の住居址とも考えたが、覆土中には炭・焼土はなく、断定できない。主柱穴は不明であるが、本住居址に伴うと考える穴を６個検出した。Ｐ１は南隅の壁に接しており、径1.2m・深さ41cmを測る大きな穴で、遺物は出土しなかったが、覆土中に径35～10cmの自然石が混入している。さらに底部中央部に径20cm底部からの深さ27cmの穴があり、入口部施設が考えられる。Ｐ２～Ｐ４は32cm、Ｐ５・Ｐ６は37cm程の深さを測る。床面上の特筆されるものとして、東隅に径40×20cmと10cm前後の自然石を30個程使った石組の施設がある。この部分の床はわずか凹んでおり軟かい。石は黒色土で固定され、東隅を三角形に区切るように壁に向かって二列に立てて並べられており、列の幅は30cmを測る。住居址の中心を向く面の北側は、二段に積んだ状態が残るが、南側は、石積が乱れた状態で、上段の石がずれ落ちていると考えられる。中央部分の石の中には火を受けているものがあり、焼土も一部にわずか確認された。当初

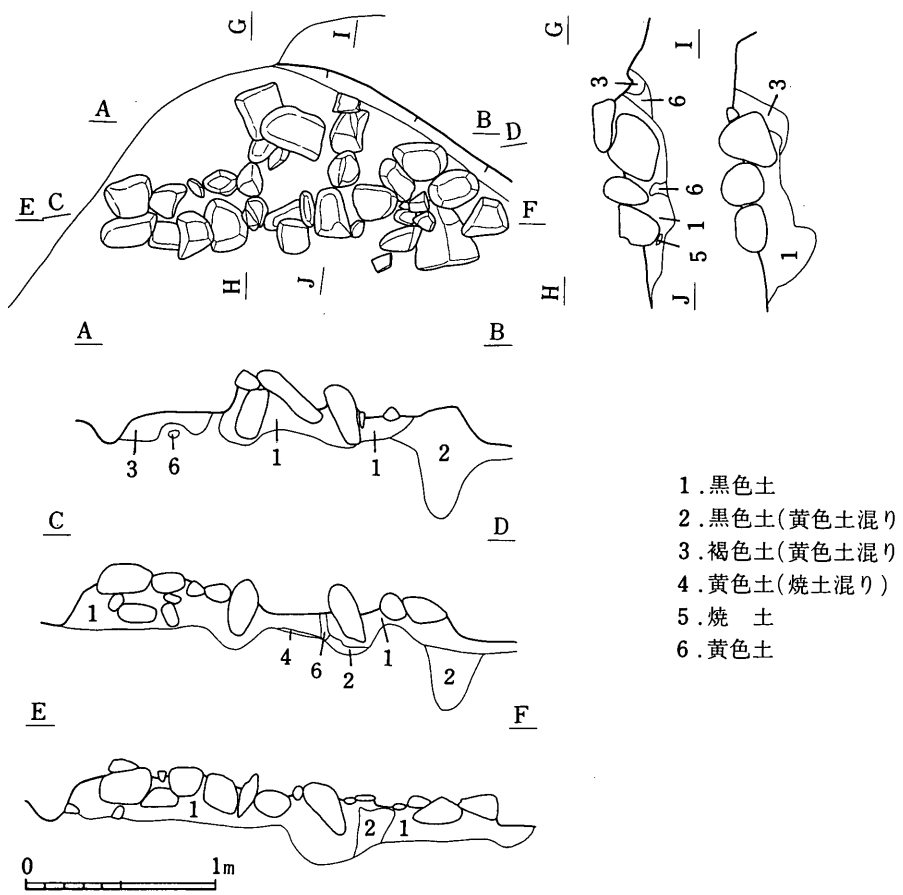


第207図　GOB　38号住居址

カマドではないかと考えたが、焼土の状況は一般のカマドのものとは異なり、形態も異質でありカマドではなく住居址内の特殊な施設と考えられる。更には住居址そのものも一般住居址とは異質な性格が考えられる。

遺物　出土量は、きわめて少ない。土師器甕、須恵器高台付坏が覆土上層から出土している。床面密着出土のものとしては、灰釉陶器埦の口縁細片がある。

時期を決定するには根拠に乏しいが平安時代と考えられる。　（佐合英治）



第208図　GOB　38号住居址石組

39号住居址（第187図）

遺構　ＧＯＢＣＤ48を中心に検出された。32号・48号住居址と重複関係にあり、最も新しい時期で両住居址を切るが、南壁の検出が難しく、最後に調査した。そのため48号住居址覆土中に床面があったにもかかわらず、はっきり把握できなかった。同様に北壁も推定してのものとなった。

また、東側の一部は用地外にかかり調査できなかった。推定規模5×5mの隅丸方形の竪穴住居址である。壁は南・西壁を確認し、壁高は10cm前後を測る。床面は黄色砂土まで掘られ、堅くたたき状の良好なものである。48号住居址覆土中にも黒色土のたたき状の床面が確認できた。主柱穴・カマドは確認されず、構築時から設けられなかったと考えられる。

遺物　出土量は多く、一括性が高いと思われる。土師質土器（カワラケ）坏・皿等がみられる。他に、用途不明の鉄片が出土している。

遺物から平安時代終末に位置づけられる。　（山下誠一）

⑥ 時期不明

13号住居址（第169図）

遺構　建築址8の南西AH54・AI54の用地境に、北隅部分を確認した。北壁1.4m・西壁2.4mを確認し、検出面より14cm掘り凹められた、隅丸の竪穴住居址である。床面はきわめて軟かく、床面上に焼土・炭が密着して散乱しており、火事にあった住居址と考えられる。

遺物　土師器の細片がわずか出土したが時期決定できるものはない。　（佐合英治）

23号住居址（第158図）

遺構　建物址10の東側で24号住居址と切り合っていると思われる住居址である。24号・25号住居址と同様に耕作による攪乱を著しく受けており、部分的に床面を確認したにすぎない。壁は完全に削られているが南隅と考えられる部分の床が残存した。本住居址床面は24号床面より高く、24号に切られていると考えたが、24号住居址床上にはり床をしている可能性もあり、新旧関係の確認はできなかった。

遺物　本住居址に伴う遺物は不明で時期を決定できるものはない。　（佐合英治）

33号住居址（第182図）

遺構　GOBCN47で30号住居址床面に検出した住居址であり、同住居址に切られている。用地外にかかり、調査範囲は2.5×0.6mとわずかである。30号住居址床面から約10cmの壁で、黄色砂質土（地山）上面の床である。中央に30号住居址の主柱穴があり、様相等ほとんど不明である。

遺物　出土量はわずかで、土師器・須恵器の破片がある。

時期は決め手になるものがなく断定できない。　（佐々木嘉和）

37号住居址（第160図）

遺構　ＧＯＢＣＰ46に、30号住居址と土坑11に切られ、用地外にかかって検出した。調査範囲は３×1.5mとわずかで、方形の竪穴住居と思われるが、壁は長さ45cm確認したのみである。壁高は検出面から34cmを測る。床面は軟かく、新しい穴に切られている。遺物はごく少量出土しただけである。

30号住居址に切られているので、古墳時代後期前半より古いが、時期の断定はできない。

（佐々木嘉和）

61号住居址（第198図）

遺構　60号住居址カマドの西側ＧＯＢＣＣ42を中心に検出された。60号住居址に切られ、土坑23を切っている。西側の大部分が用地外にかかるため、一辺の長さが4.3mを把握したのみである。隅丸方形の竪穴住居址で、主軸等は不明である。東壁をほぼ全面確認し、壁高は10～５cmを測る。南隅直下に、80×60cmの不整形で深さ30cmを測る穴があり、貯蔵穴と思われる。

遺物　土師器高坏・内面黒色の皿が出土した。

遺物の出土が少ないため時期は決定はできないが、切り合い関係から古墳時代後期後半以前と考えられる。

（山下誠一）

２）　建物址

分布状況は、Ａ区とＣ区に集中して検出され、Ｂ区には確実に建物址と把えられるものはなかった。

Ａ区はその西半部にかなり密集して検出され、ほとんどが奈良時代と考えられるもので、ＧＯＡに一部その分布範囲が延びている。全体形を把握できなかったものもあり、即断はできないが、隣接する建物の配置状況や方向などから、かなり規則的に建てられたものと考えられる。また、分布範囲内に竪穴住居址・工房址などがあり、これらとの関連も考えられる。

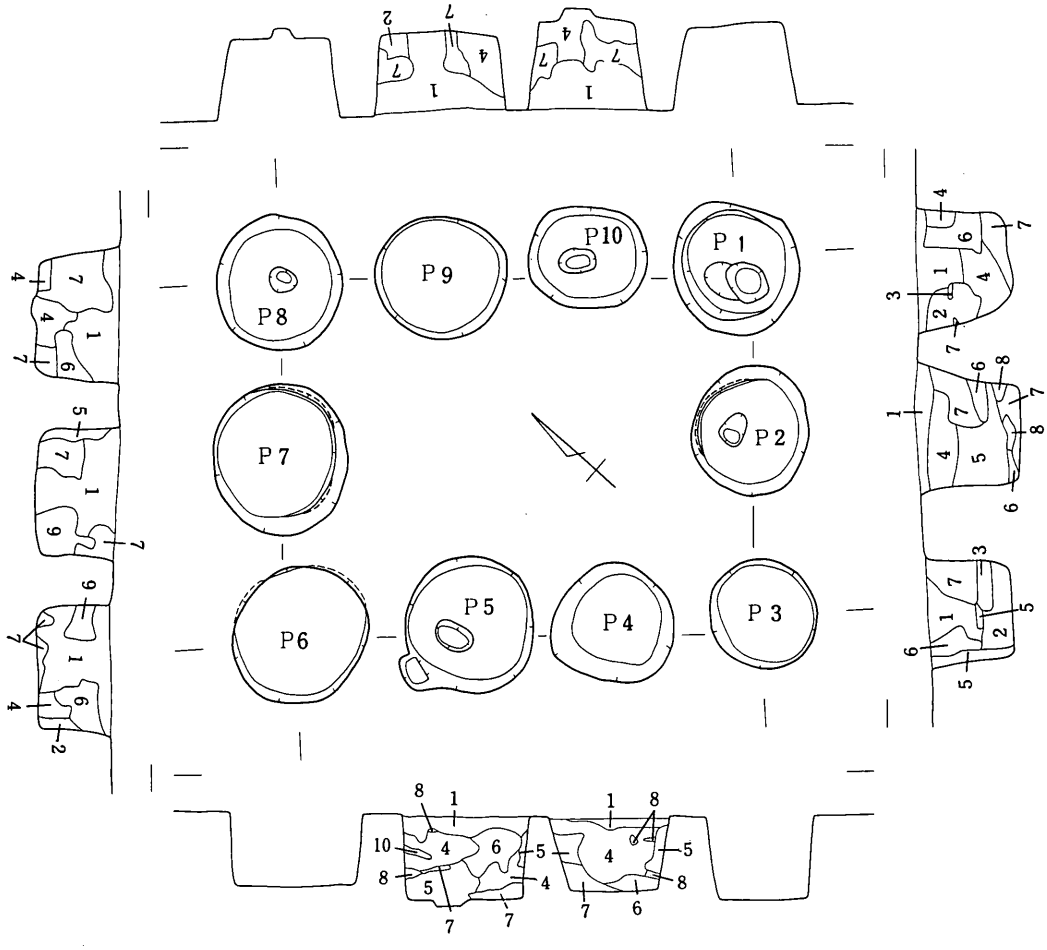
Ｃ区は古墳時代・奈良時代・中世の３時期位に位置づけられるが、主体はＡ区同様に奈良時代のものである。かなり規模の大きなものもあり、Ａ区程ではないが集中して分布する傾向がみられる。

Ａ区・Ｃ区の奈良時代に属すと考えられる建物址群は、その分布する位置が約100m離れており、直接その関連を示す材料はないが、建物址の存在しないＢ区において、なんらかの区画施設的な溝址が検出されており、更には北東方向に同様距離を置いてＡＲＹ建物址群もあり、相互が関連する可能性が強いといえる。

（小林正春）

建物址１（第209図）

遺構　ＧＯＢＡ区のほぼ中央ＡＬ50を中心に検出された。耕土排除後、プラン検出に入って最初に確認された遺構である。３×２間の掘立柱建物址で、桁行4.94m・梁行3.8mを測る。それぞれの柱間は1.65・1.9mで、桁行方向はＮ47.5°Ｗを示す。柱掘り方はほぼ円形で、最大径1.6m・最小径1.05m・深さは109～77cmを測り、いずれも大形の掘り方である。壁はほぼ垂直を成し、Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７には壁の中程が袋状に外へふくらむ部分がある。底部はほぼ平坦で、Ｐ４・Ｐ５の底部はたたき状に堅くなっている。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ10には底部に５～８cm凹む部分を確認し、柱の圧痕・または柱を立てる時に掘り凹めたと考えられ、土層断面観察時に確認した柱痕位置とほぼ一致する。柱掘り方平面プラン検出のさい、柱痕と思われる覆土の差を認めた掘り



1．灰黒色土
2．漆黒土
3．漆黒土(黄色土混り)
4．黒色土
5．黒色土(黄色土混り)
6．黄色土(黒色土混り)
7．黒色土(黄色土混り)
8．黄色土
9．黒色土(漆黒土混り)
10．撹乱

0　2m

第209図　GOB　建物址１

方は3本あったが、土層断面で確認した柱痕と一致するものはＰ８のみであった。柱の位置・太さ等を土層と底部の凹みにより想定すると、柱間は一定でなく、直径20～30cmの丸材を使用しているものと考えられる。また、土層が乱れており、柱は抜きとられている可能性があるが、柱抜き取り穴の確認はできなかった。

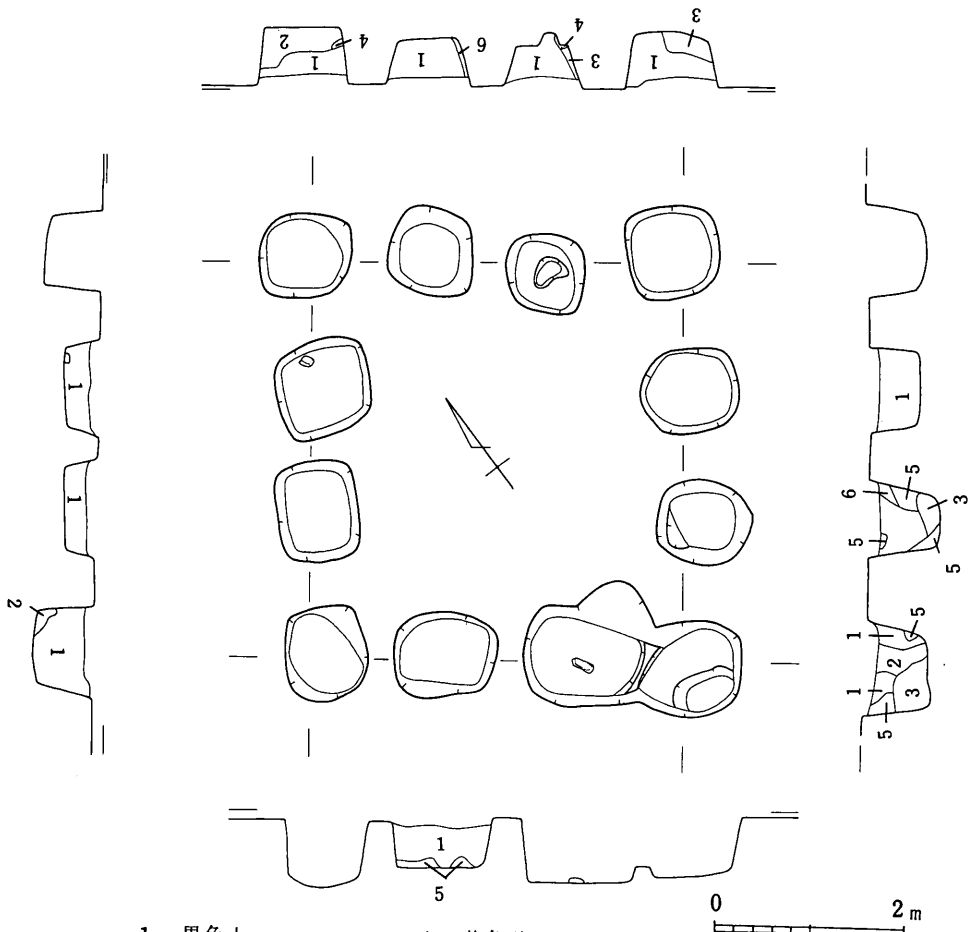
遺物　土師器細片と用途不明の鉄器片がある。

遺物から時期の決定はできないが、周辺の遺構等の関連で奈良時代に位置づくと考えられる。

（佐合英治）

建物址2（第210図）

遺構　ＧＯＢＡＨ49を中心に検出された。住居址検出面上層の褐色土上面で一部の柱掘り方が



1．黒色土　　4．黄色砂土
2．黒褐色土　　5．黄色砂土(黒色土混り)
3．黒色土(黄色砂土混り)　6．漆黒色土

第210図　GOB　建物址2

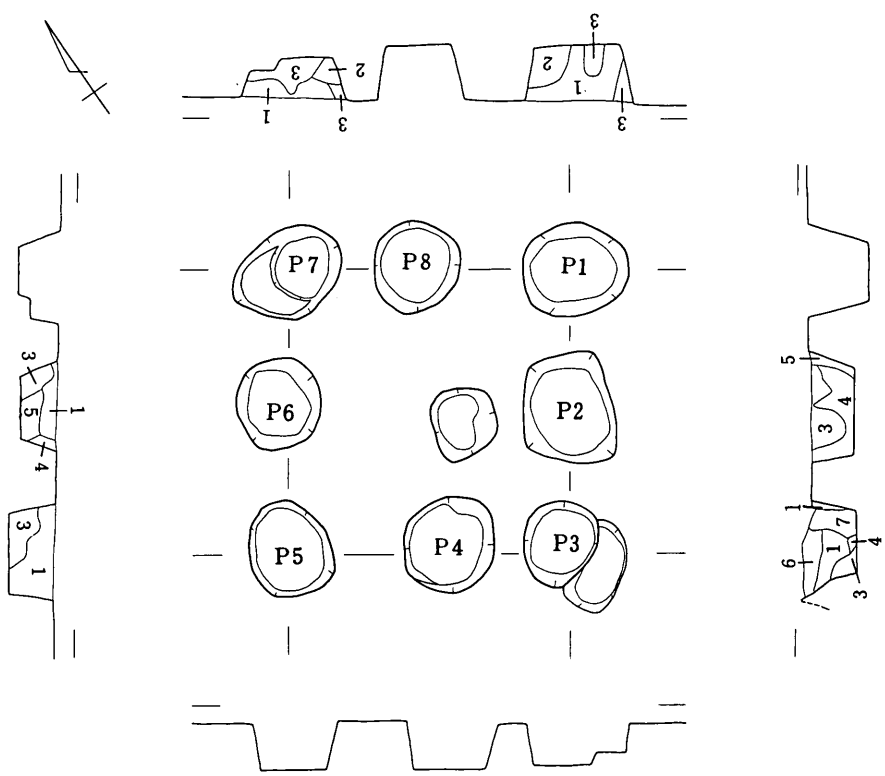
確認できたが、すべての掘り方を把握できず、住居址検出面まで下げて全体のプランを確定した。4号・16号住居址を切っている。3×3間の掘立柱建物址である。桁行4.2m・梁行3.92mを測り、柱間はそれぞれ1.4・1.36mである。桁行方向はN40°Eを示す。柱掘り方は丸味を帯びる方形ないし長方形を呈し、隅のものが深い傾向を示す。南隅のものは2本の柱掘り方を一緒に掘っている。土層から柱痕の確認はできなかった。建物址1と軒をそろえ、建物址3・5・7等とほぼ方向が一致し、同時存在の可能性が高い。

時期の決め手となる遺物の出土はなく、検出面等から奈良時代に位置づけられる。

（山下誠一）

建物址3（第211図）

遺構　GOBAE50を中心に検出された。建物址2と同様褐色土面で一部の柱掘り方が確認できたが、すべての柱掘り方を把握するために住居址検出面まで下げてプランを確定した。8号住居址を切っている他に重複がみられないため、良好な検出状態であった。2×2間の掘立柱建物址である。桁行・梁行共3mで、柱間は1.5mを測り、桁行方向はN40°Eを示す。柱掘り方のプランは楕円ないし円形を呈する。建物址1・2と軒をそろえて建てられており、同時存



1．黒色土
2．黄色土(黒色土混り)
3．黒色土(黄色土混り)
4．黒褐色土
5．褐色土
6．黒色土(褐色土混り)
7．6より褐色土多い

第211図　GOB　建物址3

在の可能性が高い。

時期決定・実測等ができる遺物の出土はないが、建物址１・２同様奈良時代に位置づけられる。

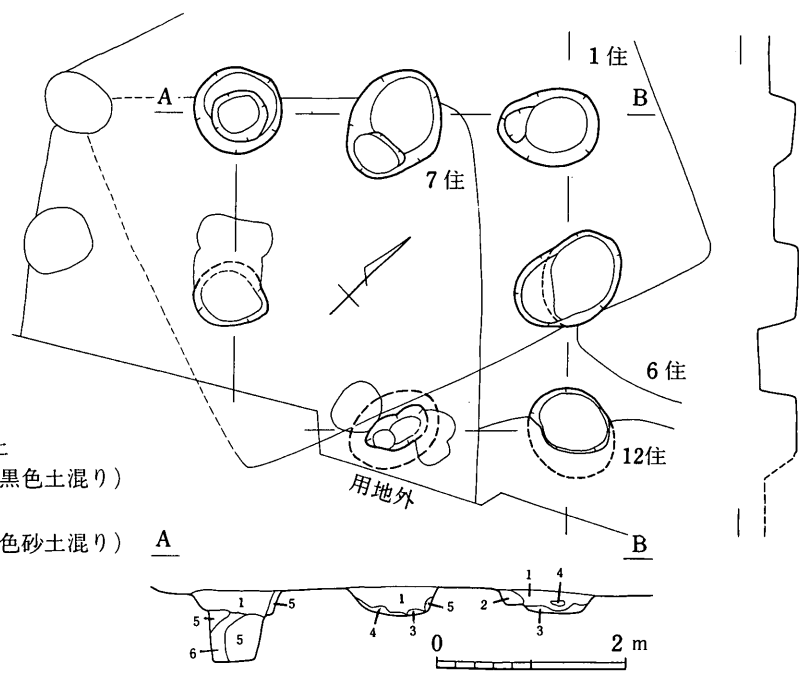
（山下誠一）

建物址４（第212図）

遺構　ＧＯＢ１号住居址の覆土中に掘られていた建物址である。住居址覆土と柱掘り方覆土の差異はほとんどなく、上面でのプラン検出はできず、住居址の床面に柱掘り方の底部を確認した。南隅の柱掘り方は用地外のため未確認であるが、2×2間で、3.57×3.32mの側柱のみの掘立柱建物址である。桁行方向は、正方形といっても良い建物址であるため不明で、柱間は北西南東1.78ｍ・北東南西1.66ｍを測り、北西南東方向はＮ43.5°Ｗを示す。確認した柱掘り方底部は、最大径90cm・最小径70cmを測る。いずれも歪みがあるが、本来は円形の掘り方であったと考えられる。西隅の穴は、ほかに比べ倍以上も深い穴であったが、１号住居址の柱穴と重複するためで、建物址の柱掘り方は段の付く所までである。確認した掘り方の深さは住居址床面より50～22cmで、西側の柱掘り方より東側の柱掘り方が深い。

遺物　土師器細片、鉄片などが掘り方覆土中より出土しているが、現代の攪乱や住居址との切り合いがあり、建物址に伴うものかは不明である。

周辺の遺構の関係から奈良時代に位置づけられる可能性が強い。（佐合英治）



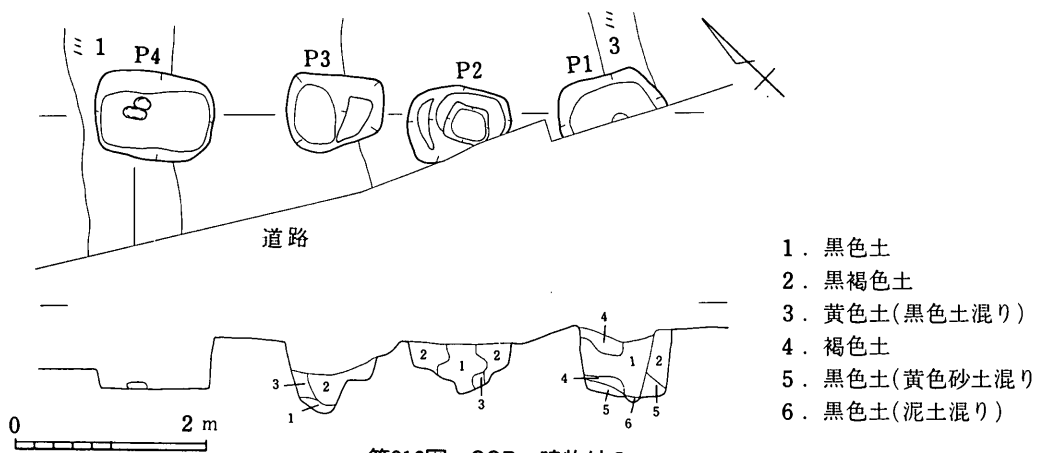
1．黒色土
2．黒色砂質土
3．黄色砂土(黒色土混り)
4．黄色砂土
5．黒色土(黄色砂土混り)
6．褐色土

第212図　GOB　建物址４

建物址５（第213図）

遺構　ＧＯＢＡＢ50にＰ１が褐色土上面で検出できた。Ｐ４は溝址１の下部にあり、その調査時に掘り上げてしまった。後に住居址検出面まで下げた時点で、中間のＰ２・Ｐ３を把握し、建物址と判明した。東側の４本が確認されただけで、他は道路下にかかって調査できなかった。溝址１に上面を切られている。全体は不明であるが、検出した柱掘り方列による柱間は1.7ｍを測る。桁行方向はＮ47.5°Ｅないし Ｎ42.5°Ｗを示す。穴の掘り方は丸味を帯びた長方形を呈し、Ｐ２・Ｐ３は途中で段を持つ。Ｐ１・Ｐ２は土層から柱痕を確認し、Ｐ１は底の部分が一部凹み、柱位置を示すと考えられる。Ｐ４の底には20cm前後の棒状礫が２個並んであり、礎盤的な意味が考えられ、これも柱位置を示すと考えられる。柱掘り方の状態等から、１回の建て替えが想定できる。

時期決定できる遺物の出土はないが、検出面及び溝址１との切り合い関係から奈良時代前半に位置づけられる。　（山下誠一）



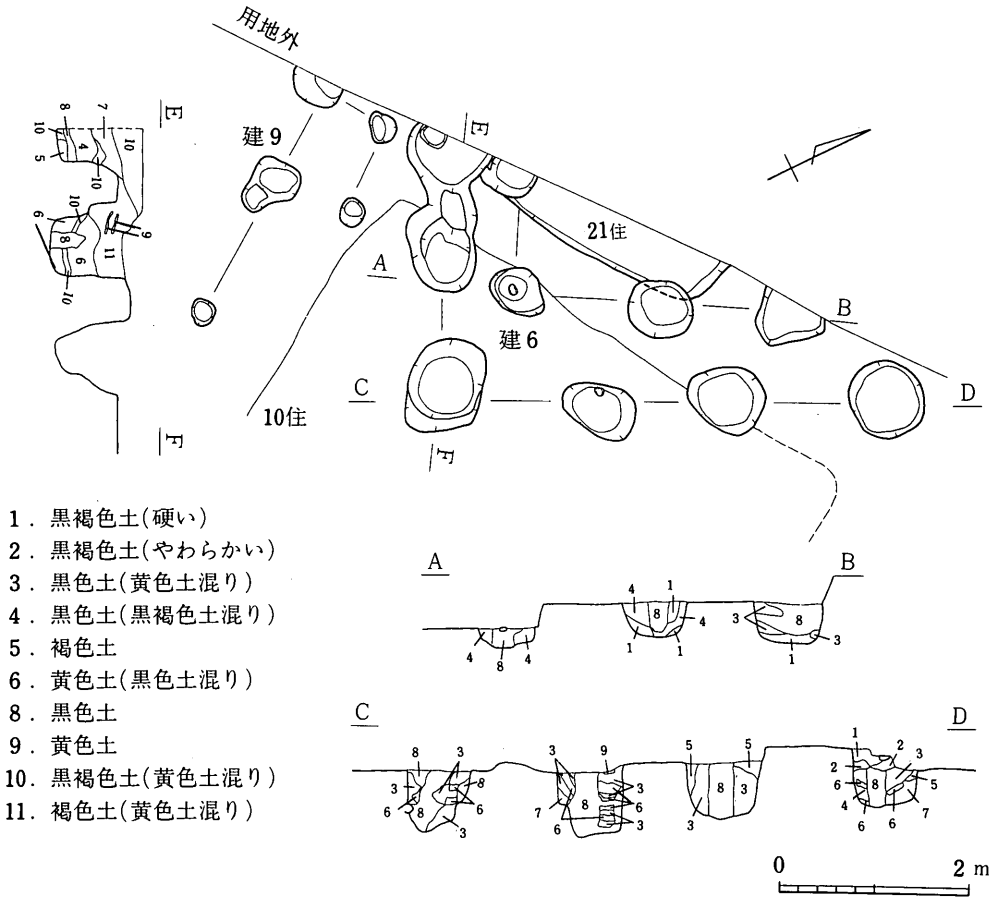
第213図　GOB　建物址５

建物址６（第214図）

遺構　ＧＯＢＡＣ～ＡＦの45･46に検出した掘立柱建物址である。10号･19号･21号住居址を切り、溝址１に切られ、約半分が用地外にかかる。調査範囲内における外側柱間は３×２間で、その内側約１ｍにも４本の柱穴を検出した。内外の柱穴は列としてそろわないが、方向が一致したので同一建物とした。外側桁行３間は各柱間寸法1.48ｍ、梁行２間は各柱間寸法1.31ｍ、桁行方向はＮ38.5°Ｅを示す。柱穴掘り方は不整円形で、直径は80cm前後である。底部レベルは東側２本がやや浅いが、他は同レベルである。内側の柱穴はやや小形である。東側４本の柱穴には、柱痕が平面と断面に確認でき、底部では柱痕部分の色が変わっており、堅くなっていた。内側の東側３本も断面に、柱痕らしい黒土が観察された。

遺物　各柱穴ともに遺物の出土は少ない。

時期は切り合い関係から古墳時代後期以降である。　（佐々木嘉和）

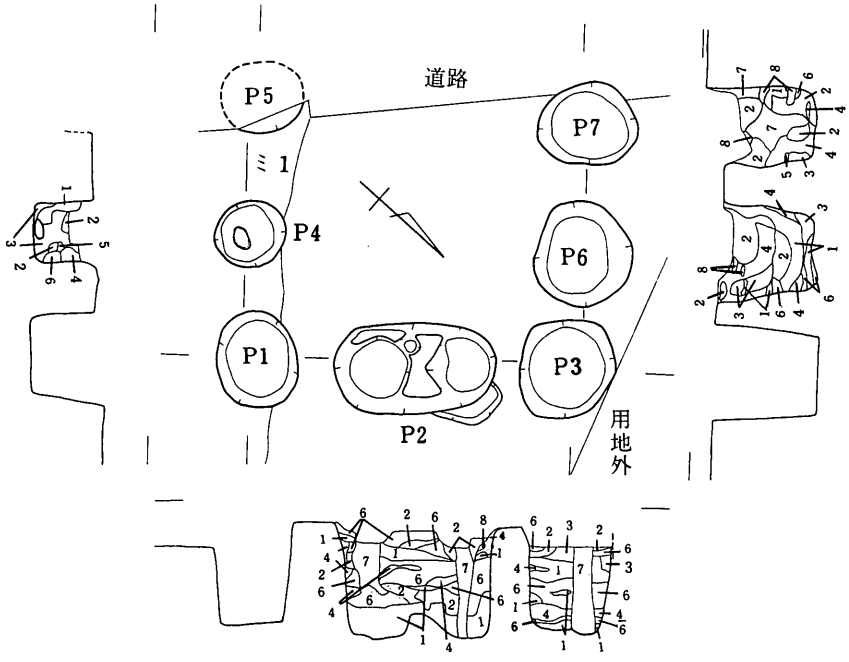


第214図　GOB　21号住居址、建物址6・9

建物址7（第215図）

遺構　ＧＯＢＡＡ46を中心に検出された。上面の溝址１の調査後、褐色土中に黄色土が混じるたたき面が認められた。それをはずしたところ、黄色土が混じる柱掘り方を検出し、建物址の存在が判明した。溝址１に切られ、20号・22号・29号住居址を切っている。南側は道路にかかり調査できなかった。Ｐ５は一部のプランを確かめるにとどめた。梁行は３間を示すが、桁行は不明で、柱間はそれぞれ1.17前後・1.28mを測り、桁行方向はＮ40°Ｅを示す。柱掘り方のプランは円ないし不整円形を呈する。Ｐ２は楕円形を呈し、２本の柱掘り方を一緒に掘ったものである。土層は溝址１調査時に掘り上げてしまったＰ１を除いて把握でき、いずれも黄色土と黒色土が互層を成して埋められ、特に黄色土の混りが多いＰ２・Ｐ３でははっきりとした柱痕を確認できた。柱の大きさは26×24cmで、割り材を使用したと考えられる。Ｐ４には底に偏平な石を置き礎盤としていた。検出面の黄色土のたたき部分は、穴で掘り上げた土を全体にならして土間としたものと考えられる。

時期を決定する程の遺物の出土がないが、溝址１に切られることから奈良時代前半に位置づけられる。（山下誠一）



1．黒色土　5．黒色土(鉄分混り)
2．黒色土(黄色土混り)　6．黄色土(黒色土混り)
3．黄色土(黒色土混り)　7．黒褐色土(柱痕)
4．黒色土(褐色混り)　8．黄色土

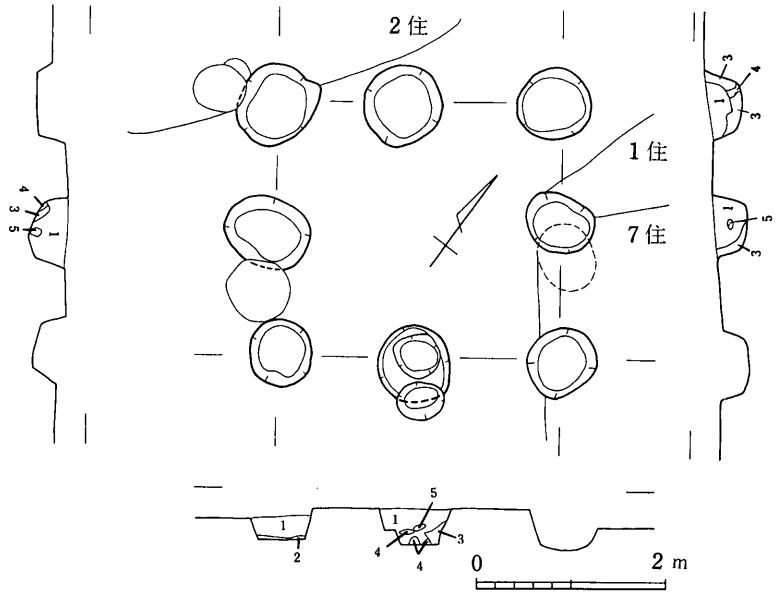
0　2m

第215図　GOB　建物址７

建物址８（第216図）

遺構　ＧＯＢＡＪ54をほぼ中心とし、建物址４の南西側に検出した。１号・２号・７号住居址を切っている。２×２間、３×2.64mの側柱のみのほぼ正方形の掘立柱建物址で、南西から北東方向はN53°Eを示す。柱間はそれぞれ1.5mと1.32mである。柱掘り方は最大径90cm・最小径62cmの円形で、検出面よりの深さは40～30cmを測り、壁面はほぼ垂直を成し、底部は平坦とはならず中心部が凹むものである。覆土は全体が黒色土で柱痕等の確認はできなかった。

時期等を決定できる遺物の出土はないが、周辺の建物址の関係等から奈良時代に位置づけられる。（佐合英治）



第216図　GOB　建物址8

建物址9（第214図）

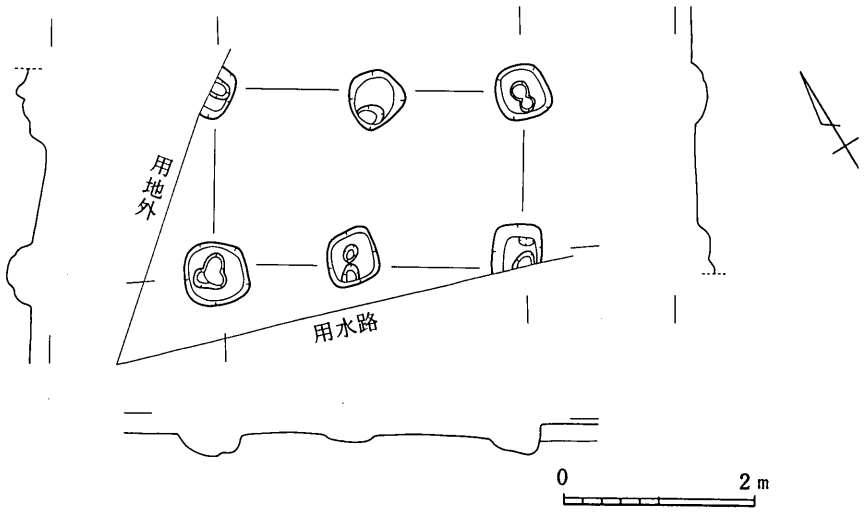
遺構　GOBAB·ACの45～47に検出した掘立柱建物址である。他遺構との重複が著しく、かつ用地外にかかるため、柱掘り方5本を確認できただけである。2×1間を確認し、柱掘り方平面形·柱間寸法は一定しない。柱掘り方の覆土は、建物址7の柱穴覆土とほとんど同じ黒色土（黄色土混り）であり、建物址7建築時の補助施設の可能性もある。　（佐々木嘉和）

建物址10（第217図）

遺構　GOBAO46を中心に検出した掘立柱建物址である。用地外と用水路にかかるため、確認できた柱間は2×1間である。桁行柱間寸法1.62m・梁行柱間寸法1.83m、桁行方向はN60°Wを示す。耕作の攪乱が地山の黄色砂土まで入っており、柱掘り方は20～10cm残っていただけである。平面はほぼ隅丸方形で、底部には小穴があり、堅く良好であった。

遺物　土師器片がわずか覆土に入っていた。

時期は古墳時代以降と思われるが、決定はできない。　（佐々木嘉和）



第217図　GOB　建物址10

建物址11（第191図）

遺構　ＧＯＢＣＴ41を中心に検出した掘立柱建物址である。52号･54号住居址を切っている。柱間６×２間を確認した。桁行柱間６間の延長は5.8mであるが、柱間寸法は不定であり、梁行２間の柱間寸法は1.41mを測る。各柱穴平面は不整円形で、底部レベルとともに一定していない。覆土は住居址を切っているため、個々により異なる。遺物も古墳時代の土師器の小片がわずかに出土しただけである。建物址19と柱掘り方の方向が似ており、関連が考えられる。

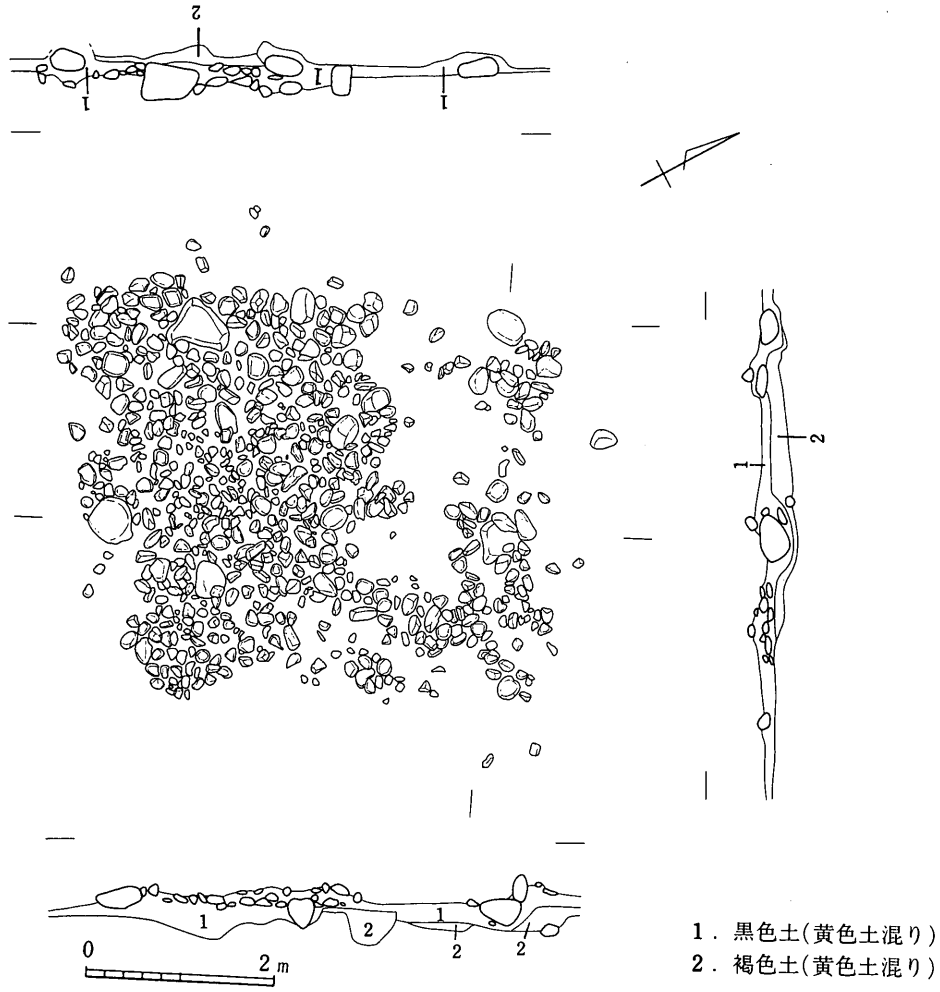
時期は古墳時代以降と思われるが、決め手がない。　（佐々木嘉和）

建物址12（第218図）

遺構　ＧＯＢＣＫ43が中心の、礎石を持つ建物址である。建物址22を切っている。耕土下に石が約４×４mの範囲で集中しており、集石として調査に入ったが、大きめの石の上面が平らで礎石と思われ、建物址とした。石の間まで耕作の攪乱が入っており、石も抜かれている様子である。礎石らしい石を残して他をはずしたところ、石の乗っていた面は、堅くつき固められている様子があった。礎石とした石はほぼ直線に並んでいるが、距離と高さが一定しておらず、柱の建て方に疑問が残る。桁行方向は断定できないが、N27°Eであろう。礎石には、浅い掘り方が検出でき、粟石の入っているものもあった。礎石以外の多数の石については、性格等不明であるが、礎石の底面より上部にあったことは確かである。

遺物　石に混ってわずか出土している。土師器・須恵器片と後世の混入と思われる宋銭がある。

出土遺物から奈良時代と思われるが断定はできない。　（佐々木嘉和）

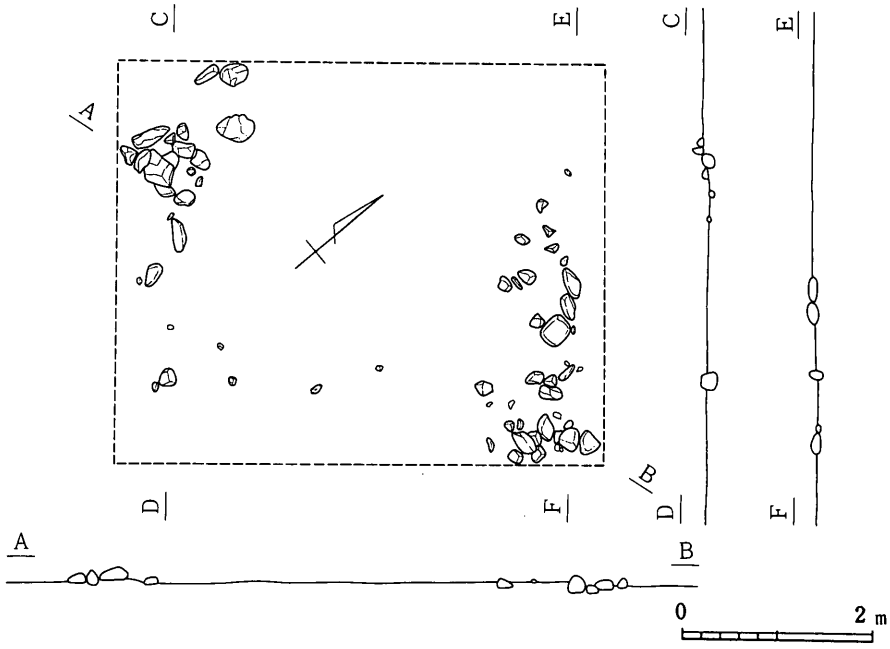


第218図　GOB　建物址12

建物址13（第219図）

遺構　ＧＯＢＣＯ44を中心に石を配した建物址である。30号・31号住居址、建物址17、溝址14を切っている。５×４ｍの範囲に石が点在し、内側の石のない部分はたたき状になっていた。長軸方向はN31°Ｅを示す。石の中には、割られているもの・表面を敲打してあるものなどがあった。

本建物址に付く確実な遺物もなく時期の決定は困難であるが、奈良時代住居址に重複しており、奈良時代よりは新しいと思われる。　（佐々木嘉和）



第219図　GOB　建物址13

建物址14（第220図）

遺構　ＧＯＢＣＶ43を中心に検出した石を配する建物址である。54号・57号・58号住居址、土坑19・20を切っている。4×3.2mの範囲に石が入り、長軸方向はＮ44°Ｅを示す。北側一辺に比較的大きな石を並べており、内側の石は不規則に入っていた。全般的に硬砂岩が多く、割ったものも混っている。断面観察によっても、床らしい部分は確認できなかった。

遺物　石の間から常滑焼甕片が出ている。

出土遺物から中世の建物址と思われる。　（佐々木嘉和）

1．褐色土
2．褐色土(黒色土混り)
3．撹乱

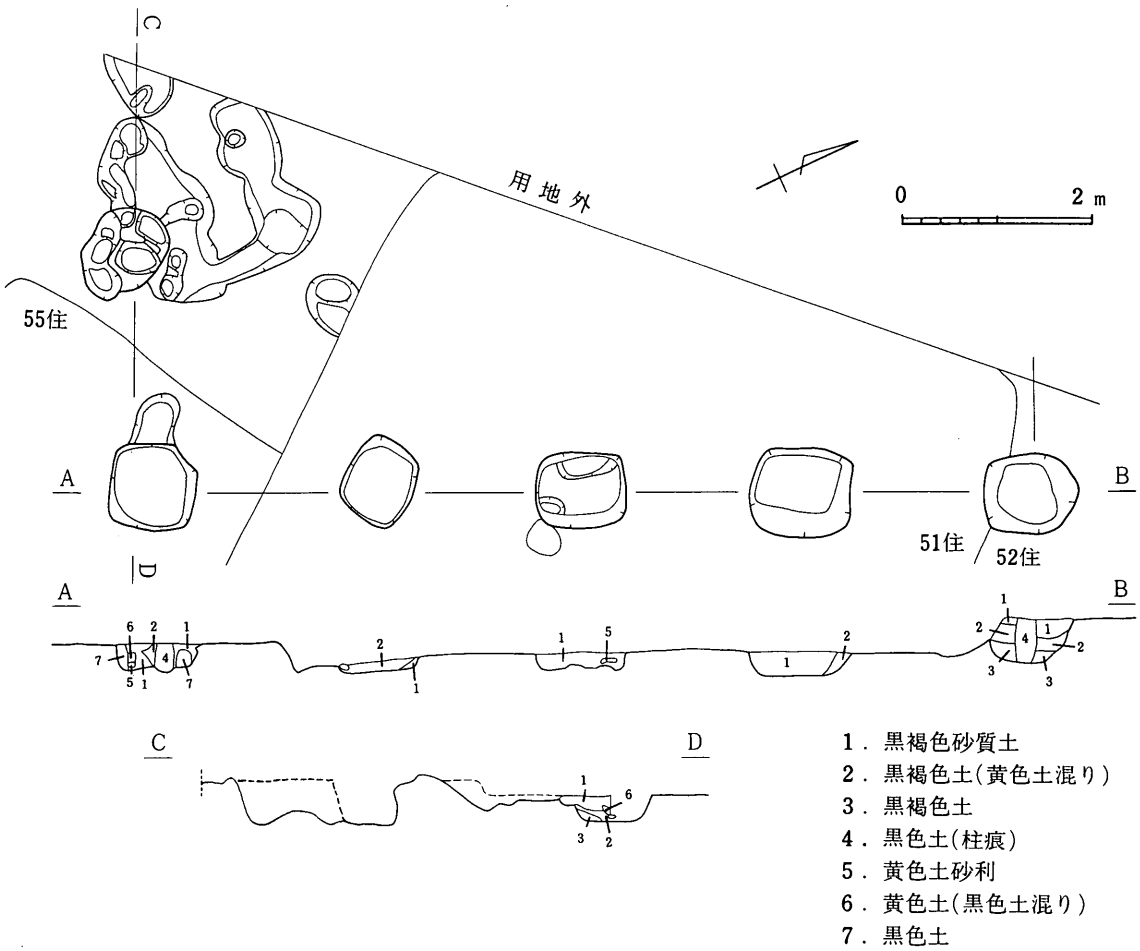
第220図　GOB　建物址14

建物址15（第221図）

遺構　ＧＯＢＣＱ39が中心の掘立柱建物址である。51号･52号･55号住居址を切っている。住居址覆土中に柱掘り方があるため確実な把握ができず、住居址調査後に検出し、４×（１）間を確認した。桁行４間の柱間寸法は2.37m、梁行の柱間寸法は2.5mで、桁行方向はＮ30°Ｅを示す。柱掘り方の平面は不整方形で大形である。各柱穴の深さは、51号住居址壁にかかる柱穴がやや浅い他はほぼ一定である。確認範囲は少ないが、相当に大きな建物址と思われる。

遺物　須恵器蓋片が出ているが、古墳時代住居址と切り合っており、時期決定材料とはならない。

他遺構との切り合い関係などから古墳時代後期以降の時期が考えられる。　（佐々木嘉和）



第221図　GOB　建物址15

建物址16（第223図）

遺構　ＧＯＢＣＹ39が中心の掘立柱建物址である。56号・57号・58号住居址を切り、溝址16に切られる。4×2間で、桁行4間の柱間寸法は2.1m、梁行2間の柱間寸法は2.7mを測る。桁行方向はN63°Wを示す。束柱の確認は溝址に切られてできなかった。柱掘り方は大きく、平面は不整形で様々である。土層等による把握はできなかったが、建て替えのあったことも考えられる。切り合いのない部分で検出面から底部まで60cm余あり深いが、底部レベルは一定していない。また、各柱穴外側に不規則な穴が検出され、本址との関連は不明であるが、本址建築時の補助柱的な性格も推測される。

遺物　Ｐ3覆土中には須恵器片が入っており、Ｐ10覆土中から青銅銙巡方が一個出土した。

出土遺物から奈良時代の掘立柱建物址と思われる。（佐々木嘉和）

建物址17（第222図）

遺構　GOBCM~COの40～43に検出した掘立柱建物址である。建物址22と切り合うが新旧は確認できなかった。溝址14を切る。溝址14と同方向の柱間5間で6本の柱穴列を確認し、柵柱列の可能性もある。柱間寸法は2.54～1.31mとばらつきがあり、長軸方向は74°Wを示す。柱掘り方平面は不整円形で大形であるが、底部レベルは一定していない。柱掘り方覆土上部に石が混入しており、柱を建てた際のおさえとした様子であった。

遺物　柱穴覆土中に比較的多く、溝址14遺物の混入と思われる。

溝址14が奈良時代から平安時代初頭の遺構と思われ、建物址17も同時期が考えられる。

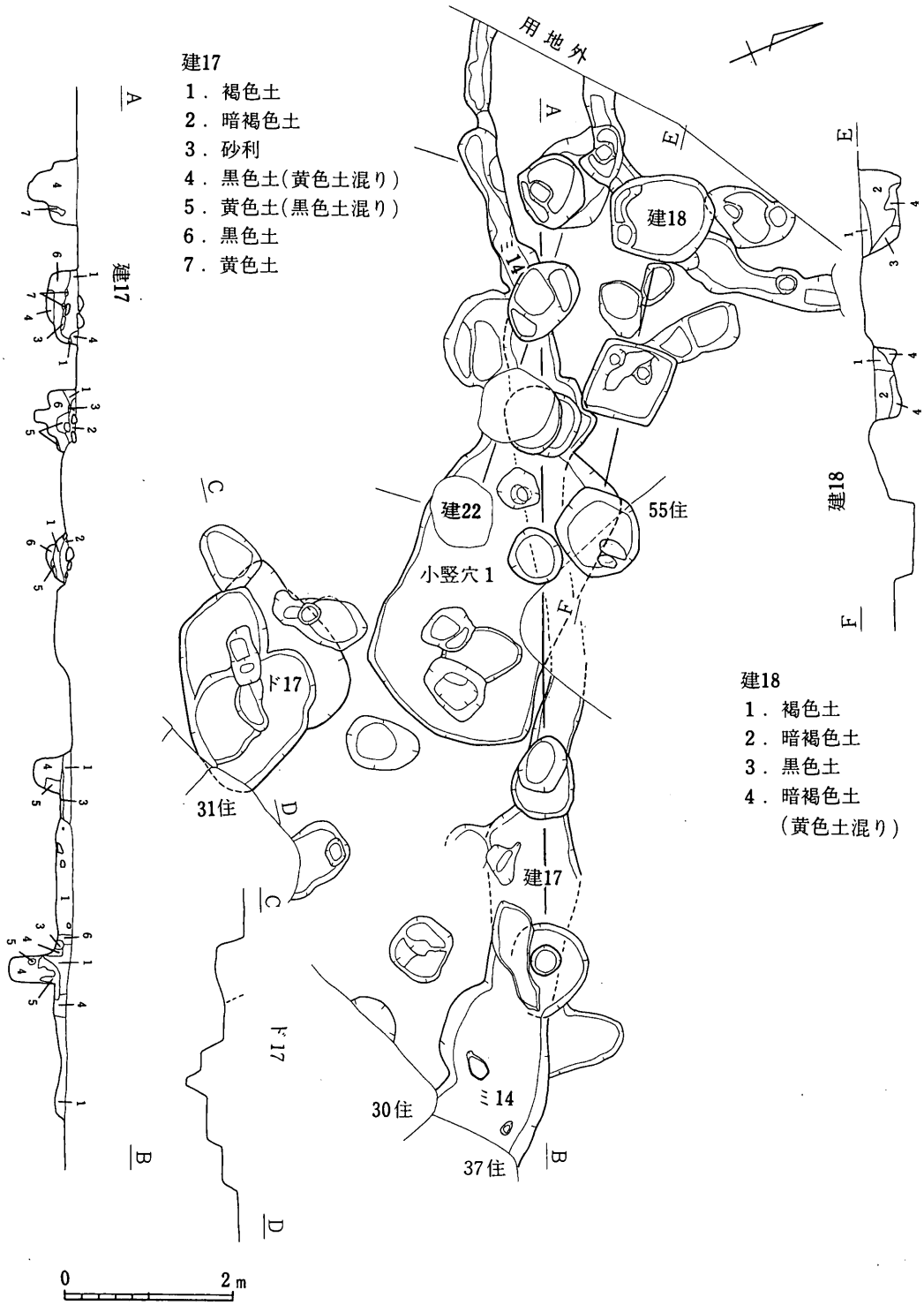
（佐々木嘉和）

建物址18（第222図）

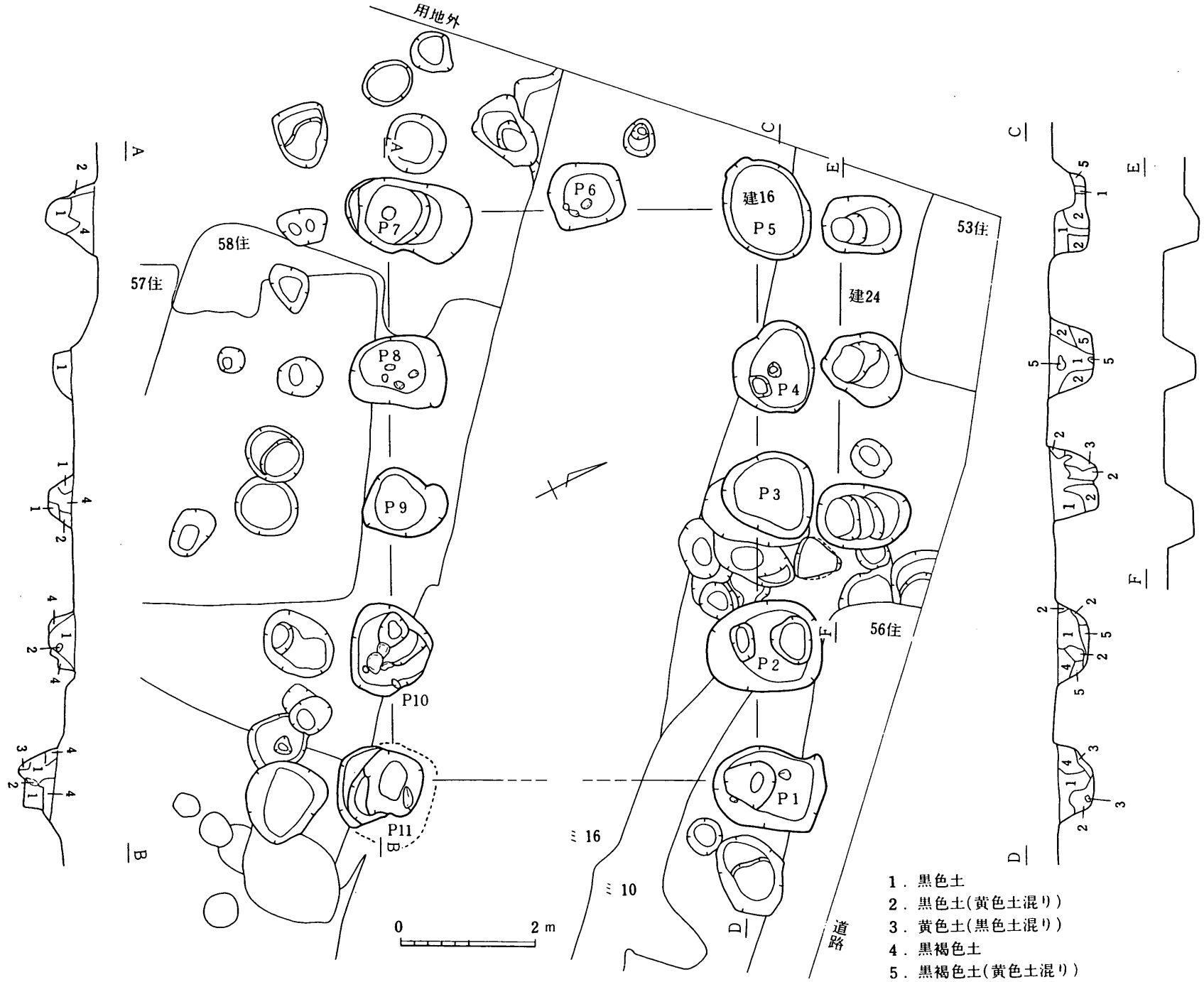
遺構　ＧＯＢＣＭ40にかかって検出した掘立柱建物址である。55号住居址・溝址14・小竪穴1を切っている。柱穴3本を確認しただけであるが、柱間2間は1.95mずつある。柱掘り方平面は不整方形で、径は93cm以上あり大きく、深さは検出面から50～40cmを測る。柱穴3本の方向はN62°Wで、建物址12・15と方向がほぼ一致し、関連も考えられる。

遺物　覆土中から土師器須恵器片が少量出土している。

時期は決め手になるものがなく断定できないが、切り合い関係などから奈良時代後半以降と考えられる。（佐々木嘉和）



第222図　GOB　建物址17・18、溝址14、小竪穴1、土坑17



第223図　GOB　建物址16・24

建物址19（第160図）

遺構　ＧＯＢＣＲ44を中心に検出した。３×１間を確認したが、これ以上の検出はできなかった。柱穴の並び方から推測して、柱間一間の方が桁行方向と思われ、N46.5°Wを示す。桁行柱間は1.8m、梁行柱間は1.4mを測る。柱穴平面はほぼ円形で、直径は1.2～0.64mと差がある。底部レベルにも差があり、隅の穴が他より約20cm深い。

遺物　覆土中から土師器小片がごく少量出土しているが、時期の決め手にはならない。

（佐々木嘉和）

建物址20（第224図）

遺構　ＧＯＢＣＣ45を中心にして検出された。小竪穴２に切られているために、同址内の柱掘り方はその調査終了後に確認した。総柱で南側に延びるものかと精査したが、それ以上は発見できず、これだけの規模である。２×１間の掘立柱建物址である。桁行3.38m・梁行1.50mで、桁行方向はN40°Wを示す。柱間は桁行が1.19m、梁行が1.50mである。柱穴の掘り方は円ないし不整円形を呈し、深さは30～20cmを測る。

時期の決め手となる遺物の出土はない。小竪穴１に切られることから、古墳時代後期後半以前である。

（山下誠一）

建物址21（第224図）

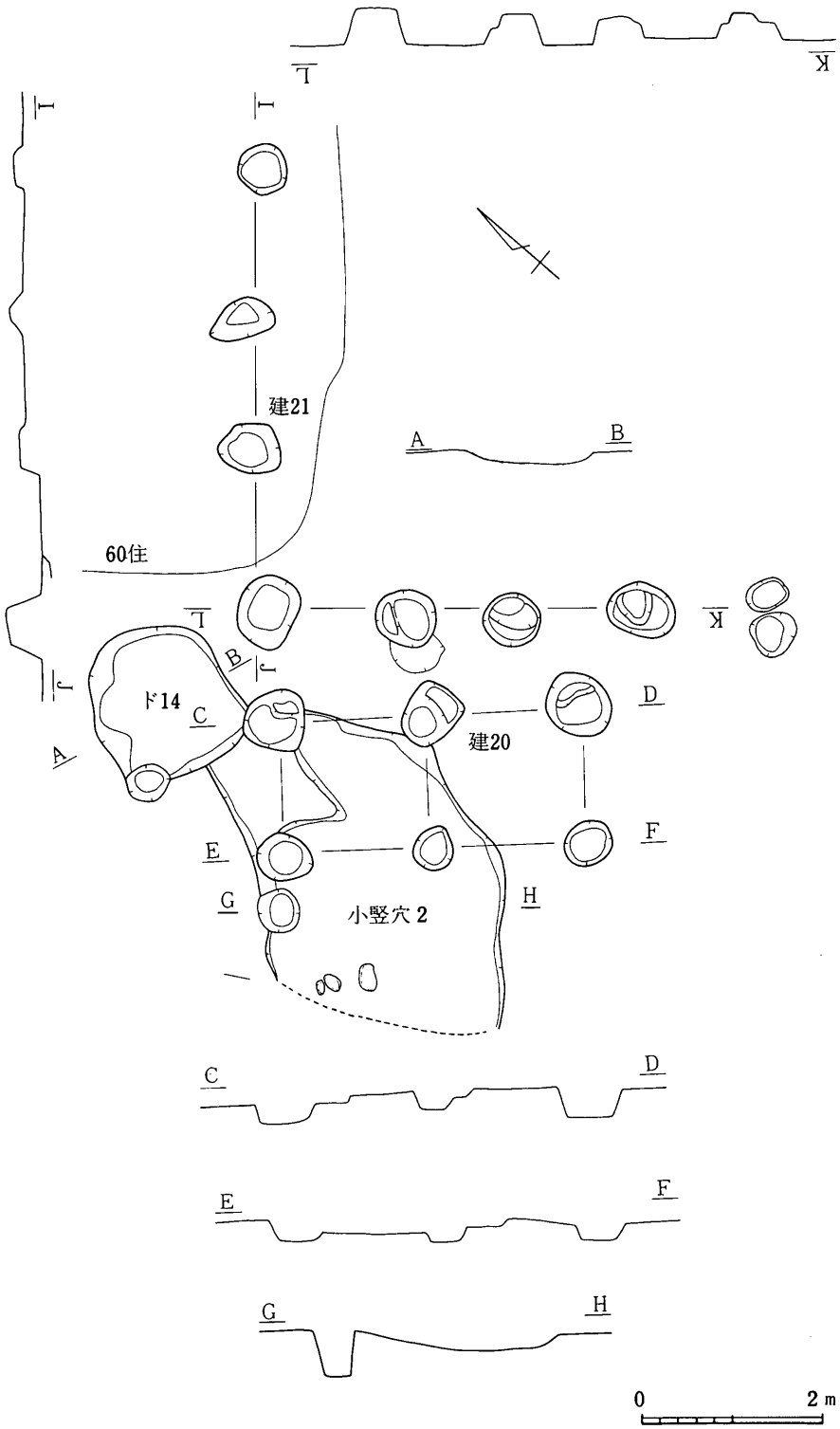
遺構　建物址20の東側、ＧＯＢＣＤ45を中心に検出された。南・西側の７本の穴が確認されたが北・東側は精査したにもかかわらず、検出することはできなかった。60号住居址に切られる。３×３間の規模が推定される掘立柱建物址で、桁行4.78m・梁行4.3mを測る。柱間はばらつきがあり、中間が短かく、桁行が1.75・1.44m、梁行が1.5・1.14mを測り、桁行方向はN52°Ｅを示す。柱掘り方は円ないし不整円形を呈し、30～20cmの深さを測る。

時期を決定する遺物の出土はない。60号住居址に切られることから、古墳時代後期後半以前の時期に位置づけられる。

（山下誠一）

建物址22（第225図）

遺構　ＧＯＢＣＬ42が中心の掘立柱建物址である。建物址12に切られ、建物址17と重複するが、新旧関係は不明である。3×3間で、桁行長さ５m・梁行長さ4.1mであり、桁行方向はN34°Ｅであ



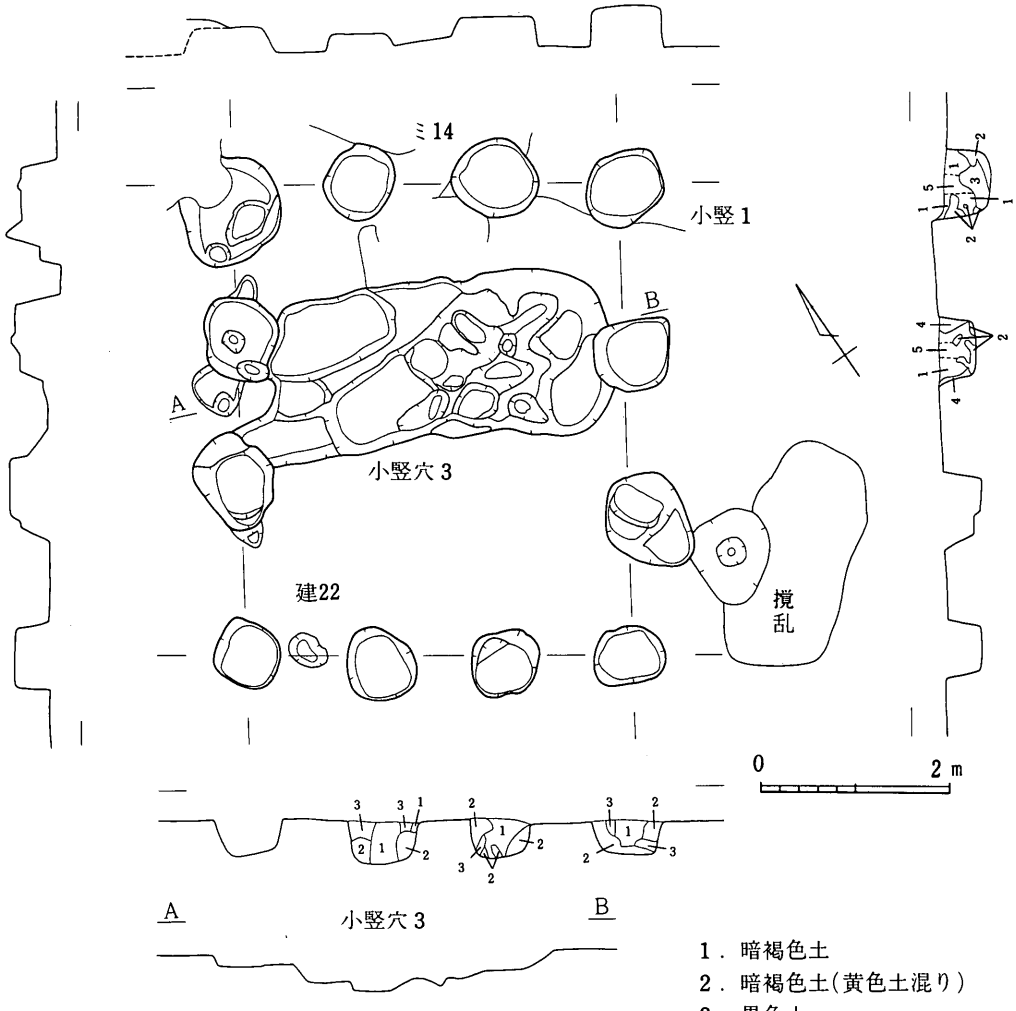
第224図　GOB　建物址20・21、小竪穴2、土坑14

る。桁行柱間寸法は1.6m、梁行柱間寸法は1.3mを測る。柱掘り方平面はいずれも不整方形で径50cm強、深さは検出面から50～20cmを測る。掘り方平面では柱痕の把握はできなかったが、断面では中央に黒土を確認し、柱痕と考えられる。

遺物　覆土中に土師器・須恵器片がわずか入っていた。

時期は、奈良時代と推測した建物址12よりは古いが、具体的な時期決定はできない。

（佐々木嘉和）



第225図　GOB　建物址22、小竪穴3

建物址23（第176図）

遺構　ＧＯＢＡＬ49が中心の掘立柱建物址である。４号･27号住居址、溝址12を切っている。建物址１と重複するが新旧関係は不明である。（３）×２間を確認し、柱間３間の方が用地外にさらに延長すると思われる。桁行方向は柱間３間の方向と考えられ、N40°Eを示す。桁行柱間寸法は1.88mが１間、1.55mが2間で、梁行柱間寸法は2.6mを測る。掘り方平面は不整形で各柱穴により異なるが、径はいずれも50cm強である。

遺物　覆土中に土師器片がごく少量混入していたのみである。

時期は決め手がないが、古墳時代前期以降である。　（佐々木嘉和）

建物址24（第172図）

遺構　ＧＯＢＣＹ36にかかり建物址16に隣接して、柱穴３個を検出した掘立柱建物址である。用地外と道路にかかり一部を確認したのみである。柱穴方向はN63.5°Wを示す。柱間寸法は2.14mであり、掘り方平面は不整楕円形で、深さは検出面から50～40cmを測り、中間に段がある。建物址16と何らかの関係のある建物址であろう。

遺物　北西端の柱穴覆土から円面硯小片、東南端の柱穴覆土上部から須恵器蓋・坏片が出ている。

出土遺物から奈良～平安時代と思われる。　（佐々木嘉和）

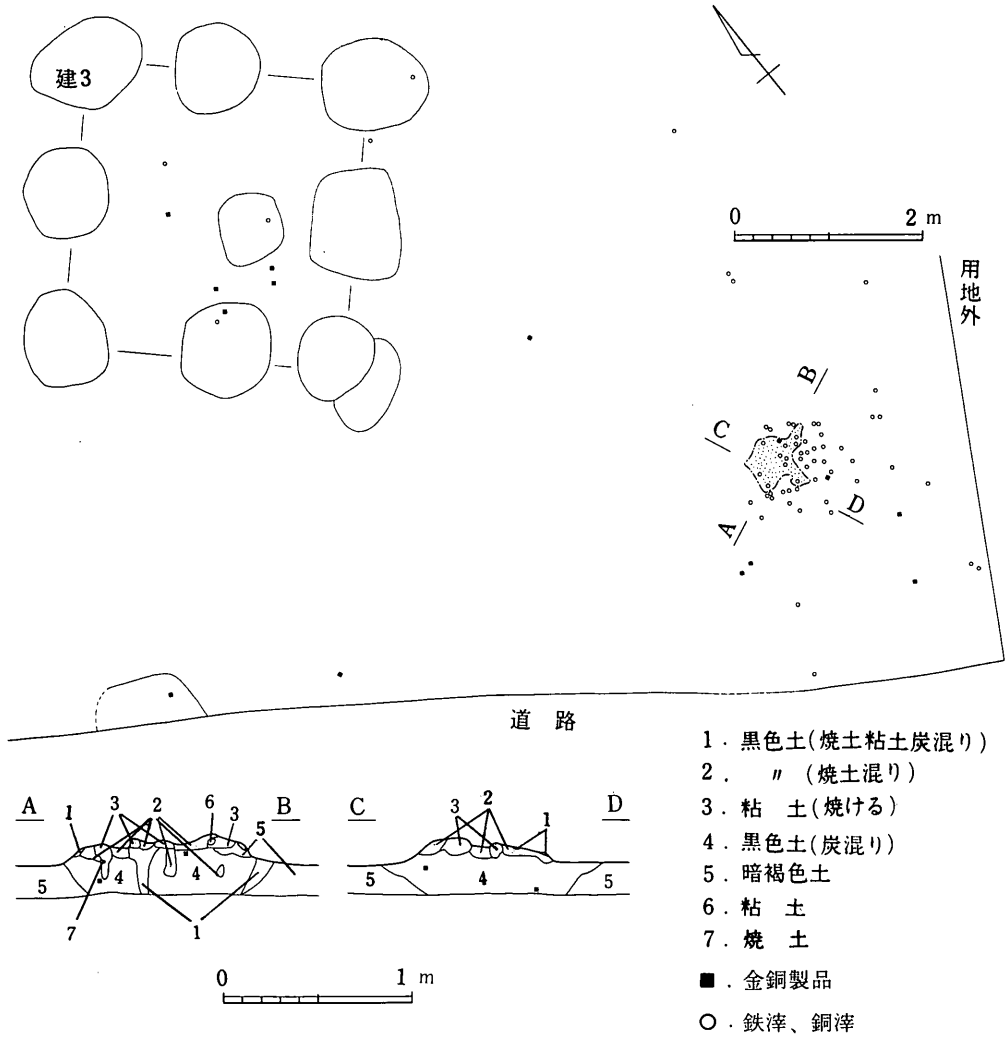
３）　工房址

工房址１（第226図）

遺構　ＧＯＢＡＦ53･54に焼土を検出し工房址１とした。９号・11号・14号・15号・17号住居址を切り、建物址３に切られる。用地外・市道にかかり、南及び東側は一部調査できなかったと思われる。耕土下暗褐色土を掘り下げる際に金銅装の帯金具が出土し、注意をしながら調査を進めた。最終的に９×７mの範囲で金銅装帯金具の出土があった。遺構としては焼土が確認されたのみである。焼土は70×70mの範囲にあり、厚さは10～５cmで粘土の焼けたものも混じっていた。焼土の下からも帯金具、鉄・銅滓、フイゴの羽口などが出土し、工房の遺構が破壊されている様子であった。金銅製品の打ち返し品があり、鍛治工房と思われる。

遺物　出土量は、遺構の確認ができなかった割に多い。鉄地金銅装帯金具鉸具･巡方･丸鞆･蛇尾・金環、鉄・銅滓、フイゴ羽口、須恵器片などである。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。　（佐々木嘉和）



第226図 GOB 工房址1遺物分布図

4）溝 址

溝址1（第227図）

遺構 ＧＯＢの西端部でＧＯＡとの境である道路ぎわに検出された。南西側は道路で北側は用地外のため、調査範囲はわずかである。確認した長さは約10mでほぼN40°Eの方向を示すが、

西側にN62.5°Eの方向に枝別れする溝がある。本溝の幅は2.5m前後・深さ30～40cmを測り、枝別れした溝は幅1m前後・深さ15cm前後を測る。いずれの溝も覆土の状態は一緒であり、底部付近に若干の黒色土はあるが、主体は粗い砂もしくは砂礫で、径30～20cmの石も相当量入る。この礫間に完形に近い遺物も含まれている。壁及び底部の形状は全体的に浅い皿状を成すが、水流による凹凸が全体に認められ、幅等も一定ではない。なお、本溝の延長部は北端でほぼ北方向に大きく曲がり用地外に至り、南側は用地外のため不明となるが、GOAの調査により、GOA溝址2の上部に粗い砂利層が認められ、本址の延長部と考えられる。さらにその先は、自然地形に沿って直線的に延び、凹地に至り消滅していると考えられる。一部で蛇行しているが、全体的には地形に沿っており、形状・覆土状態など総合すれば、自然の流路と考えられる。

遺物　砂礫中から多くの遺物が出土した。古墳時代後期の遺物を主体に、弥生時代中期から奈良時代にかけてのものがある。弥生時代中期～後期土器片・石器、土師器甕・坏・高坏の他、須恵器甕・横瓶・坏・高坏他等各種の遺物がある。特殊なものとして、素焼きの分銅型土製品がある。

遺物及び他遺構との切り合い関係から奈良時代に位置づけられる。　（小林正春）

溝址2（第227図）

遺構　溝址1に接して検出され、溝址1に切られる。確認した長さは10.8m・幅120～140cm・深さ30～60cmを測る。深さは南に比べ北が深くなるが、地形が傾斜するためで、底部はほぼ水平といえる状態である。南端部は調査範囲内で終り、北側は用地外のため断定はできないが、西方に折れ曲がる可能性がある。覆土は全体が砂質であるが、細分すれば5層程であり、ほとんど差のないものである。断面形は逆台形を成し、壁・底ともに安定し、人為的に掘られたものと判断され、水流痕跡もなく、一般的な水路とは考えにくい。建物址1等と方向が一致し、何らかの区画施設の可能性が強い。

時期を決定できる遺物の出土はないが、他遺構との切り合い関係等から奈良時代と考えられる。

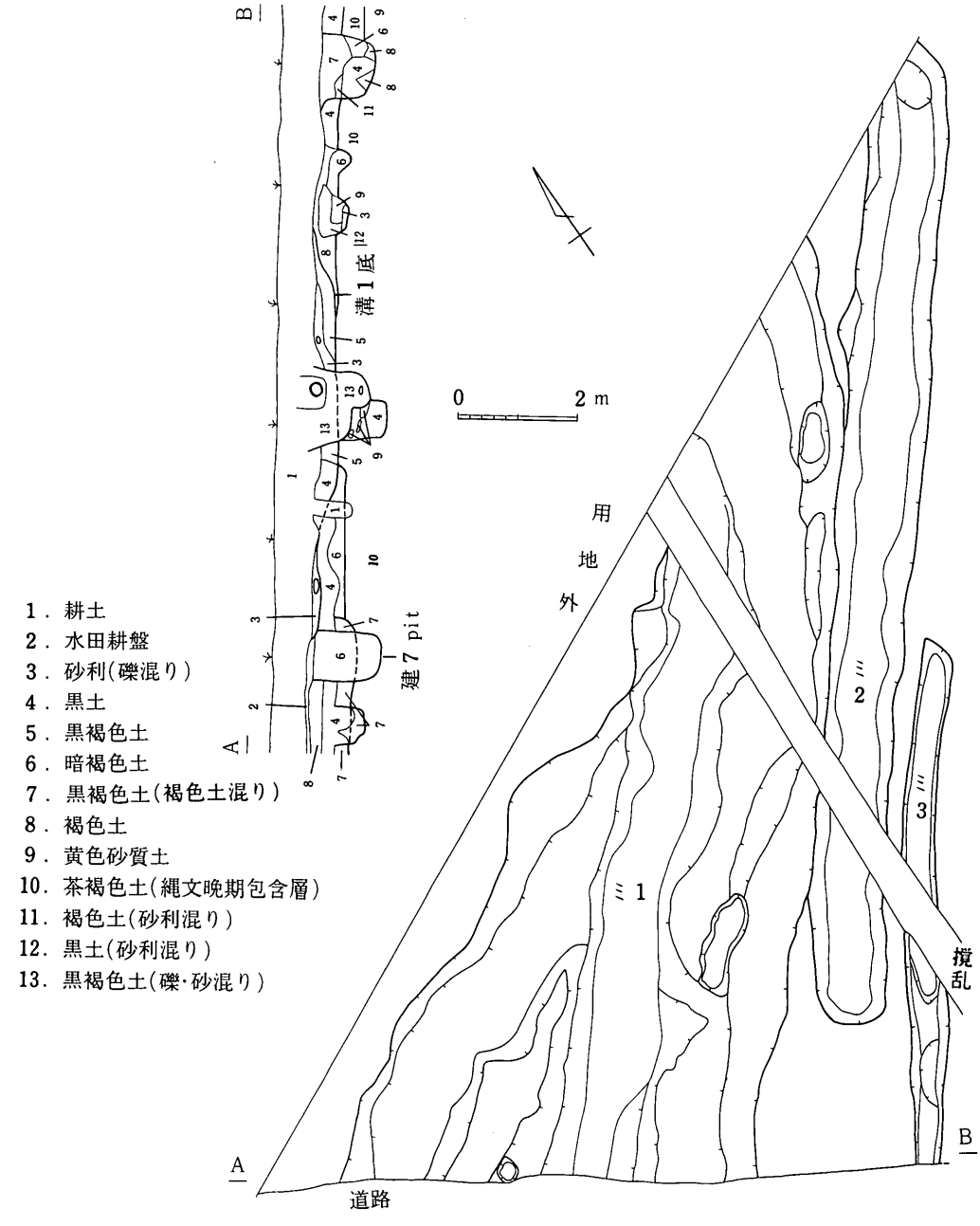
（小林正春）

溝址3（第227図）

溝址2の南端部の西側に近接して検出された。北端部を調査範囲内で確認したが、南側は道路のため不明である。確認した長さは5.6mを測り、方向は溝址2と同一のN36.5°Eを示す。溝址2と方向が一致し、互いに重複しないことから、なんらかの関連性も考えられるが、規模・形態などに差があり断定はできない。

出土遺物がなく、時期は不明であるが、土層の状況から溝址２より新しいと考えられる。

（小林正春）

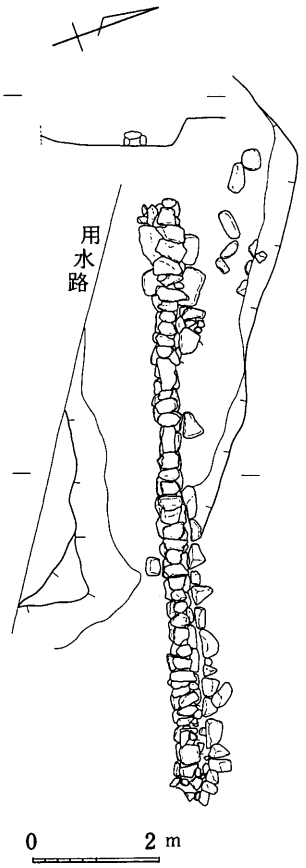


第227図　GOB　溝址１・２・３

溝址4（第186・231図）

遺構　GOBBU～BWの43～50に検出された用地内を横断する溝址である。長さ14m・幅3.5mで、検出面に暗褐色土が入り、石が混入していた。石の下部は浅く遺物もほとんどなかった。この溝址の下から溝址8を検出し、溝址8が埋まってわずか凹んでいる所に石が投棄されたものと思われる。水の流れた痕跡は認められなかった。

時期は溝址8の上部にあることから平安時代以降と思われる。（佐々木嘉和）



第228図　GOB　溝址5、暗渠

溝址5（第228図）

遺構　GOBAQ～ATの48～52に検出した溝址である。暗渠・石垣に切られ、用地外・用水路にかかるため、確認した長さ約11m・幅2m・深さは検出面から30cmを測る。溝址方向はN66°Wを示す。覆土中に暗渠排水溝と石垣がある。溝址の壁は緩く傾斜し、底に続いている。暗渠は石垣の石を利用してあり、石垣の方が古い。溝址は暗渠の掘り方の可能性もあるが、必要以上に幅が広く、東南側用地外ぎわで緩く曲がっており、暗渠とは別遺構で、かつ、一番古い遺構と思われる。

遺物　暗渠と石垣付近から多量の陶磁器片が出土した。溝址の壁ぎわから馬の歯、須恵器坏片が出ている。

時期は溝址が古墳時代以降、石垣が中世以降、暗渠が近世江戸時代中期以降と思われる。（佐々木嘉和）

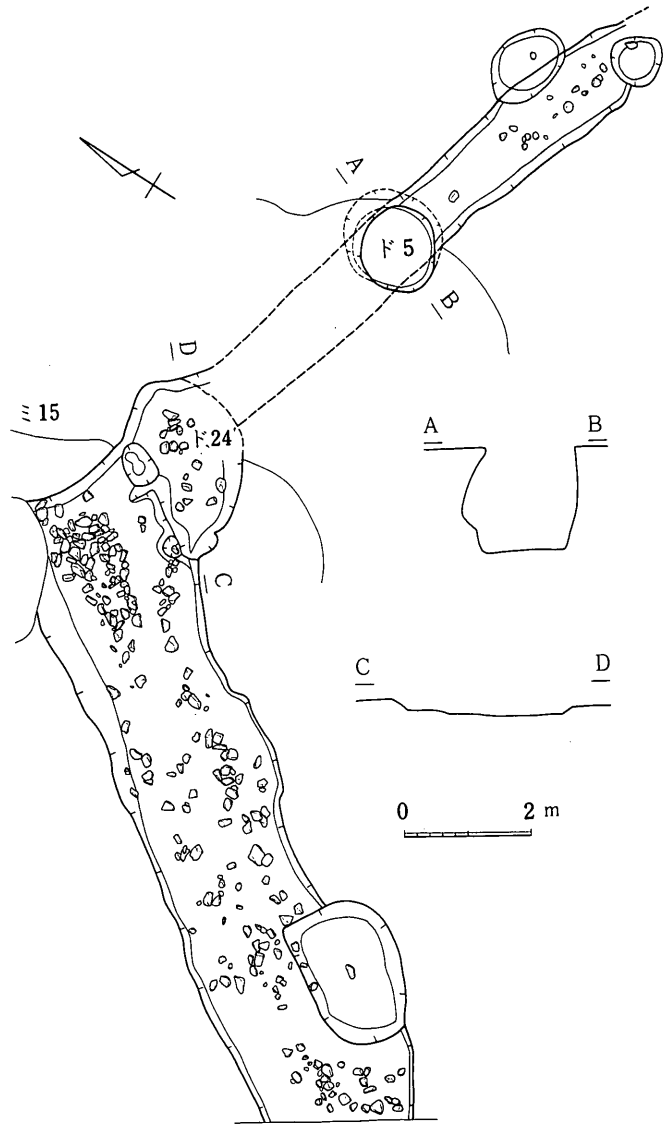
溝址6（第229図）

遺構　GOBAU51からAY49にかけて南北方向に検出した溝と、AY49に向かって直交するBA49からBE53にかけての東西方向の溝とがある。東西方向の溝は、溝址15を切ると考えられるが、溝址15の覆土中にはプランを検出できず、西壁の肩部を切り、南北方向溝と交わる部分で土坑24に切られている。溝址15の東壁の肩部で土坑5と重複し、これより東へ4.6m確認した。さ

らに東へ延びると考えられるが、除々に浅くなり確認できなくなる。幅は１m程で、壁高は西端で28cm・東端の残存状態の良好部分で６cmである。底部分は緩やかな弧を描いており、調査範囲で東から西へ13cm傾斜し、直径20～５cmの礫がまばらに密着している。覆土は全体褐色土でわずかに砂利が認められるが、水流を断定できるものではない。南北方向の溝は幅2.6m、壁高は北端で16cm・南端で７cmである。調査した長さは12mで、南へさらに延びているが排土の関係から調査できなかった。底部は北端に比べ南端が５cm程低いが凹凸が著しく、北側でも南側より低くなる箇所がある。溝の内部には径30～10cmの角を持った礫が多量に認められ、黄色粘質土で覆われており、人為的なものと考えられる。鉄分の沈澱層が底部に近い壁部に認められ、かなり安定した面を成す時期があったと考えられる。幅・形状等若干の差はあるが、両溝は一連のものと考えられ、水路的なものというより畑境にある道路的な性格が考えられる。

遺物　南北方向の溝から山茶埦・陶器埦・鉄釉の天目茶埦、礫中から磁器の仏花瓶が出土し、東西方向の溝からは陶器の細片が出土している。

遺物から近世～近代に位置づけられる。　（佐合英治）



第229図　GOB　溝址６、土坑５・24

溝址７（第230図）

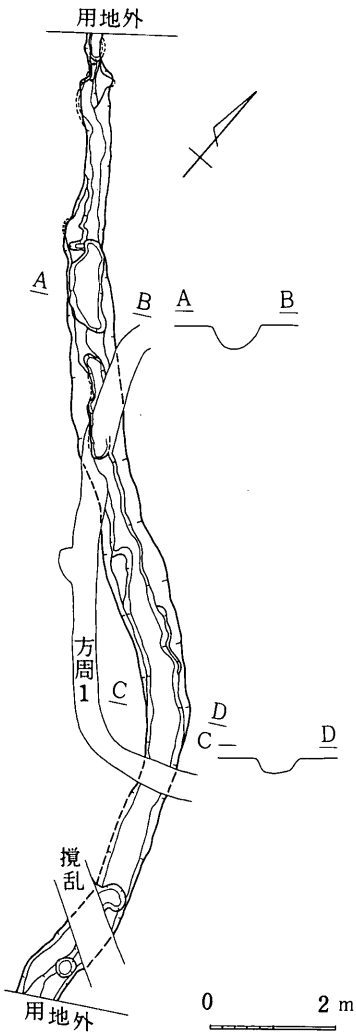
遺物　ＧＯＢＢＬ・ＢＭで用地内を横断する溝址である。方形周溝墓１及び耕作の攪乱に切られる。緩く蛇行し、用地内で

15mを確認した。幅は90～40cm、深さは底部に凹凸があり一定せず、検出面から40～10cmを測る。方向はN36°Wを示す。断面形はU字形で、水に浸蝕された部分がある。自然地形をやや斜めに横断しており、人為的に掘られた溝であろう。

遺物　出土量は比較的多く、特に底部からの出土が多かった。土器壺片・甕、石器がある。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅲ期の溝址であろう。

（佐々木嘉和）



第230図　GOB　溝址7

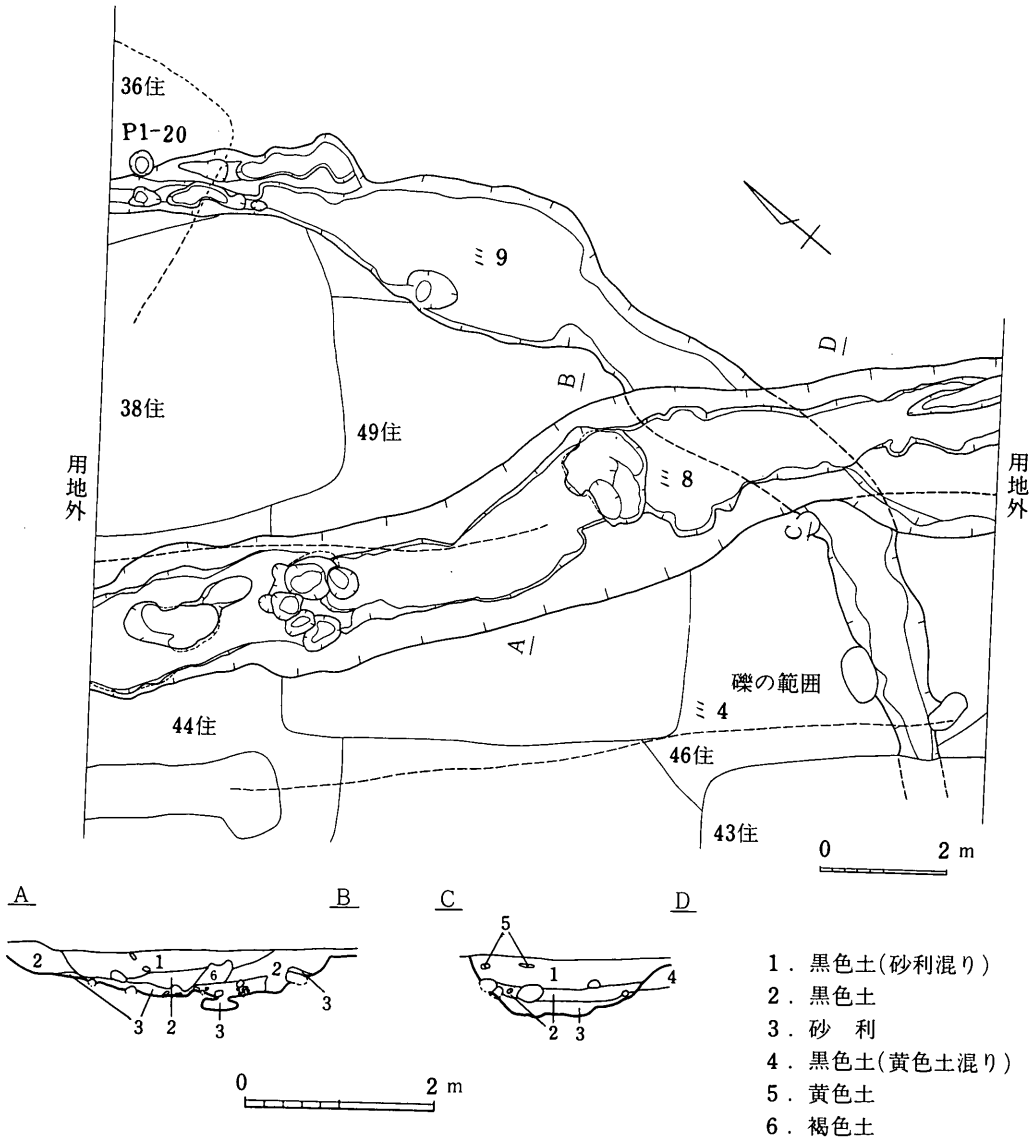
溝址8（第231図）

遺構　ＧＯＢ用地内を北西から南東に横断している溝址で、ＢＶ46からＢＸ50に検出した。44号・46号住居址を切っており、溝址9に切られている。南東側用地境の西壁は、土坑と切り合い、少し張り出している。確認した長さは15m・幅２mを測り、用地中央部分ではふくらみ３mとなる。深さは南東端で検出面より58cm、中間で39cm、南西端で31cmを測る。壁は緩い傾斜を成し、水の流れによる浸蝕のため両側下部壁に段が付いており、底部には深く抉られている箇所もある。溝の堆積土は、上層から砂利混り黒色土・黒色土・砂利の３層に大別される。砂利混り黒色土と黒色土の堆積層が明確に判別できる所は少なく、同時期もしくは時をあまり経ない間の堆積と考えられる。また、この層には径20cm前後の礫や黄色土が混入しており、人為的に埋めている可能性がある。本来本溝址が人為的に掘られたものか自然溝であったかなど、性格等を確認することはできなかった。

遺物　土師器甕・甑・高坏・内面黒色の坏、須恵器壺・高台付坏・坏・蓋坏、ふいご羽口細片などが砂利混り黒土層から出土しており、本溝址の最終埋没時は、奈良時代と考えられるが、溝下層では遺物がほとんど出土せず、構築もしくは形成期の決定はできない。　（佐合英治）

溝址９（第231図）

遺構　用地内をゆるくカーブしながら横断する形で、ＧＯＢＢＹ43からＢＶ54にかけて検出された。重複する遺構が多く、その新旧関係をはっきりおさえずに掘り下げたために古い遺構を先に掘り、遺構・遺物の把握に若干の混乱があった。重複関係を整理すると、38号住居址・溝址４に切られ、36号・43号・46号・49号住居址や溝址８・11を切るが、43号住居址・溝址８を先に掘ったためにこの部分の溝址は確認できなかった。両端は用地外に延長する。溝址８の北側で約10m、南側で4.3mを調査した。ＢＹ43から44までは幅１m前後・深さ20～15cmを測り、覆土には砂・砂利を多く含む。ＢＹ45から幅約2.4mにひろがり、底部近く全面に10cm前後の礫が入る。ＢＹ



第231図　GOB　36号住居址、溝址4・8・9

45付近から再度１m前後の幅になりゆるく南にカーブしながら連続し、溝址８の南側も同様な状態を示す。この部分には礫の混りが少なくなる。断面の形は、いずれの位置でもくずれたU字形を呈する。規模・方向等に規格性がなく、土層からも人工的な施設とは考えにくく、自然の流路により形成されたと考えられる。

遺物　出土量は少なく、土師器甕・高坏・内面黒色の坏、須恵器長頸壺・硯がある。古墳時代後期を主体に、平安時代の前半までのものがある。

時期は最も新しい遺物及び遺構切り合い関係から平安時代前半と考えられる。　（山下誠一）

溝址10（第235図）

遺構　ＡＭＤＡＢ39～41のＡＭＤ境に検出した溝址である。建物址16・溝址16に切られ用地外にかかる。確認した長さは約7.5m、幅は溝址16に切られているが１m前後が想定され、深さは底部に凹凸があり、検出面から50～30cmである。長軸方向はＮ45°Ｗを示す。溝址断面形は逆台形で、壁は緩い傾斜で底に続いている。

遺物　土師器片などわずか出土している。

切り合い関係から古墳時代と思われる。　（佐々木嘉和）

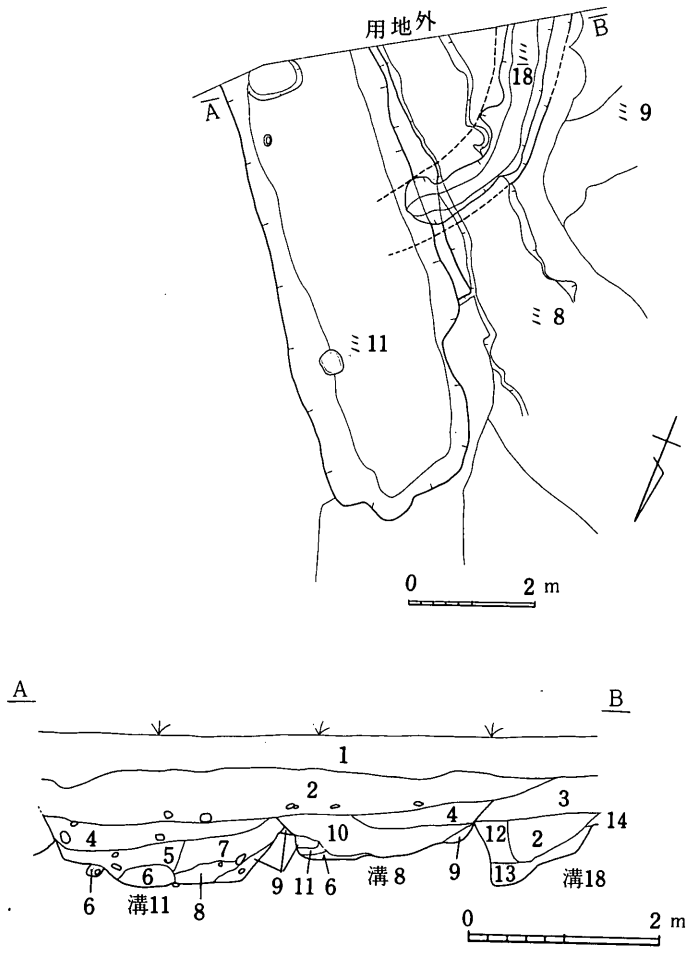
溝址11（第232図）

遺構　ＧＯＢＢＹ46からＣＡ50にかけて検出された。溝址９に上層を切られ、35号・50号住居址や溝址18を切っている。東側は用地外にかかり全体を確かめることはできなかった。ＢＹ46から東側用地外まで7.5mを測る。幅2.8～2.4m・深さ80cm前後を測り、Ｎ38.5°Ｗを示す。断面は逆台形を呈する。ＢＹ46で切れ、西側へは続いていない。土層は上面より茶褐色土が、下層に黒味を帯びた土が入る。

遺物　出土量は多い。上層の茶褐色土と下層の黒味を帯びた土との境付近から大半が出土した。ほとんどが須恵器で大甕・長頸壺・蓋・高台坏・糸切り坏・高坏・硯がある。特に、硯は４個体分あり、注目される。

土層や規模がＡＲＹ溝址９・19などと類似し、方向も一致することから、これらの溝址と強い関連が認められ、何らかの範囲を区画する施設と考えられる。

出土遺物及び遺構の切り合い関係から奈良時代に比定できる。　（山下誠一）



1．耕　土
2．黒色土(褐色土混り)
3．黒色土
4．茶褐色土
5．灰黒色土(泥土混り)
6．黒色泥土(礫砂混り)
7．茶褐色土(泥土混り)
8．泥　土(茶褐色土混り)
9．黄褐色砂土
10．茶褐色土(砂混り)
11．砂　利
12．褐色土(黒色土混り)
13．黄色砂土混り褐色土
14．褐色土

第232図　GOB　溝址11・18

溝址12（第176図）

遺構　ＧＯＢＡＩ～ＡＬ47に検出した溝址である。建物址23に切られ、16号住居址との切り合い関係は確認できなかった。用水路にかかり、それを越えた北東側では検出できなかった。長さ７ｍを確認し、幅30～20cm、深さは検出面から10～２cmと小さな溝である。方向はＮ62°Ｅを示す。覆土は黄白色砂利で、水の流れた痕跡があり、小さく蛇行しているが、溝の底部のみが残存したものと考えられる。本来の掘り方は深かったと思われ、人為的に掘られた溝址であろう。

遺物　小さな溝址の割には遺物出土量は多い。土師器甕・台付甕の脚台部、石器がある。

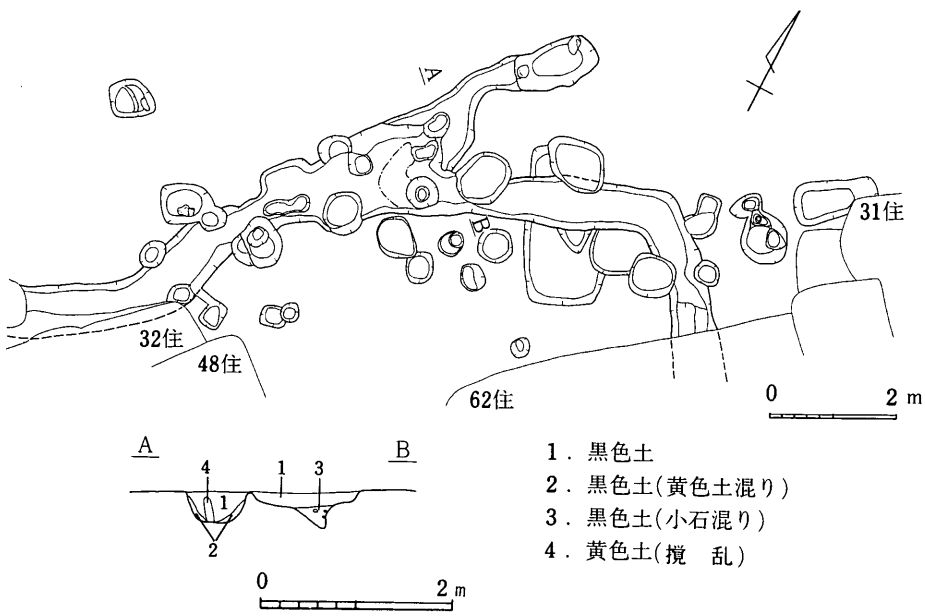
出土遺物からみて古墳時代前期の溝址であろう。　（佐々木嘉和）

溝址13（第233図）

遺構　GOBCE～CKの44・45に検出した溝址である。32号・62号住居址を切っている。用地内のほぼ中央に検出したが、切っている住居址の覆土中部分は確認できなかった。確認した長さは13mで、幅は狭い所もあるがほぼ80～60cm、深さは検出面から20cmを測る。全体の規模等は不明である。確認範囲のほぼ中央付近で二方向に分かれるが、北西側の溝址が切っている可能性が強い。周囲には多くの穴があり、いずれも溝を切っている。

遺物　少量出土しており、土師器甕、須恵器長頸壺の破片である。

時期は切り合い関係から奈良時代以降と思われる。　（佐々木嘉和）



第233図　GOB　溝址13、Pit群

溝址14（第222図）

遺構　GOBCL～COの40～44に検出した溝址である。建物址17を調査中柱穴上面より20cm下に、砂・砂利層があり溝址の存在を確認した。30号・37号・55号住居址を切り、建物址17に切られる。小竪穴1との切り合い関係は確認できなかった。住居址の覆土中のプランは把握ができず、確認した長さは約11m、幅は広狭があり1～0.2m、深さは検出面から40～数cmであった。方向はN84°Wを示す。深い溝址ではないが、礫も一部に入り底部に凹凸があり、相当な水量が流れていた様子である。位置などから考えて、自然の溝址ではなく、人工の施設の可能性が強い。

遺物　砂・砂利中に遺物が混入していたが少量で、破片である。土師器甕、須恵器坏・蓋・獣足など出ている。

切り合い関係と遺物から、奈良～平安時代初頭と思われる。　（佐々木嘉和）

溝址15（第234図）

遺構　ＧＯＢ・Ａ区とＢ区の境ＡＸ53～ＢＦ45に検出され、26号住居址・溝址６・土坑５に上部を切られ、ＢＣ・Ｄ47には近世～現代の性格不明の方形攪乱坑があり、溝の底部まで達していた。両端は用地外に延び、調査した長さは22m・幅5.6mで、用地中程でやや細くなり4.4mを測る。全体としては、ゆるやかにＳ字状に蛇行している。検出面からの深さは北側で1.31m・中間で1.43m・南側で1.48mを測る。壁は地点により若干の形状差があるが、総体的に東側壁は比較的緩やかで、西側壁は東側に比べ急傾斜である。全体的に緩やかに蛇行することは先記のとおりであるが、細部では各所に差異があり、本溝址の性格等検討する上で意味があると考えるので、特徴的な箇所について南から順記すると以下のようである。

南端用地境部―――溝の最深部が東壁寄りにあり、東壁が他に比べ比較的急傾斜で底に至る。西壁は肩部から急傾斜で落ち込み、一担段を成し緩傾斜で底に続く。

南部―――最深部は溝中央付近にあり、西壁及び溝最深部は西方に、突出状を成す。西壁は段状ではあるが急傾斜で底に至る。東壁は本来くの字状に折れ曲がる肩部を削り取った状態で幅２m程のテラス状の緩傾斜面を有し、底に至る。

中央部―――溝址全体が逆くの字状に折れ曲がる箇所で、最深部は中央にある。西壁は肩部から１m程緩傾斜面を持ち、その先は一気に底まで落ち込む。東壁も同様に一担稜を有して底に至る。

北部―――中央部と北端部の中間辺で、この付近から北側の底は平坦な面を成し、水流による抉り込みが少ない。西壁は中央部同様であるが、東壁は肩部から一気に50cm程掘り込み、一段を有しその後緩傾斜で底に至る。

北端部―――溝の最深部は東壁側にあり、底部幅も調査範囲内で最も広い。西壁がいくつかの稜を持ち、除々に落ち込むのに反し、東壁はわずかに一担稜を有して垂直に近い壁面を成す。

使用時の水流による形状の変化は、底部及び底部に接する壁下部に著しく、原形の判断は困難であるが、基本的には肩部から１～２回程度の段もしくは稜を持って掘り下げ、底部は若干の平坦面のある逆台形状の掘り込みが当初の姿であったと考えられる。

全体の緩い蛇行は、肩部の安定した状態から水流等による大きな変化は考えられず、むしろ意図的なものであり、底部付近の水流痕跡から、かなり激しい流れであったと推測され、その勢いを弱める等の目的があったとも考えられる。

本址の覆土は大きく５層に別けられる。上から褐色土・黒色土・漆色黒土・褐色土・砂土の順である。（以下１～５層とする）

１層は、場所によって厚薄があり、北端ではほとんど認められず、中央付近で20cmを測り、南端では26号住居址覆土上面にのっている。このことから古墳時代後期以降の堆積で、溝としての形

態をほとんど残していない時期の堆積で、奈良時代以降と考えられる。

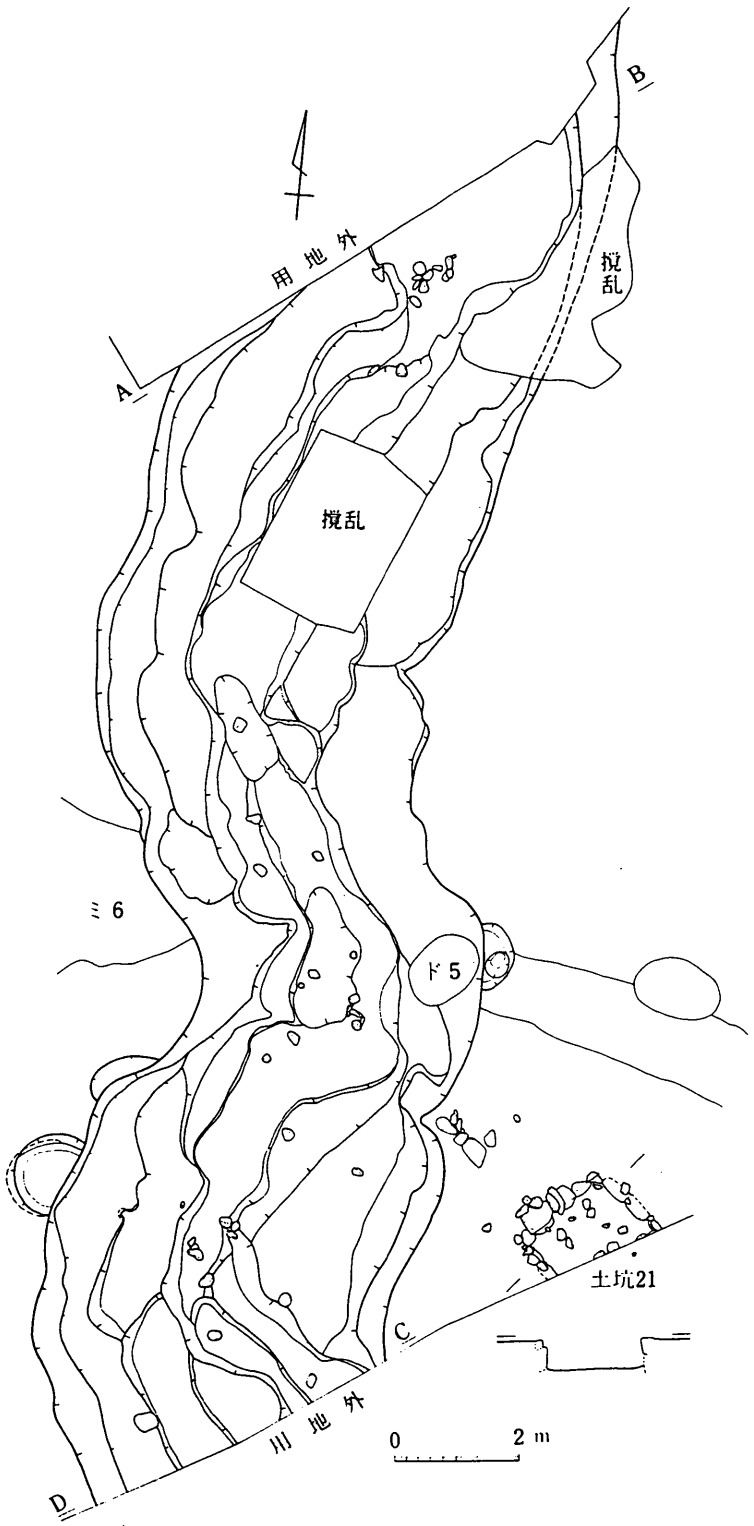
2層は、古墳時代後期の堆積で、溝として形をとどめていた最後の時期と考えられる。黒色土が中心で全体としてはゆっくりとした堆積が考えられるが、層内に部分的に砂利が認められ、水流のあったことを示している。1層と2層は平面的には把えられず、遺物が混同してしまい。土師器甕・壺・高坏、天目茶垸・陶器などの破片がある。また、北側では埴輪の破片があり、周辺に古墳の存在も考えられる。

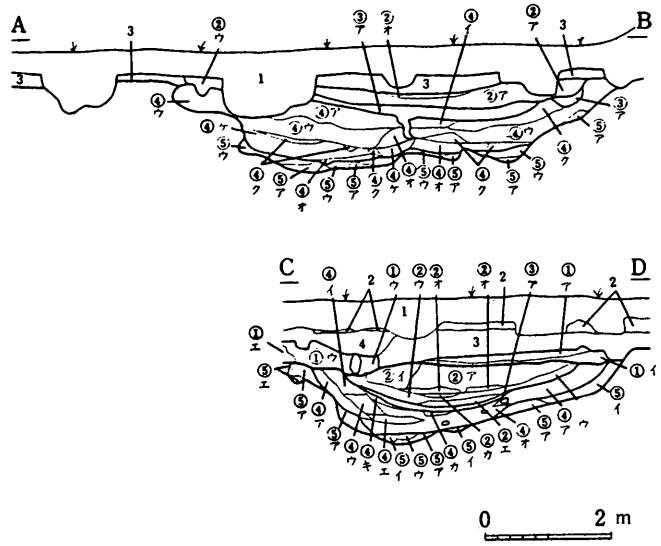
3層は、淡黒色土の単一層で、湛水時の堆積で西壁のほぼ中央部が西へ張り出す箇所に、焼土を確認したが性格等は不明である。この層からの遺物は土師器壺・甕・小形丸底・鉢・高坏などがあり、南端で銅鏃が出土した。出土量は比較的多いが完形品は少なく、層全体に広がっている。古墳時代前期後半の堆積層であろう。

4層は、場所により異なった層状態を示し、かなりの水流があったとみられ、複雑な堆積状態である。西壁側にはわずかではあるが炭の混入する比較的厚い褐色土が確認できる部分もある。4層の遺物は上層に比べ圧倒的な出土量で、完形品も数多く何個体もまとまって出土する場所もある。調査範囲内で4箇所の集中箇所があり、いずれも西壁側に寄っている。南側用地境に近いAX52・53を中心に壺・甕・台付甕・器台・鉢・手あぶりが出土し、壺や甕は意図的に壊されたような出土状態である。AA51の西壁が東へ張り出た部分、3層で焼土を認めた真下から甕・台付甕・S字状口縁の甕・器台・手づくねなどが重なり合うように出土し、完形品は6個体を数える。さらに、この場所から南側の溝のほぼ中央を1～0.5m置きに用地境まで甕あるいは壺が1個体もしくは台付の甕・器台を伴って出土し、東壁のテラス状に張り出した部分との関連が考えられるが、他の集中部分から出土した土器に比べ破損がひどく、水が流れた時に中央部に押し出された可能性がある。また、この部分から鉄鏃が出土した。BB48・49を中心とした西壁部は他に比べ広い範囲に出土し極端な集中部を持たないが、台付甕・S字状口縁の甕を含む甕を主体に、壺・器台・鉢・小型壺・手づくねなどがある。このうち一つの甕の横には長さ35cmの炭化材が伴出した。調査用地北端に当たるBD46・BE46では口縁の直立する壺が多く、完形品のみで4個を数え、甕・器台などが出土した。BD46では複数の個体が重なり合って壊れている。径20～30cmの石を抱くように壊れているものもあり、人為的に壊されていたとも考えられる。

5層は本来の溝底部が水流による浸蝕のため凹められ、そこに砂利・黄色土等が入り込んだものと考えられ、遺物は周辺からの流れ込み及び4層遺物の流入の可能性が強い。完形品はなく小型壺・甕・タタキの甕・高坏・弥生時代中～後期土器片などがあり、高坏の量は比較的多い。

遺物出土状況・量などからみて、本溝址がもっとも活発に利用され、存在価値のあったのが4層の時期であり、集落を区切る施設であるとともに祭址的要素がきわめて強い時期で、古墳時代前期恒川Ⅵ～Ⅸ期に位置づく溝址と考えられる。（佐合英治）



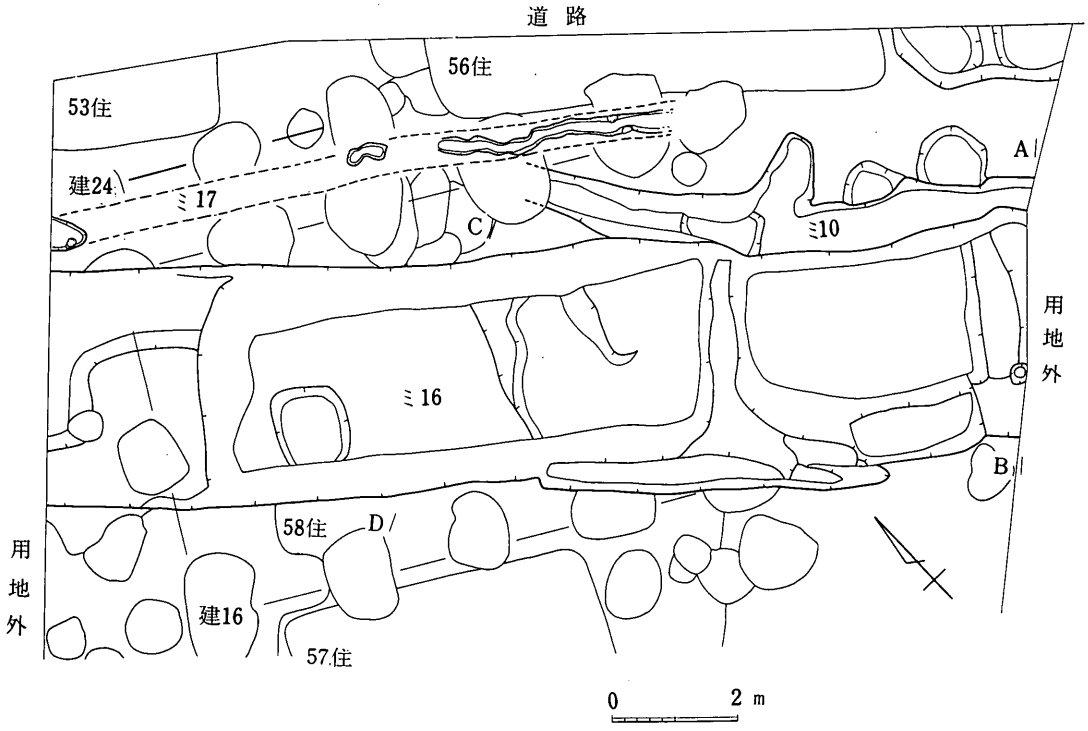


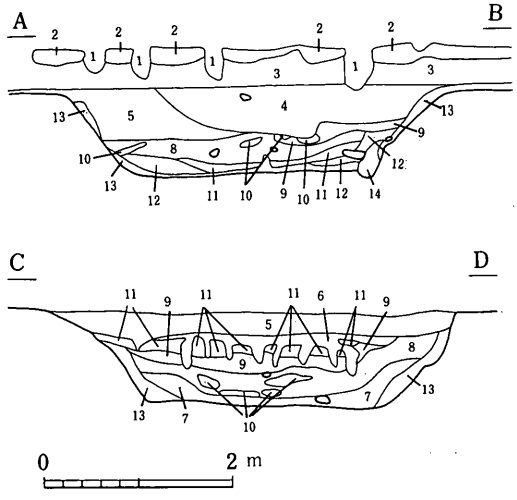
1．耕土
2．黄色土(褐色土混り)
3．褐色土
4．黒褐色土
①層ーミ15・26住の覆土
ア．褐色土(白砂利混り)
イ．黒色土(26住の覆土)
ウ．26住カマド
エ．赤褐色土
②層
ア．黒色土
イ．黒色土(褐色土混り)
ウ．黒色土(砂利混り)
エ．黒色土(漆黒土混り)
オ．砂利(黄色)
カ．砂利(黒色土混り)
③層
ア．漆黒色土
④層
ア．褐色土(炭混り)
イ．褐色土(赤色がかる)
ウ．褐色土(砂利混り)
エ．灰褐色土(砂利鉄分混り)
オ．灰褐色土(粘質土)
カ．赤灰色土(鉄分混り)
キ．灰褐色土(黒色土混り)
ク．砂
ケ．褐色土(砂混り)
⑤層
ア．砂
イ．褐色土(砂混り)
ウ．砂利
エ．黄色土(黒色土混り)

第234図　GOB　溝址15、土坑21

溝址16（第235図）

遺構　GOBCW～AMDABでAMD境を横断する溝址である。長さは用地幅全体の15.5mを確認し、幅は約4m、深さは検出面から最底部で1.2m・土橋と思われる北西端で20cmである。方向はN51°Wを示す。覆土は横位に順序良く堆積しており自然に埋まったものと考えられる。壁は





1．耕　土
2．黄色砂土(砂利混り)
3．暗褐色土
4．黒褐色粘質土
5．褐色土(暗褐色土混り)
6．褐色砂質土
7．暗褐色土(黒色土混り)
8．灰褐色泥質土
9．灰褐色泥質土(砂混り)
10．鉄分沈澱砂土
11．褐色微砂土
12．褐色砂土(砂利混り)
13．褐色土(黄色土混り)
14．ピットに入った土
　灰褐色土(黄色砂土混り)

第235図　GOB　溝址10・16・17

比較的緩く傾斜し、地山が黄色砂土のため自然にくずれたものと思われる。底部には2箇所に土手状の区切りが、30～20cmの高さである。北西用地外壁近くは約1mの段があり、用地外の状況は不明であるが、土橋状の施設と思われるが断定はできない。確認部分がごく一部だけであり性格等不明であるが、中世居館址の堀的な施設の可能性が考えられる。

遺物　出土量は少ない。覆土の中層から上部で常滑壺が数片、底部やや上から青磁碗片、山茶埦片が出土した。最上部の褐色土から馬の歯が一個出たが、本址関連のものか他遺構があったのかは不明である。

出土遺物から中世の遺構と思われる。（佐々木嘉和）

溝址17（第235図）

遺構　ＧＯＢＣＸ～ＡＭＤＡＤで用地内を横断する溝址である。重機により耕土排土中に白い砂の入る溝址を確認したが、溝址の主体部が地表から60cm下と浅く、底部の一部を把握したにとどまった。用地外壁土層断面図から見ると、幅約40cm・深さは20cmである。方向はＮ59°Ｗを示す。覆土は白い砂で部分的に石が入っていた。溝址の存在する土層は褐色土で、その上に厚さ15cmの黄色砂土がのり、耕土40～30cmがのっている。黄色砂土層は近世の洪水時に入った土と思われＧＯＢから北東の用地内に認められる。中世から近世初頭にかけての畑境の溝もしくは小道に砂・石が入ったものと思われる。

遺物　比較的多く出たが、本址に先行する時期の土師器・須恵器・灰釉陶器などの破片である。

土層から推測して近世の遺構であろう。（佐々木嘉和）

溝址18（第232図）

遺構　ＢＸ50からＢＹ49の南側用地境で溝址8調査中に検出した。上部は溝址8に、北東側は溝址11に切られており、底を一部分確認した。溝址11の西壁には本溝址の痕跡は認められず、溝址11の内部で終わっている可能性が強い。また、南側は弧を描きながら用地外へと延び、確認した長さは約4mを測る。溝址8に切られずに残った部分も後世の土坑に切られ、本溝址が本来どの面からの遺構であったのかは確認できなかった。検出された幅は70～50cmであるが、もともとは1m前後あったと考えられる。深さは溝址8・9の検出面から北側で52cm・南側で71cmを測り、比較的高低差の大きな溝址である。用地境土層の観察からＶ字に近い断面形を成し、底部には水流痕跡の砂利層を認めたが、常に水が流れていたとは考えられず、本址の性格等不明である。

出土遺物はないが切り合い関係から奈良時代以前の溝址と考えられる。（佐合英治）

溝址19（第162図）

遺構　GOBBO～BQの47～50に検出した溝状の落ち込みであり、45号住居址・方形周溝墓１を切っている。確認した長さは８ｍ・幅90～40cm・深さ検出面から15～10cmである。方向はN67°Eを示す。自然地形の傾斜を横切っており、人工的な施設と思われる。覆土に砂の混入もなく、性格不明の溝状遺構である。

遺物　土師器片がわずか出ている。

切り合い関係・遺物から古墳時代以降の遺構であろう。　（佐々木嘉和）

５）方形周溝墓

方形周溝墓１（第236図）

遺構　ＧＯＢＢＮ47が中心の方形周溝墓である。47号住居址・溝址７を切り、溝址19・土坑16に切られる。規模は８×7.6mである。周溝の幅は50～30cm、深さは検出面から30～20cmと小形である。長軸方向はN33°Wを示す。溝の断面形はＵ字形で比較的急に掘り込まれており、底部に小穴深さ20～10cmがある。東隅は土橋状に溝が切れる。

全体形などから考えて、方形周溝墓としたが、主体部の確認ができず、溝の状況も一般的な周溝墓のそれとは若干様相が異なり、集落内の特別な施設の可能性もある。

遺物　甕底部片などわずかである。

時代は切り合い関係などから弥生時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

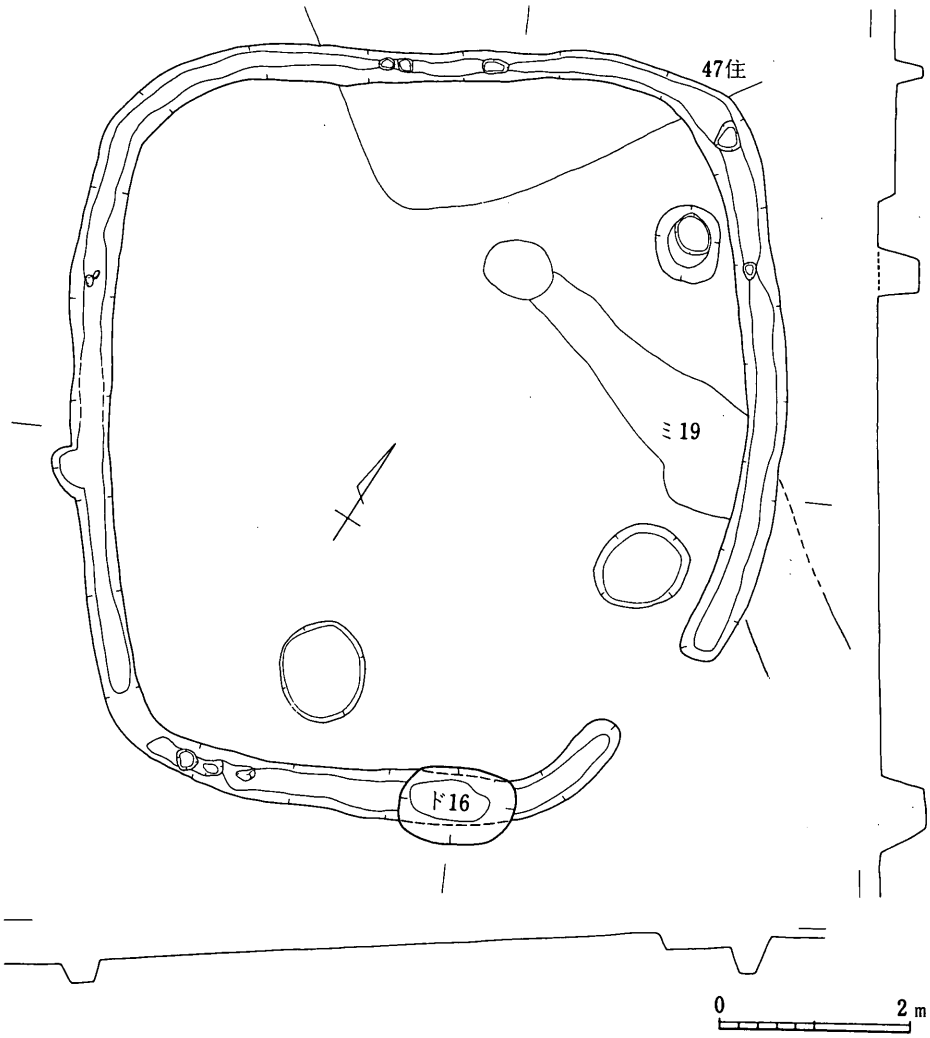
６）土坑・小竪穴

土坑

ＧＯＢで土坑としたものは、１～24まである。規模など大小様々であり、位置・規模は一覧表とし、記述は特徴のあるものにとどめた。

土坑４（第237図）

方形の土坑で、深さは20cmと浅いが焼けた石が入っていた。石は径15cm前後のものが一番多く、石質は花崗岩と硬砂岩であり、半分は割れていた。石の下は炭の層であり炭化した種子もあった。性格・時期ともに不明である。



第236図　GOB　方形周溝墓１、土坑16

土坑７・８・９・10（第160図）

４個の土坑は間隔を１m前後あけて並んでいる。長軸もほぼそろっており、覆土の土色も良く似ていた。出土遺物はないが、中世の遺構と思われる。

土坑11（第160図）

長径３mあり、北西端から1.5mの範囲に石が入る。石は大きいもので径25cmあり、15cm前後のものが多い。石は焼けており比較的大きなものは、平面を上にして並べてあった。覆土に炭が混

じっていたが石の下が特に多かった。遺構図の北隅に入っている石は最大のもので上面を敲打した調整痕が残っている。遺物はほとんどなく時期の決め手になるものはない。

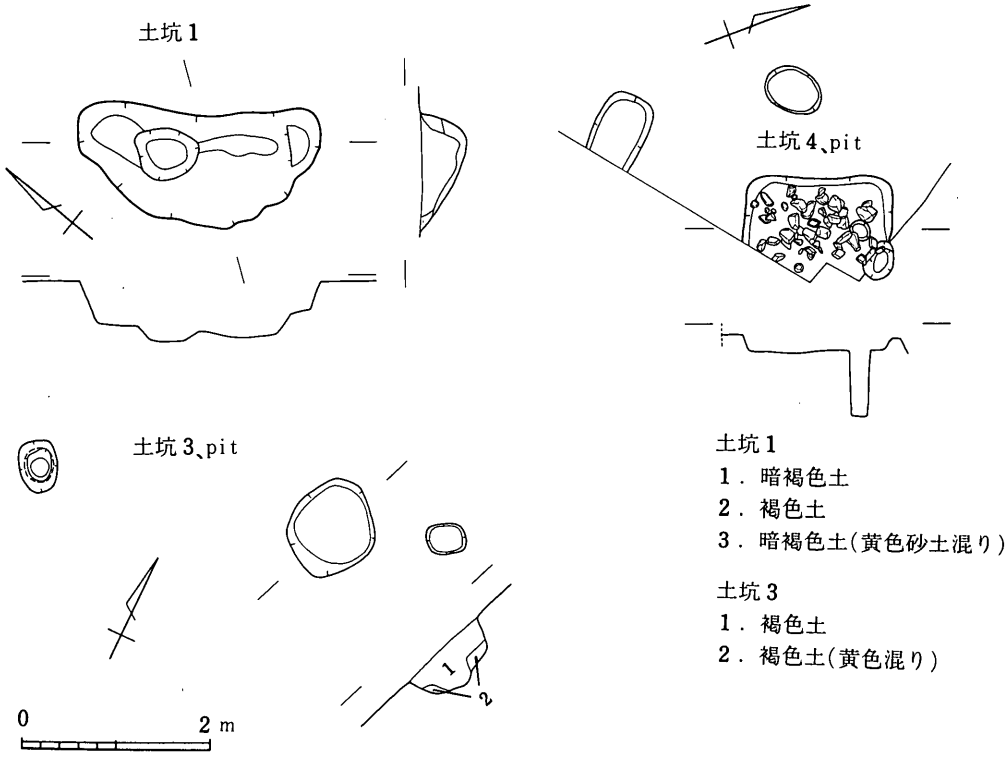
土坑12（第238図）

不整方形の土坑で、深さは35cmである。中には30～10cmの石が入っていた。石の間から長さ10cmの骨が出土した。何の骨か不明であるが、集石墓壙と思われる。

土坑13（第161図）

用地外にかかって（4）×1.6m確認したのであるが、溝状に長く、深さは検出面から40～30cmある。出土遺物はあまり多くないが円面硯片が出土している。本址の南西に、本址よりは規模が大きいが平面形等の類似した溝址11があり、円面硯片も数個体出ており、両遺構の共通性が強い。

（佐々木嘉和）



第237図　GOB　土坑1・3・4、Pit

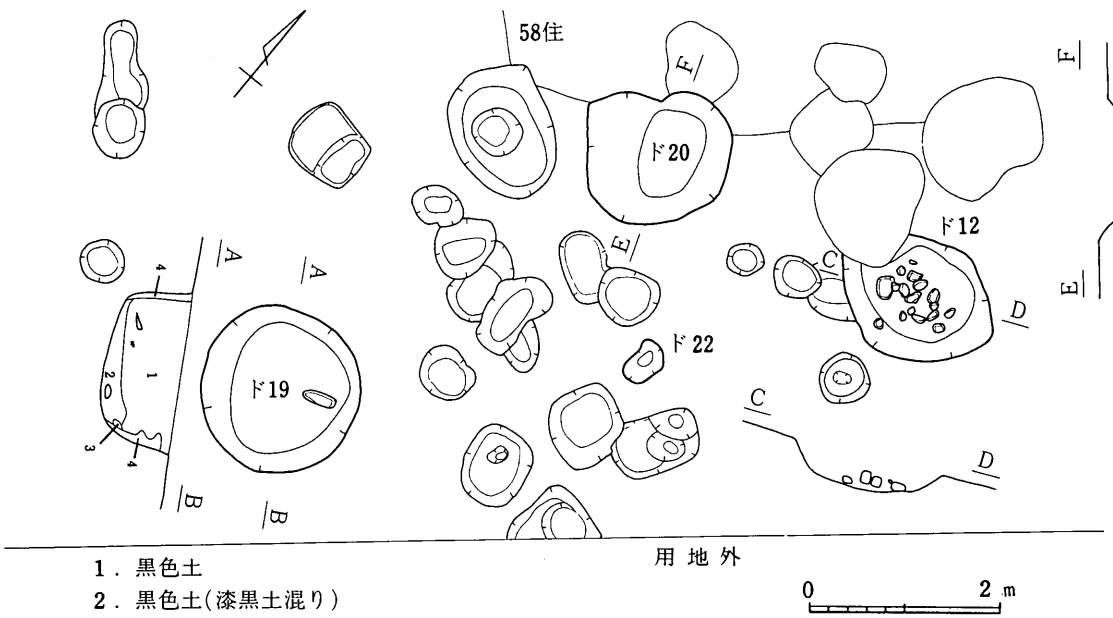
土坑15・16・18（第239図）

遺構　土坑15･18は32号住居址の北壁に切られて、ＧＯＢＣＥ45･46とＣＦ45に検出された。土坑15と18は切り合うが、近接する土坑16とともに、その切り合い関係は確認できなかった。土坑15は1.5×0.85m・深さ50cm、土坑16は2.0×1.0・深さ90cmを測る。いずれの土坑も長楕円形で、壁は比較的緩やかな面を成す。底部は舟底状を呈し、土坑15は東西が数cm低くなり中央部が高くなる。土坑18は後世の穴に切られ、歪みがあるが、上面では径1.4mのほぼ円形を成す。北東側の半分が深く２つの土坑の切り合いであった可能性もある。検出面からの深さは、南西側48cm・北東側74cmを測り、壁は比較的緩やかで、北西側・東南側は袋状になっている。

遺物　土坑18からの出土遺物はなく、土坑15･16からは縄文時代中期の鉢と思われる細片が出土した。

土坑15・16・18とも覆土は赤褐色土一層で、比較的締まっている。出土遺物と周辺の土坑・穴の覆土等の状況も考え合わせ、縄文時代中期以降で、古墳時代後期以前の土坑と考えられる。

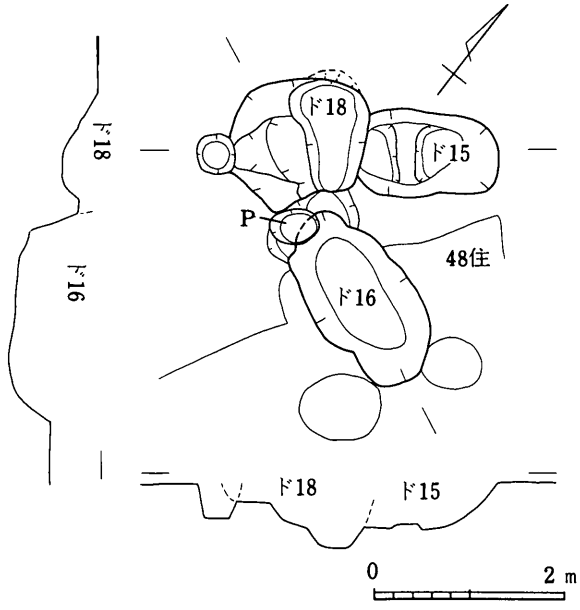
（佐合英治）



第238図　GOB　土坑12・19・20・22

土坑22（第238図）

遺構　ＧＯＢＣＷ44に検出した。50×36cmの歪んだ楕円形で、断面形は碗状を成し、検出面より18cm掘り凹められている。覆土は褐色土で人間の頭蓋骨の一部と歯が出土した。もともと保存状態が悪かったのと、プラン検出中に上部を削ったため、原形はとどめていない。歯は臼歯が２本並んで出土し、下顎のものと考えられる。頭蓋骨と歯の出土位置から考えて顔の正面は西を向いているものと思われる。本土坑に伴って出土した遺物はなく、時期の断定はできないが、周辺の遺構の中では一番早く存在が確認され、頭蓋骨の出土状況から、主体は褐色土層にあったと考えられ、平安時代以降の比較的新しい土壙墓と思われる。（佐合英治）



第239図　GOB　土坑15・16・18

小竪穴１（第222図）

遺構　ＧＯＢＣＮ42に検出した。55号住居址、建物址17･18･22、溝址14、穴と重複しているが、新旧関係の確認はできなかった。3.5×２mの不整長方形で、深さは検出面から15cm前後である。長軸方向はＮ46°Ｗを示す。底部は比較的平坦で、部分的にたたき状を呈している。性格は不明であるが、建物址との関連性が推測される。

遺物　覆土中から土師器小片と上部から山茶埦片が出土したのみである。

古墳時代以後の遺構と推定したが確定はできない。（佐々木嘉和）

小竪穴2（第224図）

遺構　GOBCB45を中心に検出された。北側を一部土坑14に切られ、建物址20を切っている。3.1×2.7mの丸味を帯びた不整長方形の平面形を呈する。壁は浅く10～5㎝を測る。底は中央部でやや凹み、全面黄色砂土まで掘られるが、床面らしい堅い部分はみられなかった。遺構の性格等は不明である。

遺物　底に密着してほぼ完形の土師器の小形甕が出土した。他に、土師器鉢、鉄滓がある。完形の甕から古墳時代後期後半に位置づけられる。（山下誠一）

小竪穴3（第225図）

遺構　GOBCL42に検出した。建物址22を切っている。3.8×1.7mの隅丸長方形の竪穴で深さは検出面からほぼ30㎝を測る。壁は緩く傾斜する所と垂直に近い所があり、底部は凹凸が著しい。北隅の覆土上面から建物址22の柱穴にかけてたたき状に堅く、建物址より新しいと推測したが、長軸方向が直交すること、建物址内でたたき部分を確認できず、付属の施設の可能性もある。

遺物　覆土中から土師器片数点と、須恵器盤片が1点出土した。

切り合い関係から建物址22と同時期の奈良時代前後と推定される。（佐々木嘉和）

5　阿弥陀垣外遺跡

弥生時代中期から古墳時代後期の住居址30軒余をはじめ各種の遺構を検出した。

地形的な遺跡立地及び調査結果による遺構分布状況から、両側に続くＧＯＢ、ＡＲＹと一連のものであり、同一遺跡内の１地点と把えられる。

遺構の分布状況は、前述のＧＯＢのあり方と同様であり、弥生時代中期住居址が散在し、古墳時代後期住居址が比較的密集し、それに住居址以外のいくつかの遺構が伴うというものである。また、ＧＯＢのＡ・Ｃ区で検出された大形の掘立柱建物群はないが、方形の竪穴状遺構内から円面積硯が複数出土し、東接するＡＲＹＡ区掘立柱建物群とＧＯＢＣ区との中間にあたり、ＧＯＢＢ区と同様の位置づけができるとも考えられる。

また、弥生時代後期前半の住居址が１軒のみ検出されているが、ＡＲＹＡ区の１軒と点在し、該期集落の端部的位置づけが可能ともいえる。　（小林正春）

1）　住居址

①　弥生時代中期

17号住居址（第240図）

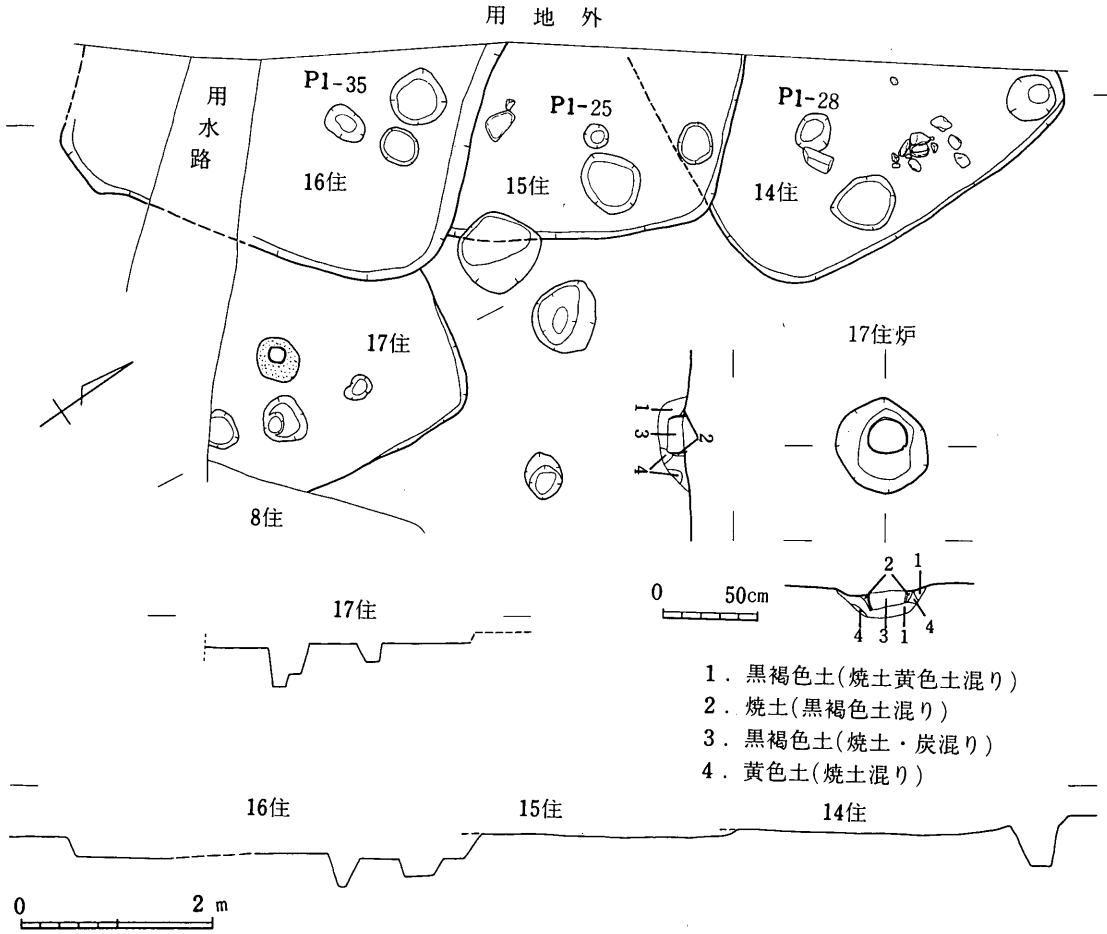
遺構　ＡＭＤＢＷ45を中心に検出した。７号・８号・13号・16号住居址に切られ、用水路にかかり、確認できた範囲はわずかである。隅丸方形の竪穴住居址と考えられ、調査範囲は2.5×2.5mで、壁高は検出面から５cm程とわずかである。床面は壁ぎわが50cm幅で軟かく、そこより内側が堅く良好であった。炉址の位置は東壁側中央付近にあると思われ、土器埋設炉で床面よりやや掘り凹め甕を埋めている。甕の外側が良く焼けており、かなりの使用が推測される。

遺物　北東隅のやや内側で、壺が１個体床面につぶれた状態で出土した。他に、炉の甕と土器の破片が少量ある。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅱ期であろう。　（佐々木嘉和）

18号住居址（第263・264図）

遺構　ＡＭＤＢＰ41を中心に検出された。５号・11号・12号住居址、小竪穴１に切られ、西隅から南西壁は後世の穴や耕作の攪乱により確認できない部分が多い。12号住居址は本住居址の床



第240図　AMD　14号・15号・16号・17号住居址

面まで達するが、5号・11号住居址は本住居址の覆土中に床面があり、漆黒色の覆土が4～2cm残り規模の把握は可能で、5×4.8mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向は、炉址が不明のため推測でN46°Eを示す。壁高は23～13cmを測り、確認した部分はいずれも緩い傾斜を成している。床面は北側がやや高く、西側および東隅で5cm程低くなる。12号住居址寄りに若干軟かい箇所があるが、全体的にきわめて堅い床面である。堅い床面を確認できない箇所が11号住居址範囲の可能性があるが、断定はできない。主柱穴P1・P2の2本を確認し、P2は小竪穴底部より13cm・床面より42cmを測る。P1は25cmでP2に比べて浅く、後世の穴と判断した穴の覆土と差異がなく、主柱穴でない可能性もある。住居址中心部よりやや北寄りに焼土が床面上に認められ、炉址の残骸と考えたが、掘り凹められた痕跡も認められず、確証は得られなかった。

遺物　本住居址は検出面から床面までが浅く、遺物量はあまり多くない。完形品はないが壺・甕・鉢があり、壺と鉢は丹彩された口縁部の破片である。石器には打製石斧・磨製石斧・磨製石鏃が数点ずつ出土している。

遺物から弥生時代中期恒川II期に位置づけられる。　（佐合英治）

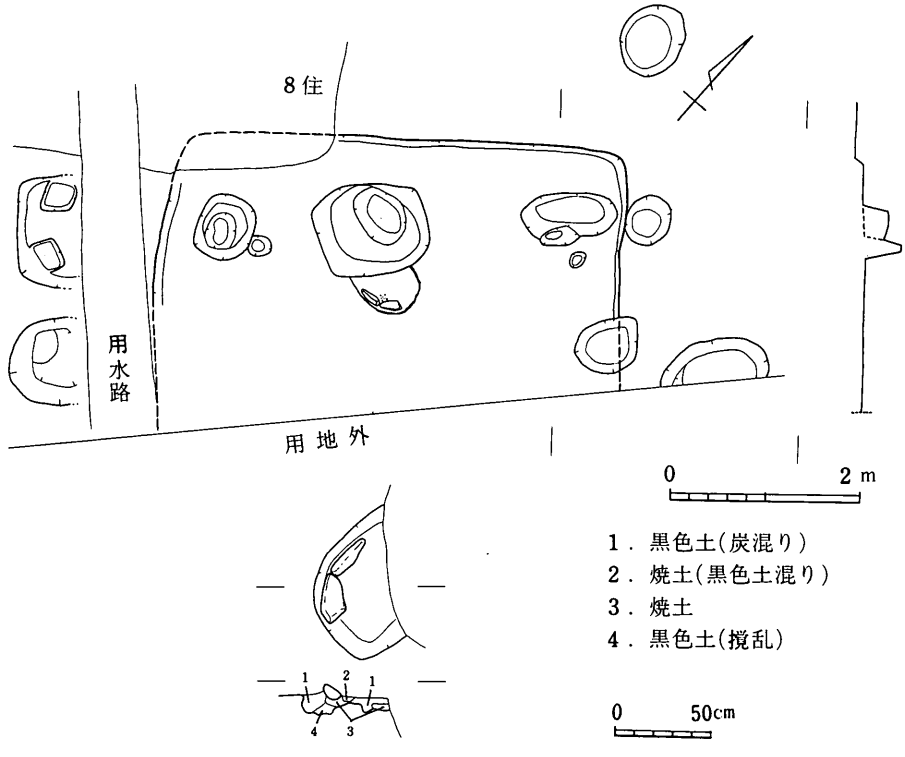
② 弥生時代後期

4号住居址（第241図）

遺構　AMDBT50を中心に検出した。8号住居址・穴に切られ、用地外・用水路にかかり約半分を調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は3×4.9m、主軸方向はN43°Wを示す。壁高は検出面から10cmとわずかである。床面の状態は、炉址の西側は竪くたたき状であるが、東側はやや軟かであった。主柱穴は確認できなかったが、北隅の穴に切られる長楕円形で深さ40cmの穴と西隅の穴が該当する可能性もある。北壁ぎわの3個の穴は床を切っており、須恵器片・鉄滓が入っていた。炉址は北西壁中央から約1.5m内側にある。炉縁石2個を持つ地床炉であるが、焼土は少ない。

遺物　出土量はわずかであり、検出面から床まで浅いので全部が床面あるいは床面直上からの出土である。甕半個体、有孔磨製石庖丁・有肩扇状形石器が出ている。

出土遺物から弥生時代後期恒川IV期であろう。　（佐々木嘉和）

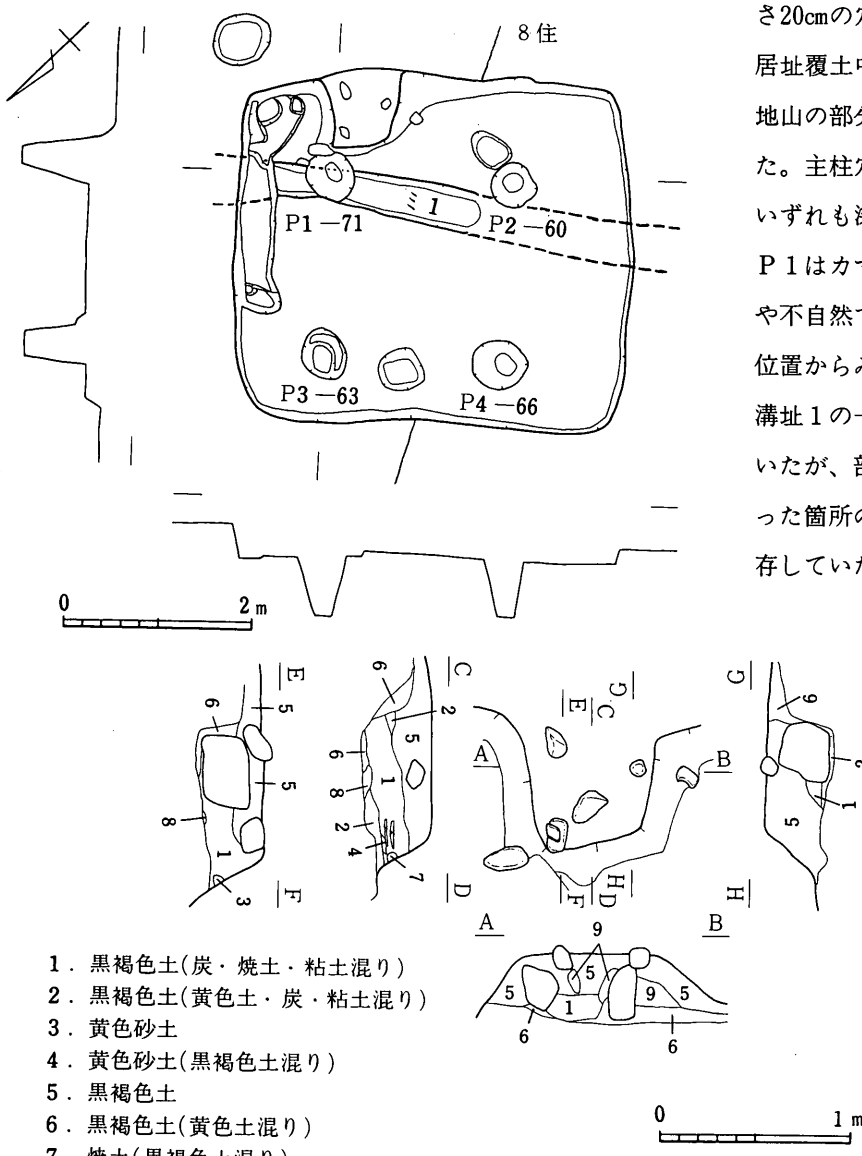


第241図　AMD　4号住居址

③ 古墳時代後期

1号住居址（第242図）

遺構　AMDBV48を中心に検出された。溝址1に切られ、8号住居址を切る。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は3.7×4.2m、主軸方向はN135°Eを示す。壁高は検出面から25cmであり、ほぼ垂直の壁面である。北東壁下に幅広の周溝状掘り込みがあり深さは10cm余りで、両端に床面からの深さ20cmの穴があった。8号住居址覆土中の床は軟かいが、地山の部分は堅く良好であった。主柱穴は4本確認され、いずれも深さ60cmを越える。P1はカマドの直前にありやや不自然であるが、他の柱穴位置からみれば妥当である。溝址1の一部が床面を切っていたが、部分的に特別低くなった箇所のみであり、壁は残存していた。カマドは南東壁



1．黒褐色土(炭・焼土・粘土混り)
2．黒褐色土(黄色土・炭・粘土混り)
3．黄色砂土
4．黄色砂土(黒褐色土混り)
5．黒褐色土
6．黒褐色土(黄色土混り)
7．焼土(黒褐色土混り)
8．焼土
9．黄色粘土(黒褐色土混り)

第242図　AMD　1号住居址、溝址1

東隅寄りにあり、石芯粘土カマドである。残存状態は悪いが両袖の石は残っており、比較的大きな石を使っている。

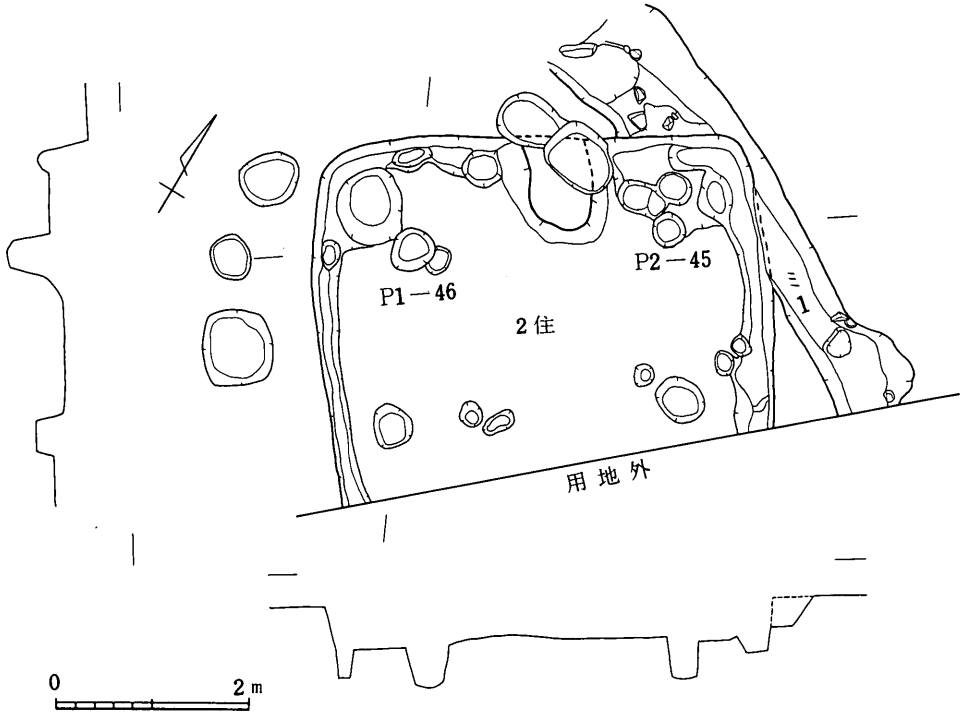
遺物　出土量は多い。住居址全体の覆土中から出ている。Ｐ２と南東壁の中間床面から小形甕の完形品が出土した。土師器甕・甑・坩・坏・高坏、須恵器甕・蓋、鉄滓、臼玉などがある。

切り合い関係や出土遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐々木嘉和）

２号住居址（第243・244図）

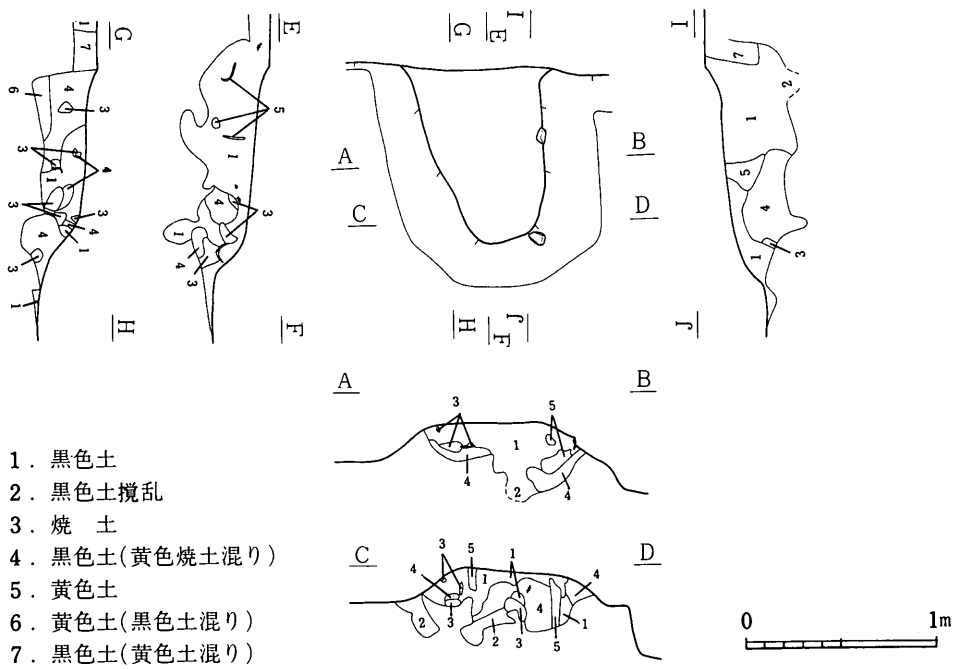
遺構　ＡＭＤＢＷ52を中心に検出した。溝址１に切られる。南東側が用地外にかかって約⅓調査できなかった。隅丸方形竪穴住居址で、調査範囲は3.5×4.7m、主軸方向はＮ42°Ｗを示す。壁高は検出面から30cmあり、ほぼ垂直である。周溝は幅20～15cm・深さ15～８cmで、調査範囲内全体で確認された。床面は凹凸があり壁ぎわは軟かいが比較的良好で、カマド前面はきわめて堅かった。主柱穴はカマド側の２本を確認し、深さは40cm余を測る。覆土上部に石が２・３個入っており、柱のおさえとした可能性がある。カマド右側、Ｐ２と壁の間の穴から遺物の出土があった。カマドは穴に切られ残存状態は良くない。北西壁中央に位置し、地山を掘り残したカマドと思われる。

遺物　出土量は多い。カマド周辺の床面とそのやや上層からの出土が主体で、ほぼ完形の土師器小形甕・鉢がある。他に、土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器𤭯・蓋片が出ている。



第243図　AMD　２号住居址、溝址１

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）



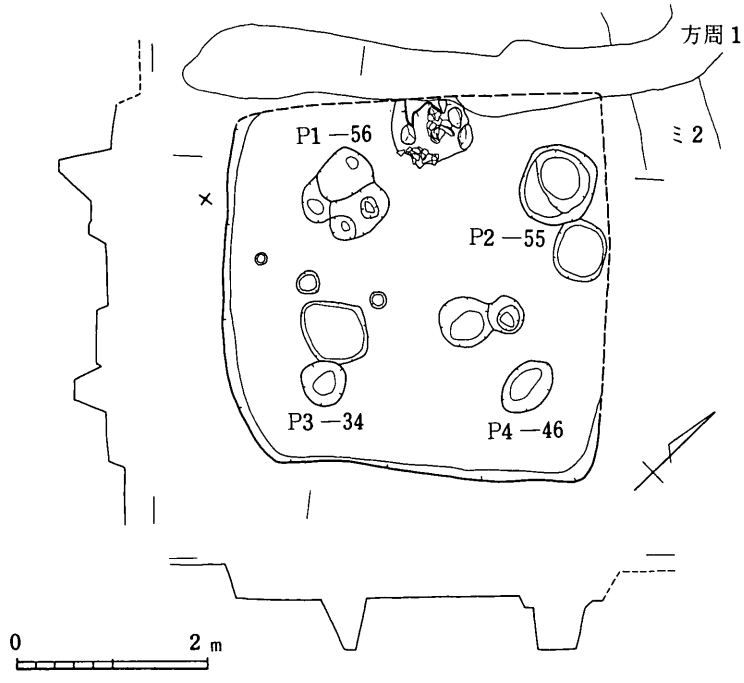
第244図　AMD　2号住居址カマド

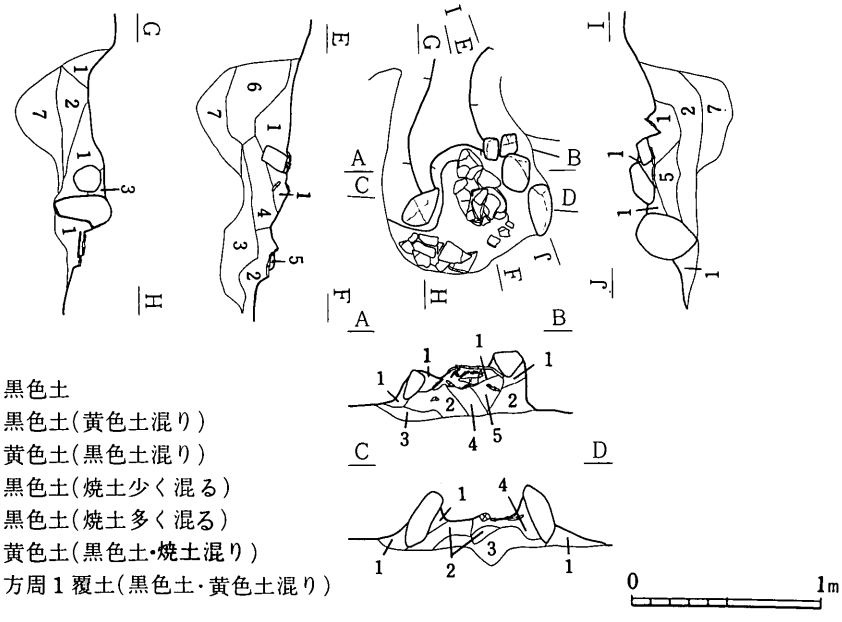
3号住居址（第245図）

遺構　AMDBY48を中心に検出した。10号住居址・方形周溝墓1を切っている。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は3.8×4m、主軸方向はN43.5°Wを示す。壁は検出面の地山（黄色砂土）が傾斜しており、30～0cmと高低差がある。残存部の壁面はほぼ垂直である。床面の状態は場所によって差があり、カマド前面が極めて堅く主柱穴の内側は堅く良好で、主柱穴から外側壁寄りは軟らかであった。主柱穴は4本確認し、深さは56～34cmある。P1の覆土上面から周囲に石(30～10cm)が10個余りあり、焼けたものも混入していた。P2覆土上面にも石が2個あり、柱のそばに置いたものであろう。カマドは北西壁中央に位置し、石芯粘土カマドで残存状態は良い方であった。両袖先端の石が大きく、続く石は小さい。支脚は長さ15cmの石を直立したものである。支脚の前に甕など3個体の土師器がつぶれ込んでいた。須恵器瑞のほぼ完形品があるが、2箇所から出土し、口頸部は西壁上の×点にあり、体部は床面ほぼ中央にあった。上屋の壁は竪穴壁より20cm以上離れていたことも推測される。

遺物　出土量は比較的多く、ほぼ完形のものがある。カマドと周辺の床面から土師器甕3個体が出ている。他に、土師器坏、須恵器提瓶・高坏片がある。

出土遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）





第245図　AMD　3号住居址

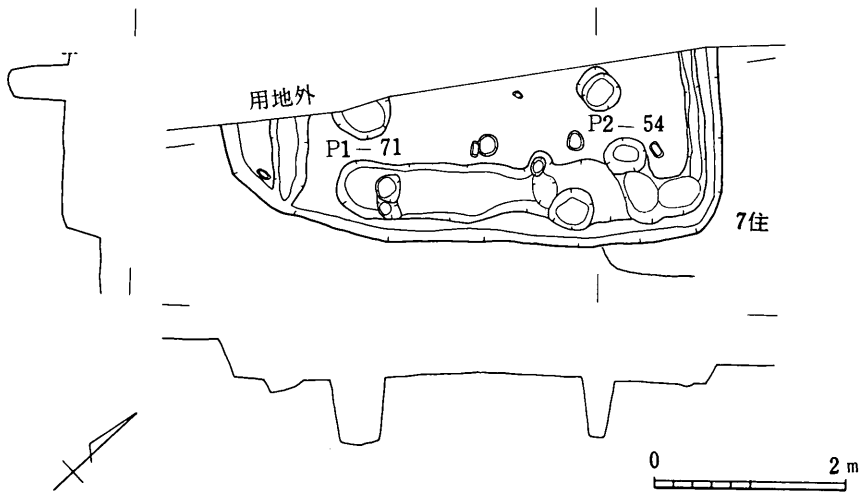
6号住居址（第246図）

遺構　AMDBT41にかかって検出した。7号住居址を切る。用地外にかかり調査範囲は4×1mとわずかであるが、隅丸方形の竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から30cmを測り、若干傾斜のある壁面を成す。壁下やや内側に周溝があり、北東壁側は幅20cm・深さ5cm、南東壁下は幅が広く60cm・深さ5cm、南西壁側は壁から離れ幅40cm・深さ15cmを測る。床面は堅く良好であったが、周溝ぎわは軟かであった。主柱穴は2本を確認した。東隅の穴は入口部施設と思われる。

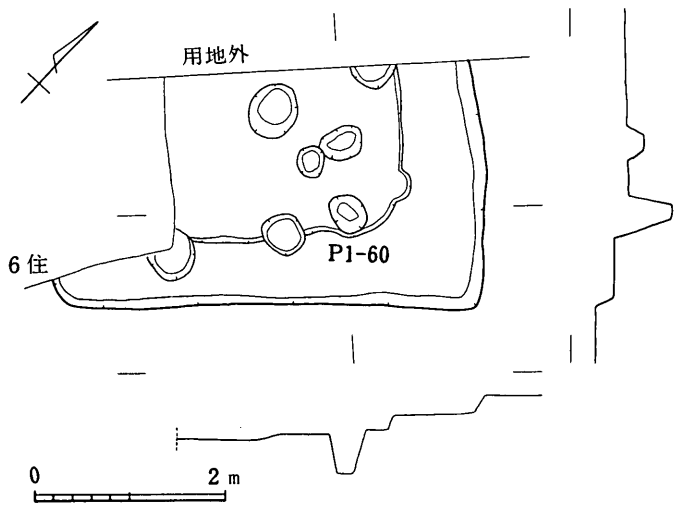
遺物　出土量はわずかである。刀子が床上10cmから出土し、完形で保存状態も良い。土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器蓋坏などの破片が出ている。

出土遺物から古墳時代後期後半であろう。

（佐々木嘉和）



第246図　AMD　6号住居址



第247図　AMD　7号住居址

7号住居址（第247図）

遺構　AMDBV43を中心に検出した。13号住居址を切り、6号住居址に切られる。用地外に約半分かかるが、隅丸方形の竪穴住居址と考えられ、調査範囲は4.5×2.5mである。壁は検出面から20cmあり、若干傾斜のある壁面を成す。床面は二段になっており、壁ぎわが60～50cmの幅で約10cm高い。全面に凹凸が

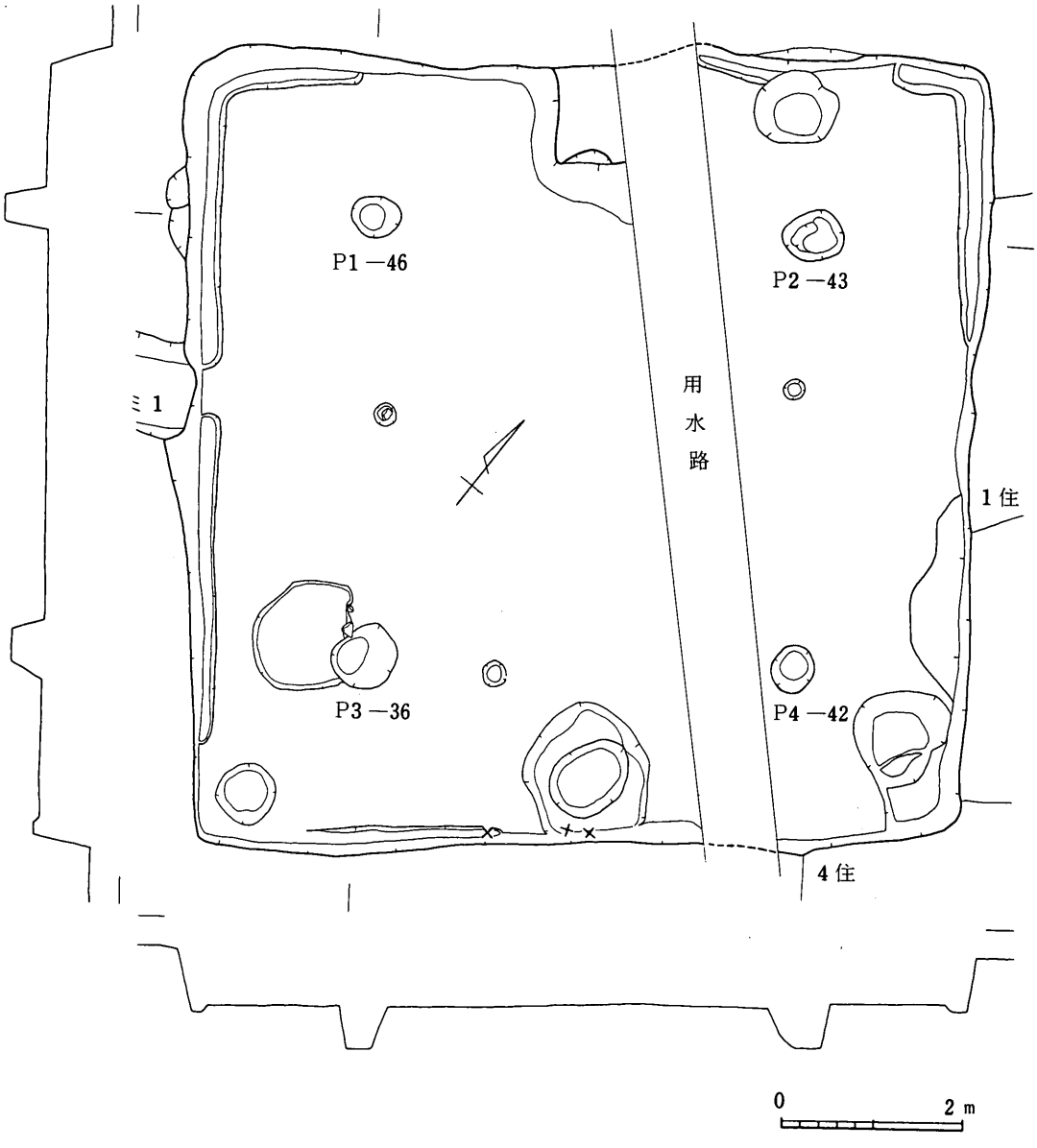
あり一部堅い所もあったが全体に軟かであった。主柱穴は１本確認したのみである。

遺物　土師器片がごくわずか出土している。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

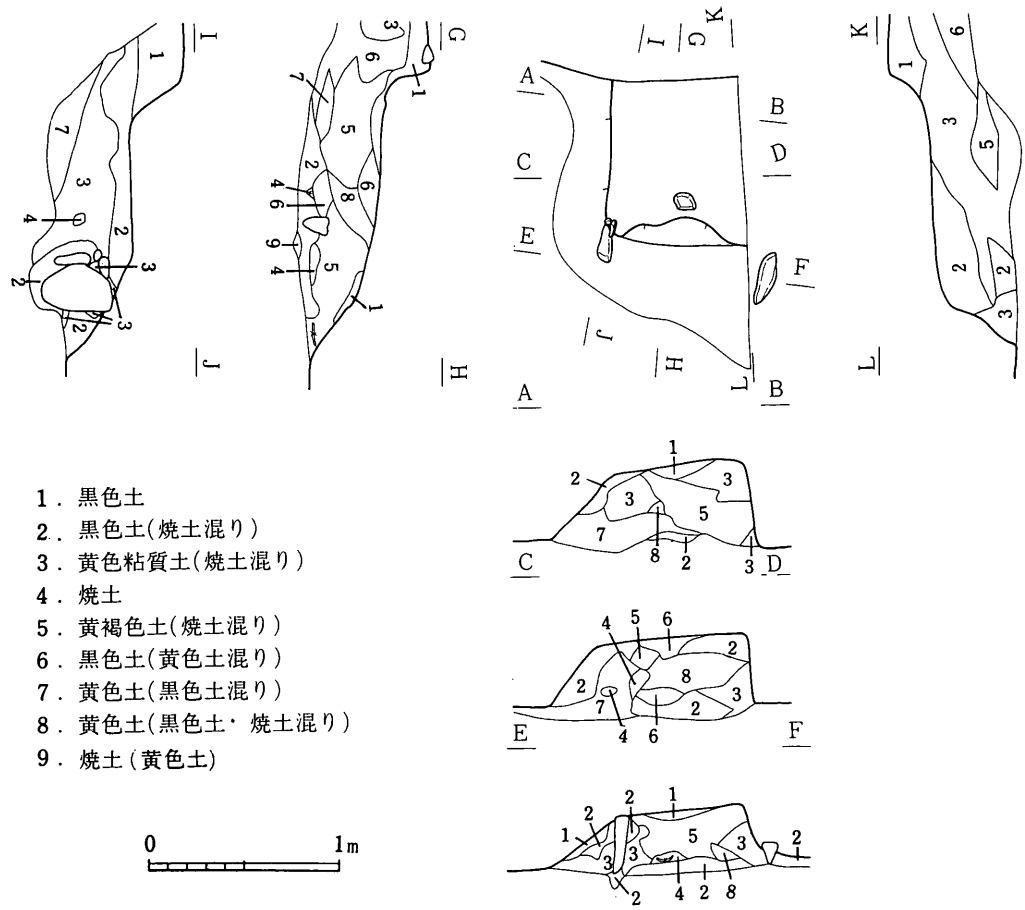
８号住居址（第248・249図）

遺構　ＡＭＤＢＴ46が中心である。４号・13号・17号住居址を切り、１号住居址、溝址１に切ら



第248図　AMD　８号住居址

れる。畑地灌漑の用水路に分断されている。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は8.5×8.5m、主軸方向はN37°Wを示す。覆土中に石が相当量混入していたが床面から20cmと高く、埋没の途中で投入されたものであろう。壁高は検出面から60cmと深い。壁下の一部分に周溝を検出したが10～5cmと比較的浅い。床面は堅く良好であったが、北東隅壁下は主柱穴のあたりまでやや軟かであった。主柱穴は4本確認し、平面は不整円形で直径60～40cmである。主柱穴間の小穴は、梁をささえる支柱穴と思われる。カマド右側の穴に遺物が入っており、ゴミ捨て穴的な施設と考えられる。南東壁中央下に1m四方の穴があり、深さは60cmで、覆土中に遺物がつぶれて入っており、穴を埋め戻したものと思われる。この穴と壁の間の×点から壁に埋めたような状態で完形の小形甕および ほぼ完形の土師器坏が出土し、壁ぎわに器を置く施設があったことも推測される。カマドは用水路に右袖を壊されている。袖先端のみに石を持つ形態である。焼土は比較的少なく、火床面は不明確であった。支脚は長さ13cmの石を直立させている。カマド中に土師器甕1個体がつぶれ込んでいた。



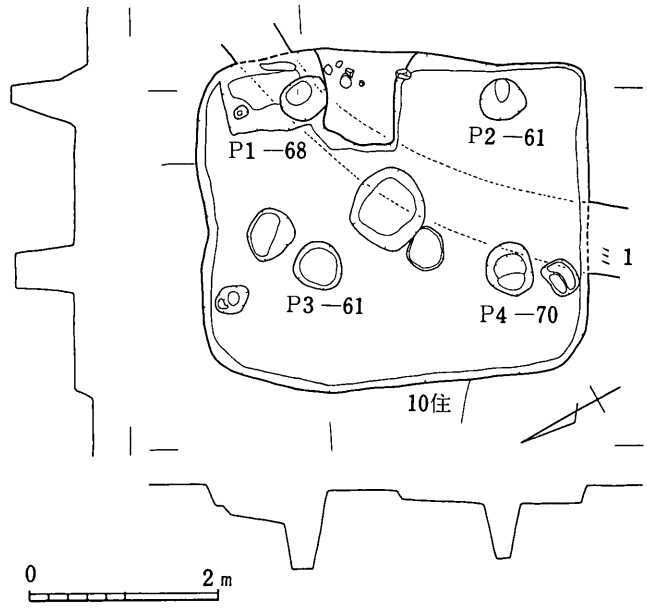
第249図　AMD　8号住居址カマド

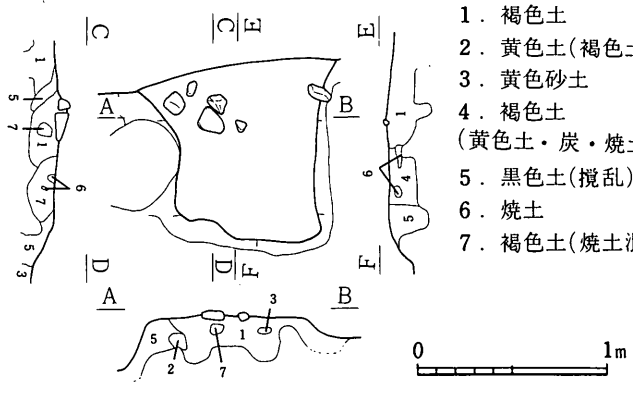
遺物　出土量は多い。ほぼ全体から出ているがカマド周辺と南東壁中央下の穴およびその周辺に特に集中して出土した。床面と床面直上出土がほとんどである。北隅の床面から鎌の完形品が出ており、保存状態も良好である。他に、土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器蓋、臼玉・土玉などがある。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）

9号住居址（第250図）

遺構　AMDBX50を中心に検出した。10号住居址を切っており、溝址1に切られる。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は3.6×4.2m、主軸方向はN128°Eを示す。壁高は検出面から25～20cmとわずかである。床面は全体に軟かであった。主柱穴は4本確認し、平面は不整楕円形で深い。床面とやや上に石が散在しており、P3・P4の覆土上面の石はやや大きく、柱の元に置かれた可能性がある。カマドは南東壁中央よりやや東寄りにあり、溝址1に切られ残存状態は悪い。周囲に焼けた石があり、カマド用材が散乱した様子であり、石芯粘土カマドと思われる。たき口部の焼土は比較的少ない。





1．褐色土
2．黄色土(褐色土混り)
3．黄色砂土
4．褐色土
(黄色土・炭・焼土混り)
5．黒色土(撹乱)
6．焼土
7．褐色土(焼土混り)

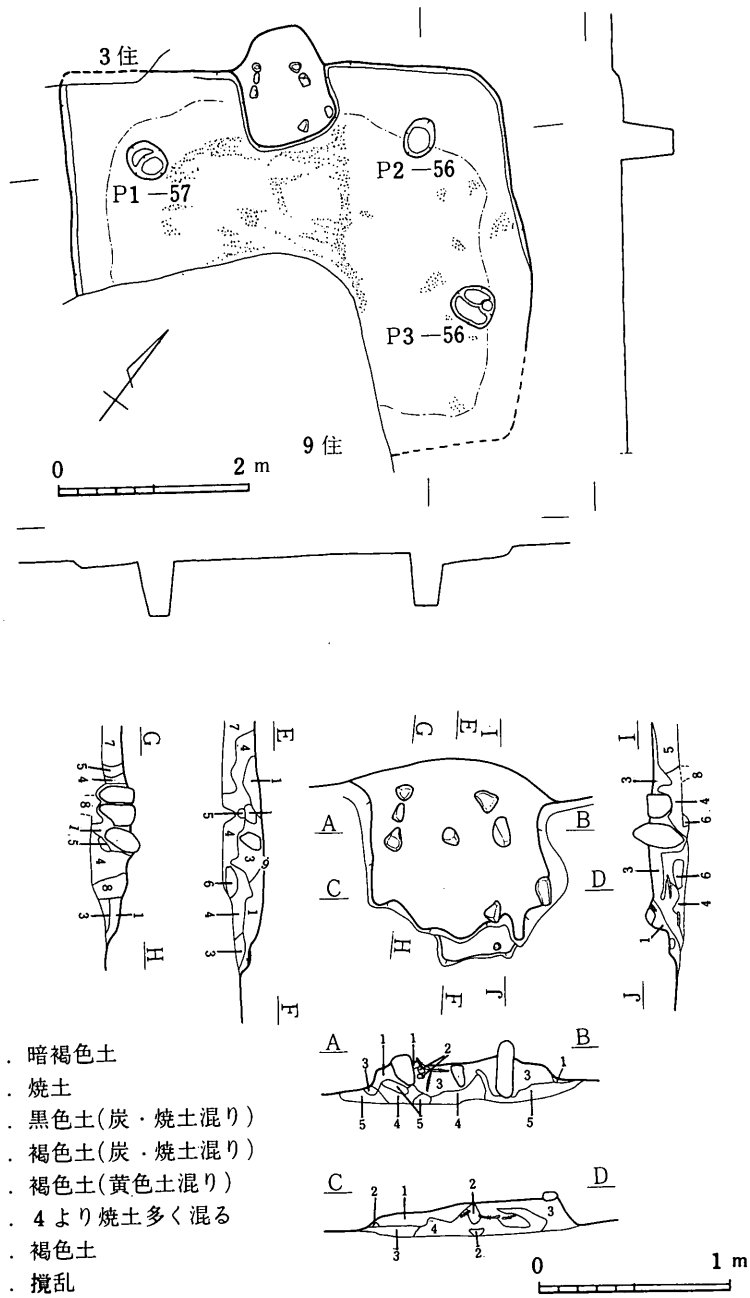
第250図　AMD　9号住居址

遺物　遺物の出土量は少なく、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕の小破片である。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

10号住居址（第251図）

遺構　AMDBY50を中心に検出した。3号・9号住居址に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は4.2×4.7mを測り、主軸方向はN40.5°Wを示す。検出面から3～2cm下に床があり、壁の確認ができない箇所がある。床面は火事にあっているため赤く焼けていた。壁ぎわは50～30cmの幅で軟かいが、その内側は堅く良好であった。主柱穴は3本を確認した。残り1本は9号住居址内にかかり検出できなかった。平面は不整楕円形で長径40cm前後である。床面は焼けているが、炭化物の大きなものはなかった。カマドは北東壁中央にあり、石芯粘土カマドである。荒れてはいたが芯石の残存状態は良く、両袖に比較的大きな石を縦に入れている。支脚は長さ13cmの石を使っており、周囲に土師器甕片があった。



1．暗褐色土
2．焼土
3．黒色土(炭・焼土混り)
4．褐色土(炭・焼土混り)
5．褐色土(黄色土混り)
6．4より焼土多く混る
7．褐色土
8．撹乱

第251図　AMD　10号住居址

遺物　出土量は少ない。床面から石製紡錘車が出土した。線刻が施してあり、曲線を主体にした抽象文様で優品である。他に、土師器甕・坏片が出ている。

出土遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）

11号住居址（第264図）

遺構　5号・12号住居址調査中にＢＱ・ＢＲ43に壁の一部を検出した。12号・18号住居址を切り、5号住居址・溝址1に切られる。重複が著しく、調査時での切り合い関係が的確に判断できず、プラン把握に若干の問題が残った。確認したのは12号住居址はり床を切る北東壁2.9mと床面の一部のみである。壁高は12号住居址はり床面まで7cmで、ほぼ垂直の壁面を成す。確認した床面は、黄色粘質土による堅いたたき状のはり床である。切り合いのため本住居址に伴う施設は不明である。

調査部分が少ないため、本住居址に伴う遺物は細片で量もきわめて少なく、遺物から時期の決定はできないが、切り合い関係から古墳時代後期後半以降奈良時代までが考えられる。

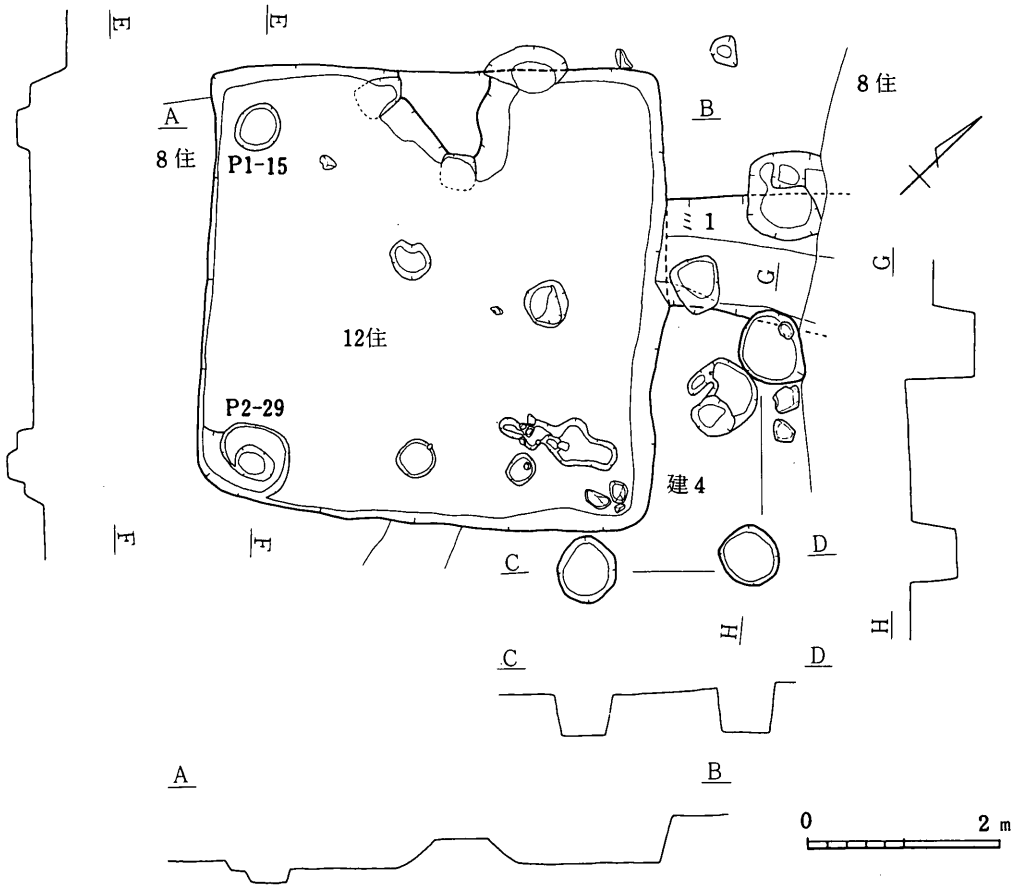
（佐合英治）

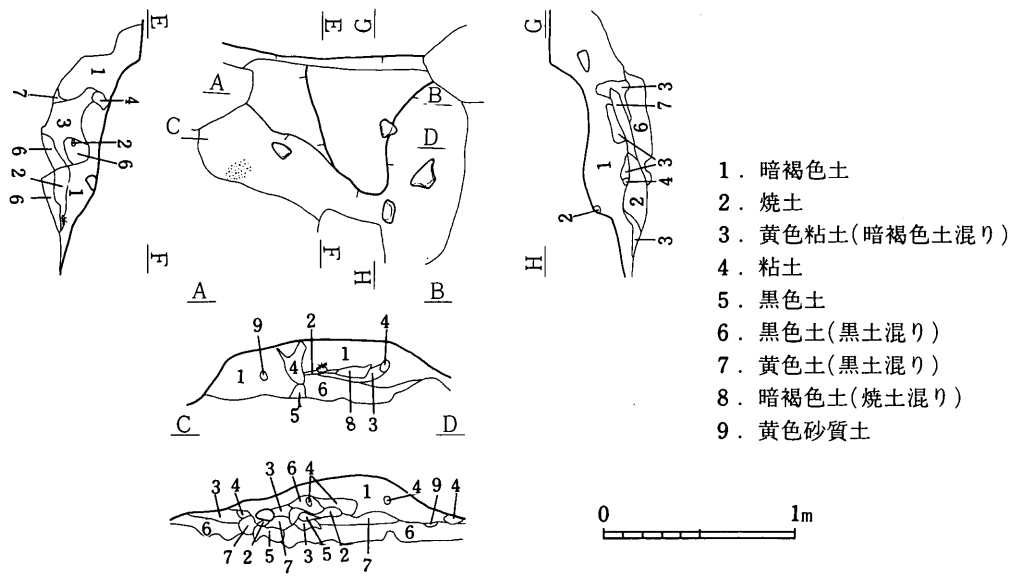
12号住居址（第252図）

遺構　ＡＭＤＢＲ43を中心に検出された。西側半分の覆土上層は5号・11号住居址、溝址1に切られている。切り合いはあるが掘り込みは深く、全体を把握できた。掘り下げを始めてすぐに堅い良好なはり床を東隅部分の住居址全体の¼程に確認した。最終的にこのはり床は本住居址床面より30cm程高い所にあり、12号住居址はり床としたが、別の住居址があった可能性が強い。このはり床を切って11号住居址があり、11号住居址調査後、本住居址下部調査となった。プランは切り合いのため南隅がやや歪むが、4.8×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向はＮ39°Ｗを示す。壁高は52～13cmを測り、いずれもほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、きわめて堅いたたき状を成す。主柱穴は西と南の隅近くの2本を確認したが、Ｐ1は主柱穴とするとやや浅いもので、床面より15cmを測る。Ｐ2は二段構造で29cmを測る。カマドは北西壁のほぼ中央部に位置し、黄色の粘土をブロック状に認める粘土カマドである。当初右袖と考えた下部に厚い焼土があり、北西壁中央よりやや東寄りを中心とし、左袖部分はほとんどを11号住居址に壊されている可能性が強い。

遺物　出土量は少なく、土師器甕・高坏・内面黒色の坏がＰ1とカマド内から出土し、床面密着で土師器高坏の脚部が出土した。

出土遺物から古墳時代後期後半に位置づくと考えられる。　（佐合英治）





1．暗褐色土
2．焼土
3．黄色粘土(暗褐色土混り)
4．粘土
5．黒色土
6．黒色土(黒土混り)
7．黄色土(黒土混り)
8．暗褐色土(焼土混り)
9．黄色砂質土

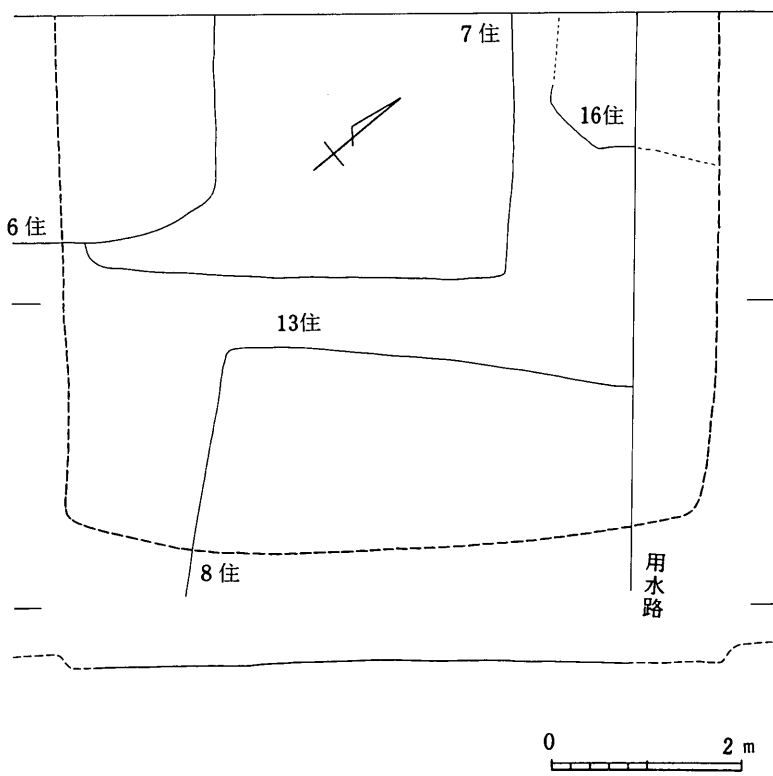
第252図　AMD　12号住居址、建物址4

13号住居址（第253図）

遺構　ＡＭＤＢＵ43を中心に検出した。６号・７号・８号・16号住居址に切られ、用地外・用水路にかかるため調査範囲はわずかである。検出時に黄色砂土（地山）上面がたたき状で、床面の一部を確認したのみである。想定される範囲はたたきの堅い部分を囲んだものである。

遺物　床面にはりついていた土師器坏、須恵器甕の小片と土玉１個である。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）



第253図　AMD　13号住居址

14号住居址（第240図）

遺構　ＡＲＹＡＡ46にかかって検出した。15号住居址を切っている。用地外にかかる隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は3.8×２ｍとわずかである。壁は検出面から８～３㎝とわずかである。床面は比較的堅く良好であった。主柱穴はＰ１を確認したのみであるが、あまり深くない。

遺物　出土量はわずかで、土師器甕・坏片である。東壁下床面に石が10個余まとまっていたが、性格は不明である。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

15号住居址（第240図）

遺構　ＡＭＤＢＹ45を中心に検出した。14号・16号住居址に切られ、用地外にかかりわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は2.5×２ｍである。壁高は検出面から15cm弱である。床面は凹凸がありやや軟かい。主柱穴はＰ１を確認したのみで若干浅いが、ほぼ間違いないものと思われる。

遺物　須恵器甕片数個と鉄滓が少量出土しているだけである。

切り合い関係と遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

16号住居址（第240図）

遺構　ＡＭＤＢＸ44を中心に検出した。13号・15号・17号住居址を切っている。用地外・畑地灌漑用水路にかかり$\frac{1}{3}$調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は4.2×2.2m、壁高は検出面から25cm強である。床面は凹凸があり軟かであった。主柱穴は１本を確認したのみである。用地外壁の土層観察によって覆土中に重複した住居址の壁・床と考えられる部分があり、北東壁から約80cm内側に壁らしい部分も認められた。

遺物　土師器小形甕・坏・鉄滓などわずかの出土である。

切り合い関係と遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

20号住居址（付図２）

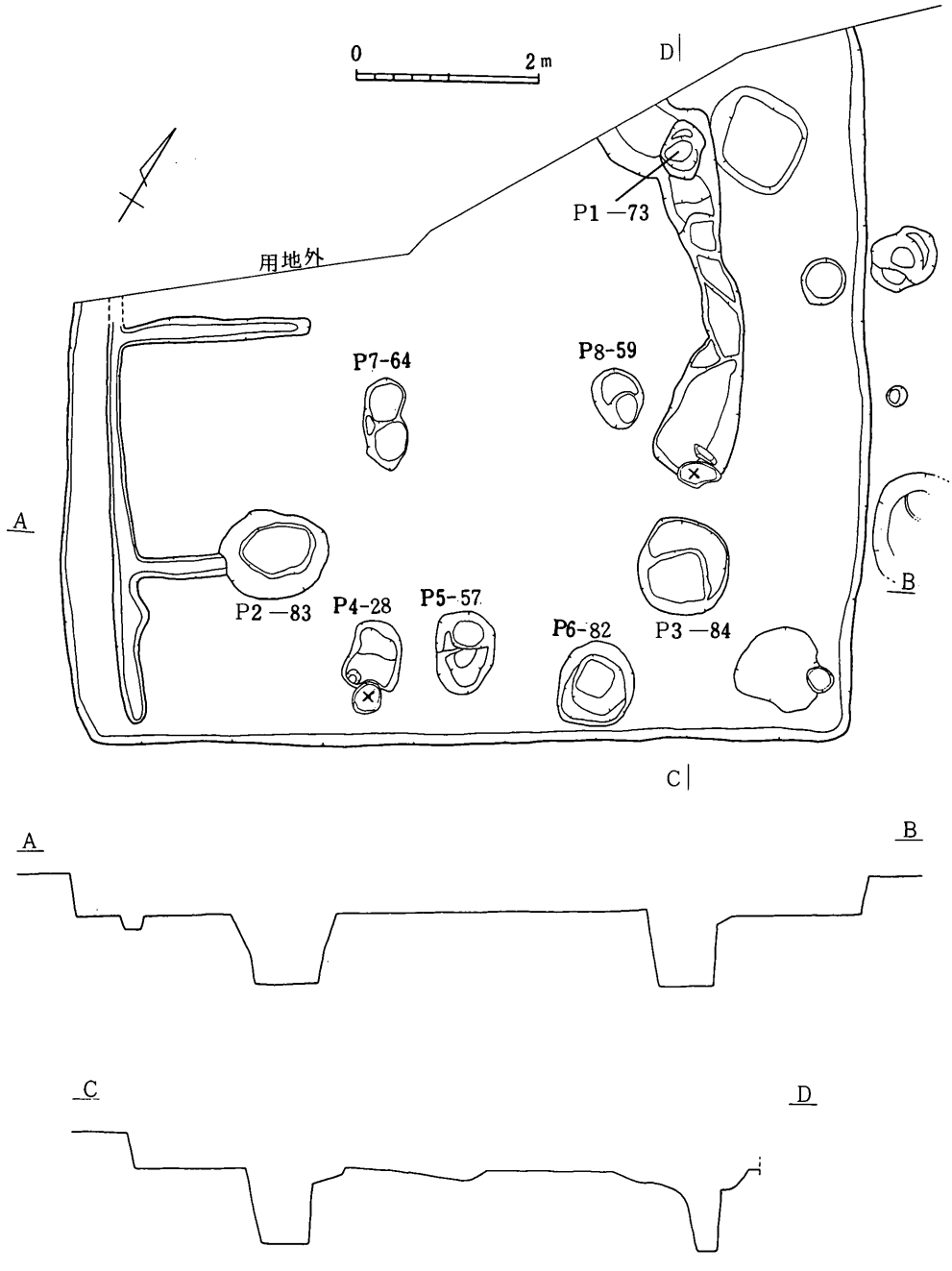
遺構　ＡＭＤＢＭ37付近の黒色砂質土中の調査時に編物石が集中する所があり20号住居址とした。21号住居址覆土中であり壁は確認できなかった。床面は、21号住居址土層断面と用地外壁土層で確認したのみで、面としての把握はできなかった。21号住居址床面から50cm上であった。

遺物　出土範囲は３×３ｍである。鎌が出ており、保存状態は良く優品である。他に、土師器甕片、編物石10個がある。

時代は切り合い関係と遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

21号住居址（第254図）

遺構　ＡＭＤＢＮ36を中心に検出した。20号住居址が覆土を切る。用地外にかかり完掘できなかった。方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は8.8×7.8m、主軸方向は確実でないが北西壁にカ



第254図　AMD　21号住居址

マド位置が想定され、N31°Wを示すと思われる。壁高は検出面から50cmあり、ほぼ垂直の壁面を成す。床面は部分的に軟かい所があるが全体としては堅く良好であった。主柱穴は3本確認し、いずれも平面は不整方形で径1m以上あり深い。P1からP3方向に幅70～30cm・深さ20～10cmの溝状の落ち込みがある。同じく西壁下から約50cm内側に幅40～15cm・深さ20～6cmの周溝状の溝があり、P2方向と住居址中央部方向から直角に同様の溝が検出された。P7・P8は支柱穴と考えられるが、前述の溝も合わせ間仕切り施設の可能性もある。P4・P5は入口部施設の柱穴と思われる。P6は不整方形であるがしっかりとしており、貯蔵穴と考えられる。

遺物　規模に比較して出土量は少ないが、ほとんどが床面直上から出ている。土師器甕・坏・高坏、須恵器蓋、有孔円板・臼玉、編物石・台石などがある。須恵器蓋は完形でつまみがあり、高坏の蓋であろう。台石は3個あり×印のついた石である。

出土遺物から古墳時代後期前半の住居址であろう。　（佐々木嘉和）

22号住居址（第255図）

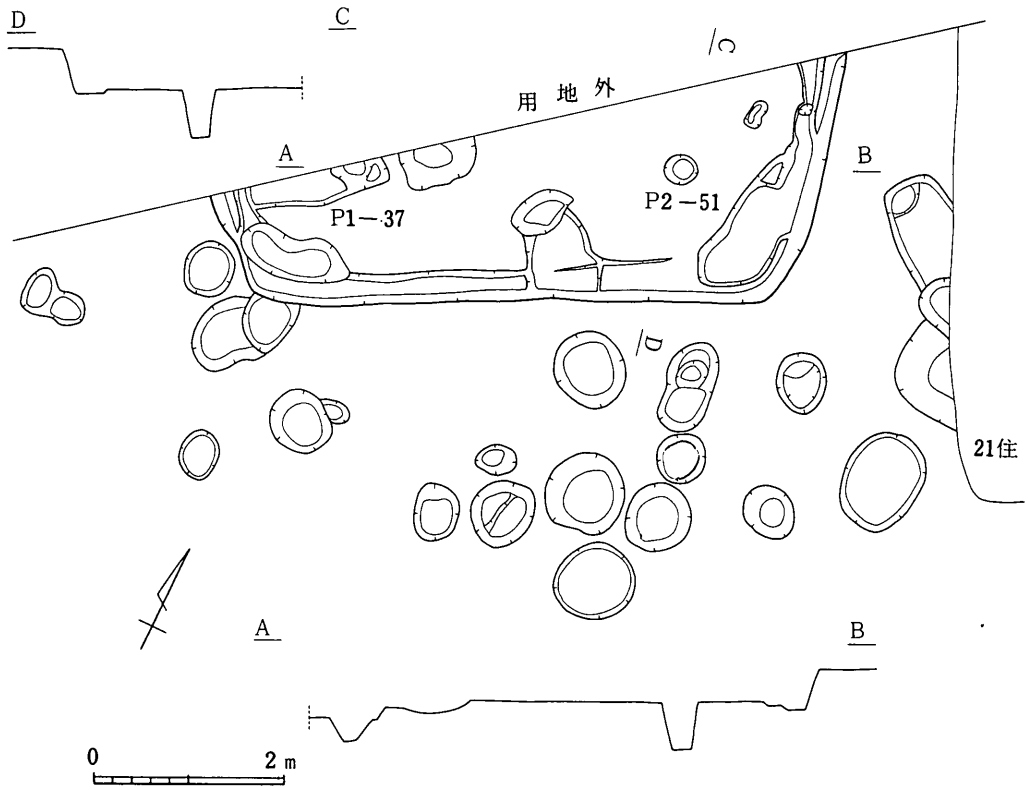
遺構　AMDBK33を中心に検出した。用地外にかかりわずか調査したのみであるが、隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は6×2mである。壁高は検出面から40cm余あり、ほぼ垂直に掘り込まれている。周溝はやや広い所もあるが、幅20cm・深さ10cm前後で調査範囲全体に認められた。床面は堅く良好であった。主柱穴は2本を確認し、平面は不整円形で小形である。

遺物　出土量は少ない。土師器甕、須恵器甕・坏、フイゴの羽口、鉄滓、編物石がある。

出土遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）

23号住居址（第256図）

遺構　AMDBF37を中心に検出された。東側が用地外にかかり、西側の½弱を調査したのみである。調査範囲で切り合いがないため、比較的良好な状態で検出された。主軸に直交する方向の長さ5.9mを測る竪穴住居址で、主軸方向はN48.5°Wを示す。壁高は50～35cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床は全面黄色砂土まで掘り、その上を10cm程埋め、黄色土をはってたたき状にきわめて堅く、何回かはり直してある様子が観察された。良好な床面を確認できたのはカマドの周辺と主柱穴の内側で、それ以外の壁際は床面が不明瞭なため、最終的には地山まで掘り下げた。この部分にも同一面で床があったが、余り利用されないため住居中心部の床面と差が生じたと考えられる。主柱穴はP1～P6であるが、P1・P2以外ははり床下から検出された。2回の

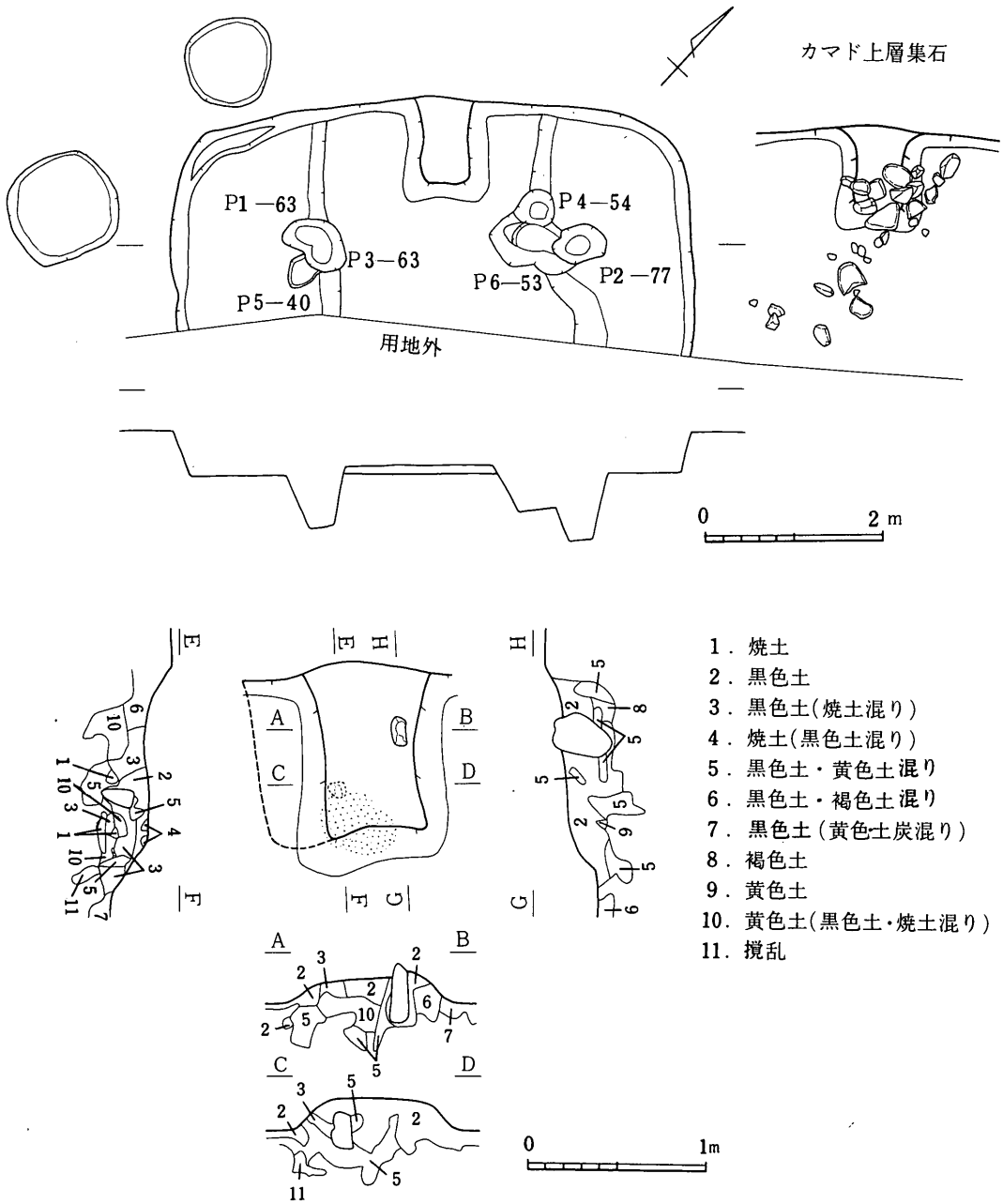


第255図　AMD　22号住居址、Pit群

建て替えを想定でき、新しい順からＰ１・Ｐ２、Ｐ３・Ｐ４、Ｐ５・Ｐ６となる。南西隅では壁が段を持ち、ここも住居址拡張を示している。これらを総合すると、新しい住居址はやや北側に方向を修正して建て直されていると考えられる。カマドは北西壁ほぼ中央部に設けられる石芯粘土カマドである。袖石の右の奥のものが１個と支脚が残る他に、右袖に石が抜かれたと思われる部分が断面から２箇所推定できた。しかし、左袖はほとんど何も確認できなかった。たき口部の焼土は厚く、付近にはかなり多くの土器が落ち込んでいた。以上の状態から考えると、住居址廃棄の際に石を抜き取り破壊していると思われる。カマド上層に40～10cmの石が20個余り集まった集石がみられ、一部焼けた様子もあるが、性格等は不明である。

遺物　覆土中からの出土が多い。土師器甕・内面黒色の坏、須恵器甕・蓋、ほぼ完形の刀子・鎌が出土した。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

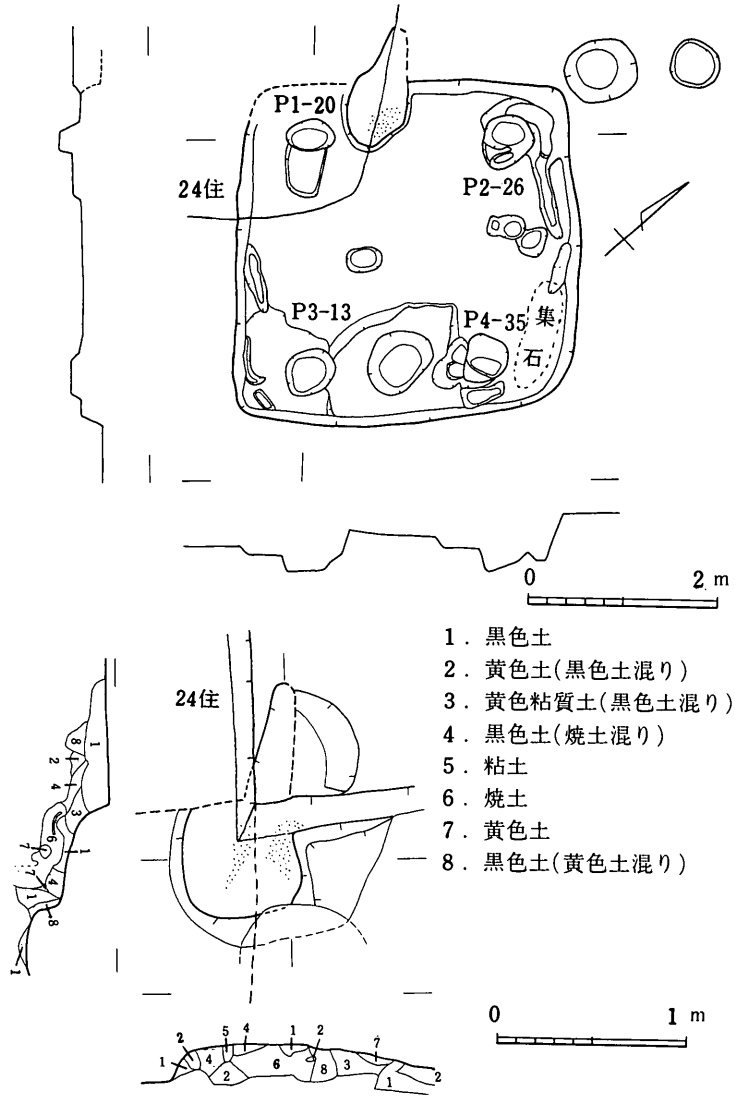


第256図　AMD　23号住居址

25号住居址（第257図）

遺構　AMDBF34を中心に検出された。24号住居址に切られるが、ほぼ全体を調査できた。3.6×3.6mのやや歪みのある小形の隅丸正方形の竪穴住居址で、主軸方向はN49°Wを示す。壁高は

北東41cm・南西20cmを測る。周溝は北西壁下を除き、断続的に認められたが、規則性はなく、方向・形状ともに一定せず、壁から離れている箇所や壁に対し平行でない部分もある。幅は18～8cm・深さ17～2cmを測る。床面はほぼ平坦で、24号住居址に切られる部分も床面までは掘り込みが達しておらず、全体にきわめて堅く良好である。主柱穴は4本確認したが深さは一定せず、比較的浅い。P3・P4の間を壁から1.15mマウンド状に5cm高め、上面にはり床をし、ほぼ中央に75×58cmで深さ24cmの穴を持つ部分があり、入口部施設の可能性が強い。また、P4と接して3個の小形の穴があり、入口部施設の一部か東隅にある集石と関連した穴と考えられ、深さは21～8cmを測る。北東壁の中央内側にある小形の穴も本住居地に伴うが性格等不明で、深さは北東側のものから11・16cmを測る。他に、本住居址に伴う施設として、東隅から北東壁の中央付近までに幅30cm前後の集石がある。覆土の黒色土とは異なる黄色土混り黒色土を壁沿いに10cm程盛り、上面に石を並べたもので、この盛土を取り除くと地山の黄色土が露出し、床面は認められなかった。用いられた石はいずれも長径18cm～4cmの自然石で、いわゆる編物石とは異なり、丸いものが多い。集石中に土師器甕の破片が入り込んで出土し、施設の一部とした可能性もある。また、集石に接して東側半分の覆土中には、集石の石と思われる石が散乱していた。カマドは北西壁のほぼ中央に位置するが、24号住居址・後世



第257図　AMD　25号住居址

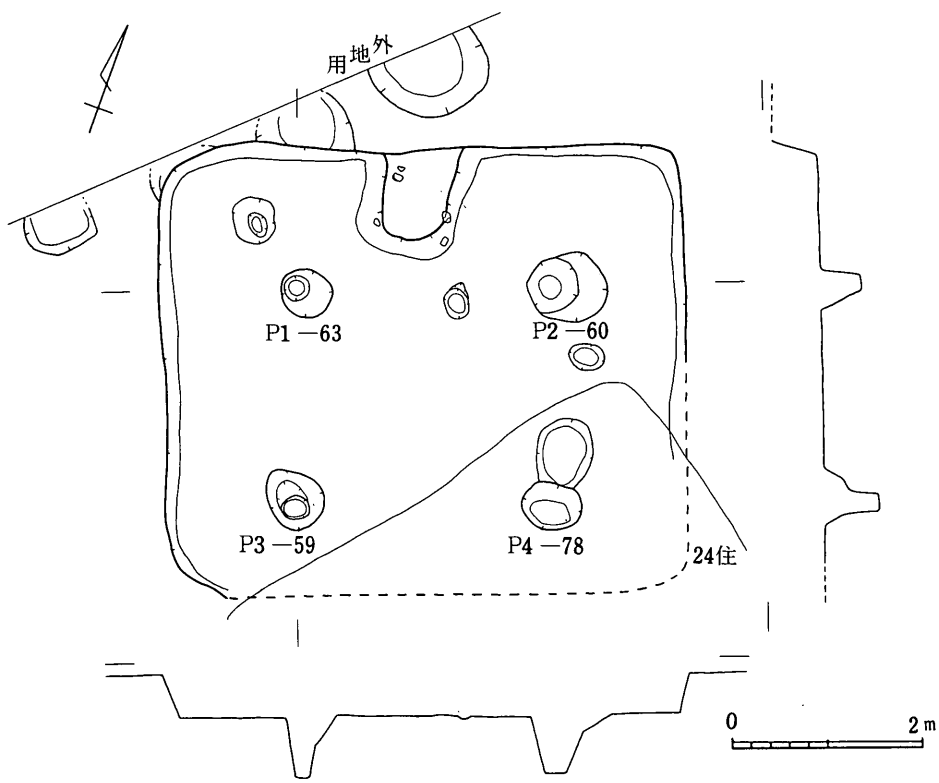
の穴にほとんど壊されており、床面より高さ12cm程の土盛り状に確認したのみで、形態は不明である。焼土は全体に認めたが、厚さ10cmを測る箇所がたき口部と考えられる。煙道は穴に切られていたが下部が確認でき、壁外まで延びていた。

遺物　出土量は少なく、土師器甕・小形甕・内面黒色の坏がある。他に、臼玉が覆土中より出土している。

遺物から古墳時代後期と考えられる。　（佐合英治）

26号住居址（第258・259図）

遺構　AMDBG31を中心に検出した。28号・30号住居址を切り、24号住居址に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は5×5.6m、主軸方向はN21.5°Wを示す。壁高は検出面から45cmあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は堅く良好であった。主柱穴は4本確認し、いずれも平面は不整円形で径65～50cmを測り、掘り方は上部が開いている。P2の覆土上面に石が約10個あり、柱のそばに置いてあったと思われる。カマドは上部を穴に壊されており残存状態は悪い。石が数

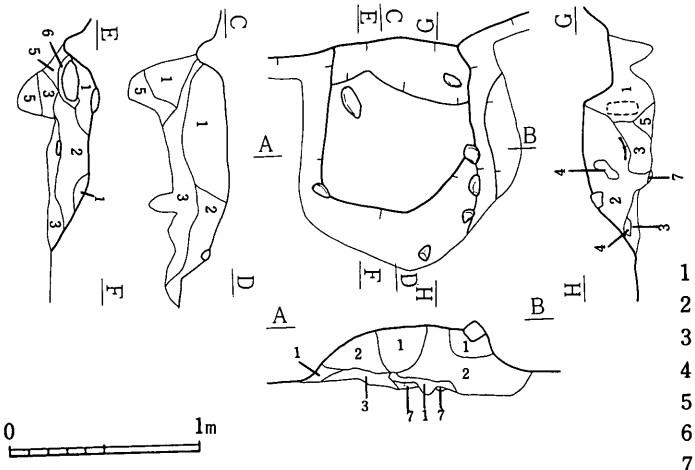


第258図　AMD　26号住居址

個あり、石芯粘土カマドと思われる。火床と思われる焼土の層が残存していた。

遺物　出土量は少ない。P 3の南側で土師器の手づくねが出土している。カマド内及びその周辺からの出土が多い。土師器甕・坏・高坏がある。

出土遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）



第259図　AMD　26号住居址カマド

27号住居址（第260図）

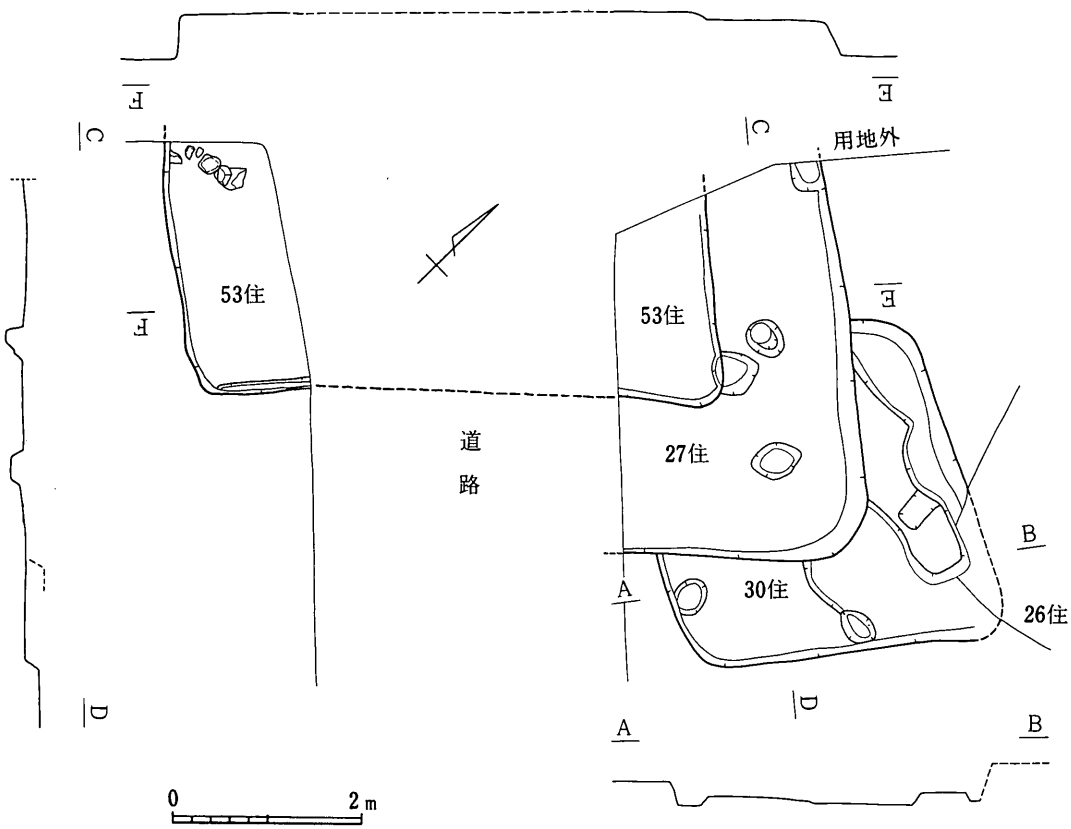
遺構　AMDBE28にかかって検出した。30号住居址を切り、GOB53号住居址に切られる。用地外と市道にかかり約$\frac{1}{4}$調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は4×2.5mである。壁高は検出面から30cmを測り、やや緩い傾斜を成す壁面である。床面は軟かい。床面の穴はいずれも浅く、主柱穴は確認できなかった。

遺物　出土量はわずかである。土師器甕、須恵器壺・蓋・坏の破片がある。

出土遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）

28号住居址（第261図）

遺構　AMDBH32にカマドを検出し、24号・26号住居址に南西壁側を切られ、北隅とカマド周辺は後世の穴に切られている。一辺3m弱の小形の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN42°Wを示す。検出面からの壁高は北西壁16cm・南東壁10cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。カマド西側の北西壁直下より8cm程内側の箇所と南東壁の中央部の壁直下に幅10cm・深さ16～8cmの溝があり、周溝と考えられ、東隅部は壁より50cm程の範囲が12～5cm凹む。床面はほぼ平坦で堅い。

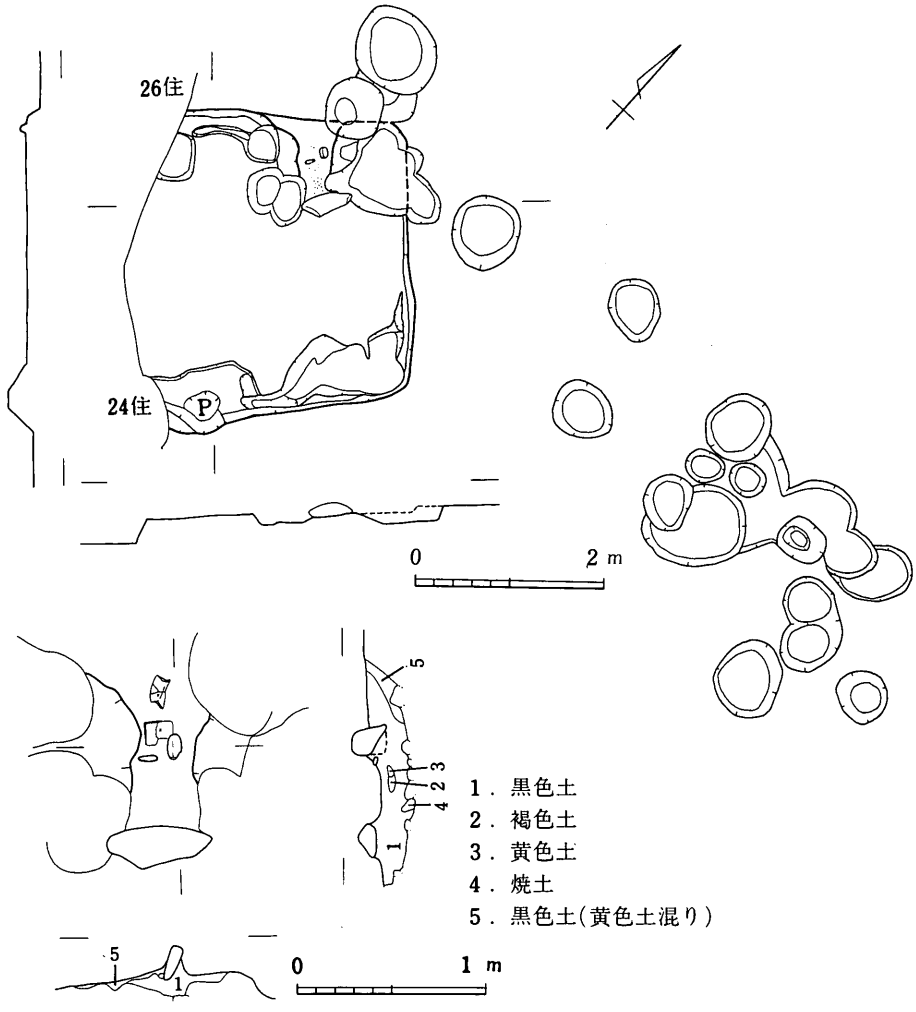


第260図　AMD　27号・30号住居址、GOB53号住居址

主柱穴は住居址の大きさから壁外にあることも考えて検出に努めたが、確認できなかった。切り合いのため本来の位置は不明であるが、調査した南隅に24cmの深さを測る穴Pがあり、穴の周辺が床面より3・4cm凹んでおり、入口部施設の可能性がある。カマドは北西壁の北隅寄りに位置する石芯粘土カマドであるが、周囲を後世の穴に切られ、天井石はかなり動いている。支脚と考えられる偏平な立石を確認したが、周辺の焼土はブロック状であり、たき口部というより袖石周辺の焼土の感があり、カマドの全容を把握することはできなかった。

遺物　住居址の規模の割に出土量は多い。検出面から床面までが浅く、すべて床面遺物と考えられる。土師器甕3個体があり、調査した範囲のほぼ中央に甑と共に出土した。ほかに、小形甕・坏・高坏があり、このうち坏を除いてカマド内からの出土である。

出土遺物から古墳時代後期後半と考えられる。　（佐合英治）



第261図　AMD　28号住居址、Pit群

30号住居址（第260図）

遺構　ＡＭＤＢＥ29を中心に検出された。26・27号住居址に切られ調査面積は少ない。若干ゆがみのある隅丸方形の竪穴住居址で、規模は3.4×3.4ｍ、壁高は検出面から30～８cmを測る。床面には凹凸があり軟かく、10cm前後下がる所がある。

遺物　土師器甕、須恵器蓋などの小片である。

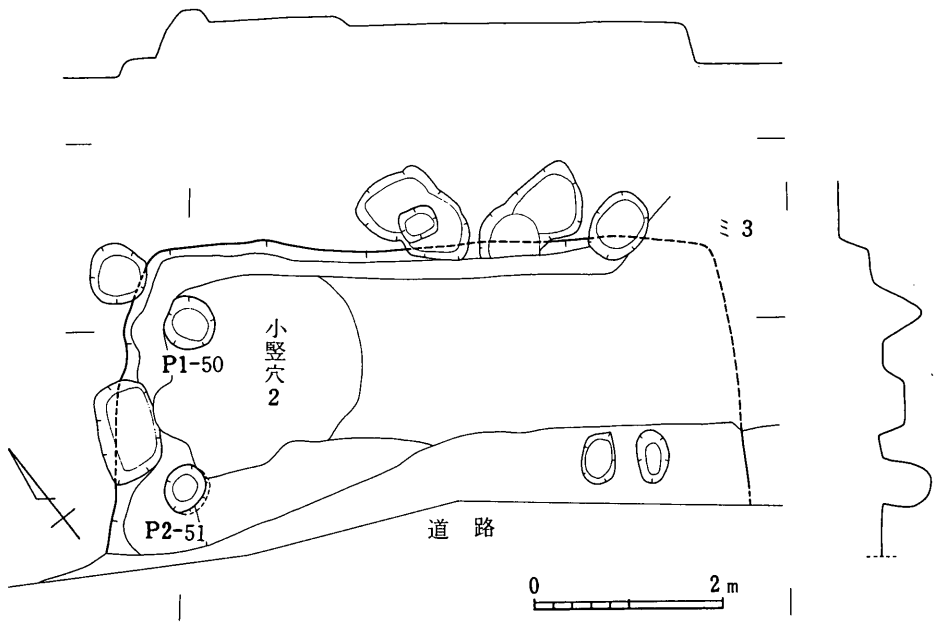
出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

32号住居址（第262図）

遺構　AMDBD30にかかって検出した。溝址３・４、小竪穴２、穴に切られ、道路にかかって約半分を調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は6.5×３mである。壁高は検出面から30cmを測る。床面は溝址３・４に切られわずかしか残存しないが、たたき状で堅く良好である。主柱穴はＰ１が該当する可能性が強い。

遺物　出土量はわずかである。Ｐ２の底部近くから土師器内面黒色坏の完形品が1個出ている。土師器甕・坏・手づくねの破片がある。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）



第262図　AMD　32号住居址

ＧＯＢ53号住居址（第260図）

遺構　GOBとAMDを分ける道路の両側に検出した。AMD27号住居址を切り、用地外・道路にかかってわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は5.6×2.6mであるが中央を道路が通るため、全体としては一部を調査したのみである。壁高はGOB側で検出面から45cmあり、AMD側は用地外壁での確認であるが約50cmある。ほぼ垂直に掘り込まれ、壁下の一部に周溝があったが、狭く浅い。

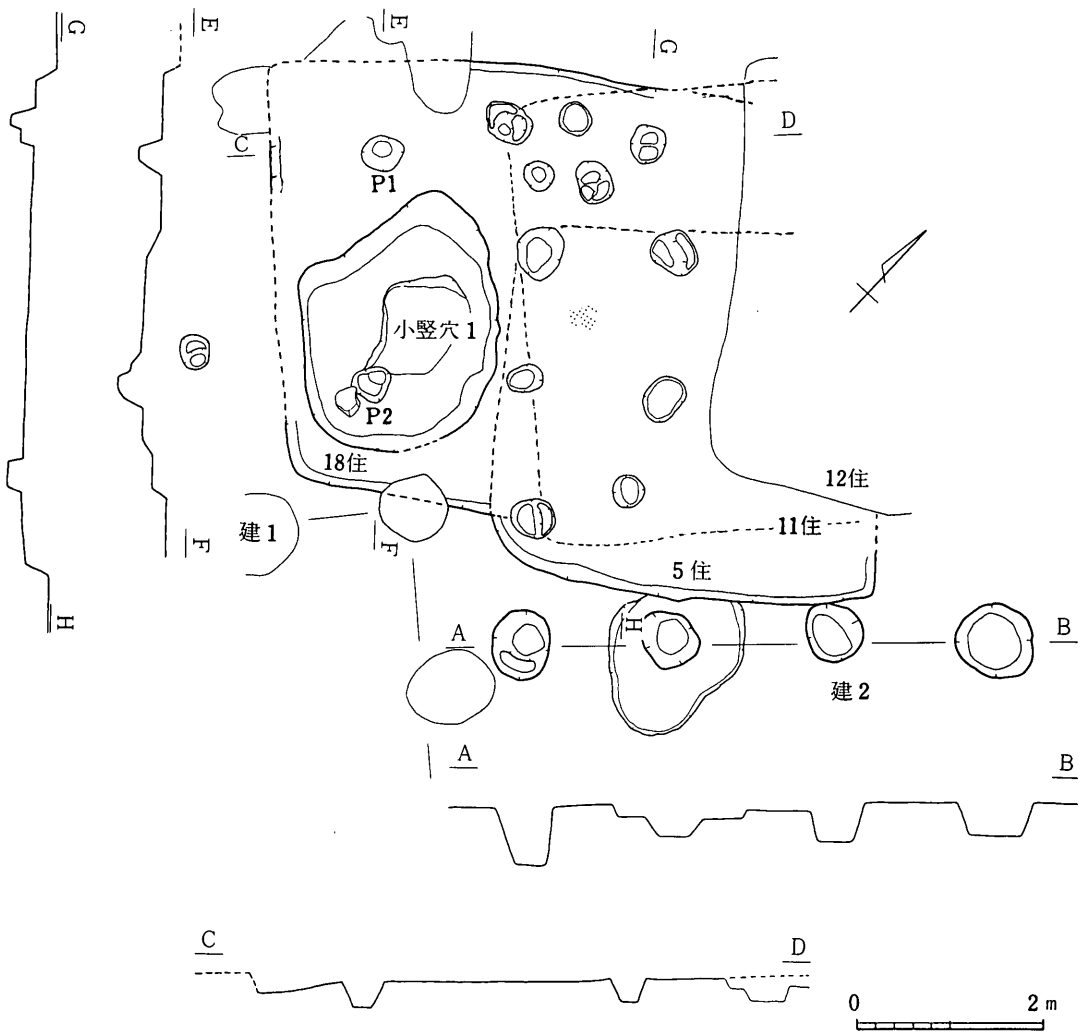
遺物　土師器・須恵器片がわずか出土している。

出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

④ 奈良時代

5号住居址（第263・264図）

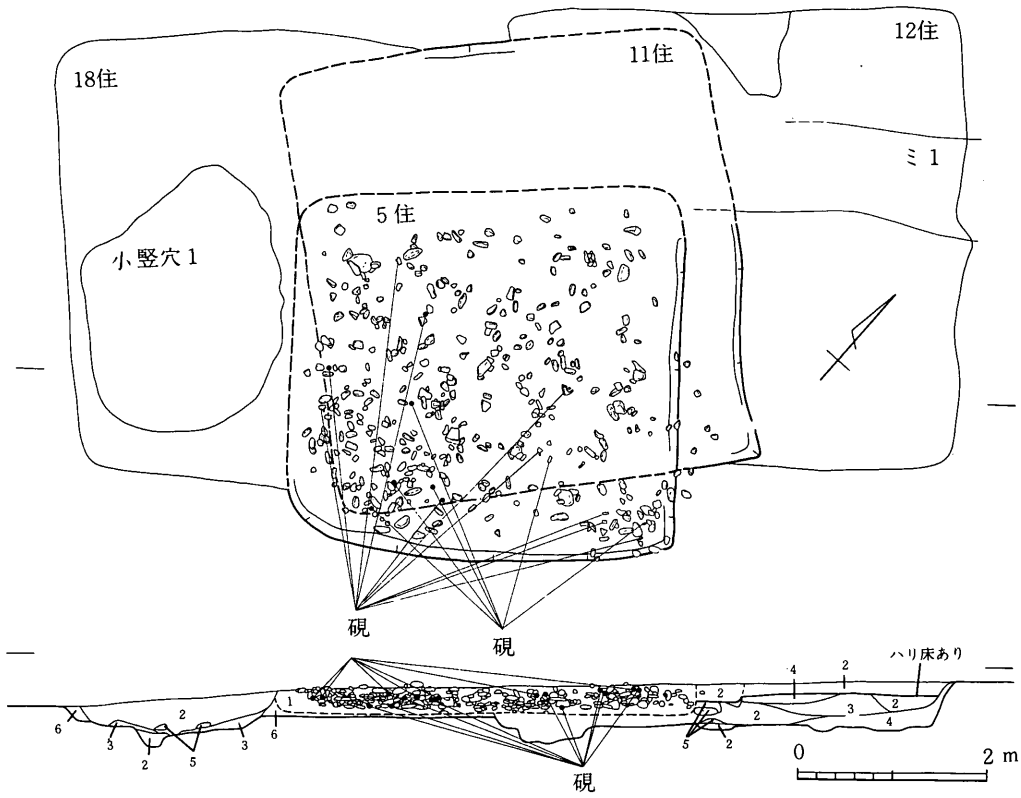
遺構　AMDB区のほぼ中央部BP42周辺に多量の礫の入った掘り込みを検出して住居址としたが、カマド・柱穴等の施設が確認できず、覆土・掘り込み底部（床）の状態から住居址ではない可能性が強い。11号・12号・18号住居址を切り、南東壁を除いて三方の壁は切り合い住居址覆土中にある。北東壁は11号住居址はり床を切ることから位置の把握はしたが、北西壁・南西壁は明確に検出できず、最終的に土層断面から位置を判断した。規模は4.1×3.6mで、長軸の方向はN51°E



第263図　AMD　5号・18号住居址、建物址2、小竪穴1

を示す。覆土は黒色一層で細かな炭が全体に認められ、20～5㎝の棒状礫を多量に包含する。石は上下にあまり重なっておらず、平面的で、覆土堆積のある時期に埋まったものと考えられる。大きさ・形状がほぼそろっており、何らかの目的意識をもって選択し集められたものと考えられるが、意図的に埋めたか否かは不明である。壁高は南東壁30㎝・北東壁11号住居址はり床面まで7～4㎝を測り、比較的緩やかな壁面を成す。明瞭な床面の把握はできず、地山の黄色砂土面まで掘り下げた。全体の形状や礫・遺物の出土状態から特殊な意味を持つ竪穴状の遺構である。

遺物　遺物は上層から下層まで、その多くが礫間から出土した。土師器は細片ばかりで量的にも少ない。須恵器には壺・甕・坏・高台付坏・蓋などがある。特筆すべきものに、完形品ではないが大形の円面硯2個体がある。破片で位置も離れて出土しており、壊れたものを廃棄したと考えられる。出土遺物から奈良時代に位置づけられる。　（佐合英治）



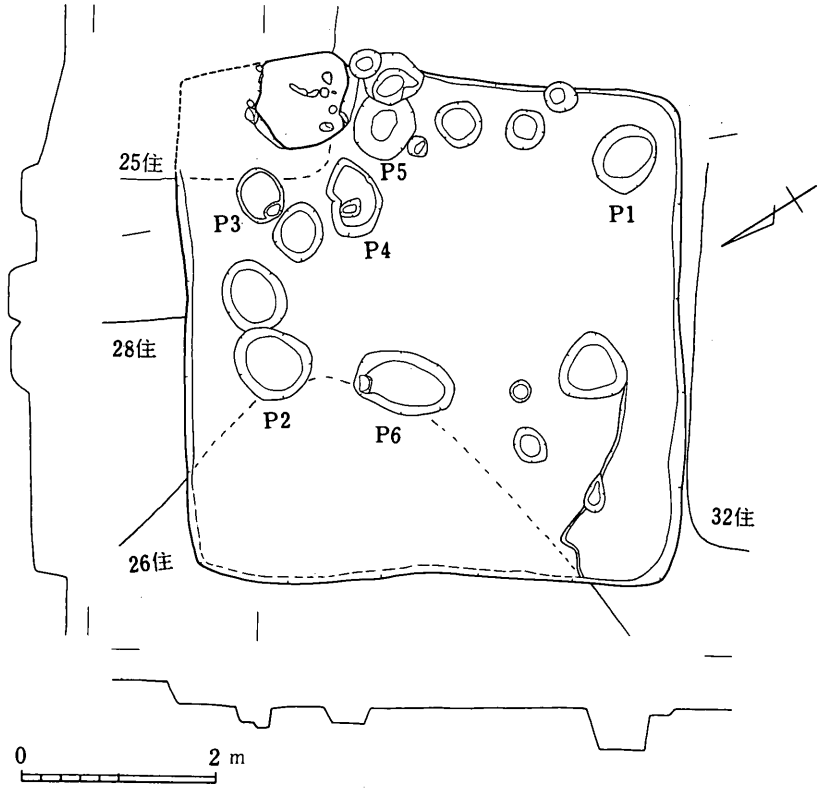
1．黒色土(炭混り)　　4．暗褐色土
2．黒色土　　5．黄色土
3．黒色土(黄色土混り)　　6．漆黒土

第264図　AMD　5号住居址硯・礫出土状態、5号・11号・12号・18号住居址、小竪穴1

⑤ 平安時代

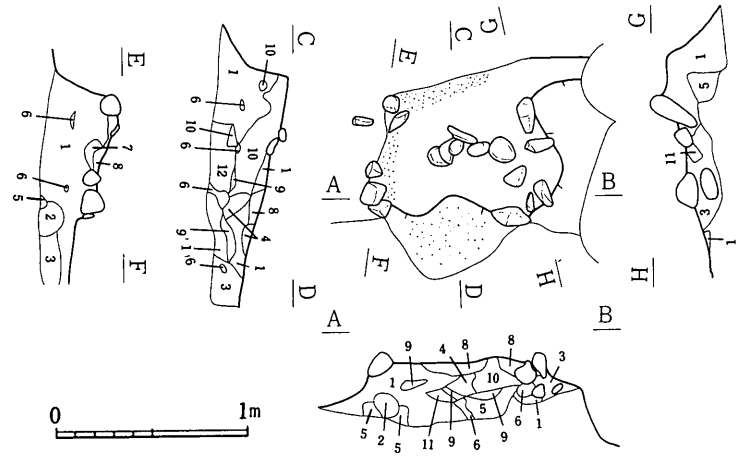
24号住居址（第265・266図）

遺構　AMDBF32を中心に検出された。25号・26号・28号住居址を切り、32号住居址と接している。切り合いはあるが、床面などからほぼ全体が調査でき、規模は5.2×5.3mを測る。主軸方向はN127°Eを示す隅丸方形の竪穴住居址である。遺構を検出できる褐色土層が北から南へ傾斜しており、確認した壁高は26～7cmと開きはあるが、ほぼ垂直な壁面を成す。床面がきわめて軟かいため、地山の黄色砂土により把握した部分もある。また、25号・26号住居址を切る部分は、はり床しているが軟かく、26号住居址を切る部分は全体にわずか凹んでいる。本住居址に伴うと考えられる穴にP1～P5がある。P1は主柱穴と考えられ、深さ44cmを測り、覆土中に長径20cm程の棒状礫が数個認められ、底部には直径40cm・厚さ22cmの四角い平石を置いていた。他に、主柱穴と考えられる穴は確認できなかった。P2は深さ25cmを測り、床面検出のさい、床面と同レベルの穴の覆土中に長さ15cm程の編物石と考えられる棒状の自然石が14個集中して出土し、その使用に関連する施設とも考えられる。P3～P5はそれぞれ深さ17・28・41cmを測り、覆土中に焼土が多量に混入するか焼土の層があり、P4には炭の層も認められた。P6ははり床されており深さ30cmを測り、覆土中に径14～26cmの礫が混入していたが、遺物は出土せず、性格は不明である。他の穴は本住居址に伴うか否か断定できないが、覆土等から後世の穴と考えられる。カマドは南東壁東隅寄りに位置する。自然石を使った石芯粘



第265図　AMD　24号住居址

土カマドであるが、大きな石は使用されていない。焼土はカマド中心部の上面に比較的厚くあり、この層は壁ぎわまで認められた。



1．黒色土
2．黒色土(撹乱)
3．黒色土(黄色土混り)
4．黒色土(黄色土・焼土混り)
5．黄色土(黒色土混り)
6．黄色土
7．黄色粘質土
8．黒色土(焼土混り)
9．焼土
10．焼土(黒色土混り)
11．褐色土
12．黒色土(黄色粘質土)

第266図　AMD　24号住居址カマド

遺物　出土量は比較的少なく、土師器甕・内面黒色の坏、かわらけ系の皿などで、上層の出土品に須恵器高坏がある。他に、刀子・飾り金具・用途不明の鉄製品があり、刀子は26号住居址を切るはり床面に密着して出土した。

出土遺物から平安時代終末に位置づけられる。　（佐合英治）

⑥ 時期不明

19号住居址（第267図）

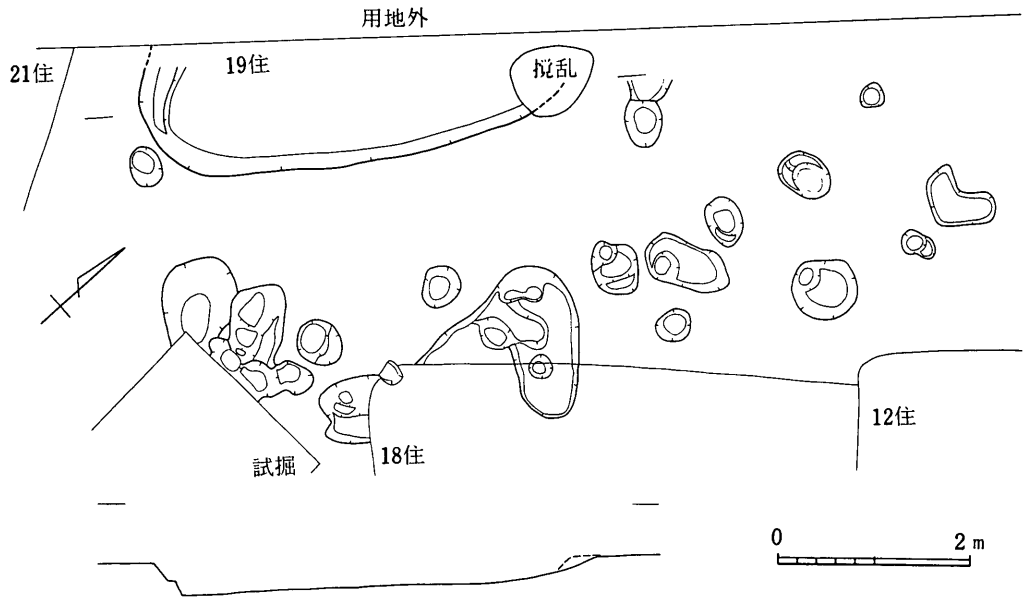
遺構　AMDBQ38にかかって検出した。用地外にほとんど出てしまい、調査範囲は4×1mとわずかで隅丸方形の竪穴住居址と思われるが、断定できない。壁高は検出面から25～10cmで、緩く掘り込まれている。床は軟かく中央に向い緩く傾斜している。

遺物　ごくわずか土器の小破片が出土したのみで、時代の決め手になるものはない。

（佐々木嘉和）

29号住居址（第272図）

遺構　AMDBO46を中心に検出した。用地外にかかり6×1.2mの範囲を調査した。隅丸の竪穴



第267図　AMD　19号住居址、Pit群

住居址であるが、北西壁を確認しただけでプランは不明である。北西壁の方向はN38°Eを示す。壁は検出面から50cmを測り、やや緩く掘り込まれている。床面は軟かく、緩い凹凸がある。北西隅が他の所より10cm高くなっていた。床面に検出した穴のうち住居址に伴うと思われるのはP1のみであるが、深さは8cmと浅い。

遺物　床直上から土師器壺・高坏、須恵器蓋などの破片が出土している。時期を決められるのは須恵器蓋であるが、一点のみであるので断定はできない。（佐々木嘉和）

31号住居址（第268図）

遺構　AMDBL43に検出した。建物址3に切られ、用地外にかかり、調査範囲は2.5×1.3mである。隅丸方形の竪穴であり、深さは検出面から20～6cmを測る。覆土は黒色土が入っており、土色から弥生時代の住居址と推定し調査したが、確認はできなかった。

遺物　出土量はわずかである。土師器・須恵器・石器の小破片で図化可能なものはなかった。（佐々木嘉和）

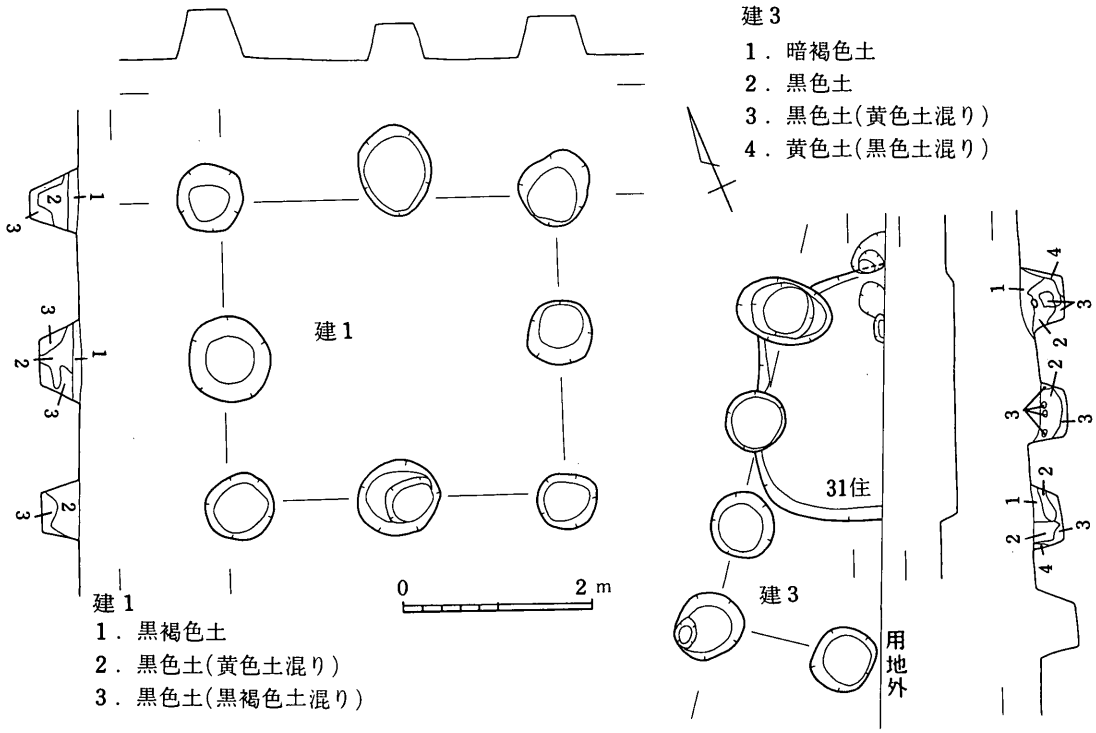
2）建物址

建物址1（第268図）

遺構　AMDBN42を中心に検出した。2×2間の掘立柱建物址で、桁行長さ3.58m・梁行長さ3.22mである。桁行方向はN50°Wを示す。柱掘り方平面は不整円形で比較的そろっている。

遺物　出土量は少ない。縄文時代中期土器片や古墳時代後期土師器・須恵器片が柱穴内より出土したが、時期を決定できるものはない。

出土遺物等から古墳時代後期以降の時期が考えられる。　（佐々木嘉和）



第268図　AMD　31号住居址、建物址1・3

建物址2（第263図）

遺構　AMDBP44にかかって検出した掘立柱建物址である。5号・11号住居址を切っている。最初直列4本の柱穴が確認されたのみであったが5号住居址内の穴との関連から3×3間の建物址と考えられ、桁行柱間寸法は1.66m、梁行柱間寸法は1.36mを測る。桁行方向はN48°Eを示す。柱掘り方平面は不整円形で直径79～60cmあり、深さは切り合いのないもので約40cmを測る。

遺物　ごくわずか土師器片が出土している。

時代は切り合い関係から奈良時代以降と思われるが、断定はできない。　（佐々木嘉和）

建物址3（第268図）

遺構　AMDBL43にかかって検出した掘立柱建物址である。31号住居址を切り用地外にかかり、3×1間を調査した。桁行・梁行方向は確認部分が少なく断定できないが、確認延長の長い方を桁行とした。桁行柱間寸法は1.16m、梁行柱間寸法は1.48m、桁行方向はN46.5°Eを示す。柱掘り方平面は不整円形で直径80cm前後である。深さは検出面から40～30cmを測る。

遺物　土師器片がわずか出土している。

31号住居址との切り合い関係から弥生時代以降と思われる。　（佐々木嘉和）

建物址4（第252図）

遺構　AMDBR45にかかって検出した掘立柱建物址である。住居址と切り合う所には検出できなかった。1×1間を確認し、柱間寸法は2.25mと1.88mである。柱掘り方平面は不整円形で、直径70cm余りである。底部レベルはほぼそろっている。

遺物　ごくわずかの出土で土師器片などである。

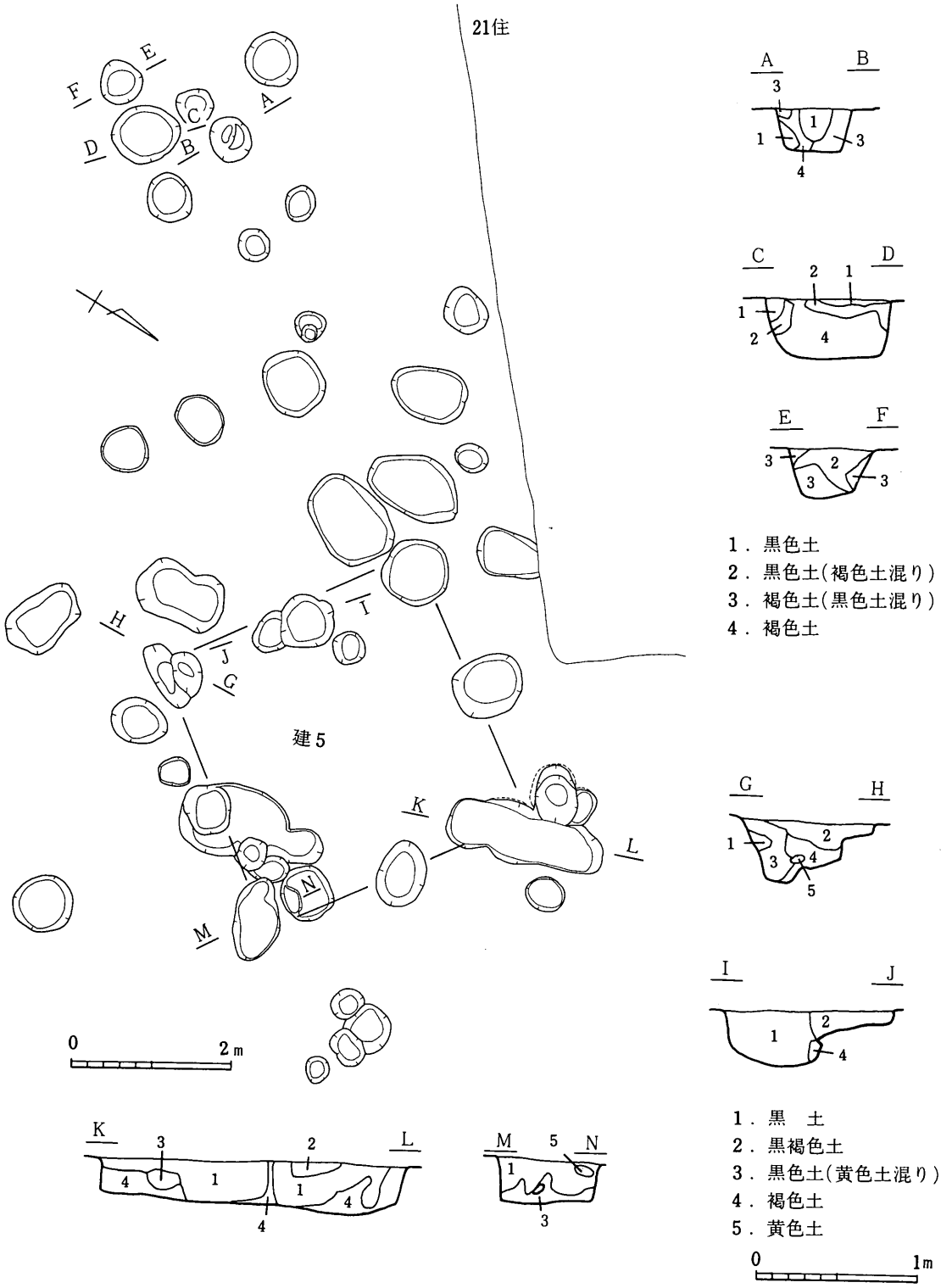
時代は決め手とするものがなく不明である。　（佐々木嘉和）

建物址5（第269図）

遺構　AMDBL40が中心の掘立柱建物址である。規模は2×2間で、桁行長さ3.52m・梁行長さ3.38mである。調査時には複数の穴が重複し、それぞれの穴を個々に調査し、その後に建物址にした。柱掘り方平面は他と重複するため不整楕円形でそろっていない。深さは検出面から約30cmである。

遺物　土器小破片がごくわずか出ている。　（佐々木嘉和）

時代の決め手になるものはない。



第269図　AMD　建物址5、Pit群

3）溝址・方形周溝墓

溝址1（第242・243図・付図2）

遺構　バイパス用地と同一方向にあった溝址である。重機で耕土をはずしたところ、暗褐色土に黄色砂土の入る溝址を検出した。確認した長さ65m・幅50cm・深さ30cmである。覆土は黄色砂土の単一層で石（30～10cm）が入る。用地を縦断し東へ曲がる。AMD東半分では1号・2号・8号・9号・12号住居址を切っている。1号・8号住居址では、黄色砂土の下部に暗褐色土の入った箇所があり、幅1.2m位の溝が埋まりつつある時に黄色砂土が入ったらしい。AMDの台地全体の耕土下に黄色砂土層が認められ、江戸時代後期の大洪水（未満水）の伝承があり、溝址1の覆土も台地上の砂と全く同一であり、この伝承を裏づけるものと思われる。

遺物　ごくわずかで土師器坏・高坏、須恵器高坏、灰釉陶器片などである。

時代は土層からみて江戸時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

溝址2（第270図）

遺構　ARYAB47にかかって検出した溝址である。調査地区設定の関係上ARYのグリットになっている。方形周溝墓1を切っている。幅80～40cm・深さ20～10cmの溝を長さ4.5m確認した。黄色砂土（地山）を掘り込んだ部分だけ確認できた。方向はN110°Eを示す。底部高低差は20cmで覆土に砂が混っており、水の流れていた痕跡がある。

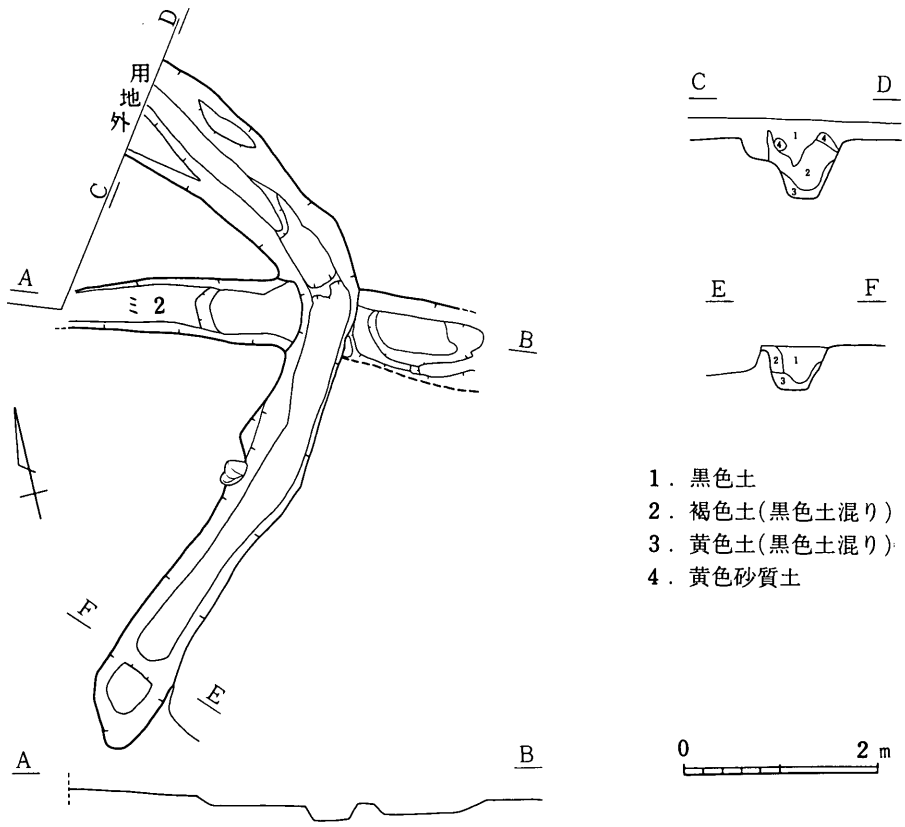
遺物　出土量はごくわずかで土師器甑片などが出ている。

時代は決め手になる遺物がなく不明である。　（佐々木嘉和）

溝址3（第271図）

遺構　AMDBA～BEの30～34に検出した。32号住居址・溝址4・小竪穴2を切っている。確認した規模は、長さ8m・幅1.2～1m・深さ検出面から30cmであり、方向はN45°Wを示す。掘り方の断面は逆台形で壁は比較的緩い傾斜を成し、底は平均に平らであった。覆土の状態から水の流れていた様子は認められない。自然地形で北西が高くなっているが、溝址の底部は逆に北西が5cm前後低くなっている。

遺物　遺物の出土は東南の用地外壁ぎわから比較的多いが、全体的には少量である。土師器甕・坏・高坏、須恵器蓋・坏などが出ている。



第270図　AMD　方形周溝墓1、溝址2

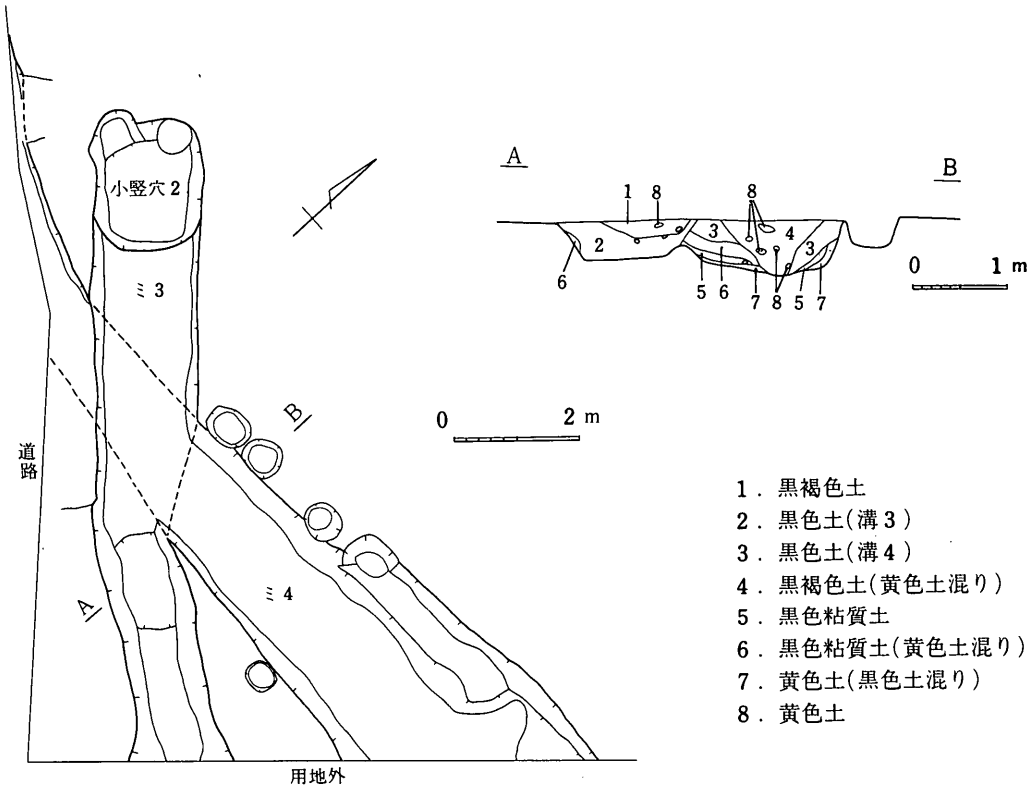
出土遺物から奈良～平安時代と思われる。　（佐々木嘉和）

溝址4（第271図）

遺構　AMDB29～36･BD29～36にある。32号住居址を切り、溝址3・穴に切られる。確認した規模は、長さ10m・幅2.8～2m、深さは検出面から60～40cm、方向はN86°Eでほぼ東西方向である。掘り方の断面は箱形に近く壁はほぼ垂直である。底部の高低差は20cmあり西側が高い。わずかであるが水の流れた痕跡がある。

遺物　東南用地外壁ぎわから比較的多く出土したが、全体的には少ない。土師器甕･高坏、須恵器甕・蓋・坏・皿・硯など出ている。

出土遺物から奈良時代と思われる。　（佐々木嘉和）



第271図　AMD　溝址3・4、小竪穴2

溝址5（第272図）

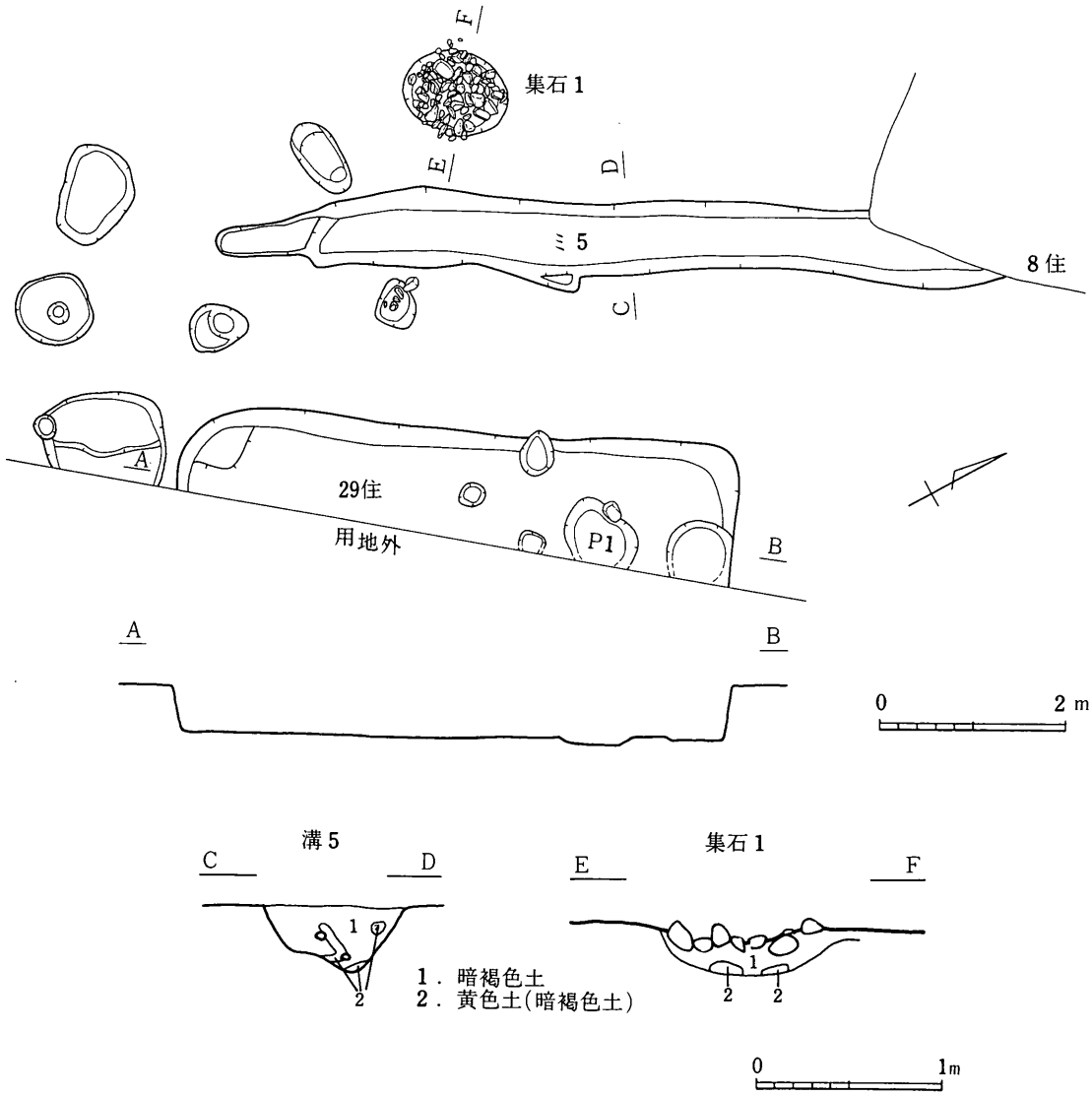
遺構　AMDBO～BRの44～47に検出した。8号住居址を切っているが、覆土中は検出できなかった。確認した規模は長さ8m・幅80～30cm、深さは検出面から30～5cmで、地点により変化のある不規則な掘り方である。方向はN148°Wを示す。地山が南に緩く傾斜しており、底部も南がわずか低い。水を流す為の溝ではないと思われる。

遺物　ごくわずか土師器片が出土している。

時代は古墳時代後期前半の8号住居址よりは新しいが、決め手がない。　（佐々木嘉和）

方形周溝墓1（第270図）

遺構　AMDBY46にかかり検出した。3号住居址・溝址2に切られる。用地外にかかりL字状に調査した。確認した規模は北溝3m・東溝5mで、幅は1～0.5m、深さは検出面から50cmである。掘り方断面はU字形で、底部には大きな凹凸がある。南溝は確認できなかったが、東溝との間は



第272図　AMD　29号住居址、溝址5、集石1

土橋と考えられる。

遺物　ほとんど出土していない。覆土上部に混入したらしい土師器片が出ている。

時代は遺物がないが弥生時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）

4）小竪穴・集石・火葬墓

小竪穴1（第263図）

遺構　18号住居址の南隅に検出し、上部壁が18号住居址覆土中にあるため、かなり歪んだ楕円形を成す遺構である。平面は2.9×2.2mで、深さは検出面から38mを測る。覆土は黒色土のほぼ一層で、下層に粘質の黄色土がブロック状に認められた。壁は底部近くになって弱い綾を持つが、全体として緩やかに底部まで掘り凹められている。

検出面で打製石斧が一点出土したが、18号住居址の遺物と考えられる。ほかに出土遺物はなく、切り合い関係から弥生時代中期以降と考えられるが、性格等は不明である。（佐合英治）

小竪穴2（第271図）

遺物　AMDBD30にかかって検出した。32号住居址を切り、溝址3に切られる。隅丸長方形の竪穴状掘り込みで、2×1.7mを測り、長軸方向はN45°Eを示す。32号住居址床面からの深さは50～40cm、溝址3底部からは15cm前後を測り、壁はやや急な傾斜を成す。溝址3と幅・長軸方向がほぼ同じであり、溝に伴う遺構である可能性もある。溝址3に水を流した痕跡は認められず、北西端が小竪穴2との推測も成り立つ。

遺物　出土はごく少量で土師器小片のみである。

切り合い関係から古墳時代後期～奈良時代が推定できる。（佐々木嘉和）

集石1（第272図）

遺構　AMDBP44に検出した。規模は1.1×0.9mの楕円形で、長軸方向はN50.5°Eを示す。暗褐色土中に礫の集中している箇所を認めながら遺構検出の為の削平をくり返し、断面図の高さまで下げてしまった。石は30cm上部から認められている。建物址2の近くにあり関連する可能性もある。

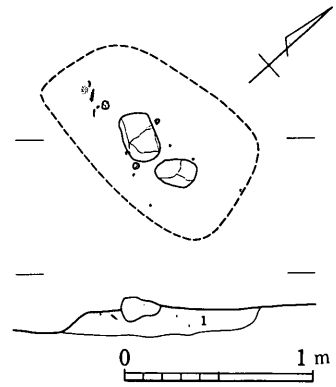
遺物　土師器片がごくわずか出土したのみで時期の推定はできない。（佐々木嘉和）

火葬墓1（第273図）

遺構　AMDBJ32に検出した。22号住居址の覆土上面にある。炭化物の散在する範囲は1×0.6mで、長軸方向はN84°Eを示す。残存状態は悪く、炭化物と焼骨・石2個を認めたのみである。石の大きさは、25×17cmと20×13cmで黒く焼けている。掘り方らしい土色の差はなく、炭化物・焼骨の混る範囲を掘り方とした。

遺物　古銭（宋銭らしい）と焼骨でわずかである。

時代は中世であろう。　（佐々木嘉和）



1．暗褐色土（焼土・炭・骨混り）

第273図　AMD　火葬墓1

6　新屋敷遺跡

1）縄文時代早期

調査前の段階でその出土等全く予想されなかった時代の資料で、C・D区において弥生時代以降の遺構検出時に早期末の土器が比較的多く認められ、出土位置及び遺構の把握に留意しながら調査を進めた。結果として該期遺構は小竪穴7基を把握したのみであった。しかし、出土状態からみて、何箇所かの集中する範囲がみられ、具体的な施設は把えられなかったが、1つの生活単位を示すのではと考え、整理段階において各集中範囲を「ユニット」と呼称し整理を試みた。名称そのものに問題もあり、各ユニットの範囲把握が多分に意図的で問題点があり、単なる包含層出土として処理した方が客観的であるが、遺跡のあり方をより具体的に示せればと考え、敢えて上記により整理を行なった。

なお、該期資料の出土はC・D区に集中するが、わずかではあるがA区からも出土しており、遺物分布はある程度広範囲にわたる。（小林正春）

①　小竪穴

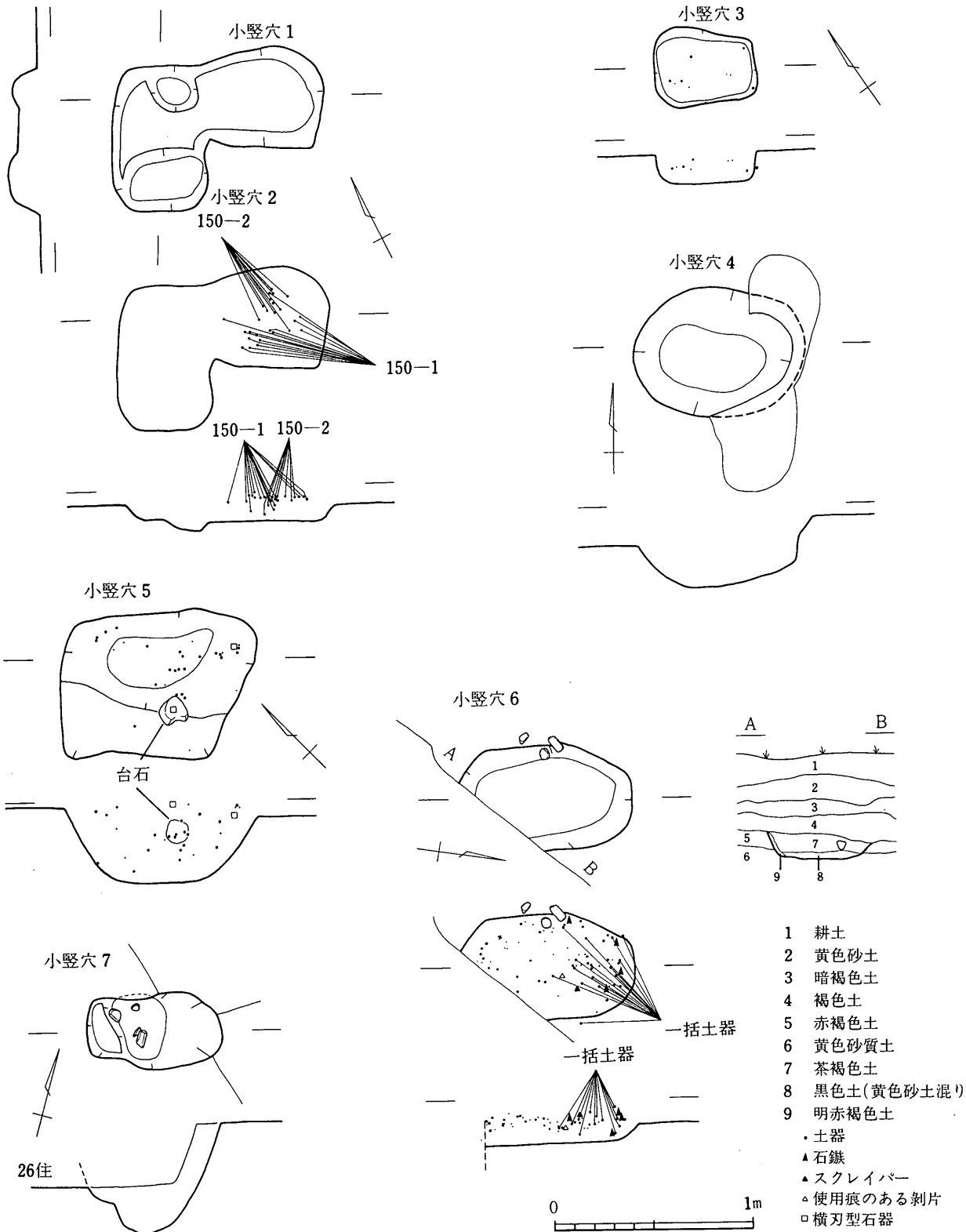
小竪穴1（第274図）

遺構　ARYCI50にある。小竪穴2と切り合うが新旧は確認できなかった。石列に掘り込んだ(1.4)×1mの不整長方形で、深さは検出面から20cmである。長軸方向はN69.5°Wを示す。黄色砂礫土（地山）に茶褐色土の覆土を検出した。覆土全体に礫・砂が混入しわずかではあるが、炭粒も認められた。

遺物　該期遺構としては最も遺物量が多く、図上復元できる土器が3点出土した他、土器片、石鏃・横刃型石器・特殊磨石・打製石斧片？・剥片もある。土器はいずれも塩屋式土器であり、縄文時代早期末に位置づけられる。

小竪穴2（第274図）

遺構　ARYCI50にかかっている。小竪穴1と切り合い、石列に掘り込んでいる。1.4×0.9mの不整長方形で、深さは検出面から30cmある。長軸方向はN25°Eを示す。覆土は小竪穴1と同じ茶褐色土で礫・砂が混入している。。



第274図　ARY　小竪穴1～7

遺物　土器片がわずかに出土したのみであるが、塩屋式の良好な資料である。時代は遺物から縄文時代早期末の遺構である。

小竪穴3（第274図）

遺構　ＡＲＹＣＬ51にある。石列に掘り込んだ、１×0.8mの不整長方形で、深さは検出面から30cmである。茶褐色土の覆土に礫が混入している。

遺物　縄文時代早期末土器片が少量と石鏃が出ている。高山寺式土器片が1片ある他はいずれも塩屋式土器片で、遺構の時期は後者の段階である。

小竪穴4（第274図）

遺構　ＡＲＹＣＮ53に位置し、23号住居址・新しい穴に切られる。東西方向に長軸があり、95×65cm・深さ20～35cmを測る楕円形を成す。底部は平坦でなく全体が中央部に向け傾斜する。覆土は、上部に褐色土が入り、中間が黄褐色土、底部ぎわは黒褐色土である。

遺物　塩屋式土器片がわずかと使用痕のある剥片・黒曜石剥片が出土した。土層及び土器片から縄文時代早期末に位置づけられる。（小林正春）

小竪穴5（第274図）

遺構　ＡＲＹＤＤ47を中心に検出された。地山の黄色砂土面を検出して、プランを確認した。かなり赤味を帯びた褐色土が覆土となる。1.9×1.6mの丸味を帯びた台形を呈し、深さは78cmを測る。北東側壁は急に立ち上がり、南西側は途中で段を持ち緩やかな立ち上がりを成す。段の部分には焼けた石皿が出土した。

遺物　縄文時代早期検出面から底部にかけ、量は多くないが塩屋式土器片、石皿・横刃型石器・チャート剥片が出土している。

遺物から縄文時代早期末塩屋式期に位置づけられる。（山下誠一）

小竪穴6（第274図）

遺構　ＡＲＹＣＲ54にある。用地外にかかって完掘できなった。(1.6)×1.1mの不整楕円形で、深さは検出面から20cmである。赤褐色土面（地山）に茶褐色土の覆土の入る遺構を検出した。茶

褐色土には、炭・礫・砂が混入していた。赤褐色土の面が生活面と思われる。

遺物　出土量は多く、土器・石器がある。土器は刺突・沈線文の土器が多く、絡条帯圧痕文土器片・塩屋式土器片、石器は石鏃・スクレイパー・使用痕のある剥片・ピエス・エスキーユがある。

出土遺物から縄文時代早期末の遺構である。

小竪穴7（第274図）

遺構　ＡＲＹＣＣ51にある。21号・26号住居址に切られる。確認した規模は(1.4×0.8m)、深さは26号住居址壁上から1.1mある。該期遺物の入る遺構の内で最も深いが、残っている部分は少ない。覆土の状況は、中央部から黒色土が入り、壁ぎわに褐色土がみられ、いずれもきわめて細かい粘質土である。なお、西壁の一部は袋状になる箇所もある。

遺物　26号住居址床面下の残っている所から塩屋式土器片及び石鏃2点が出土した。

（小林正春）

② ユニット

ユニット1（第275図）

ＡＲＹＤＲ50を中心に径9m程の範囲を考える。ほとんどの遺物は古墳時代住居址内からの出土で、生活単位として把えるに若干の疑問はあるが、周辺に位置する他の住居址からの該期遺物出土状況に比べ、かなりのまとまりがあると判断される。

遺物　相木式・撚糸文・粕畑式土器片があり、粕畑式土器が主体を成す。石器には石鏃・使用痕のある剥片・黒曜石剥片などがある。

ユニット2（第275図）

ＡＲＹＤＩ49を中心に10×8m位の範囲を考える。ほとんどの遺物が新しい遺構内からの出土で、整理段階に縄文時代早期に位置づくと把握したものが多いが、古墳時代住居址掘り込み面下部の褐色土中より出土したものもある。ユニット1と連続する包含層として把えた方が妥当とも考えたが、両者の間に8m程の遺物を出土しない空間部があり、別の単位として扱った。

遺物　高山寺式・相木式・粕畑式土器片があり、粕畑式土器が主体を成す。石器には石鏃・横刃型石器がある。出土遺物の状況はユニット1と似る。

土器

石器

大ユニット

ユニット1

ユニット2

ユニット3

ユニット4

ユニット5

ユニット6

凡例

土器

- 塩屋式
- 神文木材
- 天神山式
- 刺突・沈線文
- 結条帯圧痕文
- 相木式
- 柏畑式

石器

- 石鏃
- 尖頭状石器・不定形石器
- スクレイパー
- 石匙
- ピエスエスキーユ
- 石核
- 使用痕のある剥片
- 磨製石斧
- 横刃型石器
- 礫器
- 特殊磨石
- 磨石
- 石皿
- 黒曜石剥片
- チャート剥片
- 玻璃質安山岩剥片

0 10 m

第275図　ARY小竪穴1～7・ユニット・遺物分布図

ユニット3（第275図）

ＡＲＹＣＶ50を中心とする45号住居址内及びその周辺６×５ｍの範囲を考える。土器のすべてが、住居址覆土中からの出土で、生活単位として把握するには、最も問題のあるユニットである。

遺物　塩屋式土器４・粕畑式土器１片を含む他は、相木式土器の良好な資料が調査範囲内で最も集中して出土しており１つの生活単位とした。石器には石鏃・尖頭状石器・不定形石器・ピエス・エスキーユがある。

ユニット4（第275図）

ＡＲＹＣＲ52を中心に11×８ｍの範囲を考える。小竪穴６との関連が考えられ、その西方一帯に遺物が分布する。小竪穴６を中心とする範囲は更に東側用地外に延びている可能性もある。遺物の多くは、古墳時代住居址が掘り込まれる赤褐色土中から出土し、遺物の他に炭粒もかなりみられた。

遺物　相木式・沈線文・塩屋式土器片があり、赤褐色土中からの塩屋式土器の出土は少ない。石器も比較的多く、石鏃・横刃型石器・特殊磨石・使用痕のある剝片などの他、黒曜石の剝片・砕片がかなり出土した。

ユニット5（第275図）

ＡＲＹＣＱ46を中心に９×６ｍの範囲を考える。基盤の黄色砂土上面にほとんどの遺物が出土した。

遺物　相木式・神之木台式・天神山式・塩屋式土器片が出土しており、主体は塩屋式土器である。石器は石鏃・不定形石器・スクレイパー・横刃型石器・使用痕のある剝片があり、チャート剝片が多い。

ユニット6（第275図）

ＡＲＹＣＯ52を中心に７×５ｍの範囲を考える。古墳時代住居址に切られ、不明な点が多いが、小竪穴７との関連が考えられる。

遺物　出土土器は粕畑式土器１片のほかは塩屋式土器に限られる。石器は石鏃・尖頭状石器などがあり、チャート剝片が多い。

大ユニット（第275図）

Ｃ区全域とＤ区の一部まで塩屋式土器を主体に出土する路線内で約６ｍ程の範囲を１つの生活空間的な位置づけが妥当と考えた。そのため他のユニット１～６とは性格が異なる。なお、この範囲外にもわずかではあるが、塩屋式土器の出土はあり、明確に範囲を区切れるわけではない。

この範囲内には、小竪穴１～７及びユニット３～６を内包し、それらとの関連する遺物が多い。

遺物　小竪穴・ユニット内出土のものを除いた遺物としては、相木式・粕畑式・天神山式・塩屋式土器などがあり、主体は塩屋式土器であるが、相木式・粕畑式土器の多くは大ユニット北半からの出土である。石器も石鏃・磨製石斧などが出土している。　（小林正春）

２）住居址

①　弥生時代中期

Ａ～Ｄ区の約200ｍの間に12軒の住居址が散在する。分布状況としては、特に集中している箇所はなく、ＧＯＢ、ＡＭＤと同様のあり方を示す。ただ、Ｅ区には該期遺構として把握されたものはなく、台地端部の土地利用形態なりを示すものかもしれない。

時期的にみると、ＧＯＢ、ＡＭＤと異なり恒川Ｉ期とII期である。　（小林正春）

５号住居址（付図２）

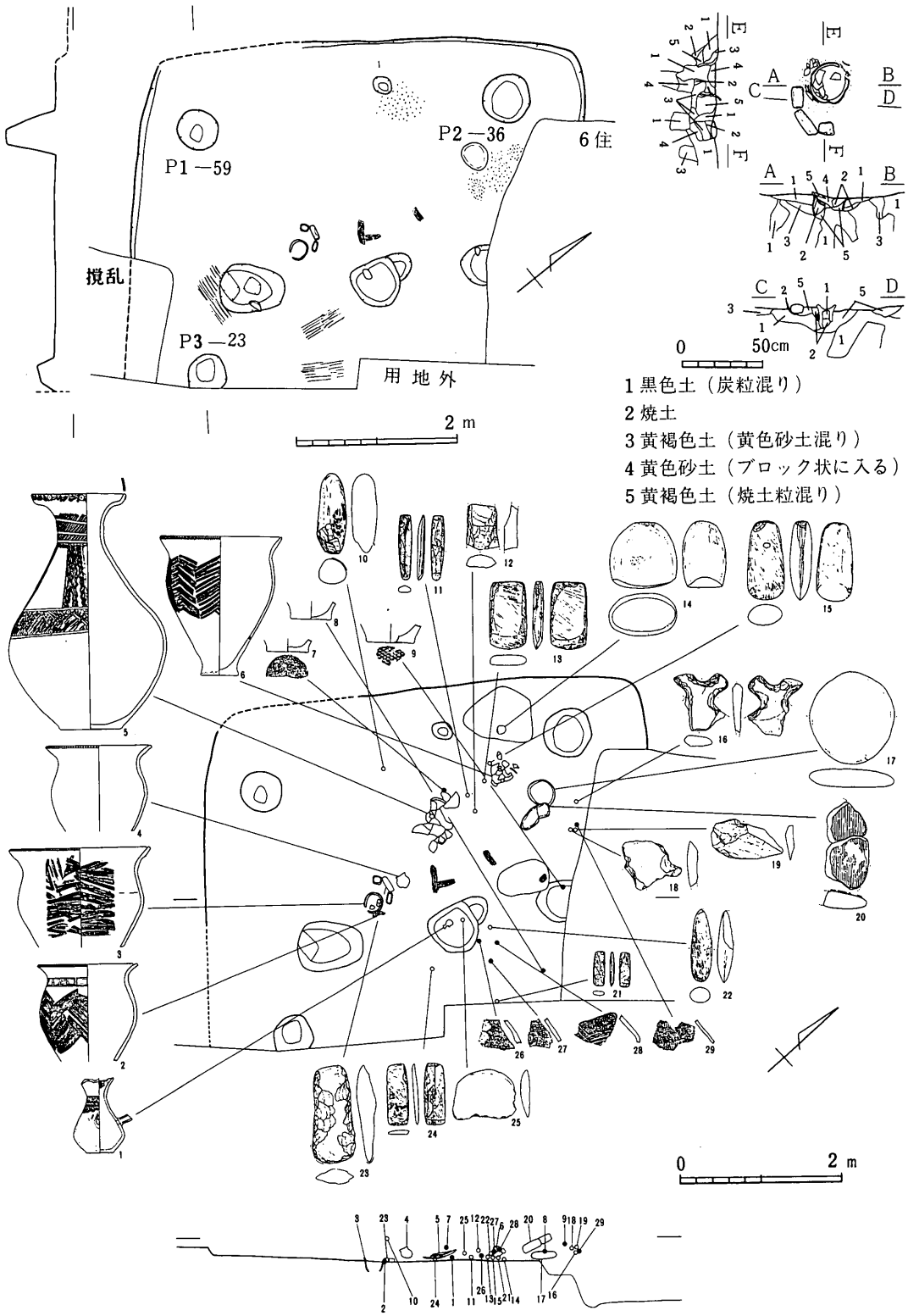
遺構　ＡＲＹＡＫ56に弥生時代中期の壺片が出土し、５号住居址として調査をした。建物址５・６に切られ遺物出土により住居址の存在を想定したもので、壁・床面等の確認はできなかった。

遺物　壺片と磨製石斧が出土している。

出土遺物から弥生時代中期恒川II期と思われる。　（佐々木嘉和）

９号住居址（第276図）

遺構　ＡＲＹＡＡ54を中心に検出した。６号住居址に切られ、一部攪乱を受けている。用地外にかかるため約⅔を調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は5.4×4.3ｍ、主軸方向はＮ130°Ｗを示す。壁高は検出面から10㎝弱とわずかである。覆土中に石が入り、石の下には炭があることから火事の住居址で、火事の時石を投げ込んだものと思われる。床面はたたき状に堅く良好であるが、壁ぎわから主柱穴までの間はやや軟かい。床面には敷物痕跡があり、イネ科の茎痕と思われる。主柱穴は３本確認し、いずれもやや壁に寄っている。平面は不整円形で深さは一定していない。Ｐ１の覆土上部に炭化材があり、長さ８㎝・幅７㎝を測り、柱材の可能性もある。炉址は土器埋設炉で甕を使用しており、炉縁石３個を北側に置いている。炉縁石のうち中央のも



第276図　ARY　9号住居址

のは打製石斧が使われていた。埋設してある甕が二重になっている所があり焼土の入り方からみても、甕を入れ替え、炉を造り直している様子である。炉址の南側・東側にある大きな穴は新しいもので、本址には関連しない。

遺物　火事のためか出土量は多い。炉址周辺に集中し、特に北東側に多く出土した。ほぼ完形の壺・甕はまとまっていた。注口土器1はほぼ完形のまま炉址北東の穴から出土した。磨製石斧の2点は着柄した紐痕が明瞭に残っている。壺・甕、磨製石斧・打製石斧・端部曲面磨石・有肩扇状形石器、中心に穴のある焼成粘土塊などが出ている。

出土遺物から弥生時代中期恒川II期の住居址であり、火事のために土器・石器がセットで出土しており、該期の良好な基準資料として今後の研究に重要な位置をしめる住居址であろう。

（佐々木嘉和）

10号住居址（付図2）

遺構　ＡＲＹＤＵ49に弥生時代中期遺物の出土があり、10号住居址とした。19号住居址・溝址3に切られ、道路にかかる。黄色砂礫土（地山）面に遺物があり、遺構検出に努めたが把握できなかった。

遺物　出土量はわずかで、土器壺の口縁部と胴部片である。形態・文様から弥生時代中期恒川Ｉ期に比定される。

（佐々木嘉和）

11号住居址（第277図）

遺構　ＡＲＹＤＪ50を中心に検出した。建物址10・18に切られている。長方形の竪穴住居址で、規模は（6）×4.7mを測り、主軸方向はＮ117°Ｗを示す。壁高は検出面から20～10cmあり、床面は軟かく地山の石が出ている。主柱穴は3本確認した。平面は不整楕円形で小さい。Ｐ3覆土中に炭化材が縦方向に入っており、柱痕と思われるが、バラバラの状態で太さ等は確認できなかった。炉址は床面中央からやや西壁に寄って、直径45cmの円形に焼土が認められ、地床炉である。炉址と反対側にも焼土のわずか残る浅い（5cm）穴があり、両側に長楕円の石があった。炉址の移動もしくは複数の存在の可能性がある。

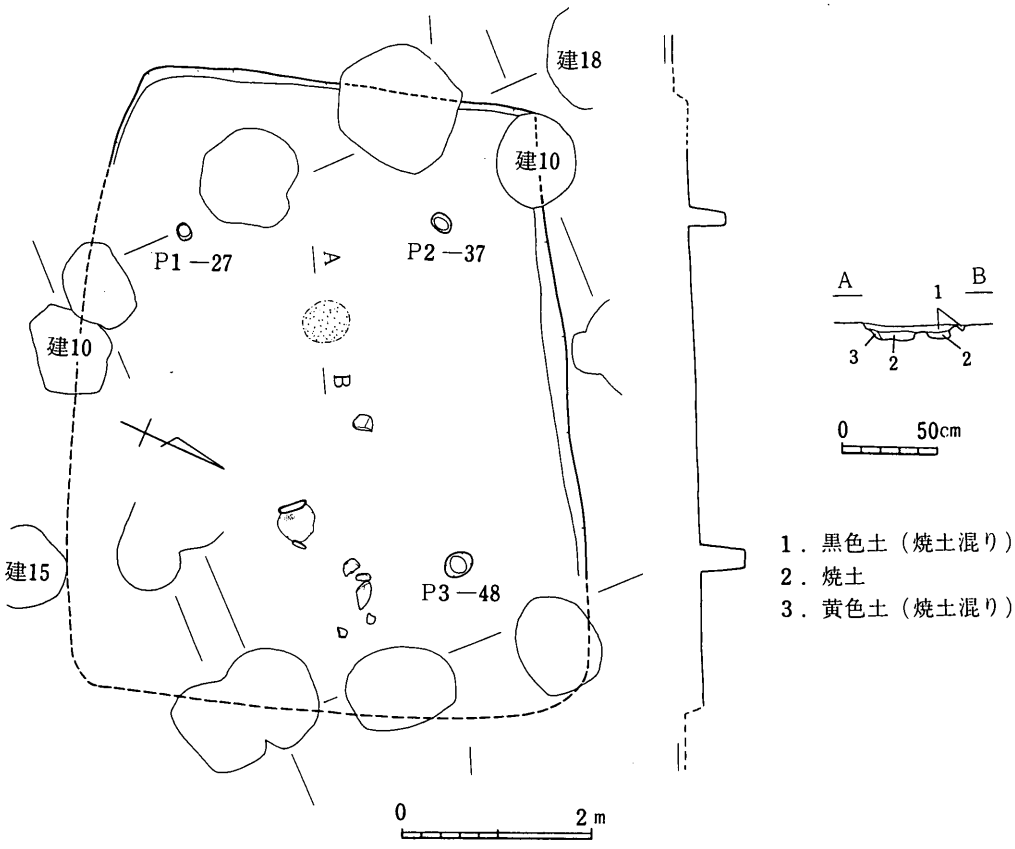
遺物　土器片がわずかと打製石斧・横刃型石庖丁・石錐・砥石が出土している。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ｉ期であろう。

（佐々木嘉和）

15号住居址（第294図）

遺構　ＡＲＹＤＲ52を中心に検出した。16号・17号住居址、建物址3に切られ、用地外にかかるため、6.5×3.5mの約⅔調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から10cmと



第277図　ARY　11号住居址

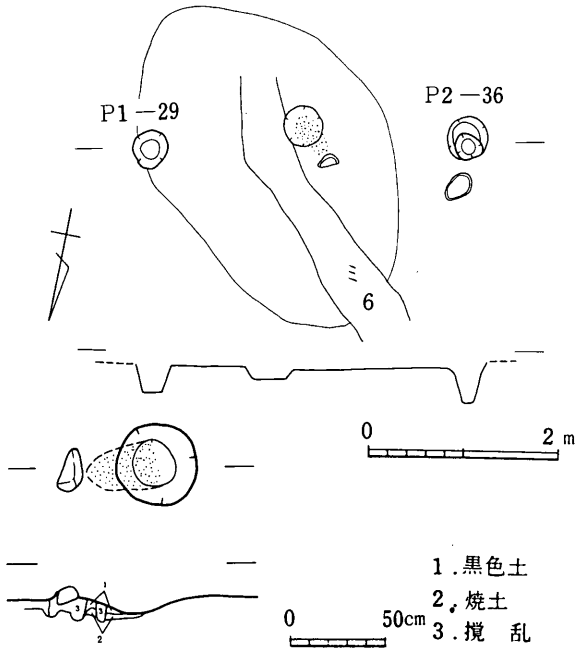
わずかである。床面はＰ１とＰ２の間に、堅く良好な部分もあるが、ほとんどは地山の石が出ている。主柱穴は２本確認し、平面は不整楕円形で小形である。

遺物　壺・甕片、打製石斧・磨製石斧・横刃型石庖丁・横刃型石器・磨製石鏃・同未成品が出土しているが量は少ない。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ｉ期であろう。　（佐々木嘉和）

22号住居址（第278図）

遺構　ＡＲＹＣＧ49を中心に検出された。溝址６に切られている。住居址の掘り込みが浅く南側をグリッド掘りで掘りすぎたため、プラン・規模・主軸等は把握できなかった。床面は全面黄褐色土まで掘り、黄色土をはったたたき状のきわめて堅く良好なものであり、細い実線で示した範囲内



第278図　ARY　22号住居址

に認めた。主柱穴はＰ１・Ｐ２が確認された。他の柱穴は精査したにもかかわらず検出できなかった。Ｐ２の北わきには台石がみられた。炉址はＰ１・Ｐ２の線上中央部のわずか南に寄った位置に設けられた地床炉である。直径42cmの円形に掘り凹め、内側には炉縁石が置かれている。焼土は多く、底が堅くなっていた。

遺物　出土量は少ない。石器を主に土器はほとんどみられなかった。打製石斧・台石がある。

遺物・住居址形態から弥生時代中期恒川Ｉ期に比定できる。　（山下誠一）

23号住居址（第279図）

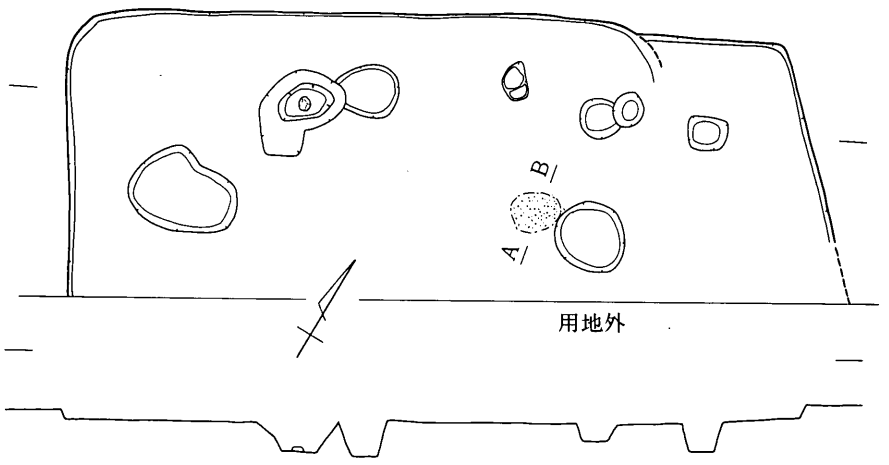
遺構　ＡＲＹＣＮ54が中心である。調査の都合上昭和53年の11月と55年の３月の２度にわたり調査をした。用地外にかかり約½確認した。調査範囲の東半部において床・壁の差があり断定はできないが、住居址が切り合っている可能性が強い。縄文時代早期の小竪穴４を切り、穴に切られる。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は7.7×３m、主軸方向はＮ59°Ｅを示す。覆土中に石が集中して入る部分があり、石の間に土師器・須恵器片が混入していた。壁高は検出面から10cm余とわずかである。床面は東側⅔は堅く良好であったが、南側は軟かであった。西壁下のやや大きめの穴と、地床炉東側の穴は上部に石があり、須恵器片が出土して、床を切っている。炉址は地床炉で、良く焼けており、焼土の厚さが８cmあった。炉址の位置・壁の状況等から、全体形把握に若干の問題がある。

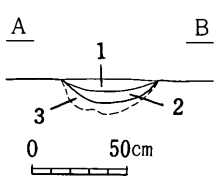
遺物　覆土中の石の間から、土師器坏・高坏、須恵器蓋坏片、床面から弥生時代中期の土器片と打製石斧・横刃型石器・磨製石斧・磨製石鏃未成品が出土した。

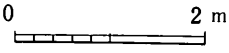
出土遺物から弥生時代中期恒川Ｉ期の住居址に重複して、古墳時代後期の遺構があったと思われる。　（佐々木嘉和）

24号住居址（第280図）

遺構　ＡＲＹＣＬ48を中心に検出した。建物址１・溝址５に切られる。不整方形の竪穴住居址で、規模は4.3×４m、主軸方向はＮ45°Ｅを示す。壁高は検出面から18～17cmと低い。床面はやや軟か

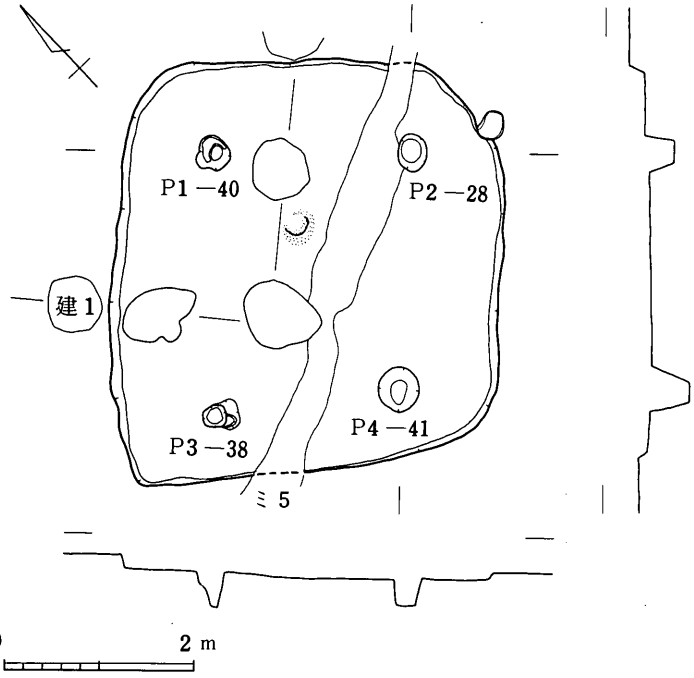


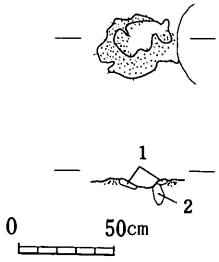




1．黒色土（焼土混り）
2．焼土
3．黄色土が焼ける

第279図　ARY　23号住居址





1．焼土
2．黒色土（撹乱）

第280図　ARY　24号住居址

く、東南へわずか傾斜している。主柱穴は4本で、平面は不整円形を呈し、深さは一定していない。炉址は中央からやや北東寄りにあり、地床炉である。直径40cm程の円周状に焼土が約5cm程あり堅い。粘土で周囲に土手を作り、それが焼けた様子である。内側にはほとんど焼土が認められなかった。

遺物　出土量は少なくすべて床面及びその直上からの出土である。壺・甕片、有肩扇状形石器・打製石斧・磨製石斧・石錐・磨製石鏃が出ている。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅰ期であろう。　（佐々木嘉和）

29号住居址（第305図）

遺構　ＡＲＹＤＲ46を中心に検出された。28号・29号・30号住居址、溝址18に切られる。弥生時代の遺物が出土し、その範囲を住居址と想定した。床面は地山の黄色砂礫土で石が露出しており軟かい。炉址は溝址18に切られているが、直径40cmの範囲に焼土があり地床炉である。焼土の厚さは2cmでわずかに凹んでいた。

遺物　土器片が出土しているが、わずかである。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅰ期と思われるが、決定材料は少ない。　（佐々木嘉和）

51号住居址（第287図）

遺構　ＡＲＹＡＢ57が中心である。6号住居址に切られる。53号住居址と重複するが新旧関係は確認できなかった。用地外にもかかるため、約⅓の5×2.5mの範囲を調査した。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、壁高は検出面から10cm前後であり、他の該期住居址に比べて明瞭に確認できた。床面は極めて軟かい。

遺物　出土量は少ないが、該期の他住居址と比しては多い方である。甕、砥石・磨製石鏃・同未成品・磨製石剣未成品・打製石斧・横刃型石庖丁が出ている。

出土遺物から弥生時代中期恒川Ⅱ期であろう。　（佐々木嘉和）

54号住居址（第338図）

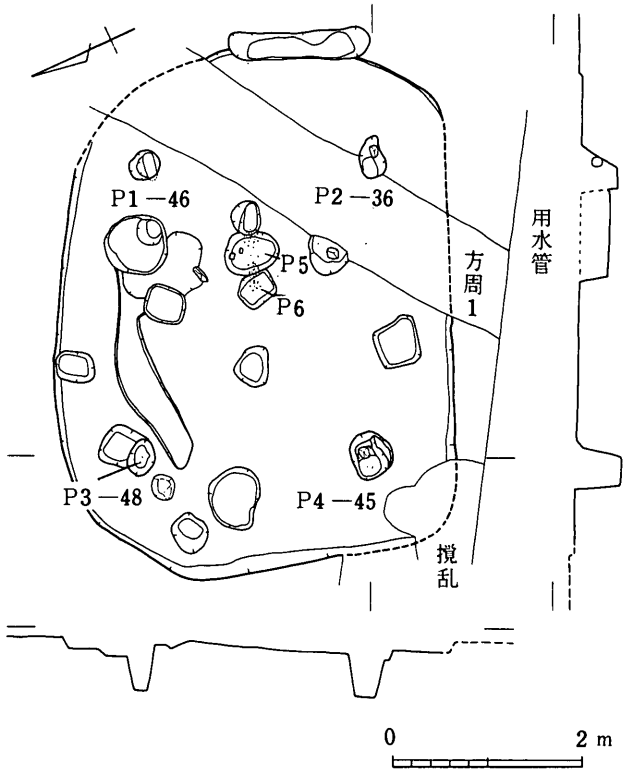
遺構　建物址5を検出していて、弥生時代中期の遺物が出土し54号住居址にした。想定範囲を建物址5・7、土坑4に切られる。遺構検出に努めたが確認できなかった。

遺物　壺の破片がわずか出土した。文様から弥生時代中期恒川Ⅱ期の壺である。

（佐々木嘉和）

55号住居址（第281図）

遺構　ＡＲＹＡＰ62を中心に検出した。方形周溝墓１・後世の穴に切られ、一部耕作による撹乱を受けるが、ほぼ全体が調査できた。5.6×4.2mの不整形な隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ114°Ｅを示す。住居址全体に粘質の黄色土のはり床を施しており、北側は10cm程掘り下げた所で確認されたが、周溝墓に切られる南側は検出面で確認され、きわめて軟かく北西から南東へ６cm傾斜している。はり床下８～４cmに、きわめて堅いたたき状の床面が検出され、主柱穴を結ぶ線の内側は特に良好である。下部床面もはり床と同様に北西から南東へ10cm程傾斜している。下部床面からの壁高は、北西14cm・南東４cmである。主柱穴は４本確認した。Ｐ１・Ｐ３の掘り方は楕円で、Ｐ１は底部が楕円を成しており、柱に割り材を使用していた可能性がある。Ｐ２・Ｐ４の覆土上層には径12cm程の石が入っており、柱を固定するのに用いられたものと考えられる。本住居址内で確認した他の穴は、覆土等の状況から後世の穴と考えられる。炉址はＰ５・Ｐ６に壊されており、穴の覆土中および底部に焼土が認められた。正確な位置は不明であるが、深さ12cmのＰ５から本址に伴う土器片が出土しており、Ｐ５の位置にあった可能性が強い。



第281図　ARY　55号住居址

遺物　弥生時代中期壺・甕が床面密着で出土している。石器も床面上または覆土下層からの出土で、打製石斧・磨製石斧・横刃型石庖丁・磨製石鏃・砥石・磨滅痕のある礫がある。

出土遺物から弥生時代中期恒川II期に比定される。

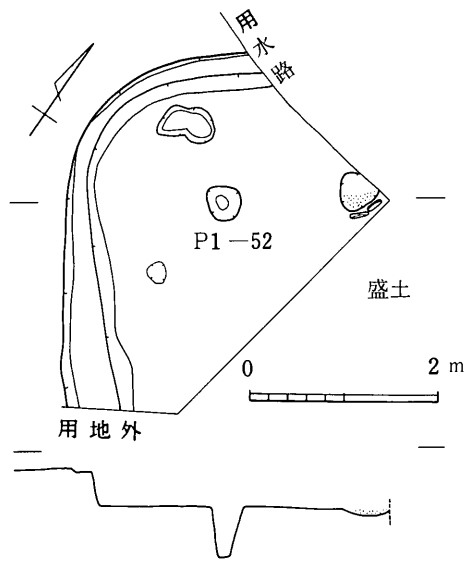
（佐合英治）

②　弥生時代後期

56号住居址（第282図）

遺構　ＡＲＹＡＱ69を中心に検出された。上面を溝址15に切られる。北側は水路・道路で、南側

は用地外のため調査できなかった。また、東側は盛土の下となり調査を断念した。当初検出面から下にかなり多くの古墳時代後期の遺物と15cm前後の礫が出土し、この時期の住居址と思って掘り進めた。しかし、床面らしい部分を見い出せないまま遺物が出土しなくなり、床面上からわずかに弥生土器の破片がみられるようになり、炉址を検出して弥生時代の住居址となる。上面には古墳時代の生活面があったと思われる。3.7×3.6mの範囲が調査できたのみで、規模は不明の隅丸の竪穴住居址で、主軸方向は南西壁から推定してN43°Wを示す。壁は北・西側が一部確認でき、壁高は西側で30cm・北側で40cmを測り、壁上に40～20cmのテラス部分を持ち、再度西側で10cm・北側で5cm立ち上がっている。同一プランを呈し、覆土中に床面の延長部がみられないことから、住居址が重複しているのでなく、住居址の構造上の問題として把握した。床面は全面黄色土まで掘られ、わずかに堅い部分もみられるが全体に軟かく、状態は良くない。主柱穴は調査範囲内でP1が検出された。炉址は北西側主柱穴間中央に位置すると思われる地床炉である。床を40cmの不整円形で7cm程掘り凹め、住居址内側に2個の炉縁石を置く。焼土はほとんどみられない。



第282図　ARY　56号住居址

遺物　床面上からわずかに出土した。弥生時代中期および弥生時代後期土器片、有肩扇状形石器・打製石斧・磨製石鏃未成品・磨滅痕のある礫等がある。

住居址構造・遺物から弥生時代後期恒川Ⅳ期に比定できる。　（山下誠一）

③ 古墳時代後期

A～E区にかけ約200mの調査範囲内ほぼ全域にわたり、30数軒の竪穴住居址が検出された。全体としてはD・E区にかけてやや密集する傾向があるが、ほぼ平均して分布している。さらに3～4時期に細分が可能であるが、各小時期の整理が不十分で、各期毎の分布状況を明確にできないが、全体の分布状況に合致すると思われる。

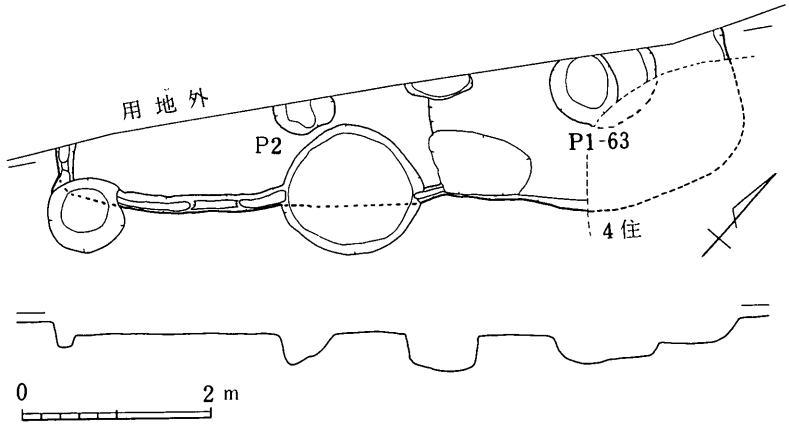
GOB、AMDから連続した集落として把えられ、段丘面上に同様の状態で分布するとすれば桁はずれの規模を有する集落となり、出土遺物の内容も優れたものが多く、北方一帯の古墳群を築造した基盤集落と考えられる。　（小林正春）

2号住居址（第283図）

遺構　ＡＲＹＡＩ51からＡＫ52の用地境に検出された。北西のほとんどは未調査で、東隅は４号住居址を切っているが、切り合い関係の把握が不十分で壊してしまった。確認した南東壁は中央を後世の穴に切られるが7.１ｍを測り、主軸方向はＮ36°Ｗを示し、壁高は13～８㎝を測る。南側半分の壁は削平され、幅20㎝・深さ19～５㎝の周溝を検出し、住居址の範囲を確認した。床面は南側半分がきわめて堅く平坦であるが、北側は南側に比べ10～５㎝低く、凹凸があり軟かなはり床である。壁もこの部分でやや歪みがあり、増築または別の住居址の存在が考えられる。主柱穴と思われる穴１本を検出したが、本址のほとんどが用地外となるため確証はない。Ｐ２は深さ32㎝を測り、出土遺物から本住居址に伴うと考えられる。

遺物　出土量は少ないがいずれも南側の床面上からである。土師器小形壺・甕・坏、土製円板、臼玉がある。

出土遺物から古墳時代後期前半の住居址である　（佐合英治）



第283図　ARY　2号住居址

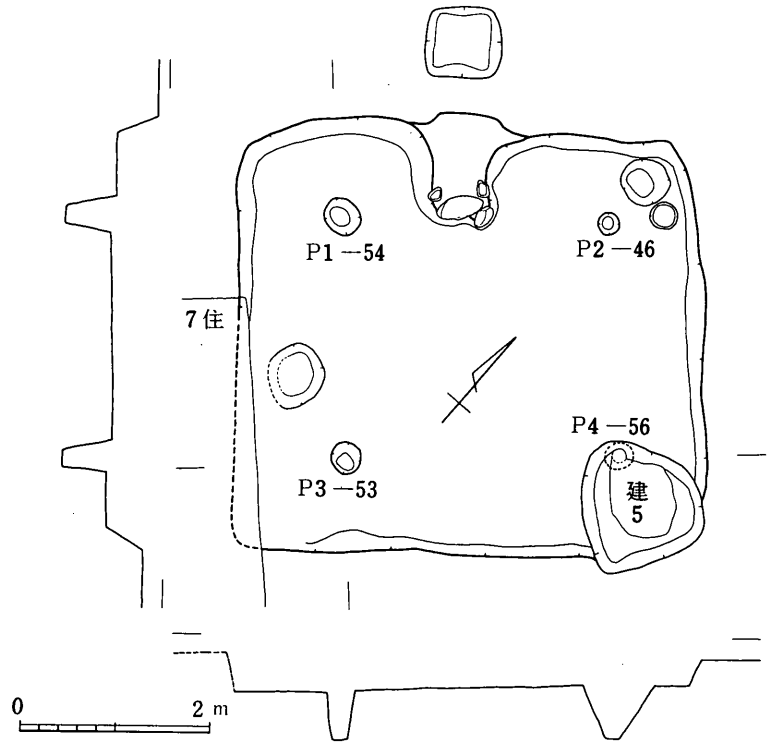
3号住居址（第284図）

遺構　ＡＲＹＡＨ52を中心に検出された。７号住居址・建物址５に切られ、54号住居址を切っている。覆土は黒褐色土が主体となるが、住居址中央やや南寄りの部分が、2.3×2.0mの楕円形で、断面レンズ状に床面近くまで炭混りの漆黒色土が入っていた。この部分には炭化した桃の種・骨などが出土し、住居址廃棄後ある程度住居址が埋まった段階で、火の使用が考えられる。4.5×５ｍの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ48°Ｗを示す。壁は、７号住居址・建物址５に切られる部分を除いて全面確かめられ、壁高は45～30㎝を測る。床面は全面黄色砂土まで掘られ、軟かく、はり床も認められなった。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、Ｐ４は建物址５の穴に切られ、わずかにその痕跡を確かめた。北隅に直径50㎝の円形を呈し深さ52㎝を測る穴があり、貯蔵穴と考えられる。カマドは北西壁中央にあり、石芯粘土カマドである。両袖にそれぞれ3個の石が使われたと

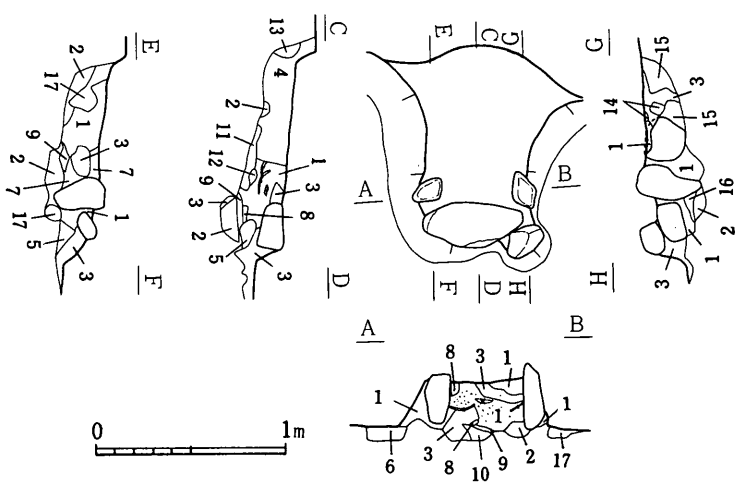
思われるが、左袖は2個・右袖は1個を抜いた痕跡があった。天井石は原位置からやや東側にずれて検出した。たき口部の焼土は余り多くない。

遺物　カマドからの出土が多い。土師器甕・坏・内面黒色の坏、須恵器甕・短頸壺・蓋、臼玉・土玉、土製紡錘車がある。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）



1．黒褐色土（粘土・焼土混り）
2．黄褐色土
3．黒色土
4．黒色土（焼土混り）
5．黒色土（黄色土混り）
6．黒色砂質土（黄色砂土混り）
7．焼土（黒褐色土・粘土混り）
8．焼土
9．黄色砂土
10．黒色土（焼土・黄色土混り）
11．焼土（黒褐色土混り）
12．黒褐色土（黄色砂土混り）
13．黄褐色土
14．黄色粘土
15．黄色粘土（黒褐色土混り）
16．黄色砂土（黒褐色土混り）
17．撹乱

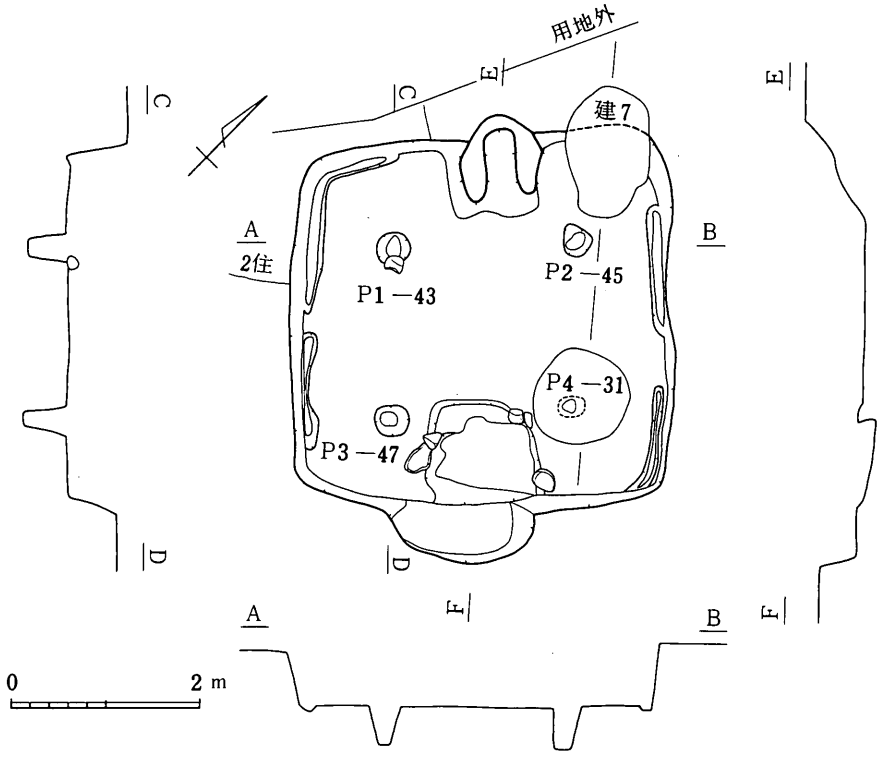


第284図　ARY　3号住居址

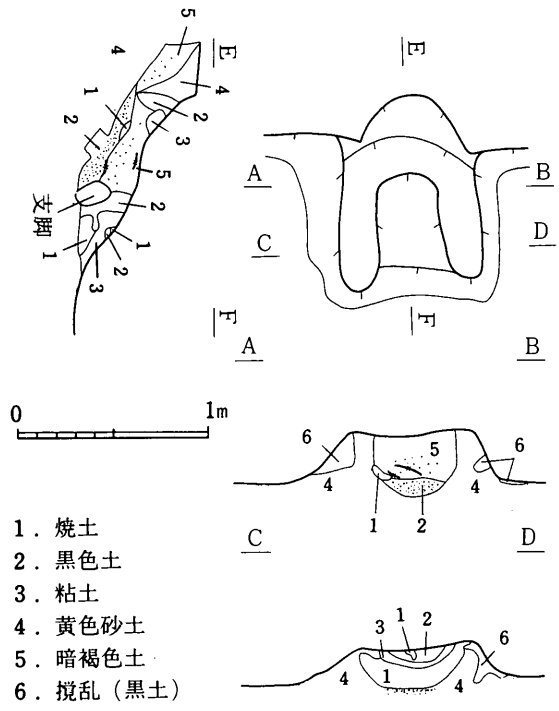
4号住居址（第285図）

遺構　ＡＲＹＡＫ54を中心に検出された。北隅と主柱穴Ｐ４を建物址７、北西隅を２号住居址に切られるが、本住居址の方が深くほぼ全体が調査できた。４×４ｍの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ43°Ｗを示す。壁面は62～51cmを測り、壁面はほぼ垂直を成す。周溝は部分的に切れるが、カマド両側と南東壁を除き、壁直下に確認し、幅18～７cm・深さ６～４cmを測る。床面は東から西へ４cm程傾斜するが、平坦で堅い。主柱穴は４本確認したが、Ｐ４は建物址７に切られており、掘り方の底部が、かろうじて残っていた。Ｐ１は直径20cmの自然石を伴い、柱のささえとしたと思われる。南東壁中央の壁に接して1.2×0.9ｍの範囲が16～10cm浅く方形に凹められ、住居址中心側の縁部は、床面より５cm程高く幅28～12cmのはり床状の土手が造られている。土手のない縁部には径35～15cmの自然石が置かれている。また、この掘り込みに関連して、壁外が1.6×0.6ｍの範囲で住居址検出面から39cmの深さで張り出し、住居址内外の入口部施設と考えられる。カマドは北西壁中央よりやや北寄に位置し、住居址竪穴を掘り凹めるさいに地山を掘り残したカマドである。支脚は石を用い、カマド中央部にあり、支脚前側のたき口部には厚い焼土が認められた。カマド奥壁が住居址壁よりやや外に張り出し、煙道の基部と考えられる。

遺物　遺物はいずれも覆土下層から床面密着で出土し、完形品およびほぼ完形品はカマド周辺



第285図　ARY　４号住居址



第286図　ARY　4号住居址カマド

と入口部に多く、口縁部を欠く土師器甕が北東壁の中央部からやや北寄り壁に接して出土している。土師器甕・小形甕・甑・坏・高坏がある。

出土遺物から古墳時代後期前半の住居址である。

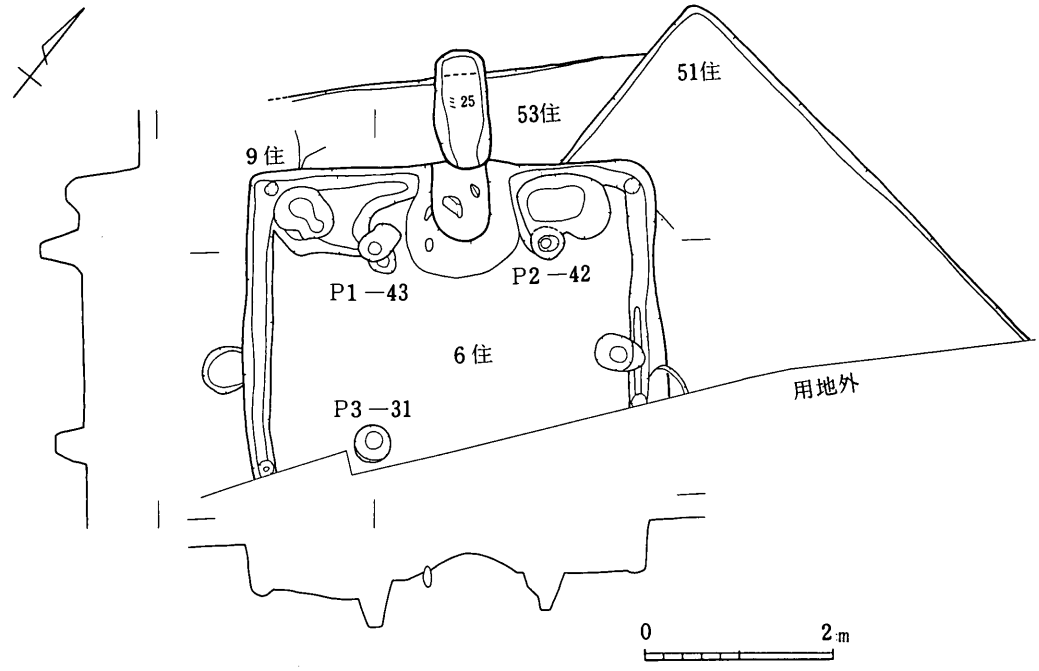
（佐合英治）

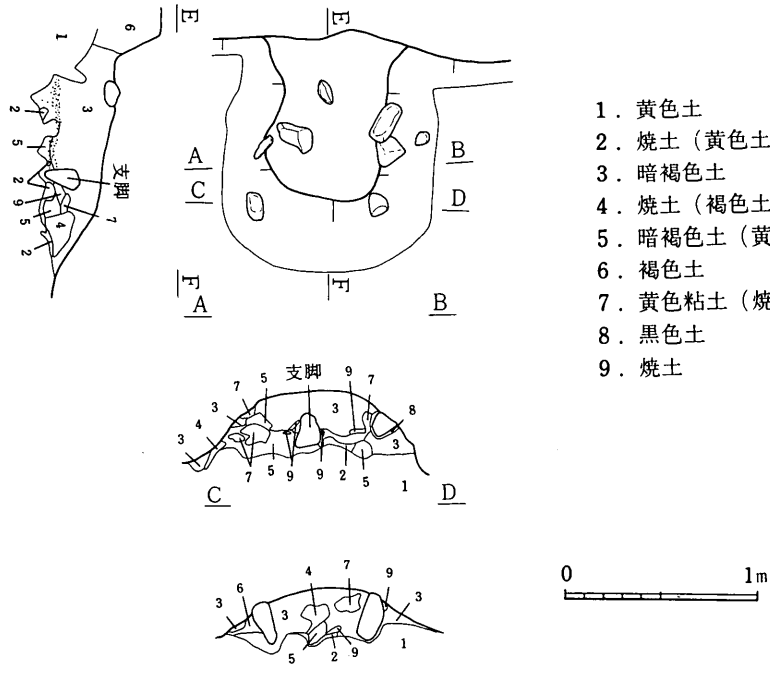
6号住居址（第287図）

遺構　ＡＲＹＡＡ56を中心に検出した。溝址25に切られ、９号・51号・53号住居址を切っている。用地外にわずかにかかるため完掘できなかった。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は（4.4）×4.4m、主軸方向はN41.5°Wを示す。プランは黄色砂土の地山に、黒褐色土が入り明瞭に検出された。壁高は検出面から60～50cmあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。周溝は幅20cmで、深さは10～４cmと浅いが、調査範囲内全体に認められた。床面は比較的堅く良好であった。当初の床面で柱穴を検出することができず、さらに掘り下げて地山で検出した。主柱穴は３本確認し、平面は不整円形、直径約40cmである。床面と床直上に石が散乱していた。Ｐ１の西側にあった２個は大きく45×25cmと35×20cmであり、表面は焼けている。北側にあった25×15cmの石の下には甕がつぶれていた。Ｐ２と北隅との間にも石があり、床面直上である。いずれも住居址廃棄後の投入ではなく、住居址に関連するものと考えられる。カマドは北西壁中央にあり、両袖先端のみに石を持つ形態の石芯粘土カマドである。カマド上面の石は芯に入れたのではないと思われる。たき口の焼土は比較的良く残っていた。支脚は高さ17cm・幅10cmの比較的大きな石を直立させている。Ｐ１・Ｐ２のそばにあった焼けた大きな石は、カマドを造り直した時に抜いた石とみられる。

遺物　出土量は比較的少ない。出土位置はカマド周辺が多く、Ｐ２と北壁間に特に多い。床面から覆土下部の出土がほとんどである。土師器甕・甑・坏、須恵器蓋坏などがある。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）





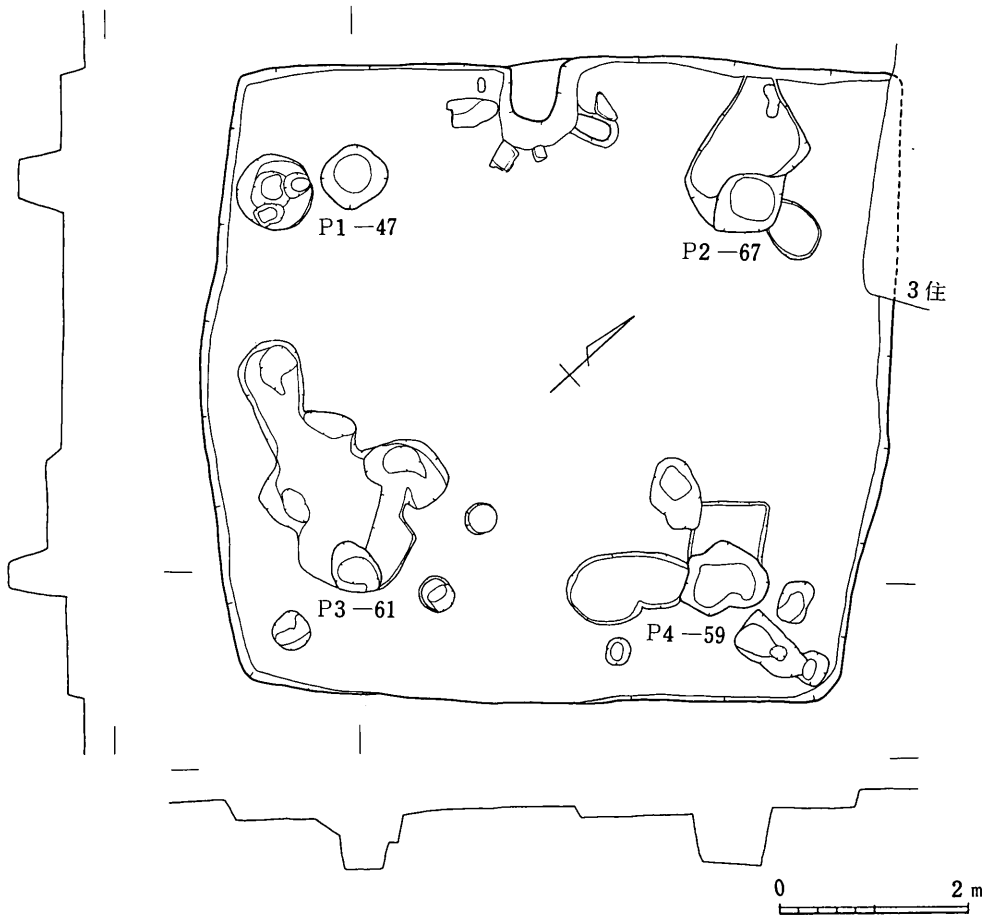
1．黄色土
2．焼土（黄色土が焼ける）
3．暗褐色土
4．焼土（褐色土混り）
5．暗褐色土（黄色土混り）
6．褐色土
7．黄色粘土（焼土混り）
8．黒色土
9．焼土

第287図　ARY　6号・51号・53号住居址、溝址25

7号住居址（第288・289図）

遺構　ＡＲＹＡＤ51を中心に検出された。北隅がわずかに３号住居址を切る。南西壁と北東壁の中央部分がややふくらむが、6.7×7.3mを測る比較的大きな隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N44.5°Wを示す。壁高は現地表面から検出面までが浅く、場所により確認した高さが異なる。39～17cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。床面はほぼ平坦で主柱穴を結ぶ線の内側は堅いが、外側はきわめて軟かい。主柱穴は４本確認した。Ｐ１以外は他の穴と重複し不整形である。重複した穴が本住居址に関連するか否かは不明である。カマドは北西壁ほぼ中央に位置し、天井石と考えられる石が左側へずれ落ち、両袖も部分的に壊れている。袖に石は使われておらず、天井部のみ石を用いた粘土カマドである。焼土はたき口部に比較的厚く堆積していた。

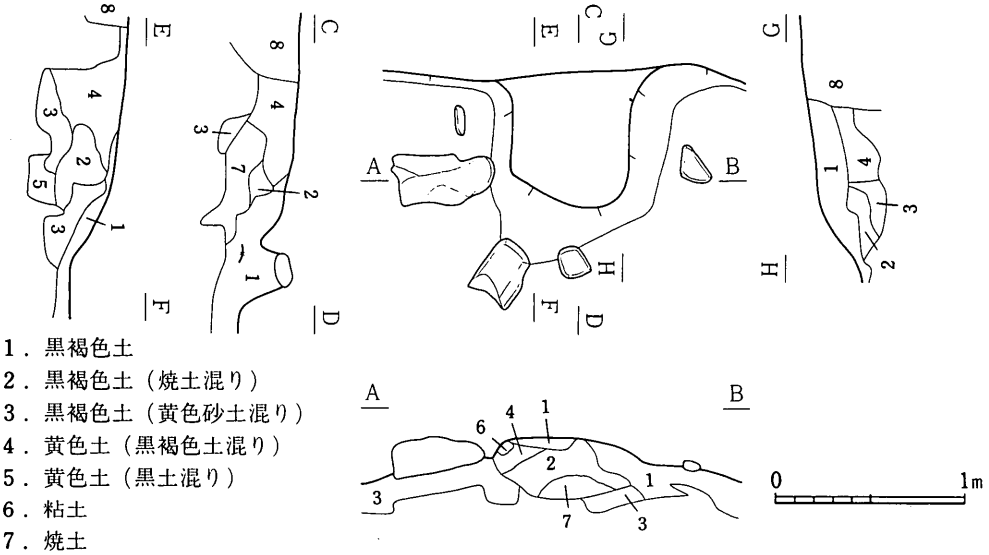
遺物　遺物はほとんどがカマド右側２m程の範囲の覆土中層から床面上に出土した。編物石と考えられる長さ15cm程の棒状礫が14個集中し南東壁中央床面に密着して出土した。土師器壺・甕



第288図　ARY　7号住居址

内面黒色の坏・高坏、須恵器蓋坏、臼玉がある。

出土遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐合英治）

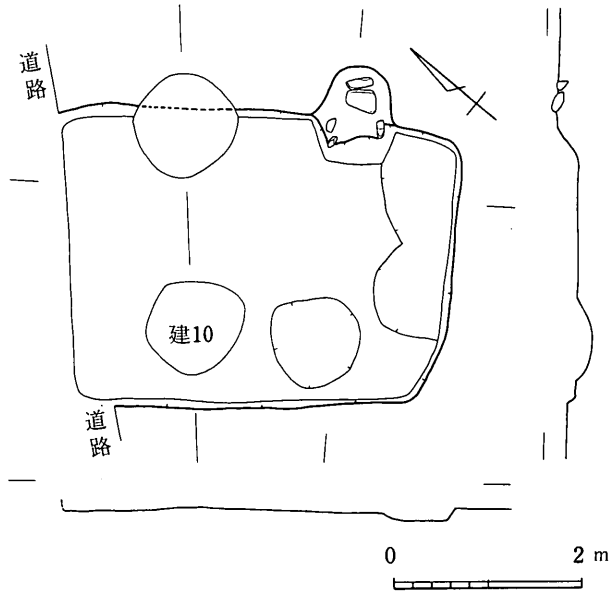


1．黒褐色土
2．黒褐色土（焼土混り）
3．黒褐色土（黄色砂土混り）
4．黄色土（黒褐色土混り）
5．黄色土（黒土混り）
6．粘土
7．焼土
8．撹乱

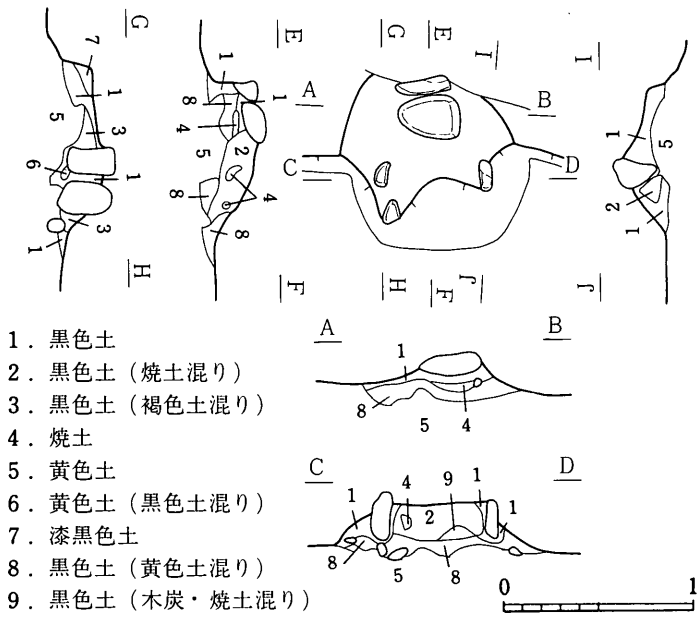
第289図　ARY　7号住居址カマド

12号住居址（第290・291図）

遺構　ＡＲＹＤＨ48を中心に検出した。建物址10に切られる。道路にかかったが、床面は全体を確認した。隅丸長方形の竪穴住居址で、規模は3.1×4.2m、主軸方向はN54.5°Eを示す。壁高は検出面から10cmと低く、緩い傾斜の掘り込みである。床面は地山の石が露出しており軟かい。南東壁ぎわが約20～4cm低くなっている。カマドは北東壁東隅寄りにあり、石芯カマドで煙道に天井石2個を持っている。主柱穴等の施設は確認できなかった。



第290図　ARY　12号住居址



第291図　ARY　12号住居址カマド

遺物　ごく少量で土師器甕・高坏、鉄片などが出土している。

時代は決定材料がなく確定できないが、カマド位置・住居址形態などから古墳時代後期と思われる。

（佐々木嘉和）

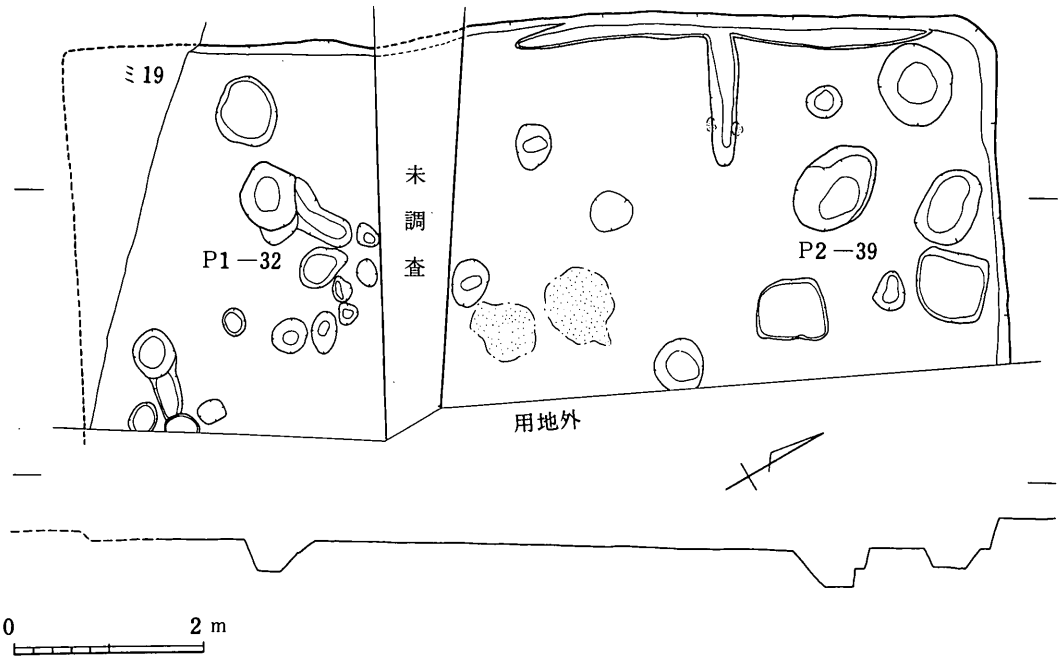
13号住居址（第292図）

遺構　ＡＲＹＤＧ54を中心に検出した。南東側半分以上が用地外となる。排土の関係から北側⅔と南側⅓が別年度の調査となったためＤＦ52・53に未調査部が生じた。西隅から南西壁は溝址19に切られている。確認した北西壁の長さは8.3mを測り、この壁の方向はＮ27°Ｅを示す。推定される規模は一辺の長さ9.6m程の非常に大きな隅丸の竪穴住居址である。壁高は34～21cmを測り、ほぼ垂直な壁面を成す。周溝は北西壁直下の北側半分に確認し、幅20～10cm・深さ13cm前後である。確認した周溝の中央部より直角に内側へ1.4mの溝が延びており、深さ21cmを測った。本住居址の大きさから建て替えあるいは増築が予想されたが、確認できなかった。床面は地山の黄色砂土に多量の石が混入している層まで掘り込まれ、凹凸が著しくきわめて軟かい。主柱穴は２本確認し、大きな掘り方で比較的緩やかな壁面を成し、Ｐ２は北側のみ二段構造である。主柱穴以外の多数の穴のうち、出土遺物等から本住居址に伴うと考えられる穴に、北隅の深さ51cmの穴がある。調査した範囲の中央用地外寄りには、焼土がほぼ円形に２個所並んで認められた。いずれも床面が焼けているものであるが、性格は不明である。

遺物　北隅から北西壁に沿う３ｍ程の範囲に、径20～８cmの石とともに出土する遺物が多い。この部分の礫は検出面から床上まで認められ、本住居址に直接伴わないことも考えられる。土師器甕・坏・高坏、須恵器高坏・小形壺がある。この中で土師器高坏の数が多く、いずれも床面密着で出土した。

遺物から古墳時代後期後半と考えられる。

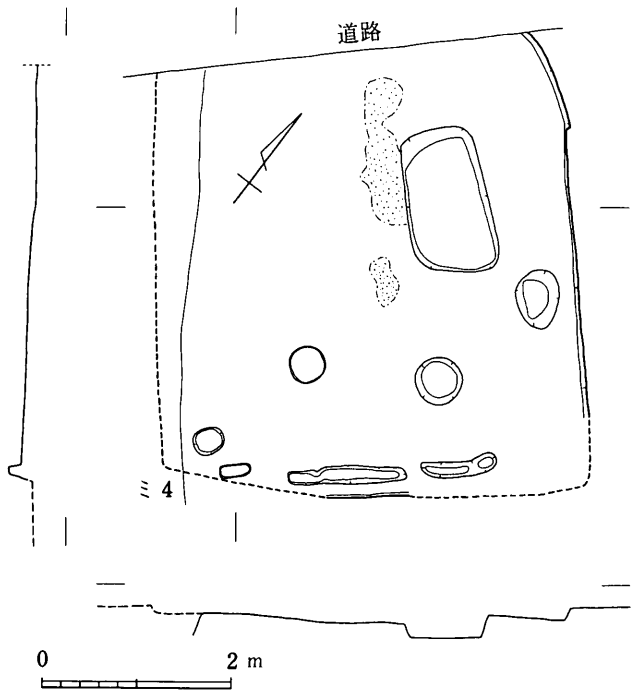
（佐合英治）



第292図　ARY　13号住居址

14号住居址（第293図）

遺構　ARYDR50をほぼ中心に検出された。17号住居址とほとんど重なり合ってその上に造られている。南西壁は溝址４に切られており、北西壁側は生活道路があったため未調査となった。また、南東壁は17号住居址覆土中のため中央部以外は検出できなかった。確認できた規模は4.8×4.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向は不明であるが、確実に確認した北東壁の方向はN54°Wを示す。火事の住居址であるが、よく焼けており、炭化材に原形をとどめているものはない。覆土下層は漆黒色土、上層は褐色土である。下層と上層の境には30～４cmの花崗岩が多量に入っており、人為的に廃棄・埋められた可能性が強い。17号住居址覆土中に確認した壁はたたき締められたように堅く、壁高は９～14cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は南東壁下に断続的に確認され、壁より12cm前後内側にあり、幅18～12cm・深さ11～４cmを測る。床面は黄色粘質土を使った、たたき状のはり床できわめて堅いものである。切り合いのない北東壁側は軟かく地山により把握した。中央部北側の1.6×0.9mの深さを測る穴は、出土遺物より本住居址に伴う何らかの施設である。カマド・主柱穴の確認はできなかった。本住居址中央から西側の床面に焼土が認められたが、17号住居址カマド位置にあたり本住居址に伴うものではない。



第293図　ARY　14号住居址

遺物　出土量は比較的多いが17号住居址の遺物が混入している可能性がある。方形の穴の周辺に床面密着で土師器甕・高坏があり、漆黒色土下層から小形甕・高坏・坏・内面黒色の坏・高坏、須恵器蓋坏が出土した。他に、炭化した種子がある。

遺物から古墳時代後期後半と考えられる。（佐合英治）

16号住居址（第294図）

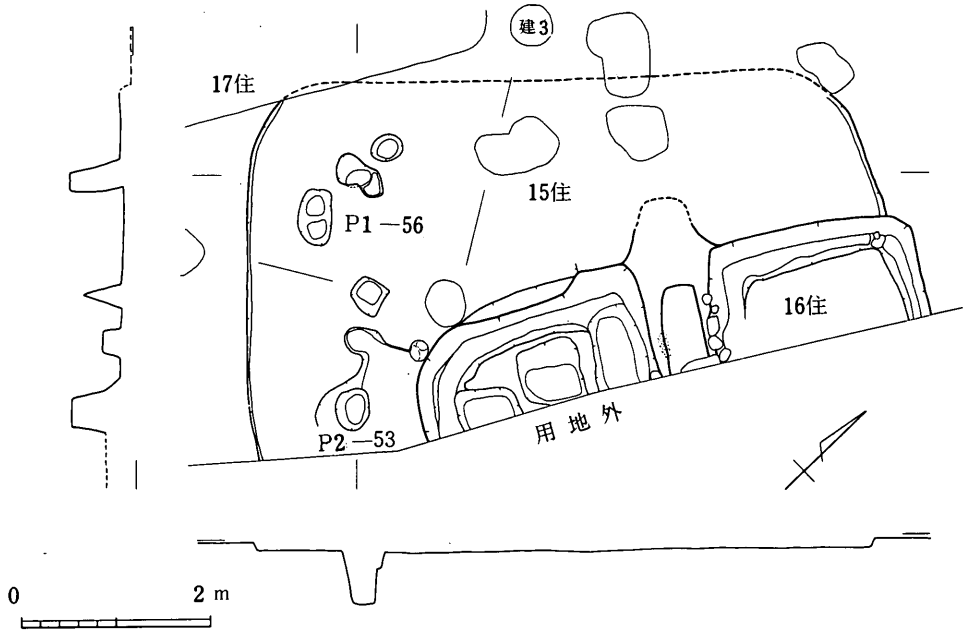
遺構　ARYDS52にカマドを検出した。15号住居址を切る。用地外部分がほとんどでわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は5.6×1.2m、主軸方向はN60°Wを示す。壁高は検出面から40～30cmあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。地山が黄色砂礫土のため壁面に石が出ている。周溝は幅20cm・深さ8～6cmで、調査範囲内はすべての壁下に認められた。床面は極めて軟かい。カマド南側に穴が3個ある。カマド寄りの長楕円形の穴ははり床され、上部に焼土・遺物があった。カマドは北西壁中央にあり状態良く残っていた。石芯粘土カマドで袖先端に天井石を持つ形態である。両袖の芯石は比較的大きな石を使っている。天井石は長径70cmの花崗岩で、焼けてボロボロに風化していた。支脚は長さ20cmの石を直立させている。

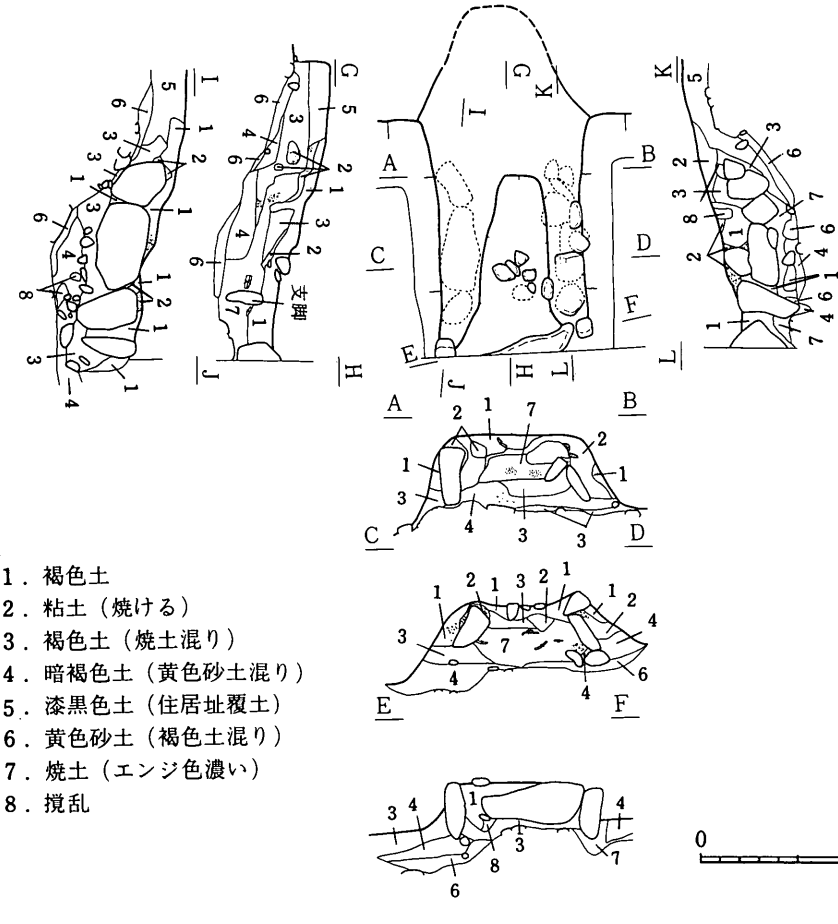
遺物　調査面積が狭い割に出土量は多い。カマド中に小形甕片が入っていた。土師器坏の完形品も出ている。他に、土師器壺・甕片がある。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。（佐々木嘉和）

17号住居址（第295図）

遺構　ARYDR50を中心に検出され、南東壁以外は14号住居址に上部を切られている。南西壁は14号住居址と同様溝址4に切られているがほぼ全体を調査した。主軸方向はN58°Wを示し、長さ4mを測り、主軸に直交する長さは想定で4.2m程と考えられる隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は23～19cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝はカマド西側と北東壁中央・南東壁中央の壁





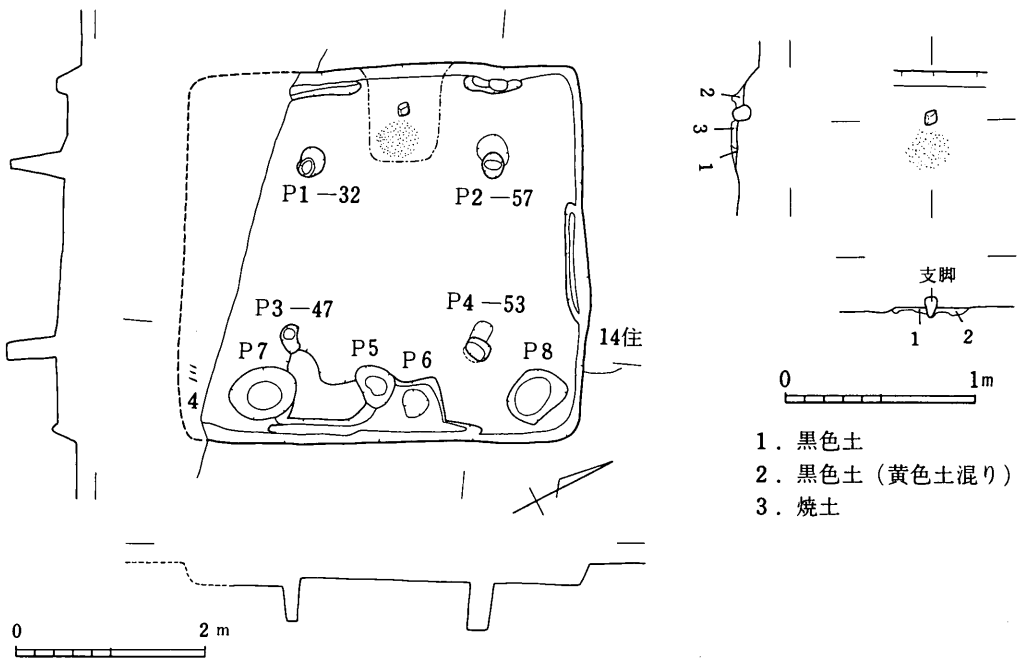
1．褐色土
2．粘土（焼ける）
3．褐色土（焼土混り）
4．暗褐色土（黄色砂土混り）
5．漆黒色土（住居址覆土）
6．黄色砂土（褐色土混り）
7．焼土（エンジ色濃い）
8．撹乱

第294図　ARY　15号・16号住居址

直下にあり、幅12cm前後・深さ7cmを測る。床面は北西壁側から南東壁側へ10cm程傾斜しており軟かい。主柱穴は4本確認した。比較的小さな掘り方で、P4は南に向ってわずか斜めに掘られている。また、4本とも掘り方に対して斜めに浅い掘り込み部分があり、柱を抜き取っている可能性がある。南東壁中央のP5・P7の間は3cm程高くはり床状になっており、P6の周囲は9cm前後低い。P5・P6は深さ40・21cmを測り、全体が入口部施設と考えられる。P7・P8は深さ30・23cmを測り本住居址に伴うと考えられるが、性格は不明である。カマドは北西壁中央からやや北寄りに位置するが、14号住居址に壊されており、支脚と散乱した焼土を確認するにとどまった。

遺物　床面密着遺物は少なく、14号住居址のはり床中のものも含まれている。土師器甕・坏・高坏がある。鉄製品として鉄斧がカマド左側から、鎌がカマド手前の床面上から出土した。

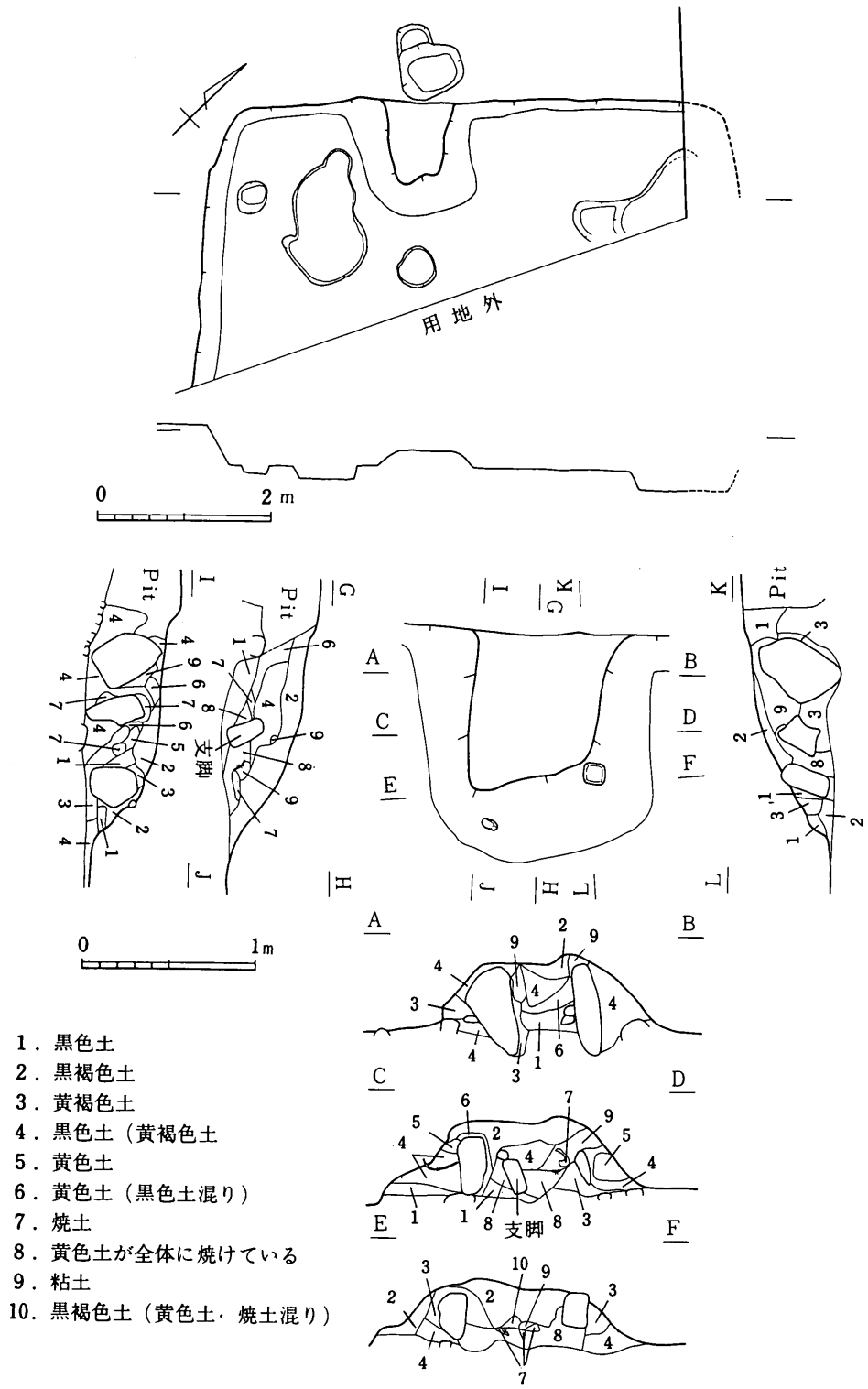
遺物等から古墳時代後期前半の住居址である。　（佐合英治）



第295図　ARY　17号住居址

18号住居址（第296図）

遺構　ARYDY52を中心に検出した。北西壁側⅓程を調査し、東側は用地外となる。主軸に直交する長さは5.7mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸方向はN43°Wを示す。壁は北西壁がほぼ垂直を成し、51cmを測り、南西壁は北西に比べて緩やかで、47cmを測る。北隅部は道路および用水路下のため、調査最終段階で壁下部のみを確認した。床面はほぼ平坦で部分的にたたき状の箇所を認めるが、地山が砂質のため全体に軟かく、カマド北側では地山が露出する。穴は4本確認したが、カマド左側と前の穴の上部にははり床が施されていた。深さはそれぞれ18・6cmと浅いものであ



1．黒色土
2．黒褐色土
3．黄褐色土
4．黒色土（黄褐色土
5．黄色土
6．黄色土（黒色土混り）
7．焼土
8．黄色土が全体に焼けている
9．粘土
10．黒褐色土（黄色土・焼土混り）

第296図　ARY　18号住居址

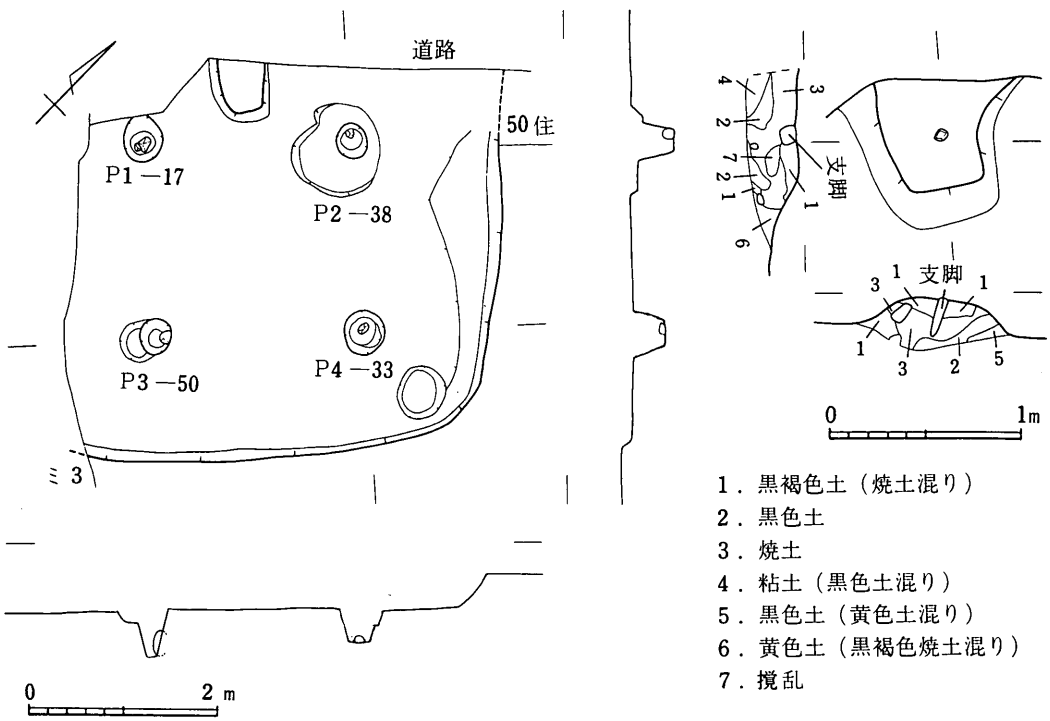
る。他の穴は覆土等より後世の穴と考えられる。カマドは北西壁西隅寄りに位置し、両袖に自然石を3個ずつ用いた石芯粘土カマドである。それぞれの石は間隔を置いて直立している。焼土は小さなブロック状に認められ、カマド壁が焼け落ちたものと考えられる。

遺物　遺物はカマド右側に集中出土し、完形およびほぼ完形品は壁直下に並んでいた。石製品はカマド左側壁寄りに集中して出土した。土師器甕・小形甕・高坏・坏、須恵器高坏・蓋坏、石製紡錘車、臼玉・勾玉・剣形・有孔円板、用途不明鉄器片がある。

出土遺物から古墳時代後期前半の住居址である。　（佐合英治）

19号住居址（第297図）

遺構　ARYDX50を中心に検出された。50号住居址を切り、溝址3に切られる。北西側は道路下のため未調査で、北西壁と南西壁を除く住居址範囲の8割を調査した。主柱穴・カマド位置などからの想定規模4.5×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN49°Wを示す。壁は緩やかな立ち上りで、北東壁・南東壁とも34cm前後を測る。床面は50号住居址を切る部分がはり床でやや軟かく、全体的には凹凸はあるものの比較的堅い床面である。主柱穴は4本確認したが、各穴の深さは一定ではない。どの穴にも石が入っており、柱を固定するのに用いたと考えられる。カマ



第297図　ARY　19号住居址

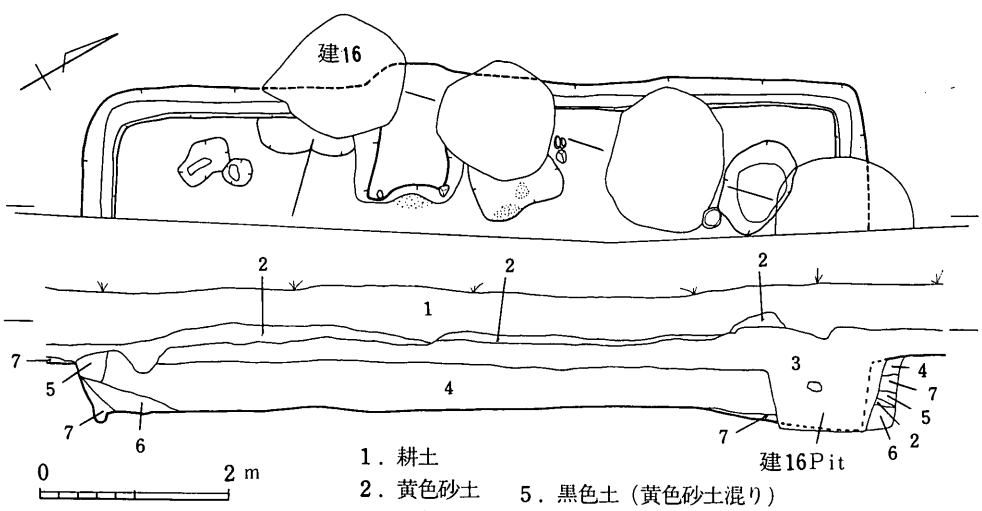
ドは北西壁に位置するが、袖部前側の⅔を確認したのみである。焼土はたき口部を中心にかなり厚く認められ、永く使用されたと考えられる。

遺物　出土量は少なく床面密着遺物は細片である。図化できる遺物はカマド・覆土下層から出土した。土師器甕・甑・鉢・坏・高坏、土玉・臼玉、砥石、用途不明の鉄片がある。

出土遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐合英治）

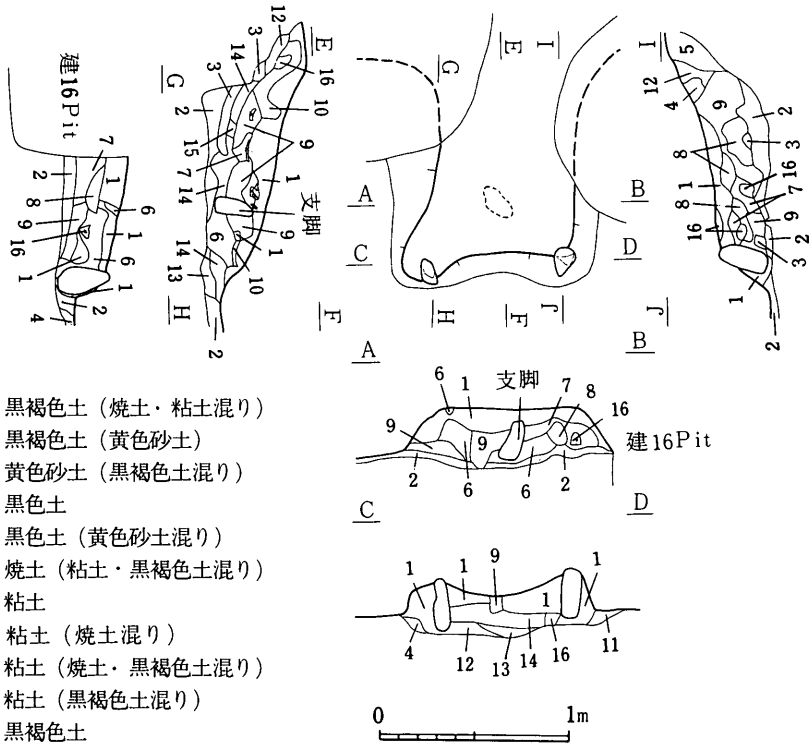
20号住居址（第298・299図）

遺構　ARYCU54を中心に検出された。住居址の大部分が用地外にかかるため、カマドを中心に北西壁部のみ調査した。建物址9に切られているが、検出面では確認できず、全体を床まで下げた段階で把握した。主軸に直交する方向の長さは8.3mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN58°Wを示す。 壁は建物址9に切られる部分以外は調査範囲で全面確認し、壁高は57～45cmを測り、垂直の壁面を成す。周溝はカマド部分及び建物址9に切られる部分以外の壁直下で検出した。幅は22～16cm・深さ14～9cmを測り、しっかりとしたものである。床面は全面黄色砂土まで掘られ、たたき状になった堅いものである。主柱穴は調査範囲内で認められず、用地外部分に位置するものと思われる。北隅には100×50cmの楕円形で深さ67cmを測る穴があり、完形の土師器の甕が2個入っており、貯蔵穴と考えられる。カマドは西壁中央南寄りに位置する石芯粘土カマドである。両袖の先端にそれぞれ1個の石を使い、石を使った支脚も残っていた。粘土・煙道基部等の残存状態は良いが、一部建物址9に切られている。たき口の焼土も多く、かなり使われ



第298図　ARY　20号住居址

ていた様子が観察された。カマド北側のはり床下に焼土を持ち、5㎝程の凹む部分がみられ、位置などから古いカマドの痕跡と考えられる。



1．黒褐色土（焼土・粘土混り）
2．黒褐色土（黄色砂土）
3．黄色砂土（黒褐色土混り）
4．黒色土
5．黒色土（黄色砂土混り）
6．焼土（粘土・黒褐色土混り）
7．粘土
8．粘土（焼土混り）
9．粘土（焼土・黒褐色土混り）
10．粘土（黒褐色土混り）
11．黒褐色土
12．黒褐色土（焼土混り）
13．焼土
14．焼土（黒褐色土混り）
15．焼土（黒褐色土・黄色砂土混り）
16．撹乱

第299図　ARY　20号住居址カマド

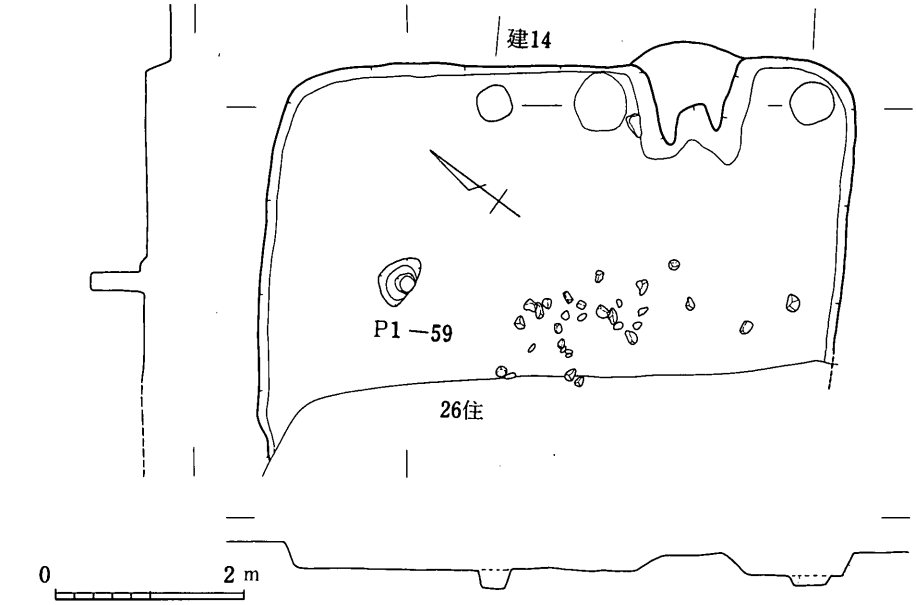
遺物　わずかの調査範囲であるが、出土量は多い。床面ないしその直上がほとんどで、貯蔵穴からは完形の甕が出土している。土師器・甕・坏・高坏、有孔円板が出土した。

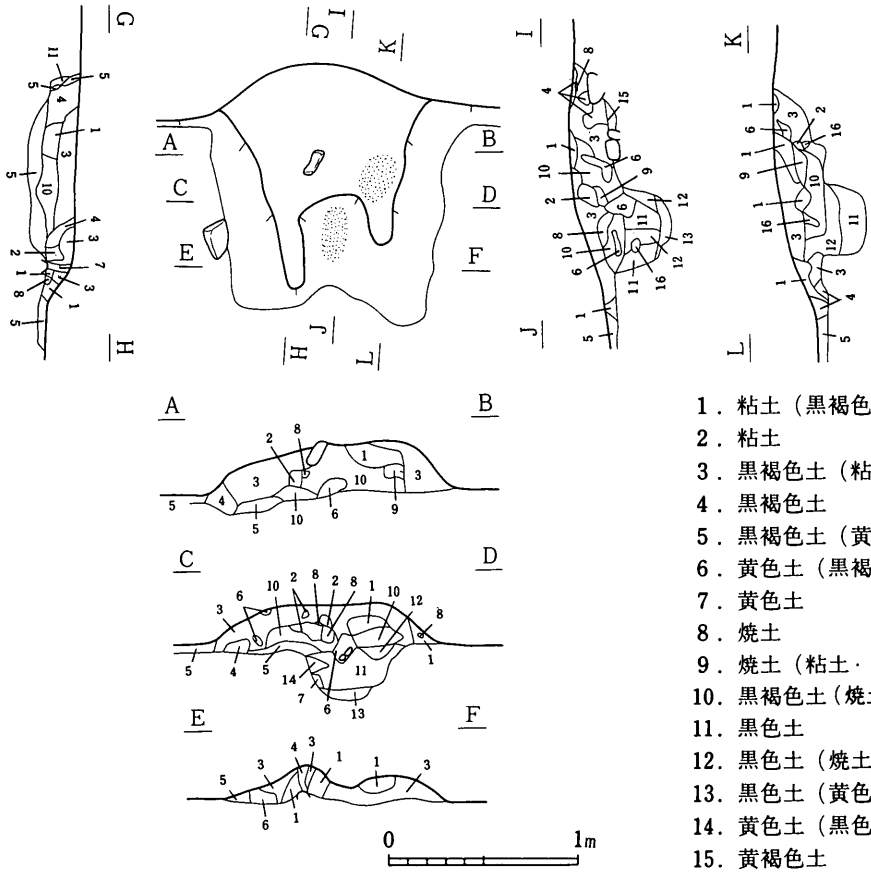
遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。

（山下誠一）

21号住居址（第300図）

遺構　ARYCD50を中心に検出された。26号住居址・建物址14を切っている。検出面に黒色土の堅くなった部分と、15㎝前後の礫と遺物が多く集中する生活面らしい部分がみられ、落ちこみがはっきりせず、プラン把握には苦労した。主軸に直交する方向は6.2mを測り、隅丸長方形と推定される竪穴住居址で、主軸方向はN79°Eを示す。壁は26号住居址と重複する部分以外は全面確かめられ、壁高は30～13㎝を測る。主柱穴はＰ１で、それ以外の穴は精査したにもかかわらず確認できなかった。カマドは北東壁東寄りに位置する粘土カマドである。袖石は使われなかったのか、土層断面観察時にも抜かれた痕跡等はみられなかった。建物址14の穴の上にカマドが構築されていて、切り合い関係の最終的な決め手となった。





1．粘土（黒褐色土混り）
2．粘土
3．黒褐色土（粘土・焼土混り）
4．黒褐色土
5．黒褐色土（黄色砂土混り）
6．黄色土（黒褐色土混り）
7．黄色土
8．焼土
9．焼土（粘土・黒褐色土混り）
10．黒褐色土（焼土混り）
11．黒色土
12．黒色土（焼土少し混り）
13．黒色土（黄色土混り）
14．黄色土（黒色土混り）
15．黄褐色土
16．撹乱

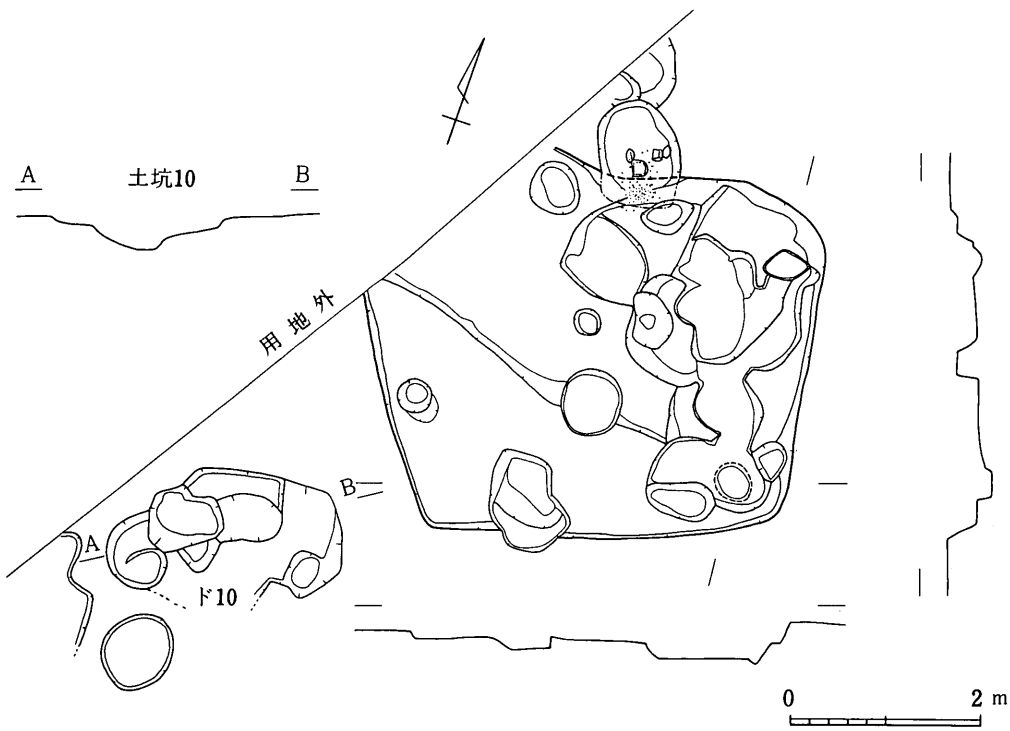
第300図　ARY　21号住居址

遺物　量は少ない。土師器甕・鉢、須恵器蓋坏・高坏、臼玉の他、住居址ほぼ中央部の床面上には、編物石が31個散乱していた。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

25号住居址（第301図）

遺構　ARYCC46を中心に検出された。北西は用地外となるが、ほぼ全体を調査した。後世の穴との重複が著しく、適格なプラン把握ができず、かなり歪んだものとなった。ほぼ3.8×4.6mの規模で、主軸方向はN21°Wを示す隅丸不整方形の竪穴住居址である。覆土中には多量の石が混入しており、南壁中央部分には径45cm前後の石が含まれ、集石となる可能性があるが確証はない。他の部分の石は径20cm前後を中心に5cm以下のものもあり、住居址壁ぎわは検出面で認められ、中央部の石は床面に密着している。壁高は17～5cmを測り、緩やかな壁面を成す。床面は南側できわめて軟かい床面を検出した。北側では検出できず南側より9～5cm低くなり別遺構の存在も考えられたが確認できなかった。カマドは焼土と遺物の出土状態から、北壁に位置していたと考えられるが、穴に壊されており原形をとどめていない。数個の石が認められ石芯粘土カマドであ



第301図　ARY　25号住居址、土坑10

ったと考えられる。

遺物　土師器壺・甕・甑、内面黒色の坏、須恵器壺・長頸瓶・蓋が出土した。

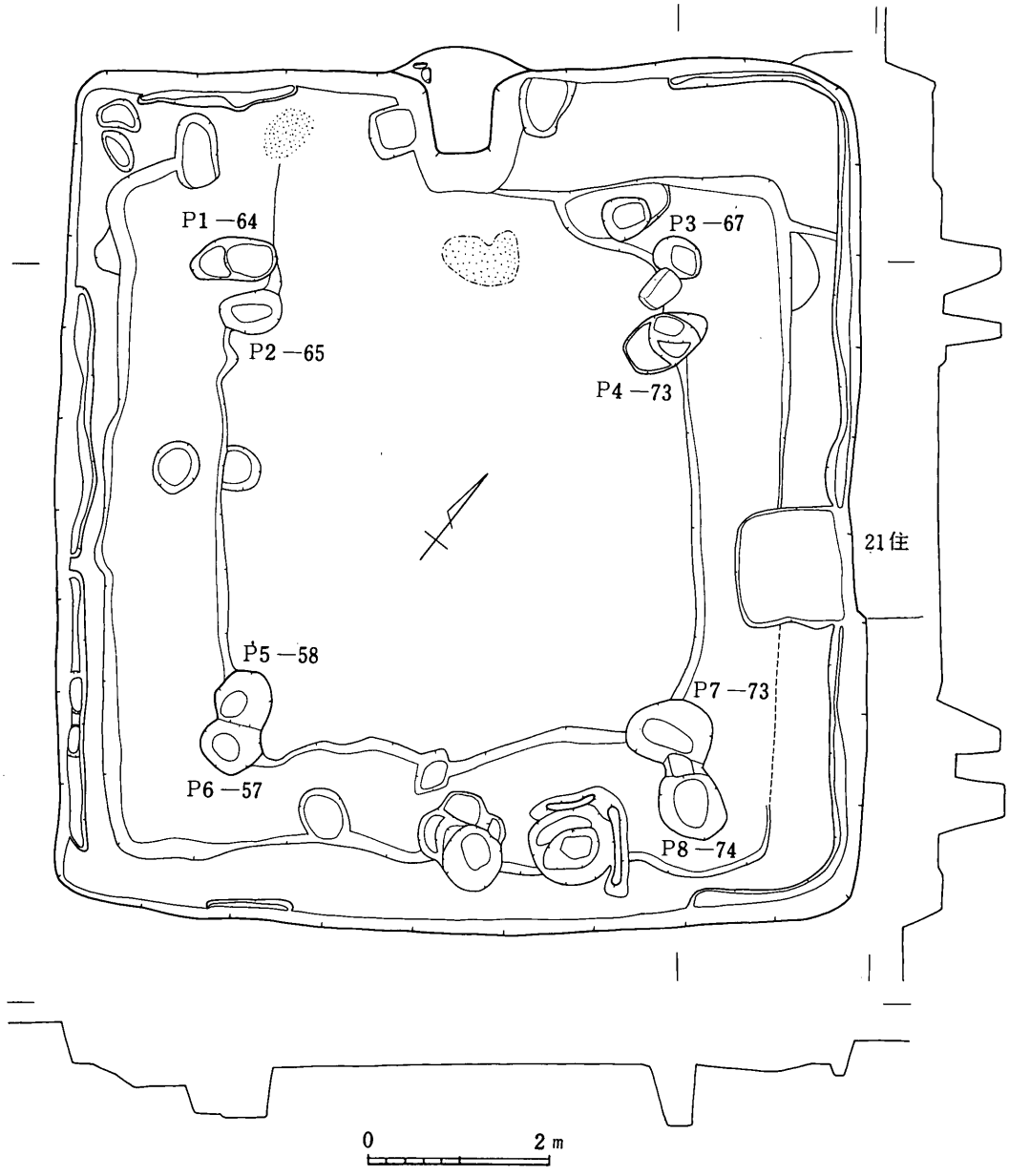
穴との切り合いで新しい遺物も含まれる可能性があるが、主な遺物から古墳時代後期中頃の住居址と考えられる。（佐合英治）

26号住居址（第302・303図）

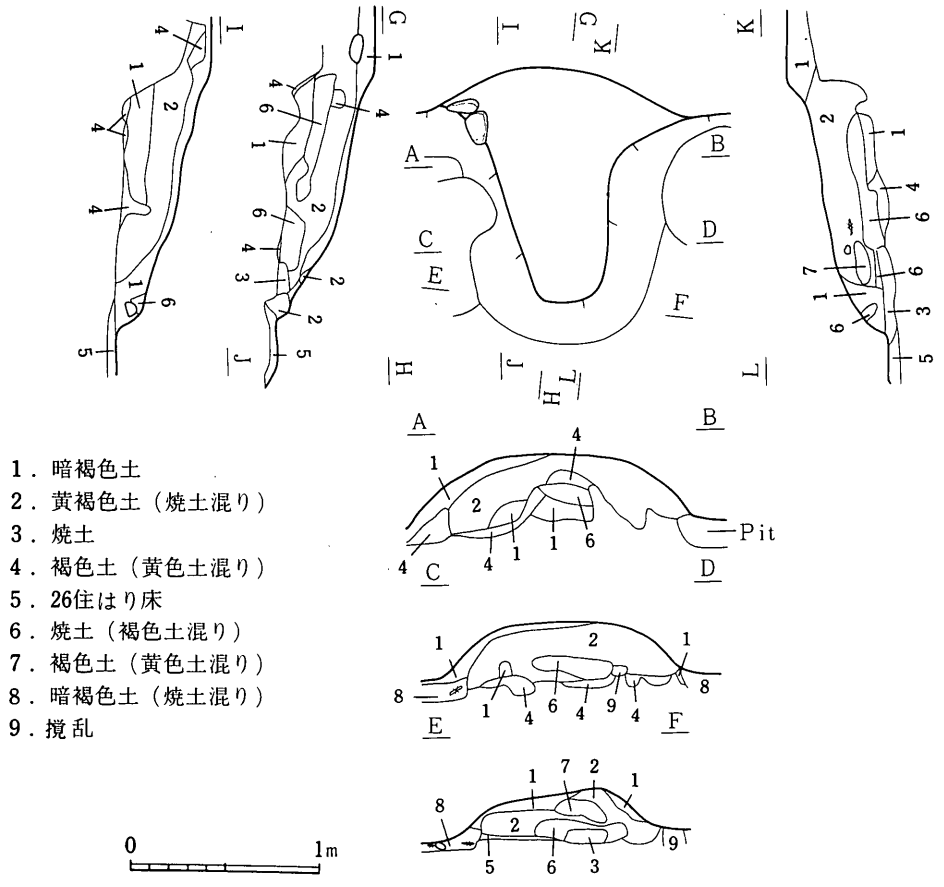
遺構　ARYCA49を中心に検出した。21号住居址に切られる。方形の竪穴住居址で、規模は9.5×9mと大形であり、主軸方向はN41.5°Wを示す。プランは地山面に黒土が入っており、明瞭に検出できた。覆土は大きく3層に分かれ、上層の黒土がレンズ状に入り、厚い所で40cmあった。壁高は検出面から50cmあり、ほぼ垂直である。周溝は切れる所があるが、ほぼ壁下全周にあり、幅20～10cm・深さ10～3cmと住居址規模に比して小さい。床面はたたき状で堅く、主柱穴の外側は壁ぎわの約50cmを残し1.4m幅ではり床されていた。はり床の厚さは20～10cmあり、黒褐色土であった。はり床部分の外周が最初の竪穴範囲と思われる。カマド東側の床面は他の箇所より7～5cm高くなっている。主柱穴は4箇所に2本ずつあり、内側のP2・P4・P5・P7が拡張前の主柱穴で、P1・P3・P6・P8が拡張後の主柱穴と思われる。平面形は一様ではないが平均して大きく深い。南壁下のほぼ中央にある2個の穴は、入口部施設と思われる。P8寄りの穴は、掘り方平面が隅丸方形で縁部にL字形に土手があり、深さは80cmある。ほぼ中央の穴は深さ75cmである。カマドは北西壁中央にあり、粘土カマドと思われるが残存状態が悪く、たき口部の焼土を確認したのみである。カマド右側穴上の壁に黒っぽい土と焼土の混じる部分があり、拡張前住居址のカマド煙道と思われる。また、カマド前の床面が相当に焼けており、最初のカマドの火床であろう。P3とP4の中間に長径50cmの焼けて風化した花崗岩があり、カマド用材と思われる。

遺物　出土量は多く、北隅と南隅付近に特に多い。その他全体から出土したが、中央部は少なかった。完形土器はほとんどないが、須恵器甕（残存2/3）がカマド右の壁下にあり、石と甕片を台にして置かれていた。完形の手づくねがP3と東壁の中間の壁寄りで出ている。臼玉・土玉が比較的多く出土したが、特に集中する箇所はなかった。他に、土師器甕・甑・坩・坏・高坏、杓子形土製品、須恵器甕・蓋・高坏、ガラス玉、土製紡錘車、砥石・編物石、鉄製品、炭化種子などが出土している。

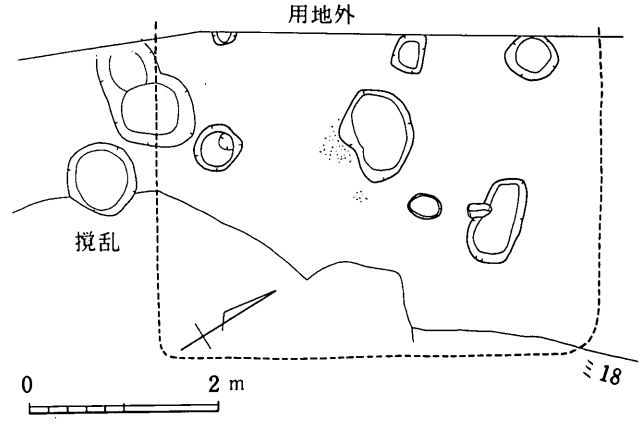
出土遺物から古墳時代後期前半であろう。（佐々木嘉和）



第302図　ARY　26号住居址



第303図　ARY　26号住居址カマド



第304図　ARY　28号住居址

28号住居址（第304図）

遺構　ＡＲＹＤＰ45を中心に検出した。溝址18に切られ、攪乱を受け、用地外にかかる。黄色砂礫土（地山）に褐色土のわずかな落ち込みがあり、遺物も比較的まとまって出土したので、住居址とした。方形の竪穴住居址と思われるが、明確な遺構として把握できず、遺物出土範囲4.7×3.4mを住居址とした。床面は確認できなかった

が、高坏が地山上面につぶれて出土し、この面を床面とした。穴はいずれも深さ20～10cmと浅く、本址に関連するか否かは断定できない。

遺物　遺構の状態の割にはやや多く出土しており、土師器甕・甑・坏・高坏、砥石などが出ている。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）

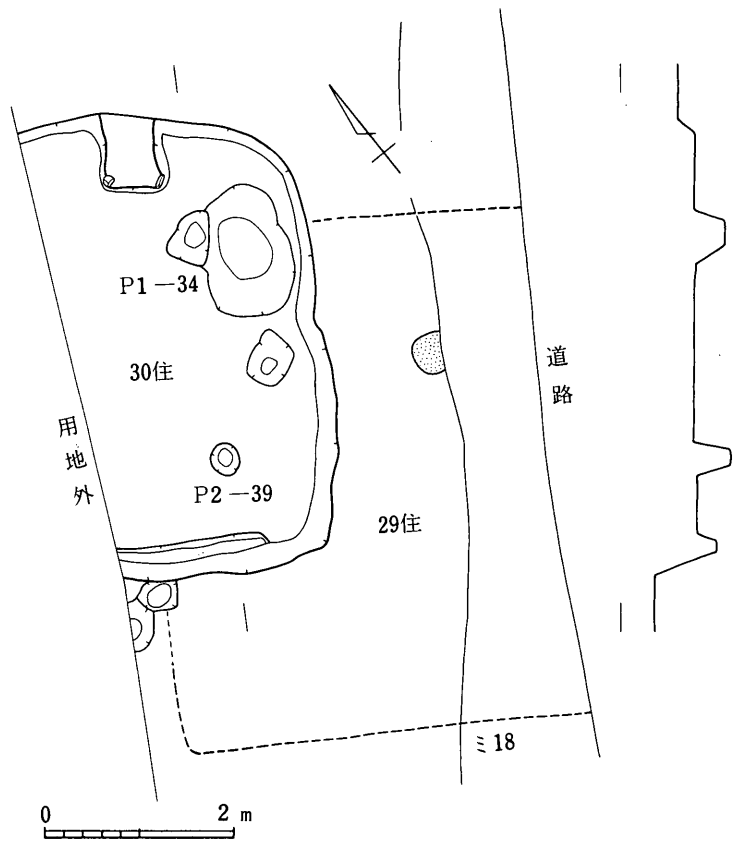
30号住居址（第305図・306図）

遺構　ＡＲＹＤＳ45を中心に検出した。29号住居址を切っている。用地外にかかるため約半分調査した。隅丸不整方形の竪穴住居址で、調査範囲は５×2.8m、主軸方向はＮ32°Ｅを示す。覆土中には石が多く入っていたが、床面に近く廃棄時に投入したものであろう。壁高は検出面から40～14cmあり、壁面は緩く傾斜している。幅20cm・深さ13～２cmの周溝を南壁下に検出した。床面は軟かく地山の石が露出している。主柱穴は２本確認したが、平面形はそろっていない。カマドは北東壁にあり、残存状態は良好であった。両袖先端のみに石を持つ石芯カマドの形態である。火床と思われる焼土は支脚の前にあった。支脚は高さ15cm、正面・側面幅が10cmの石を使っている。

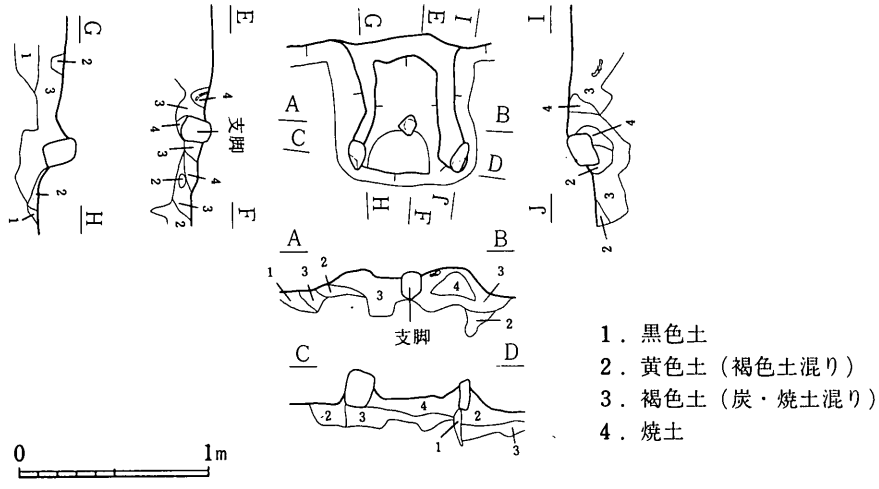
遺物　出土量は多い。土師器甕・坏・高坏・坩・手づくね、須恵器瑞口縁部、鉄製品など出ている。

出土遺物から古墳時代後期前半と思われる。

（佐々木嘉和）



第305図　ARY　29号・30号住居址



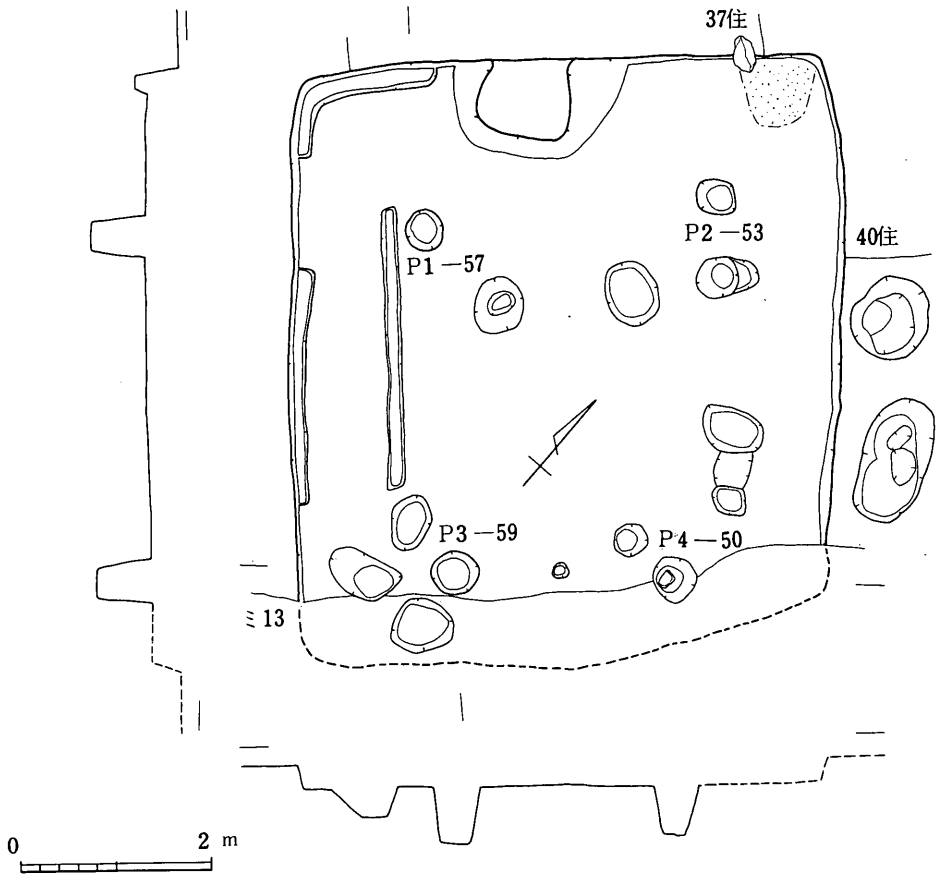
第306図　ARY　30号住居址カマド

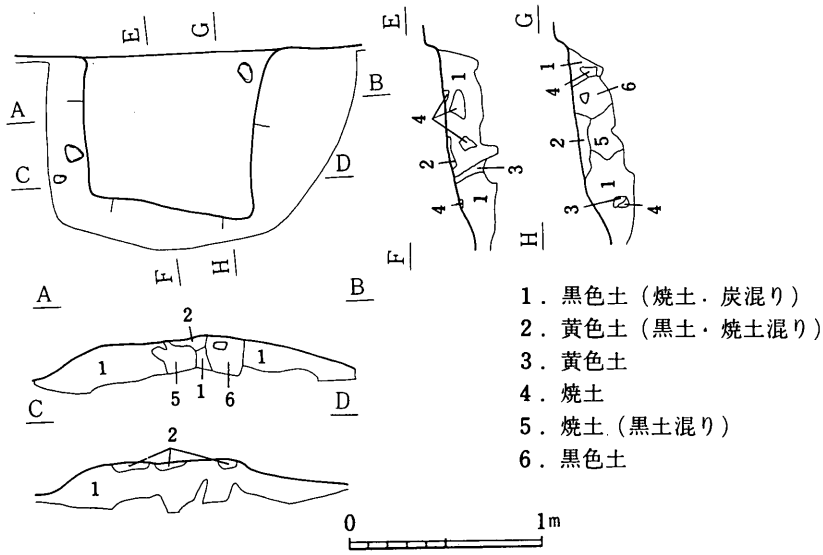
31号住居址（第307図）

遺構　ＡＲＹＥＫ48を中心に検出した。37号･40号住居址、溝址13に切られる。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は(5.8)×5.8m、主軸方向はＮ44°Ｗを示す。床面から覆土中に直径25～15cmの石が散乱し、廃棄後長期にわたり投入されたものと思われる。壁高は検出面から20cmあり、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は幅15cm・深さ10～６cmを測り、西隅と北西壁下の一部にある。床面は堅く良好であった。主柱穴は位置に若干疑問があるが、深さなどからＰ１～Ｐ４をそれとした。平面は不整円形で直径50～40cmである。Ｐ１の西壁側に溝があり、幅20cm弱・深さ10cmでしっかりと掘られており、間仕切り的な性格が考えられる。カマドは北壁中央よりわずか西寄りにある。残存状態が悪く粘土カマドと思われるが、煙道を確認したのみである。煙道は37号住居址床下にある。隅に火床状の焼土があり、床面より10cm高いが、性格等不明である。

遺物　出土量は比較的少ない。出土位置は床全面に散在しており、床面と床直上がほとんどである。土師器甕・甑・鉢・坩・坏・高坏、須恵器を模倣した瑯口縁片、須恵器甕・高坏、臼玉、鉄製品などが出ている。

出土遺物から古墳時代後期前半と思われる。　（佐々木嘉和）



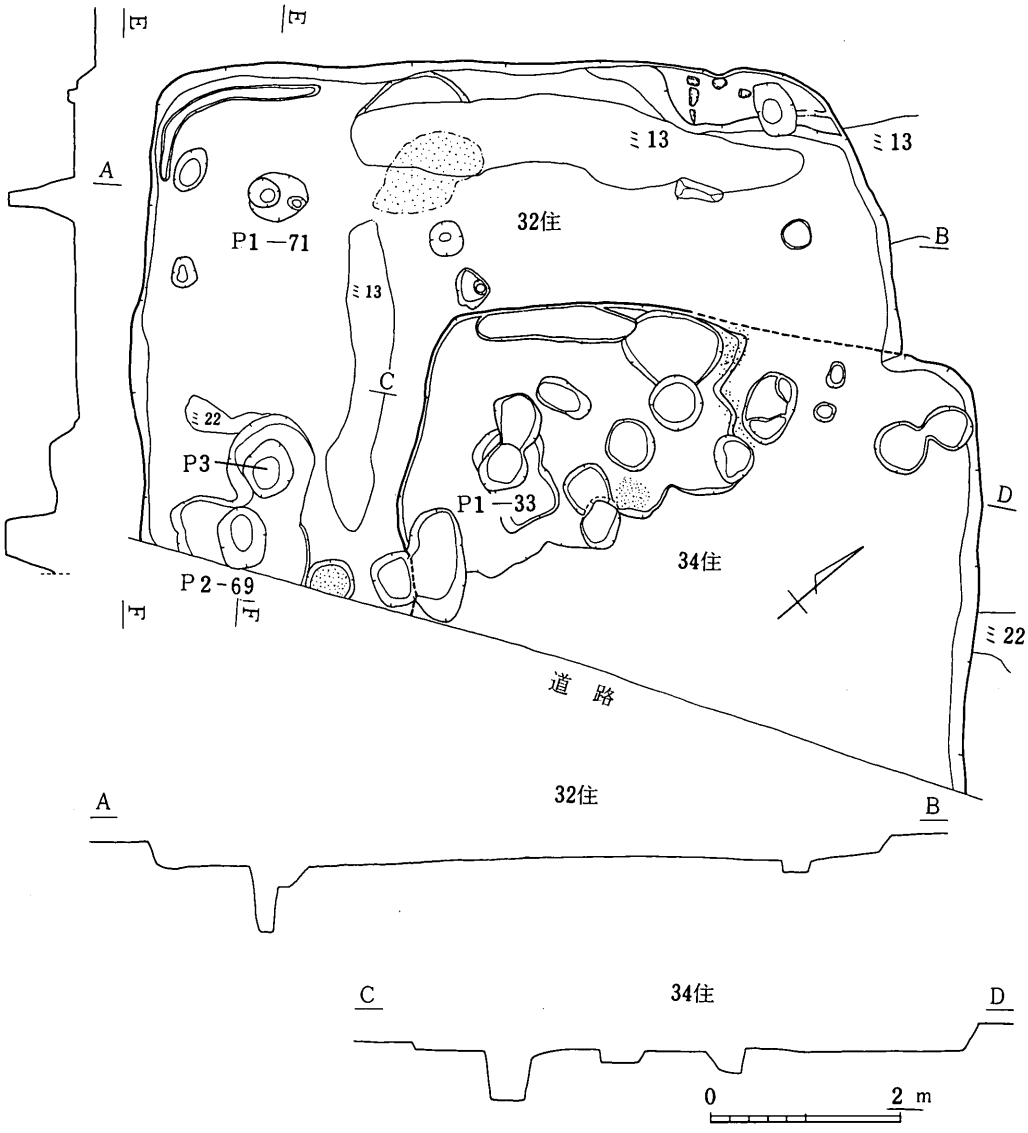


1．黒色土（焼土・炭混り）
2．黄色土（黒土・焼土混り）
3．黄色土
4．焼土
5．焼土（黒土混り）
6．黒色土

第307図　ARY　31号住居址

32号住居址（第308図）

遺構　ＡＲＹＥＥ48を中心に検出された。東側は大きく34号住居址と重複し、溝址13の底部が床面を切っている。南東壁側は用地内を斜めに横断する生活道路のために未調査となった。南西から北東の長さは7.9mを測り、主軸方向はN51°Wを示す大形の隅丸方形の竪穴住居址である。覆土上層には43～10cmの石が入っており、集石状を成す箇所もある。また、焼土と炭が認められ火事の住居址と考えたが、確証は得られなかった。壁高は41～27cmでほぼ垂直であるが、一部は緩やかな壁面を成す。周溝は西隅のみに確認され、壁より10～５cm離れ、幅15cm・深さ６cm程を測る。床面は凹凸があり、北東壁側から南西壁側へ15cmも傾斜し、地山が砂質のため軟かである。主柱



第308図　ARY　32号・34号住居址

穴は北東側が検出できず確実でないが、Ｐ１・Ｐ２と考えられる。Ｐ３も深さ46cmを測り、主柱穴となる可能性がある。北隅壁には地山を掘り残した施設がある。床面より22cm高く、壁に沿って1.6×0.6mの範囲で黄色土にほぼ四角の自然石を立てて埋めてあり、当初カマドではないかと考えたが、焼土等は認められず、手前側を溝址13に切られており、原形・性格は不明である。カマドは後世の穴と溝址13に完全に壊されているが、焼土の状況から北西壁中央やや西寄りに位置していたと考えられる。この焼土は床面より22cm高い所から床直上まで認められ、たき口部分のものと考えられる。

遺物　完形品はなく、覆土上層から下層まで出土して集中する箇所もない。土師器小形壺・甕・高坏・坏がある。

遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐合英治）

33号住居址（第352図）

遺構　ＡＲＹＥＮ51を中心に検出された。表土から検出面まで浅いうえ、桃耕作用溝の攪乱を受けていて、プランを把握するのに苦労した。北・東側を溝址８・９に切られ、南・東側は用地外にかかるため、2.8×1.7mの範囲を調査したのみで、プラン・規模・主軸方向などは把握できなかった。隅丸の竪穴住居址である。壁は西・南壁の一部が確認され、壁高は20～10cmを測る。床面は黄色砂土まで掘られ、わずかに堅くたたき状になっていた。南隅には70×50cmの楕円形を呈し深さ43cmを測る穴があり、貯蔵穴と考えられる。

遺物　わずかに残る床面上から出土した。土師器坏・内面黒色の坏、須恵器蓋・高坏が出土した。

遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

34号住居址（第308図）

遺構　ＡＲＹＥＦ50を中心に検出した。南東側は生活道路が用地内を横断しているため調査できなかった。調査範囲内でも北東壁を除いて大半が32号住居址と重複する。当初本住居址覆土中に小石が混入した土があり、32号住居址にこの覆土が認められず、本住居址が切っていると考えたが、後の土層観察でこの覆土が32号住居址中心部のレンズ状堆積の一部とも考えられ、焼土も32号住居址同様に点々と認められ、本住居址が切られている可能性が強い。全体の半分程を調査し、南西から北東の長さは5.7mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向は、北西壁にカマドの存在していた可能性があり、N45°Wを示す。北東壁高は38cmを測り、明瞭に検出したが、32号住居址と重複する北西及び南西壁は、住居址構築時の掘り込みにより、範囲を把握した。周溝は北西壁西寄りに検出し、はり床を取り除いた後に確認され、床面からの深さは10cm前後で、幅

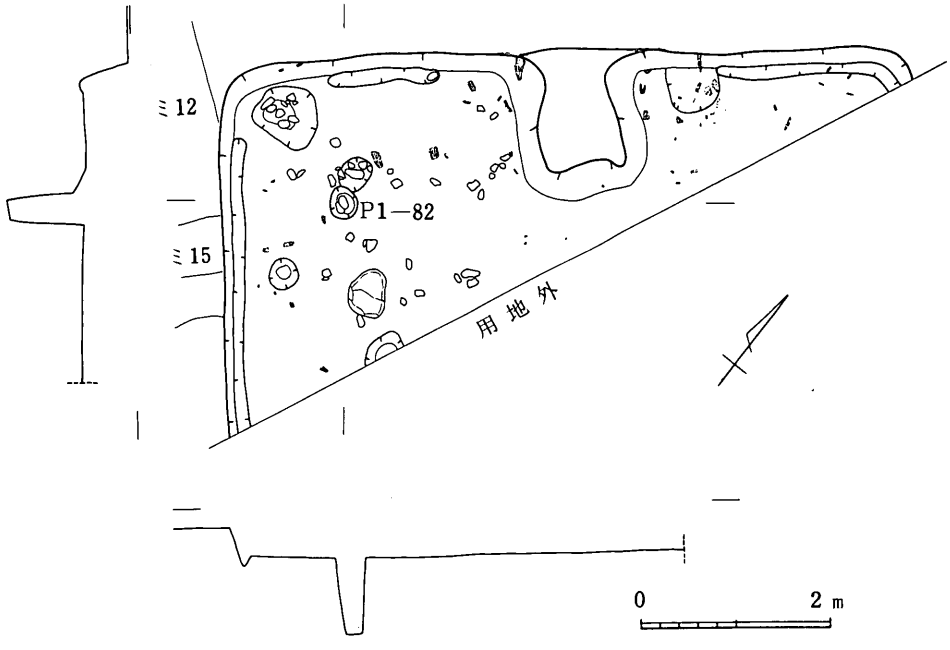
も38cmと広く、周溝でない可能性もある。床面は凹凸があり総じて軟かく、西隅部は住居址構築時に大きく掘り凹め、その上を6～2cmはり床していた。主柱穴と考えられるP1を確認したが、周溝と同様にはり床下に検出され、他の主柱穴は確認されず、やや疑問が残る。住居址中央より西に寄った床面上と北西壁中央部分から中心に向う2箇所に細長く焼土が認められ、後者には床面より7cm程浮いた状態で炭化材が伴出した。後世の穴と32号住居址に切られている可能性が強く、原形は全くとどめていないが、カマドはこの位置にあったと考えられる。

遺物　出土遺物には土師器小形壺・甕・甑・高坏・内面黒色坏、須恵器蓋、土玉・臼玉・勾玉、炭化米があるが、32号住居址との切り合い関係が不明確であるため、床面に密着した土師器甕、須恵器蓋坏などの数点が確実に本住居址のものである。

遺物から古墳時代後期後半の住居址と考えられる。　（佐合英治）

35号住居址（第309・310図）

遺構　ARYEJ51を中心に検出された。南西側で溝址12･15と重複するが、その新旧関係は把握できなかった。東側は用地外にかかり、全体の⅓程が調査できたのみである。主軸に直交する方向の長さは7.4mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN37°Wを示す。壁は北東側全面と南西側の一部が確認され、壁高は50～20cmを測り、垂直の壁面を成す。周溝はカマド周辺・北西

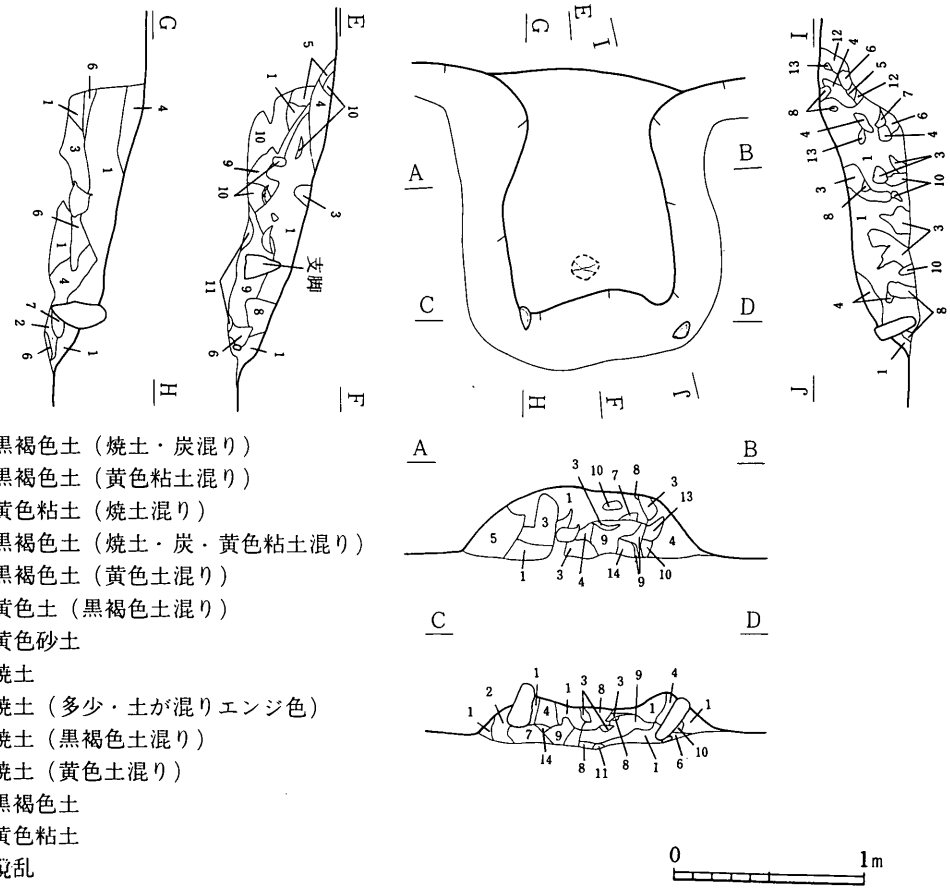


第309図　ARY　35号住居址

隅を除くほぼ全面の壁直下にあり、幅16～８cm・深さ14～６cmを測る。床面は全体が黄色砂土まで掘られ、堅くたたき状になり良好で、特にカマドの周辺が堅くふみしめられていた。部分的に黄色土のはり床がみられ、その下にも堅い床面があったことから、最低１回は床面が作り直されたと考えられる。主柱穴はＰ１で、他は用地外にかかり調査できなかった。北西隅直下には70×62cmの丸味を帯びた五角形を呈し深さ32cmを測る穴があり、貯蔵穴と考えられ、底には高坏の坏部が落ち込んでいた。Ｐ１の南東側には偏平な台石がある。カマドは北西壁中央やや西寄りに設けられる石芯粘土カマドである。両袖の先端にそれぞれ１個の石を使い、石を使った支脚も残っていた。右袖石はやや外側に倒れて、袖の粘土はやや内傾させて構築されていた。たき口の焼土も厚く、その付近に土器が多く落ち込んでいた。床面上・覆土には焼土・炭が散乱し、特にカマドの西側に多くみられ、火事の住居址である。

遺物　調査面積が少ない割には良好な資料が得られた。いずれも床面上ないしその直上からの出土である。土師器壺・甕・甑・坏・高坏、須恵器瑞片、土製紡錘車、鉄釘の他、カマド西側床面上には編物石が散乱していた。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）



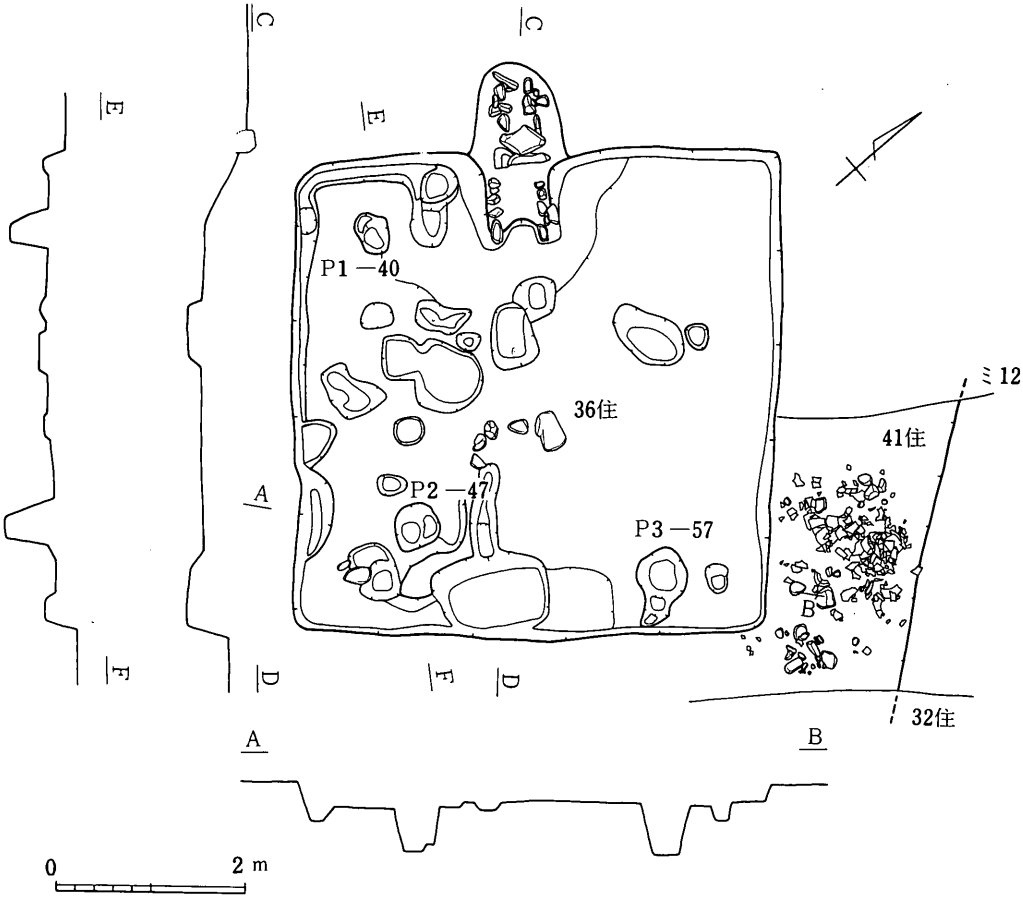
第310図　ARY　35号住居址カマド

36号住居址（第311・312図）

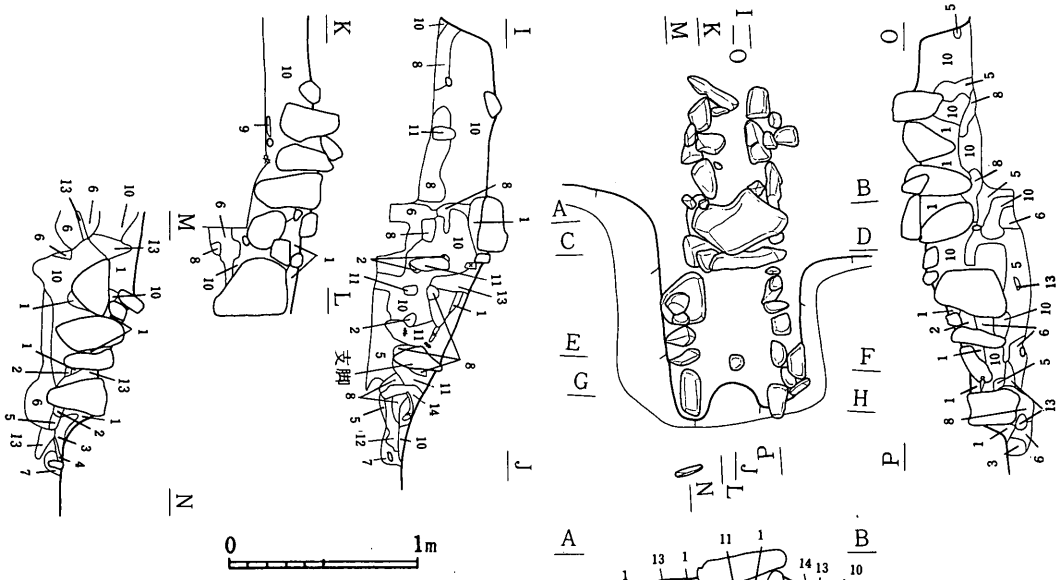
遺構　ＡＲＹＥＥ46を中心に検出した。41号・42号住居址、溝址12を切る。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は5.2×5.2mを測り、主軸方向はＮ54°Ｗを示す。壁高は検出面から40～20cmあり、緩い傾斜の壁面である。周溝は西隅壁下に検出したがごく浅い。床面は黄色砂礫土の地山で軟かい。主柱穴は３本確認したが北隅は検出できなかった。平面は不整方形で径50～40cmある。南東壁下にある大きな穴は20cmと浅いが、入口部施設と思われる。床面上に不規則な穴が複数あるが性格等不明である。カマドは北西壁中央の西隅寄りにあり、残存状態は良好で壁外煙道部も含め大規模なものである。石芯粘土カマドで石を多量に使ってあり、煙道も石組で天井石を乗せている。支脚は長さ25cmの石を用いている。芯石の掘り方が必要以上に深く、粘土中に遺物が混入しており、造り直した可能性もある。

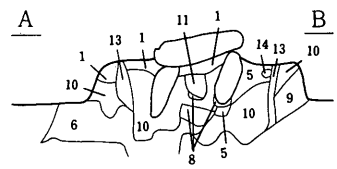
遺物　出土量はあまり多くない。カマド内と周辺に多く、カマド北側壁下からほぼ完形の小形甕と高坏が出土した。土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器甕・蓋、臼玉・土玉、炭化種子などが出ている。

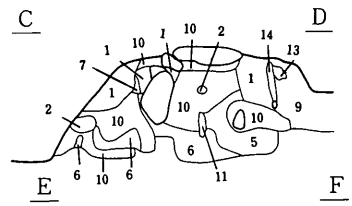
出土遺物から古墳時代後期であろう。　（佐々木嘉和）

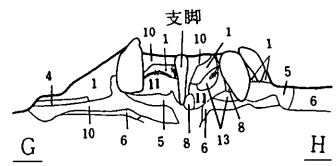


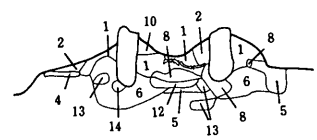
第311図　ARY　36号・41号住居址











1．黄色粘土
2．粘土（赤褐色に焼ける）
3．暗褐色土（床の上に使用中に入った土）
4．ハリ床
5．褐色土（黄色土混り）
6．黄色土（地山より粘質）
7．褐色土
8．焼土（褐色土が焼けて赤褐色土）
9．42住覆土（褐色土・暗褐色土混り）
10．住居址覆土（暗褐色土）
11．10の撹乱
12．焼土（黄色砂土の焼け）
13．撹乱（暗褐色土・焼土混り）
14．撹乱（黄色土）

第312図　ＡＲＹ　36号住居址カマド

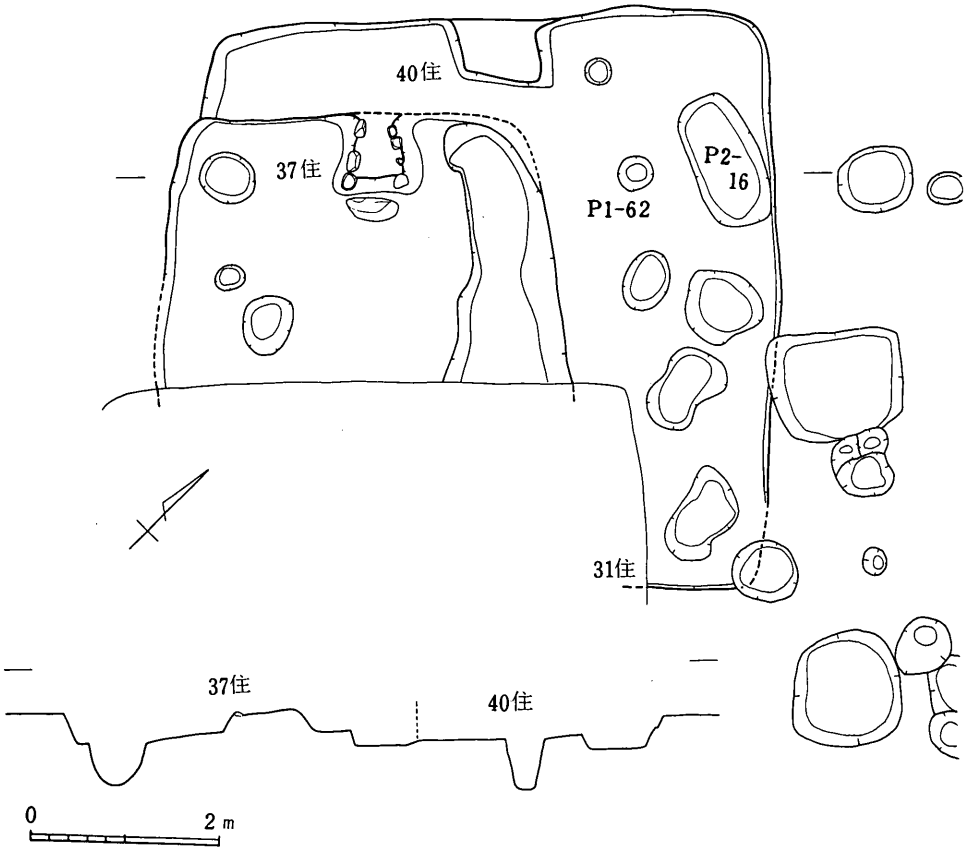
第312図　ARY　36号住居址カマド

37号住居址（第313・314図）

遺構　ＡＲＹＥＫ46を中心に検出した。31号･41号住居址を切っている。耕作の攪乱が地山まで達しており検出が難かしく、切り合い関係が確認できず、31号住居址を先に掘り上げたため覆土中にあったはずの壁・床の把握ができなかった。隅丸方形の竪穴住居址で、調査範囲は2.8×4.3m、主軸方向はN41.5°Wを示す。壁高は検出面から40～20cmを測るが、40号住居址床面からは5cmであり、緩傾斜の壁面である。主柱穴は地山面で検出に努めたが確認できなかった。北東壁下は溝状に5cm前後の浅い凹みとなっている。カマドは北西壁中央にあり、石芯粘土カマドである。天井石は長径56cmでカマド前の床面に落ちていた。支脚の奥にも石があり、カマド釜穴の奥、煙道部入口の天井石と考えられる。両袖の芯石は上下に調整痕が残っており、支脚は長さ19cmの石を用いている。

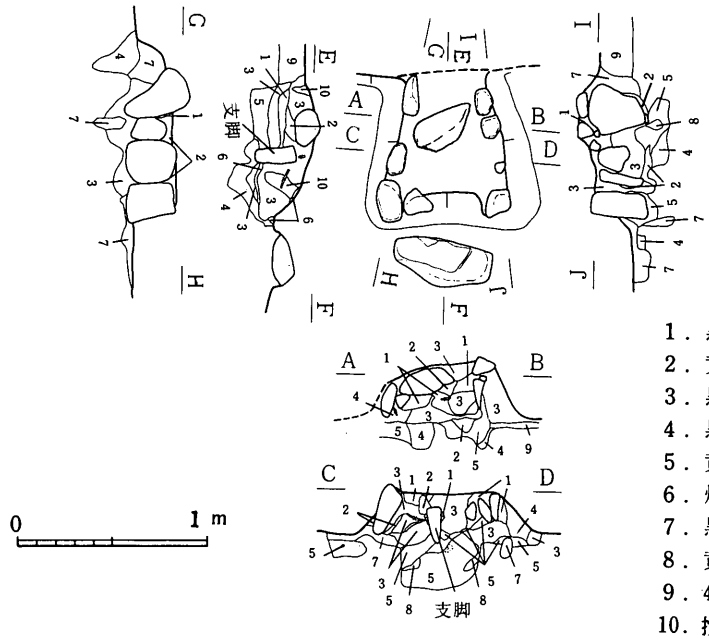
遺物　出土量は少ない。カマド中に遺物があり支脚の前に土師器坏が2個重なり、土師器甕片もあった。北東壁下の低くなった所からガラス玉が1個出ている。他に、須恵器坏・蓋がある。

切り合い関係及び遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）



第313図　ARY　37号・40号住居址

37住カマド

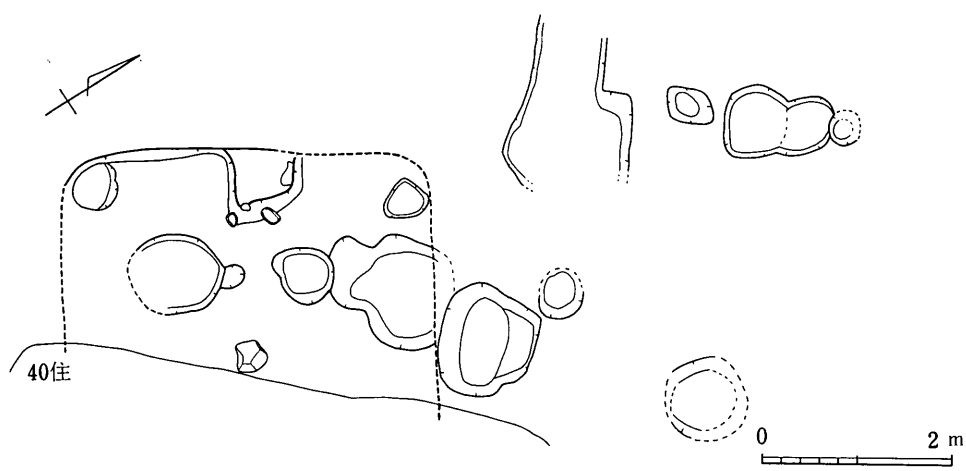


1．黒褐色土
2．黄色砂質粘土
3．黒色砂土（焼土混り）
4．黒色土（黄色砂土混り）
5．黄色砂土（黒色砂土混り）
6．焼土
7．黒色砂土
8．黄色砂土
9．40住床
10．撹乱（黒色砂土）

第314図　ARY　37号住居址カマド

39号住居址（第315・316図）

遺構　ＡＲＹＥＬ44を中心に検出した。40号住居址を切り、37号住居址・穴に切られる。耕作の撹乱が地山まで達しており、カマドと西壁が残存したのみである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は2.4×４m、主軸方向はＮ57°Ｗを示す。壁高は検出面から20cmあるが、残存部は少ない。床面は軟かく撹乱が著しい。両隅の穴は浅く、カマド前の穴は全部住居址より新しい。カマドは北西壁中央にあるが、残存状態は悪い。石芯粘土カマドと思われるが、原位置に残存す

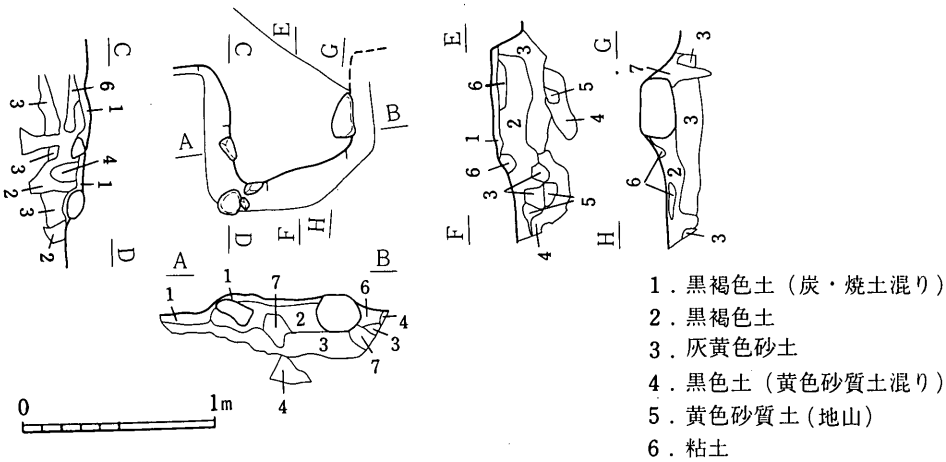


第315図　ARY　39号住居址

る芯石は1個である。火床部と思われる焼土層は確認できなかった。

遺物　土師器甕片など出ているが、ごくわずかである。

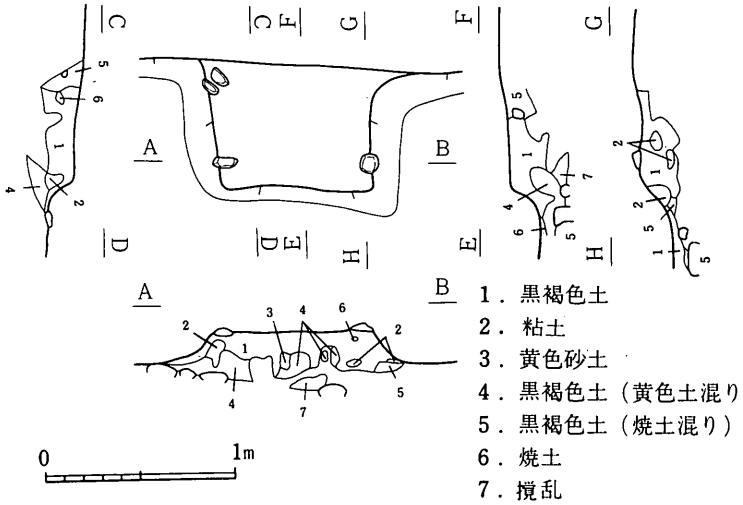
出土遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）



第316図　ARY　39号住居址カマド

40号住居址（第313・317図）

遺構　ＡＲＹＥＬ46を中心に検出した。31号住居址を切り、37号・39号住居址、穴に切られる。耕作の撹乱が著しく、検出時に新旧関係が確認できずに31号住居址を先に調査したために、その部分の壁は確認できなかった。隅丸方形の竪穴住居址で、規模は6×6ｍを測り、主軸方向はN45.5°Wを示す。壁高は検出面から30～10cmあり、やや急に傾斜する壁面である。床面は堅く良好であったが残存部は少ない。主柱穴は1本確認したのみで、掘り方平面は円形で直径35cmを測る。37号住居址のカマド断面図に穴らしい部分があり、本住居址の主柱穴の可能性もある。Ｐ2は平



第317図　ARY　40号住居址カマド

安時代の遺構で床面を切っている。カマドは39号住居址に壊され、残存状態は悪く形態不明である。

遺物　出土量は少ない。土師器甕・甑・坏・高坏、須恵器片などである。Ｐ２からは判読不明な文字を１字墨書した須恵器坏のほぼ完形品が出土している。

切り合い・遺物から古墳時代後期後半の住居址であり、Ｐ２は須恵器から平安時代であろう。

（佐々木嘉和）

41号住居址（第311図）

遺構　ＡＲＹＥＦ・ＥＧ47に須恵器片が集中して出土し、住居址と把えた。32号・36号住居址、溝址12に切られる。北東側に土色差がわずか認められ、壁と推定したが断定はできない。遺物の下にも床面らしい堅さは認められなかった。須恵器は大甕の破片であり、出土状況などから祭祀址の可能性もある。

遺物　出土量は多い。須恵器大甕３個体以上の破片が集中していた。高さ50cm弱の個体はほぼ完形で、それより１回り大きなものは口頸部と胴部半分を欠く。この２個体とは異なる破片が相当量ある。他に、土師器坏片、剣形、弥生時代の扁平片刃磨製石斧が出土した。

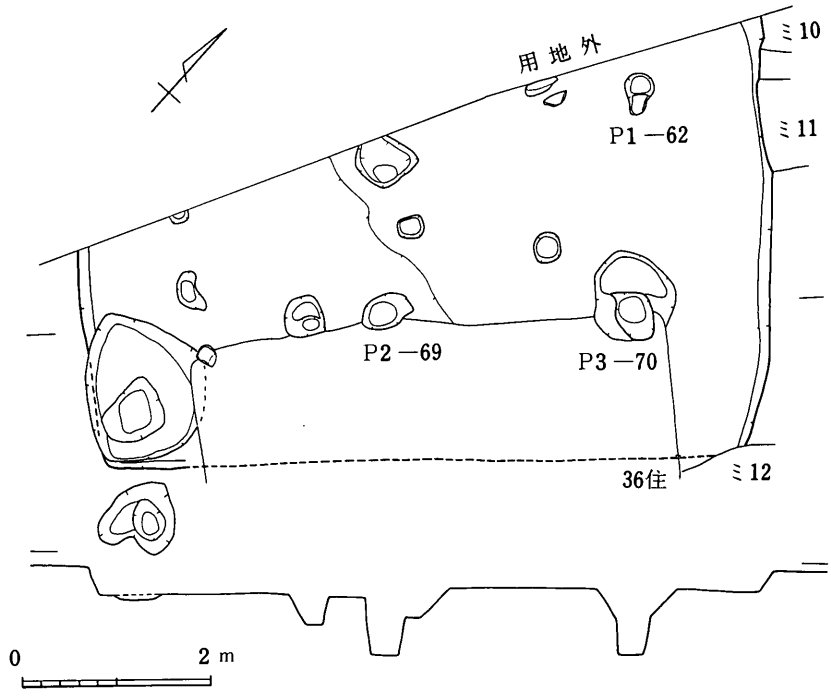
遺物から古墳時代後期前半の遺構であろう。　（佐々木嘉和）

42号住居址（第318図）

遺構　ＡＲＹＥＦ44を中心に検出した。36号住居址に切られる。溝址10・11・12との切り合い関係は確認できなかった。用地外にかかり約半分調査した。方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は7.4×4.4mである。壁面は検出面から20cmあり、緩傾斜の壁面である。床面は、北側半分の高い所がたたき状になって堅いが、南側の約15cm低い所は軟かかった。Ｐ１～Ｐ３の穴は深いが他の穴は20cm以下で浅く、主柱穴の確定はできなかった。南隅の大きな穴は住居址を切っている。用地外壁そばの２個の石は焼けており、火を使う施設のものであろう。床面の状態からみて、住居址が切り合っていた可能性もある。

遺物　調査規模に比較してやや多い。Ｐ１・Ｐ３の北側壁から鉄製品が多く出土した。土師器甕・甑・坏・高坏、土製円板、須恵器蓋坏・坏、鉄鏃・ヤリガンナ・鎌・茎片、ガラス玉・琥珀玉・臼玉などである。

出土遺物から古墳時代後期後半であろう。　（佐々木嘉和）

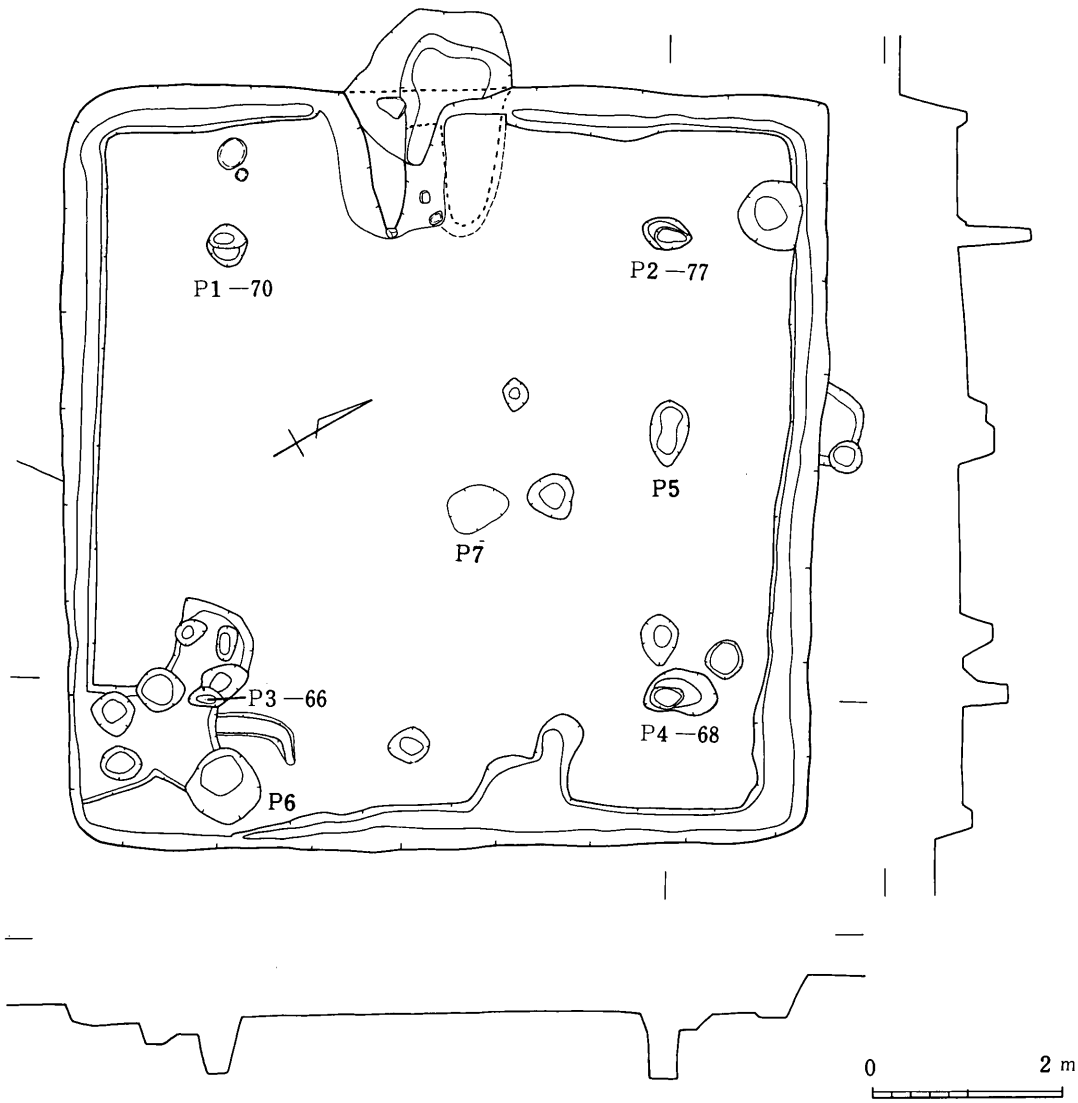


第318図　ARY　42号住居址

43号住居址（第319・320図）

遺構　ＡＲＹＤＡ50を中心に検出された。路線内のほぼ中央部にあり、全面調査することができた。東南隅付近の覆土中にはり床状の堅い面がみられ、その後、44号住居址に切られることが分かり、同住居址の床面であったことが判明した。８×8.1mを測る大形の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN61.5°Wを示す。壁は全面確かめられ、地形が東へ傾斜しているため北西壁が高く南東壁は低くなり、壁高は65～25cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝はカマド及び南隅部を除く全面の壁直下にあり、幅42～14cm・深さ20～５cmを測り、しっかりとしたものである。床面は全面黄色砂土まで掘られ、堅くたたき状できわめて良好である。部分的にではあるが黄褐色土をはった箇所も観察できた。主柱穴を結んだ内側とカマド周辺及び南東壁の中央部が堅く、それ以外の壁ぎわはやや軟かかった。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、それぞれ途中で小さく南北方向に細長い掘り方となり、柱に割り材を使ったのであろう。Ｐ５は床から35～30cmの深さを測り、主柱穴の中間にあり、上屋構造に関連するものと考えられる。南隅付近には土手状縁部を持つＰ６があり、直径94cmの円形で深さ56cmを測り、貯蔵穴と考えられる。また、この箇所は床から15～10cm程低くなり、30～20cmの深さを持つ小穴が数個あり、遺物も高坏などが多く出土した。室内祭祀的な意味を持つ箇所になるとも考えられる。住居址中央部にあるＰ７は、床面から３cmとわず

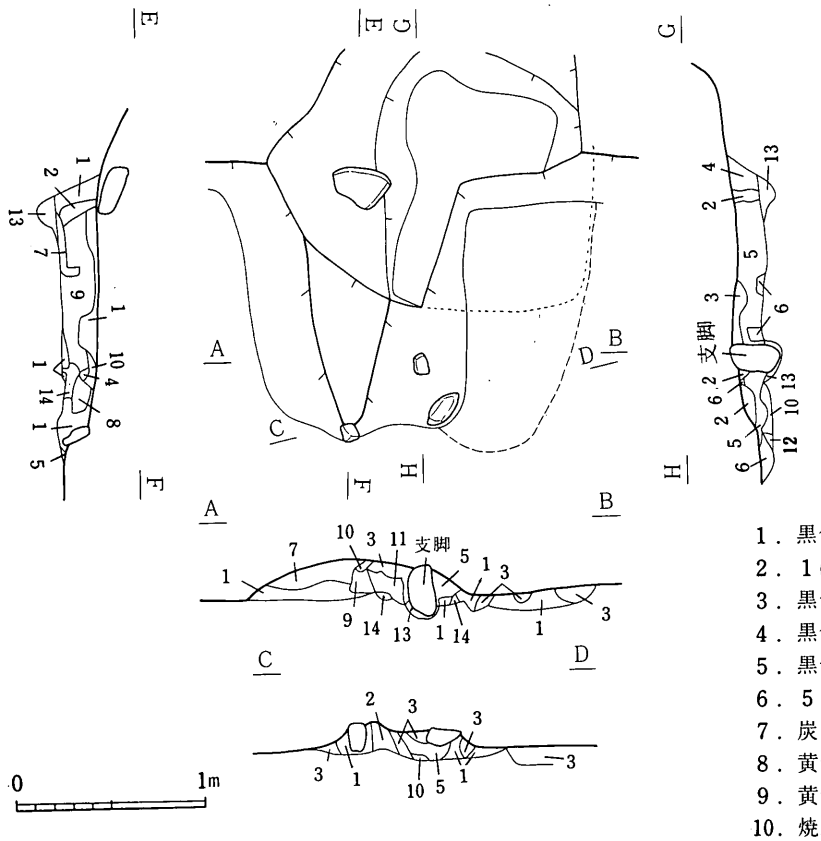
かに凹み焼土が認められ、火使用施設である。入口部は床面が壁ぎわまで堅くなっている南東壁中央部を想定できる。カマド南側の壁直下には偏平な台石とすり石があり、粘土の固まりも残っていた。カマドは西壁中央やや南寄りにある石芯粘土カマドである。上面を穴に切られ、左袖の一部とたき口の焼土が残るが、右袖はほとんど残存しない。両袖の先端にそれぞれ1個の石を使い、奥は粘土を使って構築されたと考えられる。左袖石・支脚は本来の位置にあるが、右袖石は南側に倒れていた。断面観察時に地山をわずかに掘り下げ支脚を立てたと判断された。カマド南側半分の下部にも周溝がみられ、当初のカマドはやや北寄りに造られていたが、南側に寄って造り直されたと思われる。



第319図　ARY　43号住居址

遺物　出土量は多く、出土状態はカマド南側と南隅付近を中心に、床面よりやや浮いた覆土中からの出土が多かった。土師器甕・甑・坏・高坏・手づくね、須恵器蓋坏・高坏、台石・すり石、鋤先・鉄鏃・鉄環、臼玉がある。

遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。　（山下誠一）



1．黒色土（黄色粘土混り）
2．1に焼土が混る
3．黒色土
4．黒色土（黄色砂土混り）
5．黒色土（焼土混り）
6．5に黄色砂土が混
7．炭（黒色土混り）
8．黄色粘土（焼土混り）
9．黄色粘土
10．焼土
11．焼土（黒色土混り）
12．焼土（黄色粘土混り）
13．黄褐色砂土
14．撹乱

第320図　ARY　43号住居址カマド

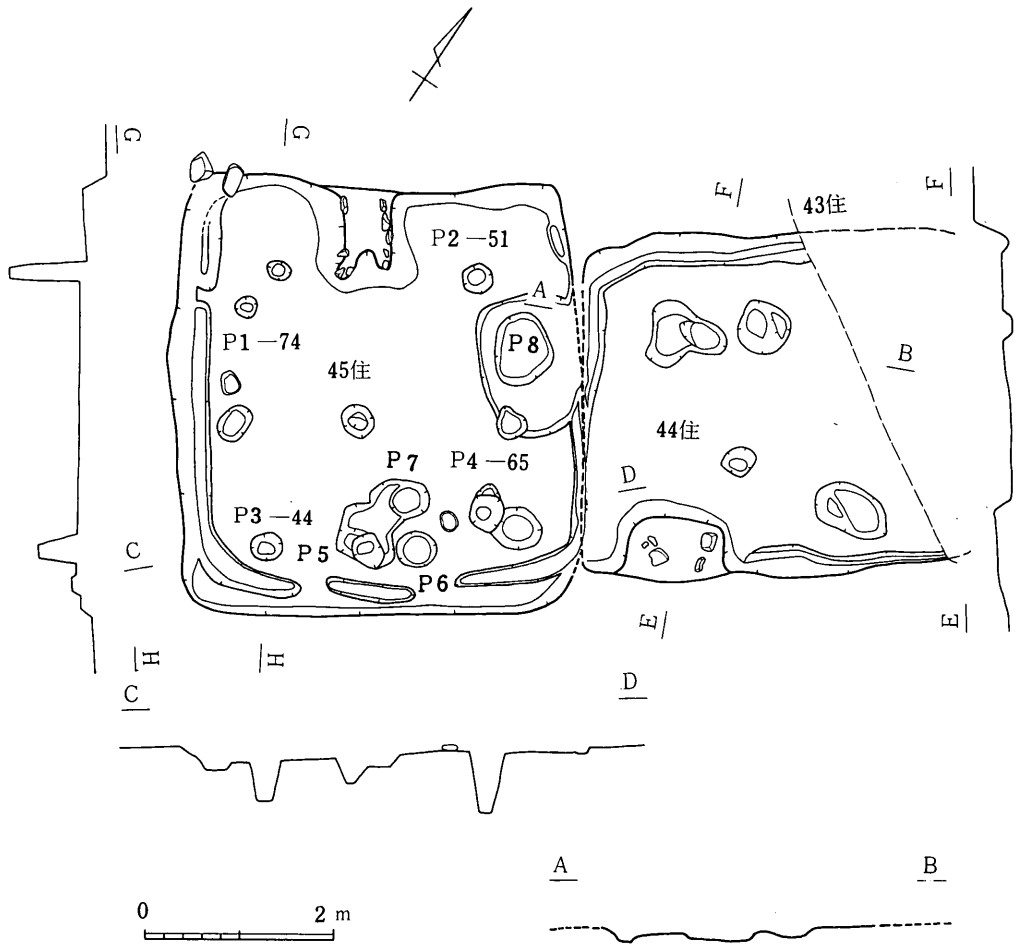
45号住居址（第321・322図）

遺構　ＡＲＹＣＶ50を中心に検出された。北東壁が44号住居址壁と接しているが、ほぼ全体が調査でき、4.6×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ37°Ｗを示す。カマド東側の覆土中1.3mの範囲に40～10cmの自然石が多数混入し、ほとんどが床面に密着しており、住居址廃棄直後に入ったものと考えられる。壁は比較的緩やかな立ち上がりで、壁高は23～10cmを測る。周溝は

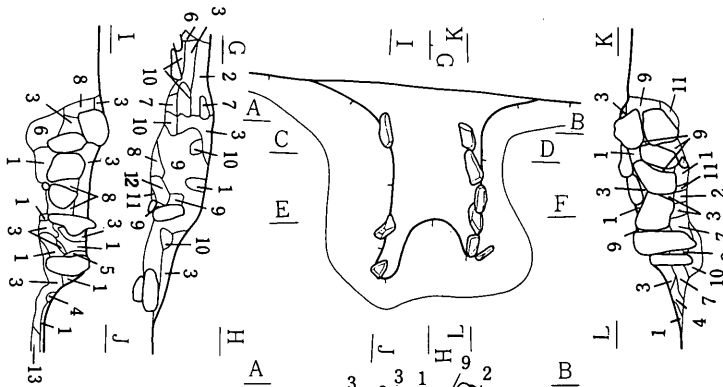
カマドのある北西壁を除きほぼ全周する。部分的に切られる所もあるが、幅34～12cm・深さ12～5cmで、南西と北東は壁直下・南東は壁より20～6cm内側に検出した。床面は平坦で、北西側から南東側へ15～8cm傾斜し、中央部にきわめて堅いたたき状の箇所を認めたが、壁ぎわは軟かい。主柱穴は4本確認したが、P3は他の穴と比べ南隅に寄り、やや深さも浅い。P5・P6・P7は深さ42・21・13cmを測り、P5・P6の間には20cmの凹みがある。P8は土坑状に8cm程掘られた中に深さ15cmの穴をもつ。P5～P7付近かP8のどちらかが入口部施設と考えられる。カマドは北西壁のほぼ中央にあり、両袖に自然の平石をすき間なく使い、しっかりと造られた石芯粘土カマドである。支脚も自然石をたき口中央部に直立させている。カマドがていねいに造られている割に焼土は少ない。袖を作る土中に焼土が認められ、同位置でカマドの造り直しも考えられる。

遺物　出土量は少ないが覆土下層と床面上から土師器小形甕・甑・坏・高坏がある。

出土遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐合英治）



第321図　ARY　44号・45号住居址



1．黒色土
2．黒色土（焼土混り）
3．黒色土（褐色土混り）
4．粘土
5．黒色土（黄色土混り）
6．黄色土
7．黄色砂土
8．褐色土
9．褐色土（焼土混り）
10．褐色土（黄色土混り）
11．黄色土（焼けている）
12．褐色土（灰混り）
13．撹乱

0　1m

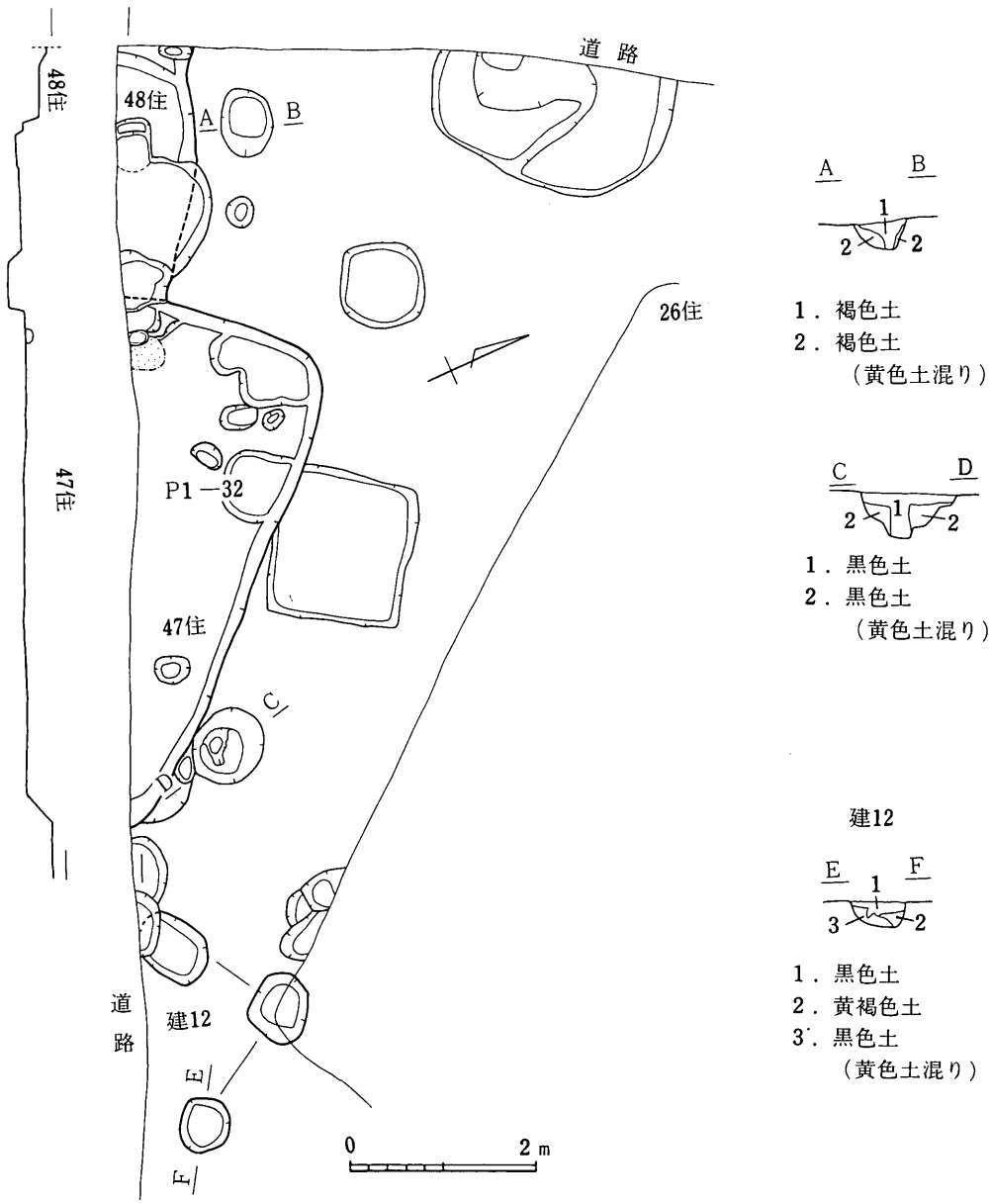
第322図　ARY　45号住居址カマド

47号住居址（第323図）

遺構　ＡＲＹＢW48を中心に検出した。48号住居址と重複するが、新旧の確認はできなかった。道路にかかるためわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、調査範囲は5.4×２m、主軸方向はN44°Wを示す。壁高は検出面から40～30cmを測り、緩傾斜の壁面である。床面は壁下が軟かく、主柱穴から内側は堅く良好であった。主柱穴は１本確認し、平面は不整楕円形で小形である。北壁下床面に焼土があり、近くにカマドの存在が考えられ、主軸方向を推定した。主柱穴以外の穴は12～５cmと浅く性格等不明である。

遺物　出土量は少ない。赤くて軟かい石が北隅からＰ１までの間で７個出土し、つぶすと赤い粉になった。土師器甕・甑・高坏、須恵器蓋坏、石製紡錘車がある。

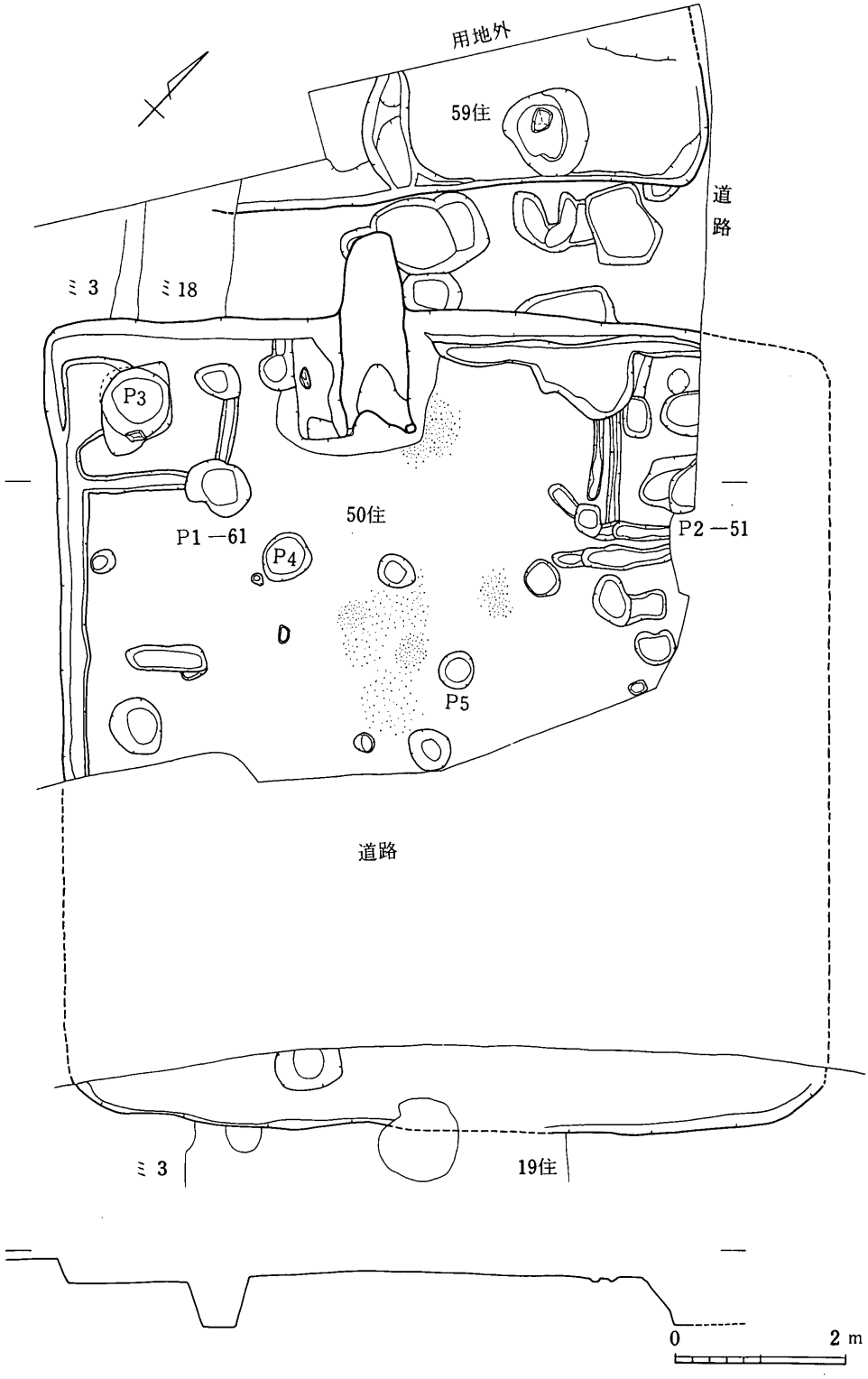
出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）



第323図　ARY　47号・48号住居址、建物址12、Pit群

50号住居址（第324・325・326図）

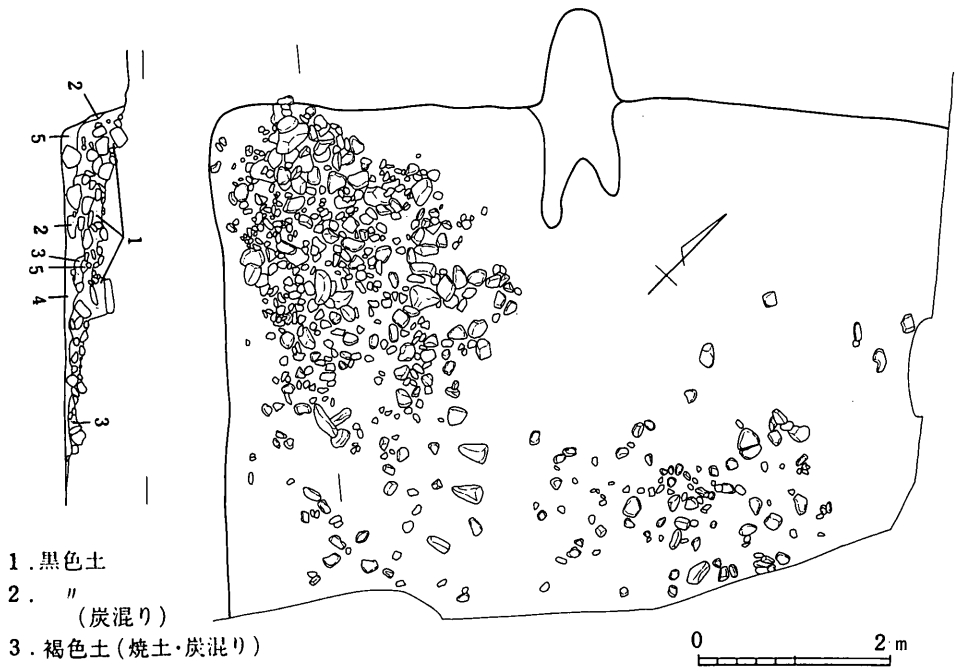
遺構　ＡＲＹＤＹ47を中心に検出された。19号住居址、溝址３・18に切られる。道路にかかって約⅓調査できなかった。方形の竪穴住居址で、規模は9.3×9.3mを測り、主軸方向はＮ45°Ｗを示す。覆土中に石が多量に入っていた(第32５図参照)。大きさは人頭大から10cm位で西隅から扇状



第324図　ARY　50・59号住居址

に広がっている。西隅では壁の高さまで入り、溝址18に切られて低くなるが３×２ｍの範囲は50cm以上の厚さがある。覆土中には炭・焼土が混じり火事にあっていると思われる。石の間にも炭・焼土・遺物が混入しており、火事の際の投入かと思うが、部分的に集中しており疑問が残る。壁高は検出面から60～30cmあり、ほぼ垂直の壁面である。周溝は北西壁下・南西壁下にあり、幅は30～20cm、深さは10cm前後である。床面は堅く高坏などの遺物がつぶれ込んでおり、堅いはり床を２層確認した。下のはり床にも遺物が入っていた。主柱穴は２本確認し、平面は不整円形で直径60cmを測る。床面には大小様々な穴があるが、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５ははり床上面で検出した穴である。Ｐ１と壁下周溝をつなぐ溝をはり床下から検出したが、性格は不明である。北隅を方形に区切るＬ字状の溝がはり床下に検出され、間仕切り的な性格が考えられるが断定はできない。カマドは北西壁ほぼ中央にあり、左袖が石芯で、右袖が先端にのみ石を持つが、右袖から芯石を抜いた様子はない。火床である地山の焼土が北側袖の芯石の下にもあり、焼土の入り方から造り替えた様子がある。支脚は長さ・奥行15cm・幅10cmの石を用いている。煙道は壁から1.8m突出しつぶれていたが、焼土が混入していたので確認できた。左側袖に甕がはり付くようにつぶれていた。

遺物　出土量は極めて多い。特に土師器高坏が多くはり床面にビッシリつぶれ込んでいた。図化したものが40個体あり、破片も多数ある。鉄鏃３個が出ている。平根１・尖根２であり、２個はＰ２とＰ５の中間はり床上から、１個は道路を越えた部分から出ている。Ｐ２の西側はり床下



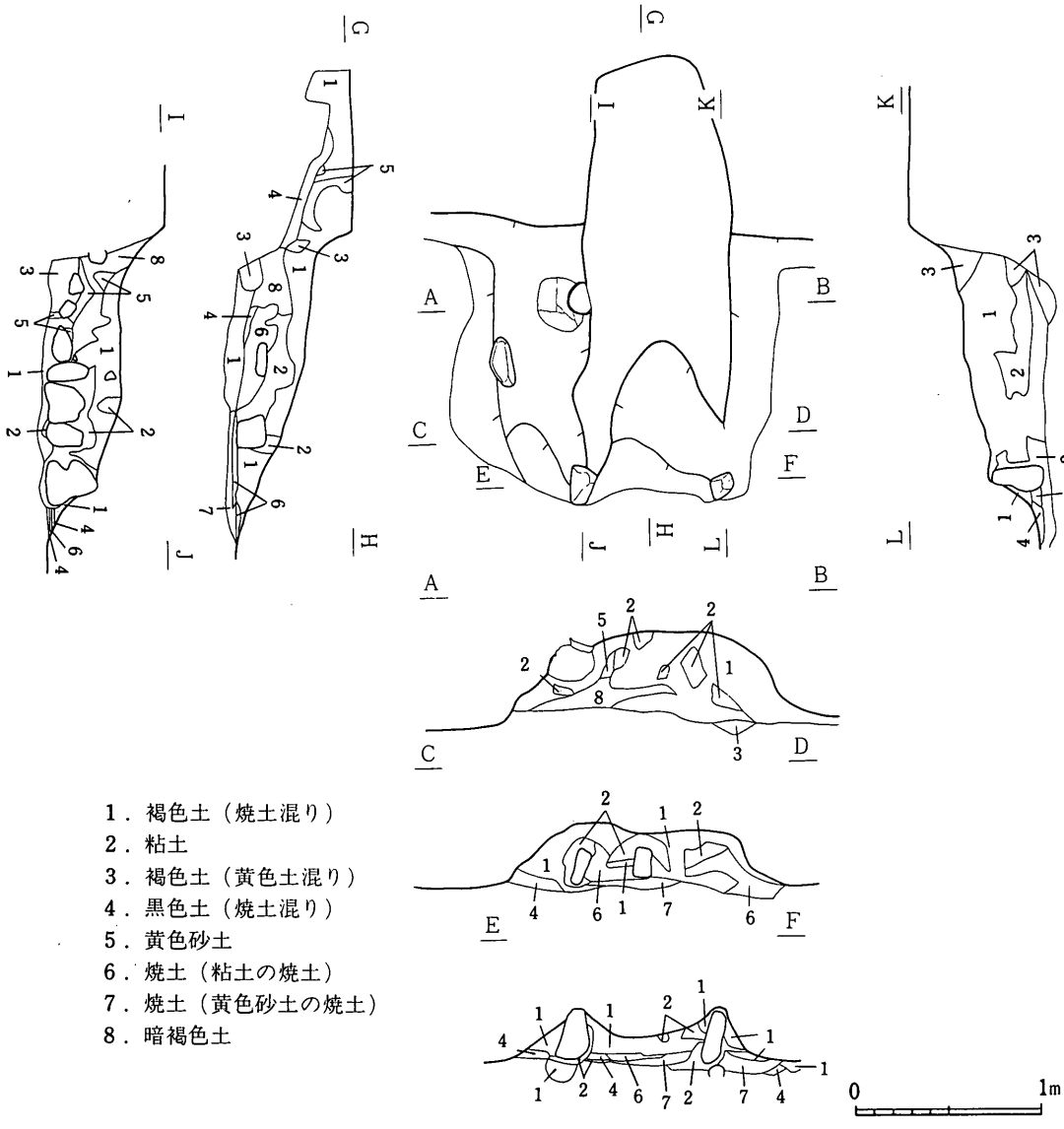
1．黒色土
2．〃（炭混り）
3．褐色土（焼土・炭混り）
4．〃
5．焼　土

第325図　ARY　50号住居址礫出土状態

からガラス玉16個が集中して出土した。勾玉・剣形・臼玉も床面上に散在した。土師器甕はカマドから西隅にかけて出土している。他に、土師器甑・坏・坩、須恵器甕・高坏・瓶、砥石、炭化種子などがある。

高坏の出土が非常に多く普通の住居址と異なる性格を持つものと思われ、はり床の状態から長期間の使用が考えられる。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）



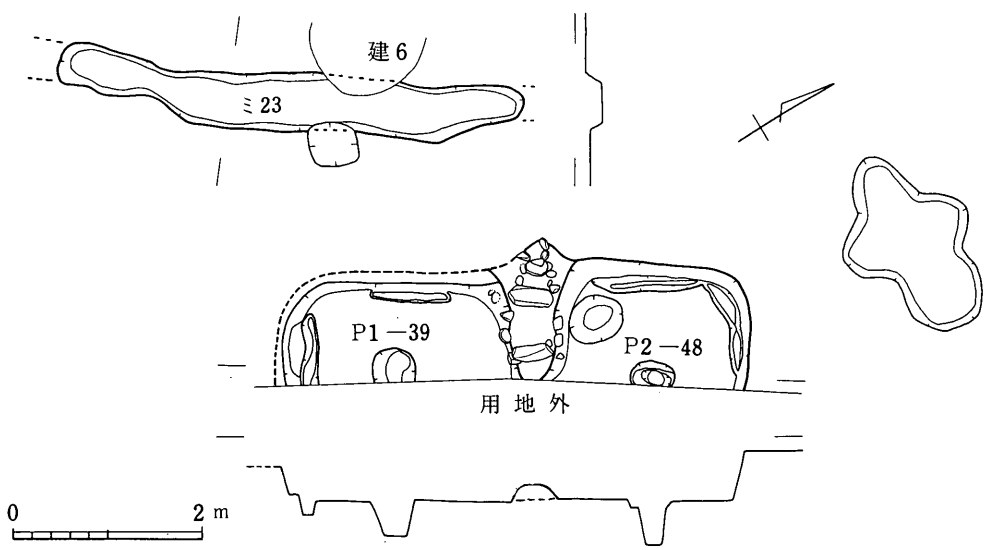
第326図　ARY　50号住居址カマド

52号住居址（第327・328図）

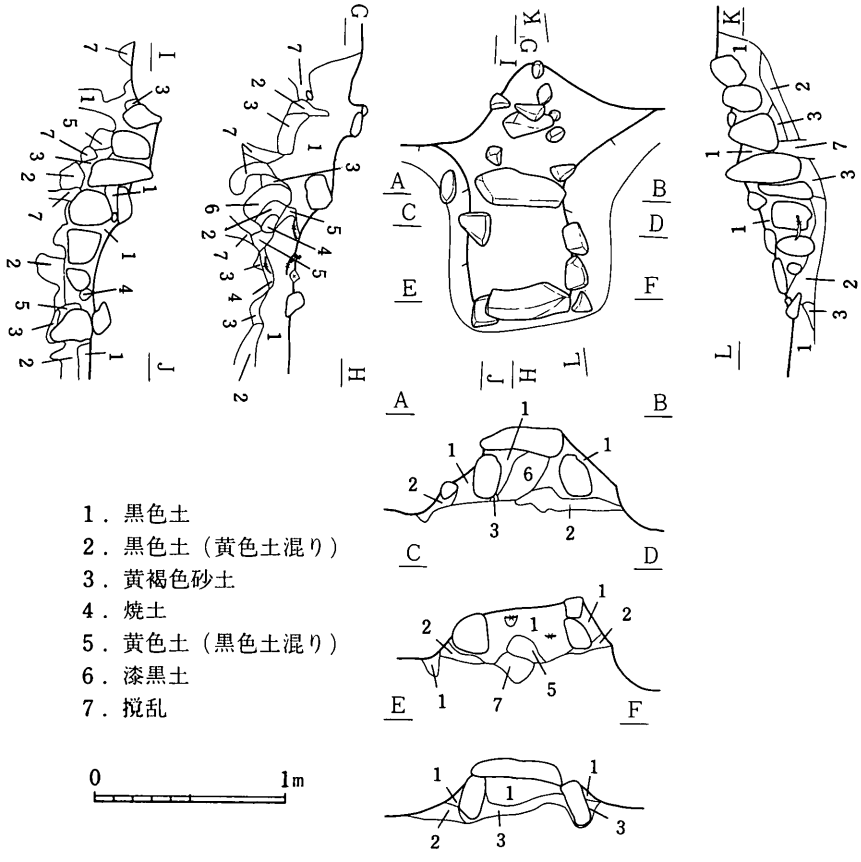
遺構　ＡＲＹＡＨ61・ＡＩ62の南東用地境に北西壁を検出し、８号住居址が南側に隣接している。南東側はほとんど用地外となり、北西壁より1.4mの幅を調査したのみである。北西壁の長さは4.9mで、主軸方向はN54.5°Wを示す隅丸の竪穴住居址である。覆土は大きく２層に分かれ点々と炭が混入している。検出面より30cm前後は黒色土で、その下層20cm程には粘質の黄色土がかなりの割合で混入しており、人為的に埋められていると考えられる。壁高はカマドの南側は耕作の攪乱により上部を削平されて39cm、北隅で46cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は西隅を除いて壁直下に確認され、幅20～８cm・深さ16～６cmを測る。床面は黄色砂土で軟かく、北から南へ８cm傾斜している。主柱穴は用地境ぎわに２本を確認した。Ｐ２はＰ１と比べやや楕円の掘り方で床面より９cm程の所に段をもつ。カマド右横の穴からは土師器甕の破片が出土し、黒色土の覆土に焼土が混入しており、カマドに関連した穴と考えられる。カマドは北西壁中央部からわずか北に寄った位置にあり、比較的小さな自然石を袖部から煙道まで多数使った石芯粘土カマドである。右袖の前側は30cm程の石を上面に積んで二段になる。左袖も右袖同様に石が二段であったと考えられる。カマドがしっかり作られている割に、焼土はたき口部でブロック状に認めたのみである。

遺物　調査範囲が少ない割に出土量は多い。完形およびほぼ完形の土師器長胴甕２個がカマド右側から坏と共に出土した。カマド左袖に接して重なり合うように小形甕・甑・坏が、やや離れて球形胴の甕が出土した。他に、埦・坏があり、編物石と考えられる棒状礫が西隅から集中して出土した。

出土遺物から古墳時代後期後半の住居址である。　（佐合英治）



第327図　ARY　52号住居址、溝址23



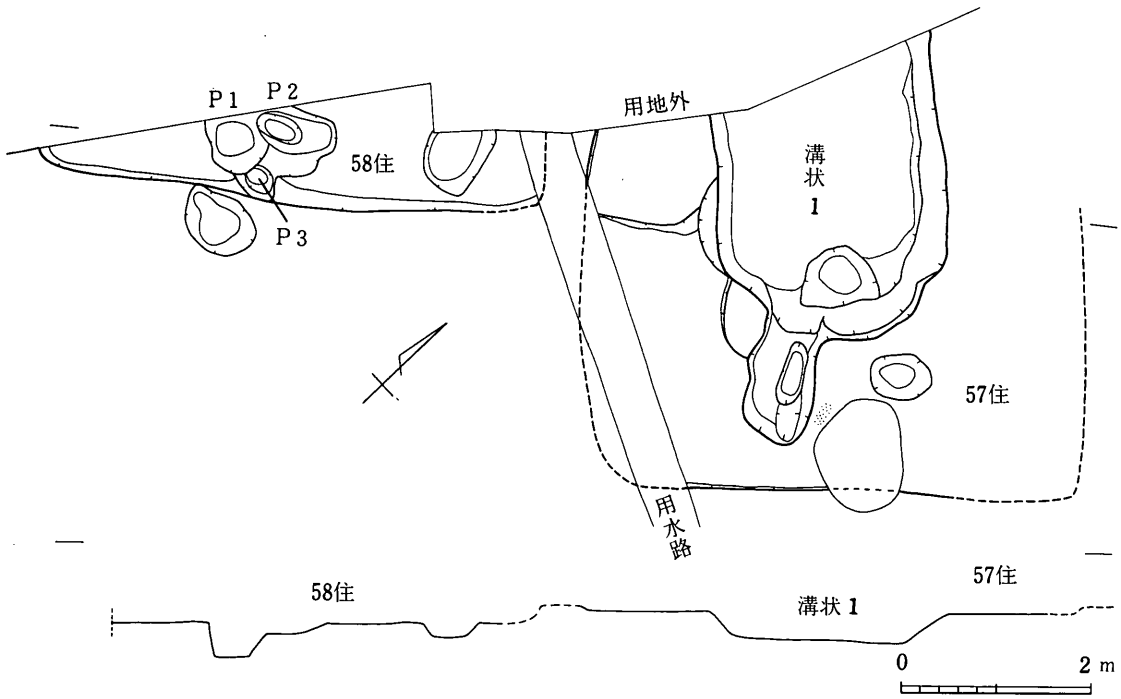
第328図　ARY　52号住居址カマド

58号住居址（第329図）

遺構　ＡＲＹＡＰ56を中心に南東壁を検出した。北西側ほとんどは用地外となり、調査範囲はわずかである。検出した壁も東隅を用水路と耕作の攪乱により壊されており、正確な壁の長さは不明であるが、一辺５ｍ程と想定される。確認した壁高は14cmを測り、方向はＮ52°Ｗを示す。床面は凹凸があり全体に軟かく、北東側半分ははり床になっていた。主柱穴等は不明であるが、入口部施設と考えられる穴を壁下ほぼ中央に検出した。Ｐ１～Ｐ３は深さ37・37・25cmを測り、Ｐ２には上面にはり床が認められた。

遺物　Ｐ１の北側縁に接して台石があり、台石と壁の間から土師器坏の完形および、ほぼ完形品が３個出土し、Ｐ３の覆土中床面と同レベルには高坏があった。他に、土師器小形甕・甕・高坏などがＰ３より西側の壁に沿って出土した。

遺物から古墳時代後期前半と考えられる。　（佐合英治）



第329図　ARY　57号・58号住居址、溝状遺構1

59号住居址（第324図）

遺構　ＡＲＹＤＹ44を中心に検出された。溝址18に切られ、用地外にかかるため5.5×1.5mの範囲を調査しただけである。隅丸の竪穴住居址と思われ、壁高は検出面から40～30cmあり、ほぼ垂直の壁面である。壁下の一部に周溝状の落ち込みがあるが狭く浅い。床面はたたき状に堅く良好である。床面に深さ10cm前後の溝状の掘り込みがあるが性格等不明である。壁下の穴は深さ33cmで底近くに石が入っていた。

遺物　出土量はわずかである。床面に密着して鉄鏃が出ている。逆刺を片側だけに持ちＡＲＢＫ12で出土したものと同形態である。土師器甕・坏など出ている。

出土遺物から古墳時代後期前半であろう。　（佐々木嘉和）

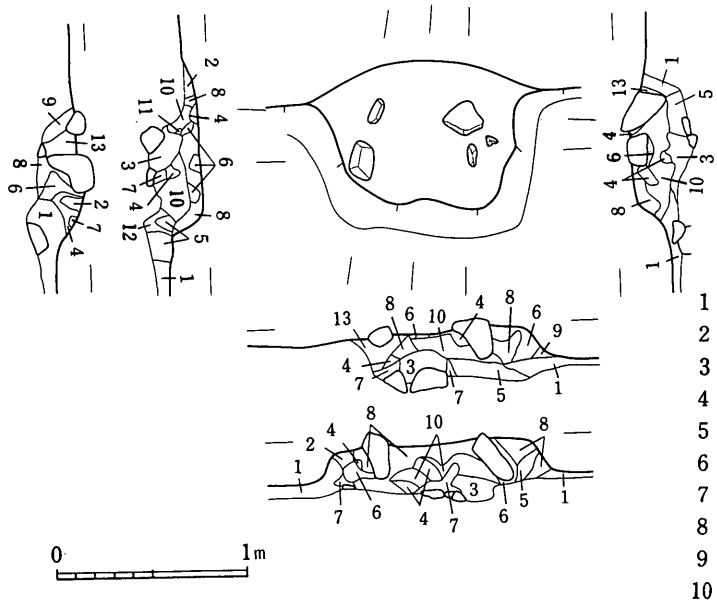
④ 奈良時代

44号住居址（第321・330図）

遺構　ＡＲＹＣW51を中心に検出された。南西壁が45号住居址壁をわずか切っている。北東側は43号住居址を切るが、新旧関係の把握が不十分なまま掘り下げたため、43号住居址覆土中に造られていたはり床を壊してしまった。主軸方向はＮ143°Ｅを示し、長さは3.7mを測る。主軸に直交する方向の長さは4.5m程が想定され、隅丸長方形の竪穴住居址である。覆土中に30×５cmの石が多量に入り、壁ぎわは少なく、中心部の石は床面に密着しているものもある。住居址廃棄後わずかに時期を置いて混入した石と考えられる。壁高は29～７cmを測り、緩やかな壁面を成す。周溝は45号住居址周溝と重複し、南西壁の半分程は不明であるが、壁直下を全周していたと考えられる。床面は43号住居址との重複部が不明であるが、他はほぼ平坦で軟かな床面で、一部地山の黄色砂土により確認した。住居址内で穴を４個確認したが、深さは19～９cmと浅く、主柱穴と確定できるものはない。カマドは南東壁南隅にあり、小礫を使った雑な造りの石芯粘土カマドである。焼土は袖の部分が壊れ、粘土中と奥壁に近い所に小さなブロック状に認めたのみである。

遺物　出土量は少なく図化できない細片ばかりである。土師器甕・内面黒色坏、須恵器小形壺・甕・坏・蓋がある。

出土遺物と住居址形態から奈良時代の住居址と考えられる。　（佐合英治）



1．暗褐色土
2．暗褐色土（粘土混り）
3．暗褐色土（やわらかく黒っぽい）
4．黒色土（粘土混り）
5．黒色土
6．粘土
7．黄色土（砂土混り）
8．粘土（暗褐色土混り）
9．８より暗褐色土混り多い
10．粘土（焼土混り）
11．焼土
12．黄色土
13．撹乱

第330図　ARY　44号住居址カマド

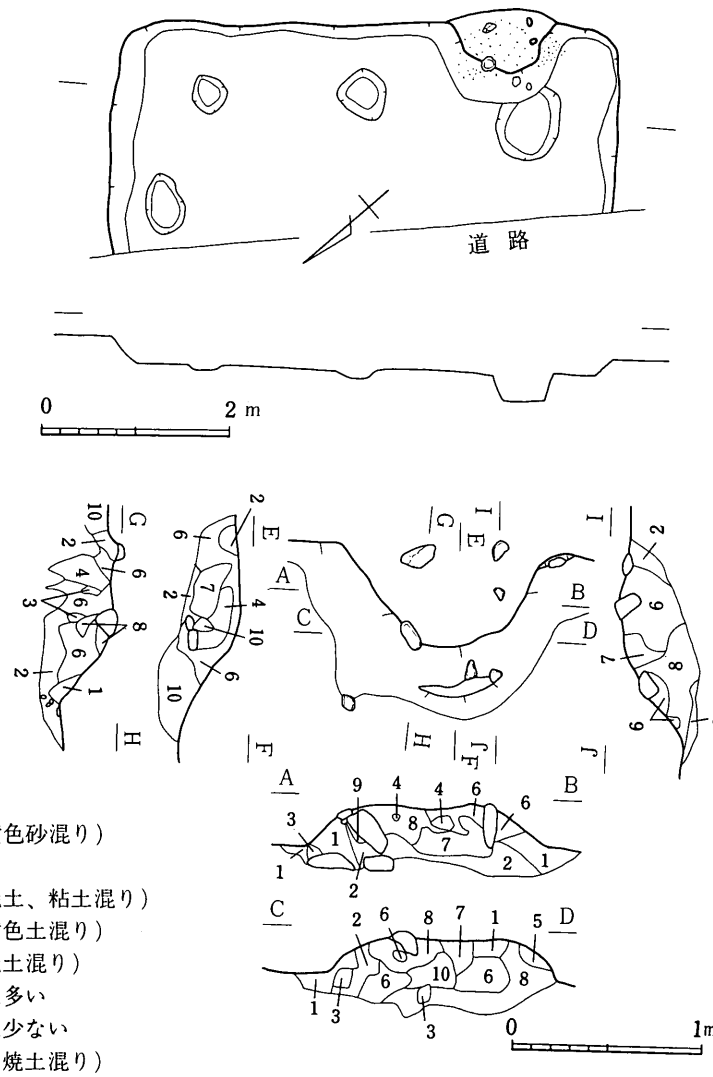
46号住居址（第331図）

遺構　ＡＲＹＤＡ46を中心に検出した。道路にかかるため、2.3×5.4mと約⅓調査した。隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ136°Ｅを示す。壁高は検出面から25～20cmあり、緩傾斜の壁面で、地山の石が露出している。床面は壁と同様に地山の石が露出して軟かい。主柱穴らしい穴はカマド直前にあるが断定はできない。カマドは南東壁南隅近くにある。残存状態は悪く、石芯粘土カマドと思われるが、芯石と推定できるものは２個のみである。焼土はカマド内全体に比較的多く混入していた。

遺物　出土量は少なく、土師器甕底部・高坏脚部、須恵器甕などの小破片だけである。

時代の決め手になるものはないが、カマドの位置等から奈良時代と思われる。

（佐々木嘉和）



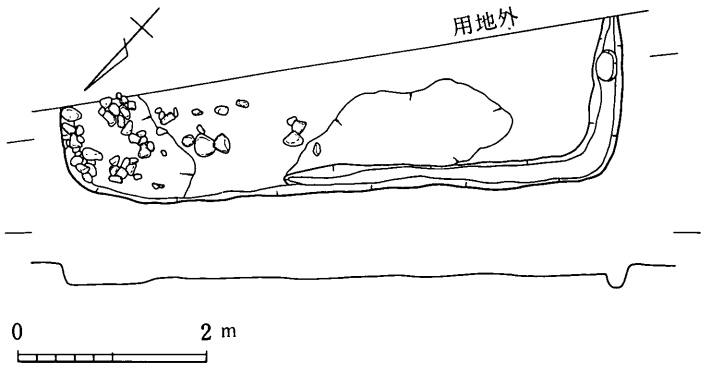
第331図　ARY　46号住居址

⑤ 時期不明

8号住居址（第332図）

遺構　ＡＲＹＡＥ59・ＡＦ60・ＡＧ60の用地境に検出された。南東側はほとんど用地外となり、北西壁側を幅1.7～１ｍ調査した。北西壁の長さは5.6ｍで、方向はＮ44°Ｅを示す隅丸の竪穴住居址である。壁高は27～14cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。北西壁中央から南西壁の直下に幅30～15cm・深さ22～９cmを測る周溝がある。床面は全体に軟かく、北隅と北西壁中央部分はそれぞれ13cmと８cm凹み、床面は検出できなかった。北隅の凹みには床面とほぼ同じ高さに、径20～６cmの自然石が認められた。壁に押し付けられたものと壁から40cm程離れたものの二列に並んでいて、壁との密着状態から本住居址に伴う施設と考えられるが、南東側が未調査のため範囲・性格等は不明である。

出土遺物には土師器甕の細片が数点あるのみで時期を決定できない住居址である。（佐合英治）



第332図　ARY　8号住居址

27号住居址（第335図）

遺構　ＡＲＹＣＮ45に検出した。用地外にかかり１×１ｍとわずか調査しただけである。隅丸方形の竪穴住居址と思われ、壁高は検出面から32cmあり、やや傾斜を持つ壁面である。床面は軟かい。

遺物　図化できたものは須恵器甕１点であり、他に土師器片がわずか出土している。

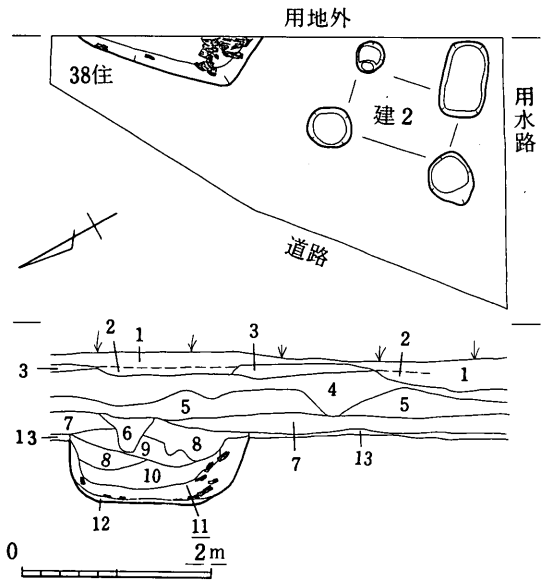
時代は古墳時代と思われるが、決定には材料が少ない。（佐々木嘉和）

38号住居址（第333図）

遺構　ＡＲＹＥＤ52にかかってわずか検出した。用地外がほとんどで、西隅を1.6×0.6ｍ調査した。方形の竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から70cmあり、やや緩傾斜の壁面である。覆土中には炭が多量に混入しており、火事にあっていると推定した。

遺物　土師器片と鉄片の2点が出土している。

時代は決定材料がなく不明である。　（佐々木嘉和）



1．耕土
2．耕土（黄砂混り）
3．黄色砂土
4．黒色土
5．漆黒色土
6．漆黒色土と下層の黄砂土、黒褐色土などの混った土
7．黒褐色土（一部褐色土混り）
8．黒色砂土
9．黄色砂土
10．暗褐色砂土
11．黒褐色砂土（炭混り）
12．こまかな炭粉にわずかに砂の入った層
13．褐色砂土（漸移層）

第333図　ARY　38号住居址、建物址2

48号住居址（第323図）

遺構　ＡＲＹＢＶ46に検出した。47号住居址と重複するが、新旧は確認できなかった。道路にかかり2.5×0.8mとわずか調査した。壁高は検出面から20cmある。床面は穴に切られており、凹凸が著しく軟かである。

遺物　出土量はわずかである。完形の土師器甕が壁を切る穴の覆土中から出土し、住居址覆土中から円面硯が1片出ているが、いずれも住居址に付属するか否か断定できない。他に、土師器・須恵器片が出ている。

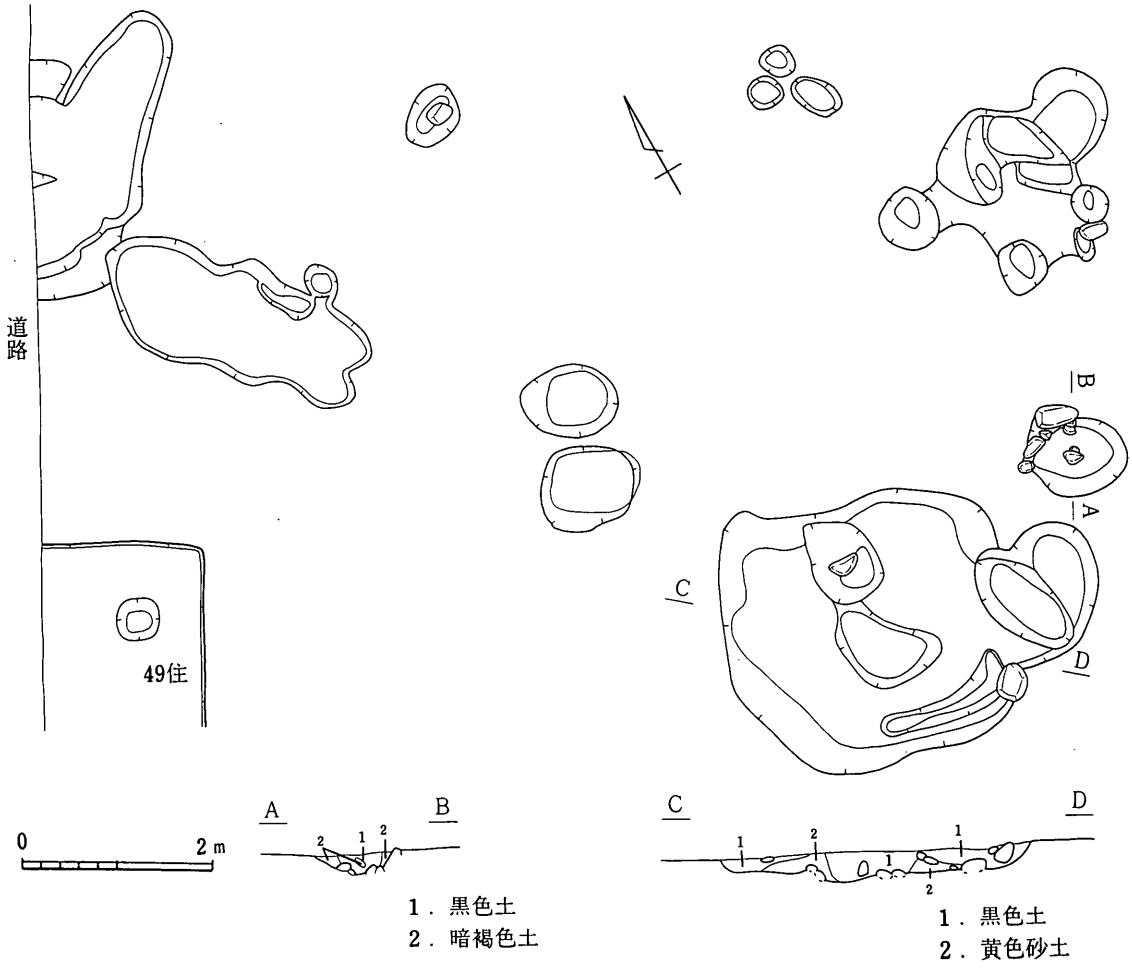
時期は不明である。　（佐々木嘉和）

49号住居址（第334図）

遺構　ＡＲＹＣＯ46に検出した。道路にかかるため1.7×1.7mとわずか調査しただけである。壁高は検出面から9～3cmで低い。覆土は暗褐色土が入っていた。床面はたたき状で堅く良好であった。

遺物　土師器片がわずか出ている。

時代は決定材料がなく不明である。　（佐々木嘉和）



第334図　ARY　49号住居址、Pit群

53号住居址（第287図）

遺構　ＡＲＹＡＣ55に検出した。６号・９号・51号住居址、溝址25に切られ、４×１ｍの調査範囲で北西壁と床面を確認したのみであるが、竪穴住居址と思われる。壁高は検出面から10～６㎝と低く、床面は軟かい。

遺物　土器片と石器がわずかに出土したのみである。

時代は弥生時代中期恒川Ｉ期と思われるが、詳細時期は不明である。　（佐々木嘉和）

57号住居址（第329図）

遺構　ＡＲＹＡＲ58を中心に検出された。中央部を溝状１に切られ、北西壁側は用地外となる。床面が検出され、住居址の存在が明らかになったもので、西隅と東隅と考えられる部分を結ぶ対角線より北側は壁も床も削平されている。南隅から南西壁は用水路に切られ、壁は南西と南東の一部のみを確認し、壁高さは５㎝弱であった。床面は西側の用地境付近がたたき状に堅いほかは凹凸があり、軟かなはり床である。南東壁の中央と考えられる所から80㎝程内側の床面上に焼土を認めたが、本住居址との関連は不明である。他に本住居址に伴うと考えられる施設は何も確認できなかった。

出土遺物で図化できるものはなく、弥生時代中期甕、土師器甕、灰釉陶器埦、かわらけ系の高台坏、臼玉、打製石斧など出土している。時期決定はできない。　（佐合英治）

３）建物址

規模の大きなものはＡ区及びＤ区に集中して検出され、小規模で状況不鮮明なものはＡ～Ｅ区全域に分布する。

Ａ区は住居址との切り合い関係などから、奈良時代に位置づく３期４棟の建物址が重複して検出された。

Ｄ区は大形の建物址３棟を検出し、近接する位置に溝址があり、相互の関連が考えられる。

Ａ区とＤ区の建物址は、約50m距離を置いており、直接の関連は不明であるが、ＧＯＡからＡＲＹまでの約400mの間に100～50mの間隔で集中箇所があり、それらが何らかの形で関連していると考えられる。

なお、建物址群の他に、一般水路とは異なり、何らかの区画施設と考えられる溝址が各所にあり、建物址と相互に関連し、出土遺物とともに遺跡群の官衙的性格を強く示している。

（小林正春）

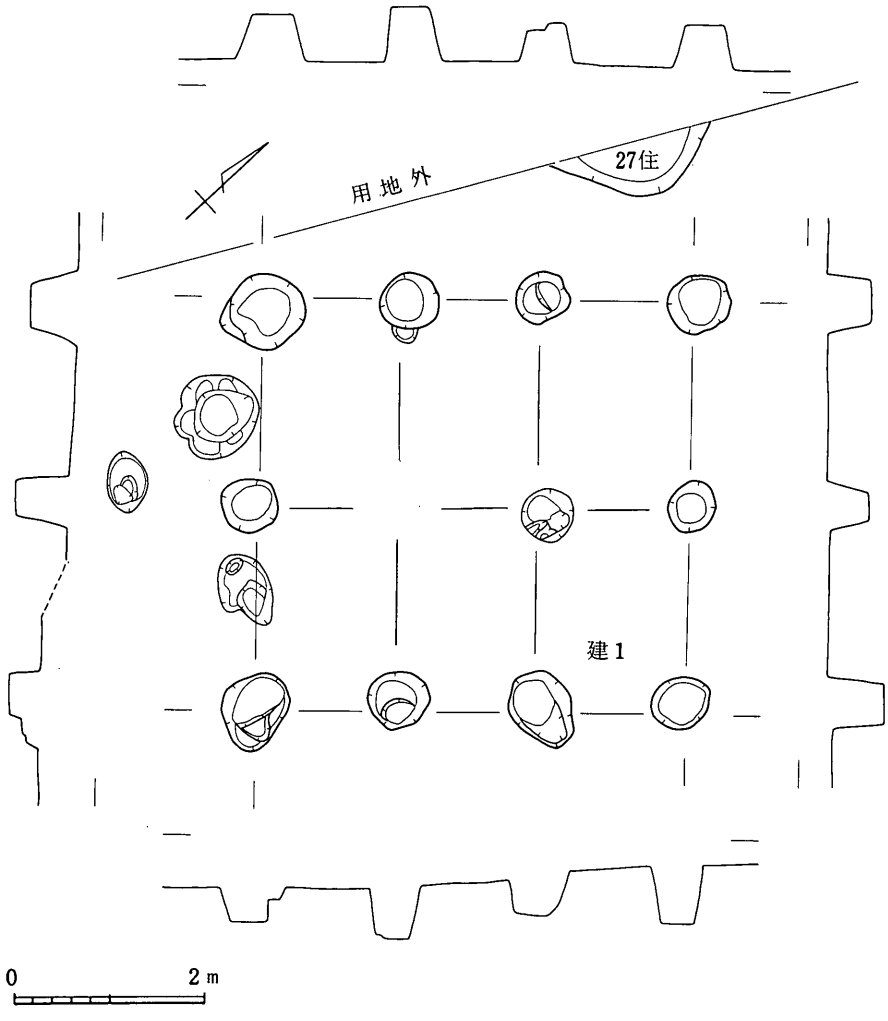
建物址１（第335図）

遺構　ＡＲＹＣＭ47を中心に検出した。24号住居址を切っている。３×２間の掘立柱建物址で総柱と思われるが、束柱１本は検出できなかった。桁行長4.56mで柱間寸法は1.52m、梁行長4.36mで柱間寸法は2.18mを測る。桁行方向はＮ47.5°Ｅを示す。柱掘り方平面は不整円形で、直径90～40㎝である。底部レベルは一定でなく、上下差は最大30㎝である。

遺物　柱穴内よりわずか出土したのみである。

切り合い関係から弥生時代中期後半以降であるが具体的な時期は決定できない。

（佐々木嘉和）



第335図　ARY　27号住居址、建物址1

建物址2（第333図）

遺構　ＡＲＹＥＣ52に検出した。用地外・道路・用水路にはさまれ調査範囲が狭く、確認できたのは１×１間である。用地外・用水路側に広がると思われる。柱間寸法は1.18mと0.76mである。柱掘り方平面形はそろっておらず、深さは検出面から40～30cmである。

遺物　わずかに土師器の小片が出ている。

時代は不明である。

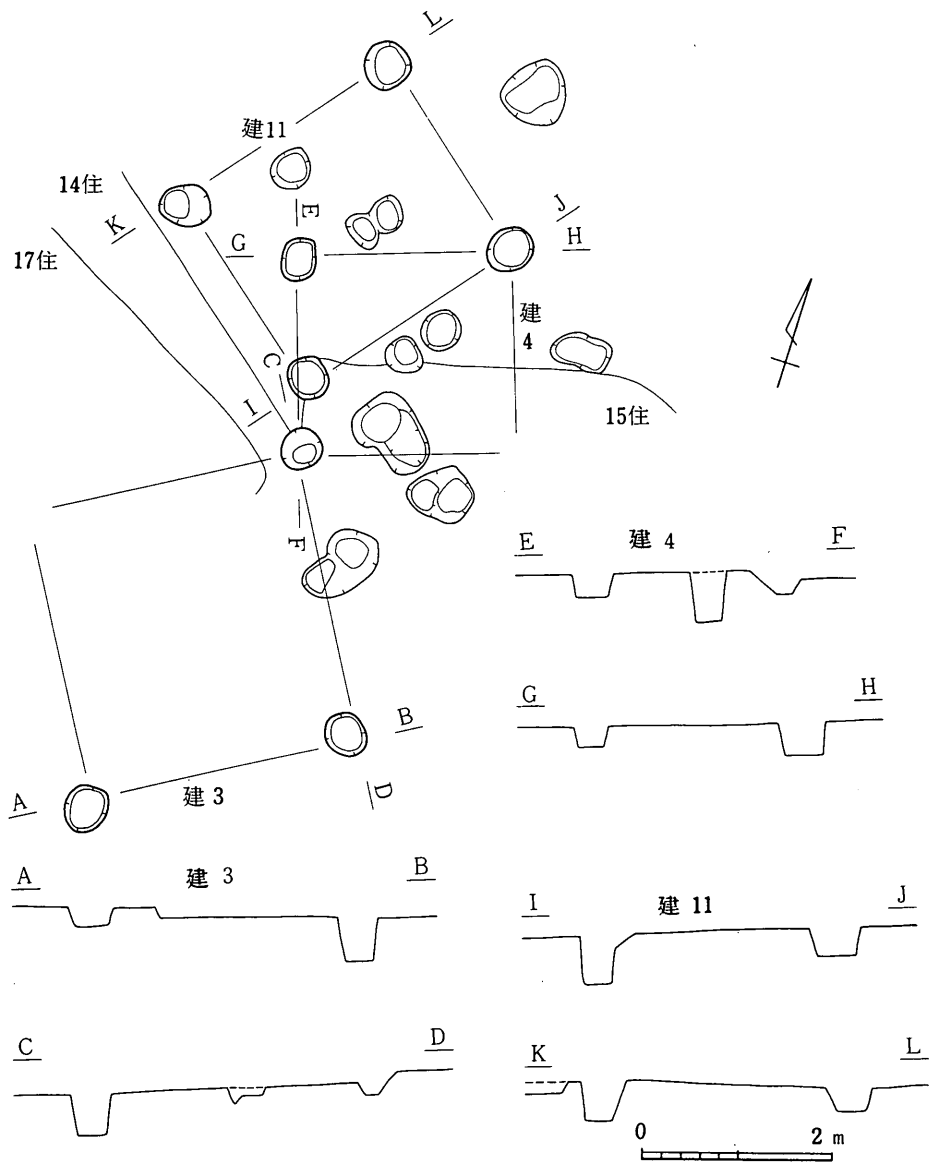
（佐々木嘉和）

建物址３（第336図）

遺構　ＡＲＹＤＲ51を中心に検出した。14号･15号住居址を切る。黄色砂礫土の地山面に黒色土の入る柱掘り方を検出した。１×１間のみを確認し、桁行・梁行共に約３ｍである。

遺物　土器の小片がわずか出土している。

時代は不明であるが、住居址との切り合いから古墳時代以降である。　（佐々木嘉和）



第336図　ARY　建物址３・４・11

建物址4（第336図）

遺構　ＡＲＹＤＴ51を中心に検出した。14号・15号住居址を切る。黒色土の入る柱掘り方を検出し、1×1間を確認した。桁行柱間寸法2.29m、梁行柱間寸法2.08mである。

遺物　土器の小片がわずか出土している。

時代は不明であるが、住居址との切り合いから古墳時代以降である。　（佐々木嘉和）

建物址5（第338図）

遺構　ＡＲＹＡＨ56を中心に検出された。3号・54号住居址を切り、建物址6・7の柱掘り方に切られるが、すべての柱掘り方を検出した。4×3間の側柱のみの掘立柱建物址で、桁行9.71m・梁行6.04m、柱間は桁行2.42m・梁行2.01mを測り、桁行方向はＮ37.5°Ｅを示す。柱掘り方は方形のものもみられるが多くは不整形で、径1.62～1.08m・深さ80～40cmを測る。当初土坑として調査したために、断面観察等によって柱痕等の把握はできず、また、抜き取り穴の確認はできなかったが、柱掘り方の形がかなり変形しており、柱が抜き取られた可能性も強い。

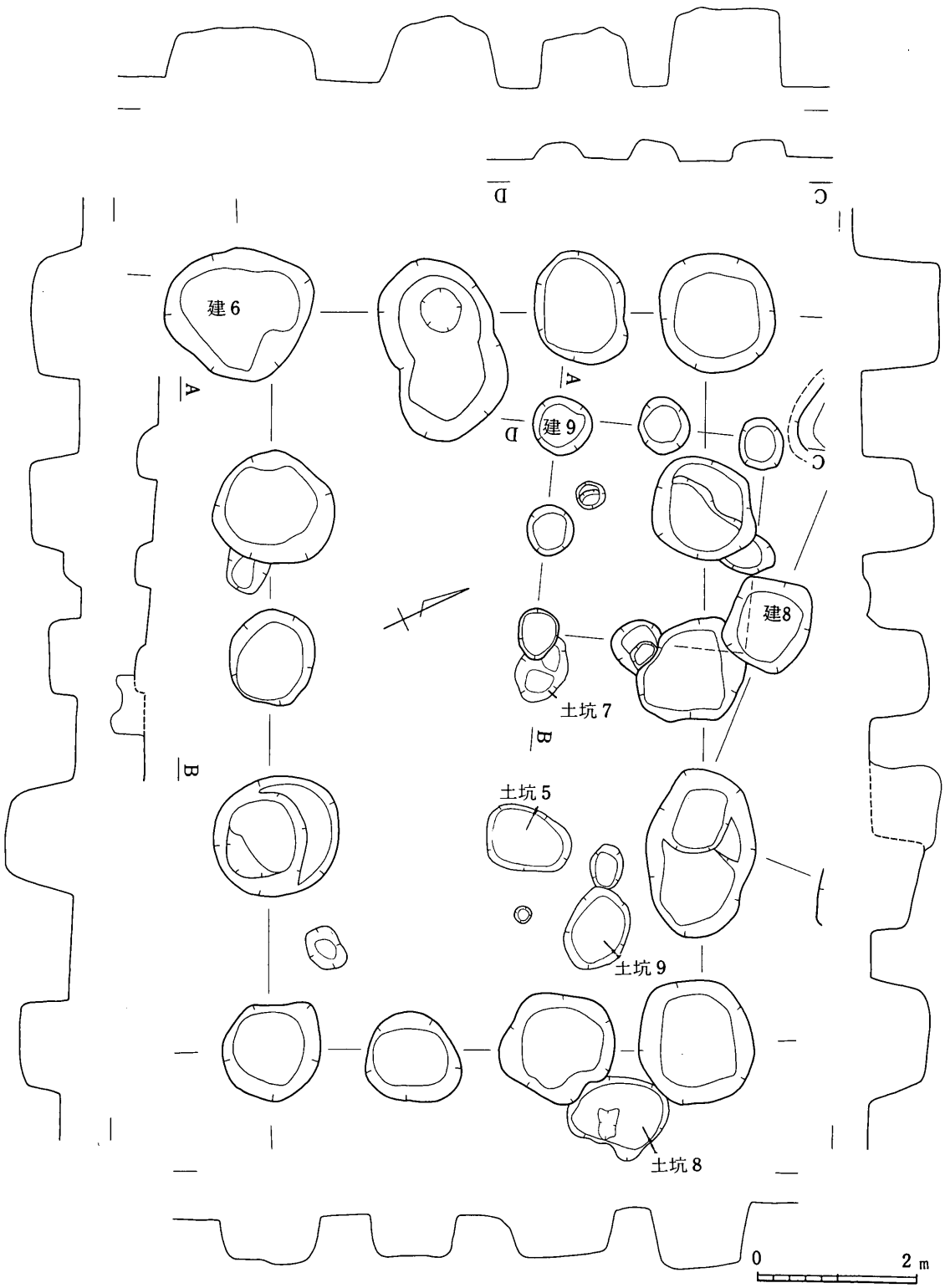
遺物は周辺の遺構を切るため、弥生時代中期・古墳時代後期の土器片が柱掘り方内より出土しているが、本址の時期を決定できるものはない。住居址との切り合い関係によれば、古墳時代後期以降であり、周辺の遺物出土状況なども考えると奈良時代に位置づけられる可能性が強い。

また、本址以外に建物址6～8が同様形態を示し、ごく限られた範囲に集中して検出され、用途等の共通性が強いと考えられ、官衙址の一画を占める可能性も強い。　（小林正春）

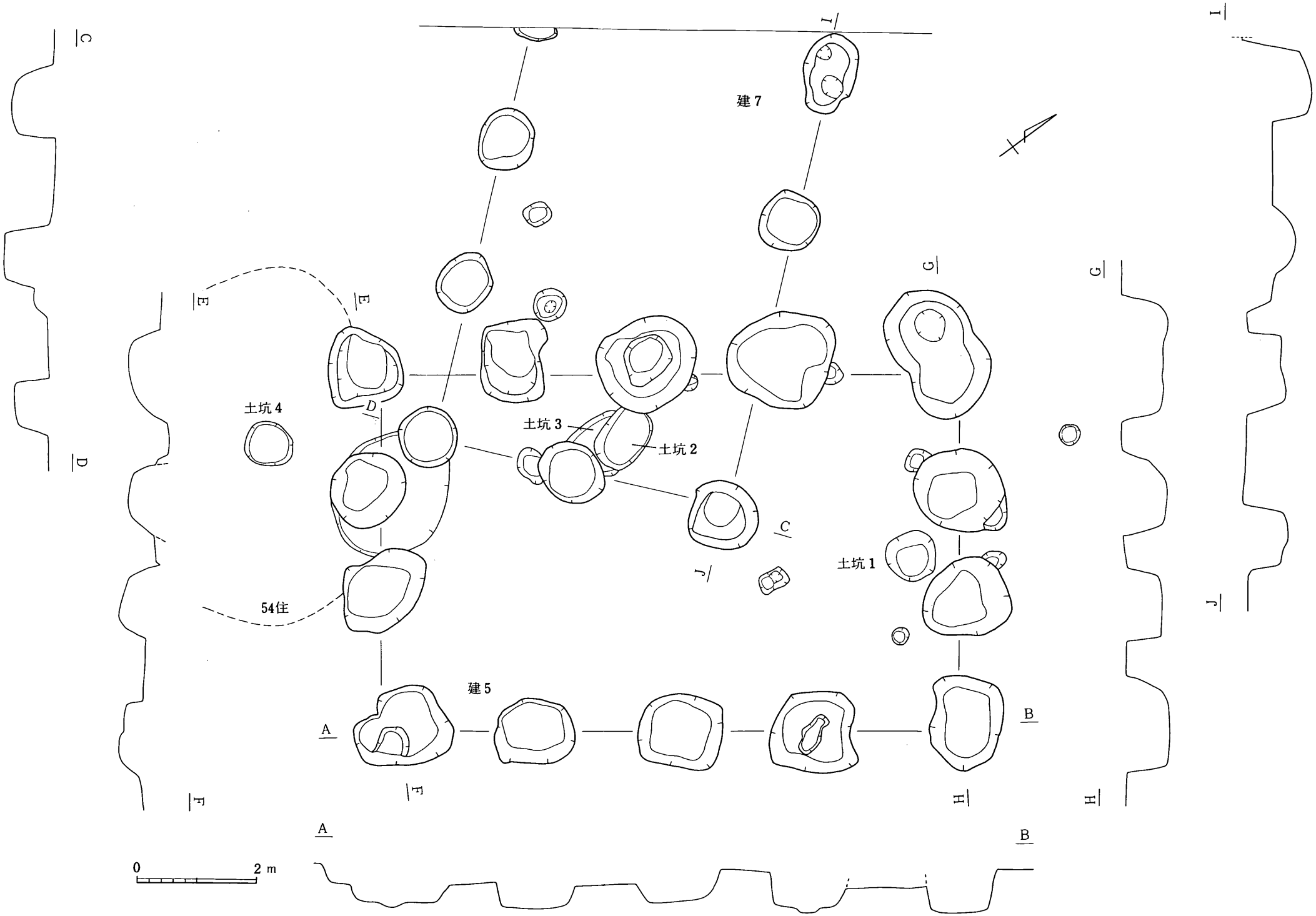
建物址6（第337図）

遺構　ＡＲＹＡＫ58を中心に検出された。建物址5・9、土坑8を切り、建物址7・8を切るため、それぞれが重複する掘り方は原形をかなり変じている。4×3間の掘立柱建物址で、桁行9.22m・梁行5.46m、柱間は桁行2.3m・梁行1.82mを測り、桁行方向はＮ65°Ｗを示す。柱掘り方は方形状のものもあるが、ほとんどが楕円形で、径1.58～1.08m・深さ100～50cmを測る。建物址5と同様に当初土坑として把え調査を進めたため、状況把握に不十分な点があり、柱痕等の把握はできなかった。掘り方が不整形を成すものがいくつかあり、柱が抜き取られた可能性もある。

遺物により本址の時期決定は不可能であるが、重複する建物址との関係から奈良時代に位置づくと考えられる。具体的な性格等不明であるが、重複する建物址同様に官衙の一画を成すと考えられる。また、建物址5とは規模・形態にかなり共通点があり、同様性格の建物址を位置・方向を変えて建て替えている可能性もある。　（小林正春）



第337図　ARY　建物址6・9、土坑5・7・8・9



第338図　ARY 54号住居址、建物址 5・7、土坑 1・2・3・4

建物址７（第338図）

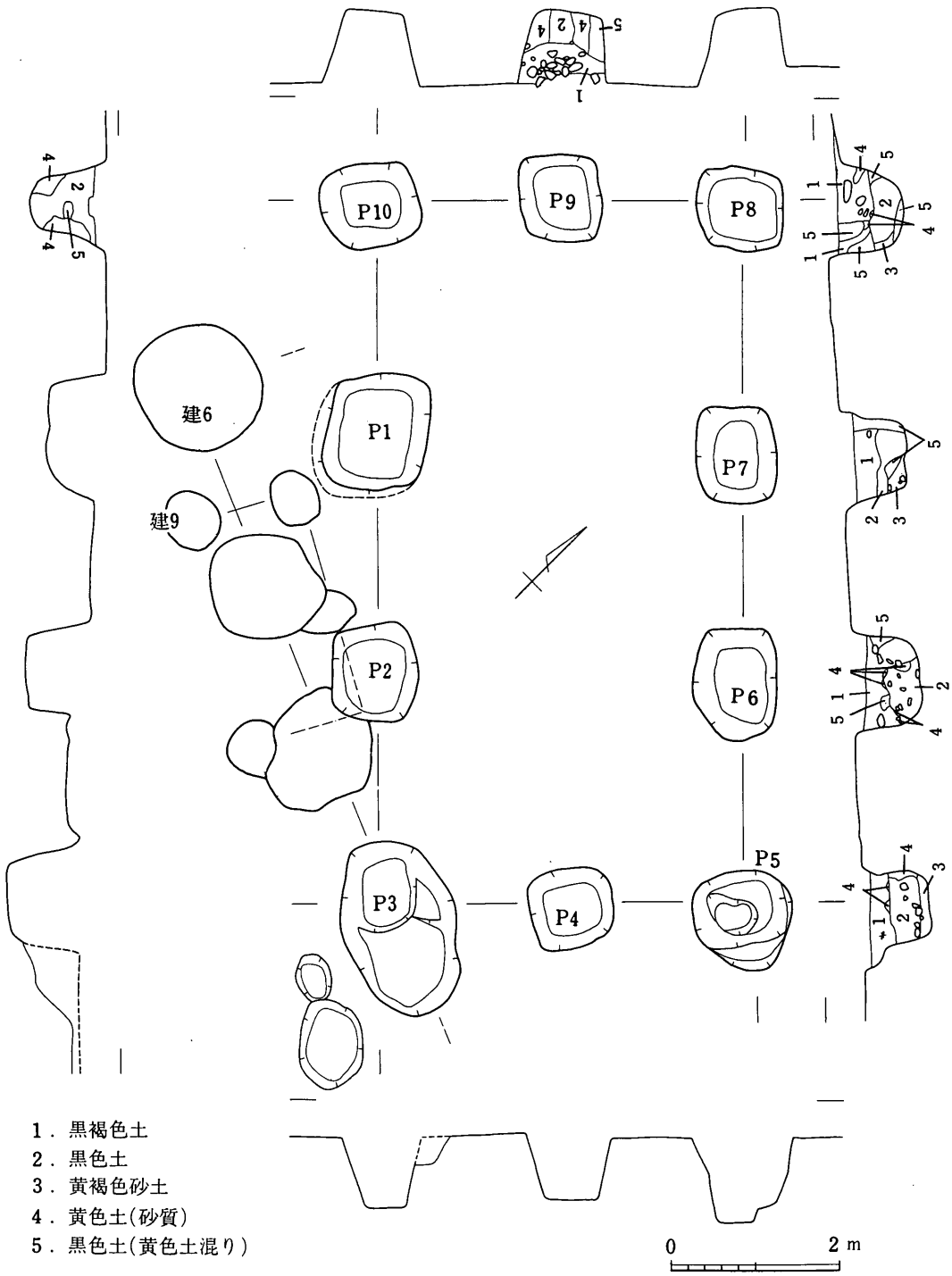
遺構　ＡＲＹＡＪ54を中心に検出された。２号・４号住居址、建物址５・６、土坑３を切り、西側が用地外のため北西側柱掘り方の確認はできなかった。３×２間と考えられる掘立柱建物址で、北西側柱掘り方が不明のため４×２間の可能性もある。３×２間と考えると桁行7.8m・梁行5.02m、柱間は桁行2.6m・梁行2.51mを測り、桁行方向N40°Wを示す。柱掘り方は建物址５・６に比べやや小形で円形もしくは楕円形を呈し、径は138～85cm・深さ120～50cmを測る。柱掘り方内の土層観察により、柱痕等の確認はできなかった。

遺物による時期決定はできないが、重複する建物址と同様に官衙域の一画を成すと考えられ、切り合い関係で最も新しい建物址の１つと把えられ、建物址８と同時存在の可能性がある。

（小林正春）

建物址８（第339図）

遺構　ＡＲＹＡＮ49をほぼ中心に検出された。排土の関係からＰ１～Ｐ４を昭和54年10月に、Ｐ５～Ｐ10は昭和55年３月との２回にわたる調査となり、昭和54年の調査時に建物址の可能性もあるとしながら土坑として処理した。Ｐ２・Ｐ３が建物址６と重複する。３×２間の掘立柱建物址で、10個の柱掘り方を確認した。桁行8.22cm・梁行4.33mを測り、桁行方向はN65°Wを示す。桁行の柱間は2.74m、梁行の柱間は2.16mである。掘り方は方形ないし長方形で、1.35×1.2m～0.96×１mを測る。検出面からの深さは97～64cmを測り、北側の掘り方に比べ南側のものが深い。地形は北から南へわずかに傾斜しており、南側の掘り方が当初から深いものであったといえる。Ｐ１～Ｐ５の壁は四辺ともほぼ垂直に掘られ、Ｐ１～Ｐ４は平坦な底部であるが、Ｐ５は底部南側がさらに15cm深く掘られている。Ｐ６・Ｐ７は長辺壁がほぼ垂直で短辺壁が緩傾斜となり、底部はＰ６の南東側が、Ｐ７の北西側がそれぞれ５cm程低くなっている。Ｐ８は底部中央部がやや低く、短辺壁が垂直で、長辺壁が底部近くで緩やかになる掘り方である。Ｐ９はＰ１～Ｐ５と同様に四辺ともほぼ垂直に掘られ、南東側底部がやや深くなる。Ｐ10はほかの掘り方に比べ緩やかな壁で、全体形も不整形で底部中央が凹んでいる。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ８・Ｐ９の上面覆土中には径10cm前後の礫が混入しており、Ｐ１下層に炭と小石が、Ｐ３の覆土中程に炭がわずか認められ、Ｐ６の覆土には全体に礫が認められるが、上層より下層に多く混入し、柱を立てる時の埋め戻しの覆土に入れられていたと考えられる。Ｐ７もほぼ同様に下層に礫が混入し、たたかれたように堅く締まっていた。Ｐ10は上層覆土中のみに小石が認められた。また、プラン検出時に建物址内部のＰ４～Ｐ９の内側に、掘り方覆土中に含まれる石とほぼ同じ大きさの礫が敷かれているように検出されたが、Ｐ４付近はまばらで、建物址に直接結び付くかは不明である。柱痕と考えられる部分が平面で認められる柱掘り方はＰ６～Ｐ10で、土層断面に柱痕が確認できるものにＰ２・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ10、底部に柱位置を示す凹地があるものはＰ５～Ｐ７である。いくつかの



第339図　ARY　建物址 8

要素を検討して、Ｐ７・Ｐ９・Ｐ10の柱位置はほぼ確定できた。柱は丸材で直径30～25cmと考えられる。土層が乱れているものや上面全体を礫に被われている柱掘り方もあることから、柱は抜き取られていると考えられる。

出土遺物はきわめて少なく、遺物から時期を決定することはできないが、周辺の遺構・建物址等から奈良時代と考えられる。（佐合英治）

建物址９（第337図）

遺構　ＡＲＹＡＬ57付近で検出された。建物址６・８に切られる。２×２間の掘立柱建物址である。桁行2.69m・梁行2.56mで、柱間はそれぞれ1.34m・1.28mを測り、桁行方向はＮ30°Ｅを示す。柱穴掘り方は建物址８に切られる北東隅のものを除き７本確認でき、73～48cmの円ないし不整円形を呈し、深さ29～13cmを測る。

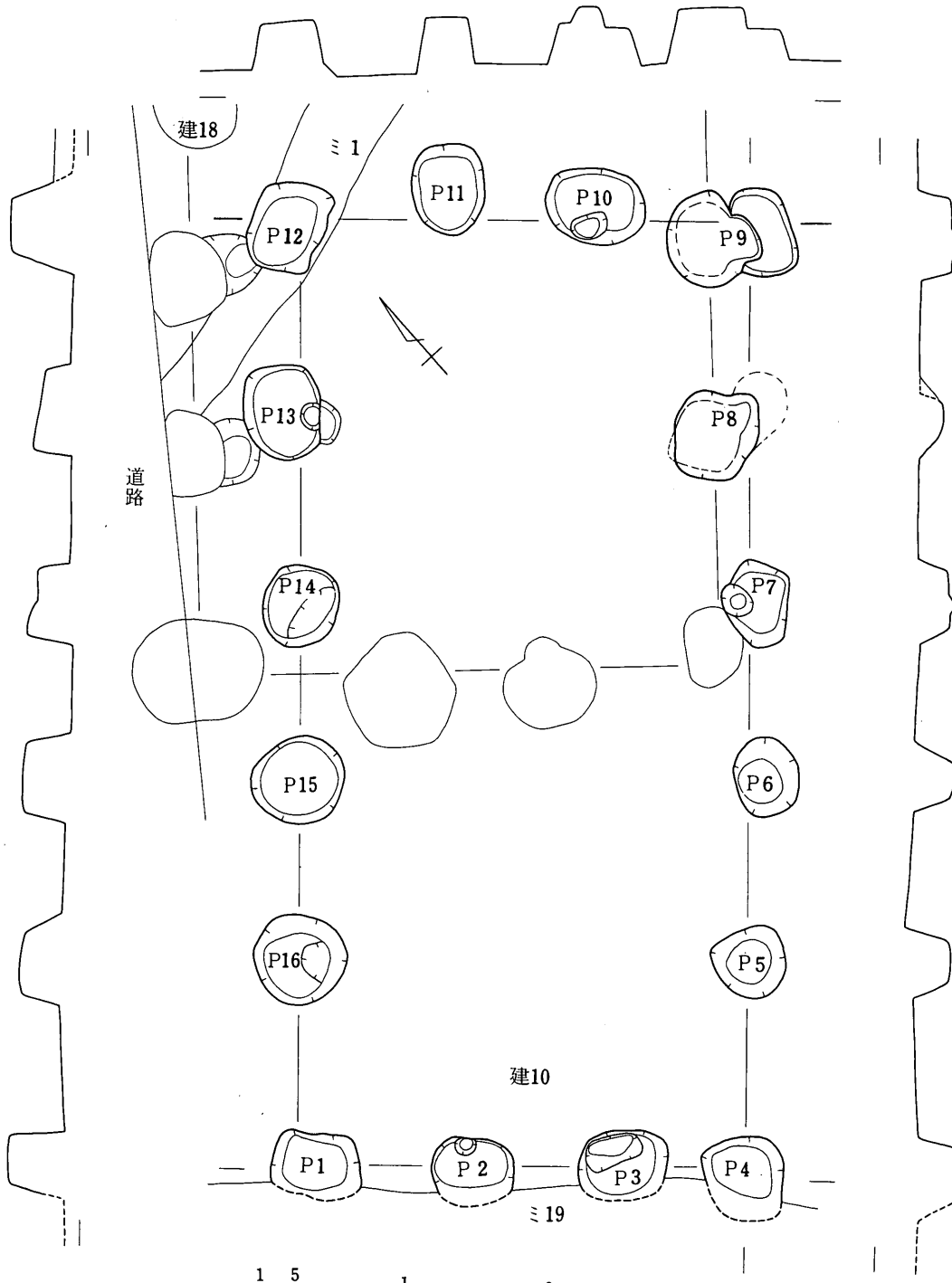
時期を決定できる遺物の出土はなく、切り合い関係から奈良時代に位置づけられる。

（山下誠一）

建物址10（第340図）

遺構　ＡＲＹＤＨ49を中心に検出された。排土の関係からＰ５～Ｐ16は昭和53年に、Ｐ１～Ｐ４は昭和55年にと２回に分けての調査となった。Ｐ５～Ｐ16は柱掘り方としての把握が遅れ、土坑として処理したため、建物址として細部の観察ができない結果となった。Ｐ１～Ｐ４は溝址19に切られ、Ｐ12は溝址1を切り、Ｐ７～９は建物址18と重複するが、全体を把握することができた。５×３間の掘立柱建物址で、桁行10.7m・梁行5.15mを測り、桁行方向はＮ45°Ｅを示す。方形ないし円形の柱掘り方を16個検出した。掘り方は1.1×1.1m～0.64×0.76mを測る。桁行の柱間は2.14m、梁行の柱間は1.71mを測る。検出面からの深さは68～36cmを測り一定でない。柱掘り方壁はいずれも垂直に近い掘り込みで、底部は丸味を持つものが多い。柱痕位置が確実な掘り方はＰ１で、黄色土と黒色土がブロック状にたたきしめられた層を覆土下層に検出したさいに、建物址の内側となる掘り方壁に接して確認した。Ｐ１と同じように建物址の内側の壁に接して丸い凹みがあるものにＰ２・Ｐ７・Ｐ10・Ｐ13があり、Ｐ３・Ｐ14・Ｐ16は部分的に傾斜した底部である。いずれも柱位置を示す可能性がある。柱は丸材で直径25cm前後の太さであったと推定される。

図化できない土師器・須恵器の細片が覆土中より出土している。遺物から時期決定はできないが、周辺の遺構との関連から奈良時代と考えられる。（佐合英治）



第340図　ARY　建物址10

建物址11（第336図）

遺構　ＡＲＹＤＴ50を中心に検出した。15号住居址を切る。1×1間を確認し、桁行柱間寸法2.63m・梁行柱間寸法2.34mである。

遺物　わずかの土器片が出土している。

時期は不明であるが、住居址との切り合い関係から弥生時代中期以降のものである。

（佐々木嘉和）

建物址12（第336図）

遺構　ＡＲＹＢＷ50を中心に検出された。26号住居址を切り、市道にかかる。Ｌ字形に柱穴３個を確認した。（1）×（1）間で桁行・梁行の規模等の確認はできない。約1.54・1.31mの柱間である。柱穴の深さは北隅が60cmで、他の２個が25cmである。

遺構　土師器片がごくわずか出土しているが、時期の決定はできない。（佐々木嘉和）

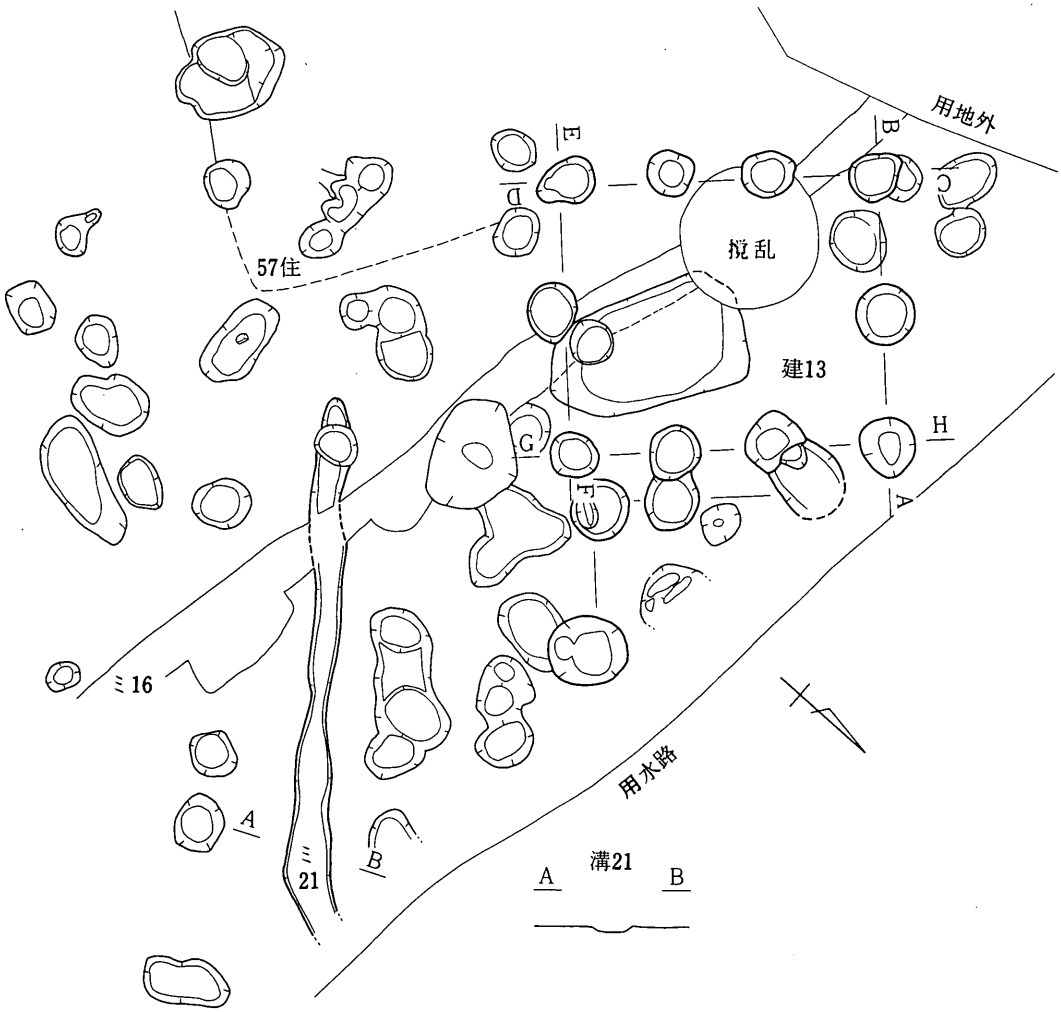
建物址13（第341図）

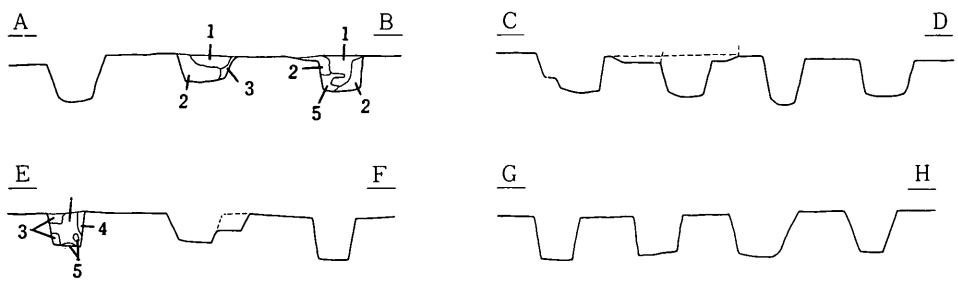
遺構　ＡＲＹＡＴ59･60周辺に検出された。土坑･溝に切られ、複数の穴と重複するが新旧の確認はできない。北東側に隣接して覆土や検出状況の似る柱掘り方を４本確認したが、大半が用地外のため建物址として断定はできない。３×２間の掘立柱建物址で、桁行3.3m・梁行2.8mを測り、桁行方向はＮ29°Ｗを示す。桁行柱間は1.1m･梁行柱間は1.4mである。掘り方は若干歪むものもあるがほぼ円形で小さく、64×62cm～48×46cmで、深さは57～28cmを測る。北東側の建物址は２本の穴が本建物址と切り合って検出され、土層の観察から本建物址を切っていることを確認した。規模等は不明であるが、同一方向を示していると考えられ、検出した柱掘り方は84×72cm～58×58cm、深さ27～19cmを測る。掘り方壁は両建物址とも垂直を成すものと緩やかな部分を持つものとがある。覆土は黒色土が中心で、平面的にも土層断面の観察からも柱痕は確認できなかった。

遺物は出土せず、形態・周辺遺構の関連からも時期の決定はできない。（佐合英治）

建物址14（第342図）

遺構　ＡＲＹＣＥ50を中心に検出された。西側は21号住居址カマド下に柱掘り方１本が位置するためカマド調査後ようやく全体を把握した。21号住居址・溝址６に切られている。３×２間の掘立柱建物址である。桁行方向はＮ32°Ｗを示す。桁行3.28m・梁行2.82mを測り、柱間は桁行で1.09m、梁行で1.41mである。南側の梁の中間の穴は精査したが、検出できなかった。柱掘り方





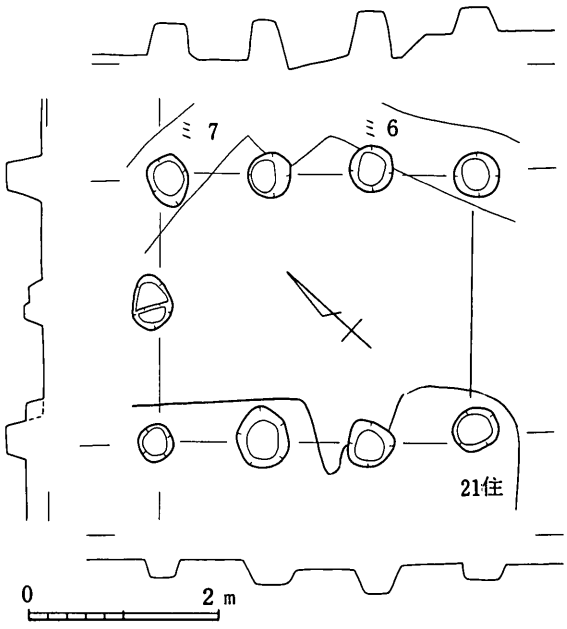
1．黒色土
2．黒色土(黄色土混り)
3．暗褐色土
4．暗褐色土(黒色土混り)
5．黄色土

0　2 m

第341図　ARY　建物址13、溝址21、Pit群

は62～37cmの不整円形を呈し、深さは西側で46～37cm、東側は21号住居址の床面から28～20cmを測る。梁の中間の穴は深さ20cmと他に比べてやや浅い。穴の覆土は黒色土ないし黄色土が混る黒色土である。

時期を決定する遺物の出土はない。切り合い関係から古墳後期後半以前に位置づけられる。　（山下誠一）



第342図　ARY　建物址14

建物址15（第343図）

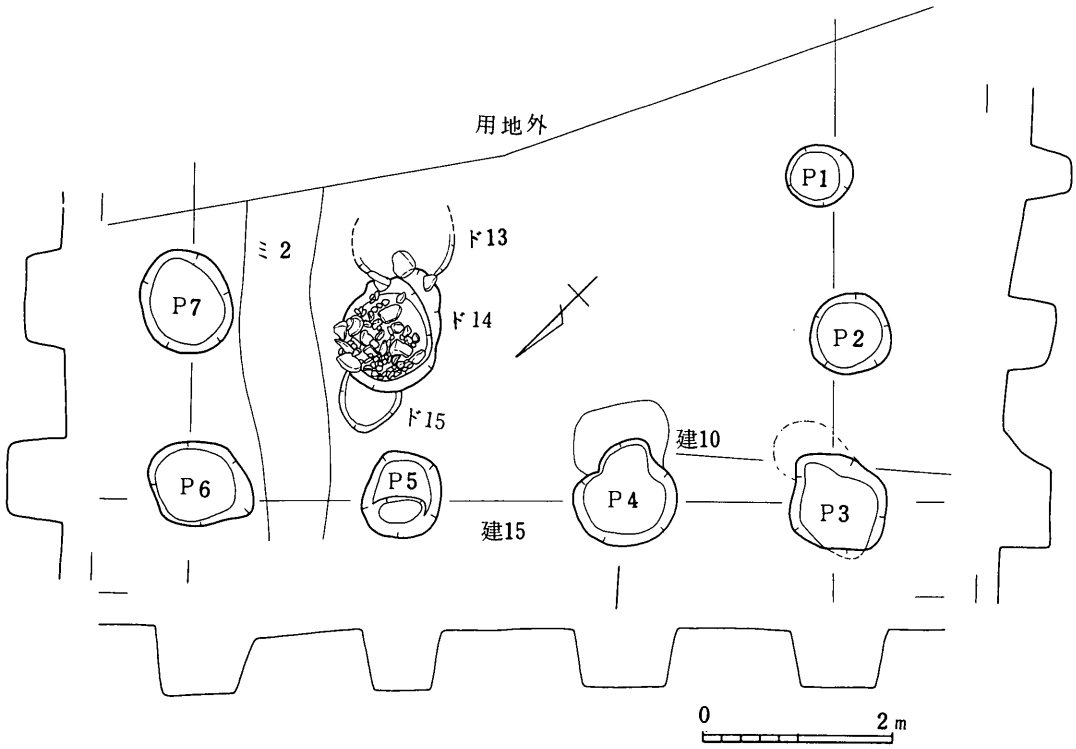
遺構　ＡＲＹＤＬ52を中心に検出された。穴を当初は土坑群として調査を進め、全面掘り上げた後に掘立柱建物址の柱掘り方と確認した。建物址10・18と重複するが、新旧関係の把握ができなかった。東側は用地外にかかり、規模を確定することはできないが、４×３ないし５×３間と推定される掘立柱建物址である。梁行は6.76mで、柱間は桁行1.7m・梁行2.25mを測り、桁行方向はN52°Wを示す。他の建物址の穴と重複しない穴の掘り方は円形を呈し、1.07～0.8mの規模で、深さ50～40cmを測る。Ｐ３～Ｐ６は建物址18とＰ３・Ｐ４は建物址10と重複する。

時期を決定できる遺物の出土はないが、遺構の状況から奈良時代に位置づけられる。

（山下誠一）

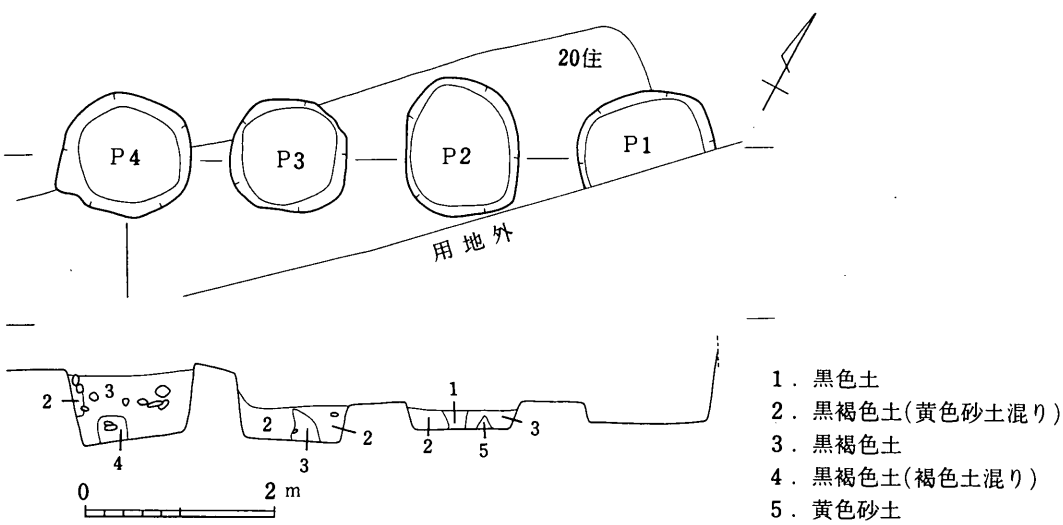
建物址16（第344図）

遺構　ＡＲＹＣＶ54を北西側部分として４本の柱掘り方が検出された。20号住居址を切るが、上層から穴を把握することはできなかった。南東側は用地外にかかるため、規模の確認はできないが、桁行方向はN46°ＥないしN44°Wを示す掘立柱建物址である。柱間は1.8mを測る。柱掘り方は1.44～1.16mを測り、大形の楕円形を呈し、20号住居址の検出面から90～80cmの深さを測る。Ｐ３・Ｐ４には10cm前後の礫が多く入っていた。土層観察により柱痕の可能性ある部分も認められたが断定はできない。



第343図　ARY　建物址15、土坑13・14・15

遺物は20号住居址と同一時期の土器片のみで、時期を決定できるものはない。遺構の状況・住居址との切り合い関係から奈良時代に位置づけられる。　（山下誠一）



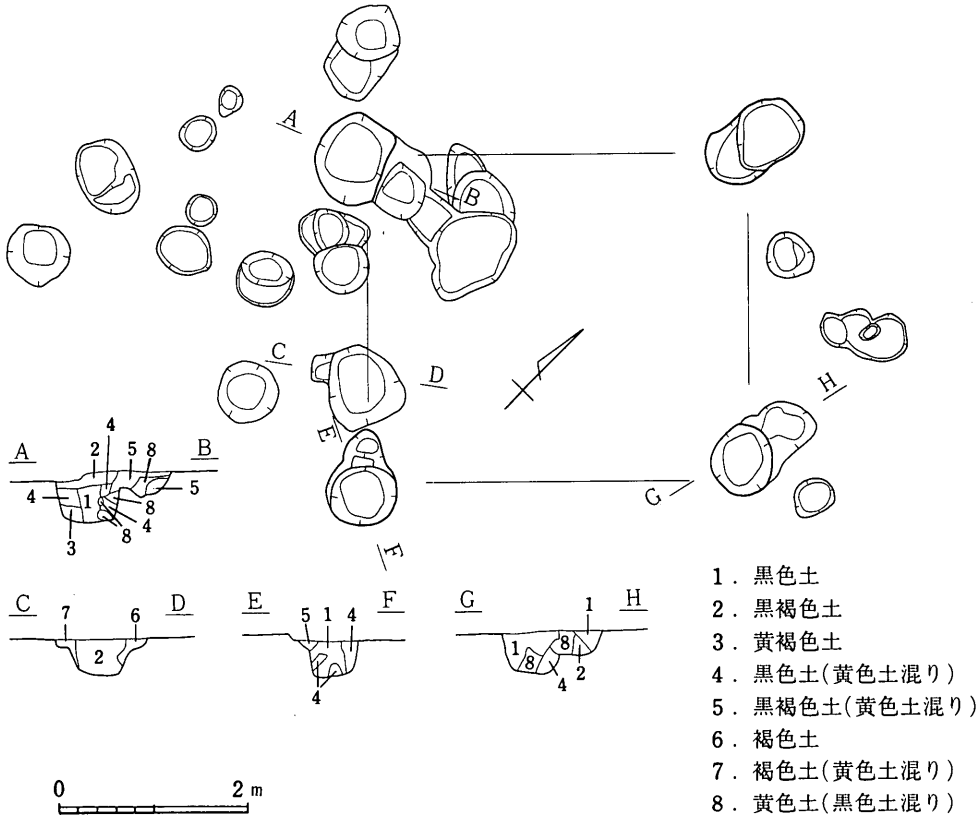
第344図　ARY　建物址16

建物址17（第345図）

遺構　ＡＲＹＣＨ47を中心に検出された。１×１間の掘立柱建物址で、桁行4.06・梁行3.48ｍを測り、桁行方向はＮ42°Ｅを示す。穴の掘り方は96～66㎝の楕円形を呈し、深さは60～42㎝を測る。いずれも周辺に散在する他の穴と重複し、それらとの新旧関係は不明である。

時期を決定する遺物は得られなかったが、規模等からみて古墳時代以前と考えられる。なお、周辺に散在する穴は本址と同様の時期が考えられるが、それぞれの関連は不明で性格も判断できない。

（山下誠一）

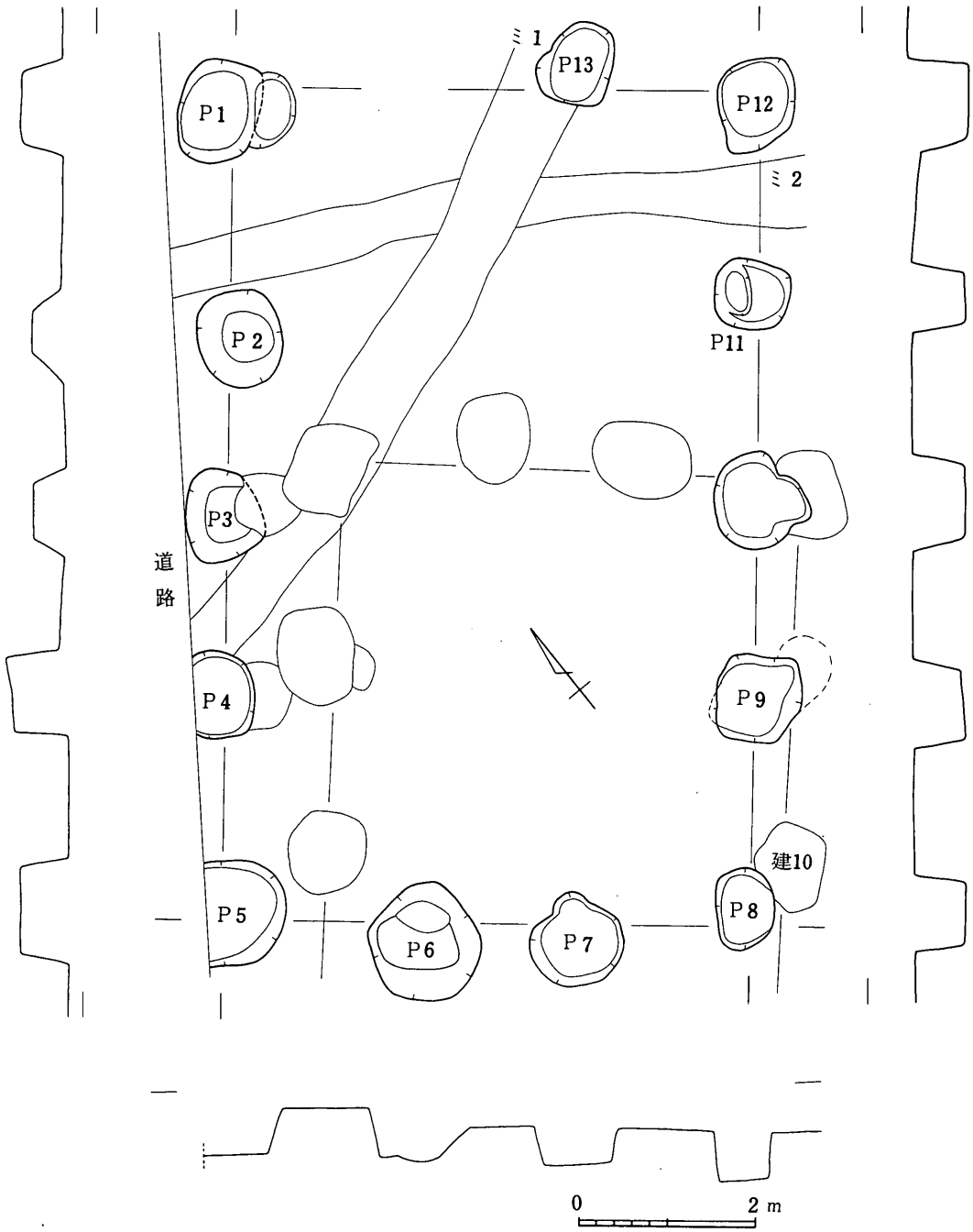


第345図　ARY　建物址17、Pit群

建物址18（第346図）

遺構　ＡＲＹＤＬ50を中心に検出された。建物址10・15と同様に当初は土坑群として調査を進めたために、建物址相互の新旧関係の把握ができなかった。11号住居址と溝址１を切る。４×３間の掘立柱建物址で、桁行9.22ｍ・梁行5.9ｍを測り、桁行方向はＮ43°Ｅを示す。柱間は桁行で2.3ｍ、梁行で1.93ｍを測る。他の建物址と重複しない穴の掘り方は、1.4～0.76ｍの丸味を帯びた方

形ないしは楕円形を呈し、深さは80～32cmを測る。Ｐ９～Ｐ12は建物址15と、Ｐ９は建物址10と重複している。Ｐ１とＰ13の間の穴を検出できなかった。当初土坑として把えたこともあり、土層等により柱痕の位置等の把握はできなかった。



第346図　ARY　建物址18

遺物は縄文土器から土師器までの破片が出土したが、時期を決定できるものはない。

遺構の状況から奈良時代に位置づけられる。（山下誠一）

建物址19（第355図）

遺構　ＡＲＹＤＬ45を中心に検出した。溝址18と重複するが新旧関係は確認できなかった。用地外にかかり、直列４本の柱穴を確認したのみである。柱間の延長は5.5mあり、柱間ごとの寸法は、両端が1.48m、中間が2.65mで広い。柱穴平面形は統一性がないが短径80cm以上あり大きい。用地外方向に延びる可能性がある。

時期を決定する材料はないが、近接して所在する一連の大きな掘り方を持つ掘立柱建物址に連なるものの可能性が強く、奈良時代であろう。（佐々木嘉和）

４）溝址・溝状遺構

溝址１（第347図）

遺構　ＡＲＹＤＬ50を中心に検出し、用地内を東西に斜めに横断する溝址である。溝址２を切り、建物址10・18に切られる。確認した長さは約14m・幅１m前後で、深さは検出面から20～10cmである。東方で方向を変えるが、長い部分の方向はＮ68°Ｅである。壁は比較的緩く底に続き、底・壁に水の流れた痕跡は認められなかった。断面観察点ＥＦ付近から建物址18の柱穴までの間に、石が多く入っていた。

遺物　覆土中から土師器片がわずか出土している。

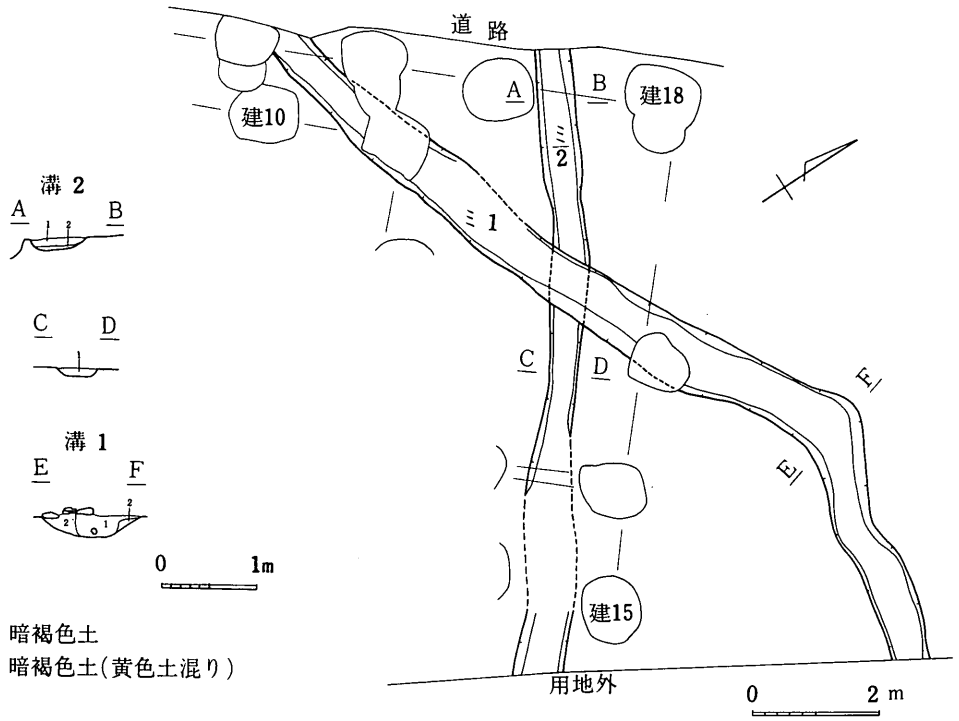
時期は切り合い関係と遺物から古墳時代の遺構であろう。（佐々木嘉和）

溝址２（第34７図）

遺構　ＡＲＹＤＭ50が中心で、用地内をほぼ直角に横切る溝址である。溝址１、建物址15・18に切られる。確認した長さは約９m・幅70～50cm・深さは検出面から15～10cmである。方向はＮ55°Ｗを示す。壁は比較的緩く底に至る。底部・覆土中に水の流れていた痕跡はない。

遺物　土師器・須恵器など出土しているがいづれも小破片である。

時期は決め手になるものがないが、切り合い関係から古墳時代以前である。（佐々木嘉和）

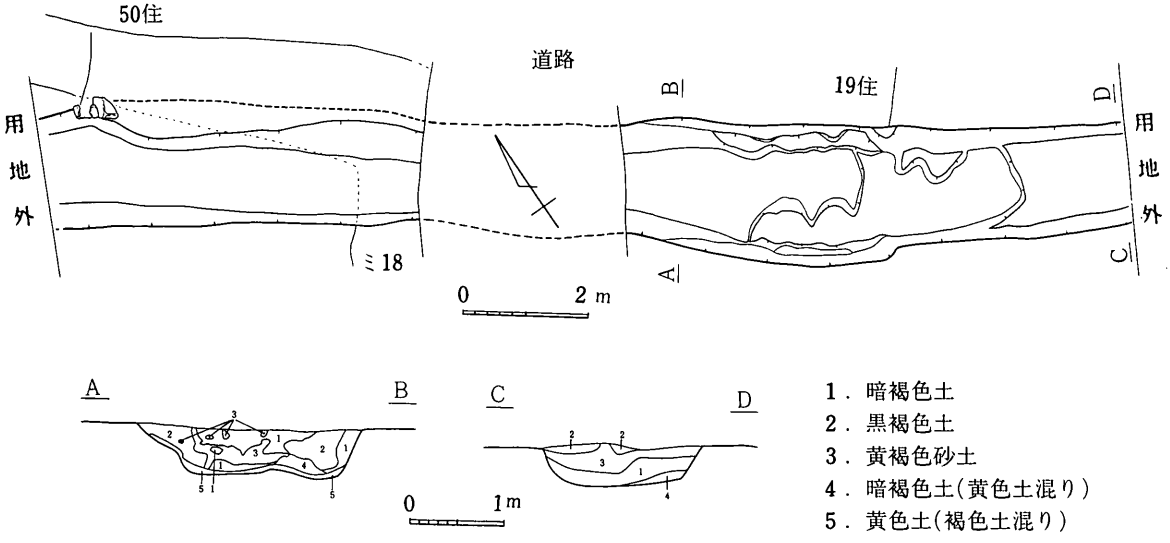


第347図　ARY　溝址1・2

溝址3（第348図）

遺構　ＡＲＹＤＶ50を中心に検出した。19号・50号・59号住居址を切り、溝址18に切られる。道路にかかるため中央部３ｍが調査できなかった。用地内をほぼ直角に横断する溝址である。調査した長さは13m・幅2.2m・深さは検出面から50～30cmである。方向はＮ53°Ｗを示す。覆土最下部に細かな黒褐色土の層・その上に砂層が比較的厚く入り、上部は石が入っている。石は検出面と同レベルに、直径30～10cmのものが沢山入っていた。溝埋没時の最末期に人為的に入れられた可能性がある。水の流れていた事は確実であるが、幅が広く単なる灌概用とは思われず、何らかの区画施設的性格が考えられる。

遺物　出土量は少ないが覆土の全層から出ている。土師器甕・坏・高坏、勾玉などが出ている。時期は切り合い関係と遺物から古墳時代後期と思われる。　（佐々木嘉和）



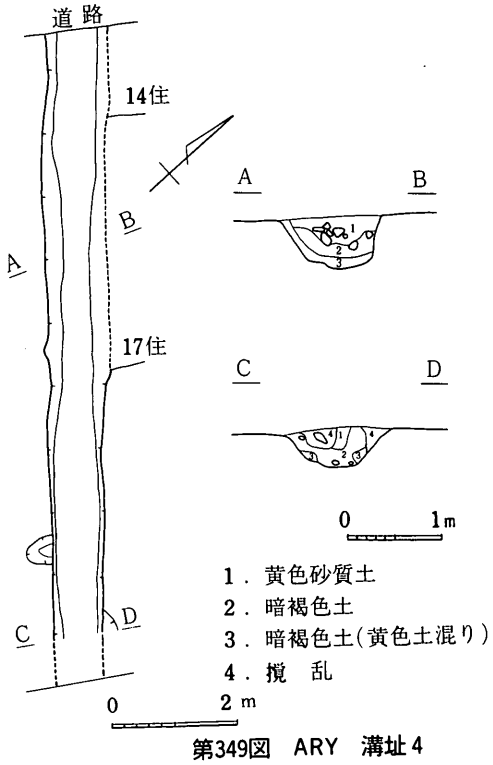
第348図　ARY　溝址3

溝址4（第349図）

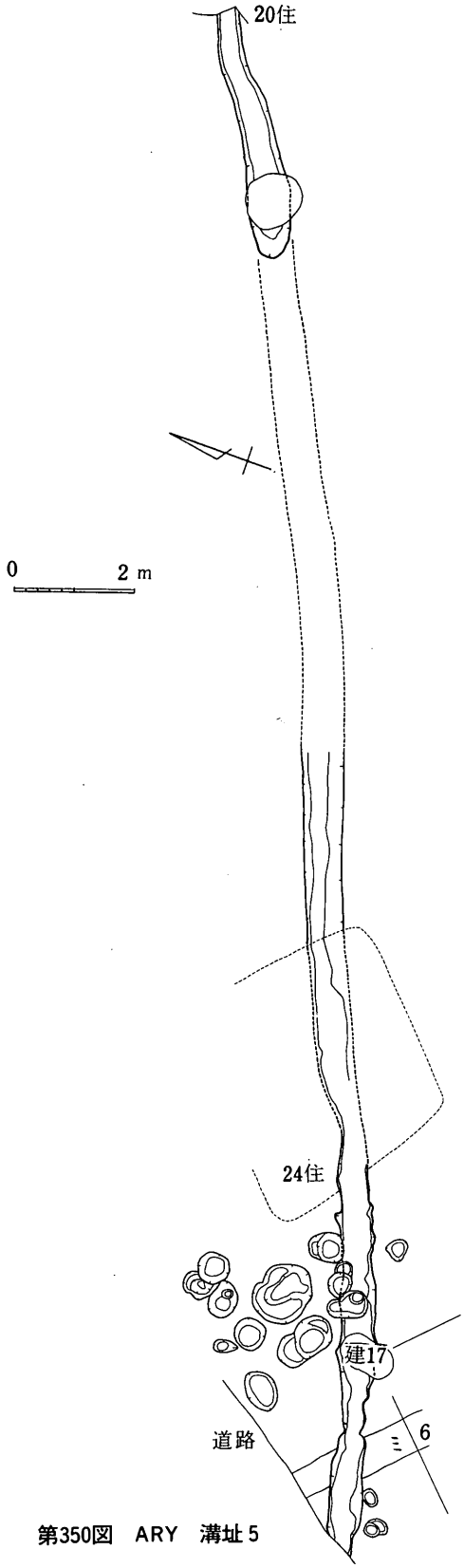
遺構　ＡＲＹDQ50を中心に検出した。14号・17号住居址を切っている。確認した長さは9.5m・幅1～0.8m・深さは検出面から40cmで、方向はN 47.5° Wを示す。用地内を斜めに縦断する道路にかかり、その北西側に延長部は認められず、道路下で終わると判断される。道路に沿って溝址18があり、関連があるものと思われるが、溝址18南東側壁も道路下で確認はできなかった。水の流れた痕跡はない。覆土上部に石が入っており埋没時に入れたものと思われる。溝址18との関連も考えれば、区画施設の可能性が強い。

遺物　土師器甕片などわずか出土している。

時期は切り合い関係から古墳時代終末から奈良時代と思われる。　（佐々木嘉和）



第349図　ARY　溝址4



第350図　ARY　溝址5

溝址5（第350図）

遺構　ＡＲＹＣ区をほぼ東西に横断する。24号住居址を切り、建物址16に切られる。溝址6との切り合い関係は確認できなかった。確認した部分は12mであるが、中程に検出できなかった箇所があり、延長は30mである。幅80～30cm、深さは検出面から10～4cmと浅く、凹凸が著しい。方向はN67°Eを示す。底部は極めて堅く、所々に直径10～5cmの穴があった。底部が堅く浅い事から道路址の可能性もある。

遺物　ごくわずか出土したのみである。

切り合い関係から弥生時代中期以降であるが具体的な時期は決定できない。　（佐々木嘉和）

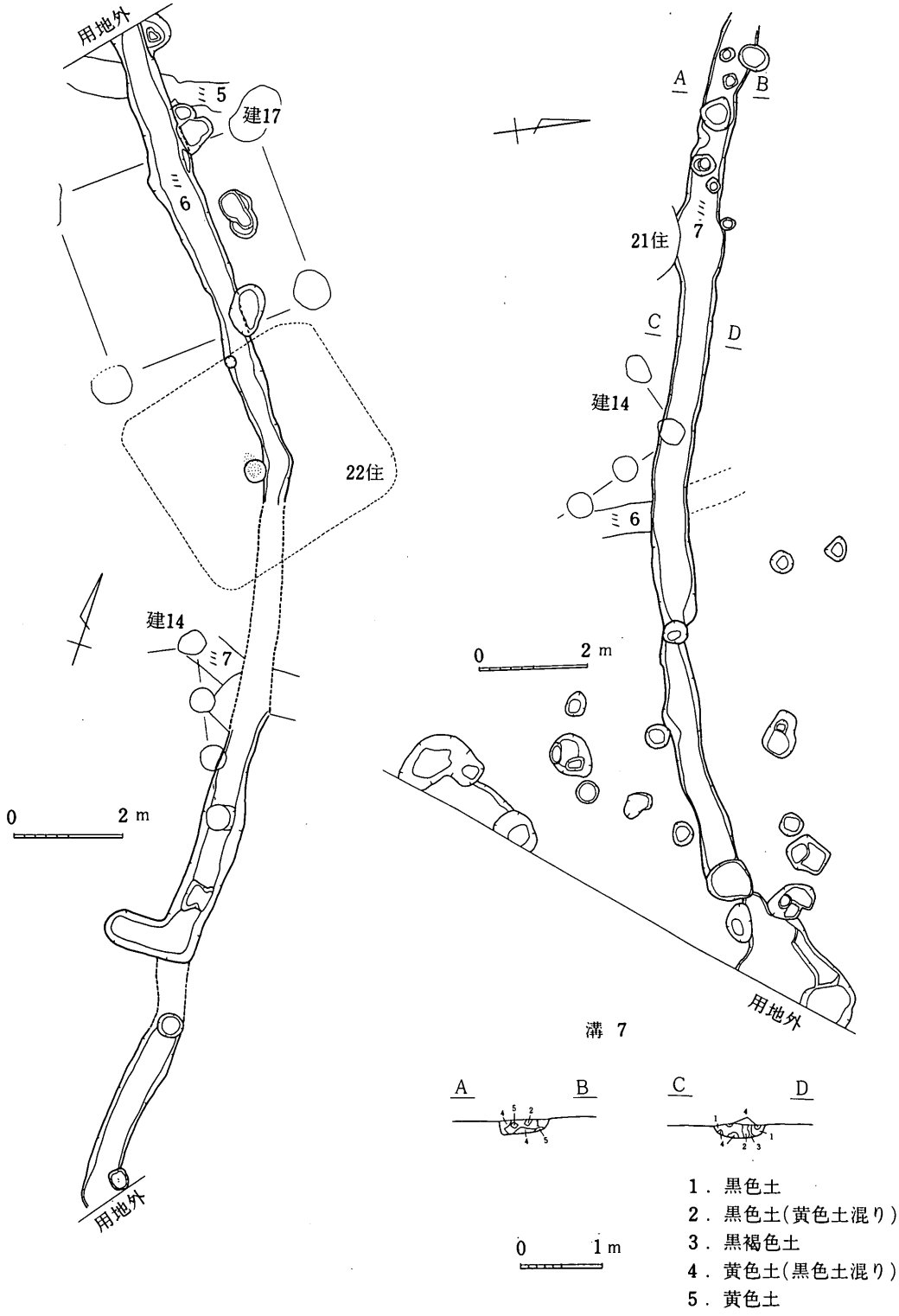
溝址6（第351図）

遺構　ＡＲＹＣ区を南北に横断する。22号住居址・建物址14を切り、溝址7に切られる。溝址5との切り合い関係は確認できなかった。中間に検出できなかった所があるが、長さ28mを確認した。幅80～50cm、深さは検出面から30～5cmである。溝の方向は曲がっているがほぼ南北である。覆土中に水の流れた痕跡はなく、性格は不明である。

遺物　土師器片がわずか出土している。

住居址との切り合い関係により弥生時代以降であるが具体的時期は決定できない。

（佐々木嘉和）



第351図　ARY　溝址6・7

溝址7（第351図）

遺構　ＡＲＹＣＥ～ＣＨで用地内を斜めに横断し、21号住居址・建物址14・溝址6と重複する。長さは16mを確認し、幅70～50cm、深さは20cm前後を測る。方向はほぼN87°Wを示す。溝址6と共通点が多く、単なる水路とは考えにくい。覆土の様子から人為的に埋めもどしたと推測され、何らかの区画施設と判断される。

遺物　弥生時代土器片と土師器片がわずか出土しているが、実測可能なものはない。

溝址6と同様に古墳時代以降の遺構である。（佐々木嘉和）

溝址8（第352図）

遺構　ＡＲＹＥＰ44からＥＮ51にかけて検出された。表土から検出面までが浅いうえに、桃の耕作による攪乱を受け断続的に15m程検出し、方向はほぼN46°Wを示す。ＥＮ51付近では、33号住居址を切っていた。北側は調査の土盛り下に、南東側は用地外にかかって調査できなかった。幅1.32～0.96mで、深さ30～10cmを測り、西側はやや浅くなる。断面形は不定形であるがＵ字形を基本としている。土層は上層に暗褐色土が入り、下層は褐色の砂利が入る。砂利の中には10cm前後の礫が混入していた。

遺物　出土量は少ない。ほとんどが破片で流れ込みによる角がとれたものが多い。弥生時代中期から平安時代のものまでが出土している。土師器甕・高坏・内面黒色の坏、須恵器甕、灰釉陶器埦がある。灰釉陶器の出土から平安時代後期以降が最終段階となる。

溝の性格は規格性のない掘り込みや土層から、雨水の流入によって掘られた溝と考えられる。（山下誠一）

溝址9（第352図）

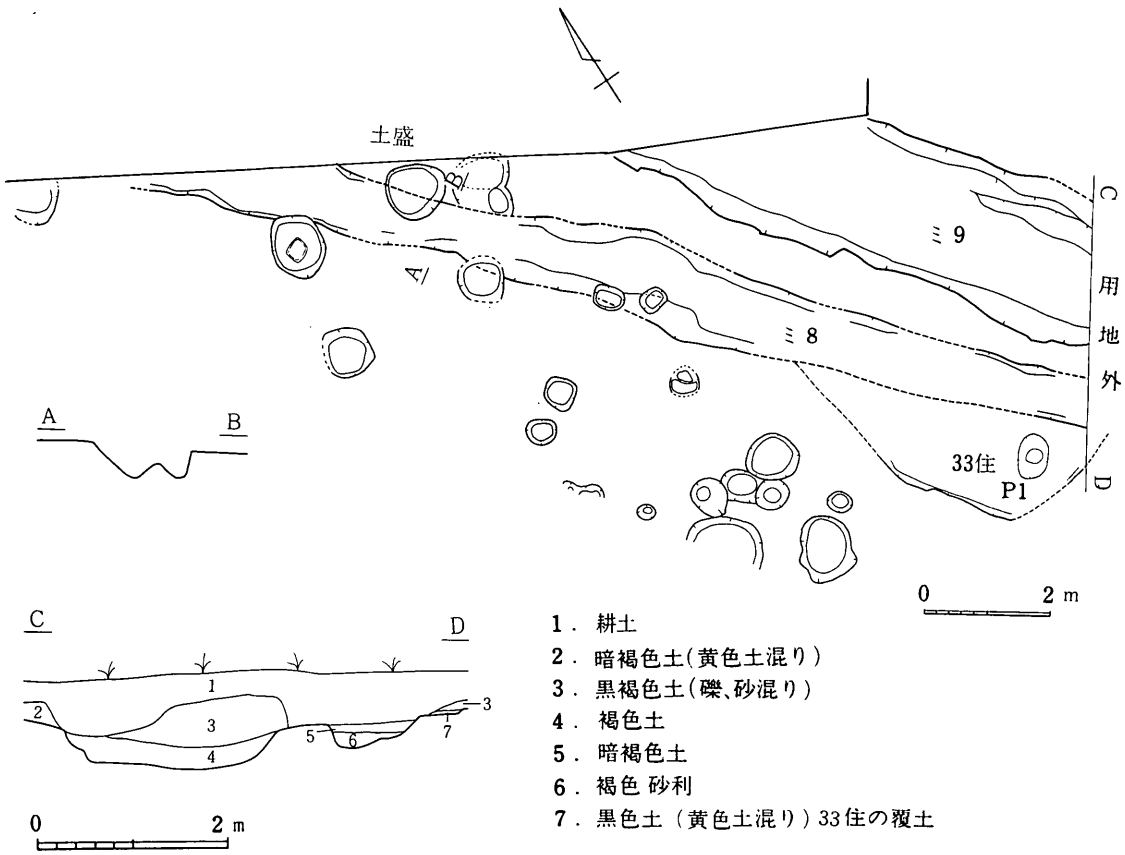
遺構　ＡＲＹＥＰ48からＥＯ51の本遺跡北端部、地形的にも北側へ約10m落ちる台地肩部に検出された。桃の耕作によって上層を切られ、33号住居址を切っている。南東側は用地外にかかり調査できなかった。北西側は用地内であるが、調査の土盛り下のため調査を断念した。調査範囲の長さは約８ｍで、幅2.2m前後・深さ60cm程を測り、方向はＮ38°Ｗを示す。断面は逆台形を呈し、急な立ち上がりを示すが、北東壁の一部に段がついている部分もみられた。土層は上面に褐色土その下に黒褐色土が入る。両層の境から黒褐色土層には30cm前後の石が多く混じる。土層からみれば、一気に埋まったと考えられる。

遺物　石の間からの出土が多いが、調査範囲が狭いので、量的には少ない。土師器甕、須恵器甕・高台坏・糸切り坏がある。

昭和57年度に実施した第一次恒川遺跡群範囲確認調査で、この溝の延長が120m北西側まで延

びることが確認された(小林1983)。また、方向・土層などに類似点がみられるＡＲＹ溝址19・ＧＯＢ溝址11などとの関連が考えられる。位置及び確認調査による規模・出土遺物から、官衙域の北端を画する施設といえる。なお、調査時点の諸状況により、用地内でかなりの部分が未調査で、未調査部分に重要な資料があったことも予想され、官衙域北端施設という性格から、より慎重な調査を行なうべきであった。

遺物から時期は奈良時代後半が最終段階と考えられる。　（山下誠一）



第352図　ARY　33号住居址、溝址８・９

溝址10（第353図）

遺構　ＡＲＹＥＨ・ＥＩ42に検出された。南西側はわずか42号住居址を切って用地外へ延びている。北東側は耕作の攪乱により消滅し、それより北東では確認できなかった。確認した長さは3.7mで、幅50～28cm・深さ12cm前後を測り、北東から南西へ16cm傾斜している。壁と底部の境ははっきりせず、底部から壁まで緩やかに立ち上がっている。覆土は黄色砂土混りの褐色土一層と考えられるもので一気に埋まっている。

プラン検出時に灰釉陶器片が一片出土したのみで、時期・性格の判断はできない。

（佐合英治）

溝址11（第353図）

遺構　ＡＲＹＥＧ42～ＥＪ43に溝址10と並んで検出された。南西側は42号住居址を切ると考えられるが、42号住居址覆土中には本溝址の検出はできなかった。北東側は耕作による攪乱を受けており、それより北東では本溝址は確認できなかった。確認した北東端から5.8mで、幅85cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりを成し、底部は凹凸がある。確認した北東端から2.3m程南西に寄った所の底部は60cmの間が壇状に高くなる。検出面よりの深さは30～17cmを測るが、南西側と北東側底部のレベル差はほとんどなく、水を流すためのものとは異なる性格を持ち、人為的に掘られたと考えられる。覆土は黄色砂土混り褐色土が中心で、一時期に埋まったと考えられる。

遺物は出土せず周辺の遺構との関連も不明で、時期等の決定はできない。（佐合英治）

溝址12（第353図）

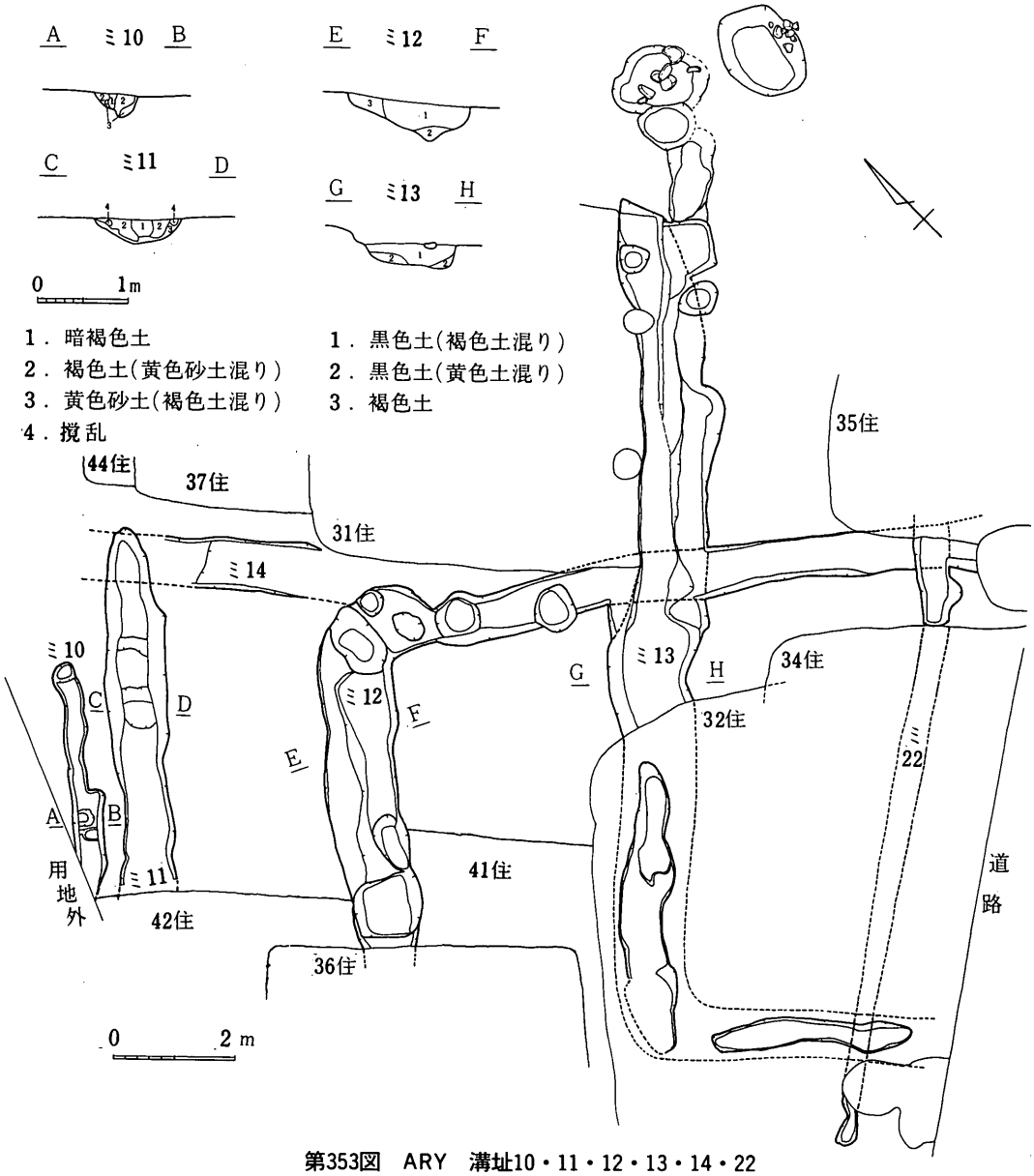
遺構　ＡＲＹＥＩ44から南西と南東へＬ字形に検出された。南東の端は土坑に切られ、かつ道路下へ延びている。道路側から3.4m程は32号・34号・35号住居址検出時に壁を壊してしまい、かろうじて底部のみを確認した。南東溝の調査範囲内の中程で溝址13と交差し、それを切る。南西溝は36号住居址を切ると考えられるが覆土中には検出できず、住居址を越えた箇所でも確認できなかった。南西溝は確認した長さ5.7m・幅1.2m前後・深さ19～13cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。底部は凹凸が多少あり、南東壁側は北西壁側より25～11cm深く掘り込まれている。南東溝の確認した長さは10.6m・幅80cm・深さ20～９cmを測り、壁は垂直を成していたと考えられる。底部はほぼ平坦で、北西から南東へ22cm傾斜している。覆土は褐色土混り黒土と褐色土で、一気に埋まっている可能性が高いが、南東方向溝には砂層を部分的に認める所があり、ほぼ埋没しわずかに凹みの残る部分を水が流れたと考えられる。

遺物には土師器細片があるが、時期・性格等の決定はできない。（佐合英治）

溝址13（第353図）

遺構　ＡＲＹＥＦ46から北東と南東に延び、Ｌ字形に検出された。31号・32号住居址、溝址12を切る。Ｌ字に曲がる部分と南東方向・北東方向それぞれ4.5mは32号住居址覆土中にあり、壁は検出できなかったが、底部は床面を切っており確認することができた。南東溝端は用地内を横断する道路下のため未調査となった。北東方向溝は31号住居址を切り、端部は土坑や穴に切られ、その

先は遺構そのものの確認ができなかった。調査範囲の長さは北東溝12.7m・南東溝4mで、32号住居址内で確認した本溝址の幅は85～36cm、深さは床面より28～8cmを測り、底部は凹凸である。北東溝は幅1.3～1mで、31号住居址と切り合う部分の南東壁側は北西壁側に比べ18～10cm段を作ったように全体が高く、検出面からこの面まで18cm前後・底部まで26cmを測る。32号住居址北東壁から溝址12までの2mは切り合いもなく良く遺構が残っており、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。北東方向溝底部は北東から南西へ8cm傾斜している。覆土はほぼ一層で、一時期に埋まったものと考えられる。



第353図　ARY　溝址10・11・12・13・14・22

直角にＬ字状に曲がっており人為的に掘られた溝と考えられるが、出土遺物は土師器と弥生時代中期土器の細片のみで、時期・性格は不明である。（佐合英治）

溝址14（第353図）

遺構　溝址11の北東端に直交する溝址で、交差部分は耕作の攪乱を受け新旧関係は不明で、それより北西側ではプランの検出はできなかった。南東側は31号住居址・溝址12と切り合うと考えられるが、遺溝を検出できる層が傾斜しているため自然に消滅し、溝址12との新旧関係も不明である。幅・深さ・覆土の状態は溝址11とほぼ同じで、同一の溝址となる可能性がある。確認した長さは2.9m・幅82cm・検出面からの深さ北西端で20cmを測る。底部は丸味を持っており、壁は緩やかに立ち上がっている。

本溝址に伴うと考えられる遺物は出土せず、時期・性格等は不明である。（佐合英治）

溝址15（第354図）

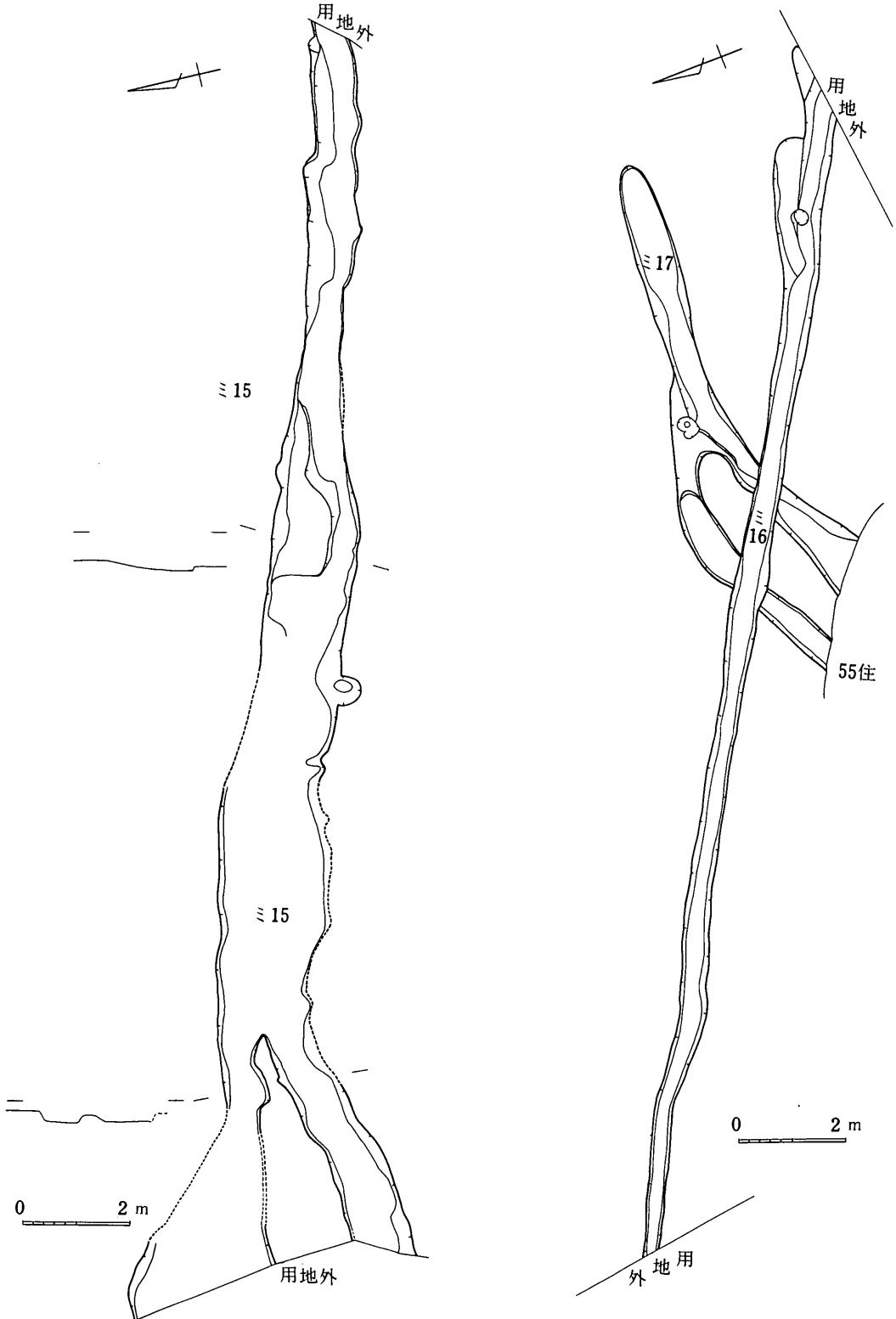
遺構　ARYAP69～AU58に検出した。用地内をほぼ東から西へ横断し、両端とも用地外へ延びており、溝址16の上面の褐色土層中にある。西用地境では２本認められ、４m程東で合流し一本の溝址となる。調査した長さは23.4mで、幅は西用地境の南側溝が1.2m・北側が3.9m・合流地点で1.6m・用地ほぼ中央部で1.7m・東側用地境で0.8mを測る。検出面からの深さは15～10cmであるが、地形の傾斜に伴って西から東へ50cm低くなっている。水の浸食により壁・底部とも場所によりかなりの凹凸がある。覆土は褐色土と砂利や大小さまざまな石が混入しており、自然の溝と考えられる。

遺物　出土量は多いが多時期にわたる。弥生時代中期壺・甕、土師器壺・甕、須恵器甕・坏・蓋、山茶埦の皿・埦、用途不明の鉄製品がある。

遺構が検出された土層から中世以降と考えられる。（佐合英治）

溝址16（第354図）

遺構　ＡＲＹＡＰ68の東用地境からＡＴ58の西用地境まで用地を横断し、溝址15の下層に検出され、用地の両側へ延びている。調査範囲の中央部より南東寄りで溝址17と交差し、これを切っている。調査した長さは21.8mで、幅は西端30cm・中央56cm・東端60cmで、壁高は30～14cmを測り、緩やかな掘り込みで丸味を持つ底部となる。底は西端から東端へ74cm傾斜している。東側用地境近くで枝別れし、底部が本線より25cm前後高くなる。別れた溝は東に行くにつれ浅くなり消滅する。覆土は黒色土が主体で、それに褐色土と黄色土が混じる３層から成っているが、水が流



第354図　ARY　溝址15・16・17

れていた溝の堆積とは異なり、人為的に埋めている可能性がある。

出土遺物は少なく時期・性格等の決定はできないが、溝址15との切り合い関係から中世以前である。（佐合英治）

溝址17（第354図）

遺構　ＡＲＹＡＱ63からＡＱ67まで、ほぼ東西に検出された。調査範囲の中程から西側は２本に分かれ、南西方向にやや向きを変え、溝址16に切られており、55号住居址と重複するが、住居址を越えて本溝址は確認できず、新旧関係も不明である。東の端は底部が徐々に浅くなり消滅するが、遺構を検出可能な土層が東へ傾斜するためで、さらに東へ延びていたと考えられる。調査範囲の長さは8.75m、幅は1.1～0.5m、２本に分れた北側溝は長さ5.5m、幅は0.7～0.4mを測る。深さはかなり凹凸があるが全体としては、西から東へ13cm傾斜している。覆土は黒色土と黄色土混り黒色土の２層で、ほぼ一気に埋まったと考えられる。水が流れていた痕跡は認められず、壁・底部の状態から人為的に掘られた可能性の強い溝址である。

遺物　土師器・須恵器の破片と石器がある。出土量が少ないため断定はできないが、奈良時代と考えられる。（佐合英治）

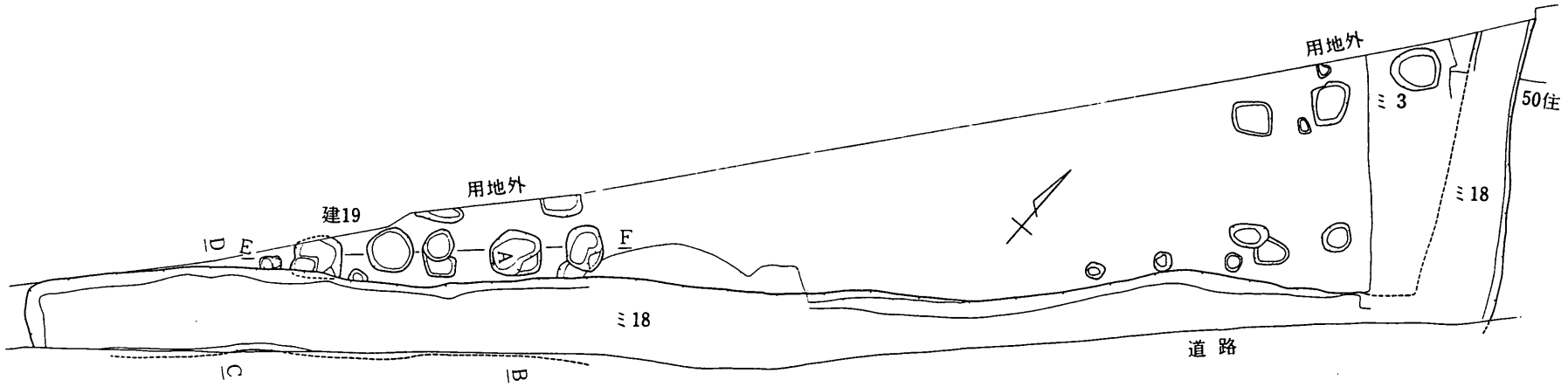
溝址18（第355図）

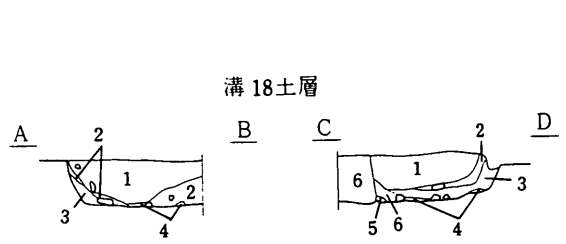
遺構　ＡＲＹＤＲ46を中心に検出した。28号・29号・50号・59号住居址、溝址３を切る。建物址19と重複するが新旧関係は確認できなかった。道路にかかり東南側の壁はわずか確認しただけである。道路沿いのほぼ直線部分を31m、曲がって用地外壁まで７mを確認した。幅は1.5～0.9m、深さは検出面から60～30cmで、壁は急傾斜に掘り込まれている。31mの部分の方向はN51°Eを示す。覆土中に水の流れた痕跡はなかった。調査範囲南西端で直角に折れ曲ると思われるが、道路を越えて確認はできなかった。その地点から南西側の３m先には溝址19がほぼ直角に走っており、関連性が考えられる。直線部分のほぼ中間あたりで溝址４が分かれると思われるが確認はできなかった。全体の形状・地形に対する位置などから、なんらかの区画施設の可能性が強い。

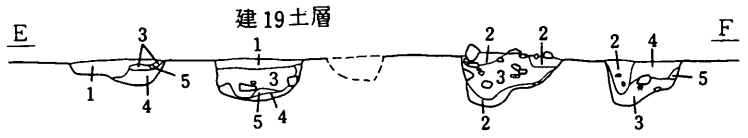
遺物　土師器・須恵器片がわずか出土している。

時期は切り合い関係・遺物から古墳時代終末から奈良時代と思われる。

直線部分の31mは約100尺に当り、区画施設の一単位の可能性がある。（佐々木嘉和）







0 2m

0 1m

1．褐色土(黒色土混り)
2．黒色土(褐色土混り)
3．黒色土
4．黒色土(黄色土混り)
5．黄色土
6．撹乱

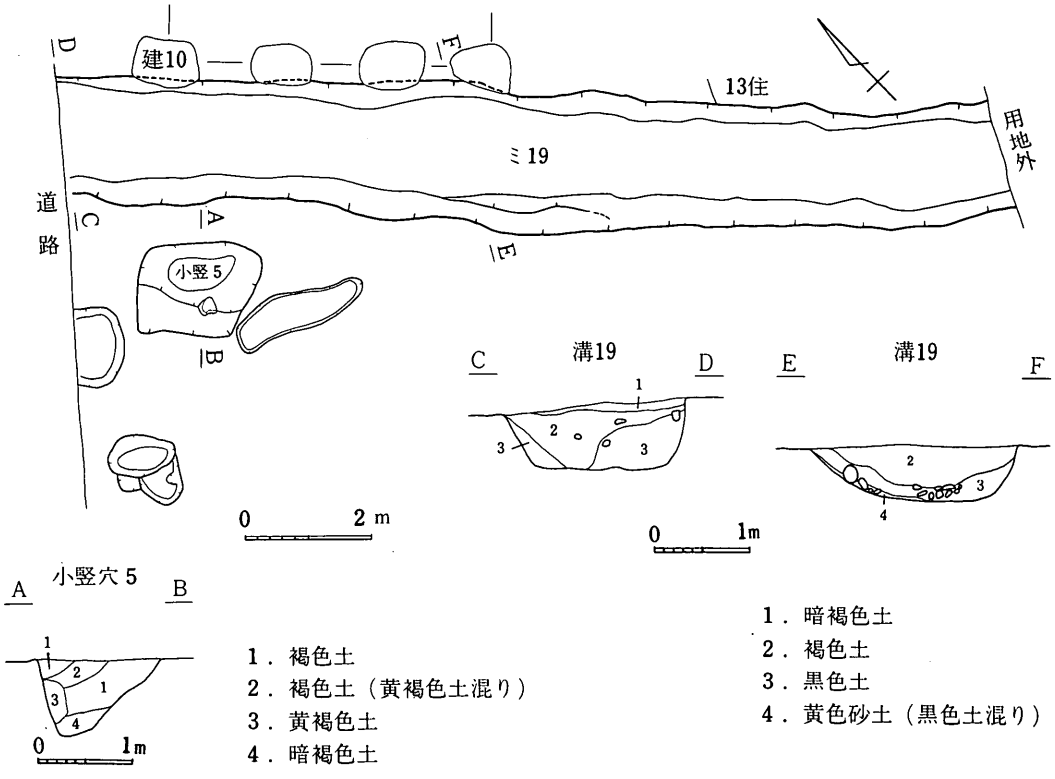
1．黒褐色土
2．黒褐色土(黄色砂利混り)
3．黒色土
4．暗褐色土
5．黄色土(暗褐色混り)

第355図　ＡＲＹ　建物址19、溝址18

溝址19（第356図）

遺構　ほぼ用地内を横断する形でＡＲＹＤＥ47からＤＣ53にかけて検出された。13号住居址・建物址10を切っている。西側は道路に、東側は用地外にかかり調査できなかった。調査の長さは約15mで、幅2.0～1.8m・深さ65～50cmを測り、方向はN44.5°Wを示す。断面は逆台形を呈し、壁は急な立ち上がりを成す。覆土は上面に褐色土が入り、その下は黒色土となる。両層の境から黒色土上面にかけての溝中央部を中心にして、30～10cmの石が多く混じり、特にグリット50より西側が多かった。底部のレベルは西から東へ地形に沿って低くなっている。

遺物　ほとんど出土しなかった。しかし、ＡＥ49の黒色土面からは、円面硯の破片が出土した。須恵器甕・坏等がある。ＧＯＢ溝址11・ＡＲＹ溝址９と同様に官衙域の区画を意図したものと考えられ、遺物から奈良時代に位置づけられる。　（山下誠一）



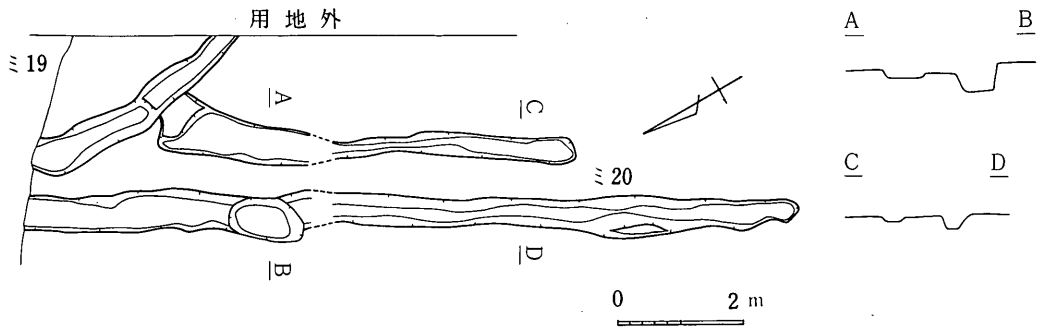
第356図　ARY　溝址19、小竪穴５

溝址20（第357図）

遺構　43号住居址の東側、ＡＲＹＣＶ52付近にかけて検出された。最も長い西側のものを溝址20とし、他の２本は名称を付さなかったが、一連のものの可能性がある。北側で溝址19と重複する

が、その新旧関係はつかめなかった。溝址20は溝址19から南へ12mを確認し、幅66～46cm・深さ20～10cmを測り、断面はU字形でほぼ直線的に続き、CV52付近で検出できなくなる。この東側のDA45で用地外にかかる幅50～40cm・深さ25～20cm・断面U字形の溝を約4m、ほぼ真南の方向に検出した。DB53からCX53まで溝址20とほぼ平行する幅80～30cm・深さ15cm前後を測り、断面は同じくU字形の溝を7m検出した。

いずれも遺物の出土はなく、時期・性格を決定づける材料は得られなかった。　（山下誠一）



第357図　溝址20

溝址21（第341図）

遺構　ARYAR61から北東に検出した。北東端は道路で未調査、溝址16と交差し、切られている。確認した長さは5.5m・幅50～16cm・深さ10～4cmを測り、底部は北東から南西へ10cm傾斜している。

遺物　弥生時代中期の甕の細片が2点出土したのみで、時期・性格等を位置づけられるものではない。　（佐合英治）

溝址22（第353図）

遺構　32号住居址調査中にED49の床面近くに住居址の覆土と異なる黒色土を認め、この部分が床面まで達する溝址となった。32号住居址南西壁に溝の痕跡は認められず、住居址内で終わっている可能性が高い。34号住居址床面および、覆土中には本溝址を確認することはできなかったが、34号住居址北東壁を切ってさらに北東へ延び、溝址12に上部を切られ、35号住居址を切っていると考えられるが、これより北東側は確認できなかった。調査したのは32号住居址床面から深さ7cm・幅30～18cm・長さ70cmと、34号・35号住居址の間で深さ30cm・幅56cm・長さ1.4mである。壁はほぼ垂直を成し、底部は丸味を持ったもので、北東から南西へ8cm傾斜している。

本溝址に伴う遺物は不明で、時期・性格等は判断できない。　（佐合英治）

溝址23（第327図）

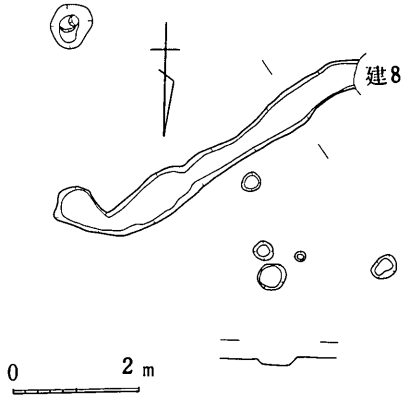
遺構　ＡＲＹＡＧ59からＡＩ60にかけて、長さ５ｍ程検出された。建物址６に切られる。幅66～34cm・深さ19～７cmを測り、断面は横に広い逆台形を呈し、方向はＮ38.5°Ｅを示す。

遺物はほとんど出土せず、溝址の性格等は把握できなかった。時期は切り合いから奈良時代以前と考えられる。（山下誠一）

溝址24（第358図）

遺構　建物址８の内側ＡＮ58からＡＯ60にかけて北東・南西に検出された。建物址８のＰ１と建物址に伴うと考えた石の範囲と一部重複し、Ｐ１との新旧関係は不明であるが石の範囲で溝に切られた痕跡は認められず、建物址８よりは古い可能性がある。調査した長さは５ｍ程で北東端は曲りながら止まっている。幅は70～40cmと場所により異なる。検出面よりの深さは18～８cmを測り、底部は北東へ８cm傾斜している。壁は比較的緩やかな掘り込みで底部は平坦である。

遺物は何も出土せず、時期・性格等は確定できない。（佐合英治）



第358図　ARY　溝址24、Pit

溝址25（第287図）

遺構　ＡＲＹＡＣ55に検出した。53号住居址を切り、６号住居址に切られる。長さは1.2m確認し、幅は60cm・深さは20cm前後である。調査面積が少なく、性格・時期等は不明である。（佐々木嘉和）

溝状遺構１（第329図）

遺構　57号住居址調査中にＡＲ58を主体として検出した遺構で、57号住居址中央部を切り、北西側は用地外となり未調査である。確認した長さは3.1m・幅2.4mを測る。覆土上層は漆黒色土で底部より15～10cmの下層には粘質の黄色土が混入し、下層上面はたたかれたように堅く締まっている。壁は全体として緩傾斜であるが、南西壁にやや急傾斜の部分がある。底部はほぼ平坦であるがたたきなどは認められなかった。南東壁部には壁の中程から掘り込まれる穴があり、深さは底部から12cmを測る。また同壁から幅70cm・深さ11～６cmで溝状に1.2m程張り出す部分があり、この西側壁に沿って直径20～12cmの自然石が並べられたように９個入っていた。東壁側は西側と

比べ深く掘られており、穴状になる所もあり、深さは37cmを測る。張り出し部分・各穴内の覆土は上層覆土である漆黒色土が入り、本址に付属する施設の可能性がある。

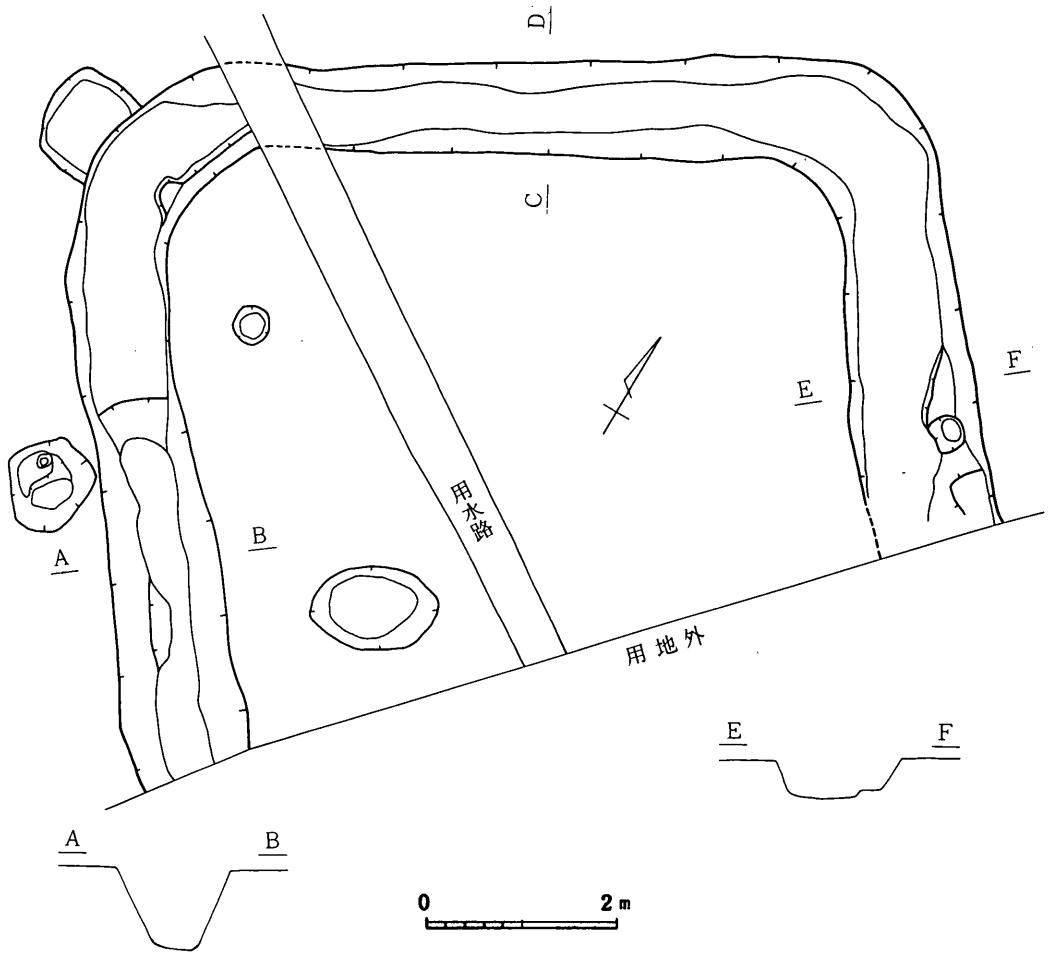
遺物 遺物黒色土中から弥生時代中期甕、土師器甕、須恵器蓋が出土するがいずれも細片で、本址の性格や時期を決定することはできない。（佐合英治）

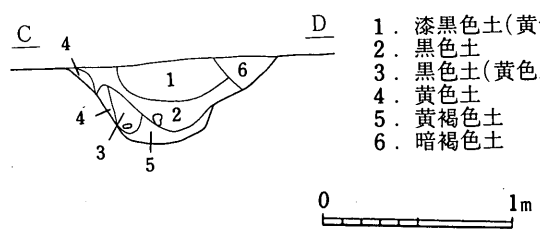
5）方形周溝墓

方形周溝墓1（第359図）

遺構 ＡＲＹＡＮ64を中心に検出された。55号住居址を北西側溝が切り、南東側⅓程は用地外となり未調査である。規模は北西溝の長さ９ｍ、周溝内法7.2ｍを測る。これに直交する長さもほぼ同じと考えられる方形周溝墓である。北西側の溝幅は1.1～0.9ｍで、深さは41～21cmを測り、隅部分の両壁と内側の壁は急角度で立ち上がるが、外側壁は緩やかで、底部は丸味をもち北隅から西隅へ傾斜する。北東側溝は5.1ｍ確認し、幅1.4～1.1ｍ・深さ56～34cmで、底部は北隅から東隅へ傾斜する。外側壁の用地境部分に底部より９cmと31cmを測る段状施設を持つが性格は不明である。２つの段の中間に底部から10cmの深さを測る穴を確認したが、後世の穴と考えられる。この部分を除き壁は両側ともに比較的急角度で立ち上がり、底部は平坦である。南西側の溝は6.9ｍ調査でき、幅は1.3～１ｍを測り、内外壁とも垂直に近い面を成す。底部は調査範囲の中程から南側が急に深く、凹凸のある底部となり、検出面より83～66cmを測る。西隅側は平坦で37cmを測る。覆土は漆黒色土および黒色土で、溝が埋まる最終段階では水が湛水していたと考えられる。北東側溝・南西側溝の覆土上層から中層に径40～５cmの石を検出したが、北西側溝には認められず、性格等は不明である。調査した溝の内側に主体部等の関連施設の確認はできなかった。

遺物 弥生時代中期の壺・甕の細片、刀子がある。刀子の出土位置は高く、土器は周辺からの流れ込みも考えられ、出土遺物から時期の決定はできないが、切り合い関係から弥生時代中期恒川Ⅱ期以降である。（佐合英治）





1．漆黒色土(黄色土混り)
2．黒色土
3．黒色土(黄色土混り)
4．黄色土
5．黄褐色土
6．暗褐色土

第359図　ARY　方形周溝墓1

6）土　坑

ＡＲＹの土坑は１～15まであり、Ａ区に土坑１～９、Ｃ区に土坑10、Ｄ区に土坑11～15がある。遺構図は土坑６を除いて、すべて他遺構に含まれている。（土坑６は付図２を参照）

土坑と穴の区別は検出時に調査者の判断によったので明確にはなっておらず、大小様々である。それぞれの記述は割愛したので一覧表のみであり、その記述については、ＴＡＮ・ＫＵＲの土坑の項を参照して頂きたい。

（佐々木嘉和）

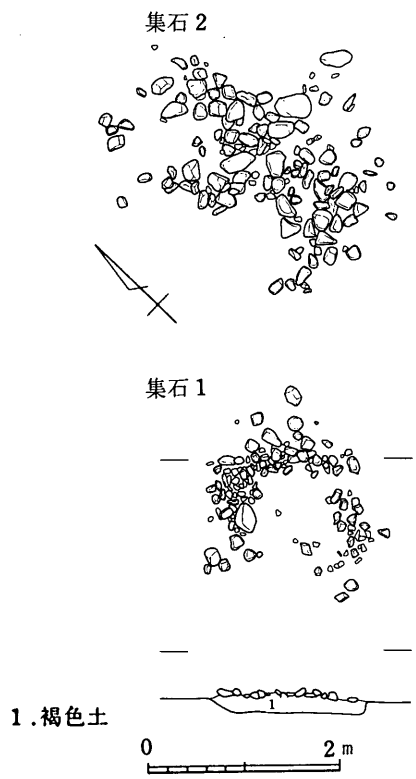
7）集　石

集石１（第360図）

遺構　ＡＲＹＣＡ52に検出され、26号住居址に切られる。直径約２ｍの環状に石があり、掘り方の覆土中には入っていなかった。断面調査の時掘り足りず、石をはずしてほぼ中心部に穴を検出した。第361図Ｂ・Ｃ区Ｐｉｔ群の内の断面図でＥＦを付した穴が、集石１と重なり、集石１の掘り方であろう。石の上面から底部まで約70cmを測る。

遺物　出土量はわずかであるが、石下より弥生時代後期恒川Ⅳ期の高坏などが出土しており、該期の遺構と思われる。

（佐々木嘉和）



第360図　ARY　集石１・２

集石２（第360図）

遺構　ＡＲＹＣＢ52付近に石の集中する所を検出し、26号住居址に切られる。集石１に比べ比較的大きな石が集中している。石の厚さは約20cmであり、石をはずして、第361図Ｂ・Ｃ区Ｐｉｔ群で26号住居址の東隅に切られる穴を検出した。石のない部分に内側の穴が位置し石の上面から約50cmを測るが、集石２を切っている可能性がある。外側の比較的大きな穴が集石２の掘り方と思われ、

石の上面から30cmの深さを測る。

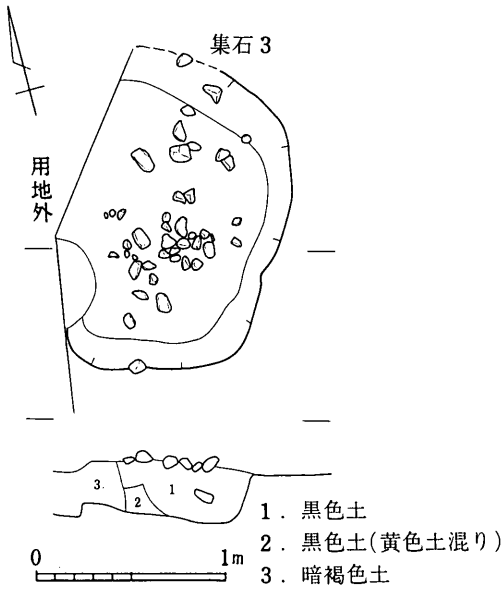
遺物　石鏃1点と石器片、土器片が出土しているがわずかである。時期も不明であるが、26号住居址（古墳時代後期）よりは古い。　（佐々木嘉和）

集石3（第361図）

遺構　ＡＲＹＣＢ45に検出された。西側は用地外となり、完掘できなかった。検出面よりわずか上面に、20～10cmの50個程の石が1.6×0.7mの範囲に散らばっていた。下層は、長軸1.7mを測る楕円形を呈し、深さ35cmの土坑になる。集石の中にはほぼ完形の土師器の甕がつぶれて入っていたが、調査途中に盗難にあい、詳細は分からなくなった。

遺物　ほぼ完形の甕の他は、土師器、須恵器の破片が出土している。甕が残っていれば時期の確定が可能であったが、それもできず一応古墳時代後期に位置づけておく。

遺構の性格として、墓である可能性が強いが断定はできない。　（山下誠一）



第361図　ARY　集石3

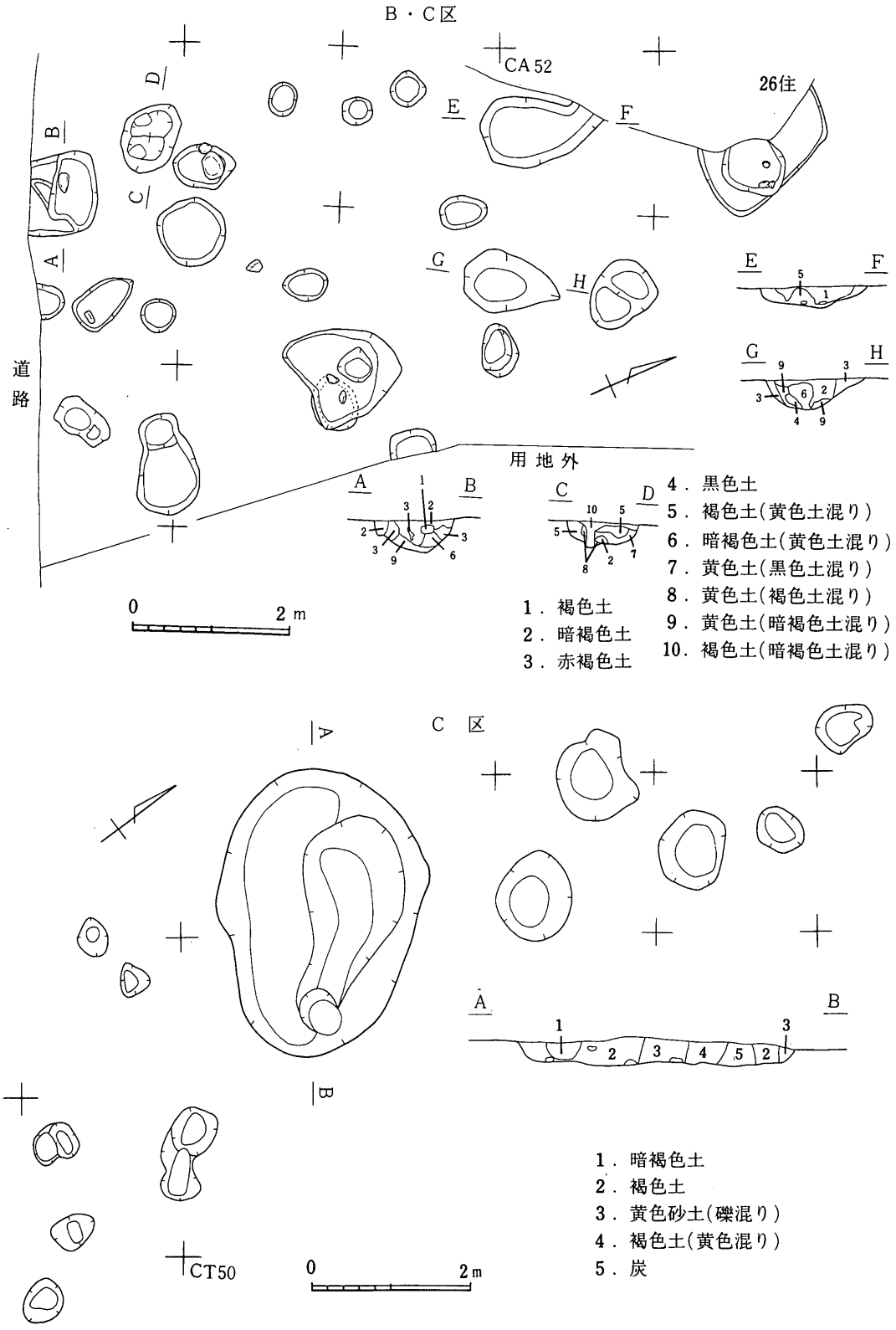
8）　Pit群

ＡＲＹ地籍で検出されたＰｉｔは、270個以上に達する。検出削平中に湮滅したものは含めていない。実測図をとったものは、他遺構と一緒に図化したが、一部入っていないものもあり第362図・全体図（付図2）を参照して頂きたい。規模は大小様々であり、検出中に建物址・土坑にしなかったもの全部をＰｉｔとした。

遺物　覆土に混入していないものもあったが、ほとんどに小破片の混入をみた。図化できたものもわずかあり、遺物編で記載したいと思っている。　（佐々木嘉和）

引用文献

小林正春　1983　『恒川遺跡群　昭和57年度範囲確認調査概報』　飯田市教育委員会



第362図　ARY　B・C区Pit群

7　新井原遺跡

本遺跡の遺構分布状況は、時期を変えて若干の差があるが、南大島川に開析された舌状台地先端部という規制された立地条件の中で互いに重複をもって把えられる。

縄文時代中期は基本的に台地先端部全体に分布するが、台地端部の傾斜が始まる付近に住居址分布の限界があり、主体は台地上の平坦部にある。

調査実施前から新井原11・12号古墳が現存し、古墳の密集する地域として注目されていた。ARBK11が台地の最先端部に、ARBK12が台地頂部に位置する他、調査の結果11号・12号古墳の中間にARBK13の周溝が、12号古墳の北側道路下にARBK14の周溝が確認された。また、12号古墳と14号古墳の中間に同時代の馬の墓が検出され、古墳のみでなく各種の墓地を造営した墓域としての位置づけが明確である。

なお、本遺跡が墓域として位置づけられるのは、弥生時代終末ないし古墳時代前期に台地先端へ方形周溝墓を造った段階である。

平安時代においては、小規模な集落が台地先端部に形成され、かつ、火葬墓が傾斜地から台地上にまで分布し、古墳をはじめとする墓域と強い関連が考えられるものである。　（小林正春）

1）住居址

①　縄文時代

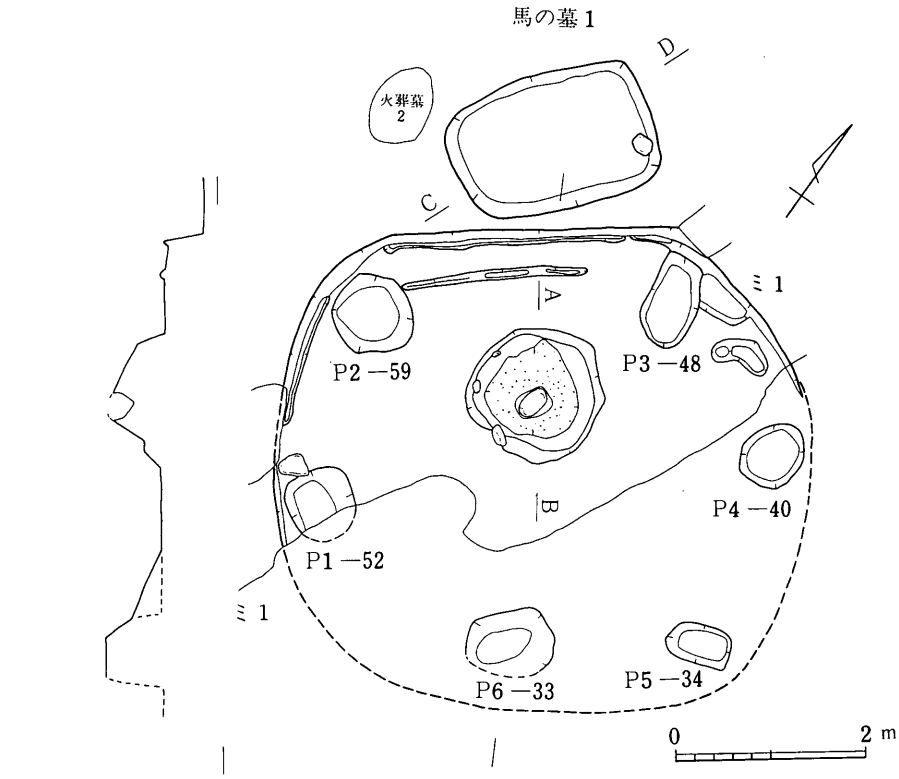
2号住居址（第363図）

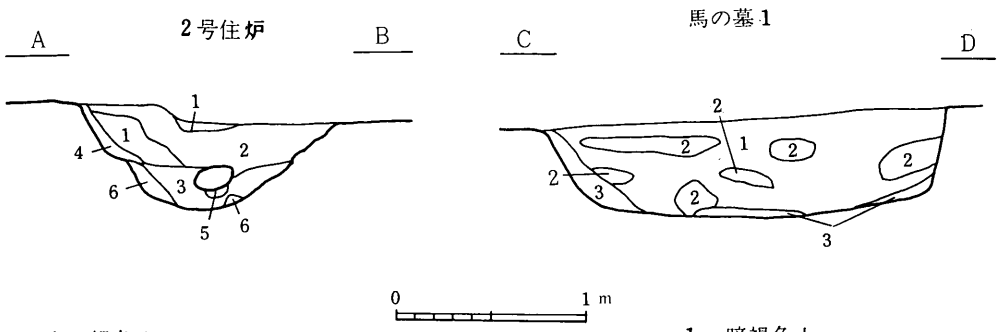
遺構　ARBBQ51を中心に検出された。溝址１・ARBK13に切られる。（５）×5.7mの不整円形の竪穴住居址であり、主軸方向はN35°Wを示す。壁高は検出面から40cmあり、ほぼ垂直の壁面である。周溝は部分的に認められ、幅・深さともに10cm未満である。奥壁から30cm程内側にも同様の溝があり、何らかの施設があったと思われる。床面は北側の約半分が残り、堅く良好であった。柱穴は６本確認した。平面は楕円形でほぼそろっているが、深さは様々である。炉址は中央からやや北西壁寄りにあり石組炉と推測されるが、石はほとんど抜かれている。焼土の範囲から１m四方前後の規模と思われ、深さは50cmを測る。石は元位置を保つものは１個で、炉址の中に転落したもの１個が認められた。

遺物　出土量は少ない。床面上に散在し、石皿がＰ１の西側の壁との間から出土した。深鉢、打製

石斧が出ている。

遺物から縄文時代中期に位置づけられる。　　（佐々木嘉和）





1．褐色土
2．赤褐色土
3．赤褐色土(焼土混り)
4．黄色砂質土(褐色土混り)
5．黄色砂質土
6．焼土

1．暗褐色土
2．褐色土
3．褐色土(黄色砂土混り)

第363図　ARB　2号住居址、馬の墓1

3号住居址（第364図）

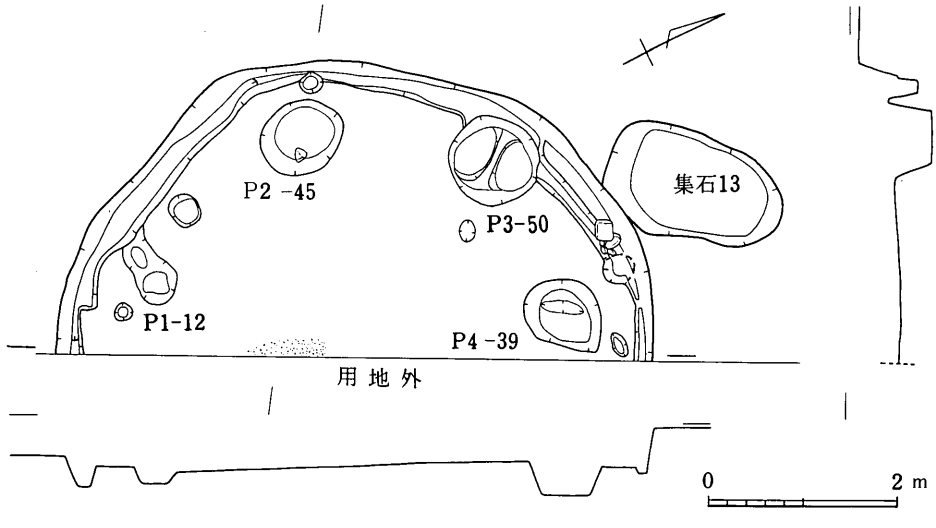
遺構　ARBK13の墳丘基部面のＢＵ53を中心に検出された。南西側は用地外となり未調査で、北壁の一部が集石13と接する。直径6.3mの円形の竪穴住居址と推測される。主軸方向は炉址の位置が不明確のため判断できない。壁高は32～10cmを測り、ほぼ垂直の壁面を成す。周溝は北壁側の一部が壁より13cm程離れている他は壁直下に認められ、全周している可能性が強い。幅28～８cm・深さ22～９cmを測る。床面は平坦であるが北から南へ17cm程傾斜している。Ｐ２と焼土を結ぶ線より北側は比較的堅い床面で、南側は地山が露出して軟かい。主柱穴はＰ２～Ｐ４の３本が考えられ、全体の主柱穴本数は不明である。Ｐ２・Ｐ４の壁ぎわには、深さ31・１６cmを測る補助的な穴も見られる。Ｐ４の西側に直径20cm程の丸石と20cm程の棒状の石の上に径20cmの平らで四角な石をのせた施設があり、性格等は不明であるが床面と壁に密着しており、本住居址に伴うものである。炉址本体は確認できなかったが、住居址中心部よりやや南寄りの用地境床面上に、焼土が２cm程の厚さで確認され、この東側に炉址の存在が予測される。

遺物　完形品はないが出土量は多く、Ｐ２と焼土を結ぶ線の南側の覆土中層から下層にかけて集中して出土する。深鉢がほとんどで、他に土偶脚部片、石器がある。

住居址形態・出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。　（佐合英治）

4号住居址（第365図）

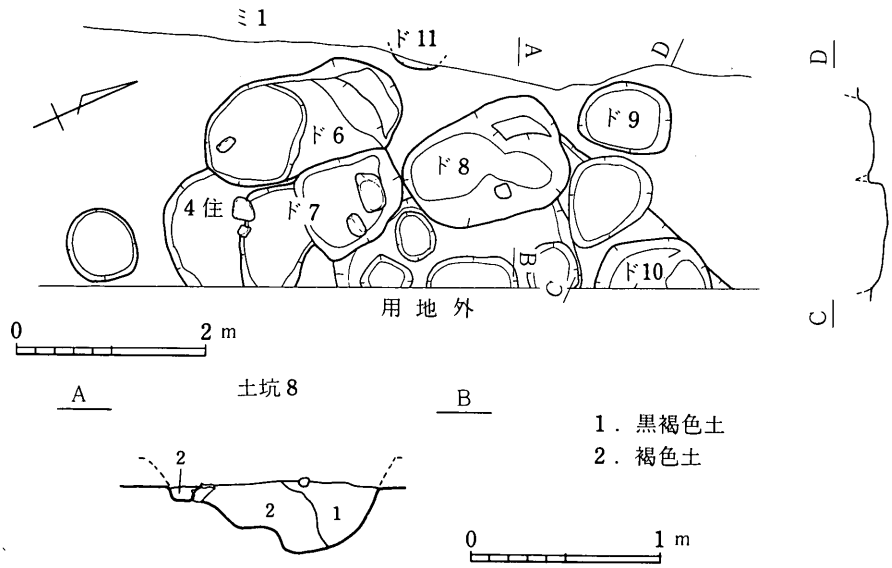
遺構　ARBBP53が中心である。土坑６・７・８・10に切られ、用地外にかかってわずか調査した。円形の竪穴住居址と推測したが、切り合いが著しいので断定はできず、その他の状況もほとんど不明である。壁はわずか残っており、検出面から15cmある。床面はほとんど残らず、土坑のない箇所の状態も軟かく、住居址床面を示すか否か断定はできない。



第364図　ARB　３号住居址、集石13

遺物　土器深鉢片、石器がわずか出土している。

遺物から縄文時代中期後半と考えられる。　（佐々木嘉和）



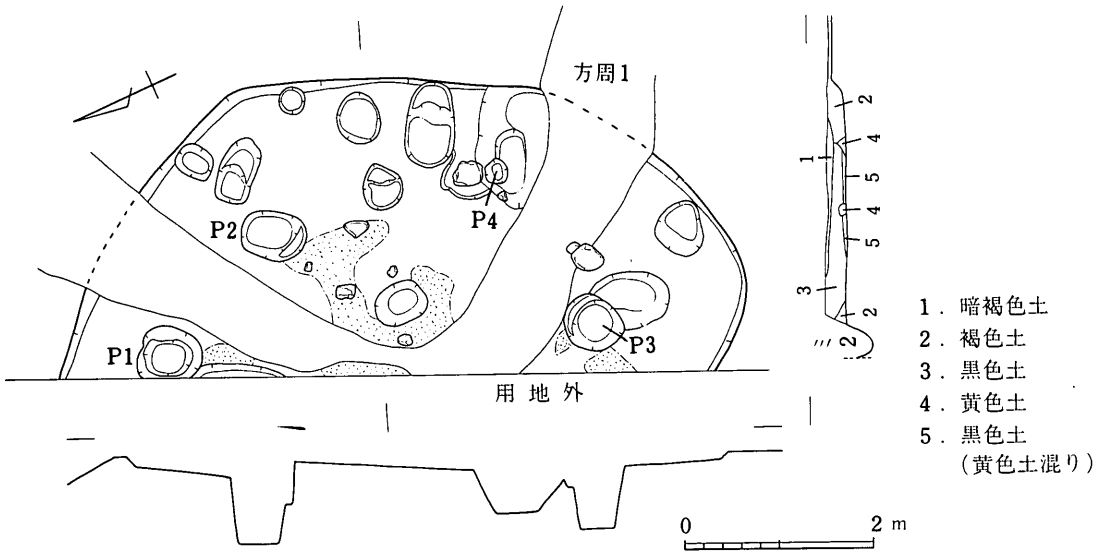
第365図　ARB　4号住居址、土坑6・7・8・9・10・11

5号住居址（第366図）

遺構　ARBBV47を中心に検出された。住居址の中心を方形周溝墓1に切られ、北西側半分が用地外となる。上面が削平され耕作による攪乱もあり、正確な平面形の把握はできなかったが、円形もしくは歪んだ隅丸方形の竪穴住居址と考えられる。主軸方向は不明で、壁高は12～3㎝を測り、緩やかな壁面を成す。床面は穴の切り合いが多いが、ほぼ平坦で、P3の周辺が堅く、他は軟かい。火事の住居址であり、床面全体に焼土が認められ、特に中心部の床面は良く焼けている。また、床面より6㎝程上部にも住居址中央を中心に広範囲に焼土が認められ、部分的にはり床状の堅い面を成す箇所もある。住居址内で多数の穴が検出されたが、本址に伴うと考えられる穴はP1～P4で、主柱穴となる可能性が高い。P1～P3はそれぞれ深さ78･76･66㎝で径60㎝を測る。P2・P3は内側部分が一部二段構造になっており、P3の底部には石が認められた。P4は径25㎝･深さ42㎝と他の穴に比べて小さなもので、北側わきに石を伴ったマウンド状の施設があり、全体として深さ29㎝を測る土坑状の落ち込みとなり、入口部施設となる可能性がある。炉址本体は確認できなかったが、方形周溝墓西隅に切られた住居址の中心部分に火を受けたと考えられる石が認められ、焼土の状態からもそれと判断される。

遺物　出土量は比較的多いが完形品はない。床面に密着しての土器は少なく、多くが床面の焼土上に認められ、住居址全体に散布する。縄文時代の無文の甕・深鉢などがある。

出土遺物・住居址形態などから縄文時代中期終末に位置づけられる。　（佐合英治）



第366図　ARB　5号住居址

6号住居址（第367図）

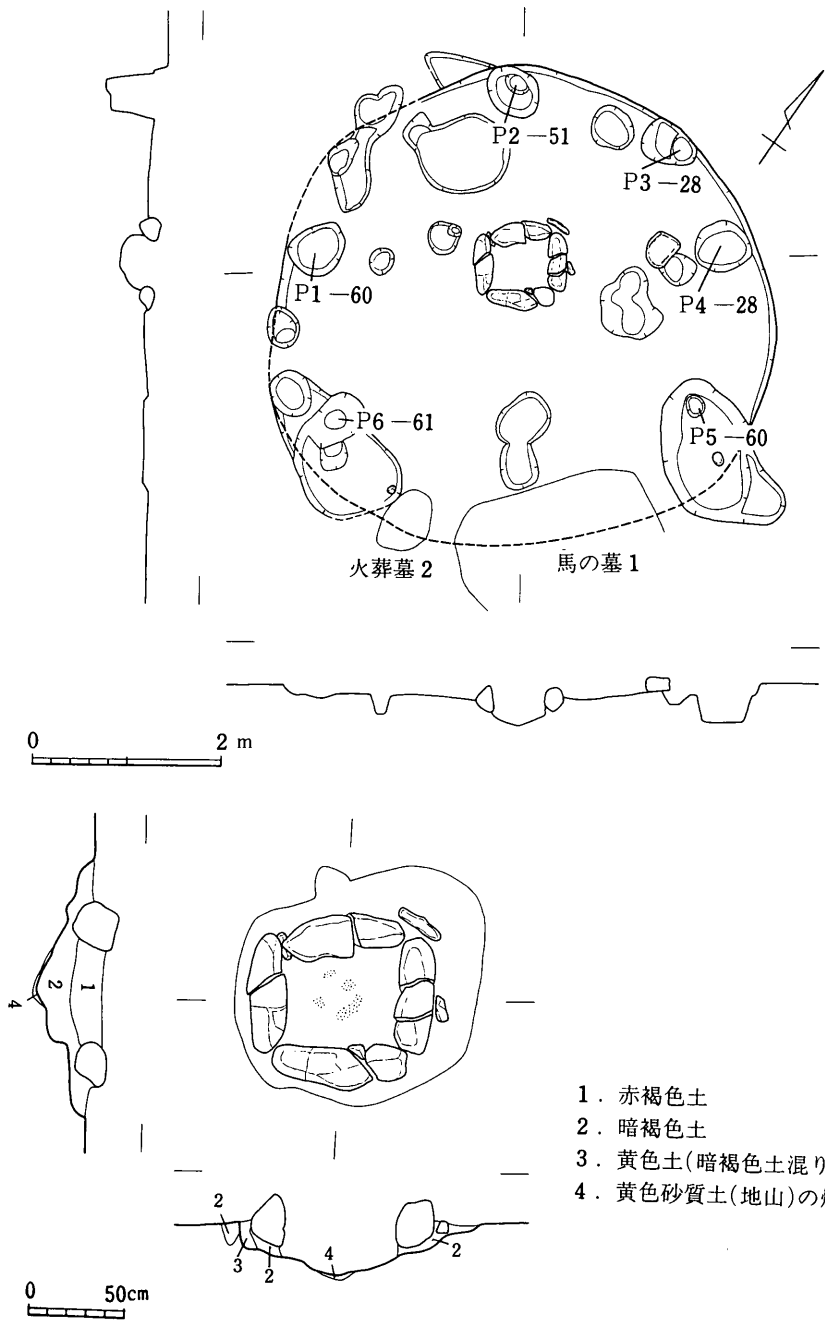
遺構　ARBBR48を中心に検出された。馬の墓1・火葬墓2に切られる。直径約5mの不整円形の竪穴住居址で、主軸方向はN35°Wを示す。地表から検出面までが浅く、上部がかなり削平され、壁は約半分残っていたのみで、検出面から18～5cmと浅い。床面は比較的堅く良好であった。柱穴はP1～P6を考えたがP3・P4が浅く、この部分が不明確のため断定はできないが、5～6本の主柱穴と考えられる。炉址は中央やや北西寄りにあり、石組炉で残存状態は良好であった。規模は約1m四方で、花崗岩の河原石を使っており、熱によるヒビ割れがすべてに認められた。石の上部から底部まで40cmを測る。北隅に石を他の炉石から離して埋めてあり、副炉的なものと考えられる。他の炉石同様に熱のためボロボロになっていた。

遺物　出土量は遺構の残存状態に比較して多い。すべて床面直上の出土であり、石器が多い。完形の無文小形深鉢がある。

遺物から縄文時代中期終末に位置づけられる。　（佐々木嘉和）

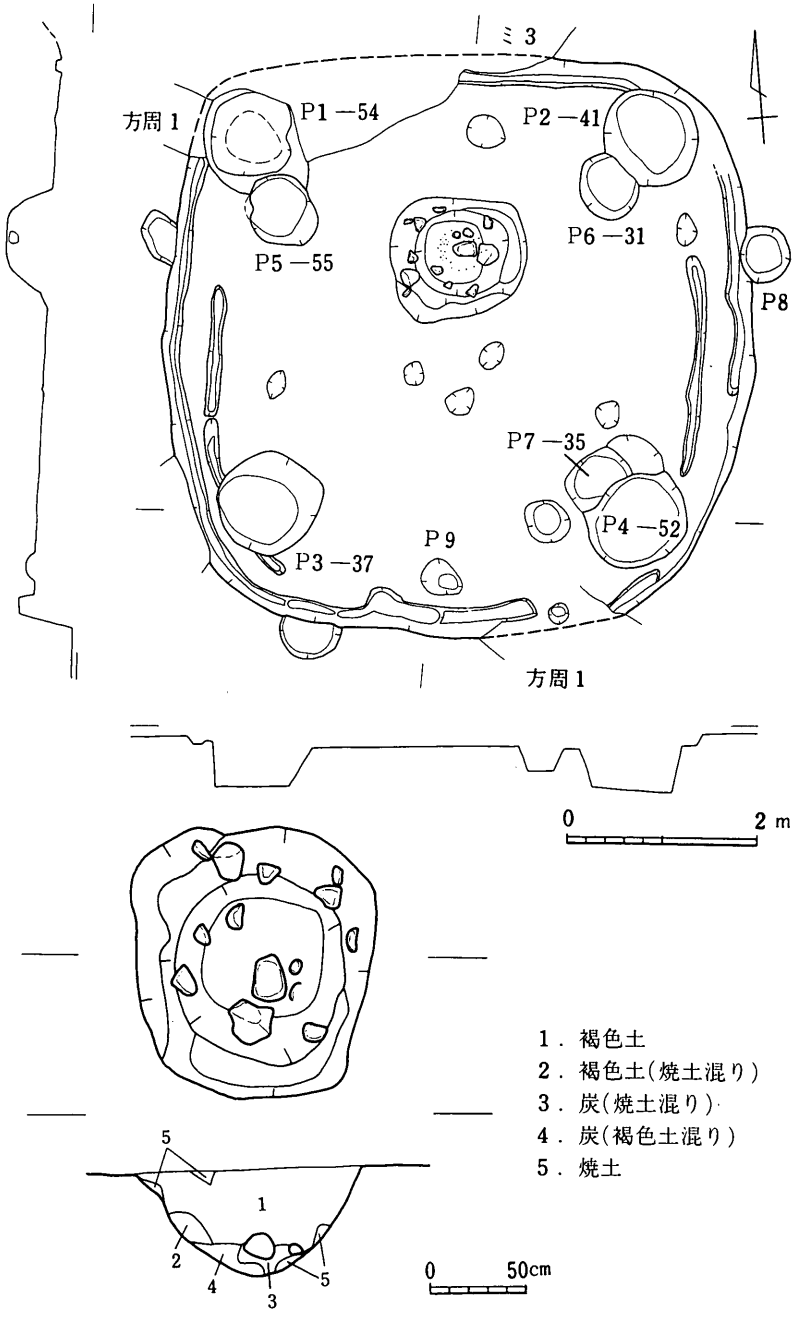
8号住居址（第368図）

遺構　ARBBY48を中心に検出された。上面から多くの遺物が出土したが、7号住居址・方形周



第367図　ARB　6号住居址

溝墓１・ARBK13周溝に切られている他に、上層が黄褐砂土が入る攪乱を受けているため、ややプラン確認に手間どった。6.1×6.2mの丸味を帯びた隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN30°Eを示す。壁は７号住居址・溝址３・方形周溝墓１に切られる部分を除き、全面確かめられた。壁高は50～20cmを測り、垂直の壁面を成す。周溝は壁直下にあり、東側に一部断絶がみられる他は、ほぼ全面確認できた。幅22～６cm・深さ15～５cmを測る。また、東・西側では、壁から30～10cm内側に、はり床された周溝がみられ、幅16～10cm・深さ15～３cmを測る。主柱穴は新旧の７本が確かめられた。Ｐ１～Ｐ４が新、Ｐ５～Ｐ７が旧の主柱穴である。それぞれ隅の方向へ70cmくらい移動しているが、Ｐ３だけは新旧の違いがはっきり確認できず、ほぼ同位置で建て直されたと考えられ、新旧いずれも４本主柱穴の住居址である。Ｐ１～Ｐ４には柱の位置以外に、Ｐ５～Ｐ７は全面に黄色土のはり床がみられた。Ｐ８は壁外



第368図　ARB　8号住居址

に位置し、プラン検出面から深さ62cmを測り、補助の柱穴と考えられる。P9は床から23cmの深さを測り、壁面はたたき状に堅く、床面と同じ状態になっていた。炉址は住居址中央部やや北寄りに位置し、1.4×1.2mの丸味を帯びた方形を呈し、底まで50cmを測る。石はほとんど抜かれるが、西側に1個小礫が残り、底に割れた破片が落ち込み、石組炉であったと判断できる。炉址掘り方の途中には、石を設置するための段がつけられる。底の焼土はあまり多くない。主柱穴・周溝の状態から建て替えの住居址である。古いプランは隅丸方形で、4.6×5.5mの新しいものより小形の規模が推定される。

遺物　覆土中からの出土がほとんどで、床面遺物はみられない。完形品はなく、大半が小破片である。遺物は縄文時代中期後半の土器、打製石斧・横刃型石器・敲打器・凹石・石錘・打製石鏃・石錐などがある。

住居址形態・遺物から縄文時代時代中期後半に位置づけられる。　（山下誠一）

9号住居址（第369図）

遺構　ARBBO47を中心に検出された。火葬墓5・耕作の攪乱に切られ、用地外にかかる。台地の南西向斜面の上端にあり、地山の上に耕土が20cmのっているだけで、上部がほとんど削平され、壁は全く残っていなかった。周溝・柱穴から推定し、径5.6mぐらいの不整円形の竪穴住居址である。主軸方向はN66°Eを示す。周溝は一部確認し、幅20～10cm・深さ15～8cmで、二重になる所がある。床面は確認できなかった。主柱穴と断定できるものはないが、周溝ぎわの深いものは主柱穴の可能性がある。P4とつながっている北側の穴上部に深鉢が埋めてあったが、いわゆる埋甕とは位置及び形態が異なる。住居址中央やや北東寄りに1×0.6mの範囲で焼土があり、炉址と推定した。断面調査によって焼土混りの層を約20cmの厚さで確認し、炉址の底部付近のみが残存したものと考えられ、形態等は全く不明である。

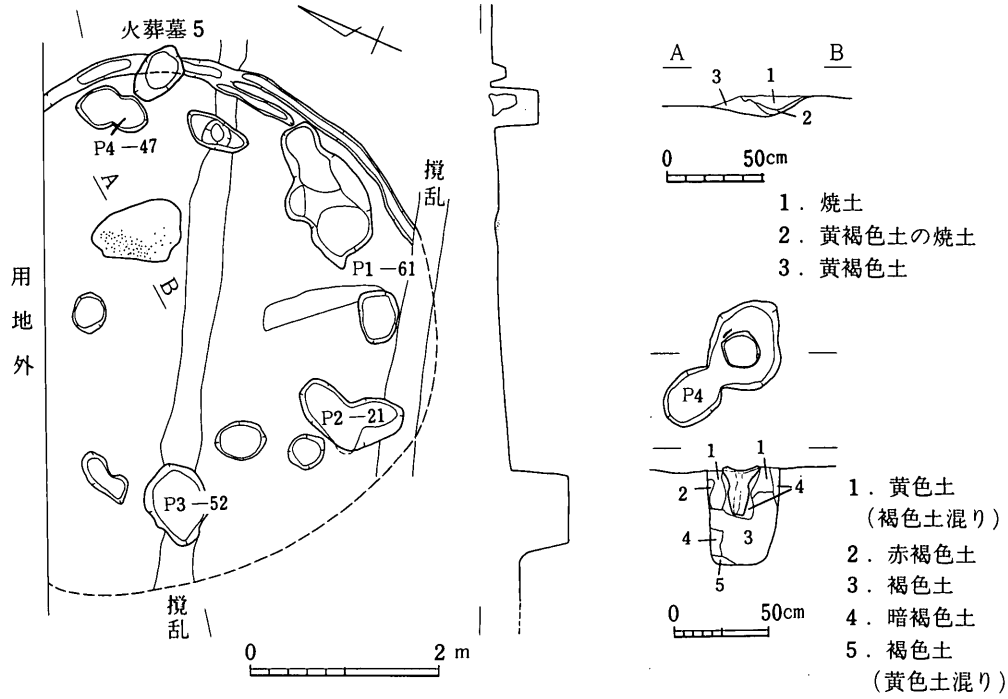
遺物　地表から最終掘り下げ面まで20cmと住居址覆土はほとんどなく、床面も削平されているため、出土遺物は穴内の深鉢だけである。

遺物から縄文時代中期終末に位置づけられる。　（佐々木嘉和）

10号住居址（付図2）

遺構　ARBK12の周溝調査中にARBCB46に検出した。西側は用地外、南側東側はK12の周溝に切られ、北側は古墳の盛土部分で、床面の確認もできず、規模・主柱穴等はすべて不明であるが、縄文時代中期の鉢の破片が集中して出土し、高さ12cmを測る壁の一部を確認した。

出土した遺物は破片であるが、遺物から縄文時代中期後半と考えられる。　（佐合英治）



第369図　ARB　9号住居址

11号住居址（第370図）

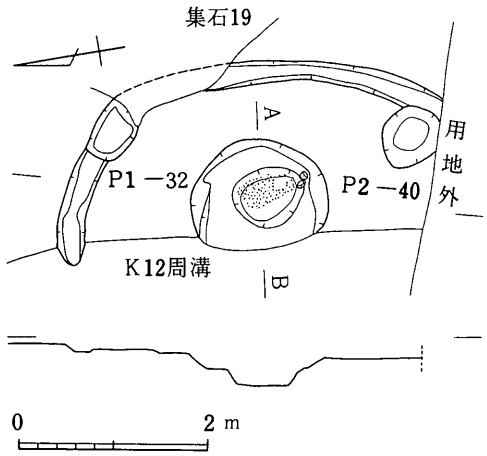
遺構　ARBDF52にかかって検出した。ＡＲＢＫ12周溝と集石19に切られ、用地外にかかるため、調査範囲は3.8×２ｍとわずかで、不整円形の竪穴住居址の一部を確認した。炉址の位置から主軸方向はほぼN100°Eを示す。壁は長さ約１ｍが残ったのみで検出面から７㎝を測り、上部はほとんど削平されている。幅20㎝前後で深さ10～２㎝の周溝を確認し、住居址の一部を把握できた。床面は炉址の北側が堅く、南側が軟かい。穴を２個検出したが柱穴と断定できるものではない。炉址の残存状態は悪く、K12周溝に切られて約半分残存した。石組炉と考えられ、石１個が炉中にあった。中央の凹んだ部分は良く焼けていたが、回りの一段高い掘り方部分は焼けておらず、石が入っていたためと推定した。炉石は住居址廃棄時に抜き取られたと思われる。

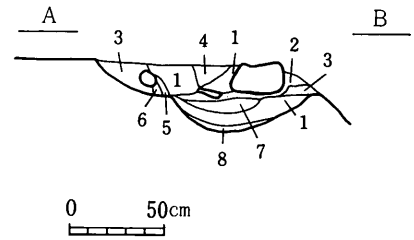
遺物　土器・石器がわずか出土している。ほとんどが炉址の覆土中からである。

遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。　（佐々木嘉和）

12号住居址　（第371・372図）

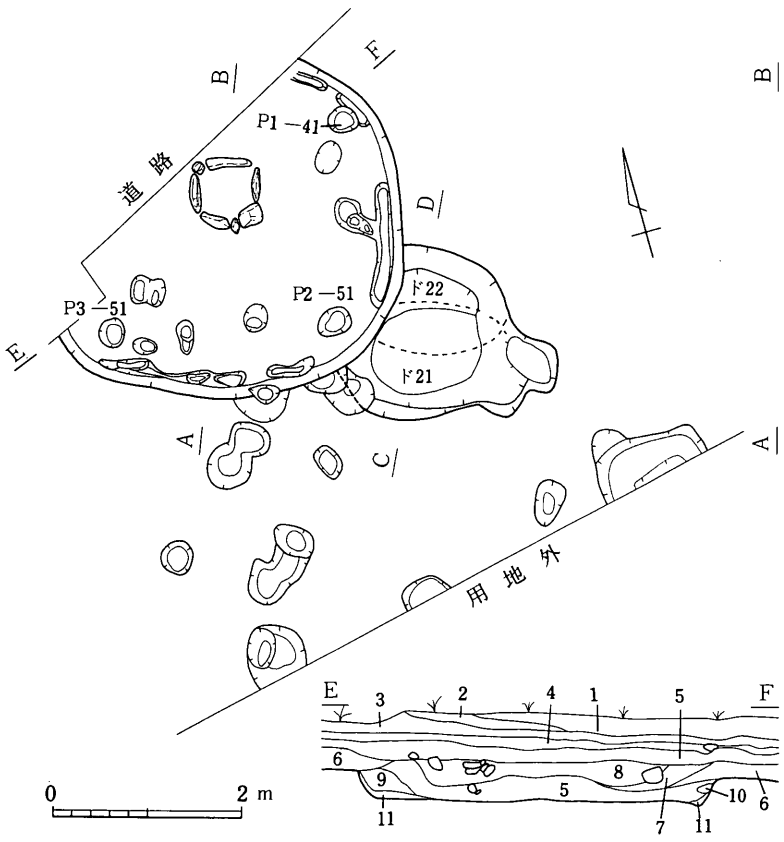
遺構　ARBCU41を中心に検出された。土坑21・22と切り合うが新旧関係は確認できなかった。

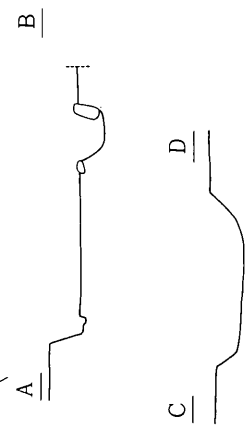




1．黒褐色土
2．黒褐色土(焼土混り)
3．褐色土
4．褐色土(焼土混り)
5．黄色土
6．黒色土(黄色土・炭混り)
7．黄色土が焼ける。
8．焼土

第370図　ARB　11号住居址

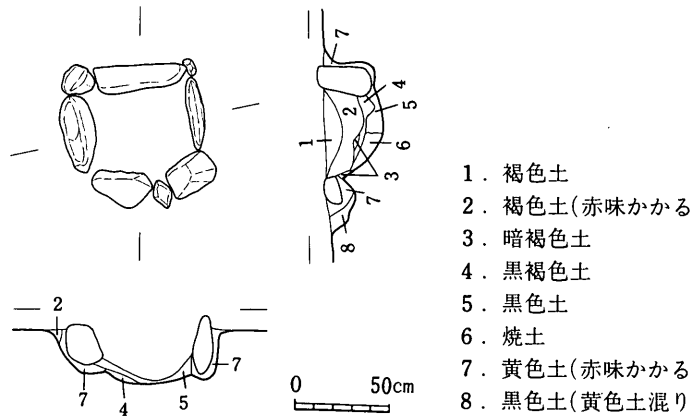




1．耕土
2．黄色砂土
3．漆黒土
4．暗褐色土
5．褐色土
6．赤褐色土
7．黒褐色土
8．黒色土(炭混り)
9．黒色土(褐色混り)
10．黄色土
11．黄色砂土

第371図　ARB　12号住居址、土坑21・22

国道に約⅓かかった。不整円形の竪穴住居址で、径は約4mである。主軸方向はN62.5°Eを示す。覆土上部に直径20～10cmの石が入っており、埋没の最終段階に投棄されたものと推測した。壁高は検出面から30～20cmあり、やや緩傾斜の壁面である。周溝は壁下に断続的に検出され、幅20～10cm・深さ40～20cmを測る。床面は堅く良好であった。主柱穴はP1～P3を確認し、未調査部を含め5～4本が想定される。3本の平面は不整円形で径30cm前後である。炉址は石組炉で中央からやや北寄りにあり、規模は85×75cmで、深さは石の上面から35cmある。大きな石4個をほぼ方形に置き、その空間を小礫で埋めている。南側3個の石は偏平な面を上にして用い、たき口部を意識していると考えられる。焼土の量は少なかった。



第372図　ARB　12号住居址炉址

遺物　出土量は多く、床面から約10cm前後上の覆土中からの出土が多かった。土器深鉢・小形深鉢、土製円板、打製石斧などがある。

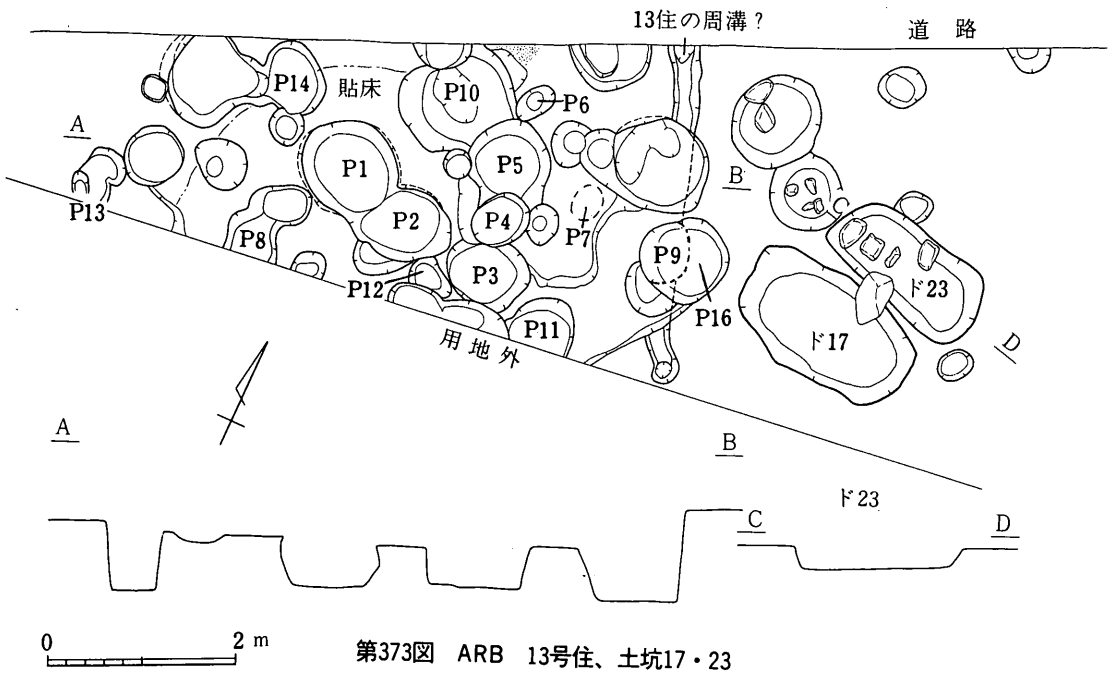
遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。　（佐々木嘉和）

13号住居址（第373図）

遺構　C区の西端で国道と国鉄用地に挟まれて発掘用地が三角形となる部分に検出され、北側・南側は未調査である。北側用地境ぎわと西側はARBK12の周溝等に切られている。東側の一部に壁が認められ、高さ13cmのほぼ垂直面を成す。後に、幅25cm・深さ15～16cmを測る周溝状の溝を認めたが、直線的で南側用地境の所で壁と交差し、本住居址の形態把握材料とはならなかった。褐色土層に掘り込まれていた住居址で、本址に前後する複数の穴と複雑に重複し、プラン・規模等は不明である。床面も穴の切り合いのため凹凸が著しく、きわめて軟かいが、19～6cmの厚さのはり床を認めた箇所もある。はり床検出の際確認した穴はP1～P9で、深さはそれぞれ67・63・53・85・64・57・24・35・71cmを測る。このうちP7は、はり床を除くと消滅した。覆土は黒色土または褐色土の単一層で、P1～P5には直径25～10cmの石が混入し、P1は石の数も多く火を受けて風化している。P1・P3・P8・P9からは深鉢の破片が出土し、P3からの出土量は多く本住居址に伴うと考えられ、P3・P4・P5からは炭化した種子が出土している。P6の覆土中

からは使用痕のあるチャート片が出土した。P9・P10の北側に焼土が認められたが、本住居址に伴うものかは不明である。P10～14は、はり床を除いた後に確認した穴で、地山からの深さはそれぞれ53・34・24・28・30cmを測り、土坑的性格も考えられいずれも覆土は黒褐色土の単一層である。P13は、はり床の検出できなかった箇所の穴であるが、覆土と当初プランがはっきりしなかったことから本址より古い穴と考えた。P15・P16は住居址検出と同時に検出され本址を切っており、深さは97・88cmを測る。住居内で確認した穴で番号を付さなかったものは、はり床検出時に確認した穴で、本址に伴うか後世のものか不明の穴である。

遺物　深鉢を中心に出土量は比較的多いが完形品はない。混入品もあるが、縄文時代中期後半に位置づけられる。　（佐合英治）



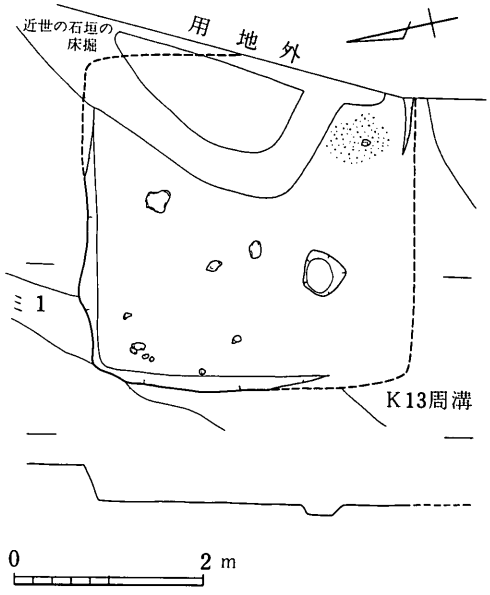
第373図　ARB　13号住、土坑17・23

② 平安時代

1号住居址（第374図）

遺構　ARBCA52を中心に検出された。ARBK13を切り、畑造成時及び石垣の床掘りにより東側の一部を壊されている。部分的に不明瞭ではあるが3.5m四方の竪穴住居址である。壁は北西側のみ確認でき、その部分の壁高は40cmを測る。床面は砂地のためあまり良好とはいえないが、部分的に堅い箇所があり、一部に焼土も散乱している。覆土中に若干の石が混入していたが性格等不明である。中央部やや南西寄りに径40cm・深さ15cm程の穴がある他は、カマド・柱穴などの諸施設は認められなかった。

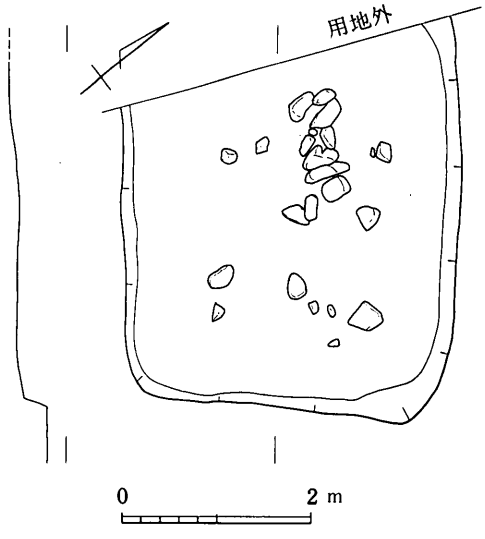
遺物　出土量は小形の住居址の割に多い。ほとんどが床面上の出土で、土師器甕・坏、灰釉陶器皿、鉄製ピン、赤色顔料原材などがある。遺物から平安時代後半に位置づけられる。（小林正春）



第374図　ARB　1号住居址

7号住居址（第375図）

遺構　ARBCA47を中心に検出された。上面に漆黒色土が入るためプラン検出は容易であった。同址ARBK13周溝の上面と8号住居址の西側の一部を切っている。西壁は用地外のため調査できなかった。短軸方向は3.6mを測る隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向はN50°Wを示す。壁は用地外にかかる北西壁を除き全面確認できた。地山の黄色砂土の部分は南壁しかみられないが、K13周溝の埋土や8号住居址の覆土中にも、はっきりと壁を確認でき、壁高は55～25cmを測る。床面は南側一部に黄色砂土まで掘られる部分があるが、大部分がK13周溝の埋土上で、北西側⅓くらい



第375図　ARB　7号住居址

を除いて堅くきわめて良好である。中央床面上には30cm前後の石が住居址長軸方向に沿って意図的に並べてあった。カマド・主柱穴その他の住居址付属施設等はみられない。

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器があり、床面ないしその直上からの出土がほとんどである。土師器甕、内面黒色皿、須恵器糸切り坏、灰釉陶器埦、帯金具・用途不明鉄製品がある。

遺物から平安時代後半に位置づけられる。

住居址形態などから、通常の竪穴住居址とするよりも墓域の中に設けられた祭祀的な竪穴と考えられる。

（山下誠一）

2）溝　址

溝址1（付図2）

遺構　ARBCA51からBD50までARBK11・13の墳丘裾部に検出された。A51より北東側は未調査で、確認した北東側は1号住居址西壁側、周溝肩部と切り合う部分で、幅1.4m・深さ15cm・長さ5mである。これより南西15m程の間は周溝と切り合っており、周溝覆土と異なる黒色土が認められたが、幅・深さは確認できなかった。しかし、このことから古墳周溝を切る溝址と考えられる。AQ51付近では2号住居址を切っており、住居址を越えると斜面を下り始め、溝の断面形はV字を成す。さらに南西へ墳丘の谷間に沿って延びており、周溝と交差し、BD50の所で墳丘裾と区別がつかなくなる。台地と墳丘の裾には石垣が造られており、石垣下部に本址は認められない。溝としての形態を確認できる南西の端BD50は2本の溝の存在が考えられ、深さは30cm程を測る。調査した溝幅・深さともに古墳周溝との切り合いや台地傾斜地に検出され、壁上が不明のところが多く、断定できない。確認した幅は2～1mで、北東端から南西端まで47mを測り、5.3mの高低差がある。覆土は台地上が黒色土一層で斜面では最下層に砂利を認め、底部は水の侵食による凹凸がある。

遺物　土師器甕・高坏、須恵器甕、灰釉陶器小瓶、青磁碗、天目茶埦などが出土した。

古墳周溝・縄文時代住居址・平安時代土坑・時期不明集石等が部分的に重複しているうえに、溝という性格上遺物には混入品があり、出土遺物から時期は断定できないが、覆土・切り合い関係・検出状況から中世の自然溝と考えられる。

（佐合英治）

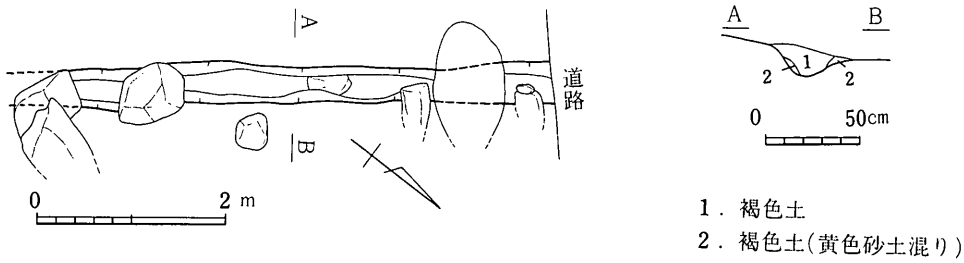
溝址2（第376図）

遺構　ARBDO54を中心に検出された。国道にかかり、長さ約5mを調査した。幅45～35cm・深さ35～5cmを測る。台地端に位置し地山中の花崗岩が露出している。台地周縁部を区切る施設と

考えられる。

遺物　覆土中から須恵器片が１個出ている。

遺物から古墳時代以降と思われるが、時期の決定はできない。　（佐々木嘉和）

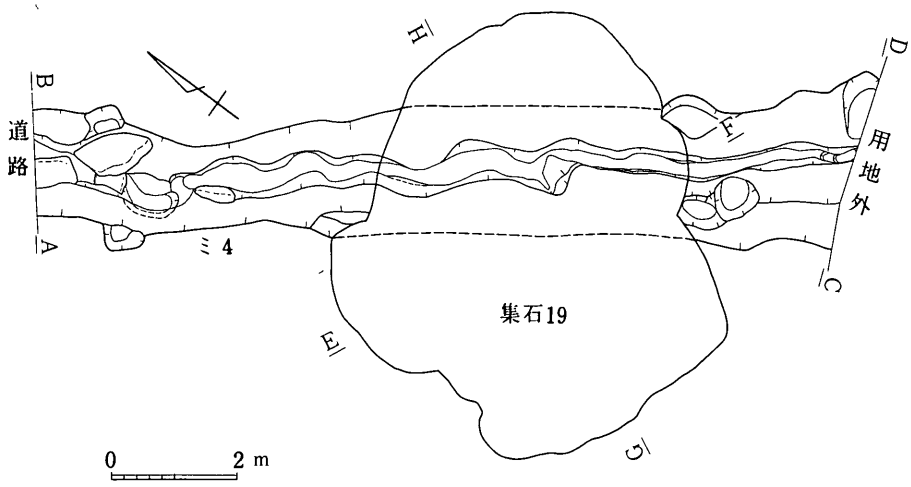


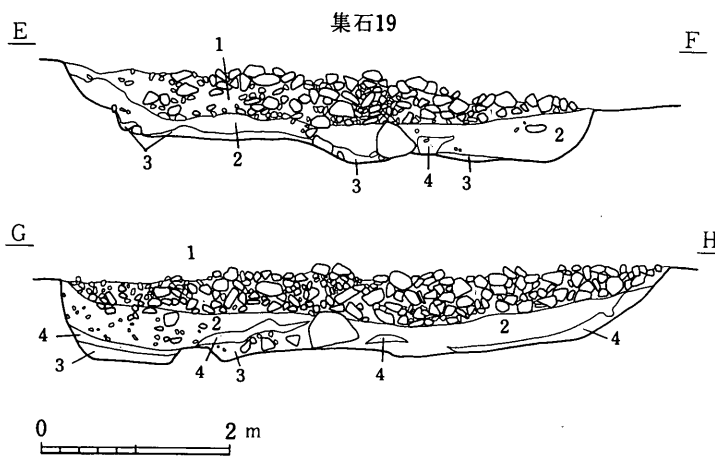
第376図　ARB　溝址２

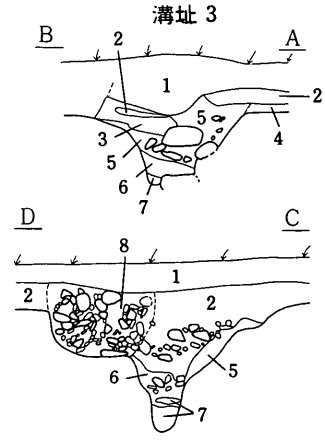
溝址３（第377図）

遺構　ARBDI52を中心に北西･南東方向に用地を横断しており、両側とも用地外へ延びている。調査した長さは13m、幅は北西端1.7m・南東端2.5mで、検出面からの深さは125～85cmを測る。中央部分は集石19に切られており、幅50cm前後・深さ30cm程の溝下部を確認した。底部は凹凸があり北西から南東へ1.07m傾斜している。壁は底部からほぼ垂直に50～25cm立ち上がり、その後緩傾斜となる。ほぼ垂直に落ち込む下部は蛇行しており、堆積している覆土も砂を中心としたもので、水が急激に流れて侵食されてできたと考えられる。上部は人為的に掘られていると考えられ、覆土は黒色土で、長径1.2～0.6mの大きな石と30～５cmの礫が多量に混入しており、溝として必要がなくなり廃棄し、埋められたと考えられる。

遺物は何も出土せず、時期・性格等は不明である。　（佐合英治）







1．暗褐色土
2．褐色土(黄色砂土混り)
3．褐色土(礫混り)
4．黄色砂利(褐色土混り)

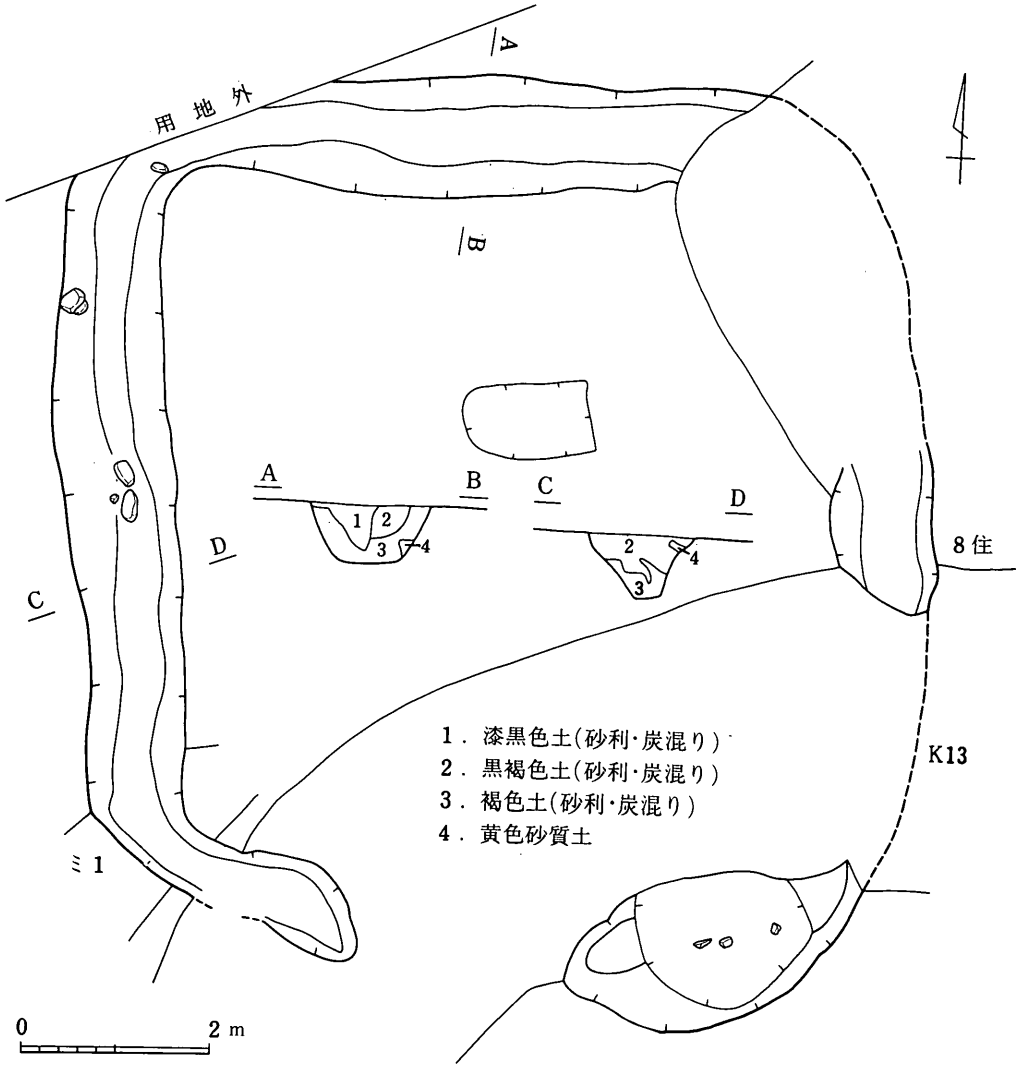
1．耕土
2．黒色土(黄色砂土混り)
3．黒色土
4．黄色砂質土
5．黄色砂質土(黒色土混り)
6．褐色砂質土
7．砂
8．撹乱(集石)

第377図　ARB　溝址3、集石19

3）方形周溝墓

方形周溝墓1（第378図）

遺構　ARBBV49を中心に検出された。当初は北･西側の溝が確認され、溝址と考えて掘り進めが、調査の進展に伴い南・東側にも溝が巡ることが確認でき、方形周溝墓であると判明した。5号・8号住居址を切り、ARBK13、溝址1に切られる他、一部攪乱も受けている。9.8×8.2mを測る方形周溝墓で、主軸はN65°Eを示す。溝は西･北側で良好に検出できた。幅1.3×1.0m･深さ70～65cmを測り、断面U字形を呈する。東側の溝はほとんど確認できず、南溝はほぼ中央部が約2.2m途切れている。上面がK13の周溝に切られているが、本来の姿も溝が途切れていたと推測で



第378図　ARB　方形周溝墓1

き、土橋部の存在が考えられる。主体部は精査したにもかかわらず、はっきりしなかった。中央部やや北東寄りに、1.4×0.8mの方形を呈し、深さ10cmの皿状に凹む黒色土の落ち込みを認めたが、遺物の出土はなく、主体部と断定はできない。

遺物　出土量は少ない。北溝上層に土師器甕の胴部が出土した。しかし、小破片に壊れて図化はできなかった。

遺物から古墳時代前期恒川Ⅶ～Ⅷ期に位置づけられる。　（山下誠一）

4）土坑・火葬墓・馬の墓

土坑

ARBで土坑としたものは、1～23まである。B区に集中箇所があるが、他には特に集中する所はない。規模は大小様々あり、平面は不整楕円形・方形が大半を占める。一覧表の断面形記号はTAN・KUR土坑の項を参照されたい。

時期は縄文時代以降と思われ、切り合い関係・遺物からほぼ推定できたのを表に入れた。記述は特徴あるものにとどめた。

土坑6・7・8・9・10・11（第365図）

遺構　6～11はB区に集中しており、4号住居址を切っている。重複が著しく、上面が削平されているため、適確な把握ができなかった。平面形・深さともに統一性はないが、灰釉陶器・土師器など平安時代の遺物が入っており、土坑墓群である可能性が高い。

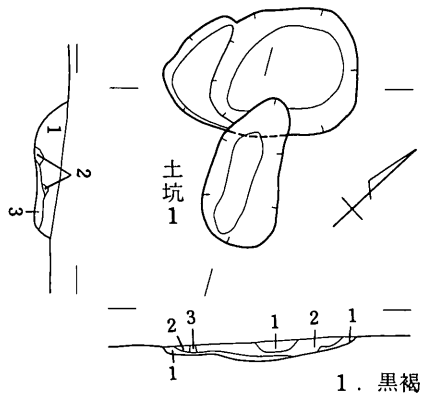
遺物　灰釉陶器埦、土師器坏が出ている。いずれの土坑から出土したものもほとんど時期差は認められず、平安時代後期の近接した時期の遺構と考えられる。　（佐々木嘉和）

土坑16（第380図）

遺構　ARBDM55に検出された、耕作の攪乱に半分切られ調査面積はわずかである。深さは検出面から20cmと浅い。覆土中に炭・人骨が混入しており火葬墓の可能性がある。

遺物は帯金具（鉸具）が出土している。平安時代の遺構と思われる。　（佐々木嘉和）

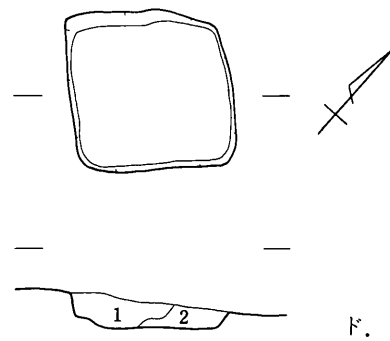
土坑2



ド．1、2

1．黒褐色土
2．黒色土
3．黒褐色土(黄色砂土混り)

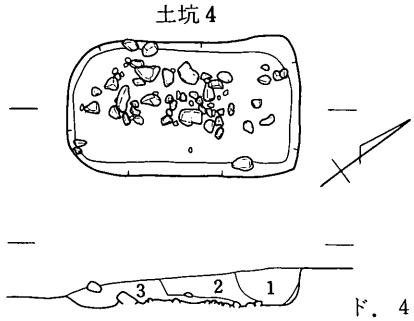
土坑3



ド．3

1．黄色砂土(褐色土混)
2．褐色土(黄色土混り)

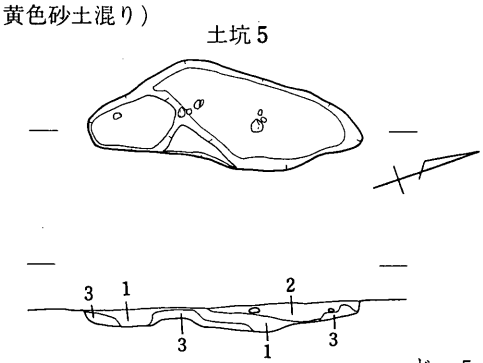
土坑4



ド．4

1．黄色砂質土
2．褐色土(黄色土混り)
3．黄褐色土

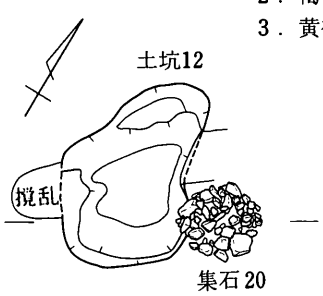
土坑5



ド．5

1．褐色土
2．暗褐色土
3．褐色土(黄色砂質土混り)

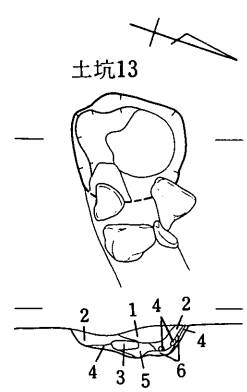
土坑12



ド．12

1．漆黒色土
2．黒褐色土
3．黄色土
4．撹乱
5．褐色土(黄色土混り)
6．黄色土(褐色土混り)

土坑13

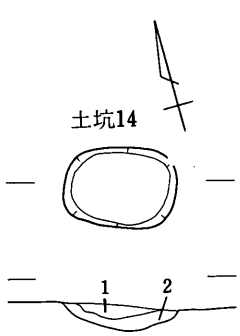


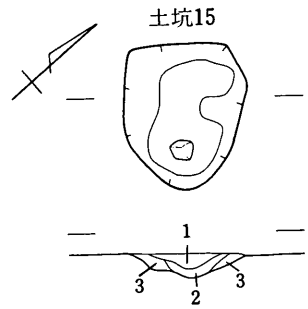
ド．13

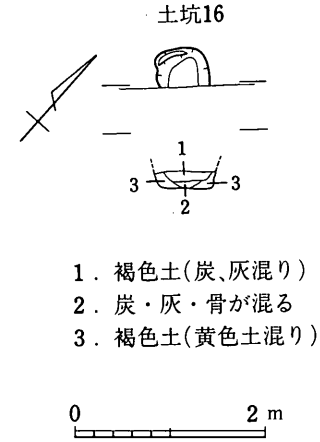
1．近世の撹乱炭混り
2．黒色土(漆黒に近い)
3．黒色土(黄色砂土混り)
4．黄色砂土(黒色土少し混り)
5．黄色砂土(③より黒色土多い)
6．黄色砂土(⑤より黒色土多い)

0 2 m

第379図　ARB　土坑1・2・3・4・5・12・13、集石20



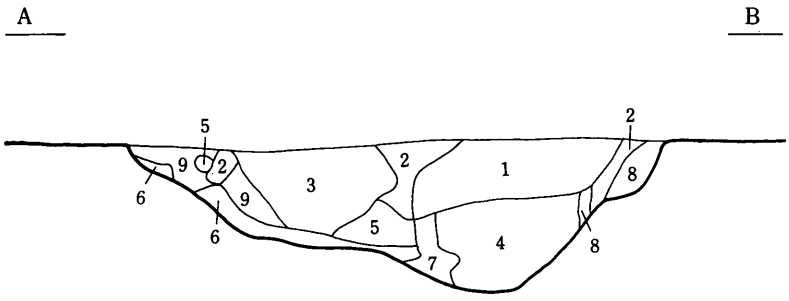




第380図　ARB　土坑14・15・16・18・19・20、Pit群

土坑18（第380・381図）

遺構　ARBCW45・46、CX45・46に検出された。12号古墳の最下層褐色土を掘り下げ検出した。平面は不整方形で、最深部は検出面から1mある。黄色砂土(地山)に掘り込まれており、覆土



1．黒色土(褐色土混り)　　6．黄色砂質土(褐色土が5より少い)
2．黒褐色土　　7．黒色土(黄色砂質土混り)
3．黄色砂質土　　8．褐色土(黄色砂質土混り)
4．黒色土　　9．褐色土
5．黄色砂質土(褐色土混り)

0　1 m

第381図　ARB　土坑18土層図

に地山の土が入り、いわゆるロームマウンド状になる箇所がある。

遺物は入っておらず、縄文時代中期後半土器の包含層より下であり、それより古い遺構である。

(佐々木嘉和)

火葬墓

ARBで火葬墓としたものは2～5までである。火葬墓1は以前に耕作中に発見された灰釉陶器の蔵骨器を有するものをあてた。火葬墓2～5は6×6mの範囲にまとまっている。

火葬墓2（第382図）

遺構　ARBK13の墳丘の造られた台地の西側BQ49に6号住居址を切って検出された。地形の関係から上部は削平されており、西側半分は溝状に耕作の攪乱を受けている。調査できたのは底部に近い所と考えられ、南北80cm・東西60cmを測る歪んだ楕円形である。掘り方壁は比較的緩傾斜を成し、検出面より20～10cmを測る。底部は凹凸が激しく、小さな穴状になる所もある。覆土は漆黒色土がブロック状に認められ、骨片が混じっている。火葬は別の場所で行なわれ、本遺構は埋葬のためだけに使われたと考えられる。

遺物　灰釉の瓶子片が底部密着で出土しており、平安時代後半に位置づけられる。(佐合英治)

火葬墓３（第382図）

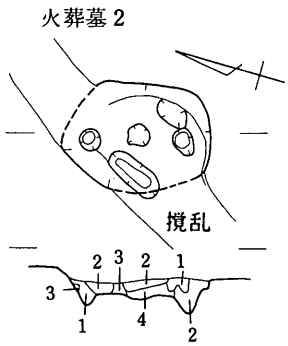
ARBK13の西側用地境のBS46に検出され、火葬墓２が南側６mの所にある。北西の壁がわずか用地外となり、地形の関係から上部壁は削平され、調査できたのは底部に近い部分である。南北にやや長い楕円形で、55×40cmを測る。掘り方壁は緩傾斜を成し、検出面から17cmを測り、丸味を持った底部へと達する。覆土は漆黒色土がブロック状で、上層に炭といっしょに骨が認められた。骨の量は比較的多いが細片で、火葬にされた場所は別にあったと考えられる。

骨以外の出土はないが、覆土や形態・立地などから、他の火葬墓とほぼ同時期の平安時代後半のものと考えられる。

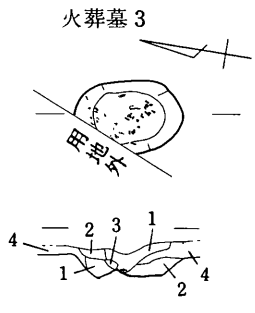
（佐合英治）

火葬墓４（第382図）

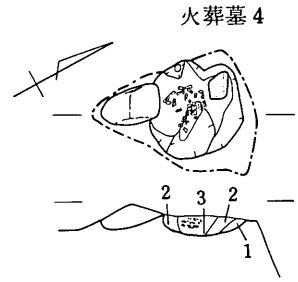
遺構　ARBBS48に検出された。６号住居址を切る。図の一点鎖線は炭・焼骨の散布範囲である。平面は不整円形で、直径約50cm・深さは焼骨散布面から15cmである。覆土中と南側に石があった。



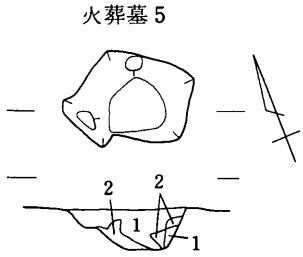
１．炭
２．黒色土(黄色土混り)
３．黄色土
４．黒色土(炭混り)



１．炭
２．黒褐色土
３．黒褐色土(漆黒土混り)
４．褐色土



１．褐色土
２．黒色土
３．漆黒土(骨混り)



１．黒色土(炭混り)
２．黄色砂質土(炭混り)

第382図　ARB　火葬墓２・３・４・５

焼骨の量は比較的多く、漆黒色土に混じって覆土中央にあった。焼土は周囲に検出されず、火葬骨を埋めた墓と推測される。

遺物　焼骨以外には6号住居址遺物と思われる縄文式土器片がわずか出ているのみである。

時期は確認できないが、本遺跡内の他の火葬墓から灰釉瓶子の破片が出土しており、平安時代の遺構と推測される。　（佐々木嘉和）

火葬墓5（第382図）

遺構　ARBBP47に検出された。9号住居址を切る。平面は55×45cmの不整方形で、深さは検出面から20cmを測る。覆土中に焼骨は少なかったが、炭は比較的多く混入していた。周囲に焼土はなく、火葬骨を埋めた墓と推測される。

遺物　焼骨と灰釉陶器瓶子片が出ている。

遺物から平安時代と推定した。　（佐々木嘉和）

馬の墓1（第363図）

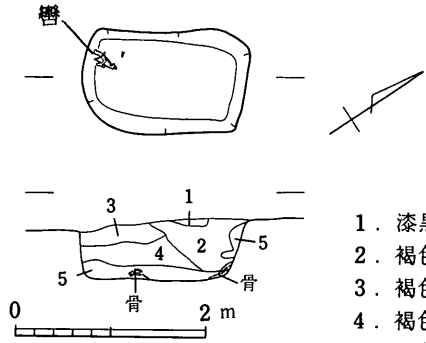
遺構　ARBBQ49に検出され、6号住居址を切る。褐色土の落ち込みを検出したが、土色から近世の攪乱と推測し、規模をとらえずに掘り始めた。北東側壁がわからず掘り広げ、20cm四方厚さ6cmの偏平な石を確認し、その下の底部近くに馬の歯の出土をみた。この時点では近世の馬の墓と推測し、図・写真等の記録をせずに歯などを取りはずしてしまった。後に馬の墓2の発見により、古墳時代の遺構においても遺骸が残る事を確認し、本址も馬の墓2と同時期の可能性があると考えるに至った。2.1×1.4mの隅丸長方形の土壙で、深さは検出面から50cmを測る。長軸方向はN42°Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底も平坦である。、歯は東隅にあり、背を北西にして埋葬したと推定でき、頭部の上に石を置いたものであろう。

遺物　出土量はわずかである。馬の歯と6号住居址の遺物と推測される土器片、打製石斧である。

馬の墓2と同時期の可能性があり、とすれば古墳時代に位置づけられる。　（佐々木嘉和）

馬の墓2（第383図）

遺構　ARBDK52に検出された。1.8×1.1mの不整方形で、深さは検出面から60cmを測る。長軸方向はN34.5°Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、断面は箱形である。馬の歯は南西壁ぎわで底から約10cm上にあった。足の骨は、歯から少し中央よりと北東壁ぎわの2箇所に少しずつ残って



1．漆黒色土
2．褐色土
3．褐色土(黄色土が少し混る)
4．褐色土(黄色土･漆黒土も少し混る)
5．黄色砂質土(褐色土混り)

第383図　ARB　馬の墓2

いた。前肢はくの字形に曲がっているのが確認でき、後肢は北東壁に寄りかかっている部分がありほぼ床面に着いていた。頭部を西隅に背を北西側に埋葬したと推測できる。歯および頭骨の一部と前後肢の骨を検出したが、他の骨は検出できなかった。しかし、確認した骨の回り･本来胴体のあったと考えられる西壁側には、他の覆土と異なる黒色土の分布を認め、馬体の腐朽した痕跡と考えられる。

遺物　検出時に覆土上面から杏葉が出土し、西隅付近の壁上端より30cm迄の深さから轡と面繋の金具類が集中出土した。頭部と歯の大部分はそこより10cm下にあり、上顎の前歯数本が轡に近い所にあった。面繋を装着したまま埋葬したと推測できる。また、北東端の杏葉出土地点に近接して湾曲した鉄製品があり、尻繋も付けられていた可能性もある。馬体が腐朽して沈む時に、面繋も金属を残して腐食し上部に残り、轡が前歯を引き残したものであろう。金具類は鉄地金銅張で、保存状態は良好である。轡の鏡板はF字形で引き手が表側に着いている。杏葉は剣菱形を呈している。面繋の飾金具は鋲具2個を含めて16個出土した。

轡・杏葉の形式は古墳時代5世紀後半に盛行するものであり、埋葬された時期の断定はできないが、近接するARBK12被葬品との関連を示唆するものである。　（小林正春）

5）集　石

集石

ARB地籍で集石としたものは集石1～集石22まである。当地籍の地山上部には石が混入しておらず、検出面に石の集中した所は集石とし調査した。規模・平面形・石の量など様々である。遺物はほとんど入っておらず、いずれも近世において古墳葺石等を集めたと考えられるものである。表の断面形記号はTAN・KUR土坑の項を参照されたい。記述は特徴あるものにとどめた。

A区集石（付図２）

遺構　新井原11号古墳の南西川、南大島川の旧河川敷の窪地の北東側、AR～51・52にかけて検出された。切り合いはみられず単独で検出されたが、東側は用地外にかかり調査できなかった。南北方向10mを測る集石である。地表から70～60cmの石を主体として、厚さ50～40cmにわたって石が集まっていた。石の間は、かなりのすきまが認められる。掘り上げると下は集石の範囲と同一の土坑となる。

集石の性格は耕作時に出土した石を集め、じゃまにならない深さまで穴を掘って埋めたものと考えられる。近世陶磁器片が出土しており、江戸時代終末以降に位置づけられる。

（山下誠一）

集石７・８・９（第385図）

遺構　ARBK11の墳頂に位置する。石と石を割った破片が入っており、石の加工屑をまとめて入れたと推測した。K11に大きな石があったという話が残っており、それとの関連が推定される。集石８からは須恵器片が１片出ている。近世遺構と思われる。（佐々木嘉和）

集石10・11（第385図）

遺構　ARB11号古墳の墳丘斜面中程に位置する。斜面に段が付き長く石が入っており、覆土は黒褐色であった。古墳に伴う遺構かと思われるが、断定はできない。

（佐々木嘉和）

集石16（第386図）

遺構　ARBK12の墳丘残存部の西、CQ39に検出した。南側は国鉄用地となり、北側半分のみの調査である。墳丘盛土の褐色土層を掘り凹めており、確認した最大幅は3.2mで、深さは30cmを測る。壁は北側がほぼ垂直で、東側と西側が緩傾斜面を成す。石は覆土上部のみに認められ、径30～５cmの自然石である。石を排除すると、黒色土混り黄色粘土のたたき状の平坦面が検出され、この面までの深さは10cm程を測る。この層を除いた本址の当初掘り込みの底部は凹凸があり、中央部が高く壁に向かって10cm傾斜している。中心より北東へ１mの所に規模45×30cm・深さ35cmを測る穴があり、覆土はたたき層と同じ土で堅くしまっていた。上部集石と下部は別遺構の可能性がある。

遺物　出土した遺物には、縄文時代中期深鉢、円筒埴輪片などがある。みな上部石中からの出土で本遺構に直接伴う遺物ではないと考えられる。

時期はARBK12の墳丘盛土を掘り込んでいることから、古墳時代前期終末以降と考えられる。

（佐合英治）

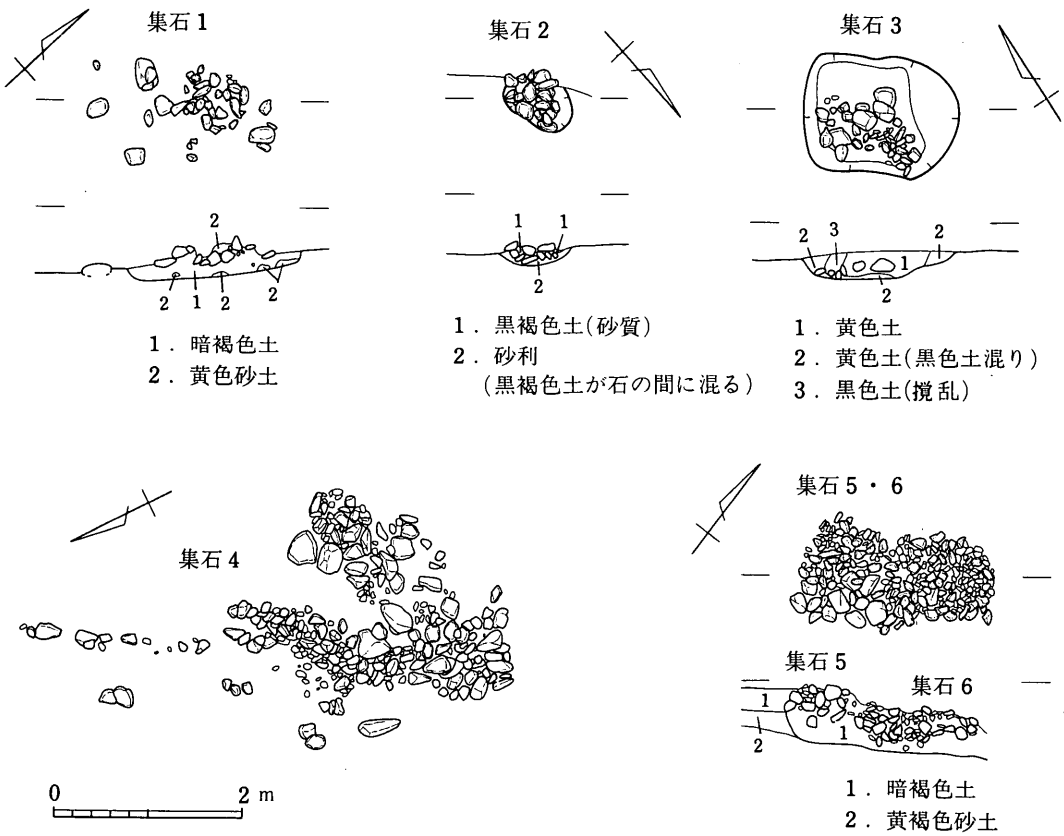
集石19（第377図）

遺構　ARBK12周溝の北東側、ARBDH53を中心に検出された。溝址４の上層を切り、南側でわずかに11号住居址を切っている。6.2×5.4mの不整楕円形の集石で、下層は6.4×６mの不整形を呈し、深さ１mを測る掘り込みを持つ。30cmくらいの厚さで石が入り、空間部もある。その下に40cm前後やわらかい褐色土が入る。集石の上面ではARB基本土層の２層の黄色砂土を切っている。

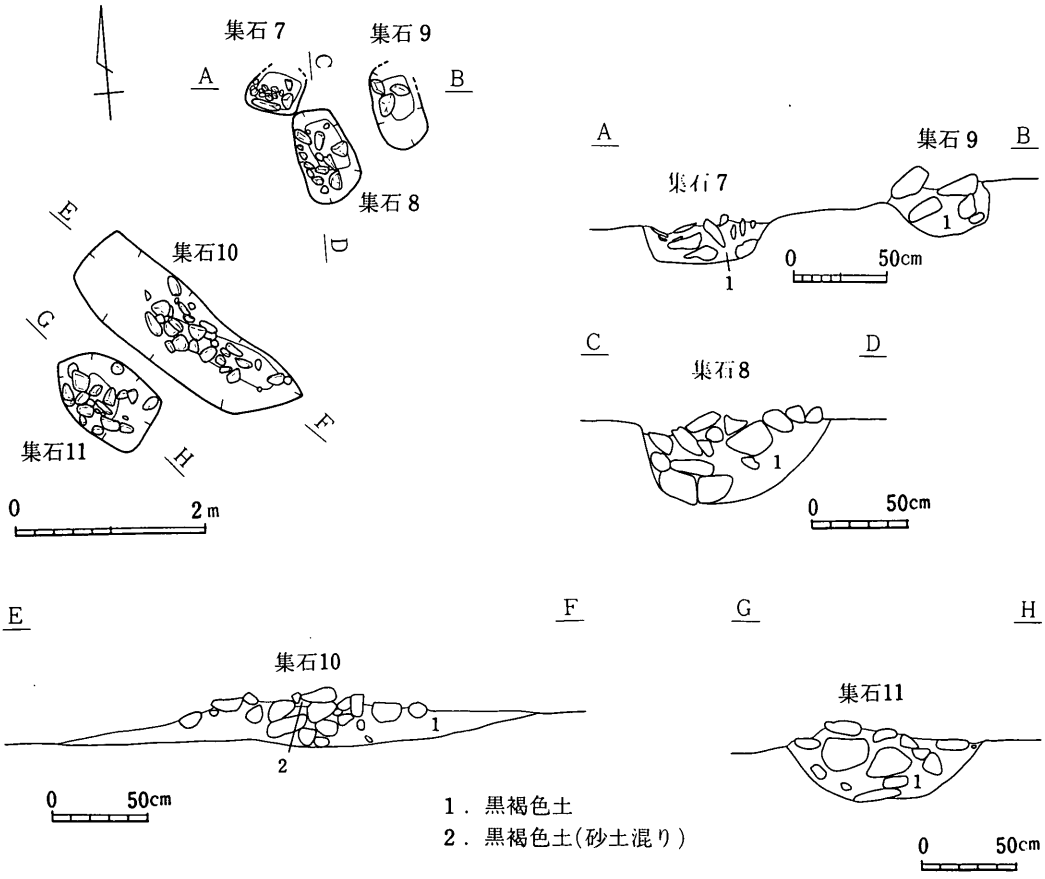
遺物　出土量は少なく煙管の雁首、近世陶磁器片が出土している。

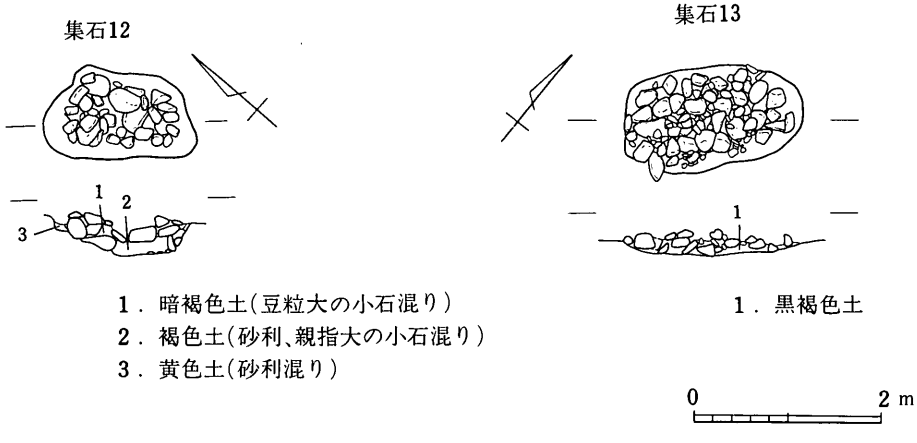
遺構の性格は、耕作によって大量に掘り出されたARBK13の葺石を、耕作のじゃまにならない深さに入れるため、穴を掘って埋めたと考えられ、遺物・土層から江戸時代終末以降のものである。

（山下誠一）

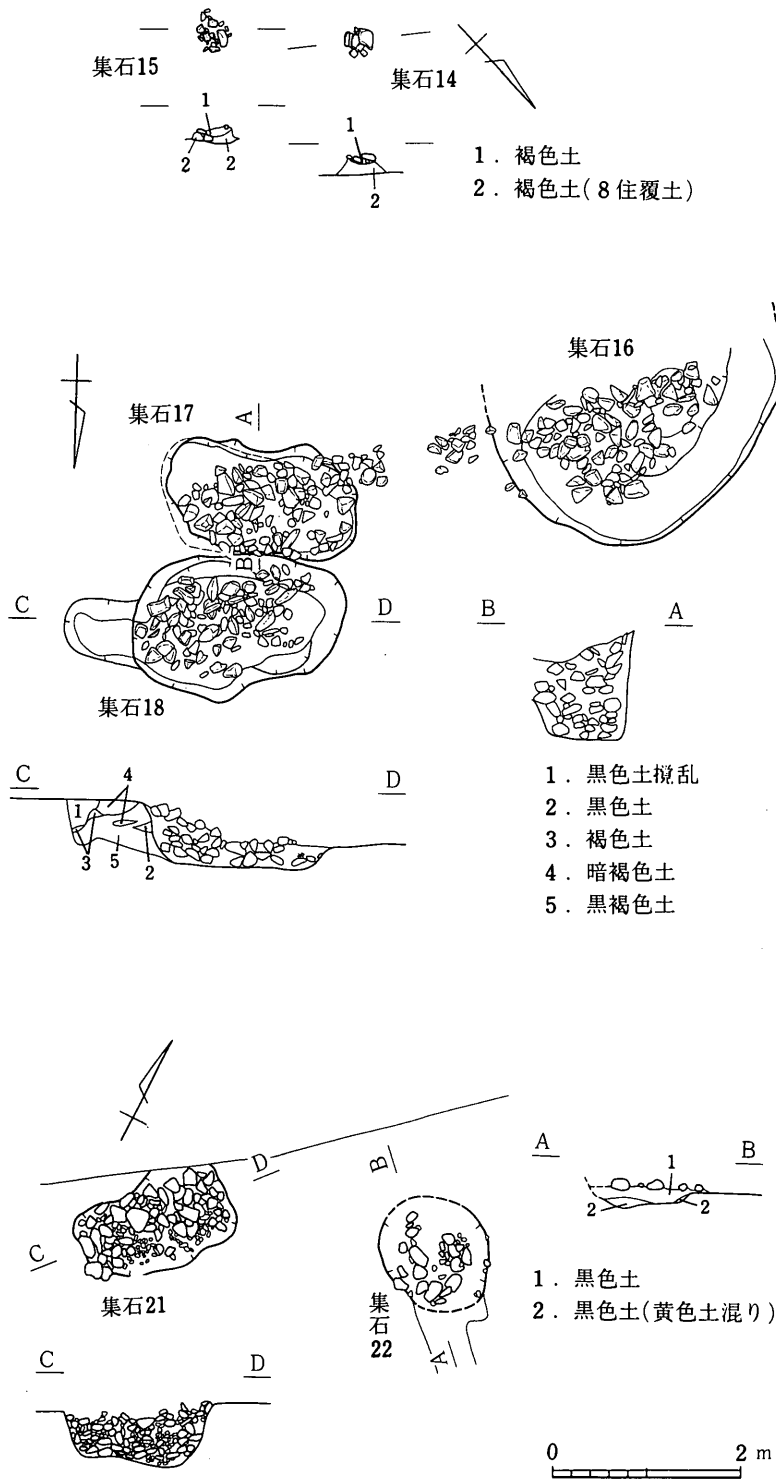


第384図　ARB　集石１・２・３・４・５・６





第385図　ARB　集石 7・8・9・10・11・12・13



第386図　ARB　集石14・15・16・17・18・21・22

Ⅳ 小　結

本調査にかかわる遺構の状況は以上のとおりである。それらは調査範囲内に限定してみても、時期的及び地域的にいくつかのまとまりをもって把えられるが、それぞれの具体的様相を明らかにするには、伴出した遺物等含め総合的な検討を経なければならないことはいうまでもないが、各期における遺構分布から読み取れる諸状況を概述して、本編にかかわる小結としたい。

1　縄文時代

1）早　期

ＡＲＹを中心に遺構・遺物が検出されたことは前章までに述べたとおりである。出土遺物の詳細は次編によるが、時期的には該期のうち最終段階のものが主体となる。ＡＲＹに検出された該期遺構として、小竪穴と「ユニット」とした遺物集中範囲があるが、近年他地域において本遺跡と同時期のみではなく、より古い段階から竪穴住居址の存在が確認されており、本遺跡の遺物出土状況・立地条件など考えれば、その存在する可能性は極めて高いといえる。そして、その中心地域を想定すれば調査範囲の東側一帯に存在する可能性が高いといえる。

2）中　期

該期遺構としては、一連の遺跡群からはずれるバイパス用地北端のＡＲＢに該期後半から終末にかけての集落址を確認し、調査範囲内西側にその広がりのあるかなり規模の大きな集落の存在が予想される。

また、恒川遺跡群のＴＡＮからＫＵＲにかけては該期の遺構そのものは検出されなかったが、中葉から後半にかけての遺物が出土し、縄文時代中期遺跡の立地する事実もあり、遺跡群のいずれかに集落の中心が存在することが考えられる。

該期遺跡は当地方全域に集落の分布することが知られているが、それらの中で恒川遺跡群及びＡＲＢともに最低位段丘上に立地するものの１つといえ、高位段丘上に主眼を置いて集落論を展開することの多かった今までのあり方に一石を投じるものといえる。

3）後期・晩期

該期に属する確実な遺構は、調査範囲内で確認できなかったが、ＧＯＢを中心に晩期遺物が相当量出土しており、当然晩期集落の中心部が同一段丘上のいずれかに立地していると考えられる。

また、後期資料はごくわずかみられるだけであり、遺跡群内における状況判断は困難であるが、今次調査前にＧＯＢから該期資料が出土しており、早期以降は安定した地形を成した段丘面であり、前後の時代との関連から、先述の晩期同様に段丘面上のいずれかに集落の存在が予想される。

2　弥生時代

1）中　期

縄文時代晩期資料が比較的多出しているが、後続する弥生時代中期前半（含弥生時代前期）の資料は、それと思われる土器片がわずかにあるのみで、確実に本遺跡群内で遺構の存在が認められるのは中期後半の段階からである。この空白期間をどう考えるかは、継続性の高いという恒川遺跡群の性格から大きな問題の１つといえる。今次調査に限ってこの時期のことは具体的に論ずることはできず、遺跡群全体を、さらに周辺の諸遺跡をも含めた広い視野に立っての検討が必要な時期が、弥生時代中期前半であるといえる。

中期後半の段階は遺跡群の調査範囲内全域にわたり竪穴住居址が分布する。ＴＡＮからＡＲＹまで若干の濃淡はあるが、ほとんど同様の分布状況で検出された。線での調査ではあるが、遺跡群のある台地上全体に集落の広がりを考えるに十分である。もちろん、段丘面全体すなわち遺跡群全体の調査を実施したわけではなく、全体像について具体的に示すことは不可能であるが、基本的にはＴＡＮからＡＲＹにかけての段丘面上全体が、連続して居住空間として用いられたといえる。

今次調査による住居址数は極端に多いといえるものではないが、その広がりを考えた上での集落規模は県内でも屈指のものといえる。

時期的には後期に移行する直前までの恒川Ⅰ～Ⅲ期の３段階に細分可能で、それらが重複する部分もあるが、調査範囲内において時期毎にある程度のまとまりを持って把えられる。逆にいえば小時期での住居址分布をみると、居住空間内に一定の空白部分を有するといえる。このことは、居住空間として段丘面全体が利用されてはいるが、個々の住居が無意に散在しているのではなく、なんらかの意図、さらには規制された中でそれぞれの場所にあると考えられる。

今次調査が、遺跡群としては中心からややはずれ、段丘面の先端寄り部分であり、段丘面全体の利用状況把握は困難であるが、基本的には、先述のとおり居住空間としての姿が強く示され、当然本遺跡群の立脚した生産基盤を他のいずれかに求めなければならないが、農業生産が時代の特性である本時代において、住居址間の空白部も、集落もしくは各住居における副次的生産の行なわれた場所である可能性も指摘できる。なお、本遺跡群の主たる生産基盤は、下段の天竜川氾濫原及び段丘崖下にみられる湧水による湿地帯を管理したものと考えられる。

2）後　期

前時代の中期後半の住居址分布状況に比べ大きな相異点が認められる。

本時期内は恒川Ⅳ～Ⅵ期の3時期に細分可能であり、前半期は従来の当地方土器編年上の座光寺原式期に、後半期及び終末期が中島式期にあたる。

前半期の今次調査により検出した遺構数はごくわずかである。その遺構分布状況として、TAN・KURには該期と考えられるが断定の難しい方形周溝墓があり、住居址は認められない。GOBからARYにかけ2軒の住居址と方形周溝墓が点在した。

前半期の遺跡群全体に散在する住居址分布の状況と比べ、しいて挙げればGOBからARYにかけて共通したあり方といえるが、きわめて希薄なものであり、むしろTAN・KURの調査範囲内に住居址の存在しないことの方が時代の特性を示すといえる。すなわち、遺跡群内既出資料や今次調査により出土した断片的な資料から、遺跡群内に本時期集落の存在を否定することはできず、むしろかなり大規模な集落の存在が予測される中で、広範な段丘上全体を居住空間とした前時期のあり方から、段丘上の特定地域に居住空間を限定した可能性が強い。

前時期では、基本的に居住空間として一元的に利用した段丘面上が、本時期には複数の性格を有する空間として位置づけられる。その利用形態を即断することはできないが、方形周溝墓のあり方からみて、居住空間に隣接した墓域的性格の指摘ができるが、むしろ、その主体は、前時期に引き続き主たる生産基盤を水田経営に置きながらも、かなり依存度の高い従的な生産空間が居住空間に隣接してあったと考えられる。

後半期の遺構分布は、前半期の規制された住居址分布の姿がより一層明瞭となる。調査範囲内で住居址の検出されたのはTANに限定され、TANに隣接したKURに溝址がある他は調査範囲内のいずれからも土器片すら出土しない状況であった。

TANには5軒の住居址が、西端の凹地に沿うように検出され、その北及び南側にその分布域が広がると予測され、東側段丘面上には住居址を造らない空間を意識した住居址配置である。

前段階において形成されつつあった規制された土地利用の姿が確立され、居住空間とそれに隣接した生産空間の位置づけが明瞭になったものと考えられる。

最終末の段階は、従来の考え方では弥生時代に位置づけられるが、土器には土師器的様相がみられるようになり、古墳時代初頭に置く方が妥当とも考えられる時期である。

本段階の住居址は、GOA及びGOBのA区のみに検出された。前段階のTANに限定された居住空間がそっくり移動した状況である。TAN西側に凹地を控えた恒川Ⅴ期段階同様に、GOAの西方に湿地帯を控えた共通する立地条件中に居住空間を置いての移動である。段丘上の土地利用形態、さらには基本的な生活形態も共通したものと考えられる。そして、その状況は次時期の古墳時代前期前半まで継続するといえる。

3　古墳時代

1）前　期

弥生時代後期終末に連続し、古墳時代後期に移行する直前までの4時期に細分でき、恒川Ⅶ～Ⅹ期とする。そのうち遺構分布状況から恒川Ⅶ～Ⅸ期とⅩ期には立地形態に差があり、区分して把えられる。

恒川Ⅶ～Ⅸ期の遺構はＧＯＡ・ＧＯＢＡ区にほぼ限定され、弥生時代後期終末恒川Ⅵ期の遺構分布状況に共通する。恒川Ⅵ期からの継続性が高く、生活形態も同様であったと考えられる。また、この段階の最終末に古墳とも考えられる施設を、従来の居住空間内の一画に構築しており、空間の利用形態そのものを変更させている。

恒川Ⅹ期は、古墳時代後期直前の段階で、前段階まで連続した居住空間であったＧＯＡ・ＧＯＢには若干の遺物出土をみる程度で、住居址の分布する箇所はＫＵＲの段丘上に移動する。住居址の分布状況はＫＵＲのほぼ全域に散在し、弥生時代中期のあり方に似る。しかし、本遺跡群全体でみればＫＵＲのみに分布し、遺跡群全体における居住空間は限定されたものといえる。

該期全体を通じ、当地方他遺跡の調査によって得られた資料は断片的なものばかりで、全般にわたっての整理は不可能であり、今次調査により、当地方の該期研究のための基本的、かつ、かなり整理された資料が提供されたといえる。

2）後　期

古墳時代後期の遺構は、今次調査において最も数が多く、遺跡群全域に分布する。該期の遺構については、詳細な検討が不十分ではあるが、遺構相互の切り合い関係及び出土遺物等からみて3～4小期に細分できる。

各期の住居址分布は、いずれも適当な間隔を置いて散在しており、一定の規制により住居構築がなされたと考えられる。

ＴＡＮ・ＫＵＲ及びＧＯＢ～ＡＲＹにかけて各期のものがあり、小期毎の状況は検討不足の点もあるが、該期前半から中程までは遺跡群内全域に分布し、最終段階の奈良時代直前に位置づけられる遺構はＧＯＢ～ＡＲＹにほぼ限定して認められ、該期全体が一様ではない。最終段階の遺構のあり方は、より政治的な規制が加わったことも考えられる。

遺跡群の北側に分布する高岡1号古墳をはじめとする50基近い古墳と強い関連が考えられ、住居址個々について直接の関連を論ずることはできないが、出土遺物中には古墳副葬品的なものも多く、古墳被葬者も含めた人々の生活の場であったといえる。

弥生時代中期後半以降同一段丘面上において、継続した集落を成していることは折りに触れて

記述したが、地理的な環境は変るはずがなく、大集落の形成された要因として、可耕地拡大を計る土木技術・単位当たり収量増を計る農業技術の導入など、生活の安定・充実をなしうる外部からの大きな波があったと考えられる。

4　奈良時代

恒川遺跡群を最も特徴づける時代であり、掘立柱建物址・竪穴住居址・溝址などがＴＡＮ～ＡＲＹにかけての遺跡群全域に分布する。分布状態は、掘立柱建物址が、ＴＡＮ～ＡＲＹの間に６箇所の群で把えられ、それらがある程度の間隔をもって位置する。建物址群の中間地帯は、竪穴住居址・溝址などが分布し、広範囲にわたり一定の目的を持った空間利用が考えられる。

それぞれの群がどのような形で関連するかの判断は難しいが、出土遺物の内容なども総合すれば、遺跡群の全体像として官衙的性格が強く示される。

調査前の予想として、古代伊那郡衙址もしくは定額の寂光寺の存否が問われた遺跡群であり、調査結果によれば前者の可能性が強いといえる。

5　平安時代

遺構分布の主体は竪穴住居址で、そのほとんどがＴＡＮ・ＫＵＲにあり、ＧＯＢ～ＡＲＢにわずか検出された。時期的には大半が後半に位置づけられるもので、前半期のものはわずかである。

ＴＡＮ・ＫＵＲに20軒を越える竪穴住居址を検出し、道路址・掘立柱建物址などの住居址以外の施設にも該期と考えられるものがあり、出土遺物の内容からみても、恒川遺跡群の中心的位置づけが可能といえる。基本的には居住地域と判断されるが、前時代の官衙的性格を継続した、その崩壊後の集落と考えられる。

ＡＲＢは、恒川遺跡群とは地理的に区切られ、各時代の墓域であることは先述したが、本時代においても火葬墓等の埋葬施設があり、恒川遺跡群の墓域が継続したことを示す。また、遺跡内に２軒の住居址があり、墓域内の小集落として特殊性の強いものといえる。

6　中　　世

該期遺構は遺跡群全体をみてもあまり多くはないが、竪穴住居址・土坑・溝址などが散在する。

ＧＯＡの土坑上部には建物址のあった可能性があり、ＧＯＢの溝址との関連、出土遺物などから居館址的な性格も考えられる。また、ＫＵＲに竪穴住居址が検出され、遺跡群全体から該期遺物の出土していることなどから一般的な集落の存在も否定できない。

7 まとめ

今次調査における時期別の状況については個々に触れたが、遺跡群の中核をなす弥生時代中期後半から平安時代にかけて遺跡群内において、中心となる場所及び状況の変遷がみられる。

弥生時代中期後半――遺跡群内全域に遺構が散在し、中心地域の特定はできない。

弥生時代後期前半――位置は不明であるが、調査範囲外のいずれかに特定の中心地域が存在すると予測される。

弥生時代後期後半――ＴＡＮが中心地域となり居住地域は限定される。

弥生時代後期終末期――ＧＯＡ・ＧＯＢＡ区に限定された居住地域を形成する。

古墳時代前期前半――前時期に引き続き、ＧＯＡ・ＧＯＢＡ区に限定され、その後半段階に古墳的施設を構築し、放棄する。

古墳時代前期後半――該期最終段階に至り、ＧＯＡからＫＵＲに中心地域が移動し、次時期の古墳時代後期集落形成の端緒となる。

古墳時代後期――遺跡群全域が大規模な集落となり、中心地域の特定は困難となるが、終末期にはＧＯＢ～ＡＲＹに中心的傾向がみられる。

奈良時代――遺跡群全域に官衙的遺構があり、ＴＡＮ・ＫＵＲ・ＧＯＢに居住空間的性格がある。

平安時代――ＴＡＮ･ＫＵＲにほぼ限定された集落を構成し、中心地域を成す。

今次調査により検出された遺構・遺物は多様であり、明らかになった事実も多いが、それにより生じた問題点は倍してあり、今後究明すべき課題は、さらに大きく、多いが、それらの１つ１つを解明することにより、遺跡そのものはもちろん、伊那谷のさらには長野県の歴史解明に大きな役割を果すものといえる。

（小林正春）

第2表　TAN・KUR　住居址一覧表

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
1	9	隅丸長方形	5.8×4.7	N133°E	半分	地床炉	南西壁寄り中央	堅い	−	II	
2	66	隅丸方形	5.5×6.0	N5.5°E	完掘	石芯粘土カマド	北壁 ほぼ中央	堅い	−	平安	
3	9	隅丸方形	3.0×3.2	N10°E	完掘	焼土のみ	北壁 中央東寄り	軟かい	−	平安	
4	28	(隅丸方形)	−×6.6	不明	半分	不明	不明	軟かい	1	古墳後	
5	16	隅丸方形	4.0×3.8	N47.5°W	完掘	土器埋設炉	北西主柱穴中間	極めて堅い	4	V	
6	29	隅丸方形	4.0×4.5	N49°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	−	古墳後	
7	17	隅丸方形	4.7×5.0	N140°E	完掘	土器埋設炉・地床炉	南東主柱穴中間	堅い	4	V	西北に地床炉あり
8	18	隅丸方形	5.2×4.5	N113°E	ほぼ完掘	土器埋設炉	東主柱穴中間	きわめて堅い	4	V	増築
9	10	隅丸長方形	8.0×4.9	N48.5°W	ほぼ完掘	埋設炉・地床炉	南東主柱中間西寄り	堅い	3	II	
10	67	隅丸方形	4.0×4.2	N63.5°W	完掘	石芯粘土カマド	西壁中央北寄り	堅い、はり床	−	平安	
11	103	不明	2.5×−	不明	一部	不明	不明	きわめて軟かい	−	平安	
12	19	隅丸方形	4.3×4.4	N68.5°E	ほぼ完掘	土器埋設炉	東主柱穴中間	堅い	4	V	
13	11	不明	−	不明	一部	土器埋設炉	不明	軟かい	−	II	炉址のみ
14	87	(隅丸方形)	3.0×3.6	N32°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	軟かい	−	不明	古墳時代後期の可能性大
15	68・69	隅丸方形	4.4×4.3	N138.5°E	完掘	石芯粘土地山掘り残しカマド	南東壁中央	堅い	−	平安	
16	21	隅丸方形	7.0×6.7	不明	ほぼ完掘	不明	不明	堅い	2	X	火事
17	20	隅丸方形	3.8×3.8	N29°E	半分	土器埋設炉	北主柱穴中間	堅い	3	V	
18	108	(隅丸方形)	−	不明	一部	不明	不明	軟かい	→	不明	
19	12	隅丸方形	5.8×(5.1)	N130°W	ほぼ完掘	土器埋設炉	中央西壁寄り	堅い	−	II	
20	13	(隅丸長方形)	6.7×4.5	N62°W	一部	不明	不明	軟かい	−	II ～ III	
21	30	隅丸方形	5.0×4.3	N47.5°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	軟かい	−	古墳後	
22	31	隅丸方形	3.6×3.4	N153°W	完掘	焼土のみ	南東壁東寄り	軟かい	−	古墳後	
23	22・23	隅丸方形	6.7×6.9	N34.5°W	半分	地床炉	北西主柱穴 ほぼ中間	極めて堅い	3	X	火事
24	58・70	(隅丸方形)	(5.0×5.0)	(N40°E)	一部	石芯粘土カマド	北東壁	軟かい、はり床	−	平安	
25	58	不明	−	(N106.5°E)	一部	石芯粘土カマド	東壁	はり床	−	奈良	
26	32	(隅丸方形)	(7.8)×7.7	(N48°W)	ほぼ完掘	不明	不明	軟かい	3	古墳後	
27	88	(隅丸方形)	−	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	古墳時代後期の可能性あり
28	89	(隅丸方形)	6.1×−	(N57°W)	半分	焼土のみ	北西壁寄り中央	軟かい	−	不明	焼土は炉址？
29	71	(隅丸方形)	(4.6×4.2)	N73°W	半分	残骸	西壁中央	軟かい	−	平安	石芯粘土カマドか

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
30	33·34	隅丸方形	7.5×7.8	N53.5°W	ほぼ完掘	粘土カマド	北西壁中央	堅い	3	古墳後	建て替え
31	35·36	隅丸方形	7.2×7.4	N53°W	完堀	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い	4	古墳後	
32	37	隅丸方形	3.3×3.0	不明	ほぼ完掘	不明	不明	軟かい	−	古墳後	竪穴状遺構
33	14	(隅丸方形)	−×5.0	N7°E	半分	地床炉	中心よりやや北	軟かい	−	III	
34	38	隅丸方形	4.8×4.7	−	半分	不明	不明	凹凸あり	−	奈良	
35	38	隅丸方形	4.8×4.8	N57.5°E	半分	焼土のみ	北西壁中央	堅い	−	古墳後	
36	39	隅丸方形	3.4×3.7	N46°W	ほぼ完掘	残骸	北西壁中央西寄り	軟かい	−	平安	
37	39	不明	−	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	
38	72	不明	−	不明	一部	不明	不明	極めて軟かい	−	平安	
39	72	隅丸方形	3.9×3.4	N129°E	完掘	石芯粘土カマド	南東壁中央	堅い	−	平安	
40	68	隅丸方形	(6.0)×6.0	N40°W	半分	粘土カマド	北西壁中央南寄り	はり床	4	平安	火事
41	68	(隅丸方形)	−×4.2	(N139°E)	一部	焼土のみ	南東壁中央	軟かい	−	平安	
42	85	隅丸長方形	5.5×3.9	N31°E	完掘			軟かい	4	中世	カマドは設けられず
43	85	不明	不明	(N126°E)	一部	石芯粘土カマド	東壁	軟かい	−	平安	
44	59·60	隅丸方形	7.6×7.2	N30°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁やや北寄り	堅い、一部はり床	−	奈良	和銅開珎·鉄鈴
45	40	不明	不明	(N10°W)	一部	石芯粘土カマド	北壁	軟かい	−	古墳後	上部に平安時代の遺構あり
46	90	(隅丸方形)	(3.2×2.8)	不明	半分	不明	不明	軟かい	−	不明	
47	41	隅丸方形	5.5×5.7	N61.6°W	半分	焼土のみ	西壁中央	軟かい。はり床	4	古墳後	
48	73	隅丸方形	5.5×(5.0)	N58°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁やや西寄り	軟かい	3	平安	
49	27	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	平安	隅のみ
50	42	隅丸方形	2.0×2.0	N51.5°E	完掘	石芯粘土カマド	北東壁北寄り	はり床	−	古墳後	
51	74·75	隅丸方形	(4.2×3.9)	N119.5°E	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	南東壁中央東寄り	軟かい、はり床	−	平安	
52	43	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	古墳後	
53	43	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	はり床	−	古墳後	
54	61	(隅丸方形)	(4.0)×(4.0)	(N123°E)	半分	石芯粘土カマド	東壁中央	中央部堅い、はり床	−	奈良	
55	62	(隅丸方形)	5.8×−	(N110°E)	半分	石芯粘土カマド	東壁中央南寄り	堅い	−	奈良	
56	76	隅丸長方形	4.5×6.0	N36°E	ほぼ完掘	(地山掘り残しカマド)	北東壁中央東寄り	軟かい	−	平安	中央に炉址あり
57	44	(隅丸方形)	−×4.2	N145°E	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	南東壁東寄り	堅い、壁下軟·はり床	1	古墳後	
58	45	隅丸方形	5.0×5.0	N45°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	はり床	−	古墳後	建て替え？
59	15	不明	不明	不明	一部	不明	不明	比較的堅い	−	II ～ III	
60	77	隅丸方形	4.0×4.0	N62°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央南寄り	軟かい	−	平安	
61	46	隅丸方形	(4.3)×4.3	N41°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	軟かい、はり床	−	古墳後	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
62	49	不明	不明	不明	一部	不明	不明	極めて軟かい	−	古墳後	
63	49	不明	3.4×−	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	
64	49	不明	不明	不明	一部	不明	不明	極めて軟かい	−	奈良	ミ19に切られる。
65	78·79	(隅丸方形)	6.8×−	N58°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁	堅い、はり床	−	平安	
66	49	不明	不明	不明	一部	不明	不明	極めて軟かい	−	不明	古墳時代前期の可能性あり
67	47	隅丸方形	7.0×−	不明	半分	不明	不明	堅い、はり床	2	古墳後	上部に平安時代の遺構あり
68	47	不明	不明	不明	一部	不明	不明	極めて軟かい	−	古墳後	
69	48	隅丸方形	5×4.8	不明	ほぼ完掘	不明	不明	極めて堅い	−	古墳後	
70	49	(隅丸方形)	(5×5)	N37°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁	極めて堅い	−	古墳後	カマドは境に袖一部を確認
71	80·81	隅丸方形	3.9×−	N112°E	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	東壁	軟かい、はり床	−	平安	
72	97	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい、はり床	−	奈良	
73	44	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	隅のみ
74	73	隅丸方形	7.2×7.4	N53.5°W	半分	焼土のみ	西壁中央	堅い	4	古墳後	
75	24·25	(隅丸方形)	不明	不明	半分	不明	不明	一部はり床	−	X	編物石多数
76	63	不明	13.0×−	N110°W	一部	不明	不明	堅い	−	奈良	
77	31	不明	不明	不明	一部	土器埋設炉	不明	不明	−	II	炉址のみ
78	91	不整方形	5.0×4.0	不明	ほぼ完掘			軟かい、凹凸あり	−	不明	竪穴状遺構
79	50	隅丸方形	4.1×4.8	N50.5°E	半分	残骸	北西壁中央やや北寄り	軟かい	4	古墳後	
80	51	隅丸方形	5.4×5.5	N44°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	堅い、はり床	2	古墳後	火事
81	52	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	古墳後期と思われる。
82	24	(隅丸方形)	不明	N48°W	一部	(地山掘り残し)	北西壁北寄り	堅い	−	古墳後	カマドと壁の一部
83	82	(隅丸方形)	4.4×4.5	N30.5°E	半分	焼土のみ新旧2箇所	西壁(新)北壁(旧)	はり床	−	平安	
84	52	隅丸方形	5.0×4.7	N38°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い、一部はり床	3	古墳後	火事
85	51	隅丸方形	5.6×5.2	N39°E	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	はり床	1	古墳後	火事、カマドの移動？
86	51	不明	不明	不明	一部	不明	不明	小穴あり	−	平安	小鍛冶址
87	64·65	隅丸方形	4.4×3.9	N66°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい、はり床	−	奈良	
88	51	不明	不明	不明	一部	不明	不明	やや堅い	−	II ～ III	床面のみ
89	53	隅丸方形	6.0×6.3	N42.5°W	半分	石芯粘土カマド	北壁中央	堅い、はり床	4	古墳後	
90	26	(隅丸方形)	(5.2×5.2)	(N76°W)	ほぼ完掘	炉址の存在可能性あり	(西柱穴の中間)	部分的に堅い	4	X	
91	54	(隅丸方形)	(7.5)×−)	N62.5°W	ほぼ完掘	(石芯粘土カマド)	西壁	軟かい	(2)	古墳後	
92	27·83	不明	不明	不明	一部	(石芯粘土カマド)	不明	不明	−	平安	カマドの残該のみ
93	55	(隅丸方形)	5.4×(5.7)	N51°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁	軟かい	3	古墳後	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
94	56	不明	不明	不明	一部	焼土のみ	不明	不明	−	古墳後	カマド残骸
95	32	(方形)	(6.0)×6.0	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
96	86	不明	不明	不明	一部	土器埋設炉	不明	不明	−	Ⅲ	炉址のみ
97	51	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	古墳後期以前	火事
98	45	隅丸方形	(5.6×5.6)	N32°W	半分	焼土のみ	北壁中央	軟かい	−	古墳後	
99	57	不明	不明	不明	半分	不明	不明	堅い、凹凸あり	−	古墳後	
100	84	(隅丸方形)	不明	(N66°W)	一部	焼土のみ	西壁中央	堅い	−	平安	
101	27	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	Ⅹ	焼土と床面一部
102	27	不明	不明	不明	一部	焼土のみ	不明	焼土付近堅い	−	古墳後	焼土のみ
103	27	不明	不明	不明	一部	焼土のみ	北壁西寄り？	不明	−	古墳後	焼土のみ
104	84	(隅丸方形)	不明	不明	半分	不明	不明	軟かい	−	古墳後	
105	86	(隅丸長方形)	不明	(37.5°E)	半分			堅い、はり床	4	中世	カマドは設けられず
106	86	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい、はり床	−	不明	

第3表　GOA　住居址一覧表

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
1	136	(隅丸方形)	(4.0×4.0)	N14°W	半分	土器埋設炉	北壁ぎわ	不明	−	Ⅵ	
2	137	不明	不明	不明	一部	土器埋設炉	不明	不明	−	Ⅵ	炉址のみ
3	138	隅丸方形	7.8×(7.6)	N58.5°E	ほぼ完掘	地床炉	東主柱穴間中央北寄り	はり床	4	Ⅷ	平地式住居、火事
4	139 140	隅丸方形	5.0×5.3	N122.5°W	ほぼ完掘	地床炉	南西主柱穴中間		−	Ⅷ	火事
5	141	隅丸方形	(7.0)×6.4	N128°W	ほぼ完掘	地床炉	西主柱穴中間	堅い、はり床	4	Ⅶ	
6	142	(隅丸方形)	(4.2×4.2)	N43°W	ほぼ完掘	土器埋設炉	北西主柱穴中間	堅い、はり床	2	Ⅵ	
7	143	隅丸方形	4.5×(4.5)	N27.5°W	半分	不明	不明	極めて堅い、はり床	4	Ⅶ	
8	141	(隅丸方形)	(3.5)×3.5	N133°W	半分	地床炉	南西壁寄り中央やや西寄り	堅い、はり床	−	Ⅶ	
9	144	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	Ⅵ	
10	145	不明	不明	不明	一部	不明	不明	部分的に堅い	−	不明	床面一部のみ

第4表　GOB　住居址一覧表

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
1	177	隅丸長方形	4.6×5.8	N61°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	西壁北寄り	軟かい、一部はり床	1	古墳後	
2	165	隅丸方形	4.0×4.0	N33°E	半分	(地床炉)	北東壁中央	堅い、壁下軟かい	2	Ⅶ	
3	165 201	隅丸方形	3.8×4.4	N52°W	完掘	粘土カマド	北西壁中央北寄り	堅い	−	奈良	
4	166	(隅丸方形)	(5.4×5.5)	(N67.5°E)	ほぼ完掘	地床炉	中心より北東隅より	軟かい、はり床	−	Ⅷ	
5	178	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	(1)	Ⅷ	
6	178 179	(隅丸方形)	5.5×−	N29°W	半分	(粘土カマド)残骸	北西壁	極めて堅い	2	古墳後	
7	177	隅丸方形	4.4×(5.0)	N130°W	半分	地床炉	中央南西壁寄り	軟かい	3	Ⅶ	
8	156	隅丸長方形	7.6×6.4	N36.5°E	半分	地床炉、土器埋設炉	中央部北壁寄り	堅い	2	Ⅲ	
9	170	不明	不明	不明	一部	不明	不明	不明	−	Ⅱ	遺物のみ
10	167 168	隅丸方形	5.8×5.8	不明	完掘	不明	不明	やわらかい、一部堅いはり床	−	Ⅷ	竪穴状遺構、火事
11	202	不明	不明	不明	一部	(石芯粘土カマド)	北西壁	堅い、壁下軟かい、一部はり床	−	奈良	
12	178	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	Ⅶ	
13	169	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	火事
14	169	(隅丸方形)	不明	不明	半分	(地床炉)	中央西壁寄り	堅い、壁下軟かい	−	Ⅷ	
15	170 171	不明	不明	不明	一部	不明	不明	不明	−	Ⅶ	焼土・遺物のみ
16	172 173	隅丸方形	4.5×4.7	N78.5°E	完掘	土器埋設炉	東主柱穴中間やや中心寄り	極めて堅い、はり床	4	Ⅵ	床面上に編物石散乱
17	157	隅丸方形	5.6×−	N50°W	半分	土器埋設炉	中心より北西寄り	きわめて堅い	2	Ⅲ	
18	174	隅丸方形	4.9×4.4	不明	半分	不明	不明	堅い、はり床	2	Ⅵ	
19	174	隅丸方形	4.7×4.5	N121°W	完掘	地床炉	南西主柱穴中間	堅い、はり床	4	Ⅶ	
20	175	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	Ⅵ	
21	214	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	Ⅶ ～ Ⅷ	
22	180	不明	不明	不明	一部	石芯粘土カマド	不明(北東壁)	不明	−	古墳後	カマドのみ
23	158	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	部分的に堅い	−	不明	床面のみ
24	158	不明	不明	不明	一部	地床炉	(北)	凹凸あり堅い	−	Ⅵ	床面のみ
25	158	不明	不明	不明	一部	土器埋設炉	不明	部分的に堅い	−	Ⅲ	炉址と一部床面
26	181	不明	不明	(N129°E)	一部	石芯粘土カマド	(南東壁)	堅い	−	古墳後	カマドと一部床面
27	176	不明	不明	不明	一部	不明(地床炉)	不明	比較的堅い	−	Ⅷ	炉址残骸遺物のみ
28	159	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	(Ⅱ～Ⅲ)	
29	175	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い、はり床	−	Ⅶ	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
30	182	隅丸方形	(6.0)×6.0	N30.5°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央	堅い、壁下軟かい	3	古墳後	
31	182 203	隅丸方形	(3.3)×3.8	N32.5°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	4	奈良	
32	204 205	隅丸方形	(5.4)×5.3	N45.5°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	部分的堅い、はり床	4	奈良	
33	182	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	30住を切る
34	160	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	凹凸あり軟かい	−	II ～ III	
35	161	不明	不明	不明	一部	土器埋設炉	不明	炉の回り堅い	−	II	炉址・床面のみ
36	231	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい、はり床	−	不明	奈良以前、古墳時代後期の可能性大
37	160	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
38	207 208	(隅丸方形)	4.6×−	不明	ほぼ完掘	不明	不明	堅い	−	平安	
39	187	(隅丸方形)	(5.0×5.0)	不明	ほぼ完掘	不明	不明	堅い、はり床	−	平安	
40	183	不明	不明	不明	一部	焼土のみ	南東壁	堅い	−	古墳後	焼土、床面のみ
41	184	(隅丸方形)	−×5.4	(N30°W)	半分	不明	不明	堅い	2	古墳後	
42	184	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	1	古墳後	隅のみ
43	185	隅丸方形	(5.4)×5.4	N30.5°W	ほぼ完掘	(石芯粘土カマド)	北西壁中央	堅い、壁下軟かい	4	古墳後	
44	186	(隅丸方形)	(5.0×5.0)	N39°W	半分	不明	不明	軟かい	(2)	古墳後	
45	162	隅丸方形	5.5×5.2	N45°W	ほぼ完掘	地床炉	北西主柱穴中間	堅い、床下軟かい	4	III	
46	163	(隅丸方形)	(5.4×6.5)	(N21.5°E)	半分	(土器埋設炉)	北壁寄り	堅い	2	II	壁は一部確認
47	164	隅丸長方形	6.8×5.7	N34°E	ほぼ完掘	土器埋設炉	中央と北東主柱穴の中間	凹凸あり堅い	3	III	
48	187 188	隅丸方形	−×7.7	N38°W	半分	残骸	西壁中央	堅い、はり床、壁下軟かい	4	古墳後	
49	189	隅丸方形	6.4×6.8	N38°W	ほぼ完掘	(石芯粘土カマド)	北西壁中央	軟かい	4	古墳後	
50	161	不明	不明	不明	一部	不明	不明	(軟かい)	−	(III)	
51	206	隅丸方形	(6.8)×6.8	N31.5°W	ほぼ完掘	粘土カマド	北西壁中央	堅い	4	奈良	
52	190	(隅丸方形)	不明	(N71.5°E)	一部	石芯粘土カマド	東壁	軟かい	1	古墳後	
53	260	不明	−×5.6	不明	不明	不明	不明	軟かい	−	古墳後	記述AMDに
54	191	不明	不明	不明	一部	不明	(北東壁)	カマド前堅い	−	古墳後	焼土・床面のみ
55	192	隅丸方形	3.4×4.0	N24.5°W	ほぼ完堀	(地山掘り残し)	北西壁西寄り	堅い	−	古墳後	
56	193	不明	−×7.3	不明	一部	不明	不明	凹凸あり	−	古墳後	
57	194	隅丸方形	5.0×(5.0)	N63°W	ほぼ完堀	(地山掘り残し)残骸	北西壁中央	堅い、はり床、一部軟かい	3	古墳後	
58	195 196	隅丸方形	7.0×(7.0)	N45°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	2	古墳後	
59	197	隅丸方形	−×6.4	(N38°W)	ほぼ完掘	残骸	北西壁	軟かい、はり床	8	古墳後	建て替え
60	198	隅丸方形	4.9×6.0	N32.5°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁西隅	堅い、はり床	−	古墳後	床面の大部分バックホーで破壊
61	198	(隅丸方形)	−×4.3	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
62	199 200	隅丸方形	−×6.0	N41°W	半分	(石芯粘土カマド)	北西壁中央	堅い、一部軟かい	2	古墳後	

第5表　AMD　住居址一覧表

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
1	242	隅丸方形	3.7×4.2	N135°E	完掘	石芯粘土カマド	南東壁東寄り	堅い	4	古墳後	
2	243 244	隅丸方形	−×4.7	N42°W	ほぼ完掘	(粘土か地山掘残し)	北西壁中央やや東寄り	堅い、壁下軟	2	古墳後	
3	245	隅丸方形	3.8×4.0	N43.5°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い、壁下軟	4	古墳後	
4	241	(隅丸方形)	−×4.9	N43°W	半分	地床炉	北西壁寄り	堅い	−	Ⅳ	
5	263 264	(隅丸方形)	4.1×3.6	不明	完掘	不明	不明	不明	−	奈良	竪穴状遺構、円面硯・棒状礫
6	246	(隅丸方形)	−×5.2	不明	半分	不明	不明	堅い、壁下軟	2	古墳後	
7	247	(隅丸方形)	−×4.5	不明	半分	不明	不明	軟かい、凹凸あり	1	古墳後	
8	248 249	隅丸方形	8.5×8.5	N37°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い	4	古墳後	
9	250	隅丸方形	3.6×4.2	N128°E	完掘	(石芯粘土カマド)	南東壁中央東寄り	軟かい	4	古墳後	
10	251	隅丸方形	(4.2)×4.7	N40.5°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北東壁中央	堅い、壁下軟	3	古墳後	
11	264	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い、はり床	−	古墳後	
12	252	隅丸方形	4.8×4.8	N39°W	完掘	粘土カマド	北西壁中央	堅い、はり床	2	古墳後	
13	253	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	古墳後	床面と遺物のみ
14	240	隅丸方形	−×3.8	不明	半分	不明	不明	やや堅い	1	古墳後	
15	240	不明	不明	不明	半分	不明	不明	凹凸あり、やや軟	−	古墳後	
16	240	(隅丸方形)	−×4.2	不明	半分	不明	不明	凹凸あり、やや軟	1	古墳後	
17	240	不明	不明	不明	半分	土器埋設炉	不明	堅い、壁下軟	−	Ⅱ	
18	263	隅丸方形	5.0×4.8	(N46°E)	ほぼ完掘	(地床炉)	東壁寄り	堅い	−	Ⅱ	
19	267	不明	−×(4.2)	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
20	付図2	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	21住覆土中に住居址あり・編物石
21	254	隅丸方形	−×8.8	(N31°W)	半分	不明	不明	堅い	3	古墳後	
22	255	(隅丸方形)	−×6.0	不明	一部	不明	不明	堅い	2	古墳後	
23	256	(隅丸方形)	−×5.9	N48.5°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い、はり床	6	古墳後	建て替え
24	265 266	隅丸方形	5.2×5.3	N127°E	完掘	石芯粘土カマド	南東壁東寄り	軟かい、西側はり床	(1)	平安	
25	257	隅丸方形	3.6×3.6	N49°W	ほぼ完掘	(粘土カマド)	北西壁やや西寄り	堅い	4	古墳後	

住居址No	遺構図No	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
26	258 259	隅丸方形	5.0×5.6	N21.5°W	完掘	(石芯カマド)	北壁中央	堅い	4	古墳後	
27	260	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	
28	261	隅丸方形	2.7×−	N42°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁北寄り	堅い	−	古墳後	
29	272	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
30	260	隅丸方形	3.4×3.4	不明	半分	不明	不明	軟かい、凹凸あり	−	古墳後	
31	268	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
32	262	(隅丸方形)	6.5×−	不明	半分	不明	不明	堅い	−	古墳後	

第6表　ARY　住居址一覧表

住居址No	遺構図No	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
2	283	不明	7.2×−	N36°E	一部	不明	不明	堅い、一部はり床	(1)	古墳後	
3	284	隅丸方形	4.5×5.0	N48°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	4	古墳後	
4	285	隅丸方形	4.0×4.0	N43°W	完掘	地山掘残し	北西壁中央	堅い	4	古墳後	
5	付図2	不明	不明	不明	一部	不明	不明	不明	−	II	遺物のみ
6	287	隅丸方形	(4.4)×4.4	N41.5°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い	3	古墳後	
7	288 289	隅丸方形	6.7×7.3	N44.5°W	ほぼ完掘	粘土カマド	北西壁ほぼ中央	堅い、壁際軟	4	古墳後	
8	332	(隅丸方形)	5.6×−	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	
9	276	(隅丸方形)	5.4×−	N130°W	半分	土器埋設炉	住居址中央やや南西壁寄り	堅い、壁下軟	3	II	床面に敷物痕あり、火事
10	付図2	不明	不明	不明	一部	不明	不明		(1)	I	
11	277	(隅丸長方形)	(6.0)×4.7	N117°W	ほぼ完掘	地床炉	中心よりやや西壁寄り	軟かい	3	I	地床炉2箇か？
12	290 291	隅丸長方形	3.1×4.2	N54.5°E	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北東壁東寄り	軟かい、凹凸あり	−	古墳後	
13	292	(隅丸方形)	(8.3)×−	(N27°E)	半分	不明	不明	きわめて軟かい	2	古墳後	
14	293	(隅丸方形)	(4.8×4.5)	(N54°W)	ほぼ完掘	不明	不明	堅い、はり床	−	古墳後	
15	294	(隅丸方形)	6.5×−	不明	半分	不明	不明	軟かい	2	I	
16	294	不明	−×5.6	N60°W	一部	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	−	古墳後	
17	295	隅丸方形	4.0×(4.2)	N58°W	完掘	石芯粘土カマド残骸	北西壁ほぼ中央	軟かい	4	古墳後	
18	296	(隅丸方形)	−×5.7	N43°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁西隅寄り	軟かい	−	古墳後	
19	297	隅丸方形	(4.5×4.8)	N49°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁	堅い	4	古墳後	
20	298 299	隅丸方形	−×8.3	N58°W	一部	石芯粘土カマド	西壁中央南寄り	堅い	−	古墳後	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド 形態	炉ないしカマド 位置	床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
21	300	(隅丸方形)	−×6.2	N79°E	半分	粘土カマド	北東壁東寄り	堅い	1	古墳後	
22	278	不明	不明	不明	半分	地床炉	(中央)	堅い、はり床	2	I	床面・炉址のみ
23	279	(隅丸方形)	7.7×−	N59°E	半分	地床炉	中央やや北東壁寄り	東側堅、南側軟かい	−	I	
24	280	隅丸不整方形	4.3×4.0	N45°E	完掘	地床炉	中央やや北東壁寄り	やや軟かい	4	I	
25	301	隅丸不整方形	(3.8×4.6)	N21°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド残骸	北壁	軟かい	−	古墳後	
26	302 303	隅丸方形	9.5×9.0	N41.5°W	完掘	粘土カマド	北西壁中央	堅い、はり床	8	古墳後	拡張か？
27	335	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	古墳後
28	304	不明	不明	不明	一部	不明	不明	不明	−	古墳後	
29	305	不明	不明	不明	一部	地床炉	不明	軟かい	−	(I)	
30	305 306	(隅丸不整方形)	5.0×−	N32°E	半分	石芯粘土カマド	北東壁	軟かい	2	古墳後	
31	307	隅丸方形	(5.8)×5.8	N44°W	ほぼ完掘	(粘土カマド)	北西壁中央西寄り	堅い	4	古墳後	
32	308	(隅丸方形)	−×7.9	N51°W	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁中央やや西寄り	軟かい、凹凸あり	(2)	古墳後	
33	352	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	
34	308	(隅丸方形)	−×5.7	(N45°W)	ほぼ完掘	焼土のみ	北西壁	軟かい、はり床	(1)	古墳後	
35	309 310	(隅丸方形)	−×7.4	N37°W	一部	石芯粘土カマド	北西壁中央やや西寄り	堅い、はり床	1	古墳後	火事
36	311 312	隅丸方形	5.2×5.2	N54°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央西隅寄り	軟かい	3	古墳後	
37	313 314	(隅丸方形)	−×4.3	N41.5°W	完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	−	古墳後	
38	333	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	不明	火事
39	315 316	(隅丸方形)	−×4.0	(N57°W)	半分	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	−	古墳後	
40	313 317	隅丸方形	6.0×6.0	N45.5°W	半分	地山掘残しカマド	北西壁中央	堅い	1	古墳後	
41	311	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	古墳後	遺物出土範囲のみ
42	318	(隅丸方形)	−×7.4	(N46°W)	半分	不明	不明	北半分堅い	3	古墳後	
43	319 320	隅丸方形	8.0×8.1	N61.5°W	完掘	石芯粘土カマド	西壁中央やや南寄り	極めて堅い、はり床	4	古墳後	
44	321 330	隅丸長方形	3.7×(4.5)	N143°E	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	南西壁南隅	軟かい	−	奈良	
45	321 322	隅丸方形	4.6×4.4	N37°W	ほぼ完掘	石芯粘土カマド	北西壁中央	堅い、壁下軟かい	4	古墳後	
46	331	(隅丸方形)	−×5.4	N136°E	半分	石芯粘土カマド	南東壁南隅	軟かい	−	奈良	
47	323	(隅丸方形)	5.4×−	N44°W	一部	焼土のみ	北壁	堅い、壁下軟かい	1	古墳後	
48	323	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい、凹凸あり	−	不明	
49	334	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い	−	不明	床面・壁の一部
50	324 325 326	隅丸方形	9.3×9.3	N45°W	半分	石芯粘土カマド	北西壁ほぼ中央	堅い、はり床	2	古墳後	土師器高坏多い
51	287	(隅丸方形)	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	II	
52	327 328	(隅丸方形)	−×4.9	N54.5°W	一部	石芯粘土カマド	北西壁中央	軟かい	2	古墳後	

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
53	287	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	II以前？	
54	337	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	II	
55	281	隅丸長方形	5.6×4.2	N114°E	完掘	焼土のみ	(中心より南東壁寄り)	堅い、はり床	4	II	
56	282	(隅丸方形)	不明	(N43°W)	一部	地床炉	北西主柱穴中間	軟かい	1	IV	
57	329	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい、はり床	−	不明	床面と壁の一部確認
58	329	不明	(5.0)×−	(N52°W)	一部	不明	不明	軟かい、北東はり床	−	古墳後	
59	324	不明	不明	不明	一部	不明	不明	堅い、中央溝状あり	−	古墳後	

第7表　ARB　住居址一覧表

住居址No.	遺構図No.	平面図	規模(m) 主軸×主軸直行	主軸方向	調査範囲	炉ないしカマド		床面の状態	主柱穴確認	時期	備考
						形態	位置				
1	374	隅丸方形	(3.5×3.5)	不明	ほぼ完掘	不明	不明	部分的に堅い、はり床	−	平安	
2	363	不整円形	(5.0)×5.7	N35°W	完掘	(石組炉)	中央やや北西壁寄り	堅い	6	縄文中	
3	364	円形	6.3×6.3	不明	半分	不明	不明	堅い	(4)	縄文中	
4	365	不明	不明	不明	一部	不明	不明	軟かい	−	縄文中	
5	366	(不整円形)	6.4×6.4	不明	半分	(石組炉)	不明	堅い	(4)	縄文中	
6	367	不整円形	5.0×5.0	N35°W	完掘	石組炉	中央やや北西寄り	やや堅い	6	縄文中	
7	365	隅丸長方形	−×3.6	(N50°W)	ほぼ完掘	不明	不明	堅い、はり床	−	平安	床面に石、カマドは設けず？
8	368	隅丸方形	6.1×6.2	N3°E	ほぼ完掘	(石組炉)	北主柱間やや内側	堅い	7	縄文中	建て替え、旧の規模(4.6×5.5)
9	369	不整円形	(5.6×5.6)	N66°E	ほぼ完掘	地床炉	中央やや北東寄り	不明	−	縄文中	
10	付図2	不明	不明	不明	一部	不明	不明	不明	−	縄文中	
11	370	(不整円形)	不明	不明	一部	(石組炉)	不明	部分的に堅い	2	縄文中	
12	371 372	不整円形	4.0×4.0	N62.5°E	ほぼ完掘	石組炉	中央やや北寄り	堅い	3	縄文中	
13	373	不明	不明	不明	(半分)	不明	不明	軟かい、はり床	−	縄文中	遺物に時期差あり

第8表　TAN・KUR　建物址一覧表

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法（m） 桁行	柱間寸法（m） 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
1	92	2×2	2.11	1.80	4.22	3.61	N20°E	90	40	礎石4個、総柱
2	93	3×2	1.20	1.36	3.60	2.72	N44°E	65	34	総柱
3	94	4×2	1.80	2.50	7.28	5.02	N89.5°E	68	52	
4	95	5×(3)	2.25～1.54	1.80～1.54	8.55	−	N37.5°E	52	32	根石あり
5	10	(2)×−	(1.95)	−	(3.90)	−	(N40°W)	56	38	掘り方3本のみ
6	103	(2×1)	(1.94)	(1.72)	(3.80)	−	(N75°W)	22	16	
7−1	96	3×3	1.73	1.28	5.20	3.86	N10°E	152	69	奈良時代
7−2	96	3×3	1.52	1.30	4.58	3.90	N10°E	126	75	奈良時代
7−3	96	2×3	1.94	1.24	3.88	3.74	N12.5°E	100	74	奈良時代
8	92	3×3	1.50	1.20	4.48	3.62	N36.8°E	78	41	
9	97	4×(3)	1.27	1.32	5.10	(3.80)	N40°E	108	54	雨落の溝あり
10	98	2×2	2.20	2.20	4.42	4.42	(N51°W)	84	56	総柱
11	99	(2)×−	(2.50)	−	(5)	−	(N90°E)	95	82	掘り3本のみ
12	100	4×(2)	(2.24)	(2.73)	(8.62)	−	(N82°W)	108	62	
13	101	(1)×3	1.68	1.80	4.94	−	N22.5°E	104	46	総社

第9表　GOA　建物一覧表

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法（m） 桁行	柱間寸法（m） 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
1	146	4×3	1.54	1.70	6.20	5.10	N40°W	101	56	柱痕8本あり
2	139	(1)×3	1.22	1.20	−	3.50	N38°W	180	114	2本の柱を1つの掘り方内に
3	139	(2×1)	2.04	(1.80)	4.08	−	N40°W	120	70	

第10表　GOB建物址一覧表

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法（m） 桁行	柱間寸法（m） 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
1	209	3×2	1.65	1.90	4.94	3.80	N47.5°W	160	105	掘り方円形
2	210	3×3	1.40	1.36	4.20	3.92	N40°E	128	84	
3	211	2×2	1.50	1.50	3.00	3.00	N40°E	112	78	
4	212	2×2	1.78	1.66	3.57	3.32	N43.5°W	90	70	
5	213	3×−	1.70	−	5.12	−	(N47.5°E)	125	77	
6	214	(3×2)	1.48	1.31	(4.46)	(2.63)	N38.5°W	98	52	内側にも柱穴あり
7	215	3×(2)	1.17・1.28	1.24	3.60	(2.56)	N40°W	112	70	
8	216	2×2	1.50	1.32	3.00	2.64	N53°E	90	62	
9	214	(2×1)	1.56・1.20	0.84	2.77	−	N34°W	60	24	建7に関係する柱穴と思われる
10	217	(2×1)	1.62	1.83	3.25	(1.83)	N60°W	70	53	
11	191	6×(2)	1.26～0.68	1.41	5.80	2.82	N41°W	69	28	
12	218	−	−	−	4.12	2.15	N27°E	−	−	礎石（土台石）を持つ建物
13	219	−	−	−	5.00	4.20	N31°E	−	−	〃
14	220	−	−	−	4.00	3.40	N44°E	−	−	〃　中世
15	221	4×(1)	2.37	2.50	9.50	2.50	N30°E	108	74	
16	223	4×2	2.10	2.70	8.42	5.40	N63°W	170	96	奈良時代～平安時代
17	222	5×−	2.54～1.31	−	9.10	−	N74°W	112	62	柵址？奈良時代～平安時代

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法 (m) 桁行	柱間寸法 (m) 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
18	222	2×−	1.95	−	3.90	−	N62°W	120	93	
19	160	(3×1)	1.80	1.40	4.00	−	N133.50°E	120	64	
20	224	2×1	1.19	1.50	3.38	1.50	N40°W	72	46	
21	224	3×3	1.75・1.44	1.50・1.14	4.78	4.30	N52°E	82	47	
22	225	3×3	1.60	1.30	5.00	4.10	N34°E	104	63	
23	176	(3)×2	1.88～1.55	2.60	(5.20)	5.20	N40°E	74	48	
24	172	2×−	2.14	−	4.28	−	(N63.5°W)	138	86	

第11表　AMD建物址一覧表

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法 (m) 桁行	柱間寸法 (m) 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
1	268	2×2	1.79	1.60	3.58	3.22	N50°W	95	55	古墳時代後期以降
2	263	3×3	1.66	1.36	5.06	4.10	N48°E	79	60	
3	268	3×(1)	1.16	1.48	3.50	−	N46.5°W	100	62	
4	252	(1×1)	2.25	1.88	−	−	(N41°W)	75	62	
5	269	2×2	1.76	1.68	3.52	3.38	N45°W	90	58	

第12表　ARY　建物址一覧表

建物址No.	遺構図No.	柱間 桁×梁	柱間寸法 (m) 桁行	柱間寸法 (m) 梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	柱穴掘り直径(cm) 最大	柱穴掘り直径(cm) 最小	備考
1	335	3×2	1.52	2.18	4.56	4.36	N47.5°E	76	50	総柱であろう
2	333	(1×1)	1.18	0.76	−	−	(N46°E)	50	30	総柱？
3	336	(1×1)	−	−	3.09	2.90	(N33°W)	50	42	
4	336	(1×1)	−	−	2.29	2.08	(N67°E)	50	35	
5	338	4×3	2.42	2.01	9.71	6.04	N37.5°E	162	108	
6	337	4×3	2.30	1.82	9.22	5.46	N65°W	158	108	
7	338	(3)×2	2.60	2.51	7.80	5.02	N40°W	138	85	
8	339	3×2	2.74	2.16	8.22	4.33	N65°W	135	96	
9	337	2×2	1.34	1.28	2.69	2.56	N30°E	73	48	
10	340	5×3	2.14	1.71	10.70	5.15	N45°E	110	76	
11	336	(1×1)	−	−	(2.63)	(2.34)	(N54°W)	53	40	
12	323	−	(1.54)	(1.31)	−	−	(N33°W)	60	25	
13	341	3×2	1.10	1.40	3.30	2.80	N29°W	64	46	東に同規模建物址あり
14	342	3×2	1.09	1.41	3.28	2.82	N32°W	62	37	弥生時代～古墳時代
15	343	(4)×3	1.70	2.25	(3.40)	6.76	N52°W	107	80	
16	344	(3)×−	1.80	−	(5.50)	−	(N46°E)	144	116	
17	345	(1×1)	−	−	(4.06)	(3.48)	(N42°E)	96	66	
18	346	4×3	2.30	1.93	9.22	5.90	N43°E	154	68	
19	355	(4)×−	(2.65・1.48)	−	(5.5)	−	(N36.5°E)	104	76	

第13表 TAN・KUR　土坑一覧表

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	117	TANBL52	不整円形	A	1.3×1.1	10	古墳時代後期
2	118	TANBS53	不整三角形	A	1.5×1.2	4	平安時代終末
3	118	TANBS50	円形	E	0.7	51	
4	118	TANBT51	不整方形	B	0.65×0.6	50	
5	113	TANBG50	長楕円形	C	1.65×0.9	40	不明
6	119	KURAF47	不整方形	C	2.4×2.0	60	平安時代？
7	119	KURAF48	隅丸長方形	C	(3.4×2.2)	80	X期
8	119	KURAF47	不整三角形	C	(1.8×1.3)	70	古墳時代後期
9	86	KURAM46	不整楕円形	C	1.8×1.4	90	中世
10	86	KURAK47	不整台形	B	1.9×1.2	35	平安時代
11	14	TANBY54	不整長方形	C	2.1×(1.2)	50	古墳時代後期
12	117	KURAL50	不整長方形	A	2.1×1.5	10	中世
13	86	KURAL49	不整楕円形	A	2.6×1.5	30	
14	40	KURA049	不整長方形	A	2.1×1.3	15	中世
15	120	KURAB47	不整長方形	A	2.7×2.0	25	
16	120	KURAA47	不整長方形	B	1.7×1.3	40	
17	120	KURAK47	不整楕円形	B	(2.5)×2	40	古墳時代
18	120	KURAK48	不整方形	B	(1.5)×1.4	50	古墳時代～平安時代
19	114	KURCE50	不整方形	B	1.8×(1.5)	50	VI期
20	121	KURCH52	不整長方形	A	(1.8×0.85	20	平安時代
21	27	KURCL46	不整方形	A	1.6×1.6	20	平安時代後期
22	27	KURCL47	不整方形	A	2.0×1.8	20	
23	27	KURCM46	不整方形	B	1.5×1.2	35	古墳時代後期

第14表　GOA　土坑一覧表

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	147	AQ55	不整円形	B	1.5	60	鉄・釘・焼土・炭あり
2	147	AQ51	不整円形	E	1.2×(1)	60	中世、明染付磁器皿他
3	148	AV52	不整円形	B	1.3	70	
4	149	AX49	不整円形	B	1.7	70	炭化米・鉄片
5	149	AV49	不整長方形	B	1.9×1.4	70	中世、土壙墓、鉄器・永楽通宝・焼骨
6	149	AV48	不整円形	E	0.9	60	
7	136	AS54	不整楕円形	B	1.5×1.1	70	中世
8	149	AV47	不整円形	B	0.6	30	
9	149	AV47	不整楕円形	B	1.3×1.1	30	
10	149	AW47	不整方形	B	0.7×0.6	20	
11	付図1	AJ47	不整長方形	A	2.5×1.08	6	平安時代？植物遺体・炭化米・土師器片
12	150	BA54	不整長方形	A	2.5×1.8	7	
13	150	BE55	不整長方形	A	2.0×1.0	20	近世、陶磁器片
14	150	BF55	不整長方形	A	1.7×1.2	8	
15	141	BD57	不整楕円形	A	2.2×1.1	20	
16	150	BE54	長方形	A	1.8×1.5	10	
17	150	BC56	不整円形	D	0.8×0.7	25	
18	150	BE57	不整円形	B	1.5×1.4	50	

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査) 長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
19	150	BF54	長方形	E	0.9×0.6	10	
20	150	BA54	不整楕円形	E	1.4×1.0	50	

第15表　GOB　土坑一覧表

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査) 長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	237	AF47	不整楕円形	B	2.5×1.1	50	
2	159	BH52	不整長方形	B	1.6×1.2	40・60	
3	237	BJ51	不整方形	B	1.0×0.9	40	
4	237	AW53	方形	A	1.5×(1)	20	焼けた石・炭化種子
5	214	BC51	円形	E	1.4	150	
6	236	BN50	長楕円形	B	1.2×0.8	40	
7	160	CP42	不整方形	B	1.3×1.2	50	中世
8	160	CQ43	長方形	B	1.9×1.5	50	中世
9	160	CR43	長方形	B	1.4×1.2	35	中世
10	160	CT43	不整楕円形	B	2.0×1.5	30	中世
11	160	CQ45	長方形	B	(3.0)×1.5	30	
12	238	CY43	不整方形	B	1.5×1.3	35	集石墓壙
13	161	CC48	長方形(竪穴)	B	(4.0)×1.6	40～30	
14	224	CC43	不整方形	A	1.7×1.5	20	
15	239	CE45・46、CF45	不整長方形	C	1.5×0.85	50	
16	239	CE46・CF46	不整長方形	B	2.0×1.0	90	
17	222	CM44	不整方形	E	2.0×(1.6)	40	
18	239	CE45	円形	D	1.4×1.4	74～48	
19	238	CV44	円形	B	1.7	80	
20	238	CW43	不整方形	A	1.5×1.5	25	
21	234	BC53	方形	B	1.5×(1)	50	石組の土坑
22	238	CW44	不整方形	C	0.5×0.36		骨出土、墓址
23	198	CD42	不明	B	(1.7×1.4)	40	
24	229	BA49	不整楕円形	C	2.5×1.6	30	

第16表　ARY　土坑一覧表

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査) 長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	338	AJ57	不整方形	C	0.8×0.8		
2	338	AI55	不整長方形	B	1.1×0.8	28	
3	338	AI55	不整楕円形	B	(0.9)×1.0	25	
4	338	AF53	不整円形	B	0.8×0.75	31	
5	337	AK59	不整長方形	B	1.1×0.8		
6	付図2	AE57	不整長方形	C	1.3×0.3	61	
7	337	AK58	不整楕円形	B	0.9×0.6	40	
8	337	AJ61	不整楕円形	D	1.3×0.9	57	
9	337	AK60	不整長方形	B	1.0×0.7	34	

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
10	301	CA46	切合い不整	E	2.5×1.2	34	
11	346	DM49	不整長楕円形	B	0.85×0.4	43	
12	340	DK48	不整楕円形	C	(0.7)×0.7	63	
13	343	DK52	用地外にかかり不明	B	1.1×(0.4)	30	
14	343	DK52	円形	B	1.1	40	
15	343	DK52	不整楕円形	A	(0.5)×0.7	12	

第17表　ARB　土坑一覧表

土坑No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	379	BH49	長楕円形	A	1.6×0.75	30	
2	379	BH48	不整楕円形	A	2.0×1.3	20	
3	379	BJ51	方形	B	1.7×1.65	40	
4	379	BH50・51、BI50・51・21	長方形	A	2.4×1.4	40	覆土中に礫入る
5	379	BO50	不整長楕円形	A	2.87×1.0	30	底部凹凸あり
6	365	BO50	不整長楕円形	A	2.1×1.0	27	平安時代、土壙墓
7	365	BO53	不整長方形	B	1.9×1.0		平安時代、土壙墓
8	365	BP52	不整長方形	D	1.7×1.1	40	平安時代、土壙墓
9	365	BQ52	不整方形	A	1.0×0.7	18	平安時代、土壙墓
10	365	BQ53	不整方形	B	1.2×(0.5)	50	平安時代、土壙墓
11	365	BP52	不明		わずか	不明	平安時代、溝1に切られる
12	379	DL54	不整方形	C	1.8×1.3	40	平安時代？覆土が漆黒
13	379	DI55	不整方形	B	1.2×1.1	30	平安時代？覆土が漆黒
14	380	DN53	不整方形	C	1.2×0.8	30	
15	380	DL52	不整方形	C	1.5×1.25	30	平安時代？
16	380	DM55	不整方形	B	0.5×(0.4)	20	平安時代、火葬墓
17	373	CR40	不整長方形	A	2.0×1.15	20	縄文時代
18	380 381	CW45・46 CX45・46	不整方形	D	3.6×2.9	100	縄文時代中期後半以前
19	380	CW45	不整三角形	E	1.1×1.0	80	礫が4個入る
20	380	CV45	不明	B	1.2×(0.4)	46	
21	371	CT42	不整楕円形	A	(1.8×1.3)	14	
22	371	CU42	不整楕円形	C	(1.2×1.1)	38	
23	373	CR40	不整長方形	A	1.8×0.8	22	

第18表　TAN・KUR　小竪穴一覧表

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	122	KURAG52・53	不整円形	A	1.6	18	中世
2	116	KURCA50	不整方形 不整方形	A	2.6×1.7	15	
3	123	TANAW54	不整方形	E	4.0×(3.5)	60	平安時代

第19表　GOA　小竪穴一覧表

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	136	AR58	不整楕円形	C	1.6×1.2	30	平安時代～中世、灰釉・陶器片
2	136	AS58	不整円形	C	1.4	20	平安時代～中世

第20表　GOB　小竪穴一覧表

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	222	CN42	不整長方形	A	3.5×2.0	15	
2	224	CB45	不整長方形	A	3.1×2.7	10	古墳時代後期後半
3	225	CL42	不整長方形	A	3.8×1.7	30～10	

第21表　AMD　小竪穴一覧表

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	263	BO41・BP41	不整楕円形	A	2.9×2.2	38	
2	271	BD30	隅丸方形	A	2.0×1.7	50～40	古墳時代後期～奈良時代

第22表　ARY　小竪穴一覧表

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	274	CI50	不整長方形	A	(1.4)×1.0	20	縄文時代早期末
2	274	CI50	不整長方形	A	1.4×0.9	30	縄文時代早期末
3	274	CL51	不整長方形	B	1.0×0.8	30	縄文時代早期末
4	274	CN53	不整楕円形	C	0.95×0.65	77	縄文時代早期末
5	274	DD47	丸味を帯びた台形	C	1.9×1.6	78	縄文時代早期末
6	274	CR54	不整楕円形	B	(1.6)×1.1	20	縄文時代早期末
7	274	CC51	不整長方形	C	(1.4×0.8)	110	縄文時代早期末

第23表　TAN・KUR　集石一覧表

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模（調査）長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
2	134	KURAW52	不整円形	不明	0.5×0.4	17	不明
3	134	KURAW52	不整楕円形	不明	0.6×0.4	22	不明
4	134	KURAX52	不整台形	不明	0.5×0.4	18	不明
5	134	石列にあり	長方形	不明	1.3×0.3	20	不明
6	129	KURBC52	不整方形	C	1.5×1.4	25	
7	130	KURBE55	不整方形	不明	1.0×0.4	15	
8	130	KURBG52	不整長方形	B	0.6×0.3	15	
9	130	KURBH52	不整長方形	不明	2.0×1.2	30	
10	134	KURAX47	不整楕円形	不明	0.5×0.3	10	不明

小竪穴No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
11	130	TANAW47	不整長楕円形	不明	2.0×1.0	30	
12	130	KURAF50	(不整台形)	B	1.0×0.4	15	
13	130	KURAG50	(不整方形)	A	1.0×0.8	20	
14	130	KURAH49	不整三角形	不明	0.6×0.5	20	
15	130	KURAI52	不整台形	不明	1.0×0.6	15	
16	131	KURAP49	不整方形	B	1.1×1.0	25	
17	131	KURAN50	不整円形	A	0.9	25	
18	131	KURAM49	不整長方形	不明	1.9×0.4	20	
19	132	KURBU47	不整円形	不明	0.5	8	栗石の可能性がある
20	132	KURBS48	(不整楕円形)	E	1.0×0.6	20	
21	132	KURCF47	不整楕円形	不明	0.8×0.6	12	
22	132	KURCF48	不整長方形	不明	(1.6)×0.6	30	
23	132	KURCH46	不整長方形	不明	1.8×1.4	30	
24	133	LURCP46	不整楕円形	B	(1.6)×1.3	30	
25	27	KURCL47	不整方形	B	1.6×1.4	30	

第24表　GOA　集石一覧表

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	151	AP54	(不整円形)	A	1.4	10	
2	151	AQ51	(不整円形)	D	1.8	70	

第25表　AMD　集石一覧表

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	272	BP44	楕円形	C	1.1×0.9	30	

第26表　ARY　集石一覧表

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	360	CA52	環状	A	2.0	70	Ⅳ期、高坏
2	360	CB52	不整長方形	A	3.0×2.2	50	
3	361	CB45	楕円形	A	1.6×0.7	35	古墳時代後期、土壙墓？

第27表　ARB　集石一覧表

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査)長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
1	384	BK50	不定	B	2.0×1.0	20	
2	384	BI48	不整楕円形	C	(0.6)×0.5	20	
3	384	BK51	不整方形	A	1.65×1.2	20	
4	384	BF50	不定	不明	5.0×3.0	80	
5	384	BD51	不整方形	B	1.1×0.9	40	

集石No.	遺構図No.	位置(グリット)	平面形	断面形	規模(調査) 長径×短径(m)	深さ(cm)	備考
6	384	BD51	不整方形	B	1.1×1.0	40	
7	385	BF52	不整方形	B	0.6×(0.4)	22	
8	385	BF52	不整長方形	C	1.0×0.55	45	
9	385	BF53	不整長方形	C	(0.9)×0.5	30	
10	385	BE52	不整長方形	不明	2.6×0.8	30	
11	385	BD52	不整方形	C	1.2×0.8	40	
12	385	BS52	不整長方形	E	1.6×1.0	40	
13	385	BV52	不整長方形	A	1.9×1.1	30	
14	386	BY48	不整円形	不明	0.3	10	
15	386	BY49	不整楕円形	不明	0.5×0.3	15	
16	386	CQ39	不整円形	C	3.2×1.6	30	
17	386	CR41	不整長方形	B	2.0×1.0	100	
18	386	CS41	不整長方形	B	2.2×1.3	60	
19	377	DH53	不整楕円形	B	6.2×5.4	70	
20	379	DL54	不整円形	不明	0.9×0.8	10	
21	386	DH48	不整長方形	B	1.6×0.9	60	
22	386	DI50	不整楕円形	A	(1.2)×1.1	礫上面のみ	

遺構編

恒川遺跡群

——一般国道153号座光寺バイパス
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和61年3月25日　印刷
昭和61年3月31日　発行

編　集　長野県飯田市大久保町2534番地
発　行　飯田市教育委員会
印　刷　長野県長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社

付図1　TAN KUR、GOA、GOB　遺構全体図

TAN・KUR

GOA

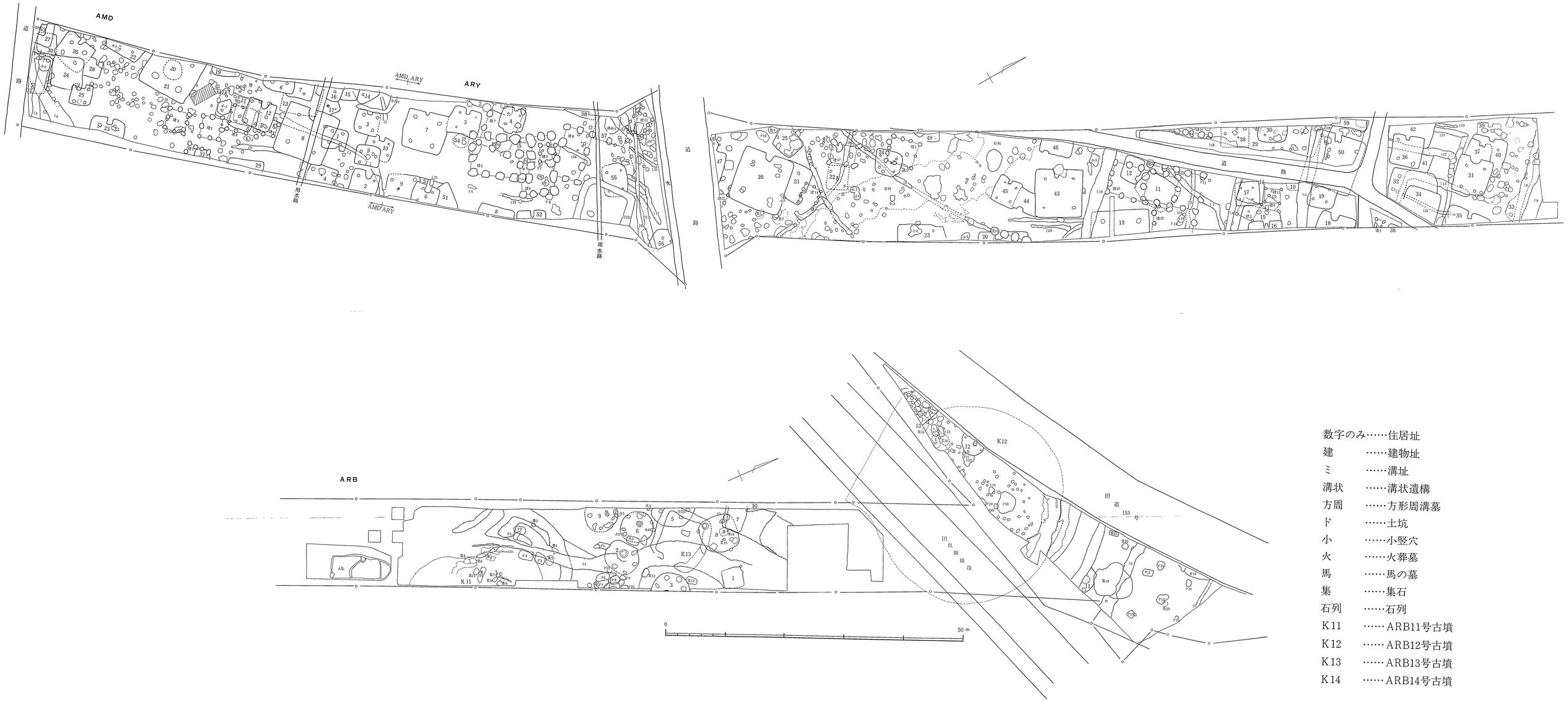
GOB

GOA GOB

0　50m

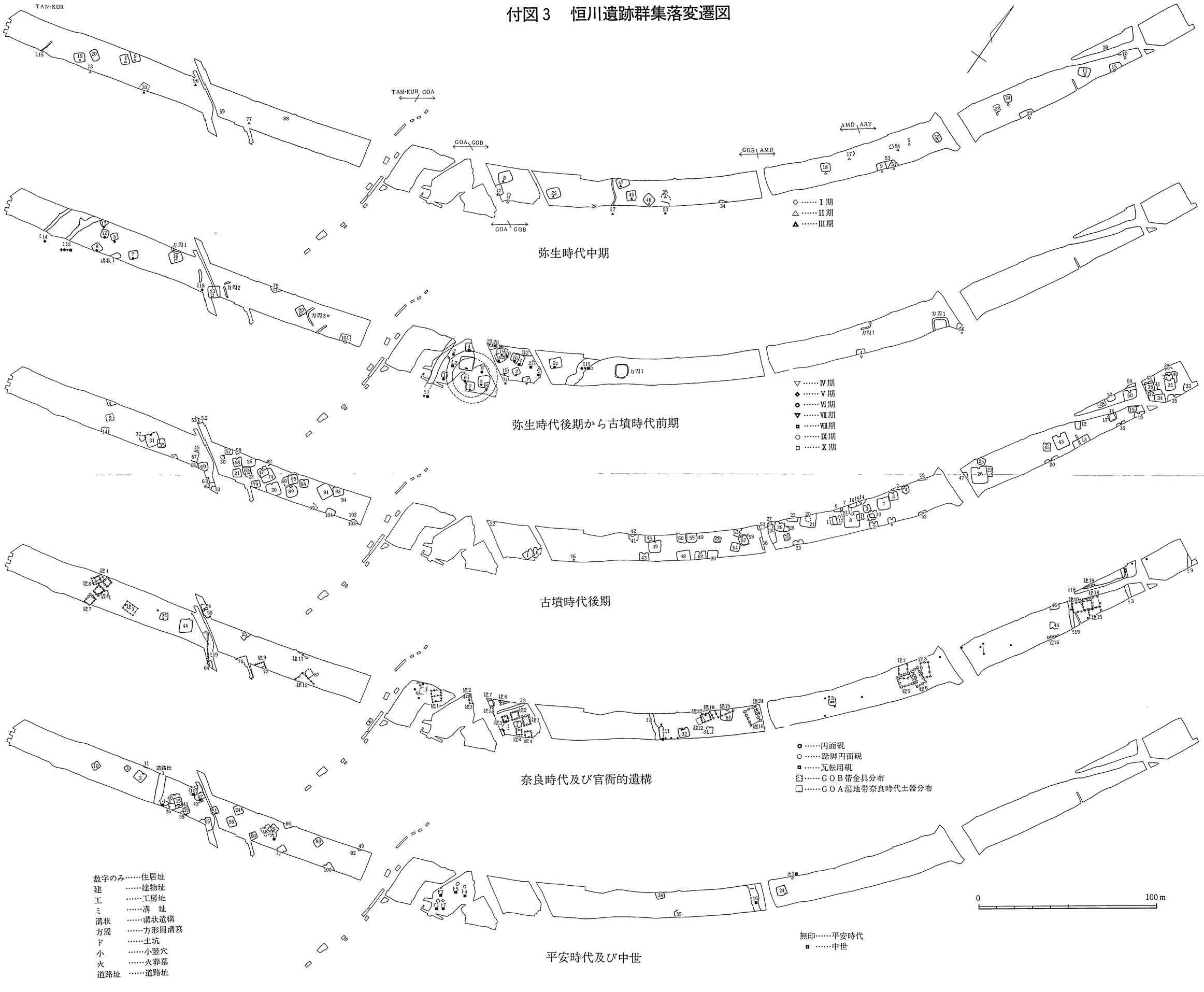
数字のみ……住居址　　火　……火葬墓
建　……建物址　　祭　……祭祀址
工　……工房址　　道路址……道路址
ミ　……溝　址　　集　……集　石
溝状　……溝状遺構　　石列　……石　列
暗渠　……暗　渠　　杭列　……杭　列
囲　……囲溝址　　柵　……柵　列
方周　……方形周溝墓　　近集　……近世集石
ド　……土　坑　　近ド　……近世土坑
小　……小竪穴　　G　……グリット
方形竪穴……方形竪穴　　T　……トレンチ

付図２　AMD、ARY、ARB遺構全体図

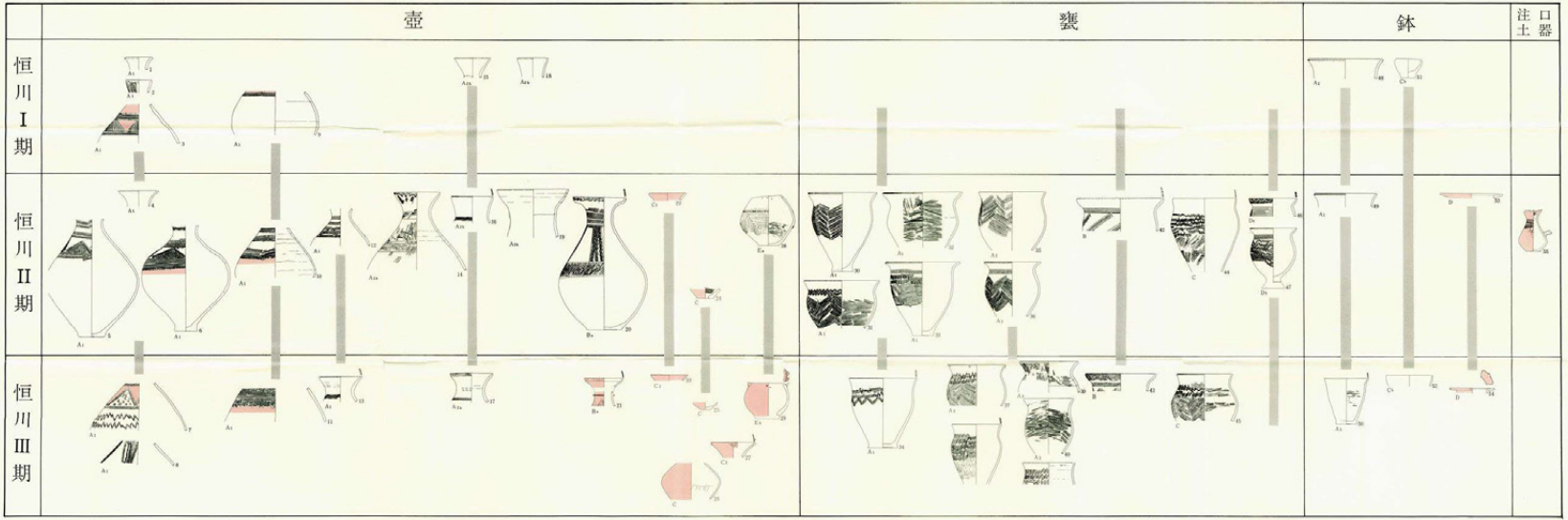


数字のみ……住居址
建　……建物址
ミ　……溝址
溝状　……溝状遺構
方周　……方形周溝墓
ド　……土坑
小　……小竪穴
火　……火葬墓
馬　……馬の墓
集　……集石
石列　……石列
K11　……ARB11号古墳
K12　……ARB12号古墳
K13　……ARB13号古墳
K14　……ARB14号古墳

付図３　恒川遺跡群集落変遷図



付図4　恒川遺跡群　弥生時代中期後半(恒川Ⅰ～Ⅲ期)　土器編年図表



TAN・KUR　1住―5・6・16・24・47　9住―49　19住―10・42　33住―13　77住―46　96住―11-21, GOB　8住―17・23・25・29・43・54　9住―14　17住―41　25住―8・38・45　35住―12・19・31　45住―34・50　46住―35・44
47住―7・26・27　57―37・39・40・52, AMD　17住―36　18住―22・53, ARY　9住―30・36・32・36・55　10住―15　11住―48　15住―2・9・18　22住―1・3　23住―51　51住―4　55住―33

付図5　恒川遺跡群　弥生時代後期後半から古墳時代前期（恒川Ⅴ期～Ⅹ期）土器編年図表（Ⅰ）

	壺
恒川Ⅴ期	AI1a 1　AI1b 3　AII2 4
恒川Ⅵ期	AI1a 2　AII2 5　B1a 8　C1a 15　F1 27　F2 28
恒川Ⅶ期	AII2 6　AI2 7　B1b 10　11　B2 12　C1a 16　C2 18　D1b 21　22　E1 24　F2 29　F3b 32　F4 33　34　G1 37　H 40
恒川Ⅷ期	B1a 9　B2 13　C1b 17　C2 19　D1a 23　E1 25　F2 30　F4 35　G1 38　H 41
恒川Ⅸ期	E1 26　F2 31
恒川Ⅹ期	B2 14　C2 20　F5 36　G2 39　H 42

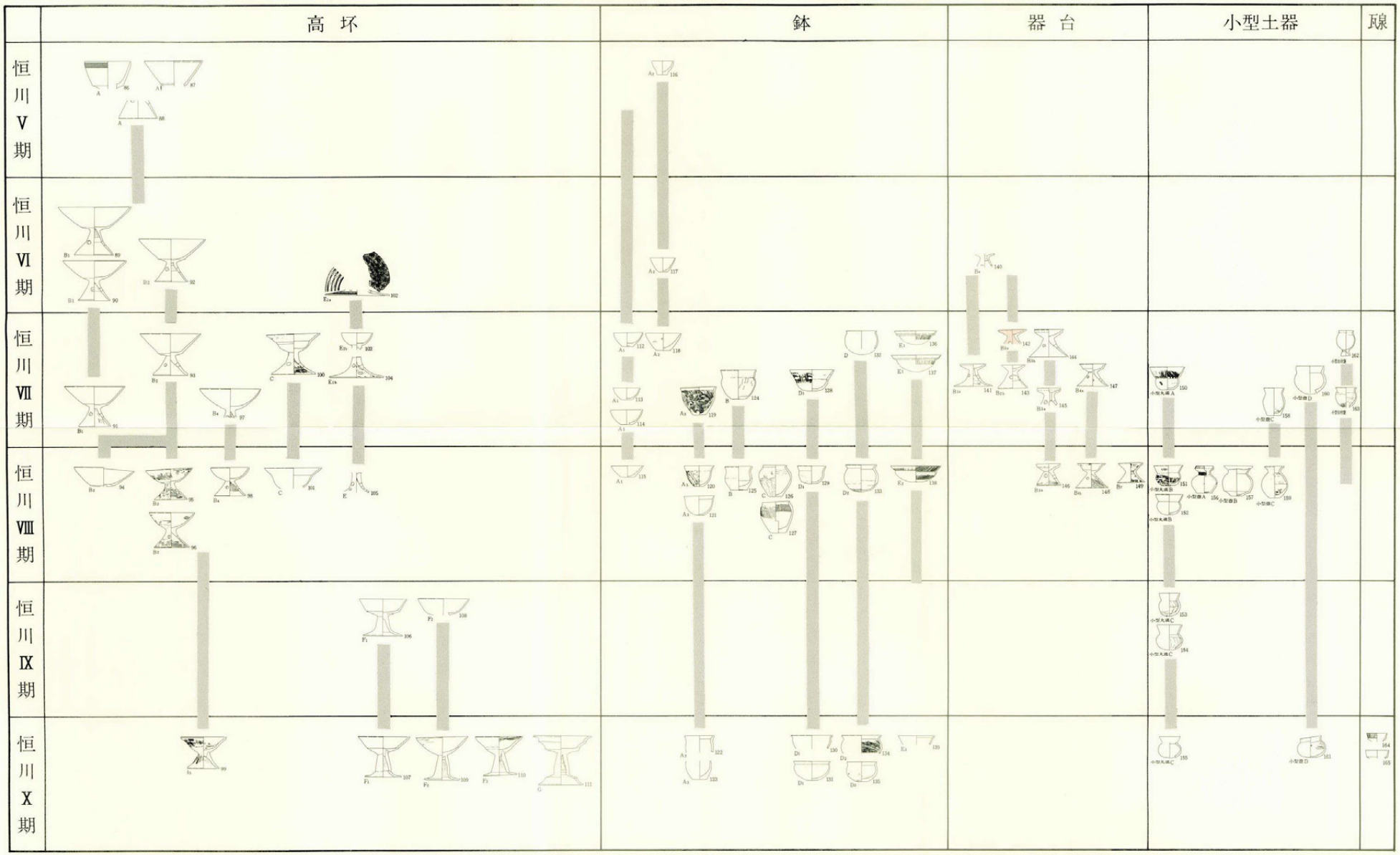
TAN・KUR　5住－4・27　7住－3　8住－1　16住－42　23住－14・36・39　90住－20、GOA　2住－2・15　4住－30・35・41　5住－21・34　ミ1(下層)－7　A区包含層－6・10・16・32
GOB　4住－38　10住－13・17・23・25・30　15住－11・33　16住－8・28　27住－9　ミ15(5層)－5　ミ15(4層)－12・18・19・22・24・29・37・40　ミ15(3層)－26・31

付図6　恒川遺跡群　弥生時代後期後半から古墳時代前期（恒川Ⅴ～Ⅹ期）土器編年図表(２)

	甕	甑	蓋
恒川Ⅴ期	AI1a 43　AI1c 49　AI1b 44		
恒川Ⅵ期	AI2b 45　AI2c 46　C1a 54　C1a 55　C1b 58　G1 77		
恒川Ⅶ期	AI2c 47　AIII2c 48　BI1a 50　BI1b 51　C2a 56　C2b 57　C1c 59　C2c 60　DI1a 62　DII2b 65　DIII1a 68　DIII3b 73　DIII3a 74　E 75　F 76　G1 78　G2 79　H 80　H 81		83
恒川Ⅷ期	BI2 52　BII2 53　C3b 61　DI1d 63　DII1a 66　DIII1a 69　82		84　85
恒川Ⅸ期	DI2b 71		
恒川Ⅹ期	DI1d 64　DII1b 67　DIII2b 70　DI2d 72		

TAN・KUR　5住—43　12住—44・49　16住—64　23住—70　75住—67　90住—72　≦12—50・68・74・81、GOA　2住—45　4住　53・61・84・85　5住—56・76　7住—78　≦1(下層)—48・55・58・73・80
A区包含層—83、GOB　2住—60　5住—82　7住—79　10住—52・66　12住—51　16住—46・77　18住—54　19住—59　≦15(4層)—47・57・62・63・65・69・75　≦15(3層)—71

付図7　恒川遺跡群　弥生時代後期後半から古墳時代前期（恒川Ⅴ～Ⅹ期）土器編年図表（3）



TAN・KUR　5住—87・116　7住—86　12住—88　16住—111　23住—99・107・109・110・122・123・130・134・135・155・161　75住—139・164・165　ミ12—144　ド8—131、GOA　3住—94・159　4住—98・120・156・157　5住—93・100・118・162　8住—91・158　ミ1（下層）—103・128　ミ2（下層）—102　・133・137　A区包含層—142、GOB　2住—97・113・114・145・163　4住—95・115・126・127・129　5住—101　7住—119　10住—96・121・125・138・148・151・152　15住—104　16住—89・90・92・140　27住—105　ミ15（5層）—117　ミ15（4層）—112・124・132・141・143・146・147・149・150・160　ミ15（3層）—106・108・153・154　AG50—136